TCIl 2662232

AP
95
J2 F85
Vol. 11
NO. 14
(1938)

UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 010 705 683 0

大正五年九月十五日第三種郵便物認可 昭和十三年十月三日印刷納本 昭和十三年十一月一日發行（毎月一回一日發行）富士 第十一卷第十四號

9-1298

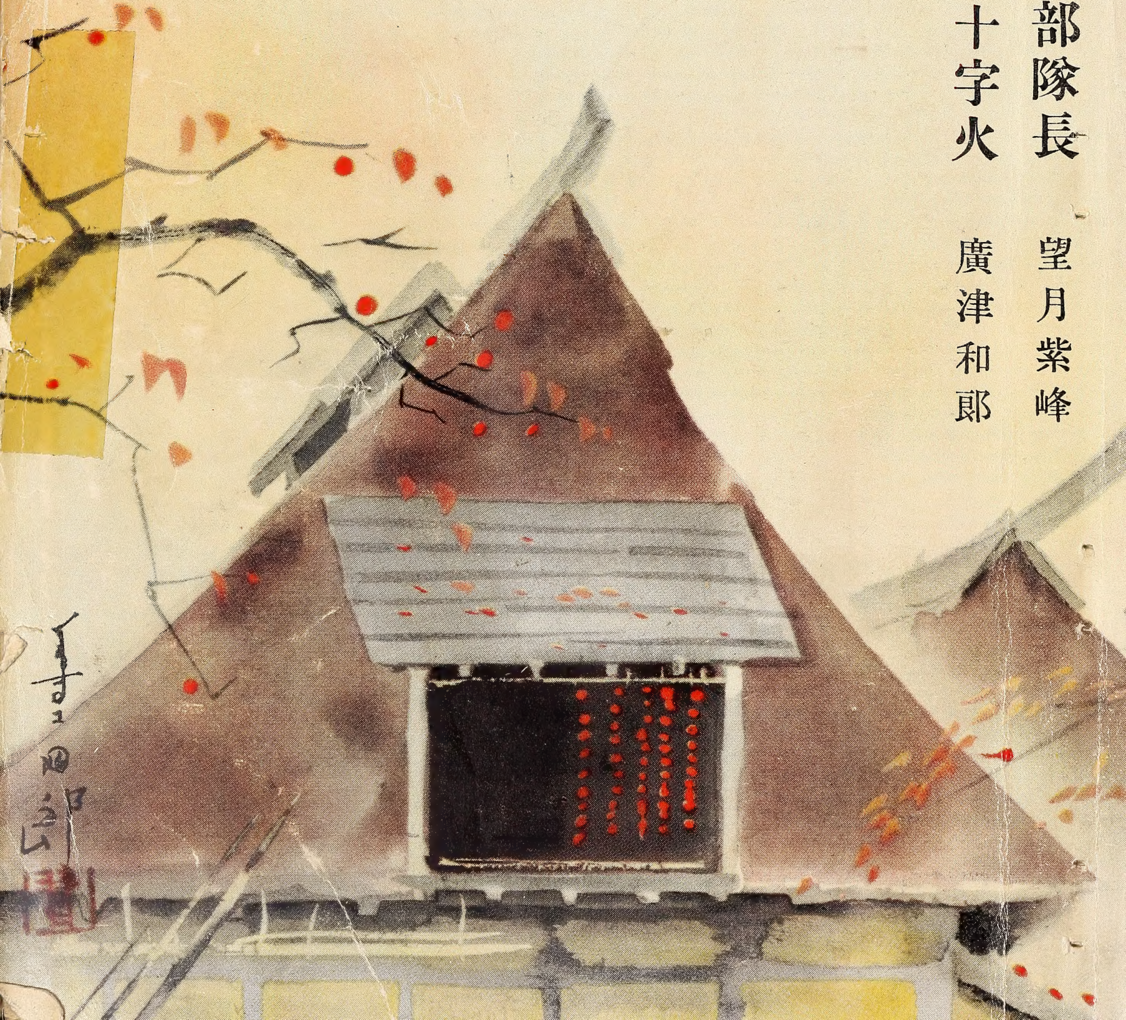
富士

國民精神總動員

十一月號

◎噫飯塚部隊長　望月紫峰

◎長篇讀切 戀の十字火　廣津和郎



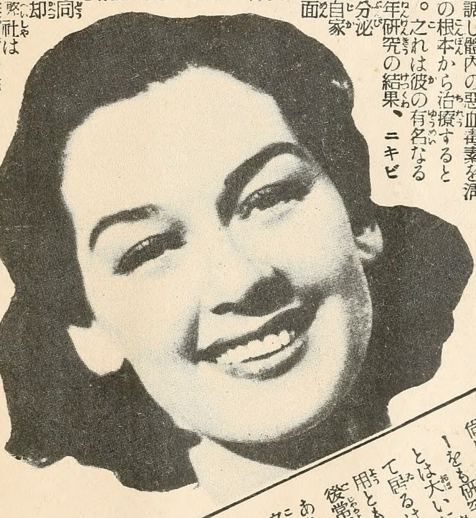
實驗藥無代進呈！

ニキビ ソバカス 色黒 吹出物

青年男女の大きな悩みニキビ、ソバカス吹出色黑等の醜汚を除去する方法は從來のクリーム乃至美顔術等外部化粧法は効能本位で無いから別として眞の効果的良法は左の二大方法に大別されます。

一、ニキビ吹出等發生の局所へ藥物を直接作用させる所謂局所藥治法。

二、內服藥に依て胃腸機能を整調し體內の惡血毒素を淸淨ならしめ以てニキビ吹出等發生の根本から治療すると云ふ最も新しい方法であります。之れは彼の有名なるウンナ博士初め歐米諸醫學者多年研究の結果、ニキビ吹出等は青年男女の旺盛なる內分泌異常に因り又胃腸機能の變調自家中毒作用等に因つて體外皮膚面へ發生する、更に色の黑いもソバカス等も體內色素の沈着である等の新病理が發見されて歐米にては盛に種々內服藥が發明され優秀な効果を收めて居ります、が如何に外國藥が成績優良だからとてその儘我々日本人に應用しても氣候風土其他飮食物等の關係から同樣の効果が無いばかりか中には却て劇藥等の危險作用も伴ふので弊社は故島田藥學博士谷口醫學博士水谷藥學士敷津ドクトル越澤藥學士等五大學者の指導を仰ぎ種々研究の結果我々日本人の體質に適合し何等副作用なき安全而も効果は外國藥に優る供劣らぬ內服美皮膚藥『ハルナー』を發明したのでありますから何はサテ置き御近所藥店にて內服ハルナーと御指名御買求めの上御實驗下さい。

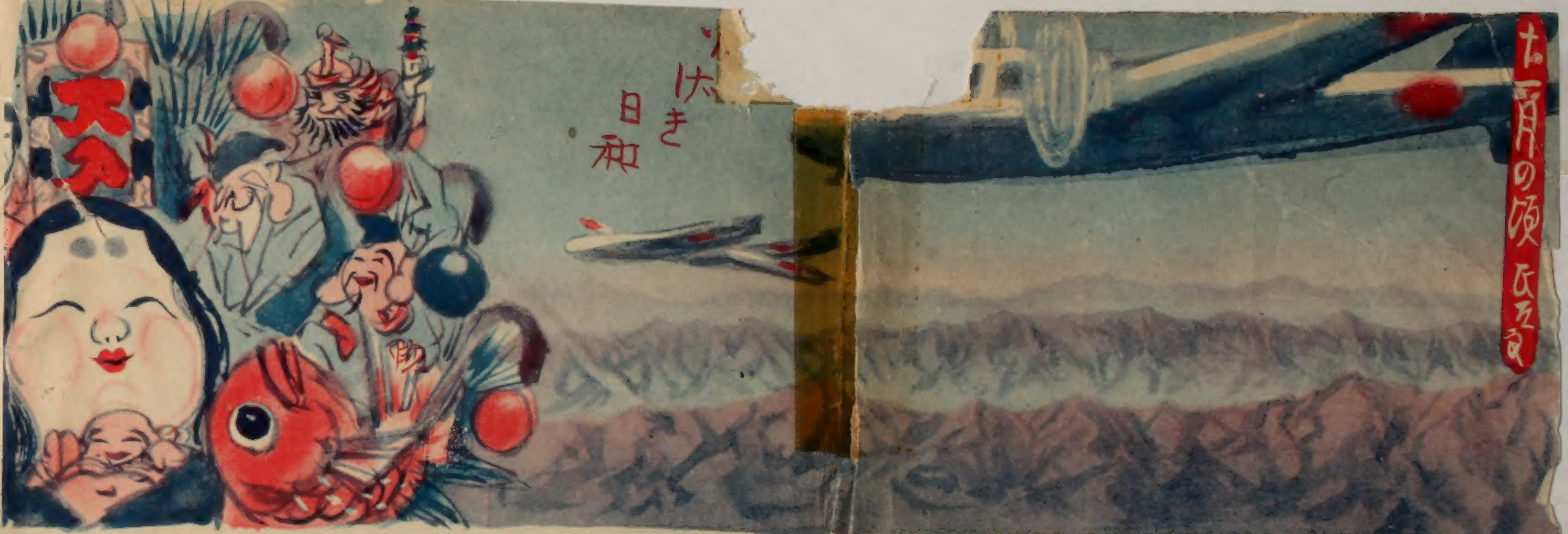


東京市京橋區築地橋際七九五號
合資會社 濟生堂製藥所
振替口座東京一七二〇一番
電話京橋(56)一〇二七番

最新完成『煉藥ハルナー』と白色美身強壯法書 無代進呈

尙ほ弊社にては外用局所美化藥として煉藥ハルナーをも研究完成致しました、之れは在來の塗布藥とは大いに趣を異にし、外用藥として最も優れて居るは勿論で、更にコールドクリームの代用ともなり、お化粧下に、殿方のヒゲ剃り後常用にも適する實に特色あるものであります。

之れを今回ドナタにでも小型見本一罐づつの外に我五大學者が誰にも判り易く出來る樣詳述せる最新白色美身強壯法書籍一冊を添へ何人にも無代進呈する事となりましたから御遠慮なくハガキで『煉藥ハルナー見本と書籍送れ』と今直ぐ御申込み下さい。



富士 第十一巻第十四號 十一月號目次

◎梢　秋（表紙）……福田豐四郎筆
◎戀の十字火（折込口繪）……富永謙太郎筆
◎富士山頂に萬歳を叫ぶヒットラー・ユーゲント（寫眞）
◎あゝ大日輪よ（詩）……川路柳虹

◇愛國舞臺風景（グラビヤ口繪）……一
◇時局寫眞大畫報（オフセット口繪）……二
◇富士漫畫大笑館（オフセット口繪）

○國策へ坊も共鳴……清水はじめ…一九
○碁で仇討……森比呂志…二一
○敵のトーチカ打破り…野口孝司…二五
○日本の雀…二三
○いづこも同じ食慾の秋……二三
○無意識なんですが…杉柾夫…二〇
○物眞似師の失敗…牧とらを…二四
○我が家の健康法…清水はじめ…二六
○張りに行つた効果…二三
○かはいゝ搜索願ひ…二三
○月見の蔣介石……二三

（本誌に掲載せるものは無斷にて轉載し又は單行本に上梓し、或は脚色・上演・映畫撮影その他の複製行爲をなすことを禁ず）

大長篇讀切

現代小說　戀の十字火……廣津和郎…二八
嘘飯塚部隊長……望月紫峰…六二
スパイ小說　揚子江の危機……北村小松…八四
時代小說　妙々鬼の盃……大倉桃郎…一三三
探偵小說　臆病な男……甲賀三郎…一五三
角道美談　土俵の報恩……鈴木彦次郎…二二四
新作講談　野路の萩餅……桃川若燕…一六六
滑稽小說　天高肥馬の戀……弘木丘太…一九六
時代小說　梟首三百一級……長田秀雄…二三〇
出世講談　一萬石の槍……大島伯鶴…二四六

愛國映畫三大物語
軍國子守唄……大林清…一〇八
永遠の感激……岩田英文…二九四
十字砲火……野澤純…四〇

◎十一月繪ごよみ……谷脇素文…一七
◎愛國神宮詣（詩）……佐藤惣之助…六〇
◎下駄時代（家庭詩）……サトウ・ハチロー…一〇四
時代小說 戀愛算術……菊池寛…一一三
時代小說 柘榴一角……白井喬二…一七六
現代小說 女人哀歌……中村武羅夫…二三四
家庭小說 岩に咲く花……小島政二郎…二〇四
時代小說 善魔鬘……吉川英治…三一四
時代小說 女次郎長……川口松太郎…三六三
時代小說 三代盗ッ人宿……子母澤寛…三七二
現代小說 熱情の翼……竹田敏彦…四一六
現代小說 曠野の火……加藤武雄…四七四
捕物綺談 國境の女……三角寛…[illegible]
◎川柳漫畫……谷脇素文…一二〇
◎富士山頂の日記……[illegible]
◎のんびりめい探偵……志村つね平…二八二
◎漫畫會場……三六六
傳記小說 兒玉將軍……木村毅…一九〇
◇無言の戰士 軍馬に泣く……陸軍少將 坂西平八…二六六
◇漢口脱出記……寶妻壽作…四〇八
△本朝圍碁小史……三〇八
△笑話倶樂部……三九二
△講談社ニユース……三九一
△棋相觀測臺……三九二
△讀者倶樂部……五〇四
新作落語 上海みやげ……三遊亭金馬…一七〇
落語 きやいなう……桂文都…四〇四
◇映畫界演藝界噂話……三六二
◇將棋上達の急所 香落の攻擊法……八段 花田長太郎…二九二
◇圍碁必勝 著子の活用……七段 瀬越憲作…三〇八

Digitized by the Internet Archive
in 2014

https://archive.org/details/fuji1114taka

戀の十字火

富永謙太郎畫

『そんなに邪見な事を言はないで、ね、僕の氣持ちも、加減に察して呉れよ。』加田は[illegible]やうに言つたが、いきなり暴力的に[illegible]彼女の[illegible]か かつた。『可厭です。』と彼女はきつぱりした調子で言ふと、手[illegible]の力を兩手にこめて、加田を[illegible]加田は[illegible]だ。──健氣な銃後の女性を主人公にした、本號の大讀物長篇讀切、戀の十字火は、愛と戀愛の大名篇！トオモ面白い大傑作です、是非お讀み下さい。

富士山頂に萬歲を叫ぶヒツトラー・ユーゲント

報知新聞社撮影

あゝ大日輪よ

——御來迎に契る盟邦の若人——

川路柳虹

蓑、菅笠に金剛杖、
元氣張り切る若人を
誰かと見れば勇ましや、
これぞヒツトラー・ユーゲント。

玲瓏富士の姿にぞ、
日本精神學ばんと、
身姿もおなじ富士講の、
大和風こそ嬉しけれ。

一夜明かせし八合目、
薄ら明りの黎明に、
岩角踏んで凛然と
頂き登るユーゲント。

波立つ雲海、金色に
燃ゆるを見れば燦爛と
天地かゞやく御來迎、
思はず神氣に打たれたり。

東をのぞみ、右手かざし、
「大富士陛下萬々歳！」
唱和す「ハイル・ヒツトラー！」
あゝ、大日輪よ、神國よ。

山頂冷き朝風に、
靡く日の丸、卐旗、
血もて結ばん盟邦の
若人互ひに相擁く。

長壽の秘訣

心臓や胃腸を強め
動悸、息切の治しに
すぐ役立つ耳寄の手當

増田ちか子様（八十歳）

少しの身動きにも、動悸や息切がしたり、夜分は寝汗をかき氣分が悪るかつたり、何んとなく氣力がなく、疲れやすいお方等は、心臓か肺が弱つてゐるからで、自然と食欲がなく氣分もふさぐものです。

かうした身體の弱いお方は心臓や肺の弱つた細胞をつよくする手當が大切であることは誰でもごぞんじでせう。

幸ひ『皇漢醫藥の寶』とされてゐる、麝香を始め數種の貴重動物の精膽を綜合精製した『救心』が手當として今評判です。朝夕一粒づつ服用しただけで、心臓、肺、胃腸の弱りにどんなものか、誰にもすぐお判りでせう。まあ、動悸、息切、寢汗に惱む方は試めしてごらんになるといゝと思ひます。

けし粒のやうな小粒の藥ですが內臟の細胞に吸收、同化がよく、力強い効目があり、今日まで健康、長壽藥として評判です。

『救心』の愛用者である、千葉縣の増田ちか子さんは、八十歳にもなる高齢者であり乍ら、畑仕事も若い者と一緒にやると云ふお元氣です。お勞れになりませんかと尋ねると、煙草を一服つけながら『歳が歳ですから勞れもするが、かうして働けるだけ元氣の譯けですよ』とニッコリ笑ふ。『救心』の愛用者に年寄はないとしみ〴〵感じさせられた。

因に東京市京橋區西八丁堀二丁目十七ノ四堀救心本舗宛に申込むと救心二日分一人一回限り無料進呈されます。

一生の幸福の爲に……

迷はずお手紙下さい

……淋病に惱む方へ急告……

世の中に何の不足もなく人も羨やむ樣な夫婦があつても其實二人の中には人にも話せぬ惱みがあつて淋しい日を送つてをられる方もあり、其日暮しの貧しい身でも二人仲よく働いて他人の味はへぬ幸福な日を暮してゐる人もある、如何に巨萬の富や名譽があつても肉體や精神上に惱みがあつては眞の幸福とは云へないものがある。夫が淋病に犯された場合その家庭に及ぼす悲劇は迚も筆紙につくされません。特に此の病氣に罹れば仕事も手につかず、社會的にも家庭的にも致命傷であります。故に悲しんでも仕方なく、我が身の不運とあきらめて互につまらぬ一生を送らるゝ御夫婦や、生れる可愛い我が兒を、生れながらの盲目にする親達も少なくありません。又獨身時代に淋病をわづらひ、いろ〳〵の手當をしても治らず、放任して置いたために華かなるべき新家庭に風波絶えず破鏡の嘆を見る實例に乏しくありません。かゝる苦しき胸中を思ふ時、實に同情に堪へません。殊に非常時日本を背負ひ立つ若人達が、不幸にして徴兵檢査を前に病みし時、健康な身も不合格にはねられて無念の涙を呑む等々……恐るべきは亡國淋病である。

淋病や消渇の人は

淋病や消渇でお惱みの方は、いろ〳〵手當に迷うて、病ひをコジラかすより、たしかな醫者にかゝるもよい事です。しかしいろ〳〵の事情や立場上、或は經費の問題で、長く通院の出來ない人には、昔から傳はる手輕く治る獨特の良法が當院にありますから、お惱みの方は一生の幸福の爲に迷はず一度手紙でお尋ね下さい。多くさんの人々が全快して大變喜んで頂いてをります。スグお敎へ致しますから、一日も早く再生の光明に喜ぶ身になつて下さい。

大阪府布施市新喜多町一番地
小阪驛下車樟蔭女學校正門北半丁
妙法院

（二ノA）

生れつき薄毛で困る方へ

毛を生やす原素療法

毛のうすい方、脱毛ハゲ等に悩む方

ハゲ薄毛を不治と諦めたり悲觀するのはまだ正しい療法を御存じないのですから決して落膽してはなりません在來の發毛劑や養毛劑には學理と實驗がピッタリ合はないものが多く折角根氣よく療法を續けても期待するほどの効果が得られなかつたのです素人のお方がお試しになるには必ず信頼の出來る專門家に御相談なさつた方が安心です

毛根から活かす毛生原素の効力

茲に御紹介する名古屋の齋藤先生は毛生專門の研究家で薄毛の方々に對しての親切な御研究は隨分以前からの貴重な御體驗でありますから實名本位の療法でない事は申すまでもありません。

齋藤先生の毛生療法は他の發毛劑と原理が異つてカユミやイタミがなく、心地よく藥効が皮膚にシミ込みます。そして毛生原素の働きが旺盛になり、今まで皮下に休眠してゐた毛根が活氣づいて、恰も木の芽が吹き出すやうに發毛作用が促進されます。從つて段々と薄毛が濃くなり、短い毛が伸びてやがては人並に毛が發生しますから、全然諦めてゐた人でも正しく發毛した實例が屢々あります。

貴重な體驗が生んだ正しい自宅療法

例へば一般のハゲ、薄毛、脱毛等などでいろいろ苦しんでゐられる方がこの毛生原素を用ひますとキツトお喜びなさいます。又美容上から言つても眉毛生え際、ヒゲ等をよく生え揃はして美しくする働きがありますので、女性にとつても男性に取つても重寶な療法です。齋藤先生の下へ色々と御相談に見えられます方が、想像以上に多いのに驚かされます。全國の皆樣から色々と薄毛に惱むお手紙を頂きますがいくら効果をお急ぎになると申しても氣が短か過ぎます。根から眠つたり、衰へたりしてゐる毛を生やさうといふのですから可成りの辛抱が大切です。

豫想外の好成績で實驗者が大喜び

此の原素療法をお試しになつて、効めの解るのは始めはウブ毛が一面に生えて來る事です。これまでになるとしめたもので、後は日一日と濃い毛が成長するのをお樂しみにお手當を續ければよいのです。實際にお驗しになつた人は恰で夢ではないかと疑ふほど豫想外に早く生えて大變感激されてゐますタトへ人妻となつても此の樣な薄毛でお悩みの方はこの正しい療法を御實行下さい。御婦人のハゲ、眉毛生え際の惡い方、薄毛、脱毛で無毛の方等は御遠慮なく詳しい樣子を書いて送料四錢切手十枚封入の上左記宛御申込み下されば自宅で秘密に手當ての出來る毛生原素及び説明書を添へて近くの局まで代金引替にてお送りいたします。

宛名　名古屋市專賣局前電車通り
齋藤佐可江
電話南三四五三番

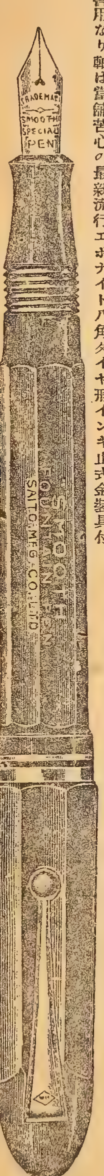
遂に完成す！

特許 スムース萬年筆出現

世界的新發明

十四金ペン製造禁止、金の亂費を防止する國策に應じ完成した特許『スムースペン』は貳拾年來研究の純イリヂユーム付にして書味、彈力、耐久力は金ペン以上優秀に細書用なり軸は當舖苦心の最新流行エボナイト八角タイヤ形インキ止式金裝具付

定價 二圓五拾錢（送料拾五錢）
宣傳見本一本特價壹圓三十錢提供

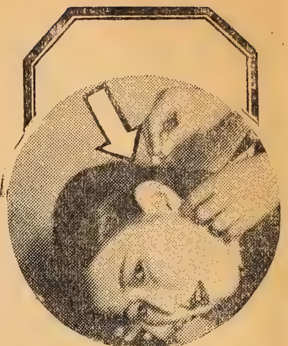


見本一本の御注文は前金にて、振替名古屋一九五二六番・切手代用一割増

發賣元 名古屋市專賣局前 齋藤榮製作所

慢性耳病☆深達療法とは急告!!

耳だれ耳鳴耳遠の方へ



……こんな症状の方は必ず……耳鳴がして頭の芯が痛む方。鼓膜が穿孔して耳の遠い方。外耳が爛れて痛む方。耳だれが絶へず出て耳が塞る氣分の方。

斯うした症状で御苦しみの方は今迄いろ／＼の治療を重ねて居れることですから、一時抑への消毒藥や遠廻りな内服藥が無効だなぞと申上なくても充分お分りのことと存じます。大庭醫學博士御推奨によるところの獨逸式點耳劑パロギンは前記のやうな慢性の方々に一度御使用願ふと、必ずその正しい反應をお認めになり何故もつと早くこの治療法に就かなかつたかと永い間の無駄な努力を今更ながら御後悔する程です。小學校や各種團體へ逐日どし／＼普及瓶をお送りして居りますがお蔭様で大變な御高評で慢性重症の方々から心から禮讃されて居ります。

☆

本劑は鼓膜を透して耳の奥深く達し、耳鳴りや耳塞りの個所を自然に鎭靜させて聽神經の働きを促進し、執拗な耳漏の出る腺の殺菌消炎をして、不快な膿を根本から取り去り、病める鼓膜の活動を援けますので多少穿孔の個所がありましても聽力は目に見えて回復致しますことは實驗者の等しく御認め下さるところです。左記參考までに本日受信した實驗者の手記をそのまゝ掲載しました。

☆

拜啓

パロギンで治りました喜びを皆様へお知らせしたい希望で居りました處、貴院の方で發表下さる由喜んで御承諾致します。

私の耳病は本年三月初旬耳病に侵され次第に耳だれから耳鳴を覺え重態になりましたので、木浦で切開手術を致しましたその結果快方に向ひましたので歸郷致しますと間もなく再發しまして、前のやうな症状は益々嵩じて聽力も低い音なぞ全然聞き取れなくなつて終ひました。それで光州へ上りレントゲンをかけいろ／＼治療しましたが捗々しくなく今日に至りました。父の進めで貴藥パロギンを試みました。

☆

二三日すると大變よいやうな感じが致しましたので早速中瓶を注文し使用しましたところ着々と快くなり七月下旬には全く治つて終いました。思へば永い間耳だれは勿論耳は鳴る頭は痛むして鈍い聽力で何の位悩んだか知れません。斯うした暗黒の世界から救はれましたのも全くパロギンのお蔭でありました。八月十一日に目出度く男子を分娩致しました。（後略）

八月二十日發表承諾濟

朝鮮全南郡細枝面東谷里

谷神茂代

お困りの方は『試藥』に『耳療説明書』を添へて無代進呈致しますから「冨士」で見たと記して東京市西巣鴨二丁目向宮通り城北藥院に御申込み下さい

大庭醫學博士推奨の耳藥と手當法を無代進呈

（四ノA）

愛國舞臺風景

西洋舞踊の大家石井漠氏は、事變以來折にふれて、銃後意識を高揚する愛國的な舞踊を幾つか發表してゐる。

寫眞下は、『感謝』と題する小品で、踊るは石井漠氏とお弟子の石井不二香さんだ。長期抗戰に對應して現地に活躍する皇軍の將士を思ひ、その活躍に心からなる感謝を献げる銃後の赤誠を、老練な按舞で、舞踊化したもの。リズミカルな動きと音樂だけで描く、愛國詩であり、感激繪卷である。

寫眞上は『かちどき』と題する勇ましい群舞。石井舞踊團の潑剌たる乙女らが美しい曲線を空間に描いて、戰勝の歡喜を謳歌して踊る。——

『感謝』『かちどき』

それは連戰連勝のわが皇軍が破竹の意氣を颯爽と偲ばせて餘りあるものだ。

『感謝』が、銃後の人心にしつかりと訴へる情の踊であれば、これは銃後の若者を鼓舞する烈々たる意の踊とも言ふべきだらう。

大衆の情と意を適度に刺激して、人心を荒ばせず、意氣を衰へしめないといふ、かういふ試みこそ、今日の藝術家たるものの、第一の努めと致すべきものに違ひあるまい。

土に叫ぶ

幾多の皇軍勇士を戰場に送つてゐる農村。その農村を疲弊せしめてはならぬと敢然起つて農村革新を叫ぶ靑年を主人公とした劇が、この『土に叫ぶ』だ。

主人公の靑年は、何不自由ない地主の息子に生れ乍ら、單身小作人の群に交り、鍬を取り、土を耕す。そして、幾多の艱苦に打勝つて、明るい光明を農村の上に齎すのである。

からいふ頼もしい農村靑年あつてこそ、現地の勇士等も、安心して皇國のためにその一身

を献げまつることが出來るであらう。

もと〳〵この劇は、單なる假想ではなく、山形縣鳥越村において、實際にこのやうな體驗を重ねた松田甚次郎氏の手記を材として劇化したものだ。從つて全篇、ヒシ〳〵と實感があふれ、見るものをして、覺えず銃後の快哉を叫ばしむるものがあつた。

去る七月の有樂座に、新國劇によつて上演されるや、荒木文相、末次内相、有馬農相等が相次いで見物に來られ、絶讚を惜しまれなかつたのも無理はない。

寫眞は、島田正吾の主人公眞次郎(向つて右)と辰巳柳太郎(左)の小作人健三。上は、觀劇後舞臺裏へ見えて俳優一同を勵ましつゝ記念撮影をした荒木文相(中央)である。

加納部隊長最後の日

今次の事變のうちで、最も悲壯を極めたものは、加納部隊長の壯烈無比な最期であらう。曾宅敵前の塹壕は打つゞく豪雨のため、水びたしになつてゐる。五十米前方には精鋭な敵の大軍が控へてゐる。後方は濁水滿々たるウースン・クリークだ。進むも退くも、身の自由を失つた加納部隊は、こゝに敢然起つて敵陣地へ決死的突撃を試みたのである。そして、部隊長以下の將兵は、雄々しくも曾宅戰線の華と散つた。

『加納部隊長最後の日』は、この壯絶なる突撃戰にうつる直前の將兵等を活描し、その涙ぐましく忠勇なる言動を手にとる如く見せた感激の一幕であつた。

市川猿之助丈は、この劇の上演に先立ち、息子の段四郎と共に上海の現地に赴いて實地踏査をなし、加納部隊長最期の地にも行つて默禱をさゝげ、大いに精神的な演技のコツを體得して歸つて來たと言はれる。

それだけにこの劇における猿之助丈の演技は實に天晴れなものであり、國際劇場に初演以來、東京、大阪に數回續演されて、絶大なる好評をかち得たのであつた。

寫眞上は、猿之助の加納部隊長、下はよく決死の覺悟を定め、後送する軍旗に別れの敬禮をする將兵たちだ。

愛國行進曲

舞踊界の純情派花形として其の名を謳はれてゐる藤間喜與惠女史は、支那事變勃發直後、慰問に献金に、銃後の赤誠を披瀝して、天晴れ女ながらもの感を深くしたが、今年の春、仁壽公堂に於ける創作發表會にも、國民歌『愛國行進曲』を按舞して、萬堂を感激の一色に塗りつめたのである。

寫眞はその一情景で、一人ポーズは『あゝ悠遠の神代より』の振で、下はお弟子さん（前から永井三惠、中・松下理貴子）と踊る『見よ東海の空明けて、旭日高く輝けば…』の潑剌と燃え立つ希望の表現である。

『舞踊報國――大層らしい言葉でございますが何時も考へて居ります。あれこれと思ふことのみ多くて、何一つ御役に立つことが出來ず不本意に存じますが……』

喜與惠女史は、飽くまでもつゝましく謙遜だが、全國民に擧つて唄はれる『愛國行進曲』を、出來るだけ單的に、一般に踊り易く覺え易い愛國舞踊として、健全な國民歌の精神を更に舞踊を通して普及出來たならば――さうした眞摯な態度から作られたのがこれである。

殿方のシェービングクリーム
婦人の日ヤケ落しクリーム

アイデアル レモン クリーム

レモン クリームで
顔を洗ふと
日ヤケが落ちる

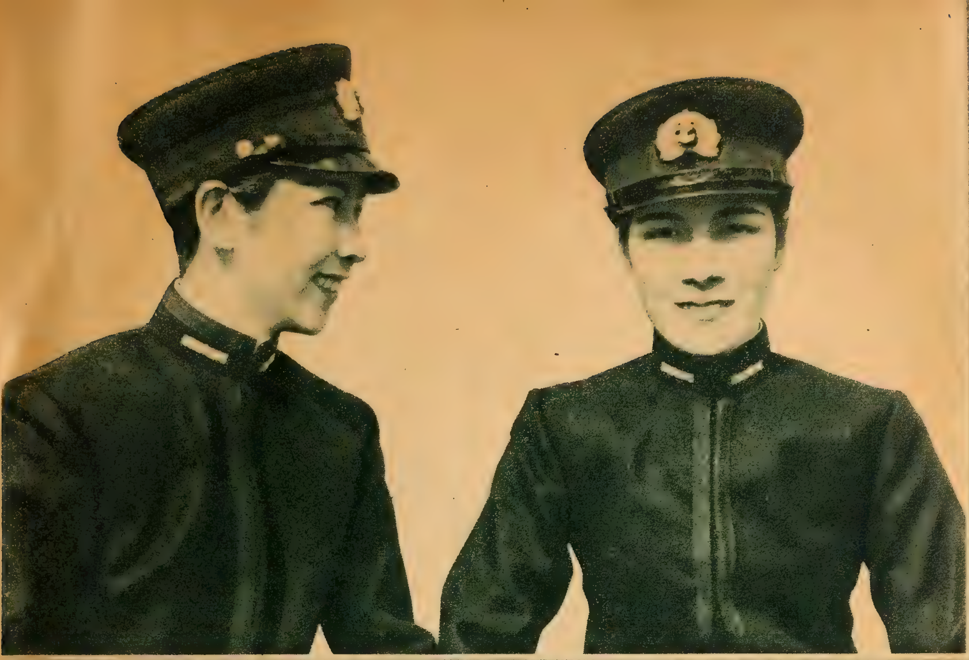
使ひ方は丁度石鹸の代りで、**クリーム**を顔によくのばして水で洗ひ落します

肌の弱い人には特によろしい水の質が悪い所でも **レモンクリーム**の力で良水と變りなくなり、洗顔後は肌がシットリ濕つて、石鹸以上にサッパリします。レモンの清淨美白作用で日ヤケが落ちます

石鹸の様に泡はないが毛が柔らいで剃刀がスムースに走る。痛みなく剃れ剃刀負が絶對にない

¥.40

東京 高橋東洋堂



軍國女學生

乙女たちの赤誠は、すぐ第一線に反映する。一枚の眞心こめたハガキは、忽ち十人の勇士を生むことにもなる。實に、

千人針萬人力となりにけり

ではないか、といふ銃後女性の精神力を強調したレヴュウが、この『軍國女學生』だ。

題材は、東京のある高女の乙女達が、わが海の荒鷲達に贈つた手厚い慰問品に對する勇士達の感激の手紙から、採られてゐるといふ。それだけに、いかにもイキ〱した實感が全篇にあふれ、去る七月東寶劇場に上演された時は、滿都の寶塚ファンをして絶大なる愛國的感情にひたらせたのであつた。

寫眞下は、その大詰の場。乙女達の赤誠が通じて、松波中尉や岸村中尉は華々しい勳功を立てゝ歸還したが、いま卒業式を終つた許りの乙女達の前に現れて、喜びと感謝の言葉を述べてゐるところだ。

寫眞上は、月影笙子（向つて右）の松波中尉と花影絹子の岸村中尉。

——尚、これは海軍省軍事普及部の指導により、寶塚が最初に試みたキノ・ドラマ、映畫と實演とを巧みに點綴した、近頃の異色篇として逸し難いものである。

教草武勇鑑

これは日本舞踊の花形花柳壽美女史が昨秋發表した傑作舞踊のひとつ金太郎の母山姥は、わが子が仕官するときいて、夢かと許り喜ぶが、なまじこの母があることを思ひ、イザといふ時に、武士にあるまじき未練氣が金太郎の心に起つてはならぬと、わざと辛く冷たく、わが子をたしなめ、その仕官の門出を祝ふのである。

この雄々しい健氣な母性愛あつてこそ、日本童話の豪傑金太郎も、初めて生れ出たわけであらう。そして、今日、聖戰に活躍する忠勇なる皇軍將士たちも、必ずや、この山姥に劣らぬ母性愛によつて勵まされてゐる人々が少くないだらう。

日本獨自の獻身的な母性愛を強調したこの愛國舞踊は、日比谷公會堂で初演されて以來、軍人會館、歌舞伎座等の公演會に繰返し演ぜられて、銃後觀客の絶讚を浴びてゐるのである。（中央壽美女史の山姥）

尙、下は同じく壽美女史の『征戰譜』。日本女性の凜々しく美しき薙刀の踊である。

笑ひの慰問使

國を擧げての聖戰だ。藝人の社會でも、何か分に應じた御奉公をしたいと、いろ〳〵考へてゐた矢先、出征將兵の慰問に行かないかと勸められた二人は大喜びで『わらわし隊』に參加した。

そして、上海から南京へと、ワカナ、一郎の名コンビは、到る處で現地の將兵さん達から『笑の慰問使』として歡迎されたが、殊にワカナさんは、かよわい女の身で、或は一晝夜もトラックにゆられたり、或は貨車の一隅に露營の夢を結んだりして第一戰の彈丸の飛來するあたりまで出て行つて、『こんな處までよく來られたなア』と、○○部隊長をびつくりさせた。

この名コンビの漫才の中には、自分が實際に見聞してきた現地將兵の苦鬪、その中に生れたユーモアなどが巧みに織り込まれてゐるので、聽衆は笑ひながらも、知らず〳〵愛國的熱情にまで導かれてゆくのである。

寫眞は有樂座に於ける報告大會、向つて右が玉松一郎さん、左がワカナさん。

名流と自力健康器

若き文樂の至寶

桐竹紋十郎氏

若くして桐竹紋十郎の名跡を繼いだ彼れは、人知れぬ苦勞に泣いた日が少なくはなかつた。そして彼れは『此名跡をけがすやうな事があつてはならぬ』と云ふ强い責任感から血の滲むやうな努力と研究をつゞけた結果、今日では文樂の至寶として、持てはやさるゝまでに至つた。しかも新らしい時代の感情を理解して、古典的なあの人形に一脈の新味を通はせやうとする努力は、十分に買つてよい。演舞場の終幕を待つて一夕紋十郎氏と相會した、談一度藝術の事に移ると暑さも何も忘れて了つて、素晴らしく熱を上げる。其若さに限りない魅力と希望がある。

『人形に、使ふものゝ魂が通つてこそ、始めて觀客を感動させる事が出來るのです、技巧なんて抑々末ですよ、夫れには肚ですな、肚がフラ〳〵して居たんでは、立派な藝は生れませんぜ、其點では此奴ほんまに結構ですわ…』と一寸姿勢をたゞして、腹部にチンといふ音をさせ『自力健康器』の存在を知らせる、健康その物のやうな溫顏を綻ばせながら大に談じ大に飲む、周圍の人々が明日の舞臺を氣遣うて注意すると、彼れは、ひようきんな態度でひよいと立ち上り、其都度腹部の『自力健康器』をチン〳〵と鳴らして、之れさへあれば大丈夫とばかり夜の更けることなどはテンで問題にして居ない。寫眞――舞臺に於ける紋十郎氏。

因に『自力健康器』は日・獨・英專賣特許の醫療器。東京神田一ツ橋二四番地、帝國教育會館内、國民保健振興會に申込むと立派な『說明書』を何方にも無代郵送される。

落語報國

金語樓の『兵隊さん』か『兵隊さん』の金語樓かと云はれる程、『兵隊さん』で鳴らした金語樓師だ。しかも、現在、後備ながらも歩兵上等兵として軍籍にある身の上だ。

事變がはじまつた最初から、『禿げたりといへどもこの頭に鐵かぶとを戴き、錆びたりといへども家寶の名刀を帶して、勇躍征途に上りたい』と鶴首して待つてゐたゞ、なかく赤紙はやつて來ない。そこで自ら志願して、出征兵士の慰問のため、北支、中支へ出馬すること既に二回、彈雨の中を第一線にまで飛出して、十八番の落語を演じては、戰塵にまみれた將兵を心の底から笑はせ、力づけて來たのである。

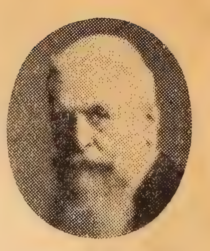
征途に上るまでは『口で御奉公』といふのが金語樓師の心境だ。

落語報國の念願に燃える師は、あらゆる舞臺から、高座から、笑の爆彈を飛ばしつゝ、しかも前線將兵諸氏の苦戰奮鬪、皇軍活躍の實狀を國民の前に報告してまはつてゐる。

寫眞は花月劇場に於ける報國大會で熱演してゐるところ。

毛髪の細胞が若返る新研究

黒髪に大切な黒色榮養素クロマチン
生理的發毛現象によつて美髪となる

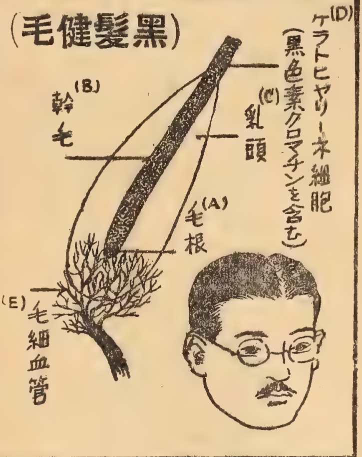


スタイナッハ博士

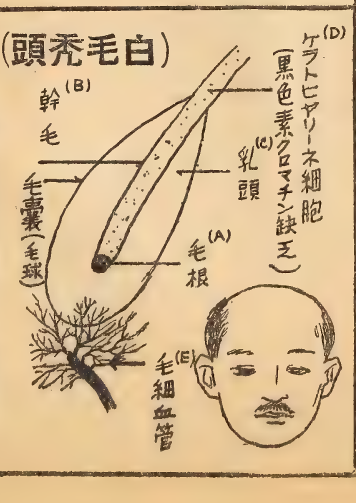
墺國ウイン大學教授スタイナッハの唱導した所謂『若返り法』にヒントを得て、これを毛髪の外部的でなく、毛髪と血液、毛髪と皮膚、毛髪と内臓、毛髪と細胞組織と云ふ風に人體の内部と毛髪との關係から新研究の結果遂に成功されたのが、毛髪研究所長、鑓田常次郎先生であります。

つまり、脱毛、薄毛、禿頭、及び毛質の惡い例へば赤毛や若白毛、縮毛等々になるのもその毛根に及ぼしてゐる毛細血管の働きが乏しくなり、毛髪に大切な黒色榮養素クロマチン色素が缺乏する結果である事を新發見し、こゝに始めて毛髪細胞の若返り新内服療法に成功したのであります。

こゝに御紹介する『毛髪の若返り新内服療法』は、一種のホルモン作用に依り、毛髪に緊要なクロマチン色素が再生豐富になつて、毛細血管の凡ゆる部分が若返り、薄毛の人は自然に濃度を増し、赤毛、白毛の人は美髪に禿頭の人は一旦衰退した毛根に榮養を與へて活動を續けると云ふ風に根本から毛髪細胞を若返らせるのであります。東京神田駿河台三ノ二四、東京醫藥研究所に申込次第、醫學的説明書を一人一册限り無代進呈される。



黒髪健毛には黒色榮養素（クロマチン）を含める**ケラトヒヤリーネ**細胞密集存在す。

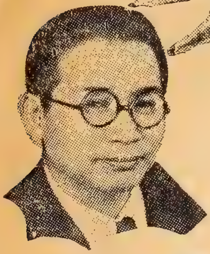


白毛、禿頭には**ケラトヒヤリーネ**細胞少く且つ黒色榮養素（クロマチン）を含まず、血管は毛根まで達せず、故に黒髪健毛も榮養が衰へて、白毛や赤毛、禿頭となる。

明るい日本
輝く國土
樂しい人生

大評判の理想小說

賀川豐彥氏 大熱著



第三紀層の上に

陽は麗かに
輝けり
「第三紀層の上に」

正義の戰は進む

榮ある開拓の鍬を打込むものは誰だ、
輝く新理想鄉を建設するものは誰だ、
その光榮こそ——
貴君の双肩にあるのではないか、

試みに、賀川豐彥氏の熱血を打込んだ
大理想小說『**第三紀層の上に**』
を讀まれよ、さうして、この長期抗戰に、
而して、戰後の大躍進に備へよ、

之は單なる戀愛小說ではない、生きた社會讀本だ、全日本繁榮の理想案だ、大賀川氏の熱だ、魂だ、然も何たる面白さ、

不遇の手に育った齋藤力太と松子の二人が、貧困に耐へ、迫害に抗し、誘惑を斥け、病魔を征服して、理想と愛の爲に敢然と鬪ひぬく健氣な姿、淸い戀、それこそ貴君等自身ではあるまいか、熱淚湧く名作！何はさておき本書を讀まれよ！

果然到る處大評判大賣行

定價 一圓五十錢（送料十錢）

尙、賀川豐彥氏の『**一粒の麥**』定價 一・五〇 送料・一〇『**海豹の如く**』定價 一・五〇 送料・一〇『**その流域**』定價 一・五〇 送料・一四 何れも大評判

（大日本雄辯會講談社發行）

◇…新宿驛に程近い柏木の天龍堂本院には、毒の病と淋病に珍らしく良く効く良藥があります。此の藥は漢方醫學の研究家として有名な同院長の溝田先生が、獨特の處方で調劑した粉藥を其のまゝ紙へ包んだもので、近頃流行の錠劑や丸藥と異り、實に變つた藥です。今迄は廣告もせずその効果を聞き傳へて、ワザ〳〵訪ねて來た人に丈け分けたのですが、今回特に本誌上で、此の隠れた良藥を御紹介する事に致しました。『此の藥ばかりは評判以上だ』と一度服用した方は誰も云ひ合せたやうに喜ばれます。

特別發表

世に隠れた良藥

醜い肌や惡性のばい毒に

ニキビ・吹出物・拔毛・聲嗄れ・耳鳴・めまひ・逆上

『とても良く効く』と評判の一日一服藥

聲が嗄れたり、吹出物や拔毛がしたり、横痃や疳瘡や醜いオデキの治らぬ人は、勿論梅毒ですが、頭が重い、眠れない、耳鳴や眩暈がする、節々が痛む、手足がシビレる、血壓が高い、ニキビが醜い、便通がないと云ふ方は必ず惡い毒があります。之を油斷すると血液は濁り毒が内攻すれば骨がらみとなり、又頭へ上れば卒中で頓死する事があります。梅毒は親から遺傳したり、知らぬ間に湯屋や床屋でも感染するから實に恐るべき病氣です。梅毒の療法で一番いけないのは、注射を二三本で中止したり、力の弱い藥で一時押への治療をして手遅れとなることです。此の一服藥は一日三回の普通用藥と違ひ、一日僅かに一服でよいのですが、此の一服の力は實に強いものです。今迄此の藥で救はれた全快者から『とても効いた』『お蔭で助つた』と涙の出るやうな禮狀も澤山ありますが、何分堅氣の溝田先生が『なるべく地味に發表して呉れ』と申されますので全快禮狀の發表は御遠慮致しました。（寫眞は溝田先生と天龍堂本院の玄關）

○一服藥は梅毒及梅毒より起る病氣、例へばヨコネ・かんそう・吹出物・惡性ニキビ・拔毛・耳鳴・不眠・めまひ・頭痛・のぼせ・高血壓・動脈硬化・神經衰弱・神經痛・リウマチス・せきずゐ・中風・遺傳黴毒等には無類の良藥で身體に害も副作用もなく、日本人の體質に最もよく合つてゐるから、キ、メは早く、芯からキレイに毒が取れるので非常な評判です。

○一服藥は東京市淀橋區柏木三の三四四天龍堂製藥部（振替東京八六〇四壹番）へ振替かカワセで送金すれば秘密に送ります。藥價は一週間分三圓、二週間分五圓、五週間分拾圓、十週間分拾八圓、送料は内地十錢、其他四十二錢代金引換は廿錢増、尚ほ容體を書いて申込めば體質に合つた良藥を送つてくれます。

淋病消渇に驚く効果

惡性重症にも徹底的

朝晩二回宛の服藥で、丁度セメンで蛔虫を下すやうに、體内の淋菌を尿道から徹底的に追出す世間に類の無い本院獨特の强力な淋藥があります。此れは淋治散と云つて、急性は勿論、到底治らぬと思つてゐた慢性重症でも、服藥後目立つて尿の通じがよくなり急に多量の淋糸が排出され、僅かの間に苦痛が輕快し、淋絲がスツカリ取れるので、全快者は皆驚いて居ります。藥効は實に强いが胃腸をこはさぬのが特長です。淋病消渇こしけの根本療法を望む方は、容態を書いて前記天龍堂製藥部へ申込めば、早速調劑して密送します。

○淋治散の藥價は七日分三圓五十錢、十四日分六圓、二十八日分拾圓、送料は内地十錢其他は四十二錢、代金引換は廿錢増です。特に重症には十圓分が最も德用です。

曲つたきりの右腕 肘の關節炎 日々恢復に趣く今日此頃

埼玉縣浦和市一一六四 渡邊登美子氏報

昨年の五月五日でした。例年の春季大掃除で人手の足りないためつい無理とは思ひながら今まで手もかけたことのない重い疊を持ち運びました。その爲めか翌日より右肘關節部に痛みを覺え始めました。大して氣にも止めずに家事に從事して居ましたが同月十七日頃急に肘の關節が曲つたきりどうにもならなくなつたので、醫師に診てもらひましたら關節炎と云はれ、お藥をいたゞきました。病は進行最中とみえ一進一退遂に激烈なる痛みの爲めどうすることも出來ません。他に人樣のよいと云ふものは皆試みましたが効なく、はては或る方より元通り治るかどうか分らぬなどと云はれ、手は曲つたきり不具者となるのかと本當に悲しまずには居られませんでした。父母のないだけでも困るのにその上そんな體になつてはどうしようかと思ひました。兎に角コルセットはめてもらひ毎日々々淋しい思ひで暮して居る中に某雜誌上で金井成骨丸あるを知り是非服用したいと東京の兄に相談するとすぐに同藥を送つてくれました。私は熱心に服用すると共に金井博士の手當法の本も讀み、一生懸命加療致しました。傍ら月二回レントゲンにも通ひましたが成骨丸併用してから病狀非常によくなり、先生もよくこんなによくなつたねと驚いて居られます。恢復間もない今日此頃厚く成骨丸に感謝して居る者で御座います。

立てぬ脊椎カリエス 歩行出來た時の嬉しさ

臺灣桃園郡龜山庄 陳炯棟氏報

發病してから夜中に時々痛みを感じるのでした。大した病氣でないと思うてその儘治療もせず我慢しました。四五ケ月たつてから步行がすつかり駄目になつたので、これは大變と大騷ぎし臺北〇〇病院に入院しました。レントゲンで調べて頂き始めて腰椎カリエスであると分りました。ギブスベッドを作つて頂き一ケ月後退院致しました。或日某紙上で金井博士の成骨丸の廣告を見付け効くか効かぬか半信半疑兎に角服用してみようと試用を始めました。同博士著手當法の本も讀んで日光浴も勵行し榮養上林檎や魚肉其他の攝取も怠りませんでした。斯かる保養數ケ月後或る日ヒヨット立つてみたら立てるし足も思ふ樣に上げられるので步いてみたら、二三步難なく步けました。其時本當に大騷ぎをしました。でも餘り早く運動して又惡くなつては困ると二三ケ月寢ながら成骨丸の服用を續けました。今日殆ど完全と申してよい程治癒致しました。ギブスベッドの御蔭もあらうし又成骨丸の効も偉大なりと家族一同感謝して居ります。

カリエスや關節炎に對して、金井博士の療法や成骨丸が發表されて以來、全國各地から好評を博して居ります。患者は先づ、金井整形外科病院長金井良太郎博士の著された『カリエスと關節炎の手當法』を一讀されんことを御勸め致します。前記二例の回復者もこれを讀み且つ實行された方々です。御希望の方は東京市小石川區小日向台町二丁目二十七番地鈴木コンパニー宛ハガキに病名記入申込まれると無料一册づつ郵送されます

時局寫眞大画報

海軍陸の精鋭と讃へられ、近くは九江一番乘りに燦たる殊勳をたてし士師喜太郎部隊長の武者ぶりは餘りに有名であるが、このほど海軍省軍事普及部松島中佐は、感激の迸しるまゝに、武漢の敵を屠らずば生きて再び歸らじと渦巻をどる濁流を上る戎衣に月細しと歌へる『士師部隊を讃へる歌』の一篇を贈つた。おゝ我等の歌！と戰線に唱和する同部隊の意氣正に昇天の概！　寫眞はその歌の猛練習と、高らかに合唱しつゝ勇躍行進を續ける勇士たち。

戰線便り

↑凱歌の瞬前！ 肉彈突擊を以て濟源城の城壁を衝くわが決死隊の勇姿！ きらめく銃劍、飜へる日章旗、敵軍幾萬ありとても何ぞ恐るゝに足らん、鎧袖一觸忽ち擊破して、其處に萬歲の雄叫びは炸裂するのだ。

漲る正義の血潮を鐵の肉體に包んで不動の信念に生きる、その名も勇ましき皇協維新隊の勇士たち、戰場の治安は我々の手でと一糸亂れぬ統制と挺身的活動に、市民の信頼は愈々加はるのだ。↓

←鐵をも溶かす酷熱の炎天下も何のその、一望千里の原野を破竹の意氣を以て猛進する蜿蜒たる人馬の大行進！ 目指すは漢口！ 無敵皇軍の進む所正に無人の境！ 草も伏してその武威に戰くのだ。

↑驚破ツ敵機襲來と、はツたと空の一角を睨む勇士の眼！一刻の早期發見は、如何なる戰闘にも優るのだ、百發百中、無敵の威力を以て聞ゆるわが高射砲陣地の緊張ぶりで、この精鋭ありて空の護りの第一線は完璧！

→萬歳○○占據！それお祝料理をこしらへろ！とばかり總出で見事な鯛を料理する○○部隊の勇士の面々。劍を庖丁に天晴れ一流板前の腕を示して、目出たい〱と思はぬ味覺に舌鼓を打つ英雄閑日月の明朗風景。

→支那四億の良民を翻弄せる暴戻蔣介石の斷末魔は既に決定的のものとなつたが、新生支那を高唱し、打倒蔣介石の旗幟も鮮やかにデモ行進を敢行せる南京反蔣大會！

漢口陷落↓目睫にせまる！増水のため濁流滔滔と渦巻くクリークも物かは、たゞ一路漢口へ漢口へと勇猛果敢な進撃をつゞけるわが○○部隊の精鋭！おゝ頼もしきかなこの威容！

廬山と漢口

廬山の中の一山牯嶺は九江の南にあり、巨商富豪の避暑地として有名で、蔣介石の別莊もあり、宛然將軍閥の巢窟の觀があるが、九江よりの途中溪流あり瀑布あり寺院あり、その明媚な風光は流石古來から詩歌に謳はれたことを肯かしめる。

一見歐米都市の如く豪華殷賑を誇る漢口市街の盛觀であるが、その運命は目睫の間に迫つてゐるのだ。一度砲火炸裂するや忽ち戰禍に蹂躪され修羅の巷と化すことを思へば、何人も淚なきを得ないであらう。（寫眞下）

漢口附近の漢水と揚子江の合流する河口を埋めるジヤンクの群、その櫛の齒をひく如き頻繁な出入は海港の感じで、到底河口とは思はれない。このジヤンクの數を見ただけで如何に商取引が旺んであるかが分るであらう。

銃後女性の意氣

→鹵獲せる爆彈？否 これは東京府下北多摩郡神代村の愛國婦人會分會の有志が、出征遺家族慰問のため數寄屋橋橋畔に西瓜の店を開き、銀座マンに呼びかけてゐる男々しき奮鬪ぶりだ。

體位向上と日本精神の涵養に脂粉を洗ひ落して薙刀の猛練習をつづける大阪北新地三百人の藝妓衆で、今板額のこの意氣ありてこそ銃後の護りは全しと云はなければならぬ。↓

↑非常時娘は廢物利用のモンペで行かうと、東京銀座八丁目の家庭防火群では制服にモンペを採用、一日銀座街上でモンペ履き最初の防空演習を試み、勇壯な活躍振を示した。

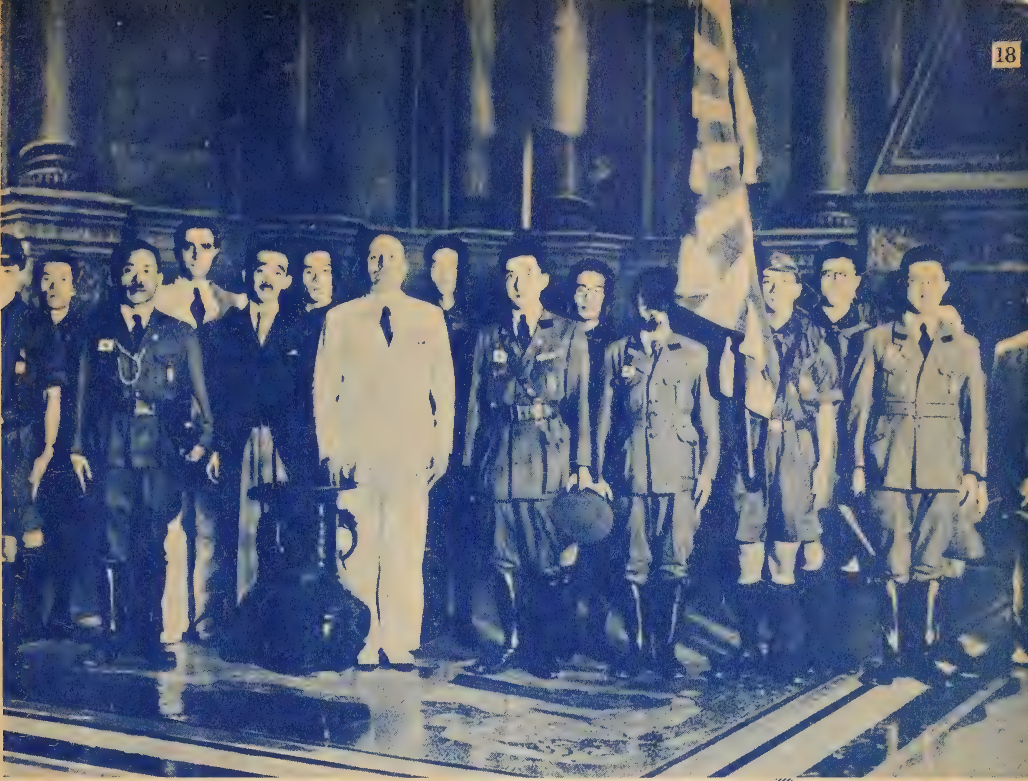
擧國一致 花形もゆく

↑近く展開される漢口の歴史的大會戰を筆にをさめるべくペン部隊の先陣陸軍班の十三名は九月十一日颯爽とその壯途に就いたが、それに先だち一行は明治神宮に參拜して、皇軍勇士の武運長久と壯擧の完成を祈願した。寫眞は祈願をへし一行の凜然たる勇姿。(中央ヘルメット帽は久米正雄氏、その左川口松太郎氏、右佐藤惣之助氏)

東京大相撲無敵双葉山の一行百餘名は八月二十七日午後九時三十分着の列車で北京正陽門驛に到着したが、「巨人双葉山來る！」の快報に、市民の人氣は正に白熱、さしもの巨人も潮の如く押寄せる大群集の包圍に合つて、黒星以上に面喰つた。寫眞は驛頭の双葉山。↓

『いつ應召しても後顧の憂ひのないやうに』と新橋の名妓君勇こと田中都美子(三〇)さんと結婚した東寶の映畫俳優岡讓二こと中溝勝三少尉は宿願叶つて名譽の應召。盛大なファンの歡送を受けて、軍服姿も凛々しく勇躍原隊に入つた。中央が岡讓二少尉。↓

↑オリンピックに出場見事日章旗をかゝげし棒高跳の西田修平選手は、このほど應召の名譽に浴したが、その壯行會は二十五日夜早大O・Bラグビー部員の資格で盛大に催された。スポーツで鍛へし西田君の鐵腕は、必ずや火花をはなつて敵軍を惱ますことであらう。



防共戰の握手

地球上より赤魔を驅逐すべしと、防共の一線に結ばれし日獨伊！我が日本少年團を代表して渡伊せる少年團使節は、去る八月四日堀田大使に伴はれて、ムツソリーニ首相をベネチア宮に訪問、重大使命を果せば、盟邦ヒツトラー・ユーゲントは八月十七日歴史的第一歩を東京驛頭に印し、玆に日獨青年は永遠不動の固き握手を交し、協同の力こそは如何なる武器に優るの信念を如實に示した。寫眞上は日本少年團使節、下は東京驛頭のヒツトラー・ユーゲントの一行。

青春男子は一讀せよ！

近代醫學の生める發明

醫學博士五十餘氏推奨

性の健全は人生最大の使命を果たす素因であるにも拘らず、不健全に陷つた人が世に少くない。そのため可惜青春期を煩悶懊悩の裡に過すばかりか、腦力體力衰へ男性的進取勇猛の氣性に缺け、終に人生の落伍者となる。

この恐るべき性的缺陷に對する療法の起原は、遠く希臘の昔醫聖ヒポクラテスによつてわづかに動物臓器の投與に始まり、越えて近代『内分泌説』に基く**ホルモン**補給療法の唱へらるゝ中に、忽然としてその適應療法が米國醫科大學教授**ホリツク**博士によつて創見發表せられ、これを應用せる發明療器が即ち**『ホリツク療法器』**である。

本器と原理を同じうする物理療法器は、我國の盟邦たる醫術の先進國獨逸や人口增加率高き伊太利に於ても飛躍的に發展を遂げ、大いに發賣せられて居る。ホリツク療法器の性的缺陷に對する効果の偉大なるは、既に醫學博士五十餘氏の齊しく賞讃推奨せらるゝに徴して明かである。

然も個人の秘密自療に適し、使用安全簡易一日一回十分間の應用で漸次効果現はる。既に實驗者數十萬を算し、臨床醫家も盛んに賞用せられ、海外輸出も益々盛んである。（なほ詳細は無代進呈の説明書を見られよ）

効果不完全のニセ物あり、必ずホリツクを。

登録商標 ホリツク療法器 金六圓

送料廿五錢植民地五五錢代金引換十五錢增

本所特製 强壮内服薬 ポルチヨン

七日分一圓七十錢半月分三圓廿錢一月分六圓

送料 各十五錢植民地四十二錢（各別名密送）

無代進呈 圖入説明書 性の新知識

◇誰でも知らねばならぬ性に關する新知識

◇**ハガキ**お申込次第別名で秘密に送ります

東京新療法研究所

東京市芝區神谷町十八の二

電話芝（三一三一番 三一三二番）

振替東京七七三九番

ぜん息

發作でお惱みの方は

先づ五十錢を投じて

講談社の『喘息エキス』試用分をお試し下さい、そして少しでもこれは良いと思はれたら續けて下さい、今こそ救はれる時です。

全治輕快率は全實驗者の九割を占め、喘息藥中第一の信用と賣行を誇る『喘息エキス』の効目に失望や後悔はありません。御信頼の上スグお求め下さい。(信用ある藥店にあり)

肖像畫

(描き上り寸法タテ一尺七寸・ヨコ一尺三寸)

一流大家の責任揮毫

お申込みは是非ともお早く願ひます!!

執筆者はいづれも東都で一流と定評ある大日本肖像美術院同人の先生方で、その獨特の揮毫法は絶對他の追隨を許さぬ素晴しい出來榮えで、黑コンテ仕上げにより永久不變絶對褪色の心配はありません。

▲特別揮毫料

(高級美術額縁とも)十圓

荷造送料(内地七十五錢 其他一圓)

○原稿寫眞はどんな小さい、色の薄いもの、又は大勢ご一緒にお寫しになつたものからでも結構です。(製作期間は約二週間です)

○服裝の變更はご自由、但し紋章不明の際は略圖をお添へ下さいませ。

◎お申込は―東京市小石川區音羽

大日本雄辯會講談社代理部

(振替東京六六二九)

高速度滋養料

どりこの

疲れた身體に

精氣を與へる

人間體力の根源、葡萄糖、果糖、アミノ酸を主成分としたおいしい滋養料、長期戰下、體位向上に御愛用下さい。

藥店食料品店にあり。

いぼ 魚の目 ホクロ

代理部推奨の

安全除去藥

ポロリと取れて

痕が殘らない!

『**ヒドロアミーン**』は劇藥ではありませんから、どんな所にできた**いぼ**や**ホクロ**にも安心してお用ひいただけます。マッチの軸でほんの小量を患部につけておけば知らぬうちに取れて見にくい痕を殘しません。

◎**藥價**(一瓶)**一圓** 送料内地十錢其他四十二錢

▲お註文は―東京市小石川區音羽町、大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九)へ

吉川英治氏畢生の大著

親鸞

果然讀書界を席捲!!

近頃かういふ本で、之程面白く之程話題に上つた本はない。

高僧傳といへば、抹香臭い、自分たちの生活感情とかけ離れた感じが深いのに、この本の面白さはどうだ！恐しい迄の魅力はどうだ!!

一度讀み出したらやめられない本である。

さすがに、巨匠吉川氏が十五年の大構想の下に、熾烈なる熱情を注いだ大力作だけある、と讀む者悉くが驚倒する。

奢る平家の跋扈と、暴政と、そしてそれが何時崩壊して火を噴くかも知れない無氣味な地熱が感ぜられる時、即ち、源家の武士が諸方に起たんとする世情騷然たる時、源氏の武士的な血と、大宮人の優雅な血を繼いで世に生まれ出た親鸞が、時代と人との様々な迫害の中に、道を求めて苦業を續ける赤裸の姿。外から襲ふ暴虐の手、内から襲ふ煩惱の惡魔と、如何に闘ひ、如何に苦難し、如何に道を求めて精進したことか。その情熱は眞に烈火の如き烈しさをもつて、讀者の胸を燒きつくす。

これぞ、源平盛衰の時代相を背景に、聖僧波瀾の生涯を描く豪壯絢爛たる壓巻！

四六判六二〇頁 函入絹装豪華本 **二圓五十錢**（送料 內地十四錢 其他二十錢） 東京小石川 **大日本雄辯會講談社** 振替東京三九三〇

神經衰弱と誤り易い
梅毒の症狀と其手當
放つて置くと頭腦を冒される

ベルツ博士の溫容

原因がどうしても判らぬといふやうな、所謂神經衰弱症は、その過半が梅毒、特に潜伏梅毒に依るもので、梅毒中最も油斷のできぬのはこの種の梅毒ではじめの內は、皮膚面に吹出物や腫物が出沒したり、頭髮が脫けたり、咽喉を害されたりする丈けですが、愈々梅毒が體內部に潜入休息して、潜伏狀態になると、次第に梅毒とは信じられぬ樣な、即ち神經衰弱症に陷り、頭痛や眩暈を始め、不眠、肩凝り、疲勞、貧血、便秘、動脈硬化、高血壓等々さまざまな病狀が現れて來て、遂ひには梅毒が血液の他に腦脊髓に及び、脊髓癆といつて手足の運動が全く利かなくなり、更に腦の中樞を犯されて馬鹿や氣狂ひになるのです。最近特に知識階級の人に、斯うした梅毒に惱まされ、全く再起出來ぬ癈人の多いと云はれるのも、皆此の潜伏梅毒の仕業で、その恐ろしさは筆にも盡し難い程の危險があるのであります。

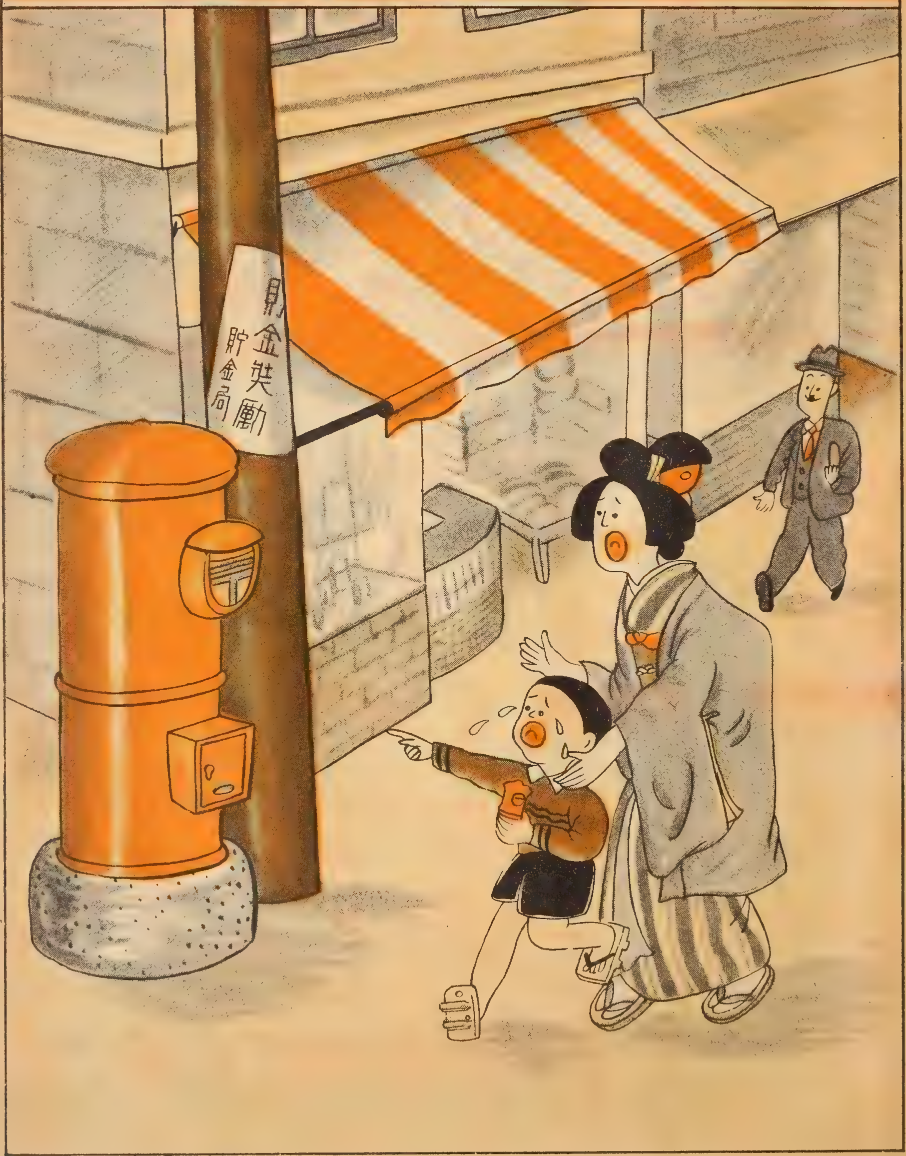
然し此の樣な危險極りない梅毒も、手當さへ良ければ完全に治す事が出來るのであります。それには專門醫の治療を受けるか、或は梅毒治療の內服藥として十數年來各方面から好評を頂いて居るベルツ丸を服用するかして全身の毒素を體外に排泄せしめる事が最も大切であります。殊にベルツ丸の服用は、血液や腦脊髓液等に巣をくふ梅毒菌を掃滅し血行や代謝機能を旺盛にします。從つて胃や腸の働きがよくなり、食慾が進み、體重を增し、全身的に活力を加へて來ますから、眞に元氣を回復して無毒健康體となる事が出來るのです。梅毒、胎毒、體の毒、皮膚諸病、吹出物、腫物、ニキビ、しつ毒、ひえ毒、遺傳梅毒、腦梅毒、脊髓癆、動脈硬化、便秘等總て梅毒から來た諸病に惱む方は、是非本劑に依つて完全な治療を斷行して頂きます。十餘年來多くの體驗者に依り、既に實効を認められてゐますから、その說明は略しますが、兎に角、正しき藥劑は正しき効果を齎らします。梅毒は、案外に治りも速い代りに又惡化も速いのです。從つて前述のやうな病狀に惱む方々へは一日も早く梅毒治療の內服藥として信用あるベルツ丸の服用を切に御奬め致します。

因にベルツ丸藥價は廿日分三圓、卅五日分五圓、七十五日分十圓、百六十日分廿圓、二百六十日分卅圓、送料各十五錢海外四十二錢。直接本舖東京市日本橋區濱町三丁目鈴木日本製藥社（振替東京百五番）又は東京市小石川區音羽町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ御申込あれば急送致します。

富士漫画大笑館

國策へ坊は大きく共鳴し

『ウツーンこんな小ちやな貯金箱いやだー、あれ買つてよー』



清水はじめ

無意識なんですが

杉柾夫

碁で仇討

1
一體いつ排つてくれるんだい
もう少しお待ちを
2
いや 待たん
絶對に待たんツ
3
どうですお待ちになつても何んですから一局行きませんか
4
では一手合せと行かう
5
アツ
待つてくれ
一寸待つてくれ
6
いや待たん
絶對に待たんツ
M.HIROSI

森比呂志

→日本の雀

「これ倅たち、どんなに腹が減つてもこの田のお米は食べるんぢやないぞい』

清水はじめ

→張りに行つた効果

「バツトが賣切れなんですか。僕がお宅から
買ひためたのをお店へ貸して上げませう』

小泉紫郎

↑いづこも同じ食慾の秋

『サンマの煙幕で腹ペコ支那兵大擧歸順』

永井保

かはい丶搜索願ひ ↓

『おまはりさーん。僕達の〇〇部隊の凸凹上等兵が敵情偵察にでたまゝ迷子になつちやつたんです。探して下さい』

野口孝司

月見の蔣介石

『わあツ日本軍の荒鷲隊がこゝまできたあーツ』

『閣下おあわてなさるな、あれはカリで御座います』

志村つね平

物眞似師の失敗

牧とらを

敵のトーチカ打破り

野口孝司

我が家の健康法
清水はじめ
〇お爺さん
『ラヂオ體操が一番ぢや、ぢやけれど年寄の爲に伴奏を義太夫の三味線でやつてもらへんものかの――』
一、二、三、四
〇子供達
『僕達はハイキングが一番すきさ、だつてお菓子を澤山持つて行かれるんだもの』
〇お母さん
お父さん曰く『健康にいゝかも知れんが……時々手強く實演されるんでね――』
〇お父さん
『これエス公!! この散歩は犬がお供か俺が犬のお供か分らないわい』
〇女中さん
『ハア俺らア特別の健康法なぞいらねえだ……あんなこたあ仕事の閑な人の閑つぶしだあね』

十一月繪ごよみ
明治節＝三日
新嘗祭＝二十三日
國民精神作興詔書記念日＝十日
後の月＝四日
青年記念日＝二十二日
浮雲の紅葉に晴るゝ尾上かな（白雄）
黄菊白菊皆恙なき一家中（井蛙）
初冬の狹霧に小さき灯哉（左衛門）
立冬＝八日
千歳飴嬶へも母は何かやり（夏野）
七五三祝＝十五日
大熊手武運長久などもあり（艶花堂）
酉の市＝一日、十三日、二十五日
武運長久
ソブン

長篇
讀切

戀の十字火

廣津和郎

富永謙太郎畫

一

『伸ちやん、郵便來なかつた？』

『ううん、來なかつたよ。』

『さう。』

錢湯から歸つて來た登美枝は、タオルと石鹼とを鏡臺の上に載せて、毎日の事で化粧にかかつた。あくどい厚化粧をして出かけなければならないのが、つくづく億劫であつた。

『姉さん、今日は氣分はどうだい？』

明日の算術の宿題をやつてゐた伸太郎は、姉の方へ振向いた。姉が誰からの手紙を待つてゐるかが、幼い伸太郎にもよく解つてゐた。そこで何か姉をいたはつてやらずにゐられなかつた。

『ああ、大分好い方よ。伸ちやんにも心配をかけて濟まないわね。』

『そんな事あるもんか。――さう云へば、姉さん胃は快くなつたらしいね。この頃餘り嘔吐ないやうぢやないか。』

『……？』登美枝はぎよつとして、鏡に映つてゐる弟の顔を探るやうに見た。隨分氣をつけてゐたつもりだけれども、伸太郎につはりを氣づかれてゐたのだらうか？

けれども鏡の中の弟の顔は尋常六年生らしい無邪氣さであつた。唯姉の胃の惡さを心配してゐる單純な表情に過ぎなかつた。

ほつとして、

『さうよ。土地が變つたので胃腸に障つたのよ。だんだん馴れて來れば丈夫になつてよ。』

さう何でもなささうに答へたものの、頬のやつれが自分でも淋しかつた。この十月で四ケ月目になる。眼の下の隈や血色の惡さは、紅白粉で糊塗せても、氣になるのは立ち眉毛であつた。

『僕思ふんだけれどねえ、姉さんにはやつぱり酒場よりはダンス・ホールの方が向くんぢやないかな。上海時分のやうに、さうした方が身體に好いんぢやないかな。』

『まあ、伸ちやんたらませた口を利くのね。おほほほ。――姉さんもさう思つたんだけれどね、でも、東京ぢや今新しいダンサーは入れない事になつてゐるんだつて。警察が許可しない方針なんだつてさ。』

『ふうむ。』

併したとひダンス・ホールに這入れたにしたところで、この身重の身體で踊れるだらうか、と思ふと、登美枝は又しても淋しい心持に襲はれて來るのであつた。

暫く默つた後で、何を思出したのか、伸太郎は再び姉の方を振向いた。

『あのね、今日學校で、中學に行くなら府立一中の入學試驗を受けろと云つたよ。僕と他に三人だけ、特に受持の先生が一中に受けさせたいと思ふんだつて。――府立一中に一人でも多く這入れると、學校の名譽なんだつて。』

『おお、さうだね。來年の三月は卒業だね。もうそろそろ中學の事を考へて置かなければならないわね。』

又一つ新しい問題が心の重荷になつて來た、と登美枝は思はないわけに行かなかつた。

事變で上海から東京に引揚げ、尋常六年の第二學期から今の小學校に轉校したので、まだやつと一ケ月位しか經つてゐないのに、伸太郎の出來の好さは、早くも受持の先生に注目されてゐるのである。

それを思ふと、どうかして中學に入れてやりたいと思ふのであるが、併し今のこの身體で、いつまで働けるだらう。酒場に通へるのも精々後二三ケ月、それ以上は人目に隱せなくなるに違ひない。――さうなつたら、中學どころか、伸太郎と二人でどうして生活して行つていいかといふ見當さへつかない。その上やがてお産の日が近づいて來る。どうしてその準備が出來るだらう？

登美枝は思はず溜息した。

『姉さん、何も心配して呉れないでもいいんだよ。僕、中學には行きませんて受持の先生に答へて置いたんだから。』

『まあ、お前……』

『ほんたうだよ。僕何も姉さんに苦勞させてまで中學になんか行きたかあないんだ。』

さう云つて、急に元氣よく勇み立ちながら、

『僕働くつもりなんだよ。姉さんは知らないだらう。事變以來、少年の就職口が澤山あるんだぜ。だから、尋常を卒業したら、僕世の中に出て行つてうんと働いてやるんだ。』

『だけれどね、お母さんがお亡くなりになる時、伸太郎を立派な人間に育てて呉れつて、わたしの手を握つて、あんなにお頼みになつたんだし、わたしにしたつて、どうかして伸ちやんにお父さんのお名を辱しめないやうな人になつて貰ひたいと思つてゐるし……』

『だから僕が立派な人間になつて見せれや好いぢやないか。中學や大學に行かなくたつて、いくらでも立派な人間になれるよ。學問がしたければ、働きながらでも出來るよ。』

登美枝はこの健氣な弟の顏を、頼もしさうに見戍つた。何といふ利口な子だらう。――さう思ふと、尚の事、何とかして上の學校にやつて、學問をさせてやりたかつた。

それにつけても、心に浮んで來るのは英一の事であつた。――あの人さへゐて呉れたら、伸ちやんを上の學校にもやれるし、自分も今のこの身體の事で、何もこんなに煩悶しないでも濟むのに！――

登美枝は再び微かに溜息した。

二

わが國の大陸政策に關心を持つてゐる人ならば、或は山川伸吉の名を記憶してゐるかも知れない。表面に名は出さなかつたが、多年對支工作の裏面に働いてゐた民間側の志士で、今度の事變で、皇軍が北支に、中支に破竹の勢で突進しつつある事も知らずに、氣の毒にも昭和十一年――つまり事變の始まる前年の春、ふとした病がもとで、上海に客死してしまつたのであつた。

この山川伸吉がこの登美枝、伸太郎の二人の姉弟の父であつた。皇國のために一身を捧げて、私利を顧みなかつた廉潔な人だつたので、死んだ後に遺産といふものが何もなかつた。

そこで、女學校を卒業して間もない、その時二十であつた登美枝は、病身の母と幼い弟とを背負つて、敢然として上海でダンサーとして働き始めたのであつた。

彼女がダンサーになつて間もなく、母も亦持病の腹膜炎が昂じて、『どうか伸太郎を立派な人物に育てて お呉れ。』といふ一言を殘して、父の後を追ふもののやうに死んで行つた。

二人は全く寄邊ない孤兒になつてしまつた。
初心でもあり、美しくもあり、それに高潔な父を持つた素性は爭はれず、他のダンサーと比較にならない氣品が隱せなかつたので、登美枝は忽ちそのホールの人氣者になつた。
さうして彼女に通ひつめて來る澤山の邦人青年の間に、梅野英一がゐた。東大出の法學士で、滿井物産の上海支店に勤めてゐた。父は東京で相當有名な實業家であつた。
誰も賴るもののなかつた登美枝は、一目見た時から、學生時分ボートの選手であつた立派な體格の英一に、賴もしさと慕はしさとを感じた。
二人の戀は急速に燃え上つた。初めて會つたのは二月だつたが、五月にはもう人目を忍ぶ仲となつてゐた。英一はこの初心なダンサーを、唯享樂の對手として考へるやうな浮薄な青年ではなかつた。いつか機會を見て、東京の父の許しを得て、正式に結婚する事を彼女に誓つてゐたし、又實際にその誓ひを貫かうとする眞實と熱意とを持つてゐた。
ところが二人の戀愛が始まつて間もなく、それは七月の半ばであつたが、突然英一は東京の本社詰に轉勤を命ぜられた。
『暫く會へなくなるのは淋しいけれどね、併し親父に話すのは丁度好い機會だと、僕は寧ろ喜んでゐるんだよ。――屹度一日も早く親父の許しを得て、東京に呼寄せるやうにするから、暫く上海で辛抱してゐてお呉れ。――これはそれまでの記念の品だよ。これを僕だと思つて、肌身離さず持つてゐてお呉れ。』
出發前に最後の一夜の名殘りを惜んだ時、英一はかう云つて、一つの小さな桐の箱を彼女の手に渡した。中には十八金のメダイユが這入つてゐて、それにいつぞや二人が散歩の折に或寫眞屋で撮つて貰つた二人の寫眞が、小さく縮寫して篏め込んであつた。
『まあ、嬉しい！』
登美枝はそれを胸に抱きしめた。――そしてその時から彼女はそのメダイユを戀人と思つて頸にかけ、四六時中肌身を離さなかつた。
それは彼女の守り神であり、希望と幸福の標象であつた。
ところが、登美枝姉弟が東京に行ける時は意外に早く來た。
といふのは、英一からの呼び迎へが早く來たのではない。さうではなくて、二人の戀愛の最中に突如として起つた北支事變か、八月になると中支に飛火して、この上海が戰亂の巷となつたからである。
女子供は先に引揚げるが好いといふ事になつたので、陸戰隊が僅かな兵力で敢然として敵の大軍を引受けて戰ひ始めた頃、――丁度支那の空軍が上海に爆彈の盲投下をした日から二日目、登美枝は仲太郎をつれて、引揚げの汽船に乘つた。……
東京驛のプラットフォームに迎へに來てゐる筈の英一の姿を探しても見つからなかつた登美枝は、はやる心を抱いて、改札

口を出ると、構內の公衆電話を滿井物產の本店にかけて見た。

彼女はあぶなく卒倒するところであつた。といふのは、梅野英一は三日前に突然召集を受けて、出征したといふ返事だつたからである。――彼女の上海引揚げと行き違ひに、英一は支那に向つて出征してゐたのである。

併しその打擊は僅かな間であつた。上海で陸戰隊のあの苦鬪を見た記憶のまだ新しい登美枝は、自分の悲しみなどに耽つてゐる秋ではないと、勇氣を振ひ起して、今のアパートに弟と共に住ひ、生活と戰ひながら英一の凱旋を待つつもりで、酒場銀（シルバー）に働くことになつたのである。

彼女が身體の異狀に氣がついたのは、それから間もなくであつた。

三

ドアにノックの音が聞えて、

『今日は、登美枝さんおいでですかい？』

聲と共に美濃辰が顏を出した。カツフエエやバーの女給の間をまはる擔ぎ呉服屋であつた。にやにやとしたその顏を見ると、登美枝は眉をしかめた。――今の店に這入るについて、店のマダムの紹介で、登美枝はこの美濃辰から着物を拵へてゐた。その着物代をまだ拂つてない上に、彼女は別に三十圓程現金でこの男に借りてゐた。呉服を賣りながら、高い利子で、女給達に小金を貸しつけるのが、美濃辰の商賣であつた。

『私が這入つて來たつて、登美枝さん何もさう顏をしかめなくつたつて好いでせう。この私だつて、借金の催促ばかりぢやなく、稀には好い話を持つて來ないもんでもありませんや。』

そんな話を、弟に聞かせるのが厭だつた登美枝は、

『伸ちやん、あなた戶外に行つて遊んでらつしやい。』

『うん。』

伸太郎はむつとした顏を美濃辰の方へ向けながら、でも姉が自分がゐるので困つてゐるのを察すると、

『さうだ。僕はまだ今日は新聞を讀まなかつた。事務所の小父さんとこに行つて、新聞を讀んで來らあ。』

さう云つて、部屋から出て行つた。

『利口さうな弟さんですね。』

美濃辰は伸太郎の後姿を見送ると、お世辭らしくかう云つたが、直ぐ登美枝に向つて膝を乘出して、

『登美枝さん、時に御都合は如何です。私は何も催促がましい事は云ひたかないんですがね。何しろ小資本でやつてゐるもんで、そろそろ冬の仕入れをしなけれやなりませんし、全く金が遊んでゐるわけではないんでして。』

『解つてるわ。解つてるわ。この月末には屹度どうかしてよ。』

『先月も月末にどうかするてえんでお待ちしたんですが、それ

が今月になつちまつたんで。――もうかうなると、私の方も待てないんですよ。今日は何とか片をつけて頂けないでせうか？』

『今日つてつても、今どうも出來ないのよ。』

上海時代には洋裝ばかりしてゐたので、酒場銀のマダムの好みで、和裝をしなければならなくなると、登美枝は半襟から草履から一切のものを新しく揃へなければならなかつた。それで美濃辰に着物の外に現金の借金までしなければならなくなつたわけであるが、

併し事變以後のさうした社會の不景氣の上に、まだ馴染客を持たない彼女は、なかなか思つた通りの收入を得られないのであつた。

『どうも出來ないぢや困りますね。私だつて出來ない、さうですかい、で引退つてゐたんぢや商賣になりませんからね。慈善事業のつもりで、擔ぎ吳服をやつてゐるわけぢやないんでしてね。』

煙管を出して、煙草を吹かしながら、ねちねちした調子で云ふ美濃辰の言葉には、世馴れぬ登美枝の胸をチクリチクリと刺す皮肉と薄氣味惡さとがあつた。

『ほんたうに濟まないと思つてゐるわ。』

『濟まないで澄まし込まれたんぢや、私の方が濟まないんで……』

『……』

登美枝は返答の言葉もなく、うつむいてしまつた。

美濃辰は困惑して俯向いた登美枝の樣子を暫くぢつと見てゐたが、時分はよしとでも思つたのか、急ににやりと笑つて、聲までも一變して優しく猫撫で聲で、

『と云つて、私は何も登美枝さんを苛めに來たわけぢやな

いんですよ。あんたが渡り者の阿婆摺女給さんか何かなら、私や出る處に出てでも、貰ふものは貰ひますよ。だけれど、あんたといふ人が私にやよく解つてゐるんだ。それで大いに同情してるんだが、實は銀のマダムも苦勞人でね、上海からの避難者だてんで、特別あんたに同情してるんですよ。……それで昨日マダムが加田さんに話したんですつて。あの加田子爵を登美枝さん知つてるでせう？』

『ええ。』

登美枝はいつでも一分のスキもないやうなハイカラな恰好をして店にやつて來る加田子爵の姿を思ひ浮べた。男にしては厭味な位、始終髮を撫でつけ、顏を光らしてゐた。

『あの加田さんていふのは、華族さんの若樣だけあつて、實に鷹揚なよく出來た人物でしてね。マダムからあんたの事を聞くと、お金に困つてゐるなら、自分が出してやつてもいいつて、から仰つしやるんですよ。』

『だつて、わたしそんなに理由もなくお金を出して頂く法なんて……』

『登美枝さんの事だから、多分さう來ると思つた。そこですよ。私達があんたに感心するのは、それだから、餘計また同情もするんですよ。他の女給さんなら飛びつくところだ。それを理由もなくお金を出して貰ひたくないといふんだから、實に見上げたものですよ。』

美濃辰は調子づいて、額を輕くぽんと叩きながら、

『マダムもあんたの氣質をよく呑込んでゐるので、ただお金を出して貰ふつたつて、あんたが承諾する筈はないから、自分が證人になつて、加田さんから借りる事にしたらいいつていふんですよ。――つまり、加田さんから借り替へて、私の方を片付けたが好いつていふんですよ。――あつははは、マダムはあんたにも同情してゐれば、私にも同情して呉れてるんですよ。私が小資本で苦しいつてえのを、よく知つてるもんですからね。』

『…………』

『そこで、一寸私と一緒に行つて頂きたいんで。』

『何處に行くの？』

登美枝は脅えた顏をした。

『實はマダムと子爵が待つてゐるんですよ。登美枝さんに來て貰ふやうにつて、私を使に寄越したんですよ。』

『…………』

『え、かうなれや、どうしたつて行つて貰はなけれやなりませんよ。――若し行つて貰へないつて云ふなら、因業な事を云ふやうだけれど、五十圓の呉服代と三十圓の御立替と利子六圓と……八十六圓耳を揃へて、今直ぐ拂つて下さい！』

急に烈しい調子でズバリと云ひ放つた美濃辰の顏を、登美枝は困惑した眼で振仰ぎ、默々としてうつむいた。

四

『伸ちやんは子供の癖に感心に新聞を讀みたがるね。一體何を讀むんだい？』

アパートの管理人は、テーブルに向つて帳簿を整理してゐたが、一段落ついたと見えて、ぱたんと帳簿を閉ぢ、耳に挾んでゐたバットの吸ひかけに火を點けて、伸太郎を振向いた。五十五歳で孫も子もないこの爺さんは、伸太郎を可愛がつて呉れた。

『うん、いろんなものを讀むんだよ。』

事務所の奥に三疊の疊敷きの部屋――管理人の寢る部屋がある。そこでこの事務所に來る幾つかの新聞に、伸太郎は片つ端から眼を通してゐた。

先づ最初に見るのは名譽の戰死傷者の名であつた。未來の義兄になる人と姉から聞いてゐるので、若しや梅野英一の名がその中にありはしないかと、胸を躍らしながら探すのであるが、ないと解るとほつと安心して、それから皇軍の進軍の跡を地圖と照らし合はせて見、そして最後に求人廣告欄を見るのであつた。――尋常小學を出たらほんたうに世の中に出て働かうと思つてゐるので、自分に向きさうな求人廣告に始終氣を配つてゐるのである。

ぎつしり詰つた三行廣告欄を見てゐる中に、ふと次の廣告に眼が留つた。

『上海ノ山川登美枝サン、急用アリ、至急來社ヲ乞フ、本社政治部井上』

おや、姉さんの事ではないだらうか。上海の山川登美枝！　上海の……屹度姉さんの事に違ひない。——何の用だらう？

それは東都毎日新聞であつた。

『小父さん、東都毎日新聞て何處にあつたつけね？』

『東都毎日？　有樂町だよ。此處から歩いても幾らもないよ。東都毎日に何か用事でもあるのかい？』

『うん、一寸……小父さん、電話借りるよ。』

『ああ、好いとも。』

姉が大分前、呉服屋と一緒に出かけたのを知つてゐるので、もう酒場に行つてゐるかも知れないと思つて、電話をかけて見た。まだ來てゐないとの事であつた。——何處かで買物でもしてゐるのかも知れない。姉の出かけない中に氣がつけば好かつたのに、僅かなところで間に合はないのは惜しかつた。

でも、『至急』とあるのが仲太郎は氣になつた。五時には姉が出勤する筈だが、五時ではその井上といふ人が歸つてしまふ時刻ではないだらうか。……事務所の柱時計を見ると、四時十分であつた。

『小父さん、新聞ありがたう。』

さういふと、仲太郎はいきなり事務所から飛び出し、自分の部屋に駈け上つて、學帽を被り、再び階段を駈け下りて來た。

どんな用事か、姉の代りに、自分がその井上といふ人に會つて見ようと思ひ立つたのであつた。

五

マダムと美濃辰とが、何氣ない顏をして出て行つたきり、いつまで經つても戻つて來ないのを見ると、態と二人が席を外したのである事が、登美枝には解つて來た。

まんまと奸策に引つかかつたわけである。

火鉢の櫻炭の上に、借用證書が薄黑い灰と化したのを、登美枝はぢつと俯向きながら眺めてゐた。彼女の膝の上には呉服物の代金受領書が載つてゐた。——八十六圓の金を拂つて、美濃辰から登美枝の借用證書と呉服物の代金受領書とを受取ると、加田子爵は『こんなものは燒いた方がいい。』と云ひながら、借用證書は火にくべ、『これは其方に取つて置き給へ。』と受領書は彼女の膝の上に投げて寄越したのである。

『さう固くなつて呉れちや困るな。これ位の事は何でもないんだから。こんな事で君のやうな人が苦しむなんて無意味なんだから。これからは何か困つた事があつたら、いつでも僕に相談して下さい。僕は君のためなら、及ばずながら何でもしたいと思つてゐるんだ。兎に角、一つ僕の盃を受けて呉れ給へ。』

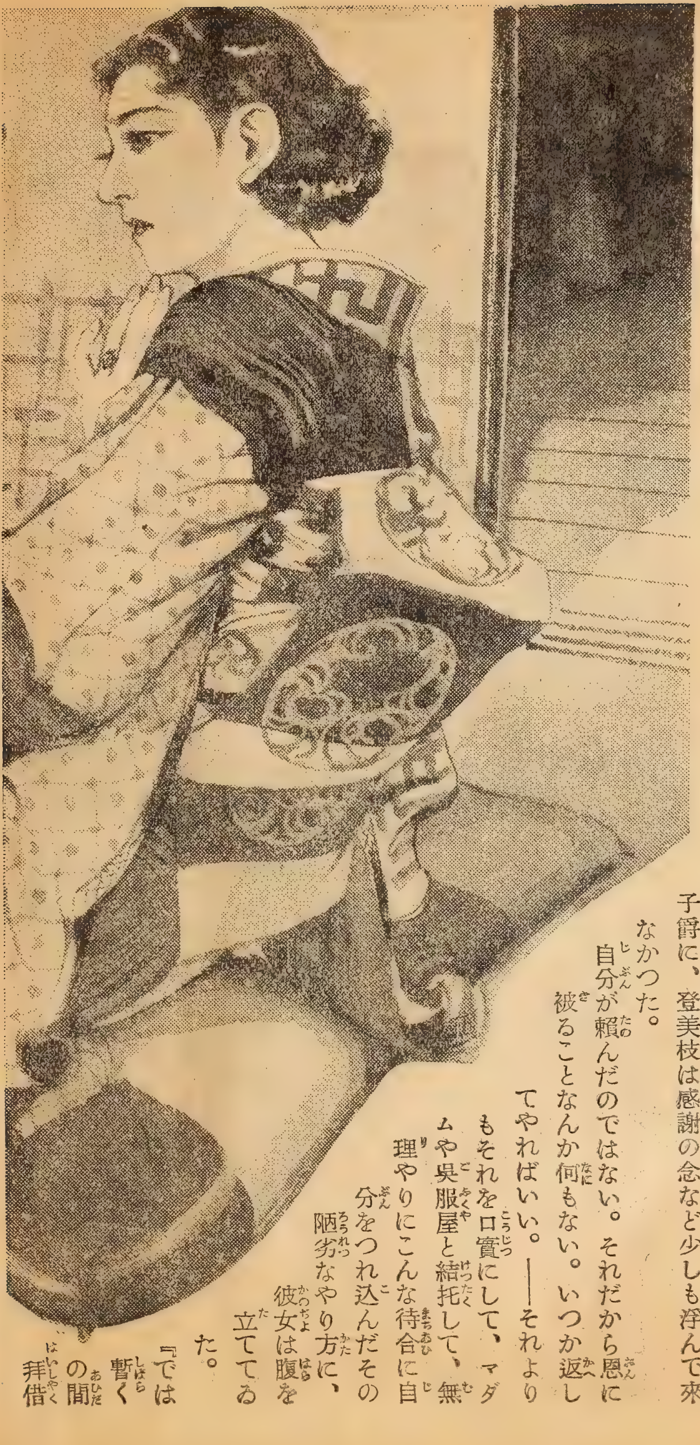
若い子爵の加田政美は、紫檀の茶卓臺に片肘をつき、大分醉の廻つた陶然とした眼付で、登美枝の身體を舐めるやうに眺めながら、彼女に盃をさした。

『わたくし不調法でございますから。』

『あつはは、酒場に働きながら不調法はなからう。さう固くなつて居つては話が出來んから、一杯だけ受けて呉れ。』

『…………』

『何でも君には今度小學校を出る弟さんがあるさうだな。その弟さんを上の學校にやるについても、僕は相談に乗らうと思つてゐたのだ。――女の手一つで、今の社會を乘切つて行かうといふのは、なかなか大變だからね。』



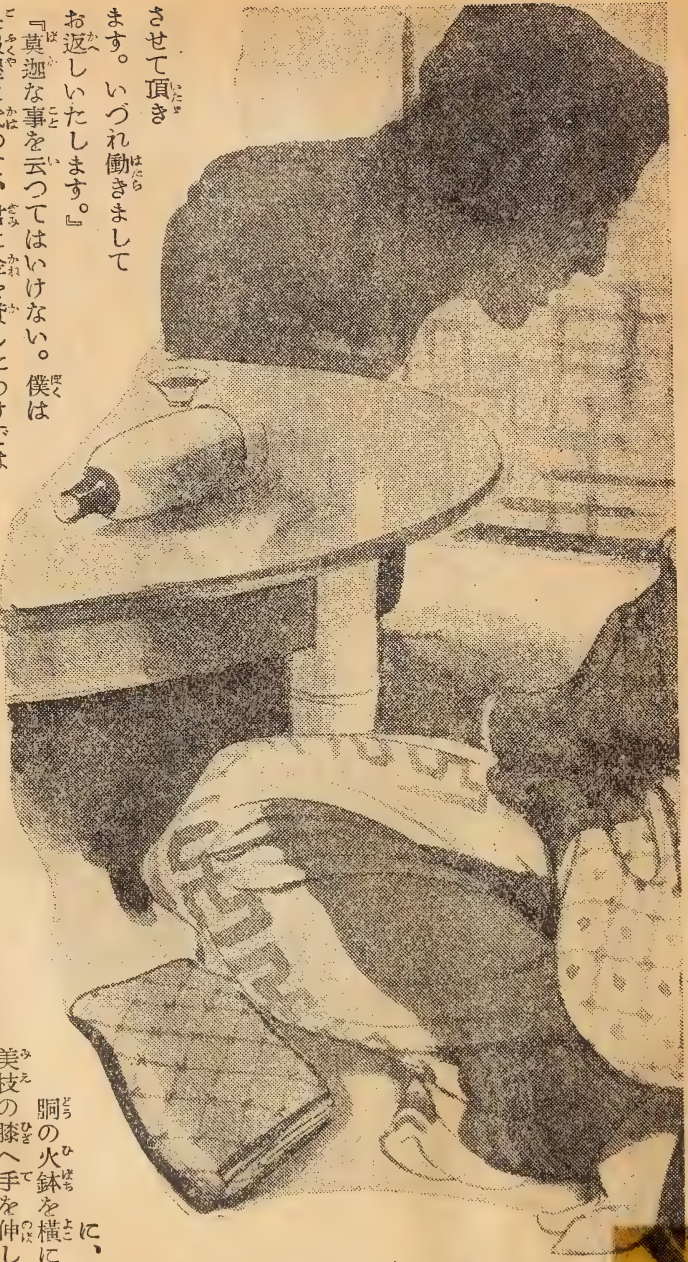
『…………』

自分が拒んだのに、勝手に呉服屋に借金を拂つて呉れたこの子爵に、登美枝は感謝の念など少しも浮んで來なかつた。

自分が賴んだのではない。それだから恩に被ることなんか何もない。いつか返してやればいい。――それよりもそれを口實にして、マダムや呉服屋と結托して、無理やりにこんな待合に自分をつれ込んだその陋劣なやり方に、彼女は腹を立ててゐた。

『では暫くの間拜借

させて頂きます。いづれ働きましてお返しいたします。』
『莫迦な事を云つてはいけない。僕は呉服屋に代つて、君に金を貸したわけではないよ。唯君のやうな人が、ああいふ悪辣な奴に苦しめられてゐるのに同情しただけだよ。何もさう固くなつて禮など云ふには及ばんことだよ。』
『それでは、今日はこれで失禮させて頂きます。』
『なに、歸る？』



『はい、もう御店の時間でございますから。』
『時間なんぞは構はんよ。マダムに先刻少し君を借りると云つといたんだから。――もう少しゆつくりして行つて呉れ。』
云ふと同時に、加田子爵は桐胴の火鉢を横にずらして、登美枝の膝へ手を伸した。
『悪戯をなすつてはいけません。御身分にかかはりますよ。』
登美枝はきつぱりした調子で、その手を拂ひのけて立上つた。
『身分なんかどうでもいいよ。ね、僕の氣持もう解つて呉れてゐるだらう。――さあ、向ふの部屋に行つて、もつとゆつくり話さうぢやないか。』

子爵も立上り、猫撫で聲で囁くやうに云つたが、腕はその聲と反對に、いきなり暴力的に彼女の肩を摑み、隣りの部屋の方へ引つぱつて行かうとした。

『何をなさるのです？』

『そんなに邪見な事を云ふなよ。ね、僕の氣持も好い加減に察して吳れよ。』

子爵は右の手で彼女の肩を摑んで引きずりながら、左の手をのばして、隣りの部屋の唐紙を開けた。

そこまで冷靜に、對手をたしなめるつもりでゐた登美枝は、赫となつた。――人を侮辱するにも程がある。

『可厭です！』

渾身の力を兩手に籠めて、いきなり彼女は子爵の胸を突飛ばした。不意を喰つて、子爵の身體は隣りの部屋に轉がり込んだ。

『何だ、恩知らず！』

さう叫ぶ聲を後に聞きながら、登美枝は廊下に走り出たが、身重の情なさに、息がはつはつと喘み、全身にびつしより汗を搔いてゐた。

つやつやと拭込まれた階段を急いで駈け下りたが、階段の下には廊下が右にも左にもつづいてゐるので、どつちが出口に行く方向か見當がつかなかつた。

『おうい、一寸待て、話がある。』

子爵の足音と聲とが階段に聞えたので、彼女はもう思案してゐる暇はなく、右手の廊下を夢中で走つた。その廊下の突き當りを左へ折れようとした途端、出合頭に誰かに突き當つた。

『あら、御免遊ばせ。』

慌てて辭儀をして、擦り拔けようとすると、

『もしもし、何處へ行きなさる？ そちらは便所で突當りぢや。』

聲をかけられて、初めて我に返つた。見ると、白髮赭顏のでつぷり肥つた老紳士が、優しい微笑を浮べながら立つてゐた。

『あの、急いで居りましたので、失禮いたしました。……出口はどちらでございませうか？』

『出口はあちらぢやが。』

老紳士は今登美枝が走つて來た方の廊下を顎で示した。それでは反對の方へ來てしまつたのであらうか。その廊下を戾つたなら、再び子爵に摑まらなければならない。――登美枝が困つた表情を浮べたのを、見て、老紳士は早くも事態を察したもののやうに、

『何か事情がおありのやうぢやが、今誰か呼んで玄關に案內させるから、それまでわしの部屋で待たれたがよい。今わしは用談を濟して客を歸したところぢやから、わしの部屋には誰も居らん。――一人で行かれて、惡い者にでも又摑まるといかん

から。』

『はい、ありがたうございます。』

細かい大島の蚊飛白の對を著てゐる老紳士の人品の好さに、登美枝はひと目で信頼を感じた。好い人に助けられたものだと思つた。

老紳士の部屋はその直ぐ側だつた。そこは靜かな離室になつてゐた。圓い鎌倉彫の茶卓臺の上に茶器が載せてあるだけで、茶卓臺を挾んで二つの座蒲團の敷かれてゐるのは、なるほど、今し方まで客と對坐してゐた後といふ感じである。かうした待合の部屋らしいみだらな感じは何處にもなく、何か大家の茶室のやうな品の好さである。

『もつと此方へ寄つて、座蒲團をお當てなさい。』

『はい、ありがたうございます。』

登美枝は障子際に坐つて、改めて丁寧にお辭儀をした。まだせいせい肩で息を切つてゐた。

『何か御事情がおありのやうぢやが、なに、話さんでもよい。世の中には隨分莫迦者が居るから、若い婦人は氣をつけなければいけない。』

老人はさう云ひながら、卓上電話の受話器を取り、帳場に向つてかう命じた。

『自動車を一臺呼んで貰ひたい。なに、わしが乘るのではない。お送りしたいお客さんがわしの部屋に來て居られるのだ。自動車が來たら敎へて吳れ。わしがそのお客さんを玄關までお送りするから。』

六

『お忙がしさうね、失禮しますわ。』

『さうですか。では又いづれ。』

井上哲哉は梅野百合子を送り出すために、面會室のドアのハンドルに手をかけた。

（まあ、何てあつさりしてゐるんだらう、この人は！）と百合子は井上のいつもの無愛想が一寸恨めしくなつたが、併し愛想氣のない、ぶつきら棒なところが、彼女には又妙に心を惹かれるのであつた。濃い眉、高い鼻の男らしい立派な顔が、戰線の日に燒けて、一層逞しく、がつしりと見える。

『わたし一遍御飯をさし上げたいと思つて居りますの。實は今日もそのつもりでお誘ひに上つたんですけれど……』

『折角ですが生憎でしたな。』

『いつか一度つきあつて頂けません？』

小首を傾げて、こぼれるやうな笑靨を見せながら、百合子は一寸哀願の眼付をした。紺のアフターヌーンの頸にかけた桃色眞珠の環が露の玉のやうに搖れた。

『それは僕よりも加田子爵をお誘ひになつたらいいでせう。』

『隨分な井上さんね。』

黒味の多いつやゝかな眼で、一寸睨む眞似をしたが、直ぐ笑ひ出して『戰地で加田の話、兄がしてゐまして? 兄は加田が大嫌ひなんですから、屹度いろいろと……』

『惡口は云はれませんでしたよ。』

『惡口ぢやない、正しい批判よ。わたしにしたつて、加田なんか好きぢやないんですもの。』

眞夏の日葵のやうに元氣な彼女が、急にしんみりと暗い顏をして『わたしあんな人と婚約した事を後悔してゐますの。まだ何も解らない女學校の時分、ママにうまい事を云はれて決めちまつたんですの。』

その悄氣た顏に井上は引入れられるやうに眼をやつたが、併し彼の反省が、直ぐその顏を冷淡に引緊めた。

井上は從軍記者として、△△部隊につき、上海から呉淞クリーク突破まで參加してゐたが、本社に戻る事になつた時、戰線で知合になつた梅野英一伍長から、重大な要件を依賴され、歸京すると共に、英一の手紙や寫眞を梅野家にとどけたのが始まりで妹の百合子と知つたのであつた。——すると、百合子は近代娘の勇敢さで、ぐんぐんと彼の胸に押迫つて來た。

けれども、許婚者のある娘をどうしよう?

物足らなさうに立上つた百合子を、井上は禮儀正しさから、エレベーターで玄關まで送つて行つた。

そして百合子が自家用のパッカードに乗るのを見送つて、彼は再びエレベーターの前ま

で戻つて行き、上に上つたエレベーターの下りて來るのを待つてゐると、

『井上さん、この方が御面會です。』

と受付係の女が聲をかけた。

振向いて見ると、小學校の帽子を被つた少年が、にこにこしながら立つてゐた。

井上は不審な顔をして、その少年を見ながら、

『僕に？』

『ええ、あなた政治部の井上さんですね。』

少年は悪びれた様子もなく、はきはきした云ひ方で訊いた。

『さう、僕は井上だが、君は誰です？』

『僕山川登美枝の弟です。』

少年は帽子を取つて、ぴよこりとお辭儀をした。

『おお、山川登美枝さんの弟さんか。さうか。して姉さんは。』

百合子を送り出したとは打つて變つて、井上ははればれした笑顔をしながら云つた。

『姉の留守に、僕が新聞を見たので、姉に代つて僕がお目にかかりに上つたのです。』

『おお、さうか。それはよく來て呉れた。さあ、一緒に上に來給へ。』

彼は丁度下りて來たエレベーターで、少年を今百合子を送り出した面會室に案内して行つた。

七

やつと虎口を逃れた登美枝は、見知らぬ老紳士の呼んで呉れた自動車に乘つて、待合を出た。

併しもう酒場銀に行く氣にはなれなかつた。もうあんなマダムの下で働きたくはない。あのマダムはあの美濃辰と結托して、態と女給達に呉服の借金をさせ、のつぴきならない狀態にさせて置いては、お金のありさうなお客に周旋するのを内職としてゐるのだらう。

併しあの店に行かないとすると、明日から何處で働いたらいいだらう。又改めて働く店を探さなければならないと思ふと、彼女は全く憂鬱にならずにゐられなかつた。

いつ英一さんは凱旋するだらう？　併し今の日本のこの非常時を考へると、女々しく英一さんの凱旋を待つなどといふ心を起してはならない。

いつその事梅野家をたづねて見ようか、英一さんの話では、お父さんといふ人はよく物の解る人だといふ事であつた。お父さんにお目にかかつて、英一さんとの關係を打明けたら、或は何とかして呉れるかも知れない。この身體ではやがて働けなくなるのだから、さういふ事も考へて呉れるかも知れない。……だけれど、なるたけならそんな事は考へまい。やつぱり働ける間は働いて見よう。そして二進も三進も行かなくなつたら、その時お父さんにお縋りしても遲くはない！……

いざとなつたら、このメダイユが何よりの證據だ。これさへお見せしたら、お父さんも信用して下さるだらう！』

登美枝は肌身離さない記念のメダイユが、自分を守つて呉れる守り神だと思ひながら、そつと胸に觸つて見た。

『あつ！』と彼女は叫ばずにゐられなかつた。寢ても覺めても頸から胸に吊してゐるメダイユ、さつきまで確にこの胸にかかつてゐたあのメダイユがないではないか。

彼女は眞青になつた。

それではあの加田子爵の暴力に抵抗した時、鎖が切れて、紛失してしまつたのではないか。——おお、どうしよう？　あの人の唯一の記念を失つて、何としたらいいのだらう？

いざとなつた時、英一さんのお父さんに見せようと思つた唯一の證據がなくなつてしまつたではないか。

登美枝は泣出しさうになつた。

あの待合に引つ返して見ようか？　でも、あの加田子爵に拾はれてゐるとしたら、尙の事どんな難題を持ち出されるか解らない。

彼女は結局さつきの難場を、あの守り神が身代りとなつて、救つて呉れたに違ひないといふやうに自分に云ひ聞かせた。——さう思つてあきらめるよりあきらめやうがなかつた。

登美枝は酒場には行かずに、自動車をアパートに着けさせた。

『いえ、あちらで頂く事になつてゐますから。』

自動車の運轉手は、彼女が自動車代を拂はうとしても受取らなかつた。

彼女はしよんぼりとアパートの階段を上つて行つた。と、彼女の足音を聞きつけて、伸太郎がドアから首を出した。

『姉さん、何處に行つてゐたの？ お店に電話をかけたんだよ。——でもよかつたね、歸つて來て。お客さんだよ。ねえ、戰地の義兄さんからのお使だよ。』

戰地の英一からの使と聞いて、登美枝は飛び上つた。

彼女は部屋に這入ると、日に燒けた、逞ましい樣子をした青年紳士が、立上つて彼女に手をさし出した。

云ふまでもなくそれは井上哲哉であつた。

『ああ、あなたが登美枝さんですね。——まあ、挨拶は後廻しにしませう。僕は戰地で英一君からあなたへの手紙を預かつて來たのです。英一君は頗る元氣で皇國のために頑張つてゐます。』

井上がポツケットから取出した手紙を、登美枝は顫へる手で封を切つた。

なつかしい英一の手で、鉛筆で次のやうに走り書してあつた。

『總てを井上君に頼んだ。井上君が父に交渉して呉れる。同君を信頼し、一切同君に相談して行動されたし。

八月二十五日附の御手紙確に拜受、僅かなところで行違ひになりて殘念。御身の身體の事承知。その事も井上君より父に話し呉れる事になつてゐるから、御身は安心されたし。小生若し幸運にして凱旋なし得る曉に、御身が新しき生命を抱きて小生を迎へ呉れる光景を想像すると感慨無量。くれぐれも大切に生み大切に育てられたし、小生のこの鬚面にて頬ずりせしに、赤子が痛いと云ふので目が覺め、ああ、夢なりしかと微笑みし事もあり。御蔭にて夜毎の夢は豐富に幸福になれり。御身に感謝する次第なり。

御身の手紙、大雨と泥土の中を轉々せしために、表書破れて御身の住所不明。

併し井上君が必ず御身を探し當て呉れる事と信じ、安心してゐる

十月△日

呉淞クリーク突破の翌日

英一

最愛の妻

登美枝どの

八

登美枝はいつか手紙を胸に抱きしめて泣いてゐた。

梅野夫人の居間では、夫人が加田子爵と對坐してゐた。

『一寸これをお讀みになつて。』

四十五歳の夫人は、まだ艶やかな皮膚をして、娘の百合子に似た顔立ちは、若い頃の美しさを偲ばせた。

『おお、英一君の手紙ですか。でも、これは御主人宛のものぢやありませんか。』

OHI
大井のバタピーナッツ
美味滋養・品質第一！
酒の肴に、お茶の友に、御進物によく皇軍慰問にとても喜ばれて居ります（時局に適した容器入）
全國百貨店及び食料品店にあり
東京本所綠町二丁目
製造元 大井寅藏商店

『ええ、ですけれど、子爵はもう家の方と同じですから、構ひませんわ。一遍あなたに讀んで頂いて、あなたの御意見も伺ひたいと思ひますの。――場合によりましたら、この手紙は主人には見せない方がいいかと思ひますの。』

子爵は未來の義母の顔を見た。夫人の眼に浮んでゐる何か重大な決意を見ると、子爵はうなづいて、書簡箋の上に走り書きしてある分厚な手紙を讀んだ。

それは英一から父の梅野英作に送つたもので、最初の方には、戰線から老父の健康を氣遣ふこまごまとした眞情が書いてあつたり、上海戰の驚くべき苦戰の狀態がつぶさに述べてあつたりしたが、最後の方に行くと、加田子爵の眼も、思はず梅野夫人と同じやうに、興奮の色を浮べて來ないではゐなかつた。――それは英一が上海時代に、ダンサーと戀愛に落ち、そのダンサーが英一の出征と行違ひに東京に來てゐる事、而も英一の胤を宿してゐるといふ事を、父に打明け、その女の身の振り方を、父に訴へてゐるからである。

『ダンサーをして居りましても、登美枝はわが北支工作の裏面に働きし志士山川伸吉の遺兒にて、相當教育も有之、父上樣がお會ひ下されば、そのひととなりもお解りになる事と思ひます。

私も萬死に一生は得難く、華々しく江南護國の鬼となる決心はして居りますが、唯心に殘るは、登美枝の身の上と、まだこの世に生れませぬ私の子供の事とでございます。

その事につき、東都毎日新聞記者井上哲哉君が參上いたしますから、同君と御相談の上、父上樣の御慈悲によつて、どうぞ登美枝と未來の私の子供とが身の立つやうに御取計ひ下され度、それが小生の一生の御願ひでございます。井上君は私とは科が違ひましたが、同じ大學の同じ年代の卒業にて、十分信頼の置ける人物でございます。』

子爵が讀終るのを待つて、

『まあ、英一もあきれたものぢやございませんの。女もあらうにダンサーなどを孕ましてしまつて、ほんたうにお恥しいにも何にも……』

『いえ、若い中ですから……と云つて、僕も若いんですが……』

『あら、子爵は大丈夫ですわ。あなたに限つてそんな間違ひはございませんわ。それですから百合子を貰つて頂くやうに、わたしがお願ひしたんですから。』

そんな事を話し合ひながら、梅野夫人と加田子爵との心は、それぞれこの問題に對して、渦のやうに動いてゐた。英一は先妻の子であつた。それだから、夫人は自分のほんたうの子供である百合子を加田子爵にめあはせて、この梅野家の後見とし、梅野家の財産に對する實權を自分で握つてゐたかつた。

加田子爵も加田子爵で、梅野家の巨大な富を腹の中で狙つてゐた。

或る親の話

子供は全く油斷もスキもないもので、良い事でも惡い事でもスグ眞似るので困ります。つい最近、講談社の繪本『二宮金次郎』を與へましたが、金次郎はかうしたあゝしたと自分でやつてゐますので、これは良い事に氣がついたと自分乍ら內心喜んでゐます。これからかうした人物の繪本を毎月與へて見ようと思つてゐます。

（埼玉・常澤生）

若し英一が戰死するやうな事があれば、財產は百合子のものになる。――そんな計算や希望を腹の底に隱してゐるだけ、此處に突然英一の子供が現れて來るといふ事は一大事である。

梅野夫人と加田子爵との心は、その點でよく一致してゐた。

その上、子爵にはもう一つ胸にぐんと來たものがあつた。登美枝、上海から來た登美枝！　――それは酒場銀のあの登美枝と同じ登美枝ではないのか。昨日赤坂の待合で自分を突き飛ばして逃げて行つたと同じ登美枝ではないのか。

その記憶は彼には忌々しかつた。が、若しそれが同じ登美枝であるとすると、單に忌々しいだけでは濟まされない。――併しそんな事はおくびにも出さず、子爵は愼重な顏をして、

『なるほど、これは重大問題ですな。御主人にこの手紙をお見せになる前に、よく事實を調べて見なければなりませんな。――この井上といふ新聞記者は、戰地から歸つたと云つて、英一君の寫眞をとどけて寄越したあの男ですな。』

『ええ、さうなんですの。』

子爵は百合子がその井上に近づきたがつてゐる事を知つてゐた。それも彼には不愉快な事であつた。

『どうも僕は新聞記者といふものを好かんですよ。――一つあの井上といふ人物を調べて見ませう。英一さんが何かだしに使はれてゐる事がないかも限りませんからな。兎に角、それまでは御主人には內密にされた方が好いでせう。』

『子爵もさうお考へですか？　わたしもさう思ひますの。――それでは、どうぞその井上をよくお調べを願ひますわ。』

二人がそこまで話した時、小間使がやつて來た。

『あの……奧樣に井上樣といふお方がお訪ねでございます？』

『なに、井上……？』

『はい、初めは旦那樣をおたづねでございましたけれども、お留守だと申し上げますと、それでは奧樣にお目にかかりたいと仰つしやりまして……』

梅野夫人と子爵とは眼を見合はせた。

『どうしたものでせう？』夫人の眼はさう云つた。

『お會ひになつたら如何です？　何なら僕も會ひませう。一遍その人物に會つて置いた方が便利ですから。』

夫人が小間使に『それでは應接間にお通して。』といふと、小間使は出て行つた。その後姿を見送りながら、子爵は小聲になつて、

『何か證據品のやうなものを持つてゐましたら、何とか云つて、こつちに預かつてしまつた方が便利ですよ。』

『ほんたうにさうですわ。――ほんたうに子爵は考へ深くつていらつしやいますわ。』

夫人は子爵の謀の深さに、信頼の眼付で微笑んだ。

夫人は英一の父宛の手紙を急いで文箱の中に仕舞ひ、

『それではまゐりませう。』

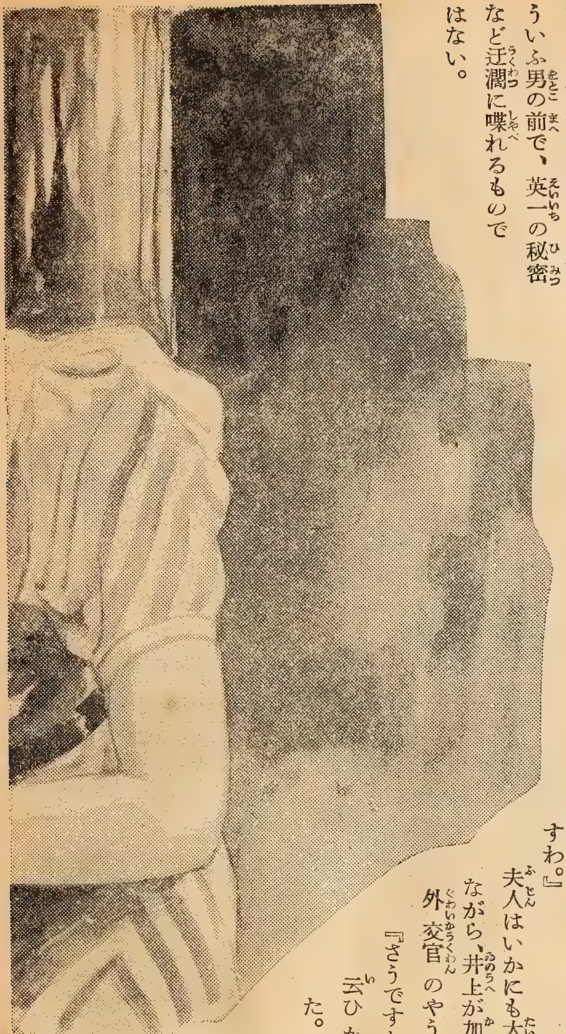
さう云つて、子爵とつれ立つて、應接間の方へ出て行つた。

二人の姿が消えると、百合子がそつと唐紙を開けて、その部屋に這入つて來た。彼女は隣りの部屋で、母と子爵との話を聞いてゐたので

ある。
　彼女は母の文箱の中から、父宛ての兄の手紙を取出すと、それをふところに入れて、そつと又隣りの部屋に引つ込んで行つた。

九

　井上は梅野夫人から加田子爵に紹介されると、これが百合子の許婚者の例の子爵かと思つた。英一に聞いた通り、なるほど、これは輕薄才子だと、その一分のスキのない背廣姿や、のつぺりと撫でつけた髮などを見ながら考へた。――かういふ男の前で、英一の秘密など迂濶に喋れるものではない。



　ひと通りの挨拶が濟むと、井上はきつぱりした調子で、
『奥様、實は御主人か奥様だけにお話ししたいと思つて伺つたのです。戰地で英一君から依頼を受けました英一君の重大問題なので、他聞を憚ることなのですが……』
『まあ、その御懸念でしたら、どうぞ御心配なさらないで下さいまし。加田子爵は内輪の方も同様なのでございますから。……實は娘の百合子の許婚者で、ゆくゆくは英一と兄弟になる方なので、何かと家庭の事にもいろいろ御相談に乘つて頂いて居りますの。――それですから、どうぞ御遠慮なく、どんな事でもお話しになつて頂きたいと存じますわ。』
　夫人はいかにも大家の夫人らしい鷹揚さと愛嬌とを示しながら、井上が加田を敬遠してゐる樣子を見て取ると、外交官のやうな拔目のなさで、隙かさずかう云つた。
『さうですか。それでは申し上げます。』
　云ひかけると、突然横から加田子爵が遮つた。
『一寸お待ち下さい。英一君から依賴を受けられたと云はれると、何かその證據でも……と云つて、別段井上君を疑ふわけではありませんが、兎に角、井上君はわれわれに取つては初對面の方ですし、何か重大問題だとなりますと、初對面

の方と相談いたすには、又それだけ此方としても用心いたさないと……といふと語弊がありますが、あなたと英一君の事をお話ししても差支へないと此方に思はせるやうな何かの證據が欲しいわけなのですが……』

『よく解りました。つまり英一君からの紹介狀でも持つてゐないかとかう仰つしやるんですな。』

『まあさういふわけです。』

『御尤もです。併し生憎僕は英一君からさういふものを貰つて來ませ

んでした。——僕は自分の名を申し上げれば直ぐ通して頂けるやうになつてゐると思つてゐたのです。といふ意味は、既に僕の事については、英一君からこちらの御主人宛に、手紙がとどいてゐる筈だと思つてゐたものですから。』

井上は實際は英一から父に宛てて書かれた『井上哲哉君に御會ひ下さい。』といふ簡單な紹介狀をポッケットに持つてはゐた。けれども、それは英一の父に會つた時に差出さうと思つてゐるので、『他聞を憚る。』と自分が云つた事に對する意趣返しでもあるやうな、加田の妙にからんだ提言の前に、おめおめとそれをさし出して堪るものかと思つた。『英一君から御主人宛てに手紙が來てゐる筈だ。』に、ぐつと詰つたものか、加田は口をもぐもぐしただけで、井上の皮肉な物の云ひ方に、直ぐには返答をしなかつた。

　そこで、井上は梅野夫人の方へ向き直り、

『奥さん、今申し上げたやうに、多分戰地の英一君から、最近御主人に向つて、お便りがあつた筈だと思ひますが……』

『いいえ、ございませんですよ。もう彼是一ケ月近く手紙がまゐりませんので、どう致したかと、實は心配してゐるんでございますよ』

夫人は空惚けて、まことしやかに云つた。

『さうですか。それは不思議ですな。私があちらを發ちます前に、出されたんですから、もう確かに着いてゐなければならない筈なんですが。――それも急を要する事なので、普通の軍事郵便ではなく、丁度戰線から上海に戻つて行く私の社の寫眞班のものがありましたので、それに賴んで、上海から直接郵便船に載せて、貰つた筈なのですから……』

『まあ、さやうでございますか。まだ參りませんでございますよ。どうしたんでございませうね。――それでは何でございますね、その英一の手紙に、その重大要件とやらが書いてあるわけなんでございますね。』

『さうなんです。』

井上は小首を傾げながら考へた。――その手紙が確に着いてゐると思つて、かうしてたづねて來たわけであるが、それが着いてゐないとすると、今此處で話すべきではないかも知れない。本來ならば英一の父に話すべきであるが、多分その手紙が既に着いてゐて、父から繼母に話してあるに違ひないと思つたので、父が留守と聞くと、それならば繼母に會つて見ようと急に思ひ立つたのであつた。――といふのは、さうして繼母に話せば、繼母の面子が立つわけであるから、後で繼母が妨害するやうな事がないやうに豫防出來はしないかと、咄嗟の間に不圖思ひついたのであつた。それだから、梅野夫人に面會を求めたのであるが、併し英一の手紙がまだ着いてゐないとすると、自分から口を開いてその問題に觸れる事は警戒すべきである。おまけに眼の前には加田もゐる。この子爵の前でこまかな事など、打明けるべきではない。

『さうですか。それでは英一君の手紙が着きました上で、又參上ることに致しませう。今日は失禮いたしました。』

『まあ、左樣でございますか。何ならわたくしお話を伺ひまして、主人にわたくしから傳へたいと思ひますが……』

『いえ、急ぐことではないのです。英一君の手紙が着きましてからの方が、御相談がし易いのです。――それでは御免下さい。』

あつさりさう云つて立上り、夫人に挨拶して、應接間を出て行かうとすると、加田子爵が呼び止めた。

『井上君、僕がゐるので君は話さんのではないですか?』

『いや、別に……』

井上は一寸振返つた。加田と眼がぶつかつた。憎しみに燃えてゐる加田の眼を見ると、彼も亦反感が浮んで來た。――百合子の未來の良人がこの男か。あの百合子の未來の良人が！……

彼はそのまま又向き直つて、玄關の方へ出て行つた。

『何て可厭な奴でせう。イケ圖々しくて橫柄で、禮儀作法を心得ないで……だから、新聞記者ほど下等なものはないと僕は思ふんですよ。……併し彼奴が何も證據になるものを持つてゐないといふのは好都合でしたね。それさへなければ、飽くまで此方では信用出來ないと云ひ切れますからね。』

梅野夫人が井上を玄關口に送り出して、應接間に戻つて來ると、加田子爵は井上に輕くあしらはれた事が忌々しく、舌打ちをしながらか

う云つた。
『併し此處に心配なのは山川登美枝といふ女ですよ。うつかりすると、この女が英一君からの便りか何か持つてゐるかも知れませんからね。さうなると事面倒ですから、何とかして一つそれを奪ひ取る算段を講じなければなりませんね。』
『さう、それに氣がつきませんでしたわ。』
梅野夫人もさう聞くと急に不安になつたやうに眉をひそめた。
加田子爵は態とらしく智惠をしぼるやうな深刻な眼付をして見せたが、やがてさも自信ありげに、昂然と胸をそらして、
『よし、僕が何とかして、今日中にそれを奪ひ取つて見せませう。一日一刻も争ふ時ではありませんから。』
『まあ、そんな事出來ますか知ら？』
『あつははは、いざとなれば、その位の智惠は僕にだつて浮びますよ。細工は流々です。仕上げを一つゆつくり見て頂きませう。』
『まあ、ほんたうですの？……何て子爵は智惠がおありなんでせう！ですから、わたくし百合子ほど仕合せ者はないと思ひますわ。』
梅野夫人は再び信頼の眼付で、この未來の婿の顏をうつとり眺めた。

一〇

井上哲哉は社の仕事の合間を盗んで、梅野邸を訪問したので、外へ出ると、直ぐタクシーを拾つて、東都毎日新聞社に歸つて行つた。
『井上さん、お客さまがお待ちですよ。』

焚くほどは風がもて來る落葉かな

蕭殺たる秋風の草庵に悠々自適する良寛の姿が目に映ずるやうである。大賢か、大愚か、純眞、恬淡、生も死も超越した良寛の尊い心境は、慌たゞしい現代人の生活に一大示唆を與へて呉れる。
今事變で武勳赫々たる某部隊長が、砲煙彈雨の中、對敵作戰の陣中に、良寛の書を繙いてゐたエピソードは、武人の床しさと覺悟が偲ばれて胸を打たれる。
この心掛があつてこそ、お國の爲に總べてを捧げて、死地に赴く覺悟とゆとりが出來るのだ。一休にしても、曾呂利にしても、その生き方は各〻異なるが、何れも人生の眞に徹して生き抜いた貴いものがある。この三人三樣の生き方を平易に、且興味と感激の筆に描いたのが本書である。一讀現代人の苦惱を、サラリと洗ひ落して呉れる天來の快音と、讀者界絶讚の的になつてゐる。讀書の秋、切に御一讀を奨む。

（武者小路實篤氏著）一休・曾呂利・良寛

◎定價一圓五十錢（送料内地十四錢 全國書店にあり）大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

『お客？　誰だい？』
『とても素晴しい方……まあ樂しみにして、應接間に行つて御覽なさい。』
受付の女事務員がにやにや笑ひながらから云ふので、彼は編輯室に這入る前に、エレベーターで三階の應接間に行つて見た。
意外にもそこには百合子が待つてゐた。
『おや、あなたでしたか。』
『ええ、わたし井上さんの先廻りして此處でお待ちしてゐたのよ。どう、加田子爵の印象は？　相當なもんでせう？』
吃驚して眼を瞠つてゐる井上の顏に向つて、百合子は華かな笑ひを浴びせかけた。『あなただつて、あの人に會つたら、わたしに同情して下さるでせう？』
『…………』
『そんな事は兎に角として、わたしとても素晴しいお土産をあなたに持つて來たのよ。これ以上のお土産はないといふ位飛切り上等のお土産を！』
『何です、一體それは？　……實は僕はまだこれから書かなければならない原稿があるので、一寸時間がないんですが……』
『直ぐあれだわ。わたしの顏さへ見ると、時間がなくつて、急がしいつて仰つしやるのね。どうかして井上さんの笑顏を見たいと思つても、いつでも眉をしかめなさるのね。……それだのに、お訪ねしないではゐられないんだから辛い、辛い！』
『冗談ぢやないんですよ。』
『わたしこそ冗談ぢやないのよ。』
百合子は、かう云つて、一寸眞顏をして見せて、それから直ぐ彈けるやうな晴れやかな笑顏をして、
『でも、今日のお土産を見せたら、何ぼ井上さんが冷淡な顏をなすつてゐても、躍り上つて、わたしに感謝なさるわよ。』
『そんなに勿體振らないで、見せるなら早く見せて下さい。』
『見せるわよ、そんなに急がなくつたつて。』
百合子は甘えるやうに鼻聲を出しながら、綠色のハンドバッグを開けて、中から一通の手紙を取出して、それを井上の前のテーブルの上に突き出した。
『何です、手紙ですか。』
『よく手に取つて、それが誰の手紙だか御覽なさい。』
井上はその封の切つてある手紙を手に取つた。と思はず、『おや！』と云ひながら、飛び上らずにゐられなかつた。――それは梅野英一がその父に宛てた手紙だつたからである。
『おお、これは英一君の……』
『さうよ、お兄さんから父に宛てた手紙よ。そして井上さんが待つてらつしやつた手紙よ。』
『ほう、これがどうしてあなたの手に……？』
『大陰謀があるのよ。わたしがすつかり立聞きしてしまつたの。』
さう云ひながら、百合子は今日母の居間で、母と加田子爵とが、この手紙を前にしてこまごまと秘密な相談をしてゐたのを、隣室で立聞きした顛末を掻いつまんで話した。

『そこにあなたがお見えになつたので、母は文箱にこれを入れて、應接間に行つておしまひになつたのよ。だから、その間に、わたしそつと盜み出して來てしまつたの。』

『おお、さうですか。』

『だから、このお土産を持つて來たら、井上さんだつて、ちつとはわたしに笑顏を見せて下すつたつていいでせう?』

『いや、どうもこれは失敬。笑顏どころか、かうしてあなたに感謝しますよ。』

井上は大袈裟に百合子にお辭儀をして見せた。

『まあ、嬉しいわ。井上さんに感謝されるなんて。……それともう一つ認めて頂かなければいけない事があるのよ。わたしね、加田の味方では一寸もないのよ。わたしあの人大嫌ひですの。――今日立ち聞きしてゐたらあの人の腹黑さがつくづく解りましたの。それは母だつて惡いわよ。だけれど、わたしの母だから云ふんぢやないけれど、母は腹の底は惡い人ぢやないの。唯お兄さんが繼子で、わたしが實子だといふので、わたしに依怙贔屓な愛情を持つてゐるだけなんですの。わたしが可愛いと思ふので、慾深になつてゐますの。だから、わたしが母にその事を云つてやれば、母は飜然として悟るわよ。だけれど、加田と來たら、梅野家の財產を乘つ取らうと謀らんでゐるんですの。……でも、あの男の陋劣な證據がはつきり掴めたので、わたしとても氣持がさばさばしてよ。誰があんな男と結婚なんかするものですか。わたしが婚約を解消すると云つたつて、もう母だつてそれを止める資格がなくなつたと思ふと痛快よ。』

『……………』

『だけれど、お兄さんはとても好い事をしてよ。わたしその手紙を讀んだの。――まあ、何ていふ美しい純一な戀愛をなすつたんでせう。わたし嬉しくつて仕方がなかつたわ。だつて、如何にもお兄さんらしくつて、眞實で、本氣で、高潔なんですもの。――こんなに眞情を以て人を愛せるなんて、わたしお兄さんを尊敬してよ。』

『……………』

『これこそほんたうの戀愛といふものよ。……ああ、だけれどわたし羨ましいわ。わたし、わたし……』

突然百合子の聲が顫へた。と彼女はハンケチを顏に當てた。彼女は啜り泣き始めた。

井上は感動の眼付で啜り泣く百合子を見てゐた。が、彼の逞ましい顏は固くなつて、彼は身動きもせず默つてゐた。

暫く啜り泣いてゐた百合子は、やがてハンケチから顏を上げた。雨の後の青空のやうに、彼女の眼は澄み、その顏は霽々としてゐた。

『泣いたりして莫迦ね。でも、嬉しいと思つたら悲しくなつちまつたの。……でもね、わたしもお兄さんと登美枝さんとのために、役に立つ事がしたいのよ。わたし今晩この手紙を父に見せようと思ふの。』

『おお、あなたがお父さんにそれを見せて下されば、こんな都合の好い事はありませんよ。さうすれば僕は明日でも早速お父さんを……お宅にお訪ねするのは考へ物ですから、會社にお訪ねして、御相談を願ふ事にします。』

『それが好いわ。井上さんが明日おたづねするといふ事も、わたしか

ら豫め父に話して置きますわ。』
『それぢや、さうして下さい。』
二人はさういふことに話を決めた。
と、突然百合子は手を拍つて、はしやいだ聲を出して、
『わたし登美枝さんに會ひたくなつちまつた

わ。お兄さんが好きになるやうな人だから屹度わたしも好きになれてよ。——井上さん、あなた原稿をお書きになつたら、わたしを登美枝さんのところにつれてつて下さらない？』
『あつはは、列強中最初の承認國にならうといふわけですな。』
重い井上の口からも、ついこんな輕い言葉が轉び出た。彼は嘗て百合子に見せた事がないやうな上機嫌な笑顔で、『それは好いでせう。あなたがたづねて上げたら、登美枝さんはどんなに喜び、どんなに氣丈夫に思ふか知れませんよ。——それぢや急いで原稿を書いて來ますから、それまで待つて下さい。』
井上はさういふと、快活な足どりで應接間から、出て行つた。

二

『姉さん、井上さんの話うまく、行つた？』
伸太郎は部屋に這入るなり、鞄もはづさずにかう訊いた。
『まだ解らないんだよ。多分まだ社がおありなんだらう。乾度歸りに寄つて下さるおつもりよ。』
『さうかなあ。だけれど、うまく行けば、電話をかけて吳れるだらうがなあ。』
その事は登美枝もさつきから胸につかへてゐたのであつた。そこで半ばは弟を慰めるやうに、半ばは自分に云ひ聞かせるやうに、
『だつてお前、一度や二度でそんな事がすらすら運ぶものぢやないよ。……でも、伸ちやんは何も心配しなくつてもいいのよ。いよいよ中學にも行けることになつたんだから、他の事は考へないでしつかり勉強なさいね。』
姉弟がそんな會話を交はしてゐる時、ノックもなく、突然ドアが荒々しく開けられた。
二人が吃驚して振返る間もなく、美濃辰と銀のマダムと加田子爵とが、どやどやと部屋に這入つて來た。
そのすさまじい見幕に、姉と弟とは思はず寄り添うて、三人の方を見戍つた。
『隨分お前さんも人を喰つた女だね。加田の御前に大恥を掻かせて、わたし達の面をどうして吳れるんだい？』
最初に口を切つたのはマダムであつた。
『おまけに、聞けば新聞ゴロと共謀になつて、梅野英作さんのお邸に天一坊をきめ込まうとしたといふぢやねえか。……虫も殺さねえやう

な面をして、好い度胸なもんだと、俺はその話を聞いて、あきれたんだ！』

　かう云つたのは美濃辰であつた。

　さうした凄文句に慴えながらも、梅野の邸といふ言葉に、登美枝は聞き耳を立てた。――どうして梅野家のことが、この連中に知れたらう？

　その不審さうな顔を見ると、美濃辰は嘲笑つて、

『どうだ、驚いたらう。此處にいらつしやる加田の子爵はな、梅野さんの御令孃と許婚の間でいらつしやるんだ。――上海あたりの場違ひに、江戸が舐められて堪るかい。』

　――おお、それではあの百合子さん……英一さんの妹さんのあの百合子さんの、この加田が許婚なのかと、登美枝は改めて加田子爵の顔を見た。『妹は下らない奴と結婚する事になつてゐて可哀想なんだよ。いざとなつたら僕はその約束を破らしてやらうと思つてゐるんだけれど。』と英一が云つた事があつたのが思ひ出された。――なるほど、こんな男と婚約してゐるんでは、英一さんが心配するのは無理もない。

　加田子爵は薄綠の碁盤縞のハイカラな春外套のポッケットに兩手を突つ込みながら、登美枝の前に、小莫迦にしたやうな微笑を浮べて突つ立つた。

『登美枝さん……いや、山川登美枝孃、昨日はすつかり君にしてやられたね。今日は一つその淸算をつけて貰ふかな。――聞けば君は姙娠してゐるさうぢやないか。何處でどうしたか解らない君の不品行の結末を、梅野に持つて來られちや迷惑するつて、梅野家ぢや憤慨してゐるぜ。』

『まあ、失禮な。』

『それとも、梅野家に持込んだ何か證據でもあるかね？　あるならそいつを見せて貰ひたいな。』

『……………』

　登美枝は必死になつて眼を瞠つて、加田子爵と睨み合つた。戸棚の中のハンドバッグには、昨日井上から受取つた英一の手紙が這入つてゐる。それをこの男に見せてやらうか。……だけれど、あの貴い手紙をどうしてこんな穢れた男に見せられよう。

『あつははは。どうだね？　證據はあるかね？　默つてゐちや解らないぢやないか。證據がないと、氣の毒だが、君は梅野家を脅喝した事になるぜ。だから、あるなら出したらどうだ？』

『…………』

『うん、君が出さないなら、よし、われわれが探してやらう。』

　子爵は部屋中を見まはした。上海から着のみ着のままで來たので、荷物らしい荷物は部屋になかつた。――子爵は戸棚に眼をつけて、その方へ進み寄つた。

『いけません。』

　登美枝が遮らうとすると、子爵は登美枝を突きのけた。

『おい、ジタバタしねえがいいぜ。』

　子爵に突かれて、よろよろとした登美枝の肩を美濃辰が抑へつけた。

　とその瞬間、いきなり美濃辰の顔に正面に何か飛んで來てぶつかつたものがあつた。――仲太郎少年が鞄を振りまはしたのであつた。

『ア痛え！　この小僧ッ子、生意氣な事をしやがる！』

仲太郎は續いて、戸棚を開けようとしてゐた子爵の横ッ面にも一つ鞄を喰はした。

『何だ、貴樣は！』

子爵は少年に飛びかかつて行つた。それを登美枝が弟を救はうとして、兩手が美濃辰に押へられてゐるので、足で子爵の足を掬つた。

『マダム、われわれがこの二人を押へつけてゐるから、その間に戸棚を探して呉れ。手紙類は皆押收するのだ。ハンドバッグでも指輪でも怪しいものは皆持出して呉れ。』

マダムが戸棚に駈けよらうとすると、又少年が鞄をふりまはした。けれども、何と云つても女と子供である。姉弟はたうとう二人の男に押へられてしまつた。

二

『このアパートでございます。』

自動車を停めると、運轉手は運轉手臺から飛び下りて恭しくドアを開けた。

それは昨日待合で登美枝を救つたあの老紳士であつた。今日は會社の歸りなので、洋服を着てゐた。

『うん、此處か。』

老紳士はアパートを見上げた。そしてポケットからメダイユを出しながら、そのアパートの入口の階段を上つて行つた。――昨日登美枝を待合で自分で護衛のつもりで玄關まで送り出し、それからもとの部屋に戻つて來ると、老紳士は部屋の敷居際で、このメダイユの落ちてゐるのを見つけたのであつた。

『おお、今の娘のかな。今から追つかけてももう間に合ふまい。又取りに來るかも解らんから、帳場にでも預らして置かう。』

さう思ひながら、それを拾ひ上げて、ふと見ると、中に寫眞らしいものが箝め込んであつた。近頃の若い者は、こんなものを頸にかけてゐるのかと、さうした一寸した好奇心から、老紳士は老眼鏡をかけて、改めてその寫眞を見直して見た。

『おや、これは英一と今の娘の寫眞ではないか。』

老人は眼を瞠つた。戰地にゐる息子の姿が老人の眼に浮んで來た。

――おお、英一にはこんな云ひ交はした女があつたのか。

彼は默つてそれを懷中に納ひ、そのまま家に歸つたが、昨夜以來息子とその娘の事が頭から脫けなかつた。――どんな仔細があつたのか知らないが、自分の部屋に逃げ込んで來たあの娘は、上品な、美しい娘であつた。あれなら息子が心を惹かれるのも無理はない。

今日老紳士は、會社から待合に電話をかけ、昨日あの娘を送つた自動車を會社にまはして貰つた。そして自家用の自動車は家に歸して、その雇自動車に乘つて、昨日娘を送りとどけたところまで案內して貰つたのである。

老紳士は事務所の管理人に、メダイユの寫眞を見せて、この娘さんがこのアパートにゐるかと訊いた。

『おお、山川登美枝さんです。おいでになりますよ。二階の二十番の部屋です。』

立派な老紳士が登美枝をたづねて來た事に、管理人は眼を瞠つて答へた。

紳士は靜かに二階に登つて行つて、二十番といふ部屋を探した。片端から順々に番號を見て行つて、その番號を探し當てた時、丁度その部屋の中から、人の格鬪するやうな物音が聞えた。續いて女の悲鳴が聞えた。

『おお、昨日の惡漢が此處まで來て娘を苦しめてゐるのか。』

さう思ふと、猶豫してゐる場合ではないと思つて、老紳士は案内も乞はずドアを開けた。

――昨日の娘と一人の少年とを、二人の男が疊の上に押へつけてゐるのが眼に這入つた。

『こら、何をして居るのか!』

老紳士は大喝した。

『お前さんは何だい、えらさうに大きな聲を出してさ。』

戸棚を探してゐたマダムが、傳法な調子で振向いた。が、當の加田子爵が『あッ!』と云つて、少年を押へてゐた手を引つ込めて、急に畏まつてうなだれたので、マダムは力拔けがして、子爵と闖入者との顏をぼんやり見較べた。

美濃辰も呆氣に取られて手をゆるめた。と身體が樂になつた登美枝が初めて、老人の方を振向いた。

『まあ!』さういふなり彼女は老紳士の側に飛んで來て、お辭儀した。

『ありがたうございます。又お救ひ下さいまして!』

老人は加田子爵の方を向いて、ゆつくりした、威嚴のある調子で云つた。

『政美君、何だ、この狼藉は!』

『…………』

子爵はうつむいて返事も出來なかつた。

老人は登美枝の方を振向いて、

『昨日あんたを苦しめたのも、この男かな?』

『はあ、さやうでございます。』

『ふん、さうか。――政美君、もう今日限り君の出入りはさし止める。百合子との婚約もわしが斷る!』

その言葉を聞くと、誰よりも驚いたのは登美枝であつた。おお、それでは昨日以來度々自分を救つて呉れたこの老紳士は、英一の父であつたのか!

『あの、それではあの梅野のお父さまで……』

思はずさういふ言葉が、登美枝の口から迸り出た。

老人は涙をいつぱい溜めた登美枝の顏を、慈愛に充ちた眼付で、愛撫するやうに眺めた。そしてポッケットからメダイユを出して、登美枝の手に渡した。

『まあ、これは……』

『おお、昨日あんたが落して行つたのを、わしが拾つて置いた。よしよし、事情は後でゆつくり聞く。何事も心配せんが好い!』

『ありがたうございます。伸ちやん、この方英一さんのお父さま。――さあ、御挨拶なさい。』

伸太郎は老紳士の前に進み出て、ぴよこりと頭を下げた。にこやかに笑ひながら、その眼には涙が光つてゐた。

『おお、弟さんか。かしこい顏をしてゐるの。』

丁度その時、

『あら、此處なの。さう。』

さういふ百合子の聲が聞えて、井上と百合子とが部屋のドアを開けた。

『まあ、どうしたの。父が來てらつしやるわよ。』

『おお、百合子、どうして此處へ？』

百合子はにこにこしながら、

『父こそどうして此處へ？』

『あつははは。よし、事情は總て後で聞く。百合子、お前に此處で申し渡して置くがね。加田政美君との婚約は、今日限り思ひ切れ！』

百合子はくりくりした眼で、部屋を見まはし、隅にうつむいてゐる加田を見つけた。

『あら、政美さんも來ていらつしやるのね。――よござんすとも。母が決めた婚約ですもの。わたしは疾つくの昔に心の中では一人で破約してゐたのよ。だから、父がその氣になつて下されば、とても嬉しいわ。』

さう云つて、百合子は一歩登美枝の方へ進み出て、

『登美枝さんでせう。わたし百合子ですの。今後どうぞよろしく。』

登美枝は嬉しさに無言のまま百合子にお辭儀した。

『ねえ、登美枝さん、わたしが井上さんにこちらにつれて來て下さいつてお頼みしたら、列强中最初の承認國になる氣かつて井上さんに云はれたのよ。だけれど、來て見たら、父に先を越されてしまつたわ。――でもわたし嬉しくつて、あなたのやうなお姉さんが出來て……』

『…………』

二人の若い娘は固く手を握り合つてゐた。

『この方は？』

井上を顧みて、梅野氏は百合子に訊ねた。

『井上さんですの。この方よ、今度の事で一生懸命働いて下すつたのは。戰線でお兄さんと仲よくして下すつた方なの。――これをお讀みになれば父にすつかりお解りになつてよ。』

百合子は英一から父に宛てた手紙を父の前に出した。

『何だ、英一からわしに。……いつ來てゐたのだ？』

『それも後でお話してよ。――父、でもこれが何故封が切つてあるかなんて訊かないでね。ね、父が百合子を愛して下さるなら訊かないでね。後生ですから、訊かないでね。』

めづらしく百合子の眼に眞劍な哀願の涙が光つてゐるのを、梅野氏はじつと見た。

『よし、お前に免じて訊かない事にする。』

『まあ、うれしい。だから、父は好い父なの。』

子供のやうに百合子は兩手を拍つて、嬉しさうな聲を出した。

★

十二月十三日の南京陷落には、梅野邸で大祝賀會が開かれた。

その佳き日に、英一と登美枝、哲哉と百合子と、この二組の婚約が發表された。

結婚式はやがて英一の凱旋する日を待つて、この二組を同時に擧行するやうに豫定された。

梅野夫人は百合子の心持が解ると、もともとわが子可愛さの餘り、偏頗な氣持になつてゐたので、今は心を改め、この二組の盛大な結婚の準備のために、今は百合子のためばかりではなく英一のためにも、すつかり幸福な、多忙な母親となつてゐた。

（終）

愛國神宮詣

佐藤惣之助

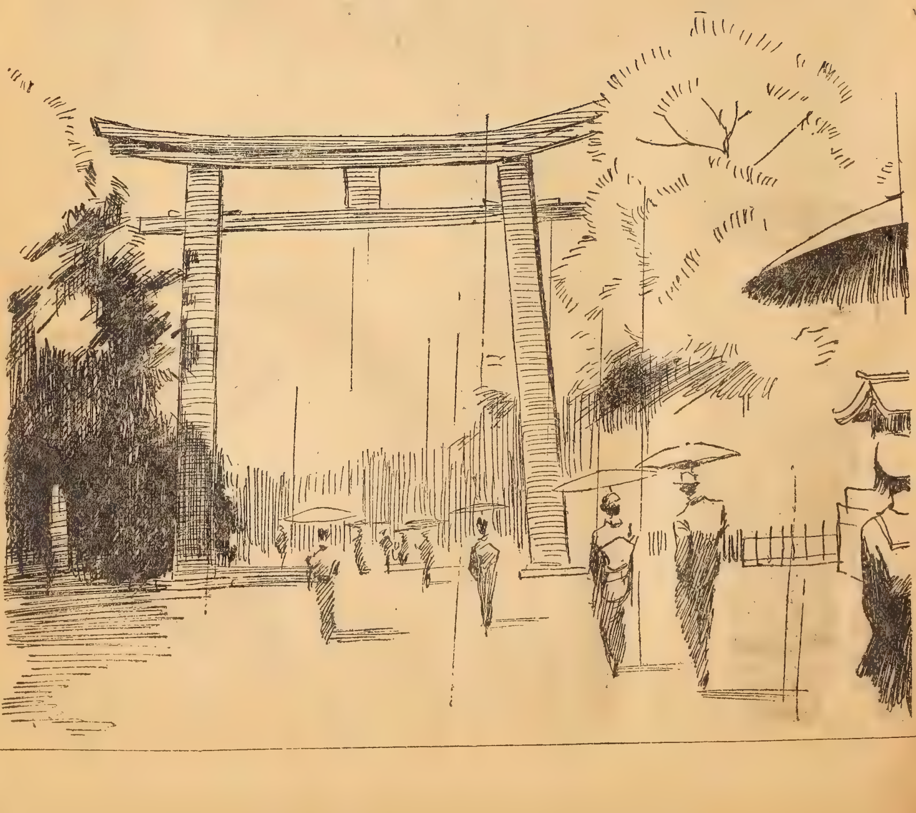
時雨ふる〳〵神宮の森に
猶も勇士の殊勳を祈る
娘島田や丸髷すがた
袖もぬれましよ、蛇の目傘

傘をたゝんで白髪の母も
可愛い少女も兩手をあはせ
拜むこゝろは一億一致
どれも大和のをみなへし

女ごころは弱くて強い
戰地思へば涙も燃える
見得も外聞も襷にかへて
護る銃後の心意氣

妻や妹もその母までも
誠一ト筋どこまでつゞく
秋の木立もいつしか晴れて
明治神宮の茜空。

繪—高木清



噫 飯塚部隊長

望月紫峰

伊東 顯畫

朝霧

ド、ド、ド、……。

どこからか、一齊射撃の音が、遠雷のやうに聞えて來ると、

『あツ、兵隊さんだ。』

國坊は、むつくりと刎ね起きた。まだ七ツになつたばかりだが、兵隊だとなると、何も彼も忘れて、夢中になつて戸外へ飛出して了ふ。今朝も、

それで——

土間へ下りて草履を突ッかけると、

『母ちやん、兵隊さんが來たべえ。』

井戸端で米をといでゐた母親

に聲をかけた。

『鐵砲の音がしたやうだなあ。』

『俺、見てくべえ。』

『早く歸つて來るだぞウ。』

小さな筒袖姿は、もう彈丸のやうになつて馳け出したが、さて見當がつかない。

彼は、立ちどまつた。どつちを向いても、山又山――

夜があけたばかりの碧空には、削つたやうな妙義山がぬつと突立つて居て、上信國境の山彙は、屏風でかこんだやうに其の背後に立並んで居る。幾らか風があるらしく、淺間の煙が、靡いて居る。

彼は、耳をたてた、聞える、遙かに聞える――

『あつちだ。』

彼は、銃聲を追うた。

取入のすんだ田圃には、眞白な霜が降りてゐた。畝道を突切ると、街道が鎬川に沿うて走つてゐた。

兵隊さんは、どこに居る？

時々、遠い方角から、豆を煎るやうな音が、秋空にとゞろく。
彼は、どこをどう走つたのか、自分でもハッキリしなかつた。
家並のつゞいた町方、歯のぬけたやうに人家のまばらな在方、そんな處も通り越したやうな氣がした。何が何だか、頭の中がぼーッとなつて、鍋でもかぶつたやうに重苦しくなつた。
と、彼の眼の前にうかんだのは、黄帽黄襟の兵隊さん――
その頃――明治二十六年――兵隊の服裝は、今日とは違つてゐた。無恰好な重々しい軍帽、袖や襟に黄色い筋の入つた軍服をきて、釦で止める白い脚絆をはいてゐた。丁度、高崎歩兵第十五聯隊の兵隊が、今、野外演習を終つて、その一個小隊ぐらゐな一かたまりが行軍中であつた。
『あゝ、兵隊さんだ。』
國坊は、到頭、聲をあげて兵隊さんの短劍にしがみついた。無性矢鱈に嬉しくなつて、ポロ〳〵と大きな涙を流してゐた。
『ほゝう、どうした。』
と、兵隊は、國坊のいがぐり頭で撫でまはして、
『泣くんぢやない……』
『泣いたんぢやないや、……俺、嬉しいんだ。』
『あゝ、さうか。』
『兵隊さん。』
國坊は一緒に歩き乍ら、うるさくつきまとつてくる。
『何んだい。』
『鐵砲を打つたらよかんべえ。』
『もう、おしまひだ……』
『大將は、どこに居るだべえ。』
『大將か？ ……大將は、藤岡の町にゐる。』
『どんな人だべえ。』
『蛇腹の服をきて、長いサーベルをさして、髯を生やしてるな。』
『俺も、さういふ大將になるべえ。』
『うはゝゝゝ。』
行軍中の兵隊が、一度にどつと笑ひ出した。……

春寒

あんまり聲が大きかつたので、彼は、ふいと眼をさますと、軒下に丸くなつて、毛布にくるまつて眠こけてゐる彼自身を見出した。
眼の前には、ぐるりと人間の垣根が出來てゐる。彼は、晝の疲れで、ぐつすりと寢てゐたので、いつ是れ程の大勢に包圍されたか、些しも氣づかなかつた。
明治四十四年の春先き、まだ餘寒の風の底冷たい夜――
水戸から先きの助川街道、名の知れぬ部落の一農家の前であつた。

夢は、十八年の昔に返つて、我家から四里も隔つてゐた藤岡の町へ兵隊さんを追ひかけて行つた。かへりには、吉井の町の山の中で、迷子になつて、途方にくれたが、十八年後の今、彼は、野宿をして、ここに居る。

聲が聞える……

『わアい、……こいつ眼を覺ましてゐやがる。』

『あんて、いけ圖々しい野郎だッぺ。』

『つい、さつきまでグーッグーッと、鼾を掻いてゐただが、どこ迄、ふてえか底がしれねえ。』

村の人々は、手に手に心張棒を持つてゐた。

(はてな)

彼は、考へた。

(こりや、眠てゐる中に、妙な事になつた、自分のことを泥棒だとでも思つてゐるな)

しづかに、呼吸をとゝのへて、容子を見てゐると、村の駐在巡査が、馳けつけて來た。巡査は、提灯の光を、ぐつとさしむけた。

『野郎、起きねえか、……旦那がござつて、おしらべになるたあ。』

此家の主らしい男が怒鳴つた。

彼は、莞爾として、立上つた。破れ洋服をまとひ、薄汚い鳥打帽を被つてゐるが、凛々たる氣骨の漲りあふれた好丈夫、巡査はじろ〱と日焦けのした相手の顔を見つめてゐたが、提灯を傍の男にわたして、

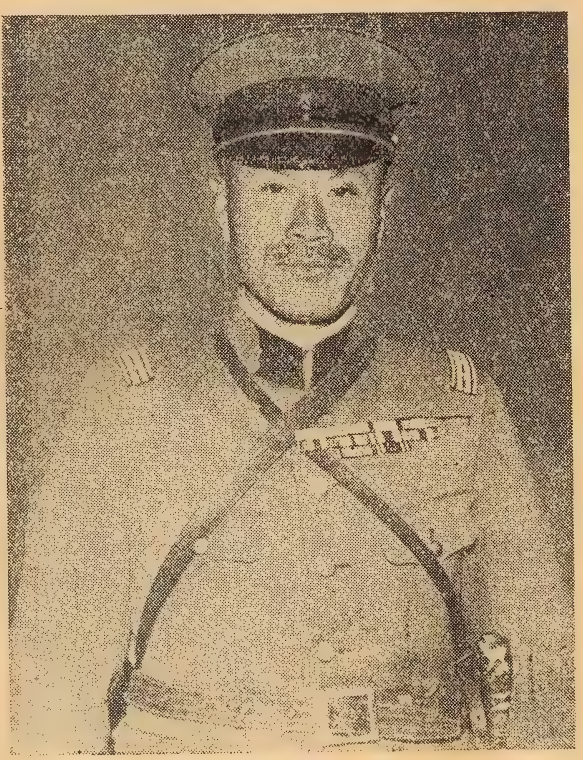
『どこから來たか。』

改めて手帳を出して、訊問をはじめた。

『水戸から。』

『どこへ行くか。』

『水戸へかへる。』



飯塚部隊長

『名は……？』
『飯塚國五郎。』
『年は……？』
『二十五歳。』
『郷里は……？』
『群馬縣北甘樂郡富岡町在曾木六七一。』
『ソギとは、どうかくね。』
『曾我兄弟の曾と、木下藤吉郎の木であります。』
『ほう、成る程ね。』巡査は、微笑をうかべ乍ら、
『職業は？』
『帝國軍人であります。』
『現役かね。』
『はい……水戸歩兵第二聯隊勤務、陸軍歩兵少尉であります。』
『君が……？』
巡査は、ぎくんとして、飯塚少尉の顔を改めて見直した。
『へゝえ、少尉といへや、大したものでねえか、ほんとの少尉だッぺか。』
提灯をもつた男が、さゝやいた。
『そこだで。』
此家の主が、恐る〳〵巡査の前に出て
『旦那さア。』
『なんだい……。』
『少尉どのが、あんでまア、俺の家の軒下さ、犬ころのやうに寝ころがつてるだッぺ、……俺には、腑に落ちねえでがす。』
『尤もだ、……だが、まて。』
巡査は、押し止めて
『まことに、失禮なことを御訊ね致しますが……』
と、急に言葉が丁寧になる。
『貴官は、立派な帝國軍人です、殊に、將來有望な青年將校です、それがですな、

どうして、かやうな路傍に眠つて居たわけですか、御見受け申せば、服装もとゝのつて居られぬので、當家の主から、本職のもとに報告がありまして、どうも、うろん臭い男が寝てゐるので、調べてもらひたいと云ふ、それで只今御訊ねするのですが、御差支なければ、御話願ひたいと考へます。』

と、云つた。

『分りました。』

飯塚少尉は、鳥打帽をとつて、

『皆さん、一緒にきいて下さい。』

くらがりの中で帽をふつて見せた。

ぐるりと圓陣を作つたのは、此の村の人々、褞袍をきたのや、頬冠をしたのや、さま〴〵な扮装、しかし、いざと云へば、泥棒を取押へてくれようと、押出した力自慢の若い衆が多い。

『皆さんが、誤解なされたのは無理もない、私は、帝國軍人である以上、いつ戰場に出ることになるか分りませぬ、なる程、只今は平和です、私共の父兄は、日清、日露兩戰役に従事して、かういふ有難い國家の基礎をきづいてくれましたが、私共も亦一朝事ある時は、此

の一身をお國のために抛出し、更に、立派な國柄として、これを子々孫々に傳へねばなりませぬ、されば、軍人となつた上は、何よりも、平時に於て、身體を鍛へておかねばなりませぬ、梅干の入つた握飯一つで、十時間二十時間の奮闘にも堪へられるやうな體力を養つておかねばなりませぬ、私は、軍務の傍、少しでも、暇がありますと、かうして、わざとボロ洋服にボロ脚絆をつけ、野宿の用意をして、山野を跋渉致します、人家があつても、決して人家に泊りませぬ、戰場には人家はない、草の上で結構、石の上よろしい、どこへでも寝なくてはならぬ、昔の人は、武者修行をした、野山をかけ歩いて、身體を練磨したが、それと同じことである、……成る程、私は、御當家の軒下に寝轉つたのはよくない、一言、おことわりして置けばよろしかつたが、已に十時過ぎで、御休みのやうであつた、それで私も、軒下の無斷借用をいたした……まことに、みなさまを御騒がせして、申譯なく思ひます。』

一通り野宿の辯が終る頃、村人達の頭が、ひとりでに下つて、一人も顔をあげない。誰だ？　泥棒だなんて、さわぎたてたのは……？　今更、詮議立をしても始まらない。

駐在巡査は、一同に向つて、

『みな、分つたか、分つたら、わしの通りにして、おわびをしろ、……よいか。』

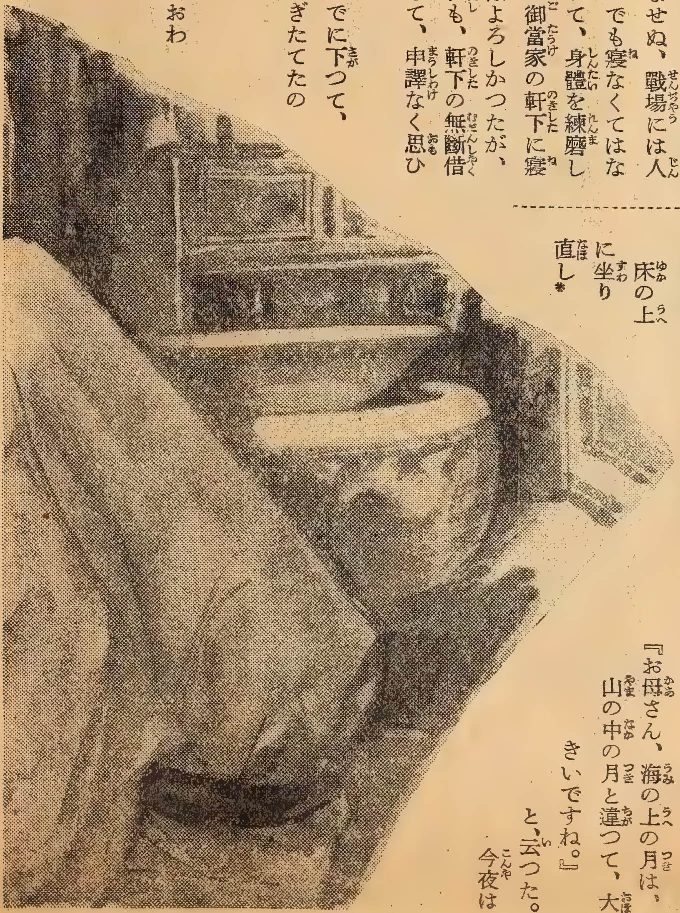
と、一歩退つて、

『飯塚少尉殿に注目！』

きつとなる。

『全く、吾々の誤解でありました、つゝしんで、おわびを致します、……敬禮。』

巡査は、擧手の禮。村の人々は、このむさくるしい服装の野宿少尉の前にたつて、一齊にぴよこんと、御辭儀をした。



月光

床の上に坐り直し＊た善次郎は、つき添ひの母親をふりかへつて、

『お母さん、海の上の月は、山の中の月と違つて、大きいですね。』

と、云つた。

今夜は

恰かも仲秋。月の光は、ガラス越しに、病室へ一ぱいに流れこむ。

相州七里濱の惠風園の一室、山田善次郎が胸の病で、ずつと靜養をつゞけてゐた。

彼は、飯塚少尉と同じやうに、群馬縣北甘樂郡馬山村の出、富岡中學では、飯塚少尉と同級であつた。彼は非常な秀才で、飯塚少尉が、陸軍に志してゐる間に、二高第二部にすすみ、優秀な成績をもつて、東大工科に入學した。だが、その頃から發病して、學事を抛たねばならなかつた。

『今日は、お前、大層元氣のやうだが……、どうした調子かね。』

母親は、小首をかしげてゐた。

『そりや、わけがあるんです。』

善次郎は、枕もとの手紙を見せて、

『これですよ、……水戸の飯塚から快報が入つたんですよ。』

『どういふ?』

『飯塚は、中學の時から、劍道は上手だつたのですが、今度、全師團將校對抗劍道試合で優勝したんださうです、……愉快ぢやありませんか、僕は、あの元氣のいい飯塚が……、俺は、軍人になる軍人になると、口癖のやうに云うてゐた級一番の人氣者だつた飯塚が、目的通り士官學校へ入つて、今では、押しも押されもせぬ少尉殿です、……あの男が、自慢の劍道で、出る敵出る敵を屠りつくして、勝鬨をあげた刹那を考へると、何だか、自分のことのやうに嬉しくなるんです。』

『隨分仲好しだつたからね。……』

　と、母親は、眼をふせた。

（もし、家の子も、飯塚さんの半分ほどでも、健康體であつたら、どんなに仕合せだらう）

　ふいとそんな氣持になる。

西伯利亞出征當時の飯塚中隊長
（西伯利亞ビキンにて）

『お母さん、……あの男は、ほんとうに、竹をわつたやうに、さつぱりして、いつも元氣一ぱいです、飯塚と話をしてゐると、つい引きずり込まれて、僕の病氣なんか、吹飛んで了ふかと思ふくらゐです、あんな氣持のいゝ男はありません、……それで、お母さん、今晩は、好い機會なので、何も彼も云つてしまひますが、僕と飯塚との間には、約束が出來てゐるんですが……』

『そりや、何の事かえ。』

　母親は、眼を睜つた。

『いえ、他でもないんですが……』

　善次郎は、云ひにくさうにしてゐたが、

『實は、うめ子のことです。』

『うめ子が、どうかしたのかえ。』

『いゝえ、……お母さんのやうに分らなくても困つて了ふ、うめ子は、僕の妹ですよ。』

『そりや當り前だろ。』

『又、あれだ、……ぢや、お母さんは、妹の縁談のことを考へたことがあるにちがひない。』

『そりやね、……あれも、もう高崎の女學校を出て、今年は二十二になります、早く嫁づけたいと思つても、お前が、こんな風では……』

　と、聲を落す。

『それ、御覧なさい、僕だつて同じです、お父さんが亡いので、僕として見ると、足りても足らなくてもお父さんがはりをつとめなくては

ならない、それで、自分の妹の配偶者として、立派な男性は居らぬかなと、機會さへあれば、探してゐたんです、その結果は、飯塚より外に其人なしといふ事になつたのです。』

『飯塚さんが、お前、うめ子を貰うて下さるかしら。』

『貰ふも貰はぬもない、僕は飯塚にあつて、ぜひ僕の妹を家内にしてくれ、僕は、かういふ病身だから、いつ倒れるかもしれぬ、さうすれば、のこつた母や妹がたよりにするものは居なくなる、不束ではあるが、女一通りのことは敎へてあるつもりだから、僕を信じて、約束してくれぬかと云うたんです、さうすると、飯塚は、僕の手をぎゆつと握りしめて、よし、安心せい。俺が引きうけたと云うてくれたんです。僕もそれで、胸がスーッとしましたが、まだこの事はお母さんにも話してなかつたので、今夜は打ちあけます。』

『有難う、お前が、そんなにして、あれのことを心配してゐてくれるとは、少しも知らなかつたものでね、わたしは、もう飯塚さんが、うめ子を貰うて下されば、こんな良縁はないと思ふけれど、先きさまがほんとに其氣になつてくれるだらうか。』

『お母さん。』

善次郎は、屹となつて、

『飯塚は、一旦、約束したことを反古にするやうな男ではない、……飯塚は、僕が許した心友です、僕を信ずると同じやうに、飯塚を信じて下さい。』

思はず聲を荒くした。

月の光は、病室に流れこんで、瘦せ哀へた若者の骨立した上半身を蒼白く照出してゐた。

何處かで、チ、チ……と、虫が啼く、月をのせた波の音が、ひびきのやうに遙かに押しよせてくる、靜かな晩である。

春裝

馬山村の常林寺——

山田家の菩提寺であつたが、この頃、墓所に一つ、新しい型の墓が建てられた。鏑川の河原から運んで來た大きな丸い石の上に、『靜林之墓』と深彫に彫つてあるだけ、何の技巧も、何の粉飾もない。

『靜林』とは、若くして逝いた秀才山田善次郎の號である。彼は、病菌のために、あたら五體を蝕まれて、頭腦明晰といはれた身が、何の爲すところもなく、二十五歲を最後にして、空しく地水風火の四大に還元した。

綿々たるつきぬ恨みが、この一塊の石となつた。

山田家では、母親と善次郎の妹うめ子と、二人きりになつたが、さて、かうなると、うめ子への緣談が、ひつきりなしに持ちあがる

『あれは、曾木の飯塚國五郎さんに嫁づくことになつてゐますから……』

——

一應、斷つても、仲人に立たうとする人々は容易に聞入れない。

『曾木の飯塚さんは、まだ貧乏少尉だアね、軍人ッてものは、やりくり中尉にならなくては、奧さんを迎へることは出來ねえことになつて居る。』

『それは、よく存じて居ります。』
『少尉から中尉になるには、何年かゝるか知つてるかね。』
『さア、わたくし共には、さう云ふことは？』
『四年は、かゝりまさあ、四年はね、……さうするつてと、飯塚さんは、去年の十二月任官だから、あと三年たつぷりかゝりまさ、お家のうめ子さんは、今年二十二だから、あと三年となると二十五といふことになつて、出遅れになりまさ、今が丁度よい時で……』
『でも、死んだ善次郎と國五郎さんとは、兄弟も及ばぬほどの仲好しで、二人が取決めた約束ですから……』
『駄目、駄目、そんな事を信じて居つて、三年の間には相手の國五郎さんが、どう變改へるか分つたものぢやねえ、向ふは模樣替へになつても、此方さまは、女性だけに、さうは不可ねえ、ね、山田さん、こゝは、大事な瀬戸際だから、よく考へなさるが好え。』
　さうまで云はれると、母親も、そんな氣がしないでもない。
　これから三年の間には、先方はどう云ふ風になるか分らない、馬鹿正直に、三年の間待ちうけてゐて、その時になつて、先方が出世をするのに都合のよい縁談の口でもかゝれば、斷つてくるかもしれない。さうなつたら、いゝ物笑ひになる。いつそ今の中に、うめ子を嫁づけた方が、先きへ行つて、泣きを見ないで濟むだらうと思つたことも、二度や三度ではなかつた。
　雨の朝、風の夕――
　常林寺の石は、默々として、この頃では青い苔が生えて來た。
　母子にとつては永い三年間であつた。
　飯塚少尉は、つひに、大正三年、中尉に昇進し、宇都宮第六十六聯隊勤務となつた。
　（中尉になつたら！）
　そればかりが、飯塚少尉の目標であつた。
　あけても、くれても、風ばかり吹いてゐる西上州の山の中にも春がノックした。ゴツゴツと骨張つてゐる禪僧が、結跏趺坐してゐるやうな妙義の山にも、紫の法衣をつけた高僧が笑ひかけてゐるやうな榛名の山にも、路傍の名もない雑草すらも、小さな花をつけて、装をとゝのへた。
　その頃靜林之墓の前に立並んだ新郎と新婦と。飯塚中尉は、かくして亡友との約束を果した。

加納部隊長

冬帽

　新家庭に平和の日はつゞいた。
　夫人は、長男をあげ、大正九年には次男をあげて、家運は榮えゆく一方。
　主人の中尉も、第六十六聯隊第十一中隊長代理として、西伯利亞に

出征した。相手は、勞農ロシアの過激派であつた。尼港の高地占領に際し、中尉の拔群の働は、論功行賞の結果『殊勳甲』となり、果然飯塚國五郎の武名が、話題の中心となる。

高崎驛から上野驛へ向ふ三等列車の中にのりこんだ六十四、五の老人、コサック騎兵の被るやうなロシヤ帽をすつぽりと被つて、色のさめた古風なトンビを羽織つて座席についた。木に竹をついだやうで、いやに、帽子だけが眼につく。

『何だらう、あの爺さんの帽子は？』

『變だね、緣なしのシルクハットといふ形だが、何にしても古物らしい。』

乘客の聲が、爺さんの耳にもきれ〴〵に入る。

だが、一向平氣。

『あれはね、えらい御仁なんで……』

高崎あたりから乘込んだ行商人らしいのが、口をはさむ。

『曾木の乃木さんッて、みんなさう云つてゐますがね、……名前は知りませんけど……』

『曾木つてのは、どの邊です。』

『富岡のつゞきで……』

『あゝ成る程、乃木さんのやうな軍人なんだが、今では、隱退してゐらッしやる……、人間ッて、分らんものですね、どう見ても、軍人には見えませんね、高く踏んで、まア田舍の村長さんといふところでせうか……』

勝手な品さだめをしてゐるので、爺さん、むつとしたらしく、

『俺は、軍人ぢやねえでがす。』

いきなり一發、浴せかけた。

『へえ……』

『お前さん方は間違つてゐるでがす、わしは飯塚理八と云ふもんで、軍人は俺の伜の國五郎でがす。』

『それで分りました……、どうも、お見それ申しまして……』

と、行商人は、揉手をしながら、如才なく調子を合はせた。

『つきましては、旦那の被つてゐらッしやるお帽子が、大變珍しいと云つて、みなさんが評判をしておいでゝ……』

『これかな。』

爺さんは、ロシヤ帽をスポリと脫つて、膝の上に置いて、

『これは、珍しいどころか、大變なわけのものでがす、俺の伜の國五郎は、今は、大尉殿でがす。』

『はゝゝゝ。』

大尉殿が、をかしかつたので、みな笑出した。

『中尉の時にな、西伯利亞へ出征してからに、尼港で、えらい事をやつつけました、……敵は、高地に機關銃をすゑて、ダ、ダ、ダ、ゝ、ゝ、と、射ちまくつたもんで、國五郎は此の時、ようし、彼奴等、一人のこらず、ぶち切つてやる、ロシアの機關銃が役に立つか、日本刀が役に立つか、一丁、勝負をきめようといふんでがす、……伜は、さういふ元氣者です。』

『そりや素的だ、……それから、どうなさいました、息子さんは？』

『はい、倅は、刀をぬいたでがす。』

『成る程。』

『先頭に立つたでがす。』

『ふうむ。』

『號令をかけたでがす……敵は、機關銃を向けて射つてくるでがす……この時の距離が、丁度、二十メートル、まア、十間といふところでがす、うわーッと、彈のふる中を突撃でがす、うわーッ、うわーッとな。』

『息子さんは、やられましたか。』

『何うして、倅は、強いでがす、いきなり、機關銃隊へとびこんで、斬りも斬つたり、ほんの眼ばたきする間に八人、やりつけたと云ふでがす。』

『へえ、八人斬りですね。』

『さうでがす、其間に倅のひきゐた中隊の者が片つぱしから、銃劍で芋刺にしましたで、此の高地は、倅の隊で占領したでがす、さうして、みなさん、倅は、天子様から金鵄勳章をいたゞいたでがす……俺が、被つてゐる此の帽子は、倅のシベリヤ土産で、何とも早や、ぬくいものでな、こんな結構なものは、ありましねえ、冬は、これに限るでがす。』

と、見せびらかす。

『さうですか、どりや一つ。』

隣の客が、うけとつて、被つて見ると、ごそりと眼の上までかぶさつた。

『こりやいけない。』

『あはゝゝゝ、かう、あみだに被るで

がす。』
爺さんは、自分の手にとりかへして、再び頭の上へのせた。
日の暮だが、まだ薄明るかつた。
列車は、屋根の上に信越の雪をのせ、上野驛の歩廊に辷りこむ。
理八は、得意さうにロシヤ帽を被つて、列車から下りると、改札口の處に突立つてゐる將校を見つけた。そこで、どら聲をふりあげて、
『國やア……』と來た。
『はッ。』
陸軍大尉殿も、親爺さんの前では、形なしだ。

戰火

此のロシヤ帽は、どんなに理八を喜ばせたかしれなかつた。
『殊勳甲』の働きをした伜が、凱旋の土産にといつて、理八には此のロシヤ帽、母のむつ子には狐の襟巻をもちかへつた。
『俺は、此の帽子をかぶるによつて、お前も、襟巻をするが好い。』
と、むつにすゝめた。

だが、田舎の媼は、只これを見てゐるだけで滿足らしかつた。

大正十五年の冬に、むつは世を去つたが、その枕元には、此の襟巻が飾つてあつた。

理八は、長命だつた。

國五郎大尉が、少佐になり、中佐にすゝみ、昨年二月勳三等に叙せられた際、病床についた。危篤の報せをうけて、中佐は、新しく拜受した勳章をさゝげて、曾木の實家へもどつた。

理八の臨終に間に合つた。

『お父さん、勳三等の勳章でございます。』

かういふと、薄眼をあけて、

『む、む。』と、うなづいて見せた。年は、八十三歳であつた。

伜のシベリヤ土産だといつて、自慢に被つてゐたロシヤ帽は、十八年も被り通したので、もうボロ〳〵になつたのを何度も繕つたので、隨分、古めかしくなつてゐた。

理八は、それをしツかりと胸に抱いて、棺の中に納つた。――

先きに、母をおくり、今又、父を送る。

中佐も早、五十一歳。

此家の長男と生れて、家をつがず、農事の方は、弟の半藏に任せ、只一意、志ざすことの出來たのは、みなこの兩親の健かであつた爲である。

その頃、中佐は、明治大學豫科の配屬將校であつたが、もし、父親が、もう四五年永らへてゐてくれたなら、自分は、最後の武者振を見せて、父親を滿足させることが出來たであらうに、……世の中のことは、何もかも都合よくは行かぬものだと思つた。

時も時、東亞の風雲は、いつ均勢が破られるか分らなかつた。

支那自體が、火藥庫のやうなもので、マッチ一本點火すれば大爆發となる、……近く、さういふ時が來るにちがひない、國五郎の御奉公は、その時なので、出來ることなら父を生かして置きたかつたのだ。

果然！

その年七月七日、蘆溝橋附近に於て支那事變の火蓋は切つて放された。

夜の雨

『山田、行つてくるぞ。』

常林寺の一隅に、さびしく眠る亡友山田善次郎の墓に詣で、義母にも別をつげ、そして又、曾木の亡父母の靈牌にも挨拶をのこして、勇躍征途についた飯塚大佐は、大場鎭攻略前哨戰の華と散つた加納部隊長の後を襲うて、部隊長の重職についた。

腰にとり佩く一劍。

これや、これ、大佐が少尉時代に、全師團對抗將校劍道試合に於て優勝したる際、名譽の表彰として授與された備前長船祐定の銘刀である。

露營の夢を大場鎭
結びもあへず夜の雨
切れかゝりたる卷脚絆
隈なく鎖す朝靄に
かすかにうつる蘇州河

憎きトーチカ蜿蜒と
つらねて待てる中央軍。
部隊長は、軍歌が好きだ。

で、自作の歌を部下兵にうたはせて、進撃又進撃。

大場鎭攻略に赫々たる武名をあげ、上海閘北から曹家宅まで、息つく間もあらせず、敵を追ひまくりつゝ、蘇州河畔の會戰に、〇〇部隊を援助し、嘉定、南翔、太倉、行くところ、向ふところ、頑敵を蹴散らしてすゝむ。わけても、阜寧一帶から、淮陰、淮安に立てこもる十萬の敵を向ふにまはしての一大會戰は、徐州攻略の戰果を擴大して飯塚快速部隊の名を高からしめた。

今年になつて、愈ゝ漢口包圍戰に參加した。

部隊長は、いつも先頭に在り。

暑い時は、裸になつて、元氣よく自作の軍歌を高唱して行進した。

だが、一日の戰鬪がすむと、部隊長は、戰死者の報告をうけねばならなかつた。——

雨が、しと〳〵と降りつゞけてゐる夜である。

『部隊長殿。』

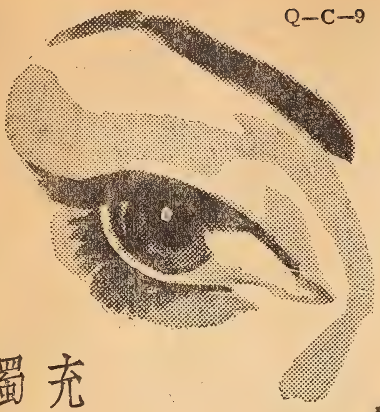
副官がテントの中に入つて來た。

『戰死者か。』

と、部隊長は、顏を暗くした。さういふ時の部隊長は、軍歌をうたつて、裸になつて、元氣よく戰線に立つ時とはまるでちがつてゐる。

悄然として、ポケットから、手帳を取り出すと、上書には『飯塚部

Q—C—9



充血した眼
濁つた眼に

健康な眼にこそ　明眸は輝く

スツキリとした明眸と言へば、先づ健康な眼です。多少でも健康の損はれた眼—たとへば充血した眼濁つた眼、疲れた眼に明眸は生れません。輕い眼病でも油斷ないお手當が必要です。眼の健康の爲に瞳の健康的な輝きを誇る爲に**スマイル**の常用が推奬されて居ります

スマートな琥珀色の携帶用容器入り
二十五錢・四十五錢

總代理店
株式會社 玉置商店

隊戰死者名簿』と認めてある。

『誰か。』

部隊長は、副官の報告する戰死者の生國、姓名を聞いて、萬年筆でしたゝめ終ると、

『又、增えた。』

と、眉をひそめて、いやな顏になる。

山を越え、野を越え、川をわたり、湖水をわたつて幾戰鬪、その度每に、死者の名が記されてゆくのである。

『それから、第〇〇隊の一等兵添田虎松を司令部迄出頭するやうに傳達して下さい。』

『はッ。』

副官の命令で、一等兵添田虎松は、部隊長の前へ現はれた。

『お前は添田一等兵か。』

『はッ。』

『埼玉縣大里郡の出生だね。』

『さうであります。』

『添田勘五郎といふのは、お前の身よりの者か。』

『さうであります、自分の父であります。』

『いかんねえ、……お前は、出征して以來、國元へ手紙を出さんといふではないか。』

『はッ、……軍務が忙しいので、手紙をかく暇がないであります。』

『そんな事があるものか、……お前は、親不孝者である……、どんなに忙しくても、親元に手紙を出して、安否をしらさぬといふ事はない……見い、お前のお父さんは、心配して、わしの處へ手紙を下さつた、見ると、伜から一寸も便がないが、一體元氣で御奉公して居るのでせうか、部隊長さま、おしらせを願ひますとある、……出來ない事をやり通すのが戰爭ぢやないか、……わしは、今、淺草の秋山靜代といふ九つになる女の子から慰問袋をもらつた、それで早速、長文の返事をかいてる處だが、他人でも此の通りにする、まして、お前は、親子ではないか、……便りを怠けてはいかん、……早速、しらせてやりなさい。』

『はッ、自分がわるかつたであります。』

『分つたら、それでよし、わしなどは、便りをしようと思うても、もはや兩親はない、……お前は、仕合はせ者だな……』

添田一等兵は、默然として、引き下つた。

部隊長は、暗い灯の下で少女あての手紙の後をかきつゞけようとして、ペンを執る――。

雨は、まだ止みさうもない。

三本松

待ちに待つたる此の朝は
吳淞クリーク、渡河の日ぞ
思ひ記して我進む
迫擊砲や機關銃
硝烟地雷、その中に
縱橫無盡に驅けめぐり

最前線に於ける戰死直前の飯塚部隊長の勇姿

突貫なせば忽ちに
難なく落つる敵の陣……

忽如、飯塚部隊は、八月二十一日、鄱陽湖西南岸星子城にあらはれて、敵前上陸を敢行した。

九月二日からは、廬山東麓の攻撃である。

『廬山に入つて廬山を見ず』とある、されば、此の山は一つの山ではなく、大小二十餘の群峰から成立つてゐる、奇岩怪石がそゝり立ち、急流が谿間を走つてゐる、裸山ではないが、戰火をあびて、樹と云ふ樹は、赤ちやけて枯死してゐる所が多い。

この重なり合つた山稜に、敵は、鞏固な陣地を構築して、我軍の進撃をくひ止めようとしてゐる。我兵は、四十五度の傾斜になつてゐる岩山へ砲をさへ、高々かつぎあげて、白兵戰をつゞけつゝ、猛烈な突撃戰を開始した。

部隊長は、卷ゲートルに地下足袋をはいて、第一線の突端にたつ。

二日の戰鬪に於て、名譽の戰死をとげた勇士の姓名は、いつものやうに、部隊長の戰死者名簿に記入された。

又十人。

又、二十人。……

名簿中の姓名は、增えてゆく一方。

三日の午後一時。

百三十度から百四十度にわたる燒けつくやうな灼熱の間に、部隊はロック・クライミングそこのけの山岳戰をつゞけた。

部隊長は、廬山の秀峰寺西北方、標高百五十メートルの岩山、三本

果然大評判!!新しく出た『講談社の繪本』

支那事變 海軍大畫報 （五十錢）
（特別讀物）海の荒鷲奮戰美談

荒波けつて進む艦隊や航空母艦の勇姿、陸戰隊の大進軍、海軍航空隊が支那の飛行機を次々にたゝき落してゆく大空中戰など、一枚一枚が子供の魂をうつ勇ましい場面ばかり、これこそ日本の子供には一人殘らず與へて頂きたい大名畫帖です。

偉い評判!!凄い賣行です、一刻も早くお與へ下さい

東京小石川 大日本雄辯會講談社 振替東京三九〇

松の生えた地點に立上り、上半身をむき出しにして、東孤嶺の敵陣地を望んだ。

傍には、阪西大尉、齋藤中尉、三上少尉、西澤少尉、其他十人程の幕僚が居つた。右方高地の敵陣地からは、タン／＼／＼と、チェッコ機關銃の釣瓶撃ち。

『やり居るな。』

見ると、前面の岩壁には、我が兵が、こびりついてゐる、血と汗と泥とで、眞黒になつてゐる。

下手にすゝむと、狙撃されるので、ジッと息をころして、原狀の位置に身を伏せ、いざといはゞ、手榴彈を投げつけて突撃に出でようといふ身構へである。

岩角に、彈が當ると、パシッパシッと、破片になつて飛ぶ。そのたびに、味方の兵は、やられやしないかと、ハラ／＼するが、案外彈丸は命中しない。

我軍の荒鷲が、すぐ眞上に飛來した。

さうすると、敵陣地は、無氣味な位沈默にかへつて、まるで『死』の世界。荒鷲は得意の急降下の體勢にうつる。

黑いものが、ひらりと落ちた。

轟然たる音響と共に、むく／＼／＼烟が、天空に舞上る。戰況は、刻々と、すゝむ。

午後一時二十分！

『當番兵。』部隊長は、當番の大木上等兵をよぶ。

『向うの谿に、敵兵が一人、やられてゐる、敵の連絡兵らしい、……末期の水をのませてやれ。』

『はッ、支那サンでありますか。』

『さうだ、……武士は、相身互だ、昔なら介錯をしてやるところだ、……此の激戰中、彼處まで突進して來た勇氣は感心だ。』

『はッ。』

當番兵は、谷へ降りかゝつた。

部隊長は、祐定の軍刀を杖ついて、全軍を指揮してゐたが、當番兵は、少しばかり不服だ。しかし、行軍中戰死してゐる敵兵が横つて居ると、白紙を顏の上へかぶせて通る物やさしい部隊長だ。

無理もないと思つて、石塊路を十メートルほど驅け下りた途端。

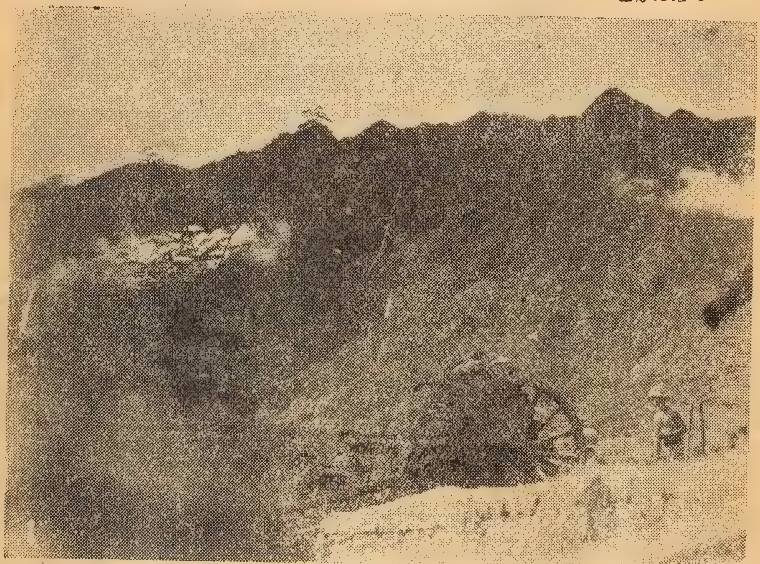
タン〳〵〳〵。

敵のチェッコ機關銃が、火を吐き出した。

(來たな)

當番兵は、自分が狙はれてゐるなと思つて、ハッとした。

この瞬間だつた。



飯塚部隊長戰死の地　香爐峰南部第一高地(飯塚山)

彼は、『うーん。』といふうめき聲が、背後に起つたのを聽いた。

『おや。』

ふりかへると、しまつたッ！　たつた今迄、屹然として、敵を睥睨してゐた裸の部隊長の姿勢がくづれた。

『あ！』

どつと、灌木のしげみの中へ倒れた容子。

彼は、急いで取つて返すと、部隊長は、もう顏色がかはつてゐた。

敵の機關銃の一彈が、右肺部を貫通したのである。

『部隊長殿、しッかりして下さい。』

小原衛生上等兵は、すぐにカンフル注射をしたが、間に合はなかつた。彈丸は、十餘人も居る幕僚の中のたつた一人、えりにえつて、部隊長に命中したのである。

あまりにも、不幸な偶然事實だ。

『部隊長殿。』

西澤(昌道)少尉が、捧持してゐる軍旗の旗竿をぐつとさし出すと部隊長は、手さぐりにさぐつて、左の手でしッかと握りしめた。

しかし、もう聲は出なかつた。

脣だけが、ひきつけるやうに、うごく。

『天……皇……陛……下……萬……歳。』

……………………

この日、部隊長のポケットに收められた『飯塚部隊戰死者名簿』の最後のラインには、部隊長自からの名を血をもつて記入したのである。

ビユーン、ビユーン。

十字砲火の眞只中を縫ふやうにして運ばれてくる擔架、橋本上等兵が先にたち、磯部上等兵が後を支へて、しづ〳〵と陣中をすゝむ。

一軍、寂として聲無く、起立目送の中に、部隊長の屍は、死の凱旋につく。

人も泣き、馬も泣き、草も泣き、木も泣き、路傍の石すらも、聲をあげて泣く。

飴玉

飯塚部隊長未亡人（向つて左）と加納部隊長未亡人

淺草區榊町の秋山榮一長女靜代は、福井小學校の三年生であつた。慰問袋へ入れた自分の手紙に對して『頭の禿げてる兵隊さん』から、便箋十六枚にわたる長い長い返事を貰つた。だが、かいてあることが半分ぐらゐしか分らない、それでそのまゝにして、神棚にあげて置いた。

ところが、飯塚部隊長戰死のニユースが入つてはじめてこの『頭の禿げてる兵隊さん』は、餘人ならぬ飯塚部隊長と判つた。

――兵隊は、慰問袋が一番樂しみのやうです。慰問袋の屆いた日は、兵隊の顏色が、平時とは、一寸違ふのですよ、では、『をぢさん』は兵隊さんではないかと聞きたいでせうね、やつぱり兵隊さんです、だが、頭が禿げてる兵隊さんだよ、君のお父さんよりも、一寸おぢいさんだよ。

をぢさんは、シベリアにも、滿洲にも、戰爭に行つたことがあるが、上海ぐらゐ氣候のよく、日本人の發展に適する土地はないのだよ、君は女の子だからとて、海外に發展の志がなければ、二千六百年代の日本の女性とは認められないよ、先づ女から先きに海外に發展して男を引ぱつてくるくらゐな元氣がのぞましいですね。

かうかいてゐる。

部隊長が、第一線に生命をかけて鬪つてゐるのは、日本の大陸進出のためだ、その人柱となつて血戰してゐるのだ、それを次代の中堅と

なる子供の頭につぎ込まうとして居るのである。

——尋常三年では、まだ九歳か十歳だね、一寸、をぢさんの云ふことは無理だ、が三ッ子の魂百までもといふからね、今からその決心でね、海外發展の出來ないやうな、意氣地のない男には、私は大きくなつて『嫁に行つてやらないわよ』といふ位の決心でやつて下さいね……だが、それよりも、飴玉の方がよいかもしれないね、飴玉なら、をぢさんが、もし凱旋出來たら、一ぱいやるよ、飴玉のやうに支那は勿論、世界をなめて、なくしてしまふのだね、そして世界中の人々に、吾々日本人のやうな幸福の生涯を送る事の出來るやうにしてやるのだね。

これ、云ふところの日本精神だ。

六かしい、理窟をこねまはさなくても、飴玉一つで、立派に説明が出來てゐる。

老人には、老人に向くやうに、婦人には婦人に向くやうに、青年と交れば青年らしく、子供に接すれば子供らしく、一體となつて心を打込んでゆくところに、部隊長の眞面目がある。

部隊長は、死んでも、その精神は、この靜代女に與へた假名まじりの手紙の中に、今も尚生きてゐる。

耳を傾けよ。

漢口は、今、我手に陥ちんとして、高らかにひゞく軍歌のひゞきを。

彼が難攻不落ぞと
賴み切つたるトーチカも
あへなく碎けて傲頑の
蔣も迷夢や覺めにけん
親日政府樹立して
東洋平和の基礎成れり。
八紘一宇の基礎成れり。

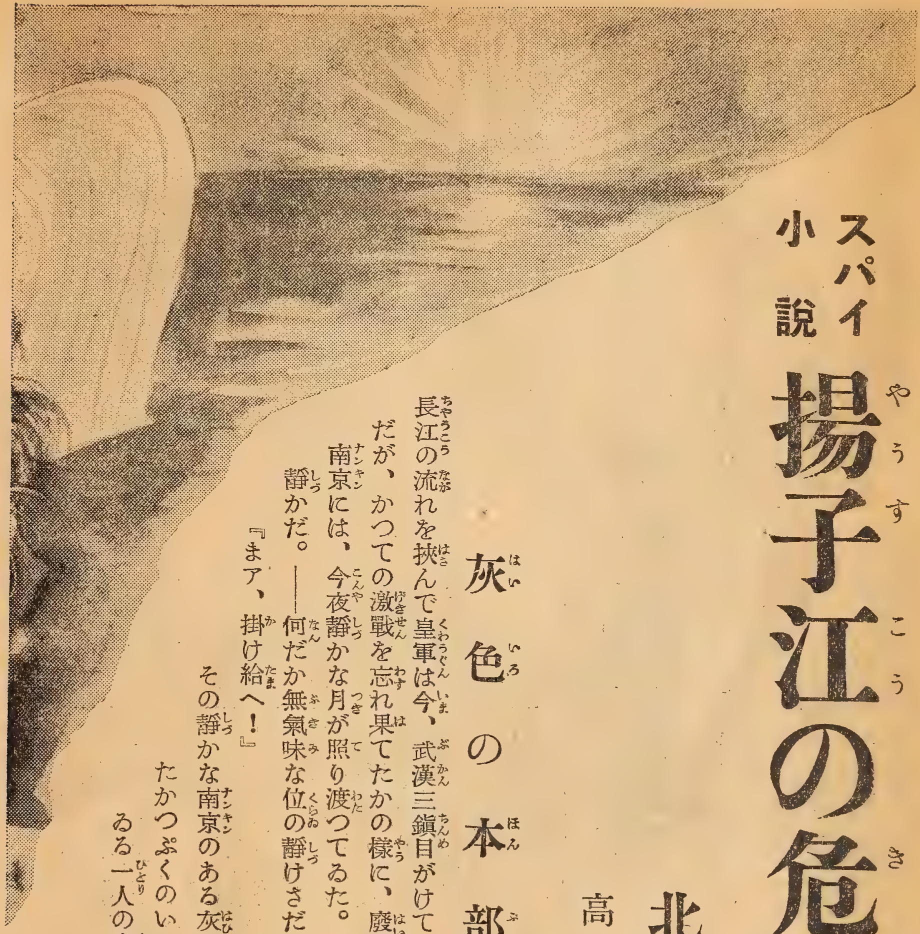
(をはり)

動物園の檻から黒豹が逃げ出した!?

帝都市民を慄へ上らせたあの恐怖、あの騷ぎ、一匹の黒豹でさへ六百萬市民の魂を奪ふ。百獸の王ライオン、剽悍な虎、獰猛な豹、巨大な海獸、かうした猛獸が、我物顏に咆哮出沒する熱帯の大森林、狂瀾の大魔海に、近代装備と人智の最善を盡して展開されるのが猛獸狩だ。これこそ素晴らしいスリルの極致だ。見よ!一讀萬人の血を湧かせ胸躍らせる痛快讀物。

小山荘一郎著
猛獸狩冒險記

定價一圓五十錢
送料内地十四錢
大日本雄辯會講談社發行



スパイ小説

揚子江の危機

北村小松
高木清畫

灰色の本部

長江の流れを挾んで皇軍は今、武漢三鎭目がけて、激浪の樣に押し進みつゝあつた。

だが、かつての激戰を忘れ果てたかの樣に、廢墟に似た姿を横へてゐるかつての抗日首都南京には、今夜靜かな月が照り渡つてゐた。

靜かだ。――何だか無氣味な位の靜けさだ。

『まア、掛け給へ！』

その靜かな南京のある灰色の建物の奥まつた一室で、ガツチリとしたかつぷくのいい人物が、その前に、直立の姿勢をとつてゐる一人の青年に、柔かい聲で云ひながら、傍の椅子の方を大きな手で指した。

『はア、有難うございます。』

青年はカーキ色の青年團服に同じ色の半ズボンをはき、土のしみのついた靴下をつけて、どう見ても從軍記者位にしか見えないが、その言葉つきはテキパキとした軍人調だつた。

『實はね、蕪湖の西の方の江岸地區で、百姓が夜働いてゐたのを見たと云ふ報告がはいつたんだが、どう思ふかね？』

かつぷくのいい人物が、まるで謎でもかけてゐる時の樣な目つきで青年の顏を見上げた。

『さア……』

青年は、一寸眉をひそめて小首をかしげた。

『毎晩でございますか？』

『いや……』

年長の人物が首をふつた。

『それが、ふたしかなんだ。……念のためわしは、この報告をもつて來た奴に、もう一度調査を命じたんだが、あれつきり見たと云ふ返事は來とらん。支那の百姓は夜働かんもんだらう？支那に限らず、百姓と云ふものは、さうぢやないかね？』

『さ樣です！　他人の畑のものでも盜むつもりでなければ、まアそんな事はなからうと存じますが……』

『一體、あの邊に盜む樣な作物のある畑があるのかい？』

『調査して見ませう！』

青年は眉を上げて年長の人物の方へハッキリとした返答をした。

『一つやつて見て貰ひたいねえ……なにしろ今の場合、江岸地帶の事となると、わしの神經はピリピリするのでな、運送船や艦艇の航行が增加しようと云ふ時だ。さうでもなきや河岸で百姓が何をしようと、わしの知つた事ぢやないのだが。』

年長の人物は、さう云つて肩をゆすぶる樣にして笑つた。

『かしこまりました。早速出發致しませう！』

青年はさう云つて今にも出て行きさうな氣配で會釋をした。

『待ち給へ！　明日の朝で結構だ！』

年長の人物は立ち上つた。

『然し、迅速に越した事はございません！行つて參ります！』

『さうか！　そんなら森下を一緒につれて行き給へ！』

青年の決心が堅いのを見てとつた年長の人物はやがて、うなづくと、小さな聲でさう云つた。

『かしこまりました。では行つて參ります！』

青年は又テキパキとした言葉と一緒に年長の人物に會釋して薄暗いこの部屋を出て行つてしまつた。

暗い橫町

青年は、一人の支那服の男と、月夜の下に黑々とその姿を見せてゐる建物と建物との間を足音を忍ばせる樣にして步いてゐた。

皇軍の占據地區とは云へ、夜の南京の街はなほ、獨り步きや小人數の散步には不適當だ、而もこんな皇軍兵士の監視からも離れた樣な暗い橫町など步き廻るのはよつぽどの度胸のある連中か、何等かの使命のある人々でなければ出來ない仕業にちがひない。

『私はね、岸さん。』

支那服の男は、步きながら低い聲で青年の方にさゝやいた。

――して見ると、この從軍記者の樣な姿をした青年は岸と云ふ名なのであらう。

『……外人達が我軍の占據地區內の所有地へ復歸して來てから何か知ら妙に支那人達の一部が刺戟されてゐる樣に思ふんだが……あんたは氣がつきませんか？』

『氣がつかん事はない……』

『外人達が、我が占據地區へ復歸させろさせろと外交問題にまでして歸つて來たがる腹の底は我々考へて見る必要があると思ふな。第一、歸つて見た所で、どれほどの商賣が出來ますか？』

支那服の男が暗の中で鋭く眼を輝かした。

『然し、森下君、ヒユーズのおやぢなど、結構いい調子に商賣してる樣子ぢやないか……』

岸は、意味ありげに苦笑しながら支那服の森下を見返つた。

『それなんですよ。ヴイクター・ヒユーズ商會づて看板はかけ直したが……一向品物が入つて來る樣子はなし……』

『商賣の下準備をしてるのだらう……と、はたぢや思つてるのだらう……』

岸は今度こそハツキリと苦笑した。

『然し、南京には、上海のフランス租界の樣な、やくかいものがないだけに今の所いい樣なものだが……から新らしい奴等が歸つて來るんぢや忙しくつてかなやしない……』

森下も苦笑した。

『然し、ヒユーズの商賣の方は氣をつけておくに越した事はない……品物が入荷したらしたで……』

『さう思ひますね。それにあすこにゐる女はヒユーズの娘だと云ふのだが……ヒユーズに娘があつたのですかね？』

二人が、小さな聲で私語き交した時だつた。横町の暗の中からヒユツ……と夜風を切つて飛んで來たものがある。

『……？』

身を交す樣に路傍の民家の壁に身をつけた岸と森下の首と首との間に一本の劍がザクツ……とつき立つた。

投げ劍だつた。

『誰か、つけてゐますぜ……』

森下が云つた。

『知つてるよ。だからまづこつちの方へ歩いて來たんだ……』

岸がポケツトから拳銃を掴み出しながら云つた。

だが、あとはヒツソリとして人の足音も聞こえなければ、動く人の姿も見えなかつた。

月だけが、崩れた城壁の上にたゞ蒼白くかゝつてゐるばかりだつた。

百姓家

夜が明けると蕪湖西方二哩の道路から外れた江岸地區を、苦力とも百姓ともつかない二人の薄汚い男がノソリノソリと歩いてゐた。――よく見ると二人は昨夜南京の横町を歩いてゐた岸と森下に相違なかつた。

大きな太陽の照らしてゐる低地の彼方には蕪湖の荒寥とした街の草の生えた古塔が見え、江上には九江方面に行くらしい兵站船の姿が動いて行く。

『この邊の話らしいんだがね……』

やがて、額ににじんだ汗をふいた岸が、森下をかへり見て云つた。

『可笑しいな、別に新らしく掘り返した樣な畑も見えないが……』

森下もあたりを見廻して嘆息した。

『向ふに一軒百姓家がある。行つて見ませうか？』

『うむ……』

うなづき合ふと二人は今度は向ふの柳の下にある傾きかけた百姓家の方へゆつくりと歩いて行つた。

『今日は……』

森下が、流暢な支那語で呼んで見たが、家の中からは何の返事もなかつた。

『人が住んでないのかな？』

岸が云つた。

『住んでますよ。横つちよの壁に日の丸の書いてある紙がはつてありますから……』

『はいつて見ようか。』

『えゝ……』

いくら呼んでも人の聲がしないので二人はそのまゝその百姓家の中へはいつて行つて見たが、家の中は、何の變てつもない當り前の汚い支那農夫の住ひだつた。

二人は今までノソノソしてゐた樣子とは打つて變つて敏活に、家中を調べまはつて見たが支那人がよくやる樣に壁にはめ込んである煉瓦を外して見ると銀貨が少しあつたきりで、何の變つたことも無かつた。

『ものにならんね……』

二人は苦笑して又、家の中から出ると、さつきと同じ樣に、ノソリ、ノソリと江岸の方へ歩いて行つてしまつた。

丁度同じ時分南京のヴィクター・ヒューズ商會では、おやぢのヒューズが、いいつやに光つてゐるパイプで、プカーリ、プカリと煙草を吸ひながら茶を飲んでゐた。

『陳つて云ふ支那人が來てゐますよ。』

そこへヒューズの娘だと云ふフロラがはいつて來て云つた。

ヒューズはふかしてゐたパイプを手にとつて、フロラの方をふりかへつたが、すぐ、

『外にお客様が見えなかつたらここへ通して呉れ。』

と返事をした。

フロラは默つてうなづいたまゝ去つて行つたが、しばらくすると、薄汚い姿の支那人が一人、鳥打帽を手にしながらはいつて來た。

『御早うございます。旦那。』
この支那人は見かけによらず、下手な發音ながら英語でかう挨拶した。
『モーニング・陳、何の用かね。』
ヒューズはニコリともしずに陳の方をふりかへつた。
『納屋を一つ建てようと思ふのですが……』
陳が答へた。
『納屋？　……新らしくか？』
『えゝ！』
『それはいかん。』
『でも材料置場がねえんで……』
『家の中に置けばいい……』
ヒューズは眉をひそめた。
『でも……』
陳は困惑した様に目をショボショボさせた。
『お前の家の向ふにもう一軒家があつたらう？　……あれを買つてしまへ、買つてあすこの百姓をどこか奥地へやつてしまへ！』
『さうしませうか？』
『これだけやればウンと云ふだらう！』
ヒューズはお尻のポケットから皮の財布を出すとその中から分厚く札束をつかみ出して陳の方へ差し出した。
陳は、だまつてうなづきながら、その札束を、受けとつて薄汚い上着のポケットの奥へしまひ込んだ。

青い上着

『何の異狀も發見出來ませんが……』
支那服の岸と森下が、その宵、もう一度南京の、あの建物の奥の一室で、かつぷくのいい年長の人物にかう報告した。
『ふむ……』
年長の人物は重々しくうなづいた。
『あの邊の百姓家は全部調べて參つたのですが……』
森下もかう報告した。
『さうか、そりア御苦勞……』
さう云つてゐる所へ、一人の日本人が急ぎ足にはいつて來た。
『運轉手の黄が參りましたが……』
『よし、通して呉れ。』
年長の人物が答へた。
するとまもなく、一人の支那人が、ノソリとこの部屋へはいつて來て、三人の顏を順次に見ながら支那語で云つた。
『ヒューズと云ふあの男が、今日私の自動車で蕪湖へ參りました……』
『ほう？』
年長の人物がうなづいた。
『それで？』
『ヒューズのダンナが自動車を下りると、乞食が一人やつて來て金を貰ひましたがヒューズのダンナは「可哀さうな奴だな……」と獨り言を云ひながら私の自動車に拂ふ位の金をやりました。ダンナ、乞食にお

禮をですよ。私ア、そんな人見た事ありませんや。』
『そいつア面白いね！』
傍から岸がのり出した。
『その乞食は、それからどうしたね……』
『それがね、旦那！　テンからの乞食ぢやねえんで……見てゐると小ちやなサンパンの船頭でしたよ……』
『サンパンの？　……どんな舟だ、そのサンパンは？』
岸が云つた。
『その邊にザラにある舟ですよ。』
『何か旗でも立てたのか？』
『日の丸の旗をたててました。』
『それつきりか！』
『えゝ……』
『そんな事アないだらう？　何か外になかつたか？』
『へえ……』
運轉手は小首をかしげて考へてゐたが、
『さう云へば、竹竿をたてゝ靑い上着を乾してました！』
『さうか！』
岸は、うなづいた。
『それから？』
『ヒューズのダンナは、自動車でドライヴして氣晴らしするんだつて云つて魯港のあたりまで走らせて、そこから南京へひきかへしたんでございます！』

『さうか！　そいつは御苦勞！』
年長の人物はニッコリと笑ふと、机の引出しから金をとり出して黄の方へ放り出した。
『多謝多謝……』
『少いが心づけだ！』
支那人の黄は金を貰ふと何べんも禮を云つて歸つて行つた。
『閣下！　ヒューズの奴をアゲちまひませうか？』
岸が鋭い目つきをしながら年長の人物の方に云つた。
『いきなりぢや困る。又外交問題になると困る。あいつはちやんとしたB國の身分證明書をもつとるからな……』
『然し、國籍はB國でも、あの男は民族的に云へば、蔣介石政府の後盾になつてゐる國際金融資本網を組織してゐるJ人の一人ですよ。』
『そりア分つてるがね、尻尾を出さぬ間はアゲるわけに行かない、J人の牛耳つてゐる國にA國ありB國ありF國ありだからな。ことにB國は何か我々の仕事にケチをつけちや世界の輿論を我々に惡く惡く動く樣にする機會ばかりねらつとるんだからね……』
年長の人物は苦々しさうに重く首を振つた。
『ぢやとにかく今の場合、その竹竿に靑い上着を乾してゐるサンパンを捕へる手配を致しませう。さうすりア何か、その乞食船頭に泥を吐かせられるかも知れません……』
岸はさう云ふと、大股にこの部屋を出て行つてしまつた。

怪ジャンク

長江一體に渡つて漁船、ジヤンク、サンパンの臨檢は急激な活動を示し出した。

第一日の臨檢では我々の活動にかゝはらず何の得る所も無かつた。勿論、青い上着を乾したサンパンなど、どこへ行つてしまつたか發見する事が出來ない。

だが、第二日目、海軍のある汽艇が、實に驚くべき發見をしたのである。

丁度それは夜あけ方の時だつた。その汽艇は蕪湖上流三浬の所で、一隻の大型のジヤンクが始終變化する河底の砂に坐洲してゐるのを發見した。汽艇の人々は勿論、そのジヤンクの中をくまなく調査した事は云ふまでもない。だが、舟の中には何一つ變つた事はなく日の丸の旗さへ朝風になびかせてゐるのである。だが、一行の指揮官は、船底の深い艦艇でもないジヤンクが、こんな所に坐洲する事が不思議だと思つた。で、調べた結果は、正に一行を仰天させるに充分だつた。

何と、そのジヤンクは、船底にB國製の三個の魚形水雷を抱いてゐたのである。

どこへその魚雷を運搬するのか、知つてゐたのはそのジヤンクの親方一人だけだつたらしいが、その親方は、魚雷が發見されると同時に一行にピストルを亂射し、それに應戰した一行の彈丸に射殺されて揚子江の濁流の中に轉落してしまつたのだから、何事も謎に包まれたまゝ魚雷だけは押收されてしまつた。

この報告が、一層、南京のあの灰色の建物の奥の一室にゐる年長の人物の心に深い心痛を與へたのは事實だ。

皇軍の武漢攻略が開始され、大擧運送船が長江を遡航しようとする今の場合なのである。而も江岸地區の安全性についての裏面からの保證は、この灰色の建物の中に働いてゐる人達の双肩にになはれてゐるのだ。

『この地區に居る怪しい奴は、片つぱしからアゲてしまひませう！』

顔一杯に緊張の色を見せた岸が、年長の人物の前で云つた。

『それより外に今は方法がございません。』

『方法が無いかね？』

ぐつと眉をひそめながら年長の人物が云つた。

『青い上着を乾したサンパンが捕らないとなれば、そのサンパンの船頭に金をやつた、ヒユーズを捕へて見る外ありません。そのサンパンと、あの魚雷を抱いたジヤンクとは、全く無關係とは思へませんから……』

岸は力強い聲で云つた。

『ヒユーズの事は私におまかせ下さいませんか？』

『まかせてもよい。だが、君にヒユーズにかゝり切られちや困る。』

『勿論、私の全力は八方へ配るつもりでございます！』

岸は、何事か決心する樣にさう云ひ切つたのだつた。

丁度その時分、ヴイクター・ヒユーズ商會には、B國の身分證明書をもつた一人の『商人』が上海から訪問して來てゐた。——商人にしては眼光の鋭い、背の高い傲慢な顔つきの男だつたが……

この『商人』は奥の部屋で長い間ヒユーズと何か密談をしてゐたが、その間、ヒユーズはまるで上官に對する部下の樣な態度をこの『商人』

に示してゐるのは不思議だつた。
『商人』はやがて、
『ではよろしく……』
とヒューズをにらみつける樣な眼光で別れの挨拶をし、上等の葉巻に火をつけると、そのまゝブラリとヒューズ商會を出て行つてしまつた。
　そのあとでヒューズは憂鬱さうな顏つきで娘だと云ふフロラと又長い事話をつゞけてゐたが、その間に太陽は初秋の空を渡つて、ぐつと西にかたむいて行つた。

これも戰術

　宵暗がせまると、この頃はやつてゐる酒場『南京』は一杯の人だつた。支那人、日本人、そして一番上等な席には、パイプをガチリと嚙んだまゝあのヒューズがビールを飲んでゐる。
　ヒューズはビールを飲みながら、時々射る樣な視線を傍の卓子越しになげかけてゐる。その視線の向く所には、何と、あの岸と森下が、まるでヒューズがゐる事などに氣がつかない樣に盛に馬鹿つ話をとばしながら酒を飲んでゐるのである。
　その夕方から、南京一帶にかけて峻嚴な、不逞支那人狩りが開始され、怪しいとにらまれた者は片つぱしから身許しらべをされてゐたのだが、ヒューズや岸のこののんきさはどうしたと云ふ事であらう。
　岸と森下の卓子の傍には、土木の方の仕事で來てゐるらしい日本人の群が、盛に酒を飲んで氣焰を上げてゐる。
　やがて、その中の精悍な顏つきをした男がフラフラと便所の方へ立つて行つた。
　すると岸もノッソリと立ち上つて同じ便所へ行くのである。
　やがて、岸が歸つて來た。
　それから眞赤な顏をした精悍な顏つきの男が歸つて來た。が、彼はどうしたはずみか通り道の傍で盛に飲んでゐた別の日本人の卓子へけつまづいて、その上のビールやコップをひつくり返してしまつた。
『やいやい若えの！』
　ひつくりかへされた連中は殺氣立つた。
『どうしたのかね！』
　人の卓子の上のものをひつくり返しておきながら、この男は、どこを風が吹くと云ふ樣に詫び事一つ云はないのである。
『な、な、なにが、どうしたのかねだッ。やい、手前日本人か！』
『あゝ日本人だよ！　お前も日本人か？』
　酒場の中は殺氣立つて來た。賣り言葉に買ひ言葉で、その中にどつ

護身犬と番犬には日本犬を
日本犬
全國的有名普及の元祖

●柴犬
●猪犬
●秋田犬
●仔犬澤山居ります
●地方にも送ります
●好評を受けています
●鮮滿臺灣樺太安着
ラヂオ原稿
犬のカタログ
秘訣法
仔犬定價表
冨士で見たと申込めば無代で送る
◎訓練自由自在
◎此の本一册何でも解る
◎日本犬專門の本他になし
◎賣行十萬册素晴しい
訓練法
訓練飼育日本犬見方圖解と寫眞入
日本犬總知識附 六十錢送料八錢
◎獵犬には日本犬に勝るものなし
東京市澁谷區千駄ケ谷三丁目五四九
日本犬柴犬研究所
藥劑師 磯貝晴雄
振替東京四〇七四三番
日本犬は世界的大流行・利口な事世界一
犬を飼ふなら日本犬を

ちが手を出したのか、凄じい物音と一緒に卓子がひつくりかへるとたちまち大喧嘩が初まつてしまつた。

數人が一團となつて暴れまはる。その亂闘の渦巻きがたちまち岸や森下の卓子をけたふして、ヒューズが悠然と飲んでゐた卓子を、その渦巻の中にのみ込んでしまつた。

ヒューズは驚いてそこからぬけ出さうとしたがだめだつた。亂闘と喚叫の間にヒューズは、もみくちやになりながら、これも腕をふりまはしてあたりの日本人をつきのけ出した。

そこへ物音を聞いたのか、警戒の憲兵が、銃劒を下げてはいつて來た。

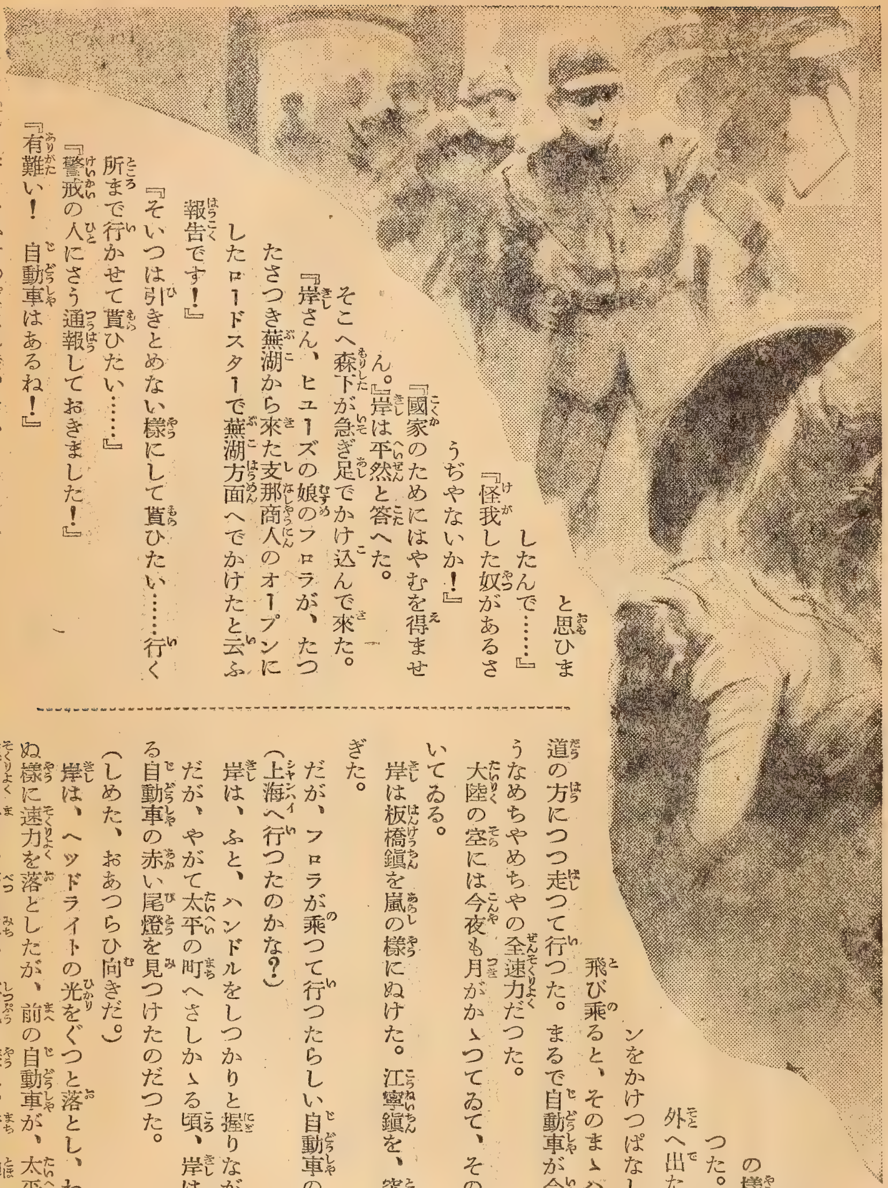
かうなつては、も早誰も逃れつこない。一網打盡である。

ヒューズも岸も森下も有無を云はさず、根こそぎ憲兵に引きたてられて行つてしまつた。

尾行

「驚いたね、君のやり口には……」年長の人物はノソリとはいつて來た岸に苦笑しながら云つた。

「出來るだけ自然にアゲちまはう



と思ひましたんで……』

『怪我した奴があるさうぢやないか！』

『國家のためにはやむを得ません。』岸は平然と答へた。

そこへ森下が急ぎ足でかけ込んで來た。

『岸さん、ヒューズの娘のフロラが、たつたさつき蕪湖から來た支那商人のオープンにしたロードスターで蕪湖方面へでかけたと云ふ報告です！』

『そいつは引きとめない樣にして貰ひたい……行く所まで行かせて貰ひたい……』

『警戒の人にさう通報しておきました！』

『有難い！ 自動車はあるね！』

『エンヂンをかけつぱなしで、おいてあります！』

『閣下！ では行つて參ります！』

岸は、それつきり飛鳥の樣に外へ飛び出して行つた。

外へ出た岸は、森下が、エンヂンをかけつぱなしにしておいた自動車に飛び乘ると、そのまゝハンドルを切つて蕪湖街道の方につつ走つて行つた。まるで自動車が今にもこはれてしまひさうなめちやめちやの全速力だつた。

大陸の空には今夜も月がかゝつてゐて、その下に街道は灰色につゞいてゐる。

岸は板橋鎭を嵐の樣にぬけた。江寧鎭を、突破した。蕪湖も通りすぎた。

だが、フロラが乘つて行つたらしい自動車の赤い尾燈は見えない。

（上海へ行つたのかな？）

岸は、ふと、ハンドルをしつかりと握りながら、それを思つた。

だが、やがて太平の町へさしかゝる頃、岸は、はるかに疾走してゐる自動車の赤い尾燈を見つけたのだつた。

（しめた、おあつらひ向きだ。）

岸は、ヘッドライトの光をぐつと落とし、わざと前の車に追ひつかぬ樣に速力を落としたが、前の自動車が、太平の街へはいると、俄然速力を増し、別の道から疾風の樣に、街を通り鐵橋めがけて通過して

しまつた。
岸は尾燈をつけてゐなかつた。
疾走しながら、ふりかへつて見ると、後方にゆつくりと走つて來る自動車のヘッドライトが見える。
（しめた、やつぱり思つた通り蕪湖を通過して奴等こつちへ來る。）
岸は一人うなづくと、そのまゝ全速力で走りつゞけて行くのだつた。

白い腕

蕪湖を一哩程西へすぎた所だつた。
フロラは一人の支那人と肩をならべ、中天にかゝつた月を眺めながら幌を外したロードスターでドライヴして行く。月光がさへぎるものもなく二人の上にふりそゝいでゐる――フロラは小聲に歌すら歌つてゐるのである。
『おや……』
今まで、うつとりした樣にハンドルを握つてゐた支那人が自動車のブレーキを踏んだ。
『どうしたの？』
びつくりした樣に前方を見た二人の目に、道傍の溝にはまり込んでゐる自動車のヘッドライトが急に光つたのが見えたのだ。
『誰か、故障を起してる樣だ！』
支那人がつぶやいた。
と、自動車の光芒の中に一人の青年がとび出して來てフロラ達の車に止れの合圖をするのである。――無論それは岸の姿だつた。

『日本人の新聞記者だわ！』
フロラが眉をひそめた。
『止めなきや惡い！』
『かまふもんか、日本軍人でなきや！』
フロラが吐き出す樣に云つた。
『然し止めないと私が困る。』
支那人は、たうとう岸の前に車をとめた。
『すみません、御邪魔をして……』
だが、岸の言葉はこんな風な調子だつた。
『自動車が溝にはまつて動かなくなつて弱つてるんです……すみませんが魯港までゝいゝから乘せて行つて頂けませんか？』
岸はさも弱り切つた樣に懇願した。
『のせて行つて上げよう……どうせ後のラムブルシートがあいてゐるんだから……』
支那人はさう云つて車を下りながら自分のロードスターの後の席の蓋をあけようとした、すると、なぜか、フロラがそれを押し止めるのである。
『ここでいいわ！　ここの方がシートが柔かいし後はほこりが一杯だわ！　日本の御方、ここへいらつしやいな、眞中へのせて上げるわ。』
さう云つて自分も車から下りて、岸を、運轉臺に誘ふのだ。
『いや、僕は、ステップで結構です！』
岸が云ふのを、フロラは笑つた。
『道が惡いんですもの、ステップぢや振り落されますわ。どうぞ！』

フロラは、たうとう端つこでいいと云ふ岸を、運轉してゐる支那人と自分との間にのせて扉をしめてしまつた。

車は、三人をのせたまゝ再び走り出した。

『すみません、おかげ樣で助かりました。』

『どう致しまして……』

三人の話はプツンと切れた。

『河に月が映つてゐる……御覽なさい！』

吐息の樣に云ひながらフロラは右手を出して揚子江の方を指しながら、左手を、岸の背の後へ伸ばし丁度折りたゝんである幌の上にのせるのである。きうくつだつたせゐかも知れない。

だが、岸は、フロラの指す方を眺めながらも彼女の一寸した體の動きにも注意をおこたつてはゐないのである。

『戰爭のある土地の景色とは思へないわ。ホラ……あの柳の美しい事……』

フロラは岸の方に重ねて話しかける。

岸は、今自分達が走つてゐるのは、つい最近森下と二人で調査に來た百姓家のある近所だと云ふ事を悟つてゐた。と同時に、なぜ、フロラが、自分の注意を、右手の方に誘ふか、と云ふ事も考へてゐたのだ。

(右手に注意を誘はれる時は左手を警戒しなければならない。)

岸は、長年の經驗から、さう云ふ事を知つてゐた、だから岸は、フロラが、月光に白く豐かに見える彼女の右手の指す景色よりも、自分の背中の後に感じられるフロラの左手に注意を集中してゐるのだつた。

『あら、向ふに動いてるの日本の汽艇かしら……』

フロラが、さう云つて更に右手をさしのべた時、岸は、逆にフロラの左手が本の一寸動いたのを知つた。

それは物を落とす時の動きだ！　岸は、その一寸したフロラの左手の動きにそれを感じとつたのである。

(フロラは何か、彼女の手から落とした。——最初、夜百姓が働いてゐた、と云ふ報告の來た地點の進行で……)

岸の頭にそれがピンと來た。

(フロラは何物かを落すために、ことさらに後方のラムブルシートをあけて自分をのせる事を拒絕したのだ。すると、彼女の落したものは何か知ら秘密を含んでゐるものに相違ない……)

岸は今は一時も早くこの自動車から下りたかつた。だが、自分の行動を怪まれる事は警戒しなければならない。

岸は魯港が見えるまで氣が氣ではなかつた。

『もうここで澤山です。』

岸は、魯港の入口で岸はフロラにかう云つて自動車を止めて貰つた。

『ここで下りてどうなさるの？』

『誰か人をたのんであの自動車を引き上げに行つて貰ひます！』

岸はさう云つて車を下りた。

『どうも有難う、左樣なら……』

『左樣なら！』

フロラは手を振つた。ロードスターは、なほ、西方へ走つて行く。

フロラの車が遠ざかると、岸は靴をぬいだ。そして裸足になると、今來た道を蕪湖の方へ一散に驅け出して行つた。

影

岸は息が切れさうだつた。――だが走りつゞけた。あのフロラが落したものを、誰か、（多分それは連絡員であらう。）が拾はない中に自分の手に入れたいと云ふ一心で走りつゞけた。足音のしない樣に、裸足になつたまゝ……

やがて岸は、見覺えのある、あの百姓家の近所まで近づいて來た。

ふと月光の中にすかし見ると百姓家の方へ何か黒いものが動いて行く。

岸は、走るのを止めて身をひくめた。――胸の中で心臟の鼓動が、早鐘をたゝく樣だ。

ふりかへつて見るとはるか後方に自動車のヘッドライトが二つ。――フロラが車を返して來たのにちがひない。

岸は、野鼠の樣に身を跳らして道路から畑地へ身をひそめながら、百姓家の方に、動いて行く黒い影の方へ這ひ出して行つた。

自動車の音が、夜の靜寂を破つてゆつくりと近づいて來る。岸は畑地に身を伏してぢつとその音を聞いた。

やがてヘッドライトの光芒が、畑地をかすめると、警笛の音を三つ響かせた。

誰も通つてゐないこんな荒寥とした道で、なぜ警笛など鳴らすのであらう。

岸はぢつと身をひそめながら靜に首をもたげた。

自動車は道の眞中に止つた樣だ。だが、もう一度、三つ警笛を鳴らすと、そのまゝ、蕪湖の方へゆつくりと

走つて行つてしまつた。

あとは月光と靜寂そのものがあるばかり、今夜は、夜間爆撃に行く飛行機の音一つ聞こえない。

岸は、やうやく走りつゞけた胸の苦しさを靜めたが、フロラの落したものはすでに、あの百姓家の方へ動いて行つた黒い影に拾はれたものと思はなければならない。だがあの黒い影を認めただけでも幸である。今は、單身あの百姓家を再檢査して見なければならない時だ。

岸は、秘かに携帯してゐた拳銃の安全器を外し、更に靜かに、靜かに百姓家の方へ這ひ寄つて行くのだつた。

日本人の心

岸は遂に百姓家の戸口にまで忍びよつた。

耳をすまして中の様子を伺つたが、コトとの音もしない。

家の中は眞暗である。

だが、あの黒い影は、たしかに、この家の中にはいつたにちがひない。

岸は決心した。そして拳銃をぢつとかまへながら、靜に戸口を押しあけて見た。

家の中には誰もゐなかつた。たゞ、ゆがんだ窓から水の様に月光が流れ込んでゐるばかり……

岸はほつと吐息をした。それは、安心の吐息ではなく、むしろ落膽の吐息だつた。

岸は、ポケットの小型懐中電燈を出して家の中を照らした。――この前、森下と來た時と何の變りもない。だが、岸は、ふと、何かに氣

がついた様に、土間に懐中電燈の光をあてながら身をかゞめた。
生々しい土くれがほんの少し、土間のアンペラのはしにくつついてゐるのである。
（可笑しいぞ！）
岸はそのアンペラを、用心深くめくり上げた。すると、そのアンペラの下には、地下室へ通じる上げ蓋の様な板張りの蓋があるのである。
『地下室かな？』
岸が思つた時だつた。その蓋の下に、何か人の足音の様な氣配が感じられた。
岸は懐中電燈の光を消して、そつとアンペラをもとへ返し、身をしりぞけて、土壁に、そつと背をもたせながら拳銃をかまへて待つた。
誰が來るか？　この下に何があるか？
固唾をのんで待つ事しばし……やがて、小さな音をたて、土間が、アンペラごともち上つた。
窓からはいる月光でその動きが見えるのである。
次には、そのもち上つたアンペラの下から一人の人影が這ひ出して來た。
その人影は、やがて、そつと今出て來た穴の上にアンペラを敷きなほすと、煙草を一本出して、シユツとマツチをすつた。
『聲を出すなツ！　聲を出したら射殺するぞ。』
暗の中から鋭い、低い支那語でかう云はれて、その人影は、マツチを手にしたまゝ、慄然と立ちすくんだ。
『外へ出ろツ！』
同時にパツと懐中電燈の光が、その人影の顔を照らした。
立ちすくんでゐた男は、いつか、ヒユーズの所へ來てゐた、あの支那人の黄だつた。
『貴、貴様は誰だ！』
やつと黄が聲を出した。
『出ろ！』
拳銃が黄のわき腹にピタリとあたつた。
『東洋鬼だな！』
黄の聲が憎々しげに高まつた。
『ちがふ、日本人だ！　君達の友達の日本人だ！』
岸の聲は凛としてゐた。
『日本人は中國の仇だ！　殺すなら、この場で殺せ！』
黄がふるへながら云つた。
『おい！　お前はまだ抗日の迷夢の醒めない可愛さうな男だな！　俺はお前を殺さうとは云はない！　俺はお前が、あのＪ人の奴等の手先になつて何をやつてゐたか聞きたいのだ！　さ、この下に、この下の地下室に、誰がゐるか、何があるか云つて見給へ！』
『俺は八ツ裂きにされても言はないぞ！　中國を焦土とした敵人には！』
黄の顔色は蒼白だつた。
『おい、中國を焦土と化したのは日本人ぢやないぞ！　金の力で中國の血を、最後の一滴まで啜らうとする異民族こそ中國の敵人ぢやないか！　君達は、いたづらに抗日を叫ぶが、抗日の思想は誰が作つた。

君達は「我等の英雄蒋介石だ」と云ふだらう。だが、國民政府を作り、蒋介石に抗日を叫ばしたのは誰だ！　君達はまだ氣がつかないのか、いゝか！　國民政府を作り上げたのは、その政府を自分のものとして君達の支那を最後まで搾取しようとするJ人財閥ぢやないか？　……君達の「英雄蒋介石」は君達の幸福を約束したか？　……違ふ。蒋介石はJ人財閥に踊らされて幣制改革をした。幣制改革は君達に何をもたらしたか？　君達に紙幣と云ふ紙片を與へ、君達の金銀をまき上げてJ財閥に渡すことによつて、その利益の半分を山分けして貰つてゐるではないか？　君達の叫ぶ「抗日」は、東洋民族の團結を恐れるJ國際財閥の作り上げた呪文だ。君達はそれに氣がつかないのか？　……君達の金銀は今どこにある。君達の國にあるか？　違ふ、君達の幸福のためになるべき金銀はヨーロッパのJ人財閥の手に渡つてしまつてゐるではないか？　君達は、我々東洋民族を相剋せしめて、東洋民族そのものを足下に押へつけようとしてゐる敵人が、君達のすぐ後にゐる事に氣がつかぬのか？　我々の軍隊は君達を敵とはしてゐない、君達の後にかくれて、東洋民族の團結を破壞しようとしてゐる異民族を敵としてゐるのだ！　君達は、君達自身の敵人であるものを倒さうとする我々を敵人と誤認してゐるのだ、それが君達には分らないのか？……俺のこの拳銃は君の生命をねらつてはゐないぞ！　君の心の中にある抗日の迷夢をねらつてゐるんだ！』

『……………』

黄は蒼白な顔のまゝ無言だつた。

『分らないか？　支那を侵略してゐるものは誰だか分らないのか？侵略とは君達の血を啜り肉を喰つて肥え太る奴等の仕わざの事ではないか？　友情を目醒めさせるには鐵拳が必要の場合がある事を君は知らぬのか？　印度の民衆の血と肉を啜りつくしたJ人財閥が、今度はその資本の血路を君達の支那に求めて君達の血と肉を侵略しつゝあるのが分らないのか？　蒋介石は、君達支那人の幸福のためになるべき資源を、ことごとく經濟的侵略者の手に渡し、君達をその侵略者の手から救はうとさしのべた我々の手にかへつて刄をつき立てさせてゐるではないか？　友情に刄をかへし、搾取者に、君達の大地の寶を渡して君達のどこに幸福がある……』

『……………』

黄はやはり無言だつた。

岸は今までつき出してゐた拳銃をポケットに入れてしまつた。

『おい、君は善良な中國の友人ぢやないか？　なぜ、迷夢から醒めて我々支那の男の手が握れないんだ！』

岸は、今まで拳銃を握つてゐた手をさしのべて力なくたれてゐた黄の手を握つた。

『……あ、あなたは、この俺を殺さないのか？』

やがて黄は岸に握られた手を振りはなさうともせずにふるへる聲で云つた。

『我々日本人は善良な友人を殺すために武器をもつてゐるのではない。友人を奸惡な民族の手から守る爲に武器を手にしてゐるのだ！』

『……俺は、日本人を知らなかつた！』

やがて再び黄がふるへ聲で云つた。

『我々は日本人が我々の土地を侵略すると教へられて來た！』
『違ふ、見給へ、どこを我々が侵略したか？……我々は、たゞ、外敵から君達の大地を守つてゐるだけだ。北支でもこの一帶の土地でも百姓は我々に何の搾取もされずに耕作を始めてゐるではないか？　街の商人達は安心して家業を營み始めてゐるではないか？　侵略とは、支那の土地を歩いてゐる日本人の行動の事ではない。侵略とは坐してゐて君達の幸福を横取りする奴等の行爲の事だ！』
岸の言葉は火を吐く樣な熱をおびてゐるのだつた。
『俺は日本人を知らなかつた！』
再び黃が嘆息の樣な聲を放つた。

失はれた武器

『この下には地下道がある！』
やがて黃は、岸の熱意に打たれたのか、自ら聲を低めて云つた。
『ヒューズが、この地下道の向ふにゐる十二人の人間を動かしてゐる！　俺は今夜もヒューズからのメッセージを地の底にゐる奴等に渡した。それには「日本の大軍を輸送する汽船が明朝長江を通る、準備せよ」と書いてあつた。』
『よし……ぢや、俺が、その十二人の奴等の所へ行く。』
岸が云つた。
『一人ぢや危い！』
黃は、すでにアンペラをめくり、地下道への蓋を上げてゐる岸に云つた。

『俺が案內する！　俺なら皆安心する！　俺が行く。』
黃が岸を押しのける樣にして云つた。
『俺は日本人を知らなかつた！』
黃はさうつぶやきながら地下道へ下り立つた。
『俺が行つて皆を說いて來る。皆をここへ引き上げさせて來る。』
『然し、君一人では！』
『大丈夫だ。若しだめだつたら、俺は、地下室を破壞する。地下室は江岸の柳のかげに口を開いてゐる。そこに魚雷發射管が二門出來てゐる……』
『……？』
無言のまゝ岸は驚愕の目をみはらずにはゐられなかつた。
『俺は、どうせ殺される命の持主だ。君に背けば俺は君の敵人として殺される運命だつた。地下室にゐる仲間に俺の話を聞く耳がなければ、俺は奸漢として殺される。だが、俺の希ひは中國の人間の幸福を求める事だつた。俺は、中國人の幸福が何か、今分り始めた樣な氣がする。拳銃を貸して下さい。俺は初めから中國の幸福のためには人柱になる覺悟で來た男だ。』
『よし、俺は君を男と見込んで貸してやる！』
岸は大膽にも自分の拳銃を黃の手に渡した。もし、黃が、次の瞬間その拳銃を岸に向けたら……
岸は然し平然と動かない。黃は拳銃をうけとつた。
『日本の友人！　もし俺が歸らなかつたら、俺の墓を、この長江のほとりに建てゝ呉れ。「愛國の志士黃民峰ここに眠る」と書いて！』

『よし、引きうけた。』
黄は、そのまゝ、地下室の中に姿を消して行つた。
それから一時間。もう月は西に沒し、東天はほの白くあけ始めた。
戸外に出てふと長江を眺めた岸の眼に數條の遠い煙――皇軍の輸送船の群が遡船して來るのだ。
『危機だ！ もし黄が自分を裏切つて、あの輸送船隊がここへ來た時魚雷が發射されたら……』
岸はもはや黄を待つてゐる事は出來なかつた。――たゞ一つの武器は黄に渡してしまつた、今は素手だがこの秘密の地下道へ踊り込むの外ない。南京へとつて歸し、あの輸送船隊の航行を止めるには遲すぎる。

病毒とふる血

古い病毒から起る頭重耳鳴・肩凝り吹出物等に沖も評判のふる血療法

病毒は感染當時の手當で治つたものと思つて居るのに其後どうも身體がハッキリせず、頭重、耳鳴、肩凝り、脫毛、吹出物等に惱む方々は、古醫學で云ふ『ふる血』の患ですからフルチ錠を服用すれば毒のある濁つた血液（ふる血）が綺麗になり、血行は良くなつて病苦を忘れ、無毒の健康體になる事が出來ます。

藥價は三圓・五圓・十圓で全國の有名藥店にあります。

古い病毒に フルチ錠

決心した岸は、黄のあとを追つて地下道へもぐり込まうとした、その瞬間だつた。天地も破れる樣な凄まじい爆音とともに、江岸の一部が噴火山の樣に爆破してしまつた。
（あゝ、たうとう皆は、黄の說に納得出來なかつたんだ！ 黄が、たうとう最後の手段を講じたのだ！）
岸は、地下道をつたはつて、この土間に開いた入口まで硝煙がのぼり出すのを見ながら力なく木の蓋を閉ざした。
屋外に出ると、數百米向ふの江岸が、ポッカリとした穴をあけて、まだ、そこから黒煙が、長江の方に流れてゐる。
（黄！ よくやつて呉れた。――中國の人間が、中國の志士が、皆君の樣に、我々日本人の心を分つて呉れる日が來れば、東洋は永遠の平和に結ばれるのだ！ 俺は、きつと、その日が來る事を信じるぞ！
黄！ 約束の墓標はきつと、この俺の手で立ててやるからな！）
岸は、しばらく瞑目して、今は姿なく黄の魂にかう獨り言したのだつた。
やがて、茫然と立ちつくしてゐる岸の前――危機の去つた揚子江を皇軍の輸送船は堂々と漢江さして遡航して行くのだつた。

× × ×

岸達の手で捕へられたヒューズと、その娘と云ふフロラが我軍の手で軍法會議にまはされたのは、それから間もない事であつた。
その後、ヒューズとフロラがどうなつたか岸は知らないが、岸自身は、更に、皇軍占據地區內を今もなほ東洋永遠の平和のために、血の出る樣な活躍をつゞけてゐる事は確かである。
（をはり）

家庭詩

下駄時代

サトウ・ハチロー

よく見ておいで　お前達
鼻緒のすげ方　教へませう
小春日和の　濡れ縁で
祖母をとりまく　わが一家

垣根にずらりと　並んでる
今朝方洗ツた　下駄の數
母の足駄に　駒下駄に
弟のほう歯に　板草履
姉のサンダル　妹の
紅い鼻緒の　日和下駄

下駄オンパレード　すごいぞと
輕口いうて　父もゐる

おぼえておけば
　人さまの
鼻緒をすげても
　あげられる
途中で切れても
　困らない
祖母はかく言ひ
　すげ終へぬ

『うまいもんだね』『うまいわ』と
みんなの口から　もれる聲
見たか見たかと　手並をば
ほめてたゝへて　百舌も啼く

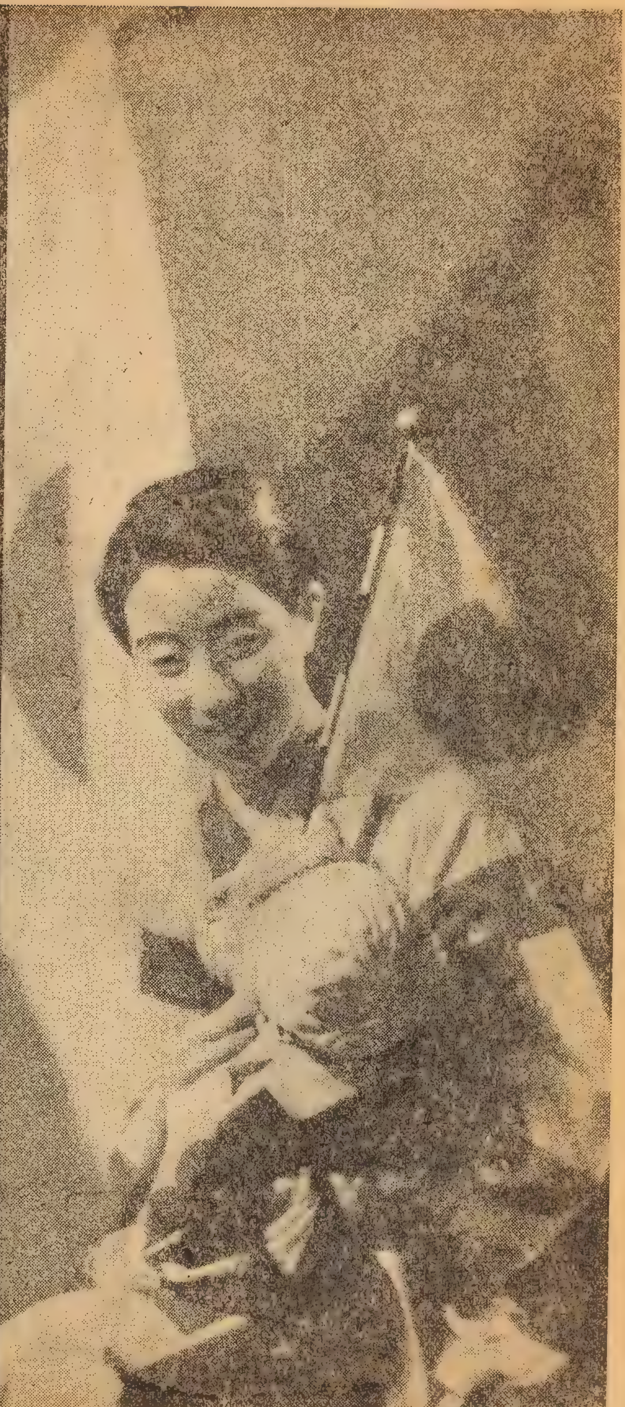
細木原青起畫

映畫小說

軍國子守唄

大林清

（松竹映畫・脚本—中村能行）



夜行列車

大阪を發つ時からの輕い頭痛が、岐阜を過ぎる頃からもうゐても立つてもゐられない重い氣分になつて、しまひには吐氣さへ覺えはじめた。

（いつそ降りてしまはうかしら？）

さうも思つたが、次の停車驛までどのくらゐかゝるのか光子には見當もつかず、夜の上り急行は果てしもない闇をついて、轟々とすさまじく走りつゞけてゐる。——しまひにはたまりきれなくなつて、ハンカチを口に當てながら立ち上つた時、

『どうしました、どこか御氣分でも惡いんですか？』

と、前の席に眠つてゐた男が、ムツクリ身體を起した。瀟洒な背廣姿の青年である。

『は、いえ、たいしたことはございませんけど、……』

『スチームのいきれがいけないんでせう。ちよつとお待ちなさい、靜かにしてゐた方がいいですよ。』

青年は氣輕く腰を上げて、洗面所の方へ出て行つたが、間もなくもどつて來たのを見ると、濡手拭を手にしてゐた。

『さ、これで少し冷やしてごらんなさい。いくらか樂になるかも知れません。』

『ありがたうございます。』

『窓も少しあけときませう。』

青年は甲斐々々しく窓硝子を細目に押し上げ、框のところへ自分の空氣枕をあてがつてくれた。

『すみません、あの、枕は結構ですから、どうぞ、……』

『いや、僕は構はんです。氣味が惡くなかつたら使つて下さい。』

光子は見知らぬ青年の親切が、涙のにじむほど嬉しく、素直にその好意を受けることにした。

額に濡手拭をあて、冷たい外氣に吹かれてゐると、氣分は少しづつよくなつて行くやうだつた。

（この方が中原だつたら！）

フッとそんな考へが浮ぶ。だが、今更中原のことなど思ひ出す自分が口惜しくもあつた。頑な、母親に反抗して家をとび出し、中原と手に手をとつて大阪へ走つたのが去年の夏。あの頃中原との生活に描いてゐた樂しい期待はどうなつたことか！　あれから今までの數ケ月は、たゞ乙女心の夢を無殘にもつき崩されて行く苦しい月日に過ぎなかつたのだ。——光子は今でも中原を決して惡い男だとは思つてゐない。が、女々しいほど弱氣な性格で、大阪へ行つてから職もなく日一日と窮乏の底へ墜ちこみはじめると、もうそれをもりかへす氣力もなく、たゞ光子に當り散らすばかりが、やがて光子の妊娠がわかつてからは、家へもよりつかなくなつて、遂には何處かへ姿をくらましてしまつた。

光子は一時自殺しようとまで思ひつめた。若い身そらで寡婦をたてとほし、血の出るやうな苦勞をして自分を女學校へまでやつてくれた母にも、姉想ひの優しい妹八重子にも、今更生きてあはせる顏はなかつた。——が、さう思へば思ふほど、せめてもう一度戀しい家へもどり、母や妹の前へ手をついて詫びたい。何とかして不孝の罪をつぐなひたい。

そんな想ひがつのると、もう矢も楯もたまらず、今夜身一つで大阪を發つてしまつた光子だつた。

『いかゞです、少しは樂になりましたか？』

青年の聲が光子の追想を破つた。

『はア、お蔭樣で、……』

いひながら眼をひらくと、まだ寢もやらず讀みさしの雜誌越しに、チッとこつちを見まもつてゐる青年と視線が逢ひ、光子は思はず感謝の微笑をかへした。

許さぬ母

『姉さん、どう?』

まだ姿も見せない先から聲をかけて、八重子の元氣のいゝ足音が階段を上つて來た。

『八重ちやん? もう來なくつてもいゝつていつたのに。』

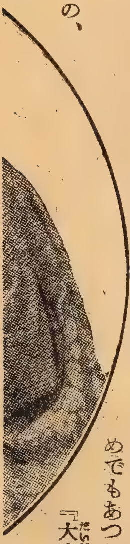
光子が床の上へ起きなほつて迎へると、

『あら、折角來たのに失禮ね。今日はほら、お土産買つて來てよ。』

八重子はプリント模樣の輕快なワンピース姿で、光子の前へペタリと坐りながら、洋菓子か何かの箱をさし出した。

『だつて、もしお母さんに知れたらどうするの?』

口ではさういふものの、光子はかうして八重子の度々訪ねてくれるのが嬉しかつた。



先月東京へ舞ひもどるとすぐ、光子は先づ伯父の源吉に賴んで母に詫びを入れてもらはうとした。酸いも甘いもかみわけた伯父は、手をつくして色々と骨を折つてくれたが、母は光子のやうなふしだら者とはもう親でもなければ子でもないといつて、一と目會ふことさへゆるしてはくれなかつた。

『なアに、誰が何てつたつて血を分けた親と子だ。お前に子供が出來りやア、たとへ父無し子でもお豐にやア初孫だし、きつと一も二もなく折れて來るさ。まアそれまでは大事な身體だから、家の二階でゆつくり養生するがいゝ。』

そんな伯父の好意に甘えて、せめて身二つになるまでと、光子はこの二階へ厄介になつてゐるのである。

だから八重子が母の眼を盜んで訪ねてくれるのは、心配であると同時に、唯一のなぐさめでもあつた。

『大丈夫、知れつこなんかないわ。でも、お母さんもずゐぶん頑固ね、もう姉さんをゆるしてあげてもよささうなもんだと思ふけど、……』

『いいえ、姉さんの方がいけなかつたのよ。お母さんにもあんたにも心配ばかりかけて、……あたし歸つて來たのまちがつてたわ。』

ともすると、光子の聲は涙にくもり勝ちになる。

『あら、そんなことあるもんですか。でもね、ちよいとばかり、あたしにもお母さんの心理狀態わかるやうな氣がするの。』

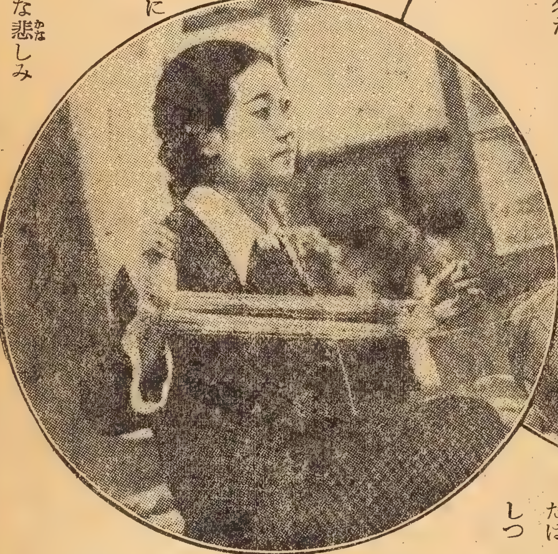
八重子は氣をひき立たせるやうに、わざとおどけた言葉づかひをしながら、

『……つていふのは、お母さんたら姉さんが歸つてから、毎日とてもそは〳〵してるのよ。表面はあんな强いこといつてゝも、心ん中ぢやゆるしたくつてしやうがないんぢやないかしら?』

『さう、でもこんな身體で歸つて來たんぢやねえ。』

八重子の氣やすめだと思ひつゝも、やはりグッと胸のせまる想ひだつた。が、すぐ氣を

とりなほして、
『ほんたうは、あたしもうとてもゆるしていたゞけると思つてないわ。たゞ無事に赤ちやんが生めたら、誰にも後指さされないやうな、しつかりした生き方をして行きたいの。それがせめてものお母さんへのお詫びだと思ふの。』
『わかるわ、その氣持。だけど、赤ちやんのお父さんどうしてるの?』
『……………』
光子が答へに詰つて俯向くと、八重子はそんな訊き方を後悔したやうに
『いゝ人?』
『ええ……』
うなづいて見せたが、うづくやうな悲しみに聲をふるはせて、
『八重ちやん!あんたはしつかりした人と結婚して頂戴な。そ、さうして姉さんの代りに、お母さんを安心させてあげて頂戴。』
それだけいふと、もうたまらなくなつて、床の上へ突つ伏してしまつた。



妹の八重子（向つて左大塚君代）は今日も姉の光子（坪内美子）を慰めに訪ねて來た

街の再會

光子が恙なく男の兒を產んだのは、伯父の家の二階から見る街が、もうすつかり夏の裝ひをこらした七月初めだつた。
伯父の源吉はそれを機會に、もう一度母を說いてくれたが、母が相變らず一徹だつたため、
『よし、それぢやもう金輪際たのまん!そんな頑固な奴は以後妹とは思はんからそのつもりでゐてくれ!』
と、遂には珍しく腹を立てゝ、兄妹仲違ひまでしたらしい。
光子はいつまで伯父の家へ厄介をかけるのも心苦しく、生れた子を或る子供好きの寡婦の家庭へ里子に出すと、適當な勤口を見つけるつもりで、近くの安アパートへ引き移つた。

勤口はなか〳〵思はしいのがなかつた。恰度その月の初めに勃發した蘆溝橋事件が日ましに擴大し、戸毎に出征の旗がはためき、軍歌を高唱しながら壯行トラックが馳せちがふあわたゞしい街を、毎日むなしく歩き廻るばかりだつた。

天に代りて不義を討つ
忠勇無雙の我が兵は……

街の騷音とたゝかふやうに、聲をかぎりに合唱して行く會社員風の男達と女事務員の一團。ビル街に降りそゝぐ眞夏の陽ざしの中を、ゆれはためいて進む旗の列――

ある日、丸ノ内の裏通を過ぎて行くそんな壯行行進を、足の疲れも忘れて見送つてゐた光子は、ふと誰かに肩を叩かれた。

『まア!』

ふりかへつた途端、思はず明るく叫んだのは、それが上京の夜汽車の中で、親切に介抱してくれた青年だつたからだ。

『やつぱりあなたでしたね。しばらく。』

青年は人懷こく笑つて頭を下げた。ワイシヤツ一つのところを見ると、この邊の會社にでも勤めてゐるらしい。

『いつぞやは色々と御迷惑おかけしまして、……』

『いやアとんでもない。すつかりお丈夫さうになりましたね。』

『さうでせうか、きつと陽に燒けてるんですわ、毎日出歩いてるもんですから。』

光子は何ともいへない親しみを覺えて微笑した。

『ほう、羨しい御身分ですな。我々は籠の鳥ですよ、月給トリといふ。はゝゝ。』

『まア、ほほゝ、でもそれだといゝんですけど、あたしなんか就職口を探して歩いてるんですもの。』

『お勤め口を?』

青年はちよつと意外さうな顏をしたが、

『いかゞです、お急ぎでなかつたら、少しお話したいと思ふんですが……』

『ええ、どうぞ。』

光子も何かしらこのまゝ別れがたない氣持でうなづくと、青年は先に立つて大股に歩き出した。

やがて二人が落着いたのは、近くのビルの地階のグリル――

青年は冷たい飲物を註文し、おもむろに光子の前へ名刺を出した。

『僕は種田といつて、この先の建築會社に勤めてゐるんです。』

『あたくし名刺持合せませんけど、……』

『いや、實は今の就職口のことですけど、何か御希望の仕事でもおありですか?』

『いいえ、別にこれといつて、……事務員でしたら何でもいゝんですの。それでどうやら生活さへたちますれば、……』

『失禮ですが、お一人ですか?』

『は、ええ、さうですの。』

光子はドキマギして顏をあからめながら、さすがに子供のことはいへなかつた。

『それならどうでせう、恰度うちの會社に女事務員の椅子が一つあいてるんですが、もしよろしければ當つて見ませう。』

青年の思ひがけない言葉は、光子の心をどらせた。同じ勤めるにしても、知らぬ他人ばかりの中へとびこんで行くより、この種田

のやうな男がゐてくれたらどんなに心強いか知れない。

『でも、御迷惑ぢやありませんかしら？』

『なんの、そんなことがあるもんですか。あなたのやうな方を御紹介出來れば光榮ですよ。ぢやこれへちよつと住所とお名前を書いといて下さい。』

青年はもう承諾にきめてしまつて、手帳と鉛筆とをさし出すと、はじめて飲物へ口をつけながら、

『しかし、たうとうはじまりましたね。うちの會社でも二人出征しましたよ。僕も手ぐすね引いて待ちかまへてるんですがね。』

食事時を外れた食堂は、ほかに一人の客もない閑散さ。こゝでもレコードの軍歌が、淀んだ溫氣をかきたてゝゐる。

秋風の鋪道

ダッダダッダッダッ……

すさまじい機銃の掃射、木の枝を背負つて僞裝した兵隊達が、散開して走つて行く。畫面が變ると、城壁の一角を占據した兵達の萬歲だ。鬚だらけの眞つ黑になつた嬉しさうな顏、顏、顏。——

場內がパッと明るくなつた時、光子は涙をかくすのに骨を折つた。

『少し疲れましたね、廊下へ出ませうか。』

種田はさうさゝやいて席を立つた。

『戰地の方の御苦勞を考へると、あたし達こんなにしてのん氣にニュース映畫なんか觀て

病毒たい毒下しに

天文十八年の薩摩中間家秘傳！

我國に梅毒が侵入したのは今から三百九十五年前で天文十二年、南蠻人が九州種子島に漂着し島民に傳染させたのが日本梅毒史の始めであります。翌年梅毒は薩摩に上陸し忽ち南九州一帶に蔓延しました。

◇　◇　◇

時恰も戰國末期でしたが島津氏中は悽慘な變色に塗抹されたのでありました偶々島津家臣に中間尙胥といふ博識多才の士あり臥薪嘗膽の苦を經て遂に珍らしい草根木皮の精や薩摩潟に產する特殊な草本を配して毒下しを製し病者に頒ちましたところ不思議や忽ち薩摩から惡疫が一掃されたと傳へられてゐます。

◇　◇　◇

尙胥はその後岳翁と號し天文十八年この毒下し藥を改良し退毒散と命名、子孫に傳へました。寶曆、天保の頃、梅毒が流行した折も中間家の退毒散は「薩摩隼人の名藥」と尊ばれ近郷近藩から頒藥を乞ふ者で門前市をなしたそうです。最近、中間家の退毒散について、國民絕對保健研究所が再檢討した結果、實に近代並びなき名藥である事判明し茲に一般に公開し、ばい毒たい毒でお困りの方を一人でも餘計に救ふつもりであります。

右薩摩中間家秘傳毒下し『退毒散を』ばい毒たい毒の方にお頒けします。一週間分二円五十錢、三週間分七円、五週分十一円送料內地十錢 領土四十二錢、振替又は小爲替で御申込下さい。都合により代金引換にても御送藥します東京市品川區大井倉田町三四九、國民絕對保健研究所（振替東京壹參七七八番）說明書御申越次第無代進呈す。

るの濟まないやうな氣がしますわ。』

『さうですね、しかしかうしてゐる連中だつて、赤紙が來りやア明日にも勇んで戰地へ行くんだし、女の人だつてこれからは大變なんだから、ほんたうは前線も銃後もありませんよ。』

『それはさうですけど、……』

いひながらその邊へ眼をおよがせてゐた光子は、その時突然『あッ!』と聲をもらして、種田の蔭へ身をすくませた。

人混みの肩越しに、母にゾックリの老婦人、いや、めつきり老けてはゐるが、たしかに母のお豐にちがひない姿を見出したのだ。

『どうしたんです?』

種田がいぶかるやうにふりかへつた。

『い、いゝえ、何でもありませんの。』

あわてゝ打ち消し、なほも眼をさだめると、母の傍には八重子の姿もあり、もう一人見知らぬ青年が一緒だつた。

光子にははじめて腑に落ちた。最近一二度アパートへ訪ねて來た八重子から、彼女に戀愛問題の起つてゐるのを聞いてゐたし、八重子は八重子らしいやり口で、その生島といふ青年と母とを、近いうち會はせるつもりだともいつてゐた。

あなたの住所を書いて下さい——二人は或るグリルでなつかしく語り合つた

＝自重して頂戴ね、姉さんの例もあるんだから。あんたまでがお母さんに心配をかけないやうにね。』

光子はその時さういつてたしなめたが、ひよつとすると、今こゝで生島と母とを會はせてゐるのかも知れない。

『少し顔色が悪いやうですが、戸外の風に當りませうか。』

『ええ。』

光子は一年ぶりの母の姿へ、駈けよつてすがりつきたい衝動を、一生懸命こらへながら、種田につゞいて館を出た。

頬にふれる風も、爽やかに冷たい秋の宵だつた。

二人は無言のうちに明るい通を避けて、日比谷公園横の靜かな煉瓦鋪道を歩いてゐた。

『光子さん、あなたは僕をどう思ひます?』

種田はふいにそんな訊き方をした。

『どうつて?』

『誤解しないで下さい、僕はあなたをこんなつもりで會社へお世話したんぢやなかつたんです。しかし、僕はあれ以來、毎日會社であ

なたに會へることが樂しみになりました。この頃ではあなたに對する何か宿命的なものさへ感じるんです。』

『………』

光子の心は木の葉のやうにをのゝきはじめた。今まで何よりも恐れてゐたこと、そして一方ではそれを希ふ氣持もあつたことが起つたのだ。種田と同じ會社へ勤めるやうになつてから三月、抱いてはいけない種田へのある感情が、日ましに募つて來るのをどうすることも出來ない自分だつた。

『光子さん！何とかいつてくれませんか！かういふ事をいふのはいけないでせうか。』

種田は立ちどまつて、情熱に輝く眼をすゑた。

『でも、あたし、そんな資格のある女ぢやありませんの。あなたは何も御存じないんです。』

光子は笑つて見せようとしたが、妙にゆがんで泣顔になつた。

（せめてもう二年早かつたら！ 中原に會ふ前だつたら！）

――資格がなんです！ そんなものは問題ぢやありません！ あなたが何か不幸な過去を背負つてゐる方だつてことは、初めつから知つてゐます。その重荷を少しでも輕くしてあげられたらといふ氣持が、たうとうこゝまで僕を追ひこんで來たんです。』

種田（近衞敏明）と光子（坪内美子）は連れ立つてニユース映畫を見に……

『いいえ、いけませんわ！ あたし、あたし一度結婚した女ですもの！』

光子が必死にそれだけいふと、種田はちよつと默つたが、

『それも想像してゐました。しかし一度結婚したために、一生不幸でゐなければならないつて掟はないでせう。』

『そ、それだけぢやないんです！ あたしには子供があります！ ……あたし、失禮しますわ。』

光子はほとばしるやうにいひ捨て、夢中で走り出した。

新しき現實

翌日は日曜日。――その朝、光子が起き出たのは、いつもの出社時刻を廻つた頃だつた。

昨夜おそくまで寢つかれなかつたせゐか、あまり食慾もないので、そのまゝ毎日曜の仕事にしてゐる坊やの訪問に出かけようと、部屋を出ようとすると、ふと眼についたものが

ある。

扉の隙から差しこまれてゐる一葉の紙片。

――何氣なく手にとつてハッと息をつめた。

――僕は昨夜考へつゞけました。あなたの不幸な坊やのためにも、僕と結婚して下さい。僕の氣持はもうどうにもならないことを知りました。――種田生

(こんなにまで!……)

紙片を持つ指先がはげしくふるへ、光子は同じ文面を幾度も讀みかへした。

『光子さん! 讀んでくれましたか?』

突然扉のむかふで種田の聲がした。

前後の考へもなく把手を廻すと、笑ひながら立つてゐる種田の姿がそこにあつた。

光子はもうこれ以上自分とも種田とも戰へない氣持だつた。

『ぢや承知してくれますか?』

『あなたさへ御不幸にしなければ、……』

『有難う! 坊やにだつてきつといゝパパになつて見せますよ。たゞ、いつ出征するか知れない身體だといふことは覺悟してゐて下さい。』

光子はもう一度強くうなづくと、倒れるやうに種田の腕へ身を投げかけようとした。が、その時、あわたゞしい靴音が近づいて來て、

『光子! 光子ぢやないか!』

『あッ!』

光子は紙のやうに蒼ざめて立ちすくんだ。

種田を押しのけるやうに進み出た男は、大阪で姿をくらましたきりの中原速男だつたのだ。

『光子! 苦勞かけて濟まなかつた。やうやくお前の伯父さんのとこでこゝがわかつたんだよ。』

『…………』

『實は、子供に一と目會ひたいと思つてね、子供は何處にゐるんだい?』

中原は落着なくその邊を見廻して、部屋の中へ入らうとしたが、クワッとこみあげて來た憤りで、光子はその前へ立ちふさがつた。

『子供なんかゐません! 歸つて下さい! あ、あなたに子供なんかあるもんですか!。坊やはあたしの子です! あたしだけの子です!』

『無理もない、今更父親面して會ひに來られる俺でないことは知つてゐる。だが、どうにも我慢出來なかつたんだ、たのむからせめて一と目だけでも、……』

『いけません! お歸んなさい! もうこれ以上あたしを苦しめないで頂戴! お願ひだから歸つて頂戴!』

光子が泣き聲になつて叫びたてると、

『ぢやどうしても……!』

と、中原は聲を荒らげ、だがすぐ力なく首をたれて、

『さうかい、わかつたよ。みんな俺が惡いんだ。たゞ一と言言譯をさせてもらへば、俺はあの時お前達を捨てる氣はなかつた。赤ん坊が生れるまでには何とか一と旗あげて、改めて詫びようと思つてたんだ。』

『嘘です! あなたには重荷が背負ひきれなかつたゞけです!』

『いや、お前がさう思ふならそれでもいゝ、だが、今お前は倖せかね? 坊やも倖せかい? これつきり生きては歸らない餞別に、それだけはきかしておくれ。』

中原は靜かな調子でさういふと、ポケットを探つて大事さうに何かを取り出し、『この通り待ちに待つた召集令狀が來たのだ。俺は今まで腑甲斐ない生き方をして來たが、これを機會に立派に生れ變つて見せる。きつと日本軍人として恥しくない働きをして見せるよ。』

光子はあまりのことに呆然とした。中原の手にある赤い紙片は、疑ひもなく充員召集令狀だ。陸軍歩兵上等兵中原速男といふ文字さへハツキリ讀める。

『それで最後の思ひ出に、たとへ他人としてでもいゝ、一度この腕に坊やを抱いて見たいと思つて、郷里の聯隊へ歸る途中をやつて來たんだ。その望みもかなはないんなら、せめてお前達が倖せだといふことをきいて行きたい。』

中原の言葉にいつはりのないのは、その顏の悲壯なほど眞劍な表情でもわかつた。

と、ふいに種田が口をはさんだ。

『光子さん、會はせておあげなさい。坊やは名譽の出征軍人をお父さんに持てたんです。僕達は喜ばなきやいけない。中原君を後顧の憂ひなく戰地へおくるのが、僕達の義務ぢやないですか。……光子さん、僕は昨夜からのことといさぎよく徹回しますよ、名譽ある帝國軍人中原上等兵のために。』

まだ光子が手にしたまゝだつたさつきの紙片を、種田はいきなり引つたくると、細かく破り裂いてしまつた。

光子は立つてゐられるのが精いつぱいだつた。いひ知れぬはげしい感動に、身も心も、そして一切の過去も、新しい現實の前に碎け

病人の食物に就て急告

いくら胃腸が弱つてゐるから…ひどい衰弱で食事が進まぬからといつても、粥や重湯牛乳みたいな養分乏しい食餌では肝腎のお體が弱つてしまひます。だといつて効果はかない榮養劑では體も造れません。處が茲に屈强無比！病人の理想的食糧が發見されました。醫學博士森田幸門先生發見專賣特許『**テルニ**』がそれです。どんな病人でも易々召上りこれのみで立派に人體を養つてみせます。そして衰弱を取戻し抗病力を增大し胃腸を强めガッチりした體を建造して、見事に病氣を追拂ふ食養力の偉大さは、採用の大病醫院や諸名醫方が驚嘆激賞されました。すぐ御試食下さい。

重病人用「**粉末**」十食分一圓廿錢五十食分五圓

輕病人用「**固形**」三食分五十錢十二食分一圓八十錢　講談社代理部（振替東京六六二九）及び藥店に販賣　◇**試食品説明書送呈**◇大阪市京町堀二　笹屋（振替大阪二二一七）へ御請求あれ

散るやうに感じながら……

解ける心

三人を乘せた自動車が、秋晴れの郊外の、とある文化住宅風の家の前にとまつたのは、それから一時間ほど後だつた。

光子は先に立つて玄關を入つた。

『おや、おいで下さい。恰度今坊やちちんへ…お客樣がお見えになつてますわ。』

出迎へた主婦はさういつて奧をさした。

『お客樣? どんな方?』

伯父にだけはこの家を報らしてあるが、自分のほかに誰も來る筈はない。

『あの、お年寄りの方ですの。色んな玩具を買つてらつしやいまして……』

(お母さんだ!)

さう直感すると、光子はもう返事もせずに駈け上つて行つた。

『お母さん!』

襖をひらくと同時に、グッと胸をつかれて叫んだのは、やはりそこに、母のお豐が子供を抱いて立つてゐたからだ。

『光子かい、坊やは大きくおなりだねえ。』

お豐はしづかにいつた。あれほど頑なだつた母の、何もかも許し切つた言葉だ。

光子は思はずその場へ崩折れ、

『お母さん! すみませんでした!』

『御一緒に見えたのはどなた?』

お豐がわざと咎へずさういつた時、中原が入つて來て光子の横へ膝頭をそろへた。

『お母さんですか。僕が御心配をおかけしました中原です。まつたく何とお詫びしていゝのか……』

『光子、お前は何しにこの方をお連れしたの?』

お豐の聲がけはしくふるへをおびるのを、種田がいそいで引きとり、

『お母さん、中原君は今から出征する身體なのです。今日だけはどうぞ眼をつぶつて、何も仰言らないであげて下さい。……申しおくれましたが、僕は光子さんと同じ會社へ勤めてゐる種田といふ者です。』

『…………』

お豐は動搖の色を浮べながらも、持前の一徹さを一文字に結んだ口の邊に見せて默つてゐる。

光子もたまらなくなつて、

『お願ひです! どうぞこの人に坊やを抱かせてやつて下さい! 今までのことは水に流して、坊やの父としてこの人を出征させて下さい! もうこれつきり、これつきり歸れないかも知れないんですもの。』

ひれ伏さんばかりに哀願すると、お豐はふと光るものの浮んだ顏をそむけ、無言のまゝ中原の手へ坊やを渡した。

『あ、ありがたうございます!』

中原はしつかりと坊やを抱きとつた。何も知らず眼をまるくしてしきりと小さな手を握つたりひらいたりしてゐる我が子の頰へ、淚に濡れた頰をすり寄せながら、

『お母さん』さう言つたきり光子は涙の眼をあげ得なかつた

『坊や、ゆるしておくれ、いけないお父さんだつたね。お父さんはこれから遠い遠いとこへ戰爭に行くから、もしもこれつきり歸らなくつても、お母さんやお祖母樣のいふことをきいて、きつと立派に育つておくれ。強い正しい人間になつておくれ。』

誰もものをいふ者はない。種田までがゐたたまれなくなつて緣先へ出て行つた。

お豐はいそがしくハンカチで眼をおさへてゐたが、はじめて中原へ口を切つた。

『もう何も申しません。どうかこちらのことは心配なさらずに、お國のために働いて來て下さい。御無事で凱旋なさるまで、光子も坊やもたしかにお預りしました。』

光子はもう見榮もなく、聲をたてゝ泣き伏してしまつた。

星空に唄ふ

『君の凱旋の日まで、僕も及ばずながら光子さん達の力になりますよ。』

さういつてさし出す種田の手を、中原は車窓からしつかりと握りしめ、

『いや、僕は凱旋など夢にも思つてゐません。何分よろしくたのみます。』

何年振りかの樂しい團欒である。——寫眞向つて右から八重子、光子、母、種田、源吉(坂本武)——想ひは遙か戰地に馳せて、慰問袋に話の花が咲く。

プラット・ホームには、人の溜、旗の波に押されながら、お豐、源吉、八重子の姿。そして光子も坊やを抱いて窓際に立つてゐる。やがてホームの歡聲が一と際たかまると、列車はゆるやかに動き出した。

中原は坊やへ、光子へ、人々へ、夢中で手を振りながら遠ざかつて行く。

『御元氣でね！ パパ、御元氣でね！』

光子は歡呼の嵐に打ち消されて叫び〳〵、力の限り坊やをさし上げてゐた、いつまでもいつまでも。……

そんな光景が光子にはつい昨日のことのやうに思はれる。あの時のどよめきも歡聲も、まだ生々しく耳の底に殘つてゐる。

『どうしたの？ 姉さんの方ちつともはかどらないのね。』

八重子のはしやいだ聲が、光子を我にかへらせた。その後八重子の生島青年も出征したので、今日は二人競爭で戰地への慰問袋をつくつてゐるのだ。

『だつて、種田さんが何か買つて來て下さるつて約束なんですもの、それ待つてるのよ。』

『ずるいなア。そんならあたしの方へだつて徵發してあげるから。あらッ、噂をすれば影よ！』

早耳の八重子が外の靴音を聞きつけた時、玄關のひらく音がして、坊やを背負つたお豐と何か紙包を下げた種田とが入つて來た。

『今そこで種田さんとお目にかゝつたのよ。』

『ではお約束の慰問品。』

種田がうや〳〵しく紙包をおくと、八重子がすかさず、

『ひどい種田さん、あたしにはお約束して下さらなかつたのね。』

『はゝ、心配御無用、中原君のと生島君の

と、ちゃんと二た揃へありますよ。』

『まア、さう、話せるわねえ。』

『かなはない！　あーあ、僕も早く慰問袋をもらふ身になりたいな。』

『さうしたらわたしが種田さんに、一ばん上等の慰問袋を送つてあげますよ。』

お豊がさういつて笑つた。

『やつぱりいゝわねえ、かうやつて一家がみんな揃つてると。』

八重子がふと感慨深かさうにいふ。

光子はツンと鼻筋をつき上げて來るものを覺え、

『種田さん、ちよつとこの慰問袋お願ひしますわ。坊やを寢かしつけてしまひますから。』

と立上つて緣先へ出た。

何か冗談でもいひあつてゐるのか、三人の明るい笑ひ聲が追ひかけて來る。そこへまた人の訪ふ氣配がして、特徴のある伯父源吉の聲が聞えて來た。——何年ぶりかの樂しい團欒は、これで一層活氣づいたらしい。

『このとほりあたし達倖せよ。銃後のことは心配なく、しつかり働いて來て頂戴！』

光子は中原への言葉を、はるかの星空へつぶやくと、秋更けた夜氣の冷たさにひたりながら、しづかに坊やの子守唄を唄ひはじめた。

一、坊や泣かずにねんねしな
父さん強い兵隊さん
その兒がなんで泣きませう
泣きはしませぬ
遠い滿洲のお月さま　（キングレコード一〇一六六）

トーチカへ
日の丸立てた
男振り
（菱二）

何となく
モンペは人の
氣が揃ひ
（健一）

決死隊の
やうに並
んだ奉仕班
（すぐる）

英靈の列へ
チンドン屋も
默り
（悲戀史）

國策へ
出征兵も
下駄で行き
（号葉）

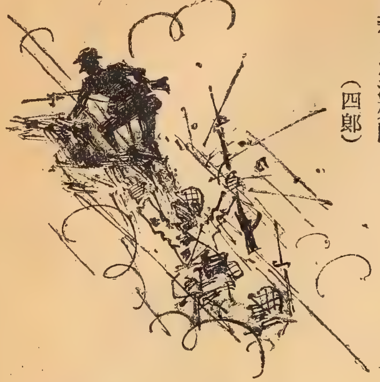
詰らない
男に詰る
詰將棋
（宙坊）

揉まずより話相手に呼ぶ按摩

（れい子）

彈丸あられあゝ幾人か決死隊

（四郎）



何糞の覺悟へ輕い土運び

（丁坊）

しぶ柿を盗んだ子供愚痴をいひ

（祥生）

立志傳感心をして寢てしまひ

（千九三）

斷髮も時局の波に道を避け

（普言）

川柳漫畫　素文畫

投句歡迎掲載の分には薄謝呈上

戀愛算術

菊池寛

嶺田弘 畫

新しい夢へ

とにかく、三上の所へ行つて相談すると云つて出かける竹内を送り出した後、玲子はホールへ行く支度を始めたが、氣持が動搖して、落着かなかつた。

もつと、美奈子を劬つてやるべきであつた。竹内との事で、責めるべきではなかつた。氣持も身體も、クタ〳〵になつてゐる時に、心なき事を云つたと、後悔で胸が一杯になつた。

此の家を飛び出して、知己友人もない東京の屋根の下のどこに、安住の地があるだらうか。人目につき安い美貌であるだけに、却つて多くの危險が待つてゐるのではないか。

そんな事を考へると、たとひ無駄であるとしても銀座あたりまで、探しに行つて見ようか。それとも思ひ

切つて、警察へ頼んで見ようか。

警察の保護を受けて、大阪へ送り返された方が、あの人のためには、どんなに安全かも知れないのだ。しかし、美奈子が警察の手に渡ると、自分や竹内や三上も、參考人として一應は、取調べられるのではないかしら……。

それも、嫌だと思ふと、玲子は思ひ切つて、警察へ頼みに行く氣にもならなかつた。

玲子は、もう出かけるばかりに支度が出來たが、出かけるのが、億劫になつて、一つしかない籐椅子にボンヤリ腰かけてゐると、コツコツと輕いノックの音がした。

今頃訪ねて來る人などは、誰もある筈はない、美奈子が歸つて來たのではないかと思ふと、玲子は椅子から立ち上るなり、扉へかけつけると、

前號までの梗概

美奈子は、山崎工學士との結婚を嫌ひ、愛人三上康治の許へ出奔した。所が、既に中島家の令嬢絢子に心を傾けてゐる康治は、その美奈子を、友人竹内の舊の愛人で、玲子と呼ぶダンサーの所へ預けて了つた。そこで自暴自棄になつた美奈子は、無謀にも竹内と火遊びをし、それを玲子に氣取られた爲、悔い愧ぢた末、その儘姿を消してしまふ。すると此時美奈子の行方を索めて上京した山崎工學士は、彼女の幸福を思ふ一念から態〻康治を訪ねて、眞に彼が彼女を愛してゐるか、否かを問訊す。狼狽した康治は、曖昧裡にも、『否』といはざるを得なかつた。山崎は、ではその通りを美奈子に傳へようと、たじろぐ康治を後に暇を告げてゆく。

『美奈子さん！　歸つたの！』
と、云ひながら、扉を勢よく開けた。
玲子は、あわて〻上半身を出したので、外に立つてゐる見知らぬ青年の紳士と危く、ぶつつかりさうになつた。
相手は、びつくりして、二三歩、後退した。
玲子も、少しテレて顏を赤くしながら
『失禮しました。何か御用ですの？』
と、云つた。
紳士は、玲子のあわて方に微笑しながら、
『失禮ですが、貴女が小出玲子さんですか。』
と、云つた。
『え〻。さうなの。貴君は……。』
『僕かう云ふものですが……。』
と、名刺を出した。
　工學士　山崎良彥
と、印刷されてゐた。
『はあ、どんな御用ですの？』
と、玲子は訊いた。
『僕は、大阪から來たものですが、貴女の所に、吉野美奈子がお世話になつてゐるさうですね……。』
『まあ！　美奈子さんを訪ねていらつしつたの！　貴君は美奈子さんの御親類？』
『さうです、先づ親類です、御兩親に賴まれて、探しに來たのです……。』
山崎は緊張して云つた。
『いやだわ。美奈子さんはゐたんですよ。つい、先刻まで……。』
玲子は、いかにも口惜しさうな顏をした。
『ぢや、今出かけてゐると云はれるのですか？　ぢや、歸る頃に伺ひます……。』
『ところが、さうぢやないの！　先刻まで、ゐたんですが、一寸事件があつて、あの方無斷でこの家を出かけてしまつたんですよ。』

『え！ぢや、此の家を飛び出したのですか……。』

『えゝ。さうなの。』

『殘念ですなア。それは……。』

山崎は、ガッカリしたやうに顏色が變つた。

話してゐる裡に、玲子は山崎が、眞面目な青年であり、美奈子の身上を心配してゐることが感ぜられて來た。

『とにかく、おは入りになりません？　私から、一通り事情をお話し致しますから。』

玲子は、自分が美奈子を預つてゐた責任上、親類だと云ふ此の紳士に、美奈子について說明しなければならぬと思つた。

部屋には入ると、山崎は、玲子のすゝめる座蒲團に腰をおろしながら、

『突然伺ひまして、大變お邪魔を致します。』

と、改めて挨拶した。

『いゝえ。いゝんですの。でも、美奈子さんのこと、私一人で心配してゐたところですから、貴君がいらしつて下さつたので、何だか心強く思ひますわ。これ、美奈子さんのスーツ・ケースですの。』

と玲子は、玲子の箪笥の上に、のつけてある華奢なスーツ・ケースをさし示した。

『そんなものを置いてあるんでしたら、歸つて來るのぢやないでせうか。』

山崎は、ほのかな希望を顏に漂はして云つた。

『私も、さう思つてゐますの。でも、やつぱり、駄目かも知れませんわ。それよりも、萬一不心得なことをなさらないか、誘惑にかゝりやしないか、そんなことの方が心配なんですの……。』

と、玲子は眉をひそめた。

『自殺する心配はないでせうか。』

山崎が、あんまり眞劍に訊いたので、玲子もハッとした。

『それはないと思ひますの、人生をロマンチックに考へてゐる人だけに、どんなに夢が破れても、また新しい夢に生きる人ぢやないかと思ひますの、だから自殺なんかしないと思ひますわ。たゞ、惡い男なんかの手に渡らないやう、それ丈が心配ですわ。……。』

『なるほど……。』

山崎は、美奈子の性格を、ちやんと見拔いてゐる小出玲子を何となく頼もしいやうな氣がした。

『大阪のお家も、家出なすつたんですの……。』

『はあ、さうです……。』

『失禮ですが、貴君は何う云ふ御關係なのですの……また、此處に美奈子さんが居ることを、何うしてお知りになりましたの！』

山崎は、一寸苦笑とも微笑ともつかない笑ひを浮べながら、

『此處に美奈子さんが居ることは、三上君から聽いたのです。』

『さう。三上さんのところにいらつしつたの？　ぢや、三上さんの事は、お家でも分つてゐるの？』

『いや、家では分つてゐません。たゞ、僕には分つてゐました。

愛人があつて、その人の所へ行くと云ふ手紙が來て居たのです……。』

『ぢや、貴方とは隨分お近しいのですね。』

『はゝゝゝ、近しい、ははゝゝ。近しいと云へるかも知れません……。』

山崎は、赤くなりながら頭を搔いた。

『伯父さま？　それとも、あの方のお姉さまの御主人？』

『違ひます。仕方がありません、ハツキリ申しませう。僕は美奈子さんの緣談の相手だつたのです……つまり美奈子さんは、僕との緣談を嫌つて、家出をしたわけです。はゝはゝ。』

と、山崎は苦笑した。

山崎の正直な、怯びれない態度が、玲子には好もしく思はれた。

『まあ！　それは〳〵……でも、美奈子さんて、何うかしてゐますわね。貴君のやうな立派な方を嫌つて、家出をするなんて、貴君と比べたら三上さんなんて、なつてゐないぢやありませんか。いくら、世間知らずのお嬢さんだからと云つて、あんまり人間が、分らなさすぎますわねえ。あの方が、そのために、不幸になつたつて、それは自業自得ですわねえ。……でも貴君は、なぜ自分を振つた美奈子さんを追つて、上京なすつたの？』

『用事もありましたし、それに僕との縁談で、家出をされた以上、僕も何だか責任があるやうな氣がしました。だから、東京へ來て、三上君と會つて、三上君が美奈子さんに對して、あくまで責任を持つと云ふのでしたら、僕が美奈子さんの御兩親と交渉して、お二人の間をまとめて上げようと思つたのです……。』

山崎は、眞面目な顔になつてゐた。

『まあ！　貴君は、今の世の聖人君子だわ。身を殺して仁を爲す人ね。驚いたわ。それ、本當？……。』

玲子は、目を刮つて、しみ〴〵と山崎の顔を見直した。

『いや、人から笑はれるかも知れません。しかし、僕は美奈子

さんがあの人の子供の時から好きなのです。あの人と結婚出來ないとしても、出來る丈、あの人の幸福を計つてあげるのが、本當だと考へたのです。殊に、僕との縁談のために、家出し、そのために美奈子さんが不幸になつたりすると、僕は一生寢覺が惡いと思ひましたから……。』

『………。』

玲子は、もう何とも答へず、眼には一滴の涙さへ浮べてゐた。

『しかし、何うして此の家を出たのですか、その事情を話して下さいませんか。』

と、山崎が、玲子に訊いた。

『お話しします。貴君になら、何でもお話しします。貴君こそ、男性の中の男性だわ……美奈子さんたら、何うして貴君と結婚しないのだらう……私、美奈子さんに會ひたい！ あの人の耳朶を捕まへて、貴君の所へ引張つて來てやりたいわ……。』

玲子は、山崎のために義憤を感じてゐた。

『美奈子さんが、この家を出たのは、三上君の愛情を信ぜられなくなつたからぢやありませんか……。』

と、山崎の方から訊いた。

『さうなのよ。貴君、何うしてそれがお分りになつたの？』

『三上君と會つて話しましたが、三上君は美奈子さんを愛してゐるやうに、思へませんでした……。』

『さうなのよ。貴君が、愛してゐる百分の一も愛してゐないわ。……三上さんと、そのお友達の竹内さんと云ふ人と二人で、美奈子さんを居たゝまれなくしてしまつたの……最初から、精しくお話するわ。そして、私貴君と一しよに、草を別けても美奈子さんを探すわ。そして、美奈子さんの迷夢を覺してやるわ。』

と、前置して玲子は、いかにして美奈子が、自分の家に來たかを話し始めた。

頼む樹陰

玲子の部屋を拔け出した美奈子は、普段通る道へは出ず、反對の方向へと小路から小路と小走りに走つた。

何處へ行かうと云ふ當はなかつた。たゞ、玲子や、竹内と顏を見合はしたくなかつたのである。

四丁ばかり、走りつゞけると、コンクリートで鋪裝した可なり廣い通に出た。自動車が、二、三臺走つて通つた。

五六臺目に、空車が來た。

美奈子は、目を擧げて車を止めたが、自分でも何處へ行つていゝか分らなかつた。

三上に對する彼女の愛着は、殆んど滅じてはゐなかつた。三上に、薄情にされゝばされるほど、却つていらだたしく搔き立てられる丈である。

かうなれば、遠慮も何も入らない、三上の下宿へ行つて、正面から三上を、面責しようかと思つた。が、昨夜竹内に、心な

らずも、身體を許したことが、大きな心の引け目であつた。このまゝでは、三上と會つても、一言も云へないやうな氣がした。三上が自分に對してした事よりも、自分の方がもつと、大きな罪を犯したやうな氣がした。

『どちらです……。』

ハンドルを動かしながら、運轉手が訊いた。

『さうね……。』

と美奈子は、自分でも當惑しながら、

『銀座！』

と、つけ加へた。

自動車は、スピードを加へて走り出した。

銀座と云つて、大した當があるのではなかつた。たゞ、親友のよし子が、よし子のお姉さんの友達の山路と云ふ人が、銀座で『山鳩』と云ふ喫茶店を經營してゐる、もし行くところがなかつたら、そこへ紹介して上げようと云つてくれたことを思ひ出したのである。

三上を訪ねて來れば、三上がきつと親切に世話をしてくれるだらうと思つてゐた丈に、美奈子は紹介狀も、何も貰つて來なかつた。

しかし、かうなつては、その『山鳩』へでも行つて、今夜からの宿舍の世話をして貰ふ外はないと思つた。

數寄屋橋を渡ると、運轉手が云つた。

『銀座はどちらです？』

『さうね。何處でもいゝわ。喫茶店の「山鳩」と云ふ所へ行きたいんだけれど……。』

『何處だか分らないんですか。』

『えゝ。』

『此方にも分りませんよ。喫茶店は、何百軒とありますからね。』

『さう。ぢや、その邊で降して頂戴！』

車は、電車通から、やや廣い横町を右へ少し行つてから止まつた。

料金を定めるのを忘れて乘つたので、美奈子はだまつて一圓出した。

帽子を被てゐないのが、何となく氣になつた。

美奈子は、兩側の店を見廻しながら歩いた。酒場、床屋、てんぷら屋、小料理店などが、軒並に續いてゐた。喫茶店も五六軒目毎にあつた。

左に折れ、右に折れ、根よく探して歩いた。

『白鳩』と云ふ名前があつたので、ハッとして立ち止まつたがそれは喫茶店でなく酒場であつた。

横町から横町へと、縫ふやうにして歩いたので、美奈子はヘト〳〵に疲れてしまつた。

角店で、可なり豪華な『ヴェニス』と云ふ喫茶店の前に出

た。美奈子は、この店でお茶を喫んで、この店の人に訊いて見ようと思つた。

　店の中は、明るい色彩の壁に近代風の椅子ソファなどを巧みに取り合はせた感じのいゝ店飾りであつたが、中途半端な時間なので、廣い店に、お客はマバラにしかゐなかつた。

　美しい和服を着た小蝶のやうな少女が、お店の所々に散らかつてゐた。

　美奈子は、空いたボックスの一つに腰をおろした。着てゐる洋服は、昨夜から着つゞけてゐるので、何となくしほたれて見え、お化粧もしてゐないのであるが、しかしその天性の美貌は、この店にゐるどの少女よりも秀れてゐるので、少女達は、みんなヂロ〳〵美奈子の方を見てゐた。

　少し空腹を覚えてゐたので、美奈子は、紅茶とホットケーキとを注文した。

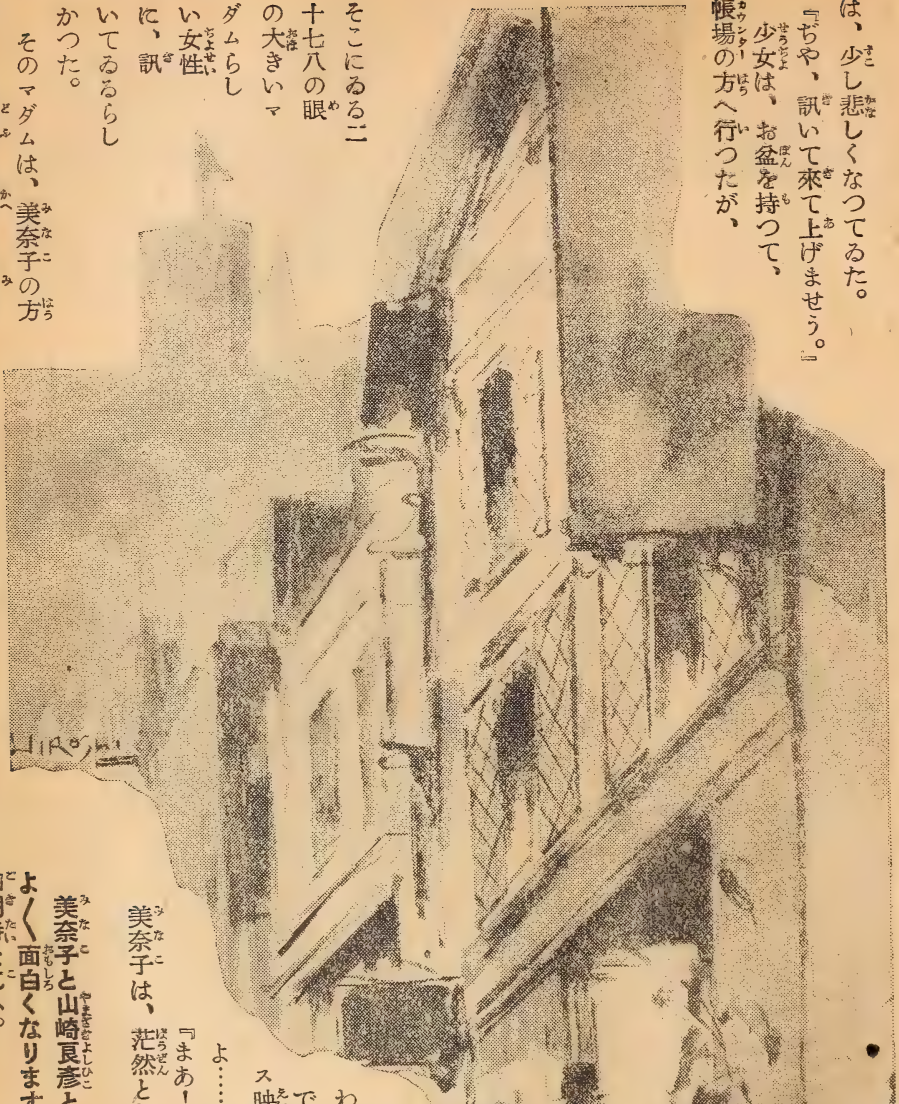
少女の一人が、それを運んでくれた時、美奈子は訊いた。

『この近所に（山鳩）と云ふ喫茶店ございませんでせうか。』

『えゝ（山鳩）聴いたことございませんわ……。』

『何方か、知つた方ないでせうか……。』美奈子

は、少し悲しくなつてゐた。
『ぢや、訊いて來て上げませう。』
少女は、お盆を持つて、帳場の方へ行つたが、そこにゐる二十七八の眼の大きいマダムらしい女性に、訊いてゐるらしかつた。
そのマダムは、美奈子の方を、二三度振り返つて見たが、やがて自分で美奈子の方へ歩いて來た。



『(山鳩)を、お訊ねになりますの……。』と、マダムは感じよく微笑した。
『はあ……。』
『(山鳩)つてございましたわ。つい、二月位前まで……。でも、今は其の跡に、ニュース映畫の館が立つてゐますのよ……。』
『まあ！……。』
美奈子は、茫然として泣き出しさうになつた。
（つづく）

美奈子と山崎良彦との相會ふ日は何時か？　いよ〱面白くなります。次號は興味の最高潮！御期待を乞ふ。

時代小説

妙々鬼の盃

大倉桃郎

野口昂明畫

にはか女房

——御家取潰し、殿様配流——。

さういふ凶報が、福島左衛門大夫正則の領地へ慌しく傳はつて來た。正則は江戸へ參勤中である。領地は安藝備後である。兩國留守居の侍たちには寢耳に水である。信じたく無かつたが、江戸の實情を確めようとするうちに、早くも領土沒收の上使が、隣國備中まで來た。四隣諸大名も出動して、國境を包圍した。

まだ何も達して來ないが。

——おとなしく城地を明渡すかどうか。否とあれば征伐するぞ——。然う云はぬばかりの武力を張つた。口より先に拳固を振りあげたのである。

だが留守居の侍たちとしては、兩國五十萬石の城地は、主君から預かつたのである。主命の無きうちは、如何なる權威者にも渡せない。無體の强壓に腰をぬかしては、福島侍の武道が廢る。

『御上使が何ぞや。』

『討手が何ぞや。』

『たとへ將軍家の出馬があらうと首は下げぬ。天下が相手なら相手に取つて不足無し。』

敢然反抗と決した。

各地の支城は撤去して、本城廣島へ集結した。家老の采配で戰備を急いだ。

もう一つ備後福山城を固める事となつた。これは支城ではあるが、備中の境に近く、上使下向の入口にあたるから、侍意

地の皮切り場として、城代大崎玄蕃が主將となり、廣島とは別に籠城討死の腹を据ゑた。

元和五年眞夏の事である。

× × × ×

暑氣が強い。

『暑氣拂ひぢや。』

城内を見廻つて來た大崎玄蕃は、我が屋敷へ收まると、髭の荒い頤をしやくつた。太い鼻が脂汗に光つてゐる。

小姓が奥へ起つた。

間も無く小姓と共に、逞しげな女が酒肴を運んで出た。玄蕃の家政を預かつてゐる木曾女である。

『お大儀さまでござりました。』と、銚子を捧げた。

玄蕃は帷子の襟を披いて、

『皆々がよく働いてくれる。おれが差圖をせずとも、籠城手配は心配無いわい。』涼しげに盃をとつた。『奥の片づけは如何ぢや。』

『はい。見苦しくないやうに致しました。お掃除も濟みました故、女共へは今少し前に夫々手當をつかはし、送りの者をつけて立退かせました。』

『殘つたのは、そちだけぢやな。』

『左樣にござります。』

『ふむ。』と、玄蕃は今更のやうに、木曾女の顏を見まもつた。脇息もたれの片頰杖で、肉厚の髭面であるが、目の色は優しかつた『そちは、齡は幾歳かのう。』

木曾女は答へずに、可笑しさうに見返した。

『どうした。』

『如何と申すこともござりませぬが、私の齡などをお質ねなされたのは、御奉公の初めから今日が日までに、是れが初めてでござります。珍しく存じます。』

『然うかのう。然う云へば是れまでに、齡を知る用も無かつたと見えるが、今見るところ其方も、奉公始めに比べると、だいぶ齡を取つたのう。』

『ほゝ。取りも致しませう。あの節からもう二十年になりまする。』

『ほう、すると。』

『一昨年が四十でござりました。』

『もう左樣になつたか。』

『年に一つづつ取る齡ではござりませぬか。』

『一年も取り落さなんだぢやの。』

『正直に拾うて參りました。』

『代りに嫁入期を落したのう。』

木曾女はぷつと噴きだした。

『旦那樣。木曾は女なみに生れつきませぬ故、娘盛りにさへ縁談には一度も會ひませぬ。それ故に故郷を離れて奉公口をさが

しました。やはり醜婦の事とて、何方でも嫌はれ、身の振方に迷ふところを、旦那様に拾はれました。其時から木曾は旦那様へ一生御奉公と、きめたのでござります。』

『おれは其つもりでは無かつた。女にしては稀しく膂力が強さうぢやから、好奇心で抱へたまでぢや。最初は然うであつたがさて召使うてみると、悧發者で忠實やかぢや。こいつ賴もしい、と見たから、相應はしい男を見立てゝ嫁けてやりたいと思うたものぢや。』

『まあ。木曾は男戀しいなどとは、夢にも思うた事はござりませぬ。けれども旦那様のその思召は眞に〳〵有難く存じます。』

『ぢやがよ。それは只思うたゞけぢやよ。そのうちにおれは女房に死なれて、其方に臺所を預けた。任せてみると愈ゝ役に立つ。痒いところへ手が廻る。女房は無くとも其方さへあれば、家の締括りに心配無いぢやで、いつとなく嫁けてやる氣も忘れて年月を過ごした。過ぎも過ぎたり二十年か。以ての外に過ごしたわい。』

のんびり酒の追懷話である。外には籠城用意の動搖が渦まいてゐるのだが、玄蕃は一向無頓着さうである。木曾女も主人かぶれがしてゐるのか、不穩な雜音を氣にする風も無い。やはり氣樂さうに相槌を打つのである。

『いゝえ、其思召をお忘れなされたとて、それは旦那様のお心の中に湧いて消えたこと。木曾は只今初めて伺うたのでござります。今更惜しいとも思ひませぬ。それどころか木曾は御奉公以來二十年。何苦勞も無く樂しく過ぎました。この幸福はよい主人に拾はれたお蔭と存じます。』

『しかし永年忠實やかに勤めたそちに、是れぞと申すやうな事も、して遣はさぬうちに此度の急變ぢや。かうなつては其方の身のおちつきを、たしかに定めてやる事もできぬぢやて。』

『お案じ下されまするな。木曾には木曾の分別がござります。』

『それは有らう。逞しい其方の事ぢや。しかし玄蕃としては心苦しい。心苦しくはあるが、氣の向く方へ立退いてくれと、云ふほかは無いのぢや。』

『さあ。木曾は何處をさして立退きませうかなあ。』

おつとりと仄笑んだ。骨太さうな肉つきの硬すぎる木曾女は、女らしい嬌態に乏しい。唇も厚過ぎて鼻が低い。鈍重さうな風貌であるが、それだけおちつきがいゝ。

『旦那様。』と、柔かに重ねた『木曾は親も亡し、醜い女と云はるゝが辛さに故郷を棄てました。馴染みついたのは茲許でござります。懷かしい此お城を立退いて、行先はござりませぬ。』

『ぢやが此城も、間も無く火の海となるのぢや。』

『さあ。其時には木曾も、武勇の旦那様の家來でござります。鬼玄蕃の召使には、女にも鬼がをつたと、世間話に殘りさうな、覺悟を致したうござります。』

『心得がちがふぞ。』と、玄蕃が抑へるやうに大きな目を据ゑた。

『ちがひませうか。』

『此度の事は福島侍の意地としての、殿への奉公納めの籠城ぢや。そちは殿の御恩を受けたのではない。殊に女ぢや。むだ死は要らぬ事ぢや。』

『さやうには思へませぬ。侍衆が太守樣への奉公納めなら、木曾も旦那樣への奉公納めでござります。もと〳〵一生奉公と腹にきめました事故、旦那樣の御最期には、やはりお供をいたしたく存じます。』

『やめい。おれが冥途の供に女は無用ぞ。』

『お許しはなりませぬか。』

『ならぬ。』

『それでは諦めて、ひとりで思ふがまゝに討死と致しませう。』

『なに？』

『旦那樣。木曾は只今はお知行八千石の、このお屋敷のお勝手向を切盛致します。大崎屋敷の女家老と、ほか樣では噂するさうでござります。信濃の山家者、卑しい女がよくも斯う出世したもの、しかし此お城を立退いては、氏素性も無き元の山家女でござります。それよりは此儘に女家老で死んでこそ、一生の面目と存じます。』

『うゝむ。』

『最早奉公納めなどと、忠義だてを賣らうとは致しませぬ。生れついた小膂力をかやうな時節に使うて死に花と致したうござりまする。』

『うゝむ。ぬかしたのう。』

『若しお邪魔と思召せば、御城門下までは立退きまする。そこに敵を待ちかけて、御覽下されませ、一足お先に、決して見苦しい振舞は致しませぬ。』

『おう。』と、玄蕃は掻きこむやうに大きく首肯いた『然うか。夫れほど腹を据ゑをつたか。よし〳〵。』

大兵の居ずまひを直して盃を突出した。召使の女に盃をさすやうな事は、これまでには無かつた玄蕃である。突然であつた。

『思ひざしぢや。』と、眞實が籠もつた『飮め。きもちよく干せ。』

小姓が銚子を執つた。木曾女は躊躇はずに盃を受けた。滿々と酌させて、

『これはお供のかなふ御酒でござりませうなあ。』一氣に干した。

『返盃ぢや。』と、玄蕃は促して取戻した『木曾、これは三々九度の盃ぢや。』

『何と仰せなされます。』

『夫婦がための盃ぢや。』

『えゝ。』

『媒酌は要らぬ。おれが女房をおれが定めた。これが祝言の盃ぞ。』

『望み通りに死に花を咲かすがよい。其方は只今より福山城代大崎玄蕃の妻と名乘れ。』

『あつ。』ぶつけたやうに涙が來た。ついた手が肩崩れしてこみあげて咽び泣いた『夢のやうでござります。木曾は何といふ果報者でござりませう。おう勿體無い――。』歡喜に悶へて言句が詰まつた。

にはか娘

玄蕃が又見廻りに出ると、木曾女は奥へ引返した。女たちを立退かせたあとの奥向は、部屋も廊下もひつそりしてゐたが、臺所近くへ來かゝると、案外にもちらりと人影がさした。

ほの暗く艶走る板敷に、一枝柳を蒔繪したやうに、うら若い女が佇んでゐたのである。單衣の水色が優しく搖れて、色深い黑髮が鮮かな顏に向直つた。頤白く莞爾した。

『まア。千勢どのはまだ殘つてゐてか。なぜ早く立退きませぬ。』

木曾女は穩かに怪んだ。

千勢女は綺麗な目を眩しげにうつむけた。

『やめに致しまする。』そぶりが少し甘えてゐる。

『やめるとは。』と、木曾女は腑に落ちぬ。

大崎家で召使ふ女は、すべて木曾女の目で抱へてゐた。主人が無妻であるから、なるべく眉目佳いのを選んでゐた。その中でも千勢は優れて美しいのであるが、主人玄蕃はもどかしいほど女に淡泊であつた。女よりも酒であつたから、千勢とても只の召使奉公に過ぎなかつた。殊に新參でもあるから、危急切迫のこの城に殘るほどの義理は無いのである。

『やめるとは。』と、木曾女は不審を繰返した『それは如何したお考へぢやな。』

『はい。朋輩衆お立退前に申上げては、差障りがあらうかと存じ、先刻は申控へましたけれども、千勢は立退く先がござりませぬ。』

『はて、故鄕は近さうに聞いたが。』

『遠くはござりませぬけれども、私は橫道者に無體な戀慕をされ、恐ろしい企みに罹りかけた故、兄と共に故鄕を脫けました。御當所へ參つて私の奉公がかなひますと、兄は京へと申して別れました。その兄も何處へ落ちついたか、其後まだ消息がござりませぬ。他に兄弟も無く、故鄕も先祖からの故鄕ではござりませぬ。歸れば橫道者に又覘はれまする。』と、千勢女は危ふい身上を打明けた。

だが其不運を嘆くのではない。語音も明るく微笑も浮べてゐるのである。

『老女樣。』と、續けた『私はお屋敷へ參りましてからは、お前樣に可愛がられて此一年の幸福が身に沁んでをります。親には早く死なれて親の味は知らず、お前樣のおしつけを親の情のやうにお懷かしく存じました。』

淚ぐんだか、それは感謝の熱した濕りらしい。

『今更お別れは厭やでござります。老女樣が籠城ならば私も籠城。お立退なら私もお供、どこまでもお側にゐたい。どうぞ生死を一緖にお許し下されませ。千勢にはそれが本望でござりまする。なあ。どうぞ老女樣。』

すがらんばかりに手をついた。

木曾女には愈〻案外であつた。玄蕃に殉じたい我が背後には、我れに殉じたい乙女の純情が追ひ寄つてゐたのである。自身は二十年の主恩に殉ずるのであるが、これは短い月日の世話介抱を慕ふのである。たまらなく可愛い。

この乙女が故鄕を逃げたのは、權力ある者の邪戀を避けたのだといふ。それは美貌であるが故の厄難であらう。醜いがゆゑに故鄕を去つ

た自身とは、事情に皮肉な相違があるが、若い頃に故郷を出て流浪と寂しみに迷つた木曾女には、故郷へ歸れぬ千勢女の惱みが、自身の昔と同じやうに響いて來る。

ならうなら此乙女の將來を伸びやかに庇つてやりたいが、今としては其餘裕は無いのである。しかし叱つて追立て立退かせるのも、あまりに痛はしかつた。何としたものかの思案が、とうとう愛着に引きこまれた。

『千勢どの、不思議な御緣ぢやなあ。』と、手を取つて引寄せた『兄御の消息が無いとあつては、なるほど立退く先も覺束無い。これは寧そ。そなたと私とはこゝで母子となりませうかのう。』

ほんの今の先に、玄蕃から俄かに妻と呼ばれた木曾女は、その嬉しさの感激に醉つてゐた。感激は感激を生んで、眞からの母らしい手を、十七歳の千勢女にさし伸ばした。

籠城

國境に迫つてゐた公儀勢は、最早前進の部署を整へたのであらう、その中から一隊の人馬が福島領へ侵入して來た。

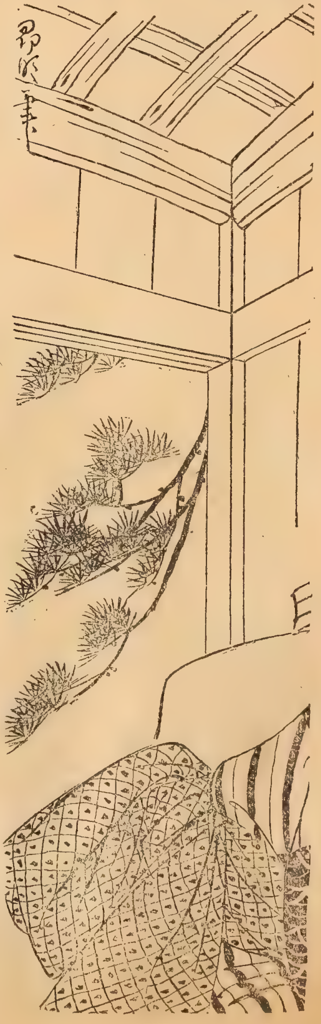
正面から進めば直ちに福山城へぶつかるのであるが、然うは出ずに海路を廻つて、福山背面の、五里ほど西の尾道へ上陸した。この先發隊は、城の小さい籠城者の少ない福山はさしおいて、それよりは遙かに西の、福島領の本城たる廣島へ使者を立てた。その方に福島侍の殆んど全部が楯籠つてゐるからである。その方へ乘込んだ使者は、

——如何なる理由で籠城を敢てしたか、福島丹波を上使がお召しである。出頭して申開きをせよ——。

と申渡した。

丹波は福島家の筆頭家老である。上使の召喚は當然ではあるが、今度の場合としては、うか／＼城は出られない。人質にでも取られては、侍一統の結束に動搖を來さぬとも限らぬ。名代として四人の陳辯使を出した。

これが尾道へ着くと、先發隊では直ちに船に載せて備中笠岡の上使の許へ護送した。かうしておいて先發隊は、今度は福山へ使者を立てた。この方は小規模の支城であるから、一喝して片づくと見込んだのであらう。乘込んだ使者は鼻息が荒かつた。



『領主不在の折柄、何者が差圖して反逆同樣の籠城に及んだか。頭から呑んでかゝつたのである。

この高飛車の詰問に對して、城代大崎玄蕃は恭しく空とぼけた。

『それはお質ねまでも無く、お使者が既に御承知の事と拜察する。當城に於ては江戸將軍家よりのお差圖と心得て籠城致しました。』

『何と申す。』使者は面くらつた。

玄蕃は疊みかけた。

『此頃の風説によると、當國領主は改易との事でござる。當國に於ては其眞僞を確めたく、江戸京都へ使を發しました。然るに國境には既に大軍勢御出張、交通をお塞ぎなされた。これにより當國に於ては、領主は切腹を仰付けられ侍共は鏖殺になさるゝ事と心得、それ故に籠城致しました。即ち大軍勢を俄かに差向け交通を塞がれた御處置を、籠城せよとのお差圖と心得た次第にござる。』

白を切つて逆ねぢを喫はせた。

『さやうな口實は申開きにならぬ。眼前籠城の差圖は何者がするか。』

『只今申上げた通り、一同鏖殺と心得た事ゆゑ、誰を先とも無く馳集まり、集まつた心が自然に一致籠城致しました。いづれ差圖の大將も定りませうが、只今は早急混雜の事とて、まだ其運びに至りませぬ。强ひて申せば只今は、身分の差別は無く誰も彼も銘々大將にござる。』

玄蕃の答へは愚弄に類する强辯であつた。

だが使者は議論に來たのではない。態度を更へて、

『當國領主は改易とはなつたが、切腹などの仰渡しはない。いづれ配流地に遷さるゝ事となる。また國境の人數は當國受取のための出張に過ぎぬ。誤解をしてはならぬ。太平の今日籠城沙汰は無類の大罪となり、領主の大難となる。早々開城、神妙に退去しては如何か。』穩かに諭した。

『それは何とも迷惑にござる。御言葉の如く領主が存命ならば、何分の差圖が當所へも參る筈、參らぬうちは當城は明渡せませぬ。領主より預かつた當城を、ほかよりのお差圖で明けては留守居の効が無いと存じます。』

玄蕃はこゝで當然の趣意を持出して、

『領主より何の沙汰も無きうちは、留守居の者共から申せば、安藝備後兩國は、まだまだ福島家領分でござる。從つて他家の人數が領内に踏入つては是又迷惑にござる。これは眼前看過しにもならず。事故の因と存じます故、尾道に上陸の人馬は早々他領へお引取下されたい。』

おし强く突張つた。

早々開城どころか、そつちこそ早々手を引けである。引かねば逆襲したとて、こつちの責任ではないぞ――と利かした。公儀へ對しては以てのほかの不敬になる。

使者は腹を立てた。睨み別れとなつた。

が、玄蕃に悔いはなかつた。廣島から陳辯使が出た事などは知つてゐなかつたが、たとへ知つたとて、手心をして陳辯の結果を待つやうな必要の無い立場であつた。

廣島と諜し合せて籠城したのではあるが、その趣意は同一であつても、籠城は別々である。別々に孤立討死の約束である。こつちへぶつかつて來た問題に對して、廣島の旗色を氣にする必要は無かつたのである。

屁か沈香か

既に露骨不敵な趣意を表明した福山では、當然討手を豫期せねばならぬ。大敵來れと待構へた。

士卒は千人に足らない。嚴戒の裡に翌日となつた。討手はまだ見えない。次の日となつた。まだ見えないが、何時か測られない。副將の秋田下總が嚴密に内外を巡視して、口々の油斷を戒め士卒を激勵した。士卒の闘志も熾烈であつた。

が、この昂奮緊張した空氣の中で、主將の大崎玄蕃は餘りに腰が重かつた。尾道からの使者に對しては、あれほど膽太く啖呵を切りながら、その口ほどにも無く、城中の統制には無頓着であつた。軍議があつても默聽するだけである。我が意見は出さない。一切他任せときめこんで、沈着といふよりは氣力が乏しさうに見えた。

籠城準備の最初から然うであつたが、今日とても本丸に詰めてはゐても、夫れも單にお茶濁しらしかつた。廣間の柱にもたれたまゝ、扇づかひと坐睡りとに時刻をつぶしてゐた。

『以前は鬼玄蕃と云はれたさうぢやが、鬼も此頃は褌が緩んだのかな。』

蔭口を叩く者があつた。

『まだ五十を幾つも越えまいに、老いぼれるのは早過ぎるが。』

『大酒祟りで中風でも病みかけたのではないかな。』

『下總殿のあの奔走が目に入らぬかのう。』

秋田下總の方が、血氣の面々には受けが好かつた。

日の暮れかたとなつて、その下總が玄蕃の前に來た。どかりと坐わつた。

『御城代。』ぶつかるやうに呼びかけた。

玄蕃は生欠伸で目をこすつた。

『海手の模樣を如何御覽か。船の動きが如何も怪しい。尾道の人馬が層むのではござるまいか。』下總は語氣が強い。

『層むかのう。』玄蕃は倦怠さうである。

『豫て風聞の四國勢が、今夜あたり上陸ではござるまいか。』

『ぢやらうかのう。』

『とすると國境の軍勢も愈々押寄せませうから、この東西の兩敵を見積もると、ざつと十萬かな。』

『十萬かな。』

『當城は百分一にも足らぬ小勢。運命は一日でござらう。』

『ござらう。』

『しかし廣島は大城、彈兵粮も充分。天下を引受けても半年は保ちませう。福島侍の武道の見せどころ故、廣島の籠城は一人たりとも多きが宜しく、又名ある侍としては、廣島に籠もつてこそ、働きも一際でござらう。』

『ござらう。』

『手前はそこを考へるのでござる。當城は一日の運命。棄石も同樣。同じく棄石ならば人數は現在よりも、少なくとも宜しからう。』

『からう。』

『されば御城代は、今の内に廣島へお移りあつては如何――。』下總は熱心らしく面色を讀んだ。

內心では玄蕃を嘗めてゐた。昨今の玄蕃の無能ぶりを幸ひに、主將のお株を奪ひたかつた。後の恩賞を目的とする籠城では無くても、福山の大將の名で討死したかつた。死後の美名の望ましさから、玄蕃を敬遠したいのである。その內心を體よく上塗つて、

『玄蕃殿は鬼玄蕃と唄はれ、武勇功名當家屈指の事。』と、おだてあげた。『お手前樣が參られたなら、廣島に槍柱が加はる事、まことに心强からうと存じます。棄石の當城には手前ぐらゐをお殘しあれば事足るでござらう。』

だが生返事を續けてゐた玄蕃も、この勸誘には――でござらう――とは云はなかつた。

『成程のう。』と、眞面目らしくなつた。『當城は人數の多少は論ずるに足らぬぢやで、廣島大切と思はれる衆は、あちらへ參られるも可い。

それでは下總殿が參られては如何ぢやな。』
　下總は勝手が狂つた。
『いや。手前が參りたくてのお話ではござらぬ。手前の事では無く。』と、ばつが惡い。少し狼狽てた。
『あ、玄蕃だけの事かな。しかし玄蕃は都合わるく、當城の城代を殿樣から申付かつてをる。殿樣より御沙汰が無くては、どこへも動けぬでのう。はゝ。どうも暑いの。』
　ぬらりと話をはづした。こゝらの名物の夕凪時である。
『ちと涼んで參るかな。』のつそりと座を起つた。ぶらり〱本丸を下がると、我が屋敷へ廻つた。
　家來たちは受持場所へ警戒に詰めてゐるから、家の内は閑寂である。奥へ入ると木曾女が古い鐵の棒の柄巻を取替へてゐた。防戰に使ひたいのであらう。千勢女も側

で古鎧を繕つてゐた。
『おかゝは用意が可いのう。』揶揄氣味ににやりとした。『おれは閑でこまる。閑ぢやと暑さがつけこむ。藥ぢや藥ぢや。』
　兩女が心得て酒支度をした。
　夜に入ると本丸から三人の侍が來た。いづれも頭分である。酒機嫌の玄蕃が表座敷へ出て對面すると、
『御城代。今夜こそは油斷がなりませぬぞ。』と、一人が苦々しげに口を尖らせた『御意見を伺ひに參つたので ござる。』
『御城代には是れまで、何のお差圖もなされぬ。我々は下總殿の采配によつて、兎も角も持場を固めてはをるが、今夜は形勢も殊更切迫なり。御城代のお差圖を仰ぎたいものでござる。』
　連立つたのもまくし立てた。三人ともに苛々してゐた。秋田下總の肩をもつ面々らしい。
『はゝ、ひどくお急きぢやな。しかし。』と、玄蕃は氣輕かつた『差圖は下

總殿任せでよろしかろ。あの仁は男盛りで氣力が熾んぢや。また武事も巧者ぢやでのう。』

『それでは御城代は置物も同様ではござらぬか。』

『さやう。その通りぢや。』

『これは異な事。御城代は置物でござつたか。置物でござつたか。』

『それで宜しかろ。愈々の時には置物も、沈香を炷くか屁を放るか致さうから。』

『その屁は如何放り、その沈香は如何炷かれますぞ。』

『其時が來ればおわかりぢや。放るも炷くも時により場合によるぢやでのう。』

『それでは合點が參りませぬ。お間に合せの茶話に聞えます。』

『お若いのう。』と、玄蕃は抑へた

『考へて見られよ。この籠城は將軍家に楯を突き日本中を敵とする。萬に一つも勝目は無いぞ。』

『それ故に城を枕に討死。』

『そこぢや。運を開く爲の籠城では無いから只討死、衆心一致の討死の覺悟だけで可い。是れが後援を待つ防戰ならば、今日三十明日五十の刻み〳〵の討死で、日を延ばす策略も要る。玄蕃の無い智惠も絞らねばならぬが、此度は福島家の槍先と此世へ置土產とするのぢや。藤の花より櫻と散れ、大敵寄せたら駈引は要らぬ。此玄蕃を眞先にして一度に討死ぢや。潔くもあり、目覺しくはないかな。』

　侍三人はおし默つた。

『但し殿樣より開城せよとのお墨付でも參つたなら、それには背けぬ。立退かねばならぬ。其時には夫れまでの籠城の罪を糺されるやら知れぬ。となると主立者が處分を受けねばなるまい。其時ぢやわい。この玄蕃は將軍家へ名を知られてをる。さやうな時には誰と申さうより、玄蕃が城門に立ち、首謀と名乘り切腹すれば、他衆へ咎めはかかるまい。すれば置物が屁をひるか沈香を炷くか、その時におわかりぢ

やろ。」

三人は顔を見合せた。

次の日となつた。夜明けの海面に兵船が散點してゐた。どの帆も東へ滑つてゐた。尾道の人馬が福島領を退去するのであつた。

國境の大軍勢も移動を始めた。前進ではない。後方三里の線へ引さがつた。福山との衝突を避ける模樣であつた。上使側の大讓歩と見えた。

福山としては案外であつた。

× × × ×

上使側の内情は――上使は姫路侯本多忠政、城地沒收の總奉行は老中安藤重信、出動大名は備前の池田、美作の森、出雲の堀尾、石見の龜井、古田、長州の毛利。控への大名は因幡の池田、豐前の細川、伊豫の加藤、讃岐の生駒、阿波の蜂須賀――それほど強大な武力を用意してゐたのであるから、最初は廣島の家老を呼寄せ、威壓して城地沒收を實行するつもりであつた。

が、注文の家老は奥深く巣籠つて、出頭したのは名代の陳辯使であつた。この名代は福山の玄蕃が受けたと同樣の詰問、説諭を浴びたが、福山の玄蕃と同樣に首の骨が硬かつた。玄蕃と同樣の強辯で詰問を刎ねつけ、同樣の抗議を主張した。

――主命無きうちは、城地は明渡さぬ。主命無きうちは、福島領へ人馬を入るゝ事は遠慮ありたい――。

玄蕃と同樣に突張つた。

上使は憤激した。

しかしながら總奉行安藤重信は公儀屈指の人材であつ。副奉行永井直勝も理智に敏い。顧問には老功大將加藤嘉明もゐた。それらが對策を協議した。

相手は大藩、殊に武道峻烈の藩風である。征伐することは夥しく士卒を損じねばならぬ。下手をすると大亂誘發の虞れがあるから、とうとう上使を宥め抗議を容れた。正則から書狀を取寄せるまでは城地沒收を延期する事として、そこで國境の諸勢も後退させたのであつた。

× × × ×

上使は其事情を將軍へ急報した。將軍秀忠は城地沒收を重大問題として、其終了報告を京都で待つてゐた。

急報を受けると直ちに急使を江戸へ立てた。急使が電馳して江戸へ着くと柳營留守居の重役は、直ちに改易蟄居中の福島正則に、國元宛の書狀――城地は神妙に公儀へ明渡せ――の命令書を書かせた。

これが京都を經て、六月下旬に至つて備中笠岡へ着いた。上使は直ちに廣島へ廻した。

それまでは廣島も福山も頑張つてゐたのであるが、既に主君からの命令が來ては、この上意地を張つては意地が汚くなる。主君へ大害を及ぼす事になる。廣島では異議無く承諾した。

書狀は福山へ廻された。

紛れも無く主君の眞筆であるから、して又かうなつては籠城の趣意も貫徹し武道も立つたのであるから、福山もとう〳〵開城ときまつた。

金の箱銀の箱

期限は二日間と注文をつけて、玄蕃は開城の準備にかゝつた。

城内の清掃、城付諸道具の整理陳列、諸士の屋敷の片づけ、その家財の搬出、その家族立退の順序、盗人狼藉者の取締、城明渡しの部署。一切を規定し差圖した。

立つ鳥あとを濁すな。物笑ひの種を殘すな。作法を紊すな。侮られるな——籠城用意の時とは打つて變つて氣を配つた。

明渡の前日となつた。準備は手際よく整つた。點檢して日暮となつて一先我が屋敷へ下ると、屋敷も綺麗に片づいてゐた。奥では木曾女と千勢女とが晩炊を献立して待受けてゐた。

『みごとな魚が手に入つたの。』玄蕃は寛いで肴を賞でた。

『お祝ひにと存じまして。』と、木曾女も和やかである。

『開城立退に祝ひとはをかしいの。おれは明日から浪人ぢやぞ。』

『浪人はなされましても、又の御出世の旅立としてお祝ひ申上げます。それから又木曾も、めでたく頂いた夫婦のお盃を、撚りを戻して離縁のお盃として、めでたく頂きたく存じます。』

木曾女を女房と玄蕃がきめたのも不意うちであつたが、木曾女が離別を口に出したのも突然であつた。

『ほう。そちは離縁を望むのか。』

『はい。もと〳〵奥方の要らぬ旦那樣と、娘の時より嫁入を諦めた木曾とでござります。籠城滅亡ときめたればこそ、夫婦のお盃も頂きましたが、生きてお立退となつては、木曾は元の召使に戻らねばなりませぬ。』

『成程然うか。ふむ。夫れが道理に合ふかどうか、おれにはわからぬが、玄蕃も素裸の浪人と落ちるからには、こりや女房の無い方が肩が輕いのう。』

『はゝ。お邪魔でござりませう。』

『流浪の足手纏ひぢやて。』

『さやうにお察し申しました。さ。それでは旦那樣、離縁のお盃を頂きまする。』

どつちもあつさりしてゐた。

『然うか。短い間のおかゝであつたの。』

『十日妻でござりました。』

『で、そちは何處へ立退く。』

『一先上方を當てと致します。この千勢と此程母子の約束を致しました故、千勢の兄のありかを搜しに參りまする。』

『俄かに二人の子を持つぢやの。しかしそちとおれとは二十年の馴染ぢや。いよ〳〵別れると思ふとちと名殘が惜しいわい。』

『お名殘に木曾は、今一つお祝ひのお肴を差上げたうござります。』

『まだ肴があるか。』

『取つて置きのがござります。』

いそ〳〵と起つて木曾女は、開放しの緣へ出た。下りると見透しの庭石へ立寄つた。男たちでも二人三人ではすぐには動かせまい。づつしり土に吸ひついた岩石である。それが木曾女の手にかゝると、薄れかけの夕日を滑らせて弄ばれたやうに裏返つた。

千勢女はびつくりした。小姓も目を見張つた。

だが二十年前、福島家が尾張清洲の城主であつた頃、城下往還で荒狂ふ猛牛を、苦も無く取押へた女があつた。玄蕃が見かけて召使とした。それが今日の木曾女である。召使はれてからの木曾女は、その力を持出すやうな出來事には會はない。自身でも包みかくしてゐたから、知らぬ人の目には只大柄の女に過ぎなかつた。

しかし玄蕃には案外ではなかつた。しかし〳〵木曾女が今庭石を擡げたのは、その膂力を見せたかつたからでは無い。刎ねつけた跡から二つの箱を引出した。持つて來て玄蕃の前に据ゑた。

『これでござります。』と、蓋をはづした。『小判五千兩、板銀二千五百枚ござります。』

この頃の小判は一兩で金四匁七三である。銀は一枚四十三匁である。二つの箱の金光銀色は意外莫大の財貨を盛つてゐたのである。玄蕃もこれには流石に太い眉を詰めた。

『何ぢや。是れは。』と、肩揺れがした。

『旦那様の御軍用でござります。』

『おれは知らぬ。何時湧いた。』

『旦那様は清洲の頃はお知行三千石、當國では八千石。それから十七年となりまする。長い年月にお賄ひの剰りが是れだけ積もるに不思議はござりませぬ。お臺所を預かる事故貯へておきました。』

『えらい事を爲をつたのう。』

『初めは御軍用にと存じましたが、使途は異ひましても、是れより御浪人中の御用に立ちませうと存じます。』

『うむ。おれは有る時方題、その時々に滓とする。是れはそちが心がけの貯蓄ぢや。うか〳〵手を出せぬての。ぢやが明日から浪人。腹が減つては困るて。少々分配を貰うておくかな。』

『ぷつ。何を仰せなさるぞや。是れは旦那様のお荷物でござります。』

『いや。どうも義理がわるいが、しかしまあ可いわ。頬かむりして貰うておく。』

『はい。お納め申して木曾も身輕くこれで安心でござりまずる。』

『そこでぢや。おれもそちの立退を祝ひたい。此箱ぢや。一つはそちに與れる。金でも銀でも可い。好きなのをそちが取れ。玄蕃の寸志ぢや。』

『それはなりませぬ。欲しいならばお目にはかけませぬ。默つて持去ります。木曾には木曾の旅用意がござります。』

『むつかしい理窟は止めにせい。其方が取らねばおれも取れぬ。どつちも取らずば廢りものぢや。それ。金の箱を其方が取れ。』

『いゝえ。』突き戻した。

『ならば銀ぢや。』

『いゝえ〳〵。』

『剛情な。』玄蕃は太い手を金の箱に突込んだ。一摑み小判を引いて木曾女の前においた。『それ。これが其方の分。否とは云はさぬ。主人が申付ける。』

木曾女が戸惑ふ間に、又摑み出して我が前に置いた。『これは、おれの分。』次の一摑みを木曾女の前に重ねた。『是れは其方の分。』

否も應もない。摑みわけの分配である。金も銀も平均盛分けときめたのである。

『お待ち下されませ。』と、木曾女は遮つた。「お情は頂戴致しまする。けれども女の旅に多分の金銀は怪我災難の因でござります。差出て申上げまずる。

この金銀は搗き交ぜて、旦那樣の御用と、表男衆たちへのお手當と私へのお惠みと、分相應にどうぞお分直し下されませ。』

女の召使は先に立退かせたが、男の家來は籠城組であつた。それが少くなかつたからである。

惡魔拂ひ

『おうい〳〵。』

街道には諸大名の人數が續々繰込む。海路も船が不足である。混雜が煩いので木曾女と千勢女は山間のぬけ路を辿つてゐた。その途中を不氣味な聲が呼びかけた。

路は陰森とした木立を縫うてゐる。人里はまだ遠いらしい。女の足では逃げたとてむだである。

木曾女は立止まり顧つた。鎌髭の荒くれ男が見えた。その後に十人ばかりは續いてゐるらしい。

籠城騷ぎの時には、無賴の徒が城下へ入込んだといふ噂があつた。城から嚴重に取締まつたので、町家に盜難放火沙汰も起らなかつたが、開城の今日となつては、立退く人の寂しい姿は、敗殘の落人同樣に見えさうである。その弱味につけこむ惡徒ではないか。玄蕃から分けられた金銀を覘つて跟けて來たのではないか——と木曾女は推した。

『私へ御用かな。』千勢女を背後に庇ひながら和らかに待迎へた。

『おう。ちと無心がある。』と、眞先の鎌髭が脅し口調で刀の鍔をひねくつた。『をば御に用は無いが、その若い女を申受けたいのぢや。』

『是れはまあ、何かと思うたら、さやうなお戲れは止めて下され。大切な娘を見も知らぬお方に何であげられませう。』

『然うは云はぬ。それは千勢というて、俺の旦那が念かけた女ぢや。去年福山へ逃げて武家奉公、それも突止めておいた。此度の騷動で必ず立退くと見込んで、開城前から見張りをつけた。どうぢや分つたかの。是れほどに網を張つたからには、逃げたくとも一寸の隙も無いぞよ。をば御までを取つて食はうとは云はぬ。その女をおいてゆけ。』

毒づく間に鎌髭の背後には、續いた男たちが重なつた。大脇差のもある。兩刀を帶したのもある。地侍の群らしい。どれも兇險な面構へである。

千勢女はわなゝく。

『御無體ぢやなあ。』と、木曾女は千勢へ目くばせした——かまはず先へ行け——せき立てた。

『ならぬ。』と鎌髭が怒鳴つた。『これをば御、美久呂兵庫樣と云へば、福山へも聞えた地侍、領主へもむざとは頭を下げぬぞ、その旦那がこゝにござる。わざ〳〵千勢を迎へにお出ましぢや。わからぬか。』

その兵庫が後方から叱つた。

『えゝ、まだるこい。物を云はすな。』

『心得た。』鎌髭は猛獸飛びに木曾女の胸倉を摑んだ。

『あぶない。』摑んだ手を木曾女が摑んだ。

『や。抵抗するか。あ。うつ。』

『退いて下され。』木曾女が振拂つた。

鎌髭は大ころ投に仲間の足許へけし飛んだ。

『面倒な。斬倒せ。』

兵庫が苛つた。男たちは刀を抜いた。が、山間の細路である。一齊にはかゝれない。相手の動搖む間に木曾女は飛びさがつた。隔てを取つて峰崩れの岩石を引抜いた。地響き立てゝ投げつけた。

『あつ。』勢ひかゝつたのが、腰を掠られて平太張つた。次のがかはす機みに崖を踏みはづした。岩石も物凄く踊つて谷へ落ちた。

相手の狼狽へる間に木曾女は手近の生木を引抜いた。一振逆に返して、根も土もかけて男の群へ打込んだ。

二三人が崖下へ跌つた。

『退け／＼。おのれ。』兵庫が家來を越えて前に出た。長刀を閃かして切りかゝつた。

『そなたもかえ。』木曾女は薙拂つた。泳ぐ相手を叩き伏せて壓し摑んだ『娘を欲しい主はそなたかえ。惡相な醜男子ぢやのう。』鈍相な醜婦が摑み振つて投げつけた。

兵庫はうんと悶絶した。

× × × ×

この日大崎玄蕃は、福山城代として城受取の役々を迎へた。態度は涼しかつた。媚びる風も無く、角も立てず、福島家重臣たる估券も崩さず、對等の禮儀で受渡しを濟ます、と部下の序列を正して退城した。城下で部下を解散すると、その人たちの立退を見屆けてから、鎧一領槍一筋で、僅少の供を連れて、飄々と流浪の旅に上つた。

後に紀州大納言賴宣卿に招かれて召抱へられたのであるが、どういふ脈絡がついてゐたのか、その時の臺所には、もとの如くに木曾女がをさまり、千勢女も美しい姿をちらつかせてゐた。（終）

世界歌劇名曲集

九月十日より予約募集開始

キングレコードの洋樂盤『日本テレフンケン』が發賣二周年を記念に發賣する絕對豪華盤『世界歌劇名曲集』！
洋樂愛好家と否とを問はず必らず備ふべき名曲集です！

―豫約規定―

◇十二吋十枚（毎月一枚配布）
◇本會員に限り頒布
◇定價三圓三十錢（全十枚で三十三圓）
◇申込金三圓三十錢（最終會費に充つ）
◇第一回拂込金六圓六十錢（申込金共）
◇第一回配布と同時に豪華アルバム贈呈

（詳細は最寄蓄音器店にてお聞き下さい。內容說明書進呈）

第一回配布（十月一日より配布）

歌劇『魔彈の射手』ウエーバー曲

我國に於ても廣く人々に膾炙されて居る有名なグランドオペラノ粹を蒐めたもの、歌手も樂團も、指揮者も世界最高メムバー揃ひです。

お申込の好機は今！
キング特約蓄音器店へお申込下さい

洋樂キングレコード
日本テレフンケン
大日本雄辯會講談社發賣

何故

食べた物が十分消化されない？吸收されない？

榮養低下、精力減退の原因はこゝにある!!

私共が生命を維持し、體力を充實するために食物を攝らねばならないのは申すまでもありませんが、攝り入れた食物が眞に血となり肉となつて身體の養ひとなるか否かは、一に胃腸での消化吸收如何によるものでありまして、如何に榮養成分が完全でも、熱量が豐富でも、消化吸收されない食物は地中の寶玉にも等しいと申さねばなりません。

一體私共が日常攝取する食物中の蛋白質、脂肪、含水炭素の三大榮養素はそのまゝでは殆ど水に溶けないものでありますから、これを體內に吸收するには先づ水に溶け易い形に變へなければなりません。これが消化器管の主な仕事で物理的作用と化學的作用の二つに分かれてゐます。物理的とは咀嚼による細挫、唾液との混合、嚥下、胃腸運動による混和、運搬の諸作用で、化學的とは唾液、胃液、膽汁、膵液、腸液等、消化液中の酵素による分解作用であります。

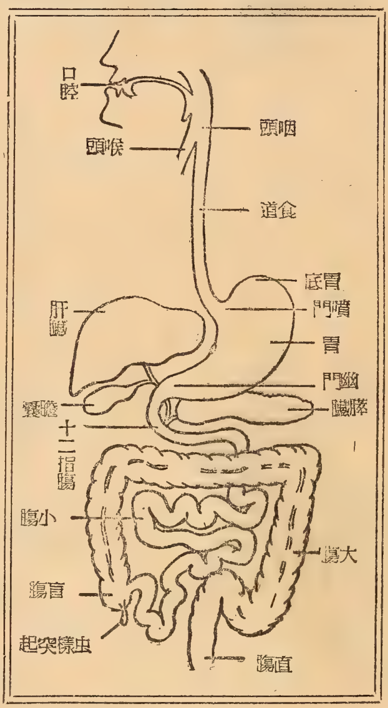
今、口腔を去つた食塊が食道を通つて胃に這入ると、まづ胃底に溜り、胃の蠕動（胃筋肉の伸縮運動）によつて次第に幽門へ送られ、又もとに送り返されます食物が胃の中に入ればすぐにこの運動を起しますから、食物は胃液とよく混和して糊狀となり、一部づゝ幽門から十二指腸へ送り出されます。胃液は胃粘膜中の胃腺から間歇的に分泌せらるゝ消化液で鹽酸とペプシン、ラーブの二酵素を含み主に食物中の蛋白質を消化分解すると共に殺菌、防腐の作用をも兼ねてゐます。

腸では膽汁、膵液、腸液等が分泌され胃で一部分消化された食物を更に完全に消化分解します。腸內の消化は主に小腸で行はれるもので、小腸粘膜は皺襞に富む許りでなく、絨毛と言ふ長さ一粍位の小突起が天鵞絨の毛の樣に密生してゐて振子運動によつて食物と消化液の混和を助け、伸縮運動によつて吸收を促します食物が口に入れられてから二時間乃至五時間後に消化物はこの絨毛中の毛細血管及び中心乳糜管を經て體內に吸收され始めます。吸收されない殘渣は小腸の蠕動

運動によつて大腸の方へ送られます。

大腸からはアルカリ性粘稠液が分泌され、細菌の繁殖が著しいため、消化せられない食物中の纖維や蛋白質等が腐敗、醱酵作用を起し、多くのガスを發生します。このガスは大腸壁をひろげて不消化物の通過を容易にさせ、且つ腸管の運動を促しますから、水分を吸收された殘渣は直腸內に移送され、肛門の方から排泄されます。

かやうに靈妙な作用をもつ消化器管も暴飲暴食、咀嚼不充分、不消化物、過熱過冷の飲食物、酒、煙草、香味料等で過度に刺戟してゐると、胃腸粘膜に炎症や爛れが出來たり、胃腸筋肉が弛緩して運動力が衰へたり、分泌神經が興奮又は萎縮して順調な消化液の分泌を妨げますから、食べた物が十分消化されないのみか未消化物の停滯、腐敗、醱酵等から腹鳴、腹痛、下痢、嘔吐を催したり、胸やけ、噯氣、惡心、胃痛等不快な症狀に惱まされ、はては榮養の低下、精力の減退をも仰つやうになるのであります。ですからもしも執拗な消化不良に困るとか種々榮養物を攝つても思はしくないと云つた方は、消化劑、榮養劑を妄用する前に、かうした胃腸の病變があなたの榮養を妨げてゐないかを御檢討なさるべきでありませう。



治療藥アイフはかやうな胃腸障害を極めて合理的に治療し得ますので汎く賞用せられて居ります。それは治療藥アイフの有つ病源、對症二重の作用によるもので、主藥が胃腸內壁の病變部に沈着して炎症を癒し、粘膜を強め、弛緩を引緊め分泌や蠕動機能の異常を整へると共に、腸管內の有毒物質を吸着して體外に排泄する等廣汎な病源治療を營み、併せて、胸やけ、噯氣、惡心、胃痛、腹痛、下痢、便秘、嘔吐等の諸症狀をも消退して食慾消化力を促すからであります

因に治療藥アイフの藥價は四日分七十五錢、八日分一圓五十錢、十七日分三圓、特製十一日分五圓等で、重症には特製アイフ、便秘症には加減アイフが效果的であります、全國有名藥店にありますが發賣本舗は大阪市東區淸水谷西之町の順和商會（振替大阪三四五番）であります。

探偵小説

臆病な男

甲賀三郎
伊勢良夫畫

二人の客

荒木熊吉といふ、一寸聞くと強さうな名を持つてゐたが、彼はひどい臆病者だつた。友達から兎といふ渾名をつけられてゐたが、身體が小さくて、跛ではないのだが、丸で跛のやうに、變にヨタ〳〵した歩き方をして、始終オド〳〵としてゐる樣子は、全く兎そつくりだつた。彼は子供のうちから誰と喧嘩しても負

けてばかりゐて、小學校を卒へて、酒屋へ奉公にやられてからも朋輩から毆られたり、罵られたり、苛められ通しだつた。喧嘩犬の強いのを仕立てようと思へば、小犬のうちから、なるべく弱い相手を選んで喧嘩させて、勝たせるやうにして、自信をつけてやらなければいけないのだ。熊吉が臆病者になつたのも、可哀想に、いはば育ち方が惡かつたのである。

大人になつても、熊吉はあらゆるものが恐ろしかつた。第一に親父が恐かつたし、主人が恐かつたし、巡査が恐く、自動車が恐く、病氣が恐く、毛虫はむろんの事、蝶々までが恐かつた。然し、何が一番恐いかといふと、それは自分の女房だつた。彼は世話をする人があつて、今の女房のお花と結婚したが、その時に、彼は之で恐い主人から離れ、恐い親父から獨立して、始めて自分の世界になるんだと思つて、ホッとした。所が、それも束の間で、お花は名前こそ優しかつたが、身體は熊吉よりもずつと大きく、腕力も勝れてゐて、人一倍氣丈な女だつた。だから、熊吉が臆病でお人好しで、意氣地のないのが、齒痒くて耐らず、朝から晩まで怒鳴り通した。尤も、お花は中々の働き者で、近所の工場へ通つて、熊吉以上の稼ぎをした。熊吉はといふと、酒屋の店に年期奉公をして、少しは酒のよし惡しや、安

く仕入れる方法などを覺えたので、新橋の附近のガード下に、スタンドバーを出してゐた。間口がやつと一間あるかなしの、吹けば飛ぶやうな店で、そこへ、中身は無論怪しげなものが這入つてゐるのだが、兎に角、洋酒の瓶をズラリと並べて、コップ賣りをするのだ。表にはガタピシする硝子戸が篏めてあつて、中に這入ると、疊一枚ばかりの土間があり、そこに名ばかりの腰掛けが二つ三つ置いてある。そんな店だつた。夜は隨分遲くなるのだが、朝は早く起きて、御飯を焚いて、女房の辨當まで拵へてやるのだつた。

そんな女房孝行の熊吉だつたが、お花はそれでも滿足せず、どんなに遲くなつても、終電車までに歸つて來なかつたら承知しなかつた。中野の方に歸るので、終電車は一時すぎまであつたが、商賣が商賣なので、それまでに切り上げる事は、時によるとむづかしいのだ。一度長つ尻の客の爲に終電車に乘り遲れて、圓タクで歸つたら、眼の玉から火の出るほど叱り飛ばされて、それから三日といふものは、怒鳴り續けられた上に、お仕置きに洗濯やら拭き掃除やら、溝さらへまでやらされたのだつた。それ以來、彼は客の機嫌を損じようが、時間にはちやんと店を閉めて、サッサと歸る事にしたのだつた。

さて、問題の日は雨が大分激しく降つてゐた。朝のうちはシトシトとした典型的な秋雨だつたが、夜になつてから、急にひどくなつて、一時は溝の水が溢れ出すほどだつた。十時すぎには又小降りになつたが、宵の激しい雨が祟つて、出足が鈍く、店もとんと閑だつた。

十一時近くなつたので、熊吉は今日は早仕舞ひにしようかな、と思つてゐると、硝子戸がガタピシと鳴つて、ぬつと二人連の客が這入つて來た。

『いらつしやい。』

熊吉は彼にしては威勢よくいつて、客を見たが、馴染客ではなく、全然見知らぬ男であつた。二人とも洋服で、上物らしいレーンコートを來てゐる。一人は中折だが、一人は鳥打帽を眼深に被つてゐる。ひよつと見ると、鳥打帽の男の腮の下に太くい、げぢの這つてゐるやうな刀傷があつた。眼つきも物凄い。

『ウイスキーを呉れ。』

中折帽の男がいつた。

『へい。』

中折帽の男もいゝ人相ではなかつた。何だかぢつと自分を睨んでゐるやうに思へて、熊吉はもうウイスキーの壜を持つ手が、ブルブルと震へた。

『十一時五分前だ。』

中折帽の男は腕時計を見ながらいつた。

鳥打帽子の男は熊吉の出したウイスキーをグッと煽つて、

『もう十分だな。大丈夫かな。』

『大丈夫だらう。』

中折帽の男はさういつて、同じくグッとウイスキーを煽つた。

熊吉は直ぐこの二人は新橋驛から汽車に乗るのだなと思つた。二人とも小型のスーツケースを持つてゐた。十一時五分には、下關行の最終の急行列車が新橋驛を發車するのだ。

『オイ、もう一杯。』

鳥打帽がいつたが、中折はしッといつて、鳥打帽の腕を押へて、表の方をキッと見た。鳥打帽もキッとなつて同じやうに表に氣を配つたが、

『行かう。』

さういつて、熊吉が恐る〳〵注いだウイスキーをグッと呑み干して、

『勘定だ。』と、ズボンのポケットからクシャ〳〵になつた紙幣を掴み出して、ポンと臺の上に抛り出した。

『有難うございます。』

熊吉が手を延ばして紙幣を拾ふと、二人はそのまゝ外へ出ようとした。

『あゝ、モシ、お釣りです。』

熊吉はあわてゝ背後から呼びかけたが、二人はズン〳〵行つて終つた。

◎經濟戰、物は貴い無駄するな

手前は犬だ！

僞せ紙幣でも置いて行つたかと、熊吉はドキンとしながら、皺を延ばして見たが、眞正贋ひなしの五圓紙幣だつた。何しろ一杯が二十錢だから、四杯で八十錢、四圓と二十錢のお釣りである。十錢や二十錢なら兎に角、こんな大金を默つて猫ばゝを極めるには、熊吉は餘りに小心で馬鹿正直だつた。彼はあわててズボンのポケットから大きな蟇口を出して、四圓と二十錢を掴み出すと、表に飛び出した。

外は生憎と又降り出してゐた。二人の客の姿はもう見えない。然し、新橋驛へ向つたといふ事が、大體見當がついてゐるから、熊吉は驛を目がけて雨の中を驅け出した。

驛に着くと、今や正に汽車はホームに滑り込まうとしてゐた。大急ぎで入場券を買つて、改札口に驅けつけた時には、もうジ、ジ、ジリンと發車信號が鳴り響いてゐた。

プラットホームに飛び出した時には、もう正に發車しようとしてゐた。乗客はむろんすつかり乗り込んでゐる。東京驛と違つて、見送りの人は少く、プラットホームはガランとしてゐたので、熊吉は釣錢を握つたまゝあちこちと走つたが、二等車もあり、寢臺車もあり、長い列車なので、容易に客の姿は見出せない。

熊吉はたうとう、一つの箱に飛降つた。彼はこの汽車が品川

で停車する事を知つてゐたので、その間に列車の中を歩いて、先刻の客を探さうと思つたのだ。驛員に怒られやしないかなどと考へて見る餘裕は、この時の熊吉にはなかつた。熊吉が飛び乗ると、すぐ汽車は動き出した。

新橋から品川まで約十分ばかりあるので、熊吉は飛び乗つた所から、後の方へ歩き出した。後の方には二等車と二等寝臺車がある。二人の客は人相は餘りよくなかつたが、相當の服裝をしてゐたから、熊吉は二等客と踏んだのだ。

熊吉の勘は當つて、二人の客はレーンコートは脱いでゐたが、未だ帽子は被つたまゝで、二等車と寝臺車との間のデッキの所に立つてゐた。

『お釣りです。』

熊吉は二人の前にお釣りを乗せた掌をパッと開けて差出した。

二人はぎよつとしたやうだつた。

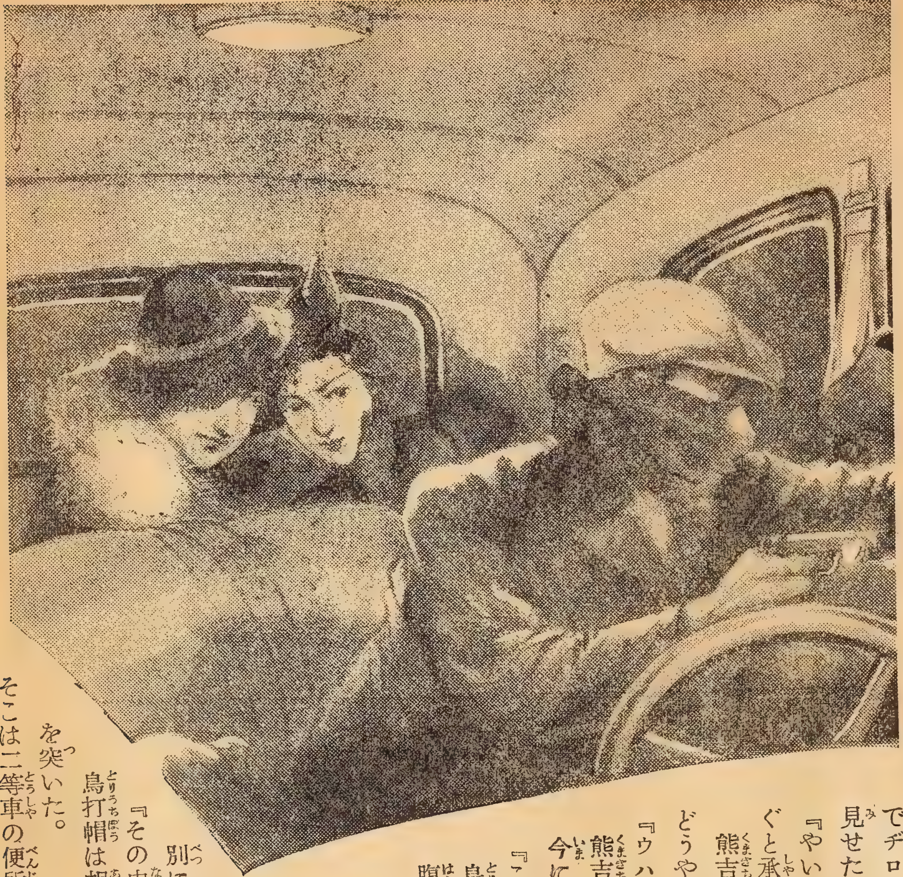
『何だ、君は。』中折帽は熊吉をグッと睨んだ。熊吉はもうブル〳〵身體が顫へた。

『あの、お釣りを、どうぞお調べなすつて――四圓と二十錢。』といひかけて、『入場劵を買ひましたから十錢だけ――』

『うん。お前は先刻のバーの親爺だな。』鳥打帽が捲舌でいつた。

『へい、さやうで。』

中折帽と鳥打帽はチラリと顔を見合せたが、鳥打帽は腮で一つグィとしやくつて見せた。中折帽は鋭い眼



でヂロリとあたりを見廻して、うんと一つうなづいて見せた。

『やい。』鳥打帽は聲を低くして、『こつちへ來い。騒ぐと承知しねえぞ。』

熊吉は腹のあたりに何か冷いものをグイと感じた。どうやらピストルの筒先らしい。

『ウハ、ウハ、ウハ――』

熊吉はもう口が利けなかつた。腰が抜けかゝつて、今にもヘナ／＼と倒れさうになつた。

『こつちへ來い。』

鳥打帽はもう一度低い聲で力強くいつて、熊吉の腹に當てたピストルの筒先で、グイ／＼突いた。

『ウハ、ウハ、ウハ。』

熊吉は陸に上つた魚のやうに、口をパク／＼させながら、よろ／＼と歩き出した。中折帽は熊吉に寄添つた。

乘客が一人、三人の傍を通つたけれども、別に怪しみもせず、つと向ふの方に行つて終つた。

『その中へ這入れ。』

鳥打帽は相變らず低い聲でいつて、筒先でグイと熊吉の腹を突いた。

そこは二等車の便所だつた。

熊吉は半ば夢中で、戸を開けて、中へよろ〳〵と這入つた。鳥打帽は鋭くあたりを見廻したが、二等車は乘客が割に少く、誰もこつちを注意してゐる者はなかつた。と、中折帽が境の扉をガラツと締めた。それでこつちの姿が誰にも見えなくなると、鳥打帽はつと便所の中に這入つた。そしてすぐ戸を締めたが、中折帽はその外に立つてゐた。

鳥打帽はもう半分死んだやうになつてゐる熊吉の兩手を、ズボンのバンドを外して、縛り上げた。それから上衣のポケットからハンカチを出すと、丸めて熊吉の口の中に突込んだ。

『手前は犬だな。』鳥打帽子は相變らず低い聲で、忌々しさうにいつた。『釣錢だなどと正直さうな事をいやがつて、樣子を見に來やがつたな。その手は食はねえぞ。お前見てえな青二才に仕事の邪魔をされて耐るもんけえ。態ア見やがれ。』

さういつて、ガラリと扉を開けて、外に出て、すぐ扉を締めた。外に立つてゐた中折に、

『仕方がねえ、仕事が旨くすむまでは、兄貴、交る〴〵、この前に立番だ。』

『聲は立てねえやうにしてあるか。』

『大丈夫だ。』

『飛んだ邪魔が這入りやがつた。』

『何だか、兄貴、少しグレハマだぜ。俺ア心配になつて來た。』

『ちよツ。』中折は舌打をして、『全くヒヨンな事になりやがつた。大阪邊まで飛ぶ心算だつたが、濱の邊でズラかる事にしよう。それまでに何とかして、この扉を外から開かねえやうにしなくちやならねえぞ。』

汽車はやがて品川に停車した。乘り込んで來た客が二三人あつたが、荷物を入れたりするのに忙しく、二人の方に注意しようともしなかつた。

汽車は何事もなかつたやうに、品川驛を發車した。

ホールダップ

熊吉が二等車の便所の中に監禁された時と、丁度同じ時刻に、高輪の邊で、大へんな騷ぎが起つてゐた。

一時收つてゐた雨が又一しきり激しくなつて、往來には全然人影もない。兩側は大きな邸ばかりの淋しい高輪南町の通りを一臺の高級自動車が疾驅して來たが、不意に横丁から一人の男が飛出して、手を擧げた。運轉手はてつきり非常警戒だと思つて、ギイと急停車したが、その男はいきなり運轉臺の扉を開けると、助手席に飛乘つて、

『騷ぐと生命がないぞ。』といつた。

見ると、彼は覆面をして右手にピストルを持つてゐるのだ。ルームの方には親子らしい、洋裝の貴夫人風の女と、若い美しい令孃が乘つてゐたが、聲も立てられず、口を大きく開けたまゝ、覆面の男を見つめた。

運轉手は一寸抵抗の氣勢を見せたが、覆面の怪漢がすぐピストルの筒先を向けたので、仕方なく兩手を擧げた。

怪漢はルームの方の夫人と令孃に、態とらしい作り聲で、

『聲を出すと生命がねえぞ。ピストルは伊達ぢやねえぞ。さア、指輪

に頸飾り、時計紙入、何でも金目のものはみんな出せ。愚圖々々すると承知しねえぞ。早くしやがれ。お前つちがな、今夜の外務大臣の夜會に出て、十時半きつかりに迎へを來させ、丁度今時分こゝを通る事を、俺アちやんと知つてゐたんだ。早くしろつたら、早くしろッ。』

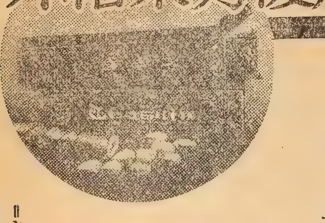
夫人と令孃は觀念したやうに、いはれるまゝに、首飾り指輪、時計紙入など貴重な品を怪漢の擴げてゐる大きな掌の上に乘せた。

『未だもつと貰えてえものがあるが、急ぐから之位にして置いてやらア。今度つから氣の利いた護衞の一人も連れて歩け。あばよ。』

怪漢は身を飜すと、素早く雨の中に飛び降りて、忽ち横丁に消えて終つた。

『は、早く、早く。』夫人は氣違ひのやうに叫んだ、『は、走らせてお

國産優秀藥紹介



感冒 頭痛に

田口博士の『トラシン』

トラシンは新發見の殺菌劑カロキシンを基體とし、解熱・鎭痛・袪痰の藥として定評あるアミノピリン・フエナセチン・コデイン等を合理的に配劑したもので、醫界にも定評があり、

熱を下げ、痛みを鎭め、せきを止め、各種の病原菌を殺菌し肺炎の併發を防ぐ特長があります。(講談社發賣)

=主効=感冒・頭痛・歯痛・扁桃腺炎・鼻カタール

(定價)二十五錢・五十錢・有名藥店にあり。

呉れ。』

ハッと我に返つた運轉手はあわてゝスターターを踏んだ。

横丁に飛び込んだ怪漢は、走つて行く自動車の音を聞いて、フ、ンと鼻で嘲笑つたが、すぐ覆面を取つて、それにピストルをクル〳〵と捲き込み、すぐ前にあつた高い石垣の崩れた所に突込んだ。そして、かねてそこに隱してあつたらしい紙包を取り出した。さうして、あたりを鋭く睨むと、やがて何事もなかつたやうに、ブラ〳〵と品川の方に歩き出した。

被害者が最寄の交番で車を停めて、委細を訴へたので、警視廳管下の各警察署、分けても、被害地の所轄署は上を下への大騷動であつた。

高輪に住む屈指の實業家で大富豪の春井男爵の夫人と令孃の二人連が外務大臣の夜會の歸り途、自宅とホンの目と鼻との間で、ピストルを持つた覆面の怪盜に脅迫されて、金目のものを盡く强奪されたといふのだ。我國に未だ會て聞いた事のない大膽極るホールダップである。而も、いかに淋しい邸町の豪雨の中の出來事とはいひながら、交番もさほど遠くない所にあるのに、疾驅する自動車を停めての犯行とは、舌を捲く他はないのだ。然し、警察署は舌を捲いてゐるだけでは濟まされぬ。忽ち非番の巡査は召集され、各交番には命令が飛び、短波調のラヂオは空間を走つて、一瞬のうちに水も洩らさない非常警戒網が張られた。何しろ被害者の訴へ方が早かつたので、强盜は未だ現場をウロ〳〵してゐるに違ひないのだ。殊に現場附近は平素でも深夜は流し圓タクは走つてゐないし、豪雨の折とて、全然走つてゐなかつた。强盜はとても圓タクで警戒線を突破したとは考へられない、徒歩

でマゴ〳〵してゐるに違ひないのだ。

八つ山下から元の品川宿へ通じる國道には陸橋がかゝつてゐる。その下を汽車が走つてゐるのだが、この陸橋は横濱方面へ出ようとするには、尤も重要な道路だ。八つ山下の交番では伊藤巡査は、非常警戒の命令を受取ると共に、鼠一匹逃がすまいと、大きな眼をギロつかせてゐた。が、暫くの間、丸で人通りといふものがなかつた。

『馬鹿なら兎も角。』伊藤巡査は思つた、『いくらなんでも國道を大手を振つてやつて來やしまい。丸で自分から網の中へ飛び込むやうなものだからな。』

伊藤巡査はこんな事を考へながら前方を見たが、ヒヤツとした。といふのは、今は少し小降りになつてはゐるが、雨の中を傘を持たず、レーンコートを着ただけで、ピシヤ〳〵と歩いて來る男があるのだ。

『あゝ、モシ〳〵。』

通り過ぎようとする男を、伊藤巡査は呼びとめた。

呼び留められた男は默つて立止つて、何ですかといふ風に、伊藤巡査の顔を見た。三十そこ〳〵の若い男で、どこか一寸野卑な所はあるが、キチンとした會社員風の男だつた。

『どちらへお出ですか。』伊藤巡査は丁寧に訊いた。

『家へ歸るんです。家は品川です。』若い男は落着いて答へた。

『どちらからのお歸りですか。』

『伊皿子からです。友達の家にゐました。』

『伊皿子から？　ずつと歩いて來たんですか。』

『えゝ、友達が傘を貸してやらうといつたんですけれども、レーンコートがあるからいゝといつて斷つて、ずつと歩いて來ました。』

別に怪しいと思はれる所はないのだ。伊藤巡査はこの時ふと青年の持つてゐる紙包に眼が落ちた。

『失禮ですが、その包はなんですか。』

『之ですか。』

青年は一寸躊躇の色を見せた。

伊藤巡査は胸を躍らせながら、

『さうです。何ですか。』

『之ア、何でもありませんよ。詰らないものです。』

『見せて頂きたいですが。』

『食料品ですよ。見なくたつていゝでせう。』

『でも、見せて下さい。』

『しやうがないなア。』

青年は口の中でブツ〳〵いひながら紙包を開けた。

紅茶の罐、ミルクの罐、小型の罐詰、そんなものがゴチヤ〳〵這入つてゐた。

伊藤巡査は念の爲に、未だ封の切つてない紅茶の罐を開けて見せて吳れといつた。

『困るなア。』

青年はブツ〳〵いつたが、結局開けて見せた。紅茶が這入つてゐたきりで、指輪や首飾りは這入つてゐさうもなかつた。罐詰類はどう見ても、少しも怪しい所はなかつた。

『どうも有難う。失禮しました。』

『職務上調べられるんですから仕方がありませんがね。』青年は少し積に障つたやうに、『全く迷惑ですよ。もういゝんですね。』

『えゝ、どうぞ。失禮しました。』

青年は雨の中を品川の方に歩き出した。

伊藤巡査はぢつと背後姿を見送つた。陸橋の向ふには私服が頑張つてゐるのだ。青年はもう一度そこで調べられる。こつちの端では割に寛大にして、ホッと安心させ、すつかり氣を許して向ふ側に渡つた時に、その虚に乘じて、もう一度調べる。それも一つの手なのだ。

やがて青年は陸橋にかゝつた。他に通行人はなく、折柄自動車さへ通らなかつたので、雨を通して朧ろではあるが、青年の姿はクッキリ浮いてるやうに見えた。青年はスタ〳〵と陸橋の上を歩いて行つたが、どうしたのか、丁度半ほどでピタと止つた。

オヤと思つて、伊藤巡査はすかして見たが、青年はぢつと欄干に寄りかゝつたまゝ動かない。

『變だぞ。』

暫く息を凝らして見てゐた伊藤巡査は耐らなくなつて、佩劍を摑んで、足早に陸橋の方に飛んで行つた。と、向ふ側でも、怪しい男が橋の眞中に佇んでゐるのを見かけたと見えて、バラ〳〵と一人の刑事が走つて來た。

青年は丁度兩方から挾まれた形になつたが、彼は何と思つたか、欄干に足をかけて、半身を陸橋の外に出した。

『待て。』

向ふ側から走つて來た刑事が、いきなり青年を背後から抱へた。さうして、彼が右手に握つてゐるハンカチ包を押へた。

『離して呉れ給へ。離して呉れ給へ。僕は怪しい者ぢやない。』

青年は懸命に身體を振つた。漸く驅けつけた伊藤巡査が、すぐ青年に飛かゝつて押へつけた。

『笠間さん。』伊藤巡査はいつた。『この男は一度調べたんですけれども。』

『伊藤君。』笠間と呼ばれた刑事はいつた。『いゝから逃がさないやうに

明治天皇御製

國の爲身を
かへりみぬ
ますらをゝ
あまたえにけり
この時にしも

御製は陛下の玉の御聲です。御仁慈溢るゝ御聖意の發露です、明治天皇の御製は實に驚ろき畏れ入る御數の多さ、十萬餘首と承ります。

『明治天皇御製謹話』 宮內省御歌所寄人 千葉胤明 謹著

本書はその御製の精髓二百餘首を拜掲してその大御歌にまつはる御逸事御美談、御秘話等の感激感動の御物語が渾然と織り込まれた眞に日本臣民必讀の書。

これこそ日本精神の源泉！民族自覺の大聖典！

定價一圓、特製二圓 送料各內地十四錢
大日本雄辯會講談社發行

し給へ。怪しい奴だ。』
青年はもう觀念したか、急に大人しくなつた。
『伊藤君、しつかり捕まへてゐ給へ。油斷しちやいかんよ。』
伊藤巡査が左手を取り、笠間刑事が右手を取つて、青年を兩方から挾みつけて、元の交番まで連れて來た。
『さア、這入れ。』
笠間刑事は青年を交番の中へ押込んだが、この時に始めて、青年の顏をつく〲と見て、
『アッ、貴樣は相馬ぢやないか。』
青年は一寸悄氣て、
『旦那、お久しぶりです。』
『オイ、伊藤君。』笠間は躍る胸を押へて『こいつはパチンコの爲といふ渾名のある奴だぜ。その紙包とハンカチの包をこつちへ置け。』
パチンコの爲といふ渾名のある相馬爲次は左手に紙包、右手にハンカチ包を握つてゐた。
『その紙包の方は先刻調べました。紅茶やミルク鑵が這入つてゐました。』伊藤巡査はいつた。『然し、ハンカチ包の方は氣がつきませんでした。』
『このハンカチ包をもう少しの所で、橋から線路に投げようとしやがつた。危い所だつた。伊藤君、そいつのポケットをよく調べて呉れ給へ。ピストルを持つてるかも知れんから。』
伊藤巡査は今度は丹念に相馬の身體を調べた。然し、ピストルも持つてなかつたし、他に之といふ怪しいものは見當らなかつた。

『紙包は食料品だつて、フン、それが術なんだ。紙包で安心させて置いて、ハンカチ包の方は胡魔化さうといふんだ。橋を渡れば危いと思つて、途中で棄てようとしやがつたんだ。』
さういひながら、笠間刑事はハンカチの結び目を解いたが、忽ち眼を光らした。
中に這入つてゐたのは、指輪、眞珠の首飾、腕輪、腕時計などだつた。
『ううむ。』伊藤巡査は唸つた。
笠間刑事は暫く無言で、大きな息をしてゐたが、やがてハッと顏色が變つた。さうしてアリ〲と失望の色を現はしながら、
『之りア。』といつた。
パチンコの爲は、
『フ、、、。』と忍び笑ひをした。
『何が可笑しい。馬鹿ッ。』笠間刑事は腹立たしさうに怒鳴つた。
『フ、、、旦那。』爲は未だ可笑しさうに、
『そりア、みんな玩具ですぜ。』
『分つてる。』
笠間刑事はも一度忌々しさうに怒鳴つた。てつきりピストル强盜が網にかゝつたと喜んだのも束の間で、眞珠の首飾りは眞赤な贋物、指輪は夜店で一箇二十錢で賣つてゐるアルミ金だし、腕輪も同じくひどい安物で、腕時計は爲のいふ通り玩具も同樣のものだつた。
『何だつて貴樣はこれを橋から棄てようとしたんだッ。』
『勘違ひされちや危いと思ひましてね。先刻交番の旦那のお調べの時

にや、紙包だけで濟みましたが、調べやうがどうも只ぢやないんでね。之ア何か大きな事件だなと思つたんです。この調子だと橋の向ふ側が危い。きつと旦那方が頑張つてるに違ひねえ。話の分つた旦那ならいいけれども、こいつを眞物とでも勘違ひされちや、少くとも一晩は留められるし、その上、ビンタの一つも食はされちや合はねえと思ひましてね。どうせいくらでもねえものだ、いつそ打棄つてしめえと――。』

『何だつて、貴樣はこんなものを持つてゐたんだ。』

『オヤ、あつしがこんなものを持つてゐちや惡いんですかい。あつしだつて、之で女の子の一人や二人はあるんですよ。當節は裏店の女の子でも洋裝てい奴をしますからね。まア、首飾や腕輪の一つも欲しいてい譯で。あつしは女の子を喜ばさうと思つて買つて來たんでさア。お疑ひなら、買つて來た店の名をいひますよ。行つてお調べになつて下さい。』

『こんなものを持つて、どこへ行く心算だ。』

『旦那も野暮だねえ。橋の向ふの馴染の所へでさア。へ、、ッ。』

『君は先刻家へ歸るといつたぢやないか。』伊藤巡査が眞赤になつていつた。

『どうも濟みません。』爲はペコリと頭を下げて、『噓も方便てい奴でね、あの時にあつしが橋向ふの馴染の所へ行くなんていつたら、無事にや通して下さらないでせう。自衞手段といふ奴でね、へ、、、ッ。』

『どこから來たんだ。』

　未だ餘憤の收まらない笠間刑事は、忌々しさうに訊いた。

『之ア先刻交番の旦那に申上げました通りで、伊皿子の友達の所にをりました。そこから、歩いて來ましたので。』

『伊皿子の友達？　さうか、贓物買ひの彌造の家だな。』

『へい、その通りで、旦那はよく御存じで。』

『どの道を通つて來た。』

『電車通りについて來ました。へい。』

『人を馬鹿にしやがつて。之から巫山戲た眞似をしやがると承知しねえぞ。』

『へい。でも、あつしは別に何も――』

『默れ。人が氣を遣つて張り番してゐる最中に、何も橋の眞中で、變に氣を持たせる眞似をする事はないぢやないか。』

『誠に相すみません。あつしは何も旦那方に氣を揉ませる心算はなかつたんで。あつしの方で旦那方が恐いもンで、折角買つて來た品を捨てようとしたんでさア。勘辨してお呉ンなさい。』

『以後氣をつけろ。』

『へい。』

『之から宿へ行くのか。』

『もう止めました。こんなケチのついた晩に行つたつて面白かねえ。』

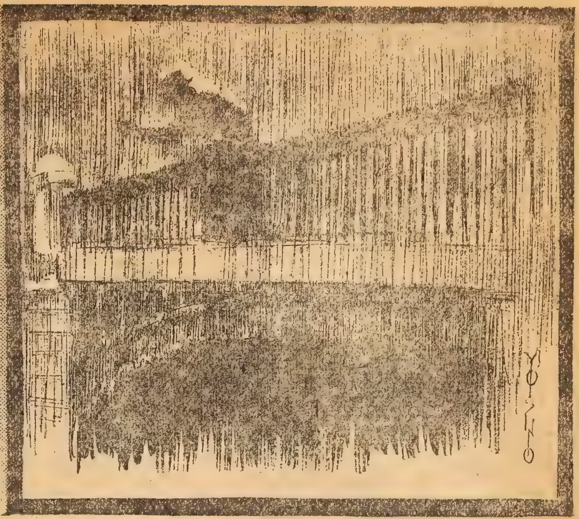
『勝手にしろ。』

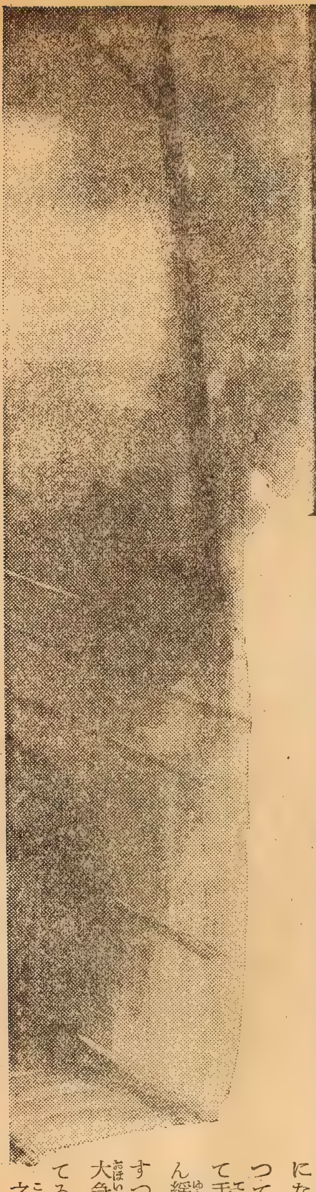
　笠間刑事は不機嫌な顏をしたまゝ、再び橋向ふの方に行つた。

屋根の上

　熊吉は便所の中で必死に踠いてゐた。

　惡漢達二人は、中の掛金を丁度旨く落ちるやうに、上に引上げて置



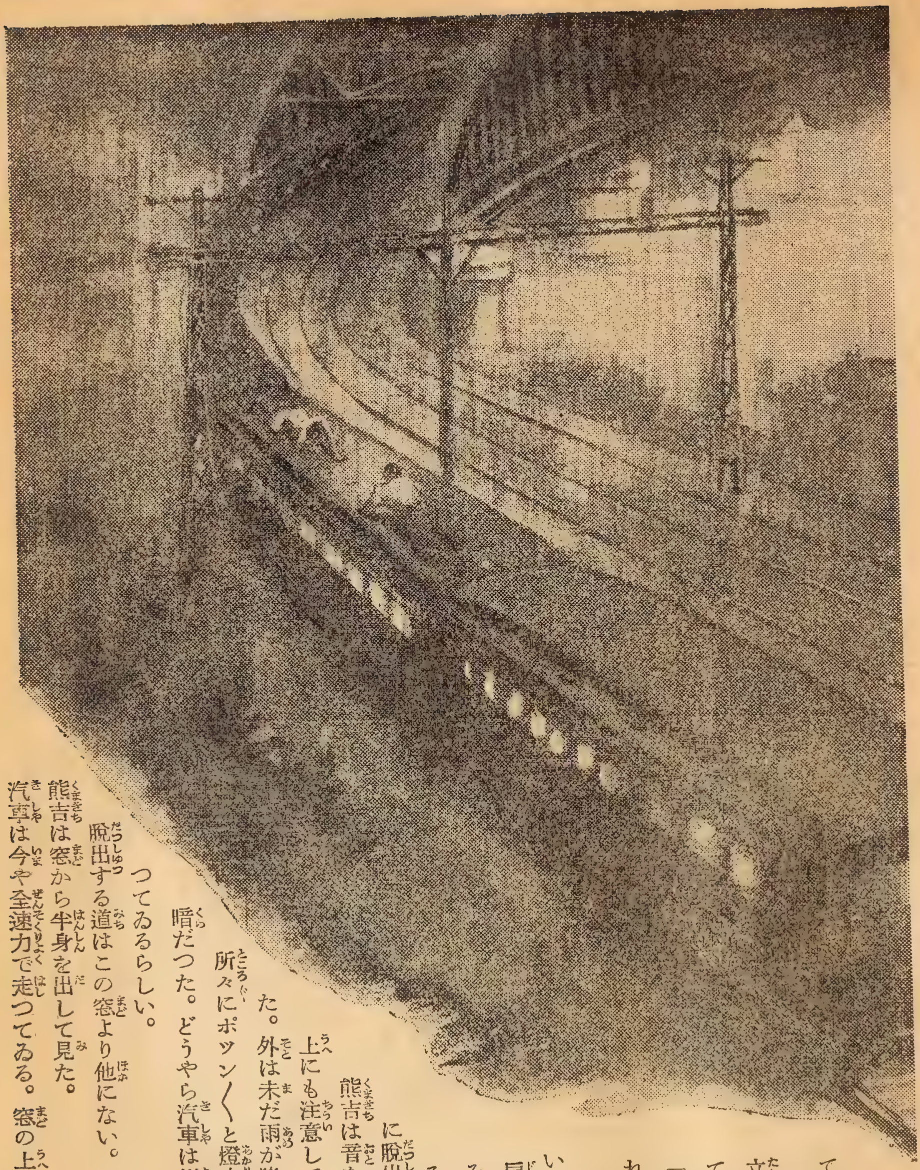


いて、外から扉をガチヤリと締めた。そんな事を二三度してゐるうちに、旨く掛金が落ちた。だから、外には使用中といふ赤い印が出て、閉かなくなつてゐる。その上に鳥打帽と中折帽が代る〴〵立番をしてゐるのだ。到底第三者に見つけられて助けられる見込はない。尤も惡漢達は横濱で降りるやうな事をいつてゐたから、横濱から先で、あまり長く使用中の赤が出てゐるので不審を起した乘客が車掌に訴へ、その結果助け出されるかも知れぬ。然し、そんな事をしてゐたら、今夜中に家に歸れない。熊吉が心配したのは、生命の問題よりも、女房の問題だつた。じつとしてゐれば生命は取られさうもない。然し、終電車に乘り損じたら、女房が何といふかと思ふと、熊吉はそれが恐ろしくて耐らなかつた。

汽車は今京濱間を走つてゐる。横濱へ着くのは十一時半すぎだらうその次には大船に停るとしても十二時になるし、もし停らなければ、もう終ひである。今夜は歸れない。どうしても、横濱で脱出しなければならぬ。横濱で脱出して、大急ぎで引返せば、どうにか終電車までに家に歸れる。

熊吉は全く必死だつた。腕が變に捻れて、それにバンドが食ひ込んで痛くて耐らなかつたけれども、力のあらん限り踠いた。

と、天の助けか、縛つたバンドに隙があつたのか、手首が少し自由になつて來た。しめたと思つて、尚も痛いのを我慢して手首を動かすと、だんだん緩くなつて、たうとう、すつぽりと抜けた。熊吉は大急ぎで口の中に押込まれてゐたハンカチを取つた。之で辛うじて自由の身體



になつたが、熊吉は暫く死んだやうにゲツソリしてゐた。

が、やがて勇氣を出して立上つたが、身體中が痛くて耐らなかつた。

『何とかして逃げ出さなければ――』

熊吉は身體が痛いなどといつてゐられなかつたのだ。扉の前には中折か鳥打か、それとも二人とも立つてゐるかも知れないから、絶對に脱出不可能である。

熊吉は音を立てないやうに、注意の上にも注意して、そろ〳〵と窓を開けた。外は未だ雨が降り頻つてゐた。所々にポツン〳〵と燈火は見えたが、すぐ傍は眞暗だつた。どうやら汽車は川崎と鶴見の間あたりを走つてゐるらしい。

脱出する道はこの窓より他にない。

熊吉は窓から半身を出して見た。

汽車は今や全速力で走つてゐる。窓の上には何の手がかりもない。

その上に雨に濡れてツル〳〵と滑る。
平素の熊吉だつたら、踏み出す所か、忽ち眼が晦んで終つたらう。然し、必死といふものは恐ろしいものである。殊に平素臆病なものは、一旦夢中になると、反つて吃驚するやうな大膽な事をするものだ。今の熊吉は家へ歸らなければならないといふ考へで一心だつた。いはゞ一種の夢中狀態だつた。
熊吉は窓の閾に乘つた。兩手で、兎もすれば滑らうとする窓枠を捕まへながら、フラ〳〵する足を踏みしめて、上身をぬッと延ばした。
汽車は益々スピードを增したやうだ。前後左右に激しく搖れる。眞暗の中に浮上つて見える鐵路が、飛ぶやうに流れて行く。
熊吉は窓枠を摑んでゐた兩手を離すや否や、屋根の緣に飛ついた。途端にパッと兩足が窓の閾を離れた。熊吉は兩手を屋根にかけて、宙にブラ下つて終つたのだ。
汽車の屋根は丸くカーブしてゐる。その上に雨で濡れてゐる。普通なら、アッと一聲を後にして、熊吉は線路の上に拋り出されたに違ひない。
が、熊吉は夢中でガリ〳〵と足を汽車の橫腹に摺りつけた。さうして、その反動で、やつと胸から上が、汽車の屋根の外に出た。
彼は肘を屋根の上に立てた。片方の足を屋根にかけた。もう一つの足を屋根にかけた。彼はたうとう屋根の上によぢ登つた。全くそれはもう一度やつて見ろといはれても絕對に出來ない藝當だつた。
屋根の上に登りついても、彼は安全といふ譯には行かなかつた。腹ン這ひになつてゐなければ、今にも振り落されさうである。
熊吉は腹ン這ひになりながら、もう一方の端の方へとズリ寄つて行つた。この邊にマゴ〳〵してゐて、惡漢に見つけられては大變だと思つたからである。
一方の端まで這つて來ると、そこは次の箱との繼目で、隙間があつた。熊吉は未だ必死である。急スピードで走つてゐるので、甚しい動搖をしてゐる間を、丁度、搖れてゐる船から船へ飛び移る要領で、ポンと飛超えた。
そんな風に二つ三つ箱を飛び超えた時に、熊吉はぎよつとした。もう少しで、危く顚落する所だつた。眞黑な屋根の上に、フハリと何か白いものが橫はつてゐたのだ。
熊吉はどきつく胸を撫で下して、ぢつとすかして見たが、それは布片らしいものだつた。ホッとして熊吉は又這ふやうに步き出した。さうして、その箱の端に來た時に、熊吉はきやつといふ聲を上げた。全く、よく落ちなかつたものである。それほど熊吉は驚いたのだ。
箱の向ふの方から、不意にニウッと黑い頭が出たのだつた。やがてそれが顏になつて、胸が出て、たうとうその人間は屋根の上に乘つたのである。
「アッ。」
熊吉はもう口が利けなかつた。
その人間といふのは、例の鳥打帽子だつた。
見つかつたのだ！　便所を脫出した事が發見されて、屋根にゐるに相違ないといふので、捕まへに來たのだ！
「やッ。」

所が鳥打帽の方も熊吉を見て驚いたらしい。大きな聲で叫んだが、次の瞬間に、更に大きな聲で、

『ヤツ、貴樣は。』

熊吉はお尻を立てゝ腹ン這ひになりながら、ジリ〳〵と後退りをした。鳥打帽も立つては振り落される恐れがあるので、やはり腹ン這ひになりながら、ジリ〳〵と迫つて來る。

熊吉はもう生きた空はなかつた。

鳥打帽の方は眞向ふに這つて來るので早い、それに反して熊吉は腹ン這ひになりながらの後ずさりであるから、見る〳〵距離が縮まつて行く。

と、熊吉の腹にヒヤリと當つたものがあつた。熊吉はドキンとしたが、急いで取り退けようとして、手で摑むと、それはハンカチに包んだ、變に重いものと、輕いものの這入つてゐるグニヤリとしたものだつた。

摑んだ事は摑んだものゝ處置に窮した熊吉は、少しでも防禦の足しになると考へたか、這ひながら追つて來る鳥打帽めがけて、ハッシと投げつけようとした。

と、鳥打帽があわてゝ叫んだ。

『ア、投げちやいけない、投げちやいけない。』

鳥打帽の劍幕が激しかつたので、熊吉は思はず手を留めた。

『投げるんぢやないぞ。』鳥打帽は早口にいひ續けた。『俺ア決してお前をどうもしないぞ。その包を寄越せ。さうすれば何にもしない。決して何にもしない。』

この時に汽車は既に横濱に近づきつゝあつたので、スピードが段々落ちて來た。

スピードが落ちて來たと見ると、熊吉は突然立上つた。さうして、ハンカチ包をポケットに押込んで、矢庭に逃げ出した。

鳥打帽は驚いて立上つて、熊吉を追ひかけた。

スピードは落ちてゐたが、驛に近づくに從つて、線路が變るので、左右への動搖が激しい。平均を取りながら走らなければならないので、鳥打帽も思ふやうに走れない。

逃げる、追ふ、パッと方向を變へる。空を摑みながら、又追ふ。暫くは屋根の上で、鳥打帽と熊吉との鬼ごつこであつた。

そのうちに、汽車はスーッとホームに這入つた。

『ひ、人殺し。』
屋根の上で逃げながら熊吉が懸命に叫んだ。
『畜生！』
鳥打帽は見咎められては面倒と思つたか、追ふのを止めて、ヒラリとホームに飛降りた。
それでも熊吉は叫び續けてゐた。
『ひ、人殺し、ひ、人殺し。』

最高賞

鳥打帽と中折帽の二人は、群集の中を逃げ廻つたが、東京からの急報で、嚴重に警戒中だつた警官隊と、驛員と、彌次馬までが加はつてたうとう捕まつて終つた。
熊吉がポケットに突込んだハンカチ包みの中からは、本物の眞珠の首飾、指輪、時計、その他の貴重品が出て來た。いづれも、春井男爵夫人と令孃が、高輪で强奪された品だつた。
鳥打帽も中折帽も肩書のあるなうての惡漢だつた。彼等はパチンコの爲こと、相馬爲次とグルになつて、春井男爵夫人と令孃が、丁度十一時頃に高輪の自邸近くに歸つて來る事實と、十一時十五分頃、下關行急行が八つ山先の陸橋の下を潜り、而も發車早々でスピードが未だ緩い事實を知つて、思ひついたホールダップだつた。
即ち、十一時頃、爲次は夫人と令孃を威かして、貴重品を奪ひ取り、その足で陸橋に來て、走つて來る汽車の上に盜んだ品を落す。鳥打帽と中折帽は豫め汽車に乘込んでゐて、そつと之れを拾つて、大阪あたりで下車する。さういふ計畫だつた。陸橋で愚圖々々してゐて咎められた時の用心に、爲は別に安物玩具の指輪、首飾などを入れたハンカチ包を持つてゐた。笠間刑事の見つけた時には、もう本物を包んだハンカチは汽車の上に落した後だつたが、もう一つハンカチ包を持つてゐたので、まさか本物は落して終つたといふ事には氣がつかず、流石老練な笠間刑事も、マンマと引かけられたのだつた。所が、さしもの巧妙な計畫も、臆病者の熊吉の爲にめちや〳〵にされたといふ譯である。
いやがる熊吉は警視廳へ連れて行かれた。
『歸して下さい、歸して下さい。終電車に遲れると困りますから。』
熊吉は哀願するやうに何度もいつたが、
『遲くなれば、警視廳の自動車で送つてやるよ。』
さういつて許されなかつた。
警視廳では各新聞社の寫眞班がゐて、パチ〳〵と熊吉の寫眞を撮つた。記者が何かと質問した。
男爵家では大喜びで早速家令を寄越して、お禮といふので、熊吉に二千圓の小切手が渡された。
『いづれ、重大犯人を捕まへた表彰がされるよ。最高の名譽章が貰へるだらう。』
金モールの肩章をつけた偉さうなお役人がさういつた。
熊吉が警視廳の自動車に乘せられて、自宅の近所まで來た時は、もう三時を少し過ぎてゐた。家の前までは自動車が行かないので、行止りの所で降りて、熊吉は歩き出した。

家が近づくに從つて、熊吉はだん／＼悄氣て來た。

女房が何といふだらうか。何と辯解したらいゝだらうか。

始めから終ひまで話をするには中々時間がかゝる。女房はとても默つて終ひまで聞いてゐる氣遣ひはないのだ。

『何だつて、お釣りを返しに行つた。だから、あんたは馬鹿だといふんだ。置いて行つたものなら、貰つときやいゝぢやないか。』と、怒鳴るに極つてゐる。そして、その後は聞かないで怒鳴り續けるだらう。

熊吉は我家の前に立つた。しーんとしてゐる。暫くは這入る勇氣がなかつた。

が、漸くの事で、ソロ／＼と戸を開けた。忍び足で居間に這入ると、寢てゐた女房がパッチリ眼を開いた。

『今、歸つたの。』

『うん。』熊吉はもう落膽して小さくなつた。

『遲いね、電氣を消して早くお寢みよ。』

女房は餘程眠むかつたらしく、それだけの事をいふと、直ぐに眼を閉ぢて、もうスヤ／＼と寢息を立てた。

熊吉は急いで寢衣と着替へると、二千圓の小切手を、女房の枕の下にソッと入れて電燈を消して、並べて敷いてあつた寢床に潛り込んだ。

明日は新聞にどんな記事が出るやら、二千圓の小切手で、女房の態度がどんなに變るものやら、そんな事は少しも考へないで、急に出た疲れで、熊吉は忽ち輕い鼾を立てた。

（終）

色黒ニキビ痕ソバカスを白くする方法

今までの頼りないものと違ひ科學的の新發明

今時！お化粧とは化粧品をお顔に塗る事なり、等と思つて居る方がもしあれば、大變な時代おくれです。

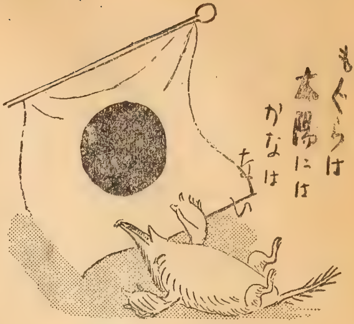
科學の進歩はどんな色黒もシミ雀斑のブツブツ顏の方でも、地肌の底から生れつきと同じ白さに出來る美顏術器が發明され、大評判になつて居ります。

色白も色黒も唯皮下のメラニン色素がほんの少し多いか少ないかの違ひだけで、ソバカスやシミ等はメラニンが飛々に集まつたものであります。

このメラニンを科學的に漂白するエミユ・レッシーが發明されて賣出されたのは、まだ一年餘り前の事ですが今では日本全國は勿論外國にまで、擴がつて大好評を受けて居ります。講談社の代理部等では發送に困る程の賣行きであります。

何しろ學理的に發明された器具ですから、誰れが使つても簡單に、安全に白くなれる所に人氣が集まるのですが、又これを使へばどんな脂肪性の方でも、お化粧くづれのしないのは不思議な位です。映畫スターが殆んど皆使はれてゐるのは白粉やけとお化粧くづれを防ぐ爲めです。

買ふ買はぬは後として、兎に角一度説明書を讀んで研究して見て下さい、寫眞入の説明書はハガキで御申込次第無料で送ります。申込所は東京銀座一ノ三五皆川ビル天光堂又は大阪市西區北堀江通二ノ一九合名會社天光堂です。



落語

上海みやげ

三遊亭金馬
清水對岳坊畫

嘘も使ひ道によりまして、お商人に『現金懸價なし』傾城に『手練手管』お寺様の方には又『地獄極樂』といふのがありまして、『善い事をすると極樂へ行き、惡い事をすると地獄へ落る。』などと申ますが、まだ誰も地獄極樂から暑中見舞を貰つた人はありません。それから年寄の『早く死たい。』變な嘘があるもので、一寸何か面白くない事でもありますと、『あゝあ、早く死たい。』などと申ます。眞實に死たいのかと思つてゐると、向ふから自動車が來れば慌てゝ逃げたりいたします。

さうかと思ふと、軍人の方の智謀計略、これは又大きな嘘でございます。若しこれを掛引でなく、假に國際聯盟か何かで申合せて、眞正直に戰爭をするとしたら、面白いだらうと思ひます。愈〻明日總攻撃といふ前の晩に、敵へ内容證明で手紙を出しますな……

『拜啓、殘暑の候に御座候ところ、貴軍益〻御健勝の段奉賀候。陳者追々戰機も相熟し候間、明朝五時を期し總攻撃仕候につき、右念の爲御届け申上候。猶我軍は三個師團を以て編成いたし、外に飛行機三十臺差加へ申べく、惡からず御諒承下され度候、就ては陣中御見舞として軍用パン三百斤御送附申上候に付何卒御笑納下され度候。餘は拜眉の上萬々』

是に對して敵の方からも返事が參ります。

『拜復、毎々猛烈なる御攻撃を蒙り候上御親切なる御手紙正に拜見仕候。又結構なる品を頂戴致し誠に有難く御禮申上候。明朝五時を期し總攻撃御決行の趣き委細承知仕候。當方に於ても定刻までには充分應戰の準備仕るべく候間他事ながら御安心下され度兵員は一萬五千、但しダムダム彈を使用仕つるべく候間豫め御承知願ひ度、猶處々に地雷火を埋設致し置き候故充分御注意下さるべく、尤も埋設個所には危險信號の赤旗を立て置き候間此の儀お忘れなきやう皆様に宜しく御傳へ下され度願上候也』……

そんな暢氣な戰爭はありやアしません。然し、戰地からお歸りになつた方に、彼地の模樣を伺ひますと、只モウ大變だつたといふ一言に盡きますが、それが又聞きもれると大變です。それも戰地から歸つて來た人にお土產を貰つた家の隣の二階を借てゐる人が床屋へ行つて喋舌だのを、聞て來た方の隣に住でゐる人から聞たなんといふ事になりますと、一尺の物が一丈位になります。一丈の物は一里に

もなります。その變り嘘の話は面白いもので、中にはその又嘘を承知で嬉しがつて聞てゐる人もありますな。

○『どうしたい嘘吐き。』

△『頭から嘘吐きは酷いね。』○『併しこの處二三日見えなかつたがどうかしたかえ。』

△『實は日本にゐなかつたものですから。』

○『オイ、始めたぜ、何處へ行つてたんだ。』

△『始めからお話をしなけりやア分りませんが、私の家内の妹の亭主の親父が植木屋でございまして、そのお得意さんの旦那の内儀さんの妹の嫁いた先の……』

○『そんな事はどうでも宜いが、その當人は何だい。』△『海軍の上等兵なんで。』○『お前の話はそれだから厭になつちまふ、海軍に上等兵といふのはない、一等水兵だらう。』

△『それです〱、名前は云へませんが、その人が○○で○○に乘りまして、○○へ行きまして、○○へ上陸をして……』

○『何だかお前の話は○○ばかりでサツパリ分らないね。』

△『分りませんか、さうでせう、私にも○○分らない。』

○『自分に分らないやうな事を喋舌てゐちやア困るよ。』

△『何しろ私の行つた處はソノ絶對秘密なんですから、誰か聞いてやアしませんか。』

○『誰も聞てゐやアしないよ。』

△『アッ、猫がゐる。』○『猫なんかゐたつて宜いだらう。』△『いけませんよ、猫は魔物だ。』○『シッ、シッ……行つちまつた、モウ何もゐないよ。』△『まだお前さんがゐる。』

○『當然ぢやアないか、誰に話をする氣だ、一體何處だよ。』

△『ハッキリいへば、實は支那で……』

○『毆るよ、支那なら何もそんなに手數をかける事はないぢアないか、支那の何處へ行つたんだ。』

△『じやうかいです。』○『じやうかい……聞いた事がないな、どんな字を書くんだ。』

△『上の海と書くんで。』

○『何を云つてるんだ、上海ぢやアないか。』

△『日本語で云ふとね』。

○『日本語も支那語もないよ、上海は宜い處ださうだね。』

△『立派ですけれども敵の飛行機が飛んで來るといけないといふので皆燈火を消してゐるから夜は眞暗で、死の都で、暗黑の街といふのはあの事でせうな。』

○『成程。』△『その中でカフエーや商店などが堂堂と營業をしてゐます。』○『それが眞正の燈火管制だが、眞暗の中でカフエーなどがやつてゐられるかい。』

△『出來ますとも、軒を列べてネオンサインで。』

○『オイ、一寸待ちなよ、今お前死の都、暗黑の街だと云つたぢやアないか、ネオンなど點けたら光り輝いてるだらう。』

△『それがネオンも赤だの青だのぢやアない。皆な眞黑で、黑いネオン、黑ネオン、何處も彼處も眞黑けのけといふんで。』

○『そんなネオンがあるかよ。』

△『貴所に見せたかつたのは支那の嫁入りですな。』○『へエー、その中でお嫁入りなどがあるのかい。』

△『ありますとも、そりやア見事なものですぜ。提灯をズラリと列べて……』

○『アレ、提灯を點けるといふと夜だらう、夜は燈火管制ぢやアないか。』△『それだから提灯に黑い布をかけてあるんで、衣類も何も黑づくめ、只見えるのは煙草の火ばかり。』

○『一寸待ちなよ、煙草の火といふものは、飛行機から見ると能く見えるさうだぞ。』

△『それだから煙草の火にも黑い布をかけてある。』○『うそをつけえ。』

△『何しろ日本軍は强うがすな。』○『全く强いね。』

△『私も軍隊に從つて前線に進みましたが、彈丸なんざア些とも中りませんや。』○『さうかい。』

△『一度なんぞは音だけして彈丸がちつとも來ないから、不思議だと思つて振返つて見たら、支那兵が向ふを向いて鐵砲を擊つてました。』

○『どうしたんだい。』

△『餘り出過ぎて敵の後へいつちまつたんで。』

○『馬鹿々々しいなお前の云ふ事は、敵の陣の後へ行ける譯がないぢやアないか。』△『さう思ふのが素人の悲しさだ、エツヘツヘ。』

○『變な笑ひ方をするなよ、それぢやアどういふ工合にして敵の後へ出た。』

△『上海の戰爭は土龍戰術と言ひましてね、穴を掘つて、地の中を行つたり來たりするやうに出來てゐるんで。』

○『そんな話は聞いたよ、で何かい、その穴は廣いのかい。』△『廣いのもあれば狹いのもあります、中には自動車が並んで通る。』

○『そんな廣いのがあるのかい。』△『私一度その穴へ入つて弱りましたよ。』○『どうしたい。』△『迷子になりましてね、道を聞かうと思つても交番はなし。』○『巫山戲ちやア、いけない。』

△『日本軍も負けずに穴を掘つて進みましたが、穴を掘るのはどうしても先方の方が巧い、その代りに穴の中から出て來る處へ、日本の國旗を持つて行つて振廻してやると、コロコロ皆な死んで終ひます。』

○『へエー、どういふ譯だね。』

△『土龍は太陽には敵はない。』○『馬鹿にし

ちアいけない。』△『骨の折れたのはクリークといふ奴で、川が澤山掘つてあるんです。』
○『そんな話だな。』
△『晝間は先方が鐵砲を撃つて來るので迚も

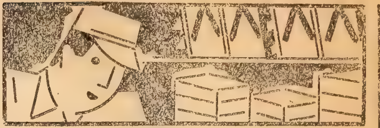
渡れませんから、夜になつてから、辨當を食ひながら渡るんで。』○『どういふ譯だい。』
△『是ア昔から軍學にあるんださうで、辨當食ひ〳〵夜川を渡るなんて言ひませう。』

○『そりやア鞭聲肅々だ。』
△『それから一番困つたのはトーチカといふ奴で。』○『トーチカでは大分お骨が折たやうだね。』△『あのトーチカの中には、支那の兵隊ばかりでなく、女が入つてゐました。』
○『さうかい。』
△『その女の奴が、男の兵隊の差圖をするんだつてえますが、女だから優しいや、アー一寸お前さん、早く鐵砲をお撃ちなさいよ、鐵砲巧く撃てば私貴所が好きになるわよ、てな事を云ふんださうで、將校には又將校のやうに種々サービスをする、何しろ男と女だから堪りませんや、遠くて近きは男女の仲、忽ち宜い仲になつちまふ。そこで是をトーチカと云ふんださうで。』○『落し話をするなよ。』
△『そのトーチカだ、クリークだ、鐵條網だ、塹壕だ、何だかだと敵の防禦陣は至れり盡せり、その上に堅固な砲臺が澤山あるんです。それを皆な攻め落したんだから、我軍の强さは底が知れませんね、私も占領した砲臺を一ケ所見せて貰ひました。』
○『フーム、どんなだつたえ。』
△『どんなにもこんなにも、眞暗でよく分らない。』

○『ハテネ。』△『そこが砲臺もと暗しでネ。』
○『又始まつたよ。』
△『中へ入ると酒ありビールあり御馳走の山、サアやり給へと云はれて、飲み砲臺、食ひ砲臺……』

○『いゝ加減にしろよ、一體そりやア何といふ砲臺だえ。』
△『ヘエ、みんな口から、出砲臺でございます。』

（をはり）



居職の人の健康法

とかく失はれ易い抵抗力を どうして強化したらよいか

失はれゆく抵抗力

居職をする人には、呼吸器病や胃腸病が非常に多い。これは朝から晩まで坐つたきりで、胸や胃腸を壓迫してゐること、長い時間、陽の目も見ずに汚れた空氣の中に居ることなどの爲に、だんだん抵抗力を失ひ、そこへ他の原因が加はるところから來てゐる、と專門の醫家達は説明してゐる。

ところが胃腸病や肺病は抵抗力の弱い人がとかく罹り易い。何も居職者に限つたことはない。だから特に職業と關係がないやうに思はれ易い。職業が徐々に抵抗力を奪つて病氣の原因をつくりつゝあるにも拘らず、殆んど氣がつかない。併し、實際は職業がお膳立てをつくる。他の原因が加はる。發病するといふ順序になるのが最も多いのである。

まづ抵抗力

それ故居職の職人がたの健康法は、原因を除くことも無論大切だが、何よりも抵抗力をフンダンにつけて、病氣なんぞ傍へも寄せつけない體力を養ふことが第一だと思はねばならない。

日光、キレイな大氣、運動、さうしたことは、仕事に差支へない限り、出來るだけ取り入れる。例へば公休日には活動や芝居やカフエーなどに行くよりも、郊外、海、山へ行くとか、釣竿一本かついで、細流から細流へ田園風景をたのしみながらの探り釣と、シヤレるなどはまことに理想的の健康法である。

よき習慣

公休日はたまにしか無い。かうなるとその公休日は實に貴重である。が、公休日の健康法だけでは心細い。日常簡單にできる健康法

甘味に就て

赤玉ポートワインは、とても甘く、美味である。甘くて旨いので、これは砂糖でも入れて味をつけたのだらうなどと思つたらとんでもない大間違ひである。

この甘味こそは、赤玉ポートワインに、天然に保有される葡萄糖、果糖の天然の味に他ならない。お求めになる時、着味、着色を施したものは、避けた方がよろしい。眞の榮養はこの葡萄糖にある。

榮養に就て

赤玉ポートワインは、消化を助け、食慾を増し榮養補給を助けるばかりでなく、それ自身にも澤山榮養がある。

赤玉ポートワイン一本のカロリーは、優に牛乳十一本、鶏卵十四個以上に匹敵することがわかつてゐる。六十有餘の醫界の權威が、實驗の結果悉く推奬するのも決して偶然ではない。最も信頼するに足るものであることを申し添へる。

が必要である。この方がむしろ大切である。何しろ毎日のことだから。

率直に申上げよう、まづ第一に毎日の生活は出來るだけ規則正しくして頂きたい。朝寢夜更しは疲勞の因。疲勞は抵抗力を失ふもとである。第二には毎晩就寢前に一杯の赤玉ポートワインを飲んで頂きたい。これには天然保有の葡萄糖といふ、人體にとつて實に貴重な榮養が最適量に含まれてゐて、精力や體力の源泉となり、抵抗力を昂揚するに絶好なことが認められてゐる。

この二つのことを毎日怠らず實行することである。規則正しい生活、といふといかにも窮屈に聞えるが、意志さへしつかりしてゐれば、實にわけなく習慣がつく。赤玉ポートワインにしても、一日一杯として、さして大きな負擔ではない。しかもその結果に至つては金錢や寶に換へられない、貴いものが得られるのである。

かうした良い習慣をつけることは、たまの休みの日だけの場合と違つて、いやしくも毎日の問題なだけに、その影響も決して尠くない。十分期待出來るものがあると信ずる。

居職者に告ぐ

赤玉ポートワインの主成分葡萄糖、果糖は單糖類に屬して、糖分の最も簡單なものである。これ以上分解の出來ない、つまり胃腸に特別の負擔をかけずにすむ、大切な榮養源である。そして直ちに腸壁から吸收される。

吸收されて血液の中に入ると活動の原動力となつて、全身の機能を活潑にする。だから血行もよくなるし、從つて顔色なども生氣が溢れてくるし、食慾も極めて自然に旺盛になつて來る。そして太つて來る。

その他鐵分、カルシウム、燐などの有用鑛物質、それに發揚性の酒精分、さうした貴重成分の綜合的の働きによつて、血を増し肉をつけると、古くから言はれる葡萄酒の性能をそのまゝ、愛用者から感謝の的となつてゐるのである。

抵抗力の弱い人に快適、胃腸の惡い人に絶好、その他太りたい人、顔色の良くない人、不眠症の人ぜひ試みられたい。

●赤玉ポートワインは、全國の酒店、食料品店、藥店、百貨店等に販賣してをります。

時代小説

柘榴一角（ざくろいっかく）

白井喬二

中一彌畫

安心劍法

一

參つたぞ——といふ言葉には自信があふれてゐた。

全く、一角が來たといふだけで、萬心一味には、鐵の棒で一撃くらつたほどの强さがあるのだ。一角が懲惡の刀を執つてから、萬心宅へ同じ日に三度も乘りこみ……これですつかり彼等の毒氣を拔いてしまつた。

今、

『參つたてツ、一角だやッ!!』

とまづ、おのれの來たことを聲高かに告げた。

もちろん、告げながら走りこんだのである。走りこんだ場所は、矢ノ根旦庵宅の裏側だつた。そこは、往來からは人目につかない場所で、草が茂つてゐて、立木も飛び／＼に植つてゐた。牛でも放し飼ひにしたら好からうと思へるやうな廣々とした空地だつた。

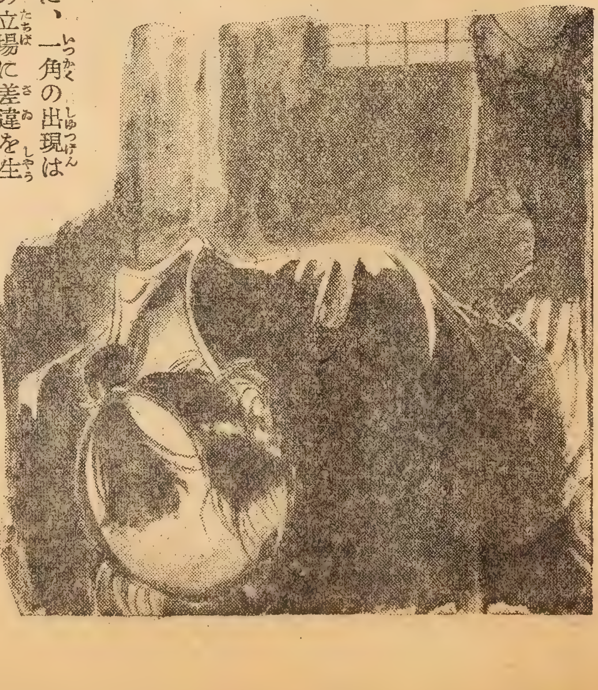
『アッ？』

果して、一角の姿を見て、相手の誰れかれが二三人叫んだ。

同時に、劍戟のひゞきが、一瞬パタリと罷んだ。

罷んだのは、息を呑んで、此方を見たからだ。

——それほどに、一角の出現は双互の立場に差違を生じさせたのだ。



『輝雪殿、しつかりせいッ!!』

一角は——彼方に追ひ詰められて、すでに危ふく見える宇家田輝雪を、大聲叱呼して勵ました。

『お丶一角が來た。』

『失敗つた。惡い所に……』

『今少し遲かつたら好いに。』

『と、とにかく此奴を早く殺してしまはう！』

此奴といふのは、むろん輝雪のことだ。輝雪は、一角が救援に來てくれたことの嬉しさを、すぐ聲に出して答へようとしたが、それは成し能はなかつた。聲は咽喉に干からびて、あと一太刀二太刀の受け返しは出來るとしても、所詮もう精根盡きて闘ふ氣力のない有樣に陷つてゐた。

『うむ、だ、大丈夫。』

口の裡でやつと呟いた。自分の耳にも聞えないほどの小さい聲だ。

輝雪の前には六人の敵がゐた。始めは、もつとゐたのだが、一角の來た姿を見ると同時に、ぱッとこつちに三人ばかりが身構へた。今まで、都合、九人の敵と輝雪は闘つてゐた勘定になるのである。

『さうだ。』

『早く殺してしまへ。』

六人の刄が、殆んど立つてゐるだけに過ぎない輝雪へ、改めてザッと斬つてかゝらうとした途端、一角が、

『エッ。』

と叫んだ。

小石でも、カチッと噛んだほどの短かい叫びだ。だが、その短かい叫びが、人々の耳に聞えたときには、六人の者がバタ／＼ッと草の上に順々に倒れてゐた。目にもとまらぬ早業である。あの間に、一角のからだは四五間を吹ッ飛んで、六人に代り代り刀を當てゝゐたのだ。しかも、それは徒らな殺生を好まぬためか、御丁寧に、刀の峰打ちをくらはしたのだつた。

『どうだッ、まだ參るかッ?!』

一角は、輝雪の前にスックと立ちはだかつた。片手で輝雪を抱へ、片手で刀をピュン！と振つて、前にグイと突き出した。

『百人までは引き受ける!!』

公儀隱密佐久間權太夫は、佐竹藩家老の遺子宇家田輝雪から、敵名乘をかけられて居る矢先、突然何者かの爲斬付けられ、同時に輝雪も大切な家系圖を奪はれた。權太夫の伜一角は、これを不逞浪人播磨萬心の仕業と睨み、單身その隱家へ乘込んで打懲すが、相手は巧みに言拔けて尻尾を現はさぬ。とその中一角は、烏森の奇人鍍師矢ノ根亘庵の娘早苗が、異腹の兄の萬心の爲、危く政略結婚の犧になりかゝる所を救つてやつた。所がこれを奇貨にした萬心一味は、早苗の名を詐り、懸想文めいた招狀で一角を誘き出し、闇討にしようと企んだ。當の早苗の告白で、事のからくりを悟つた一角、大膽にも指定の場所へ出張つて行くと、意外やそこでは、宇家田輝雪が惡人一味に取圍まれて居る。一角は猛然と飛込んでゆく。（前號までの梗概）

二

この『百人までは――』は、一角がすでに萬心一味にむかつていくども、宣言してゐることだ。彼の仙貫寺の萬心宅で、五六十人の敵を物の數ともしなかつた。槍襖、刀の林、實際に超人間のはたらきを目のあたり見せられてゐる者にとつて、この宣言はギョッとするほど忌々しく、耳の底に響くのであつた。

『何をッ？』

虛勢を張つたが、それは味方同志の贔負目にも、一向力頼みにならない空威張りだ。

『これ。』

一角はいつた。

『お前達はわしを誘き出さうとしたのではないか――それなら、この輝雪殿に斬つてかゝるとは見當違ひであらう。さあ、わしが參つた以上は、もう遠慮はいらん。どこからでも、安心して斬りこんでまゐれ。』

『フッ、誰が安心するものか！』

と彼等は思はず正直なことを云つた。

『聞けよ。』

一角は再びいつた。

『安心してとは、命に別條がないといふ意味ではないぞ。公然の敵手だから、何の躊躇もなく斬りこめと申す意味だ。武士道は、安心して斬りこめる相手にむかつてこそ始めて思ふまゝに本領を發揮することができる。これこそ、武士の安心境だ。相手が弱いから、安心できるのではない。また、人數が多いから安心できるのでもない。武士の安心といふのは、おのづから、心に疚しからざる所にあるのだ。わしが參つた時、失敗と叫んだ者があるな。――心得違ひの話だ。公然の敵手が來たのに、何が失敗だ。これだけのことを申聞かせておいてやる。』

この場に臨んで、教訓まで垂れるのだから忙しい次第であつた。

だが――相手に武士道の精神なんか分らう筈はなかつた。

『何を、つべこべ拔かすか。』

一人が、

『そこの生つ白い奴は、手前の身代りに出て來たから、追ひ返さうとしたら、利いた風なことを云やがつたので、序でに引導を渡してやらうとしたのだ。それが、どうした？　一角、前に出い。』

『かうか？』

と一角はズカンと前に出た。

『あ？』

九人が一緒にうしろに退つた。

『もつと出ようか。』

又ズカ〳〵と二歩三歩、一角は前にあゆみ出た。百人を引受

けると稱する一角に、所詮九人では敵ひつこはないのだ。一角が進むだけ、九人はうしろに退つた。

一角は、

『まだか。まだ進みが足らぬか。』

さういひながら、更らにまた進む。

『なぜ退くか。掛つて來い。』

面倒とばかり、大股になつてパッ〱と前に出た。

『アッ!!』

相手は喫驚して、もうしどろもどろに算を亂してうしろに、颯と走つた。

『待てッ。』

『アッ。』

一角の走り出したのを見て、九人は今は全く度を失つて必死に空地の外へ逃げ出して行つた。

『何だ、とう〳〵逃げ失せてしまつた。何のために人を誘き出さうとしたのだ——馬鹿々々しい！』

一角は後見送つて苦笑ひした。

毒茶の禍福

一

『お、輝雪殿ッ、いかゞいたしたッ？』

草原に戻つて見ると、輝雪は氣がゆるんだのか、地面に打伏しに倒れてゐた。

『おーい、輝雪殿ッ。』

『ハッ？』

顔を上げて、

『あゝ、やつぱり私は助かりましたか？』

『當り前だ。相手はみんな逃げ失せてしまつた。』

『え？』

向ふを見て、

『なるほど——すんでに私はやられる所でした。覺悟をきめました。私は一人試合の稽古は積みましたが、群刀の試合に不馴れのため、つい疲勞がこんで來て、全身はもう綿の如くクタ〳〵です。』

『貴殿はあまり上等の人間ばかり見てゐるから、群刀に弱いのだ。』

と一角はいつた。

『は！　なぜでせう？』

と輝雪が不審かつた。

『それは、大名の家に生れると、日常、相應な武士ばかりに接するだらう。五人、十人並んでゐるのが、皆それぞれ重臣や、一人前の侍だ。それゆゑ、人數の力といふも

のを餘り高く買ひ過ぎる。さつきの九人を、一人前の人間の集まりだと思ふと、刀を遣ふにむづかしくなる。さう思つて鬪つては、すぐ疲勞れのくるのは當然だ。――野原の草の一本々々を、普通の木の一本々々だと考へると大變なことになるだらう。』

『なるほど！』

輝雪もその道理はすぐうなづけた。

『よいことを承はりました。一角流の劍道の極意が、それでわかつたやうな氣がいたします。』

『結構ぢや。』

一角も滿足した。

『それでは、そろ〳〵參らうか。』

『ハイ。』

立上らうとして、輝雪はひよろ〳〵と蹌踉いた。

『あ！』

膝を突いた。

『いかんな。待て〳〵、どこかそこらで息つぎの水でも一杯所望しよう。あゝ、さうだ、どこかと申すより旦庵の家がいゝだらう――輝雪殿、待つてをれ。わしが今、水を貰つてきてやるから。』

『いえ、私も參りませう。大丈夫です。なアに歩けます。咽喉が乾いてゐるのです。水を一杯飮んだら、すつかり回復りませう――どこの家です？』

『それ、そこの家だ。わしが、昨夜救ひに行つた娘の父親の家だ。旦庵といふ鏃作りを業としてゐる。わしは一面識があるから、水ぐらゐふるまつて呉れるだらう。』

『そんな近い所なら……あ？　何、大丈夫、目まひは、やつぱり疲れのせゐです。』

『さあ、手を引いてやらう。』

『ハイ――かたじけない。』

二人は伴れ立つて矢ノ根旦庵の裏木戸から這入つた。

『お賴みする。』

『ま！』

一角が這入つて來たことを知つてゐるのだらう。早苗の聲がして、少し狼狽へたやうに二三度障子の中で躊躇つてから、やつと障子を開けた。

『お出でなさいませ。』

と頸を眞つ赧に染めて挨拶をした。

二

『早苗殿、水を一杯所望したいのだが。』

一角がさういふと、早苗は若鮎のやうに身をパッと動かして、すばやく立ち上つた。

『ハイッ、かしこまりました。』

『これ。』
と中から、旦庵の制する聲が聞えた。
『水などより、もつと好いものがある。もし、一角殿。』
『おゝ、旦庵殿ですか。』
『まあ、座敷に上つて下さい。』
『いや、それほどにして貰はずとよい。水を一杯だけ所望できれば甚だ仕合せだ。』
『貴郎は好からうが、そちらの方が非常に疲れてゐる。一寸上つて、少しばかり横になつてをらるゝがよい。どうせ座敷は空いてゐます。一角殿とも、一寸話したいこともあるし。』
『あゝ成程。』
一角は素直だつた。
『話があると申さるゝのか？』
『一寸な。』
『さうか、それならお邪魔しよう――輝雪殿、あゝ申さるゝから、上つて少し憩まうではないか。』
『はい、貴郎さへ差支へなければ。』
輝雪も、座敷に憩むことは有難かつた。實は、何となく全身の中心を失つて、さつきから目まひがするのだ。精神の過勞と、二三年前罹つた浮腫の病氣が再發したのかも知れない――さうなら、しばらく憩む必要があつた。
『さあ、どうぞ。』

誰よりも早苗が一番嬉しさうだつた。
あの間に、薄化粧でもほどこしたのだらう。昨夜は、素顔でもあの氣品のある美しさだつた。それが化粧をほどこして、一遍にパッと花やかさが増して、どこにこんな明るさが潜んでゐたかと思はれる位に艶麗だつた。
『こちらへ、お布團をお取り申しておきましたから――あんまりお粗末なお布團でお恥しうございますが。』
『かたじけない。』
輝雪は、旦庵に一寸默禮して、その布團に横つた。やはり、くるしかつたのだらう。早苗が水を持つて行つた時は、もうグツタリと眠りの中におちてゐた。
『まあ、よくお眠つていらつしやる。』
一角の方を見て、
『お水を召しあがらなくても宜敷うございませうか？』
『よからう。』
と一角は簡短に答へた。
旦庵は鑓箱を隅に押しやつて、そのへんを廣くした。
『一角殿のお手並にはホト〳〵感心いたした。」
『お手並と申すと？』
『いや、さつき大勢を相手にして峰打ちくはした。目にもとまらぬ早業だ。あれは數珠打ちといふ願流の秘技かのう？』
『數珠打ちは神陰流です。願流ではあれを貫きの手と申します。』

しかし、あんなことは何でもありませんよ。』

『さうでない。』

『早苗。』

旦庵は娘を呼んで、

『裏木戸を一寸閉めてお出で、風でカタン〳〵いつて、眠んでゐる人の耳につくといかん。』

『ハイ。』

早苗は立つて、裏縁から下りて行つた。

『時に一角殿。』

『何ですか？』

『お父上權太夫殿は、どんな加減かな？　遭難されたといふが、下手人はまだ分らぬか？』

『分りませぬ。』

一角は――たゞさう答へた。

旦庵は、どうやら萬心の親らしい。隨つて早苗は萬心の妹である。この事實は昨夜早苗の口から聞いたばかりで、まだ誰にも話してはゐない。

むろん、相手の旦庵も娘がそんなことを饒舌つたとは夢にも思はないから、例へこゝで萬心に嫌疑を掛けてゐる旨を語つても、わざと驚いた顔はしないだらう。

『お氣の毒だな。』

旦庵はさういふと、戸棚から茶壺を取り下して、みづから茶瓶に入れて、熱湯を注いだ。

『これは蘭茶ぢや。少々、香りは高いが、體を使つた後などに殊によろしい。一口で、神氣爽快となる。さあ、飲んでごらん。』

『や、有難うぞんずる。』

一角は、茶碗を口に當てた。

なるほど、猛々しい香氣が部屋の中に一杯こもつた。

『アッ!!』

縁側の外にゐた早苗が突然何かにおどろいたやうに、小聲で魂切つた。そしてやにはに、パッと障子をあけて座敷を覗きこんだ。

『一角樣

ッ、いけませんッ！』

早苗は思はず叫んだ。

『え？』

『それを……の、飲んでは。』

といつた時、一角はグッと一息に嚥み乾して了つた。

『あ!! いけません――ま、何うしませう!!』

早苗は眞つ青になつてペッタリと兩膝をついてしまつた。

三

『ウ!!』

直ぐだ。覿面だ。

一角の咽喉の奥から唸り聲が發せられた。兩手をついて、立上らうとしたが、ぱつたりと倒れてしまつた。目を剝いて、旦庵の方を睨みつけようとするけ

れど、その視力も今は急激の速度で衰へて行くばかりのやうだ。

『お父樣ッ。』

早苗は、一角の樣子を見て、たまりかねたやうに叫んだ。

『何をなさるんです!! あんな毒茶をお服ませして、一角樣に何が罪があります。一角樣は、昨夜、妾を救つてくださつたのではありませんか? お父樣は惡魔です。』

『默れよ。』

旦庵は、低く早苗を叱つた。

『お前方に何が分るものか。』

『ハイ、分りませぬ――お父樣のお心が分りませぬ――お父樣は兄樣の萬心に味方をするおつもりですかッ!!』

『默つてをれと云ふに――わしは、誰に味方をするといふ事はない。萬心といふ奴も、わしの伜だが、實は嫌ひだ。しかし、一角のやうな野放圖に強いやつもわしはむしづが走るほど好かん。憎い。目ざはりだ。それに、一度わしのところに、探りに參つたことがある。小癪に觸る奴だ。若造のくせにして、少しばかり腕が立つからといつて、父親の後繼早々、わしのところに着眼するなんて、小賢しいにもほどがある。不屆千萬だ。あのときの返報を今日は叶へてやつた。仙貫寺の虎播磨萬心、彼ほど腕の立つ一刀流の達人も、この一角には所詮勝ち目がない。しかし、旦庵にはかういふ手がある。どうだ――これでおれは胸がせい〳〵した。』

『ま、ま、何といふお父樣でせう。』

早苗は打つ伏して泣いた。

『いくら返報だとて、毒茶でこんなにして了ふなんて卑怯です。何とかして、一角樣を助けて上げて下さい。毒茶を飲んだ後は、例へ助かつてもう元の健康にはならないと申すではありませんか。』

『さうさ。』

嘲笑つて、

『治つてもヨイ〳〵だ。』

『まあ!』

早苗はまた悲しがつた。

『早苗、お前もどうやら一角が氣に入つてゐるやうだが――斷念めろよ。いくら、一角でもヨイ〳〵になつては仕方がない。どうだあの態は、一向他愛のないものだ。』

『餘まりです……』

早苗が父を怨みながら悲嘆に沈んだ。

その時、表口が開いた。

『おい。早苗ッ。』

といふ聲がする。

『アラ兄さんだ。』

旦庵もそつちを向いて、

『萬心か?』

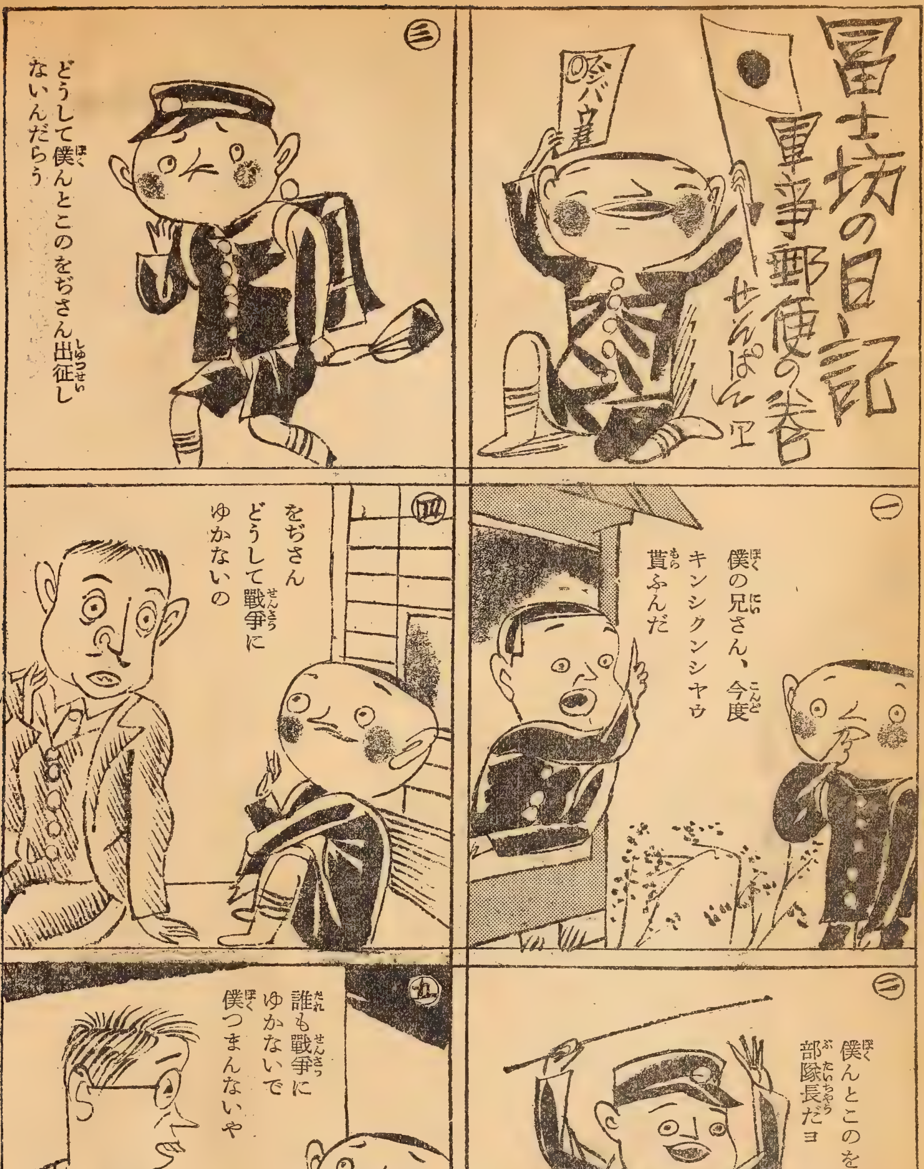
『さうだ――おい旦庵、お前はわしの家來が、目と鼻のところで散々な目に逢つてるのに何ともしてくれないのか。』

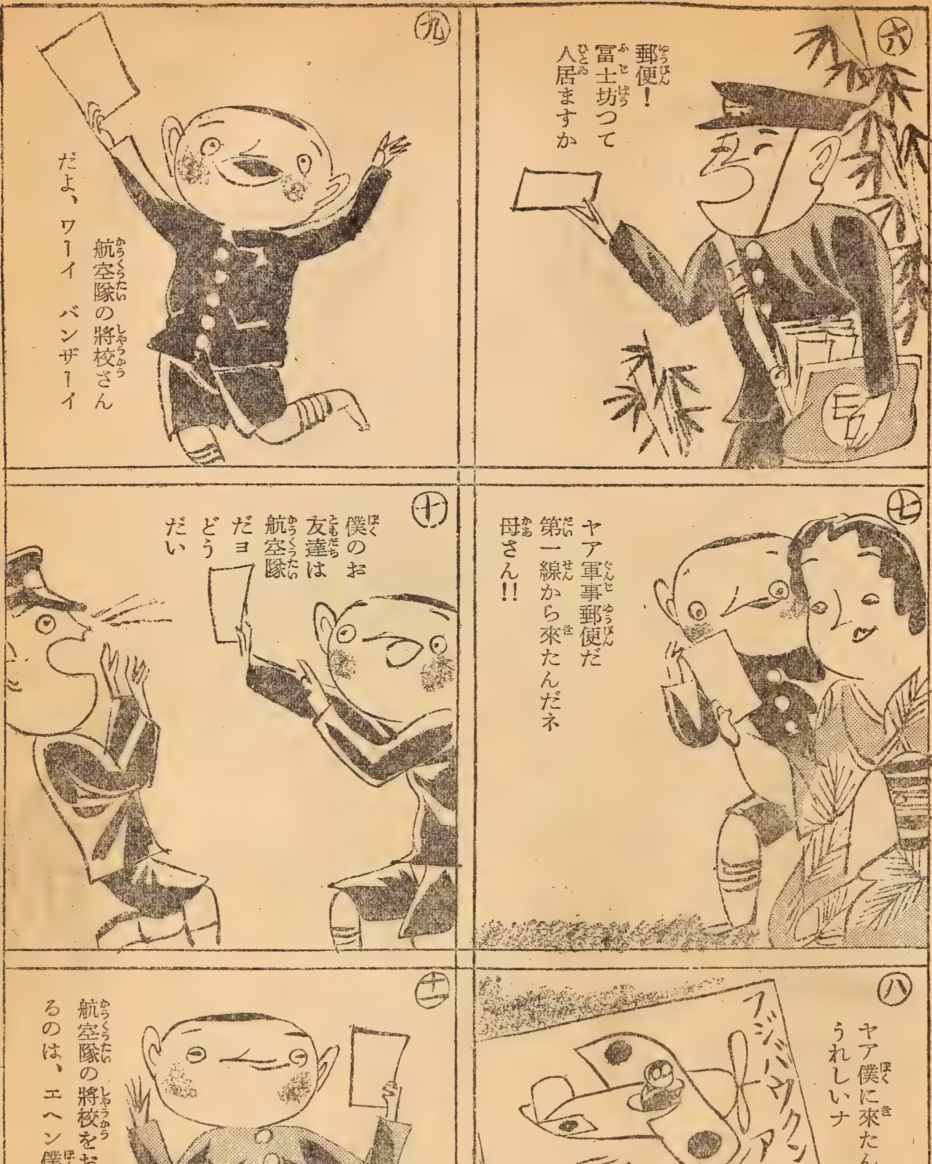
現在の父を旦庵と呼びすてにし、お前といふのだ。父子の仲の惡さもこれで押測られるが、その父をたよりにして捩込みにきた萬心は、

どこかに旦庵の力を買つてゐるものと思はなければならぬ。
『さあさ、一寸お上り。』
『上つたつて仕方がねえ。』
『いゝ物を見せてつかはすぞ。』
『いゝえ。』
早苗が急いで遮つた。
『兄さん、早くお歸んなさいッ!!』
『はてな?』
と萬心は入口で云つた。
『早苗が歸れといふところを見ると、本當に見せる物があるかも知れぬ。ちよつくら、お邪魔しようか。』
『いけません!』
『どつこいしよ。』
座敷に這入つて來た萬心はそこに打倒れてゐる一角を見て、ぎよッと顔色を變へた。
『わ!』
覗いて、
『こ、これは、これは一角ではないか?』
『さうさ。』
『え? ぢや——い、一角を、お前、仕止めてくれたのか。へゝえ、そ、そいつは大した事をしてくれた。』
萬心は餘りの驚愕に言葉の呂律も廻らぬほどだつた。——百人かゝつても所詮手に負へぬ一角を、思ひもかけず、こんなに眠らして呉れたのだ。
『だが、な、何故——思ひ切つたことをしたものだ。』
『探りにかゝつて來て、小癪だから、一寸用ひたまでさ。旦庵の腕前は、ざつとこんなものだ。』
『何にしても有難い。當分、此奴のために、好い日の目は拜めないと思つたに——ヘエ、口幅つたいにも似ず、他愛なく參つたな。』
萬心は歩み寄つた。
『こいつが〳〵、よくも骨を折らせやがつた。向ふつ面を、一つ厭といふほど足蹴に掛けてやらう!』
萬心は、片足を擧げて、一角の顔をガッ!! と蹴つた。
と思つたが——その萬心が、それよりさきに、もんどり打つて疊の上に打倒れてゐた。
『何をする!』
一角がスックと立上つたのだ。
『無禮なッ——貴樣等の奸策にかゝるか。毒茶など、みんなほかに捨てゝしまつた! 一滴たりとも服みはいたさぬぞ。さあ、かくなつたら、これから一角のほんとの強さを見せてやらう!! ウーム、エイ!』
疊を叩くと、三間向ふに坐つてゐる旦庵が、はずみで引つくり返つた。

（つゞく）

無敵の剛勇柘榴一角、何んと小氣味のよい強さだらう。快男兒一角は今や讀物界で大評判の人氣者です。これからは益〻面白くなるばかり! さて次號には如何なる大事件が待ちかまへてゐるか? 切に御期待を乞ふ。


冨士坊の日記
軍事郵便の巻
せんぱん
一
僕の兄さん、今度
キンシクンシヤウ
貰ふんだ
二
僕んとこのをぢさん
部隊長だヨ
三
どうして僕んとこのをぢさん出征し
ないんだらう
四
をぢさん
どうして戰爭に
ゆかないの
五
誰も戰爭に
ゆかないで
僕つまんないや


郵便！
冨士坊つて
人居ますか
ヤア軍事郵便だ
第一線から來たんだネ
母さん!!
ヤア僕に來たんだ
うれしいナ
フジバウクン キモンブクロヲ
アリガタウ
ボクハ カウクウ
マイニチ
バクゲキシテ
ヰマスヨ
○○カウクウ
タイニテ
航空隊の將校さん
だよ、ワーイ バンザーイ
僕のお
友達は
航空隊
だヨ
どう
だい
航空隊の將校をお友達にもつて
るのは、エヘン僕一人です

傳記小說

兒玉將軍

木村毅

梁川剛一畫

一擧直屠爾靈山

（その一）

二〇三高地を取りあぐねてゐる第三軍參謀部に代つて、てきぱきと策戰命令を傳へ終つた兒玉將軍は、煙草に火をつけて、土窟から頭を出したが、

『ほう、もう暮れたか。』

と吃驚したやうに云つた。雪空は夕闇の迫ることが早かつたのだ。そして日沒と共に戰爭は活潑な展開を始めたらしい。晝間はや〻怠つてゐた砲聲が勢よく轟き出して、ヅシーンヅシーンと此の山の上まで震動する

のが、靴の裏へ傳はつてくる。

『お手すきになりましたら、一寸、失禮をさして頂きます。』

顏をのぞけて云つた者がある。

『君は誰だ。』

『管理部長の隈部少佐でございます。』

『管理部長か。すると用事は今夜のわが輩の宿營のことだな。』

さすがに察しがいゝ。まさに隈部少佐はその相談に山まで登つて來たのだが、まだ重要會議が續いてゐるらしいので、土窟の中に入りかね、雪に降られたまゝ、外で待つてゐたのだ。

『宿舍は心配せんでいゝ。二〇三高地が取れるまで、此處に寢起きする事にしよう。』

『お言葉ですが、こゝは狹くて、何の設備もない所ですから、とても〳〵閣下のやうな高官の方の宿舍にはなりませんです。』

『しかし乃木は時々、此處に寢とるんだらう。そんなら吾輩も乃木と一緒に毛布を引つぱり合つて寢るよ。』

それは、成程、乃木將軍は時々こゝに起臥する事はある。だがあの人は自ら奉ずることが極めて薄く、食事も兵のと一緒にせよと云ふので通つてる人だから、それでいゝが、兒玉將軍は又それとは眞反對に、興來れば、妓を呼び大杯の滿をひく豪容を以て、陸軍部內に聞えた人なのだ。

だから乃木將軍なみにと云ふことは出來まいと、隈部少佐がやゝ當惑したやうに首を拈つてゐると、

『それでいゝんだよ。この上の設備は何もするに及ばん。毛布一枚と云へども、下から持つて上る必要はないぞ。』

決斷を以て云ふ兒玉將軍の一語には、いつでも、凡ゆる抗議を跳ね飛ばす鋼鐵板の峻嚴さがある。隈部少佐は、たゞ、

『はい。』

と云ふ外なかつた。

『但しな、木工部の兵に木札一枚削らせて、それに大きく、兒玉滿洲軍總參謀長宿舍と、誰にも分るやうに書いて、こゝの入口に立てゝおいて貰はう。』

『それから御食事ですが、お酒は晩食だけでも付けませうですか。』

『馬鹿を云へ。兵が屍山血河の地獄の苦しみをしてゐるのに、わが輩らだけ、のう〳〵と酩酊してをられるか。酒も二〇三高地が取れる迄は、斷じていらん。』

（その二）

運命の山、二〇三高地は、又、旅順の咽喉にも譬へられてゐる。

これを背首の方から手を廻して締め上げようとするのが兒玉策戰なので、併しこゝを締められてはさしもに東洋第一の堅城なる旅順の要塞全體が絕息せざるを得ぬ。だから敵の防禦も必死で、日本軍がたとへ一旦奪取しても、すぐ又有勢な兵を以て逆襲してきて取返した。

戰爭は十一月二十七日から始められてゐた、その晦日までに、三度取つて、三度取返されてゐる。兒玉將軍が來着してからも、二回取つて二回取返され、六回目に漸く今度こそは占領を確實にした。それは十二月六日の事だつた。

肉彈の應酬の旅順戰が凡て乃木大將の指揮であつた中に、ぽつんと象嵌でもしたかの如く、二〇三高地だけは兒玉將軍の策戰で占領できたものと云へる。

その間、兒玉將軍と乃木將軍とは、二疊敷程な土窟にアンペラを敷き、その上で一枚の毛布を引つぱり合つて、醒めがちな沙場の夢を結んだのだ。

この山上で一番尊いものは水だつた。下の谷まで汲みにおりることが旣に容易でない上に、又その井戶のある所が生憎と椅子山の敵からよく狙はれて、當番の兵が頻々と落命する。だから地獄谷と云ふ名がついてゐた。その危險を冒しての水だから第一に飲料にあてねばならないので、兩將軍とも每朝、顏も洗

はなければ口も噺がなかつた。

強ひてこの間の兩將軍の生活ぶりに差別のあつた所を拾ふなら、乃木將軍の方は、劍も長靴も、帽子も着けたまゝで横になるが、兒玉將軍は、それを脱して眠ると云ふだけの事だつた。

戰況が思ふやうに展開しない時には、この土窟の中で、時々最高會議が開かれた。兒玉總參謀長に乃木將軍、福島總參謀副長に伊地知第三軍參謀長の四人だけが首を集めるので、その時は秀才揃ひの若手の參謀達も立會ふのを禁ぜられた。

それとは知らずに或る時山岡少佐(第三軍參謀、例の白旗勸降使で名高い熊治)が、用事で山へ登つて來て、一寸土窟をのぞいたが、密議中だつたのに遠慮して、そのまゝ立ち去らうとした事がある。

『おい〳〵。』

と後からそれを呼び留めた兒玉將軍は『參考によく見とけよ。元老會議と云つちや、こんなものなんだからな。』

機嫌のいゝ時には兒玉將軍は、乃木大將を前におき、若い田中參謀(國重)などを相手に、よく冗談を云つた。

『この乃木と云ふ親爺はな、今でこそ、こんなやかましやになりよつたが、若い少佐、中佐の頃はどうして〳〵、陸軍隨一の洒落者で、煙草入れのスツポンは象牙にする、着物の袖は綾でなくちやいかんと云ふ。金モールの肋骨に長い粋な彎曲刀をガチヤン〳〵と吊り歩いとつたものだ。それが西洋へ行つてから、何を考へたものか、この通りのうるさ型親爺になり變つて了つたんだぜ。』

そんな時乃木將軍は煙草を吹かしながら、ウフ〳〵と含み笑ひをするだけだつた。

兒玉大將未亡人と嗣子秀雄伯爵

『いや、昨夕は、乃木にひどい目に會はされた。後さしに寢てゐたら、奴、ブー〳〵と屁をたれよつて、それが握り飯に澤庵、梅干の營養不良屁だから、臭いの、何のつて……我輩、實に苦境に陷つたねえ。』

と云つたこともある。この苦境に陷つたは、前線から來るその頃の戰況の常用語だつたので、周圍にゐる者はみんな腹を抱へて笑つた。

さうした樣を眺めても、この兩將軍の隔てない親しさはよく窺はれた。親しければこそ二〇三高地の指揮は一時兒玉將軍が取ると云つても問題が起きなかつたので、これがもし外の將軍が來たのだつたら、面目としても乃木將軍は、その時すでに割腹してゐたかも分らない所だつた。角立つ所も圓く、融通無礙に治めてゆくことにかけては、兒玉將軍は實に天稟の才能があつた。

それから又、部下が氣のきいた所置をしたり、功績を立てたりすると、表はに賞め立てたり、喜んだりするのも、著しい兒玉將軍の特徴だつた。

そも〳〵、北海道の師團が旅順攻圍軍に增援せられて來た時でも、これは後で奉天戰に役立てねばならない新銳部隊だから、大切に使つてなるべく傷つけないやうにとの大本營の意嚮だつたのに、二〇三高地に向つて、一擧四分の三に減つて了つた。そこでその後から上陸した第八師團の中からも、一箇聯隊だけが旅順の增援のために割かれて、高崎山の麓に着いてゐた。兒玉將軍は急に此れに命令を授けねばならぬ必要が起つたが、山との間には電話がひかれてゐない。田中（國重）參謀がその時に、

『いや、あの間には所々に遞步哨を立てて何時でも直ぐ聯絡の取れるやうにしておきました。』

と云つたら、兒玉將軍、喜ぶまいことか、

『そいつは出來したぞ、それはよく手配しておいた。』

そして後で兒玉將軍は、此の田中參謀と只二人きりになつた機會に、『お前まだ、西洋へ行つた事が無かつたな。戰爭が濟むまで生きとつたら、今度は必ずお鉢を廻してやるからな。』と約束した事があつた。

媾和後になるとこの約束は實際に履行されて、田中參謀は少佐でありながらアメリカ大使館付武官に拔擢せられた。激戰の最中でも、こんな方面へまで休みなく働く兒玉將軍の頭腦なのだ。

その代り不機嫌な時は恐ろしかつた。旭川師團の參謀が作製して出した師團命令の中に、つい不覺にも、同じ中隊の數字が二ケ所に書きこんであつた事がある。ひどく損傷した部隊のあちらから三人、こちらから五人と、生き殘りの兵を、丁度飯櫃の底でもはたくやうにしてかき集めて作つた中隊を、配備するのだから、かうした間違ひは得てしてあり易いのだ。

しかし事苟くも、重要な策戰に關するのだから、兒玉將軍は斷じて容赦しない。怒髮、冠を衝く勢で、その參謀を呼びつけ、

『きさまのやうな奴は、これをつけてゐる資格はない。こちらへ寄越せ。』

と云つて、胸から天保錢――陸軍大學卒業の徽章――をむしり取つたこともあつた。

その時には當人は元より、周圍まで慄へ上つた。

（その三）

智の兒玉、情の乃木。

大雜把な云ひ方だが、兩將軍の特色を、かう對比して語るのは、決して間違つてはゐない。

二〇三高地の頂上を、じり〳〵と敵を追ひつめて占領したわが軍は、今度は逆襲で奪還されることのないやうに、兒玉將軍の案に隨ひ、すぐ土嚢を積み上げて、急造陣地を作つた。そしてその背後に大急ぎで交通壕を掘つて、どし〳〵と下から增援隊を登らせて、そこを堅めた。

『但し負傷兵が後退するのには、この壕內を通過することは絕對にならん。壕外を步かせえ。』

壕外を步けば、彈丸雨飛の間だから、兵は旣に傷ついてゐる上にも又傷を蒙る。だが兒玉將軍はさう云ふ嚴命を出して平然としてゐた。急を要する增援兵の派遣なのだから、それを負傷兵の後退で一寸でも邪魔させないためには、兒玉將軍はどんな冷酷な命令でも出して、寸刻でも早き戰機の展開を計らうとするのだ。

その中に、わが占領地區內の西南角から旅順港內が見えるとの報告があつた。

その眞僞を確かめ、果して港內が見えるなら、敵の軍艦がどんな狀態にあるかを偵察するために、第七師團の白水參謀、總司令部から來てゐる國司參謀、聯合艦隊から派遣せられてゐる岩村參謀の三人が、實地に赴いてみることになつた。

併しそこは占領してゐるとは云ふものの、僅か百名ばかりのわが兵が、敵彈の猛射を浴びながら進みも退きもならず、岩に齧りついてゐるだけの陣地である。今迄、そこに派遣せられた將校はみな戰死して、還つて來た者は一人もない始末だから、三人の生命も十中の七八は無いものと覺悟せねばならなかつた。

白水中佐はその場で、上着も下着も用意の眞新らしいのに着換へた。死恥をかゝぬ身嗜みだ。

『白水君、白水君。』

乃木將軍は呼び留めて、その兩手にしつかりと握手した。

此の時、別にそれ以上の言葉は口から出なかつたが、生別死別の意を含めたその握手がいつ迄も解かれないのを見て、周圍

の者がみな思はず落涙して了つた程だつた。

しかし只ひとり冷然と外方を向いて煙草を吹かしてゐるのは兒玉將軍であつた。

だが實に奇蹟的にもその日の午後になると、この三人は三人とも無事に歸つて來たのだ。而も偵察の任は充分に果して、港内には敵艦が七隻に、他の船舶若干がゐるとの報告だ。

『よし、直ぐ撃て。』

性急に兒玉將軍は命令する。しかし攻城砲陣地の方から、

『それは暫く猶豫をたのむ。打つには觀測所を設けねばなりませんが、それは今の有樣では太陽溝方面の敵海軍砲から設けても、設けてもみな吹き飛ばされて了ふのです。』

との哀願が出てきた。

『いや、いくら吹き飛ばされても構はん、やれ。』

から電話で押問答してゐる中に、そこへは再び敵が逆襲して來て、忽ちに又彼我爭奪の巷と化し、觀測所などは到底設けるわけに行かなくなつたから、事實に於ては、この兒玉將軍の冷酷な命令は行はれる迄に到らなかつた。

その間に、兒玉將軍が、此處へ到着早々、第三軍參謀部の總反對を押し切つて嚴命した大砲の移動が行はれ、十二珊榴彈砲十五門、九珊臼砲十二門が、專ら二〇三高地陷落用として据ゑられる事になつた。

十二月四日からこの砲口が火を噴きだしたので、わが軍がどんなに苦手にしたか知れない敵の鴨湖嘴砲臺は直ちに沈默し、北太陽溝の砲臺も餘つ程の大損害を受けたと見えて、極めてまばらにしか打つて來なくなつた。

『どれ、吾輩が一つ、その港の見えると云ふ所へ行つて見

よう。』

總參謀長自身、茲で、容易ならぬ決心の色を眉宇にこめて立上つて、此れには國司參謀が隨行する事になつた。

『いや、私も、お伴しませう。』

と、旅順攻圍軍の援助に來てゐる海軍重砲隊長黑井（悌次郎）中佐も一緒について行つた。

二〇三高地の山肌から麓にかけては萬に近いわが軍の屍骸が散亂してゐるのだから、その冬外套の色で地面が眞黑に見えた。

塹壕の中は、辨當殼と糞便で一ぱいで、酷寒期なればこそ凍つてはゐるものの、惡臭がムツと面を撲つてくる。

『おい、少し足を縮めてくれんか。』

と黑井中佐が云つたら、

『どうせ私共は消耗品ですから、御遠慮なく、足の上を歩いて下さい。』

と答へた兵があつた。

隨行の者が云ひやうのない悲愴の感に打たれたのは勿論だが、餘りにもだしぬけだつたこの一語には、兒玉將軍の眼からも、思はず水晶のやうな不覺の涙の一滴が零れた。

山の八合目あたり迄ゆくと、彈丸のくることがひどいので、責任の地位にある兒玉將軍はそれ以上登ることは控へねばならなかつたが、黑井中佐だけは勇敢に這ひながら、頂上まで着いた、そして或る兵の肩にのつて、一寸壕の外へ顏をのぞけたと思つたら、その瞬間、

『しめた。』

と云ふ一語が力強く唇から洩れた。この間、僅かに二十秒の事だつたのである。

それきり黑井中佐は、兒玉大將にも挨拶せず、轉がるやうに山を駈け降りて、電話のある所までゆくと、すぐ于大山麓の重砲兵隊陣地へつないだ。それから十分の後には、わが砲彈が今迄に全く例のない正確さを以て、旅順港內の敵艦の上に雨注し始めて、敵の度膽をぬいたのだ。

後で國司參謀が、

『黑井は全くえらい。大砲にかけては、海軍の方が、陸軍より手際がすぐれてゐる。』

と、感歎して措かなかつたと云ふ話があるが、實に黑井中佐は曩のたつた僅か二十秒の瞥見で、港內の山蔭にへばりついてゐて、今迄はどうしても分らなかつた敵艦の位置と距離とを、ちやんと見ぬいて了つてゐたのだ。

これは少くとも旅順戰に於て、一つの畫期的な時機であつた。その夕方近く兒玉將軍が元の土窟へ歸着したころには、

『ポペーダ艦上に白煙湧く、四十五度傾斜、ポルタワは沈沒、海底に膠着す。』

などの快報が續々と電話に響いて來て、山上の參謀部を、喜びに湧き返らせてゐた。

それからの一兩日で、猛火に居たゝまらなくなつて港外へ逃げ出したセワストポーリを除き、殘りの六艦は、或は擊沈或は擱坐して旅順艦隊の殲滅は遂になつた。

港內に敵艦が殘つてをればこそ、バルチック艦隊が來た時に怖いのだが、此れでもう東鄕艦隊はいつ佐世保にひき上げてもいゝ事になつたのだ。

（その四）

殊に六日の朝早く、旭川師團は力攻して、二〇三高地全山を完全に占領したとの確報が入つたので、乃木將軍も初めてその頂上に登つて戰況を見渡した。

そして翌七日の朝食を濟ますと、用事があつて乃木將軍が先づ土窟をひき上げ、夕方には兒玉將軍も、今度こそは大丈夫と安心して、柳樹房の軍司令部まで歸つて來た。

『どうぢや。乃木。祝盃に葡萄酒でも飲まさんか。』

『いや、こちらもその積りでゐた。幸ひ大島中將から沖津鯛や、カステラや、茶や、色々と珍味を送つて來てゐる。』

『そいつは有難いな。――そして久しぶりに一會、催さう。』

兒玉將軍が一會と云ふのは詩の會のことなので、二人が顏を合せると先づ思出すのは詩技を鬪はすことだつた。乃木將軍が第一聯隊長、兒玉將軍が第二聯隊長だつた頃の二人の贈答した書翰は、全部詩から

なつてゐる位なのだ。

丁度都合のいゝ事に、第三軍には早稻田大學の志賀重昻教授が從軍して來てゐる。この人は詩文の教養が深いので、乃木將軍は常に作詩の相談相手にしてゐたのだから、それをも誘つて一緒に兒玉將軍の宿舍を訪うた。

二〇三高地が落ちて見ると、さすがに今夜は砲聲が極めて稀である、寒月は楊柳の枯枝を照らし、步哨の凍てた大地を踏む靴音がコトリコトリといつになく高く耳につくのであつた。

『どりや、そいぢや志賀君の前に、滿洲へ來てから作つた詩を洗ひざらひ披露して、斧正を乞はう。』

と、兒玉將軍は、持つてゐる矢立から筆をぬいた。この矢立は日淸戰爭の時、廣島の大本營へ往復する途中、山陽鐵道の汽車の中で拾つたものを、愛惜してこの戰地でも始終もち步いてゐるのである。陣中だから色紙は勿論なく、書くのは粗末な藁半紙であつた。

『沙河秋高處』『暮靄籠二煙臺一』の五言古詩二篇と『眼入城陽渾河霰』『仁風蹴レ浪渡二遼河一』『旗幟堂々摧二鐵城一』『得利寺邊天籟悲』の七言絕句四篇とであつた。

座にはやがて落合軍醫監や、若い諸參謀たちも顏を出して、いろいろとそれらの詩を批評してゐたが、得利寺邊が餘情に充ちてゐて一番いゝと云ふことに衆口が一致した。その詩はかう云ふのである。

　得利寺邊天籟悲。歸鴉去後弔二新碑一。
　十年恨事一朝露。總在雄々落々時。

『いや、この詩はな、軍務を帶びて南船北馬する度に、得利寺を通つて、聊か催した感慨を詠じたのさ。』

『待て〳〵。その兒玉の詩にわしの次韻したのがある。』

乃木將軍は備へ付の硯に、墨を摺つて書いた。

　有レ死無レ生何足レ悲。千年誰見盡忠碑。皇軍十萬幾英傑。驚レ世功名是此時。

韻が悲、碑、時でちやんと合はせてある。(三番目の轉句は韻がないから合はせる必要がないことに、詩則でなつてゐる)

夜は更けたが、淸興はしめやかに、何時果てるものとも見えなかつた。

それにつけても思ふのは昨日までの二〇三高地の屍山血河の修羅場である。

あの運命の山を下し、旅順の咽喉を扼したのだから、どんなに躍り狂つて喜んでも、これでもう充分だと堪能できることはないだらう。而も只此の一ケ所に彼我の築いた死傷の山は二萬何千、その四分の三はわが軍の損害だつたのを思へば、どんなに痛哭してもまだ足りないであらう。

しかし兩將軍は、その喜びもその悲しも、淡々たる詩興の奧に封じて了ひ、他に餘念もないかのやうに、今かうして閑文字を弄そんで樂しんでゐるのである。

但しこゝにこそ、ナポレオンにも、モルトケにも、近くはキツチナアにも見られない、獨得の日本武人の高い風格と、ゆかしい餘韻とがあると云へよう。

滿洲軍總司令部の方から頻々と歸還を促して來るので、兒玉將軍は

十二月九日の正午、歸北の汽車に乗つた。

二〇三高地を取らずんば生きて再び見えずと悲壯な氣持でゐた來る時に較べると、その大任を美事に果した歸りの氣持はらくなものであつた。兒玉將軍は暇さへあると、うつら〳〵と居眠りばかりしてゐた。

茲に甚だ不思議なのは兒玉將軍は前後九日間旅順に滯在してゐながら、その間乃木將軍の第二子保典少尉が、而も二〇三高地の中腹で戰死したことを些とも知らずにゐたことである。

思ふに乃木將軍の嚴命で兒玉將軍にも亦福島、田中、國司など滿洲軍から來てゐる諸參謀にも耳に入れることを、絕對に禁じてあつたのだらう。今から、その乃木將

軍の心中を押しはかつて見ると、さうした私事で、兒玉の策戰に一寸でも煩らひを及ぼし狂ひを生じさせてはならないとの慮りからであつたに違ひない。

煙臺の總司令部に歸つて來て、旅順行の復命を濟ませた時、兒玉將軍は、大山元帥の口から初めてこれを聞かされたのであつた。

『さう云へば乃木どんは、二番息子も亡くしてお氣の毒なことでごわしたなあ。』

これにはさすがに兒玉將軍も吃驚した。

自室に歸つてくると、露の溜つた枝でも搖ぶつたやうに、今迄辛うじて睫毛にこらへてゐたものが、バラ〳〵と一時に零れて來たのだ。

『だが……だが……乃木よ、わしは、お主のために、それを喜ぶぞ。』

哀哭のあまりに獨り言の聲もとぎれ

とぎれになる。

『それでこそ、陛下と國民の前に、申しわけが立つのだ。お主の肩も些と輕くなつたらう。』

それはいつまでも湧いて盡きない男の熱涙であつた。而もこれをこぼしてゐるのは、二〇三高地で『負傷兵の後退には壕內の通過を許さず。』と冷酷なる命令を下したあの同じ指揮官の眼なのであつた。

日の出に祈る

（その二）

明治三十八年一月一日。難攻不落の旅順もとう〱陥落した。もうしめたものだ。

海ではバルチック艦隊など、なんぼでもやつて來い。わが聯合艦隊は悠悠と準備をして待つことができる。

陸では乃木第三軍を、滿洲方面に增援することが出來て、わが軍は開戰以來ここに初めて、大山總司令官の下に全部の勢揃ひが出來るわけだ。

日露戰爭の中で、沙河の會戰をわが軍の第一危機だつたとすれば、第二危機は、一月の二十四日、五日、に敵の大部隊が黒溝臺に於て、わが不意を衝いたことである。これは敵の梟雄、

第二軍々司令官グリッペンベルグ將軍の獨斷の策戰であつた。

彼は音に聞えた實戰の猛將で、常に、

『極東總督アレキシエフは、社交の上手な、貴婦人向きの將軍に過ぎず、總司令官クロパトキンは、ありや教室の中の戰術家だ。』

と、上官を罵倒して憚らない男であつた。

その位だからクロパトキンの連戰退却策戰が齒痒ゆくて堪らず、一番、その鼻を明かして、拔け驅けの功名を立てゝ呉れようと、秘密のうちに計畫をすゝめてゐたが、遂に獨斷專行、十二萬の大軍を率ゐて、皚々たる白雪を蹈み散らしながら、渾河に沿うて下つて來た。

『わが計にして敗れんか。露都に還り、皇帝の蹶下に伏してお詫び申上げんのみ。』

と云つて、彼は勝利の確信にふくれ返つてゐた。

わが軍では、一將軍が獨斷で兵を動かすなどと云ふことはとても想像も及ばない事だから、まさかそんな大軍をどよもして來ることもあるまいと高を括つて、些とも氣がつかずにゐた所を、急に黑溝臺に不意の襲擊を受けたのだ。

だから驚くには驚いたが、之を迎へ打つたのは音に聞えた驍勇立見(尙文中將)將軍の指揮する弘前師團である。二日に渉る大激戰の後に僅々三分の一の兵力で、とう／＼敵軍を擊退した。

この時もし四十萬の大兵を控へてゐたクロパトキン總司令が、主力をあげてグリッペンベルグ大將と共同策戰をしたなら、わが滿洲軍にはまだ乃木軍が到着參加してゐない前だから、日本が總敗北に終つて、或は奉天戰と云ふものはそのまゝ、開かれずに終つたらうと云ふ批評家のある程、これはわが軍に取つては大危機であつた。

しかしクロパトキン總司令は、

『これは裏切者の勝手にしてゐる戰だ。救援の必要はない。』

と云つて、空嘯いて動かなかつたので、愈々敗退ときまると、グリッペンベルグはかん／＼に憤慨し、クロパトキンについては皇帝に上訴すると云つて、一月三十日、指揮權を擲つて、奉天を引上げて了つた。これも日本軍では到底あり得ない事だ。

それにしても、かう再三、敵が積極的に攻め掛けてくるやうでは、奉天の總攻擊を急がねばならぬ。

後れゝば後れるだけ、シベリヤ鐵道による敵兵の來着はいよ／＼增大し、少し暖くなつて、渾河の結氷が、ゆるんで、あの上を砲車が渡せぬことになると、策戰上ひどく不便でもある。

若い參謀部員を督勵して、明け暮れ、地圖と睨みつこをする生活が兒玉將軍には又初まつた。

(その二)

その頃兒玉將軍の、沙場に荒むともなく荒んできた氣持を、何より解きほぐして、藹々たる和氣に溺らせたのは、嗣子秀雄(當主の伯爵)が、この陣中まで遙々と見舞に來てくれた事であつた。

『お父さん、やつて來ましたよ。』

大學を出てから三四年しか立たない彼は、若い、はち切れるやうに元氣な、屈託のない顏を、參謀室の扉の外にのぞけた。

『ほう、來たか。』

テレフンケン式吹込

キングレコード

何れも粒選りの傑作盤揃ひ

製造發賣　大日本雄辯會講談社

10月新譜

邦樂

童謠

父さんおかへり　河村順子
ゆふべ見た夢　小坂勝也
うかれ兎　小澤美枝子
オヤ・オヤ・オヤ　木村百合子
（繪本式の美麗アルバム入、一圓六十五錢）

兒童劇

彌次さん・喜多さん
お笑ひ道中　長谷山雛菊　音樂會員吹込
（美しい漫畫の繪本つき、美麗袋入、一・六五）

愛國童謠

ラヂオで大評判のレコード——
戰地のお父さまへ　小澤美枝子
僕も大きくなつたなら　河村・小坂　山元・高城

獨唱

トロイメライ　長門美保
ユモレスク　永田絃次郎
(1.65)

愛國流行歌

銃後國民熱唱の
大日本行進曲　愛國歌！　松島詩子　樋口靜雄
日本男兒の歌　塩まさる
(1.65)

流行歌

娘馬子唄　三門順子
日の丸抱いて　南部朝男
(1.65)

流行歌

惻々胸を打つ感激！　初秋を飾る大ヒット流行歌！

轉戰回顧　塩まさる
あゝあの軍歌　林伊佐緒
(1.65)

流行歌

花の北京へ　新橋・みどり
招くパラダイス　林伊佐緒
(1.65)

流行歌

軍國の母子　新橋・みどり　林伊佐緒
總攻擊の前夜　樋口靜雄
(1.65)

國民歌

臺灣行進曲（臺灣總督府國民精神總動員本部撰定）　永田絃次郎　長門美保
（一・六五）

謠曲

田村　觀世喜之
(1.65)

浪花節

忠治赤城落ち（畑喜代司作）　玉川勝太郎
赤尾の林藏十八番斬り　御門博
（各二枚組二圓二十錢）

落語

根ほり屋　桂右女助
(1.10)

漫才

僕の考へ聞いとくれ　アザブ・ラブ　アザブ・伸
(1.10)

テレフンケン式吹込

キングレコード

邦樂既發賣傑作盤

何れも大好評のヒット盤揃ひ！（各一枚　一圓六十五錢）

- 玄海しぶき　塩まさる
- 慰問日記　三門順子
- 軍國子守唄　塩まさる
- あゝ我が戰友　近衛八郎
- 戰地から故郷から　塩まさる　新橋・みどり
- 軍國夫婦郵便　塩まさる　新橋・みどり
- からゆきさん（さらば愛兒）　松島詩子
- 僕の父さん　塩まさる
- 從軍手帖から　塩まさる
- 勇士は朗らか　塩まさる
- 霧の上海　松島詩子
- マリネラ　松島詩子
- マロニエの木蔭　松島詩子
- 天龍二十五里　三門順子

TELEFUNKEN

キングの洋楽盤
日本テレフンケン10月新譜

◎世界歌劇名曲集（十二吋　十回十ケ月完了）

▼第一回配附盤

聲樂

ウエーバー曲
『魔彈の射手』

（ソプラノ）イルゼ・ケーゲル
（ソプラノ）カルラ・シュプレッター
（テノール）ペーター・アンデルス
（バリトン）ハンス・ハインツ・ニッセン
伯林ドイツ歌劇場合唱團
伯林フイルハーモニー交響樂團
イッセルシュテット指揮
（豪華アルバム、解説挿入用美麗表紙及解説つき）

交響管絃樂

クープラン曲
劇場風の協奏曲
ワインズ指揮
ウイスバーデン・コレギウム・ムジクム
(12吋 2枚 6.60)

交響管絃樂

モーツアルト曲
交響曲第三十二番　ト長調
ハンス・フォン・ベンダ指揮
伯林フイルハーモニー交響樂團
(3.30)

交響管絃樂

ショパン曲
ワルツの調べ
—ショパン名圓舞曲集—
伯林國立歌劇場交響樂團
(2.20)

器樂（チエロ）

ドヴオルザーク曲
インデアンの嘆き
アルベニス曲
西班牙のセレナード
獨奏　ガスパル・カサド
ピアノ伴奏　ミヒヤエル・ラウハイゼン

（描寫音樂傑作選）

コッケルト曲
サンスーシの朝
ヴオイチヤッハ指揮
テレフンケン管絃樂團

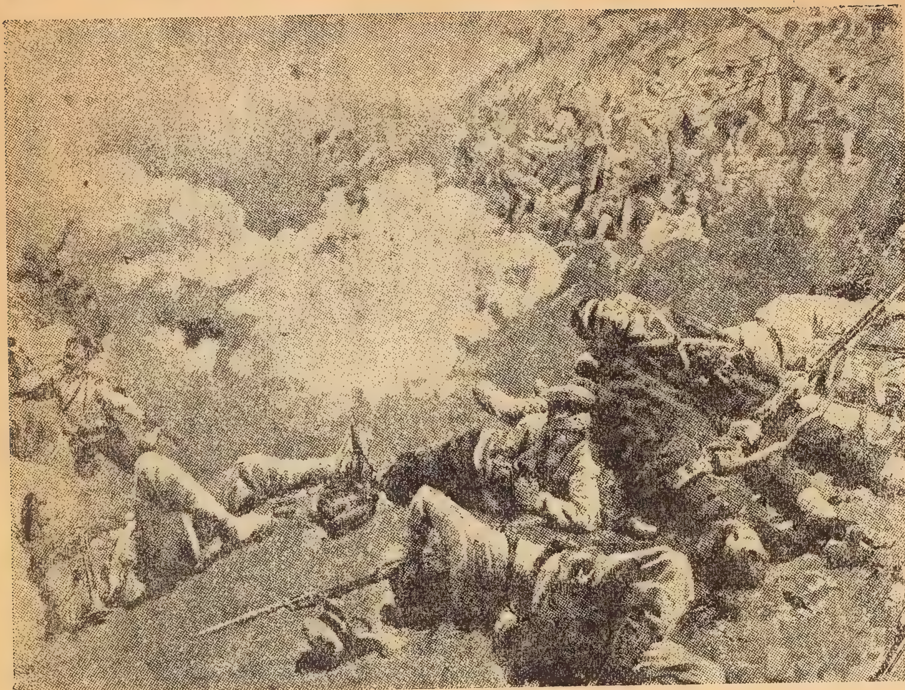
イエッセル曲
樂しき橇の遊び
ヴオイチヤッハ指揮
テレフンケン大吹奏樂團

フチック曲
熊のをぢさん
シュミット指揮
伯林ドイツ歌劇場管絃樂團

イエッセル曲
玩具の兵隊の觀兵式
シュレガー指揮
大サロン管絃樂團

ラトケ曲
雀の行列
シュミット指揮
伯林ドイツ歌劇場管絃樂團

（美麗ホルダー入十吋三枚組）　四圓九十五錢



旅順攻圍軍の猿山攻擊（當時ロンドン・ニュースに掲載されたもの）

と、懷しさうに、微笑を以て迎へた將軍は、

『へえ、お前も大した恰好をしてゐるな。』

これが最初に與へた挨拶だつた。

『僕、これでも遼東守備軍の軍屬ですからね。大尉相當官ですよ。』

欛を握つて、劍尖で、トンと土間を突いて見せた。

『武術の心得のない者が、そんな物をぶらさげちや、危くていかんなあ。――まあ、色んな話は、後で、仕事が濟んでからする事にしよう。從卒ダルニイの方から豫め通知があつたので、室の用意もしてある。從卒に案內して貰つて休みながら待つてをれ。』

大藏省の青年事務官だつた兒玉秀雄は、大藏次官の阪谷芳郎から、滿洲行きを命ぜられたのであつた。

日本の占領地區內は、既に治安が充分に保たれて、ぼつ〳〵邦人商人の入國、商賣の開始を望んでゐる。煙草、綿布、化粧品などの品物は、相當に入りこんでゐるのだ。そこで有志の實業家達の間に滿洲貿易組合と云ふものができて、二、三十人の商人が渡滿する事になつた。秀雄は、戰後の滿洲經營のための視察旁々、その引率を仰せつかつたのだ。かうして父子對面の機會を得させようとの、阪谷大藏次官の蔭の心遣ひであつたらしい。

當時の總司令部の陣取つてゐたのは煙臺の酒屋であつた。滿洲では何處の町へ行つても酒屋は常に最も大きい、最も立派な家で、室の數も多いからだ。

大山元帥が一番奧まつた上室を占めてゐる。兒玉將軍は當然その隣室を占めるべきが順序なのだが、わざとそれを避けて、下の方の入口

の室に起居してゐた。

　これはあの融通無碍、天衣無縫の社交家の兒玉將軍にも窮屈な思をせねばならぬ人がこの世界に一人だけあつた。それが大山元帥で、向ふからは絶對に信任されて、干渉は一つもなく、凡ゆることを思ふ存分にさせて貰つてゐながら、それでゐて兒玉將軍は、このぼーッと大きいが賢いのか愚鈍なのか些とも分らない元帥の前へ出ると、何となく頭が上らない。自分から望んでその人の下について來たのでありながら、上から押へられるやうな威壓を感ずる。

　だから兒玉將軍は、せめて寢起きする時だけでも氣らくな氣持にならうと思つて、設營兵に云ひつけて、何處でも元帥とは離れた室を自分の私室に取らせてゐるのだ。

　久しぶりで親子、膝を交へたその晩の會食は鳥鍋だつた。

『陣中にもなか〳〵御馳走がありますね。しかし何だか變つた味ですが、此の鳥は何でせう。』

『雁だよ。』

『へえ、雁て、こんな味がするものですか。』

『初めてかい。昔は上野のあたりでよく雁を食はしたがな。』

『雁鍋と云ふことは、話には聞いてゐましたが、今迄に食つた記憶は一度もありませんよ。』

『而も、お前、こりや、大山さんが、わざ〳〵自分で射つて來たのを一羽だけ割讓されたのだ。』

『元帥は獵好きだと云ふことでしたが、それぢや、此れはお手打ちの獲物ですね。有難くて、さう闇雲には、頰ばれませんね。』

葡萄酒の盃が、しきりに二人の間に獻酬せられた。

『さう云へば未だ珍味もあるよ。』

兒玉將軍は、背にしてゐる戸棚から支那燒の蓋物を取出した。

『何ですか。』

『鰌の煮こごりだ。』

鰌ときいて秀雄は、思はず出しかけた箸を引つこめた。

『へえ、滿洲でもこれがゐるのですか。』

『そりや、きさま。何しろ沙河を控へた泥田だからな、澤山ゐる。』

『それに僕は又、鰌と云へば夏しか取れないものかと思つてゐましたが。』

『この節の時候だから、そりや、水の中を泳いではゐない。鰌と云ふものは、寒中がくると泥の中に潜つて、棒のやうにピンと伸びたまゝ凍つてるんだ。それを長州の方では三鍬と云ふ三本の股になつた鍬で百姓が掘りにゆくので、わし等も子供の時には時々、それにやられたもんさ。全く都會に育つたものは、さう云ふことは、何も知らんなあ。』

　と云つたが、急に氣がついたやうに、

『さう〳〵、お前は鰌は食はなかつたんだつけな。』

　全く秀雄が幼い時の嫌ひと云つたら、この鰌が一番だつた。所が將軍は柳川鍋が何よりの好物なのだから、よくそれが食膳に出る。その柳川でさへどうにも箸のつかなかつた秀雄は、鰌汁などになると、見るだけでも氣味が惡かつた。

　その頃の事だが、一度、乃木大將が訪ねてきて、秀雄も挨拶に顏を

出すと、偶然、主客の間に鰌の話がでてゐた。

『近頃の子供は全く變だよ、うちの伜共も鰌汁は決して食はん。こんなうまいものをどうして嫌ふか。と、脅しても、すかしても、口にせん。』

と乃木大將が云つてゐるのが、耳に入つた。

それで、はゝあ、勝典君も保典君も、自分と同じく鰌嫌ひなのだなと思つたことがあつたが、あれはもう六、七年も前のことで、そしてその兩典ともに、今度の戰爭で既に名譽の戰死をして、この世の人でないと思ふと、まことに身世蹉跎の感に思はず愴然として首筋の方から寒氣立つて來るのを覺えざるを得ない。

此の時秀雄の胸中には、やつぱり鰌のことでチラと稻妻のやうに閃めいて過ぎた別な思出がもう一つあつた。それは去年の春、自分が歐洲から歸つた時、新夫人サワが、

『あなたのお留守中、お父樣は、お晝の御辨當と云へば、必ずお務め先（參謀本部）から私に電話をお掛けになるのでございますよ。そしてきまつたやうに、今日も柳川鍋だ、サワ、お前、作つて屆けてくれとお云付けになるのです。』

と云つた事であつた。

秀雄はその時程、親心の有難さを感じたことはない。むしろ、豪快磊落に見えるあの父に、この細かな心遣ひがあるのかと思つて、實は意外な氣持さへした。

大學を出ると大藏省に入つた秀雄は、ロンドンの總領事館付財務官を命ぜられ、新妻を家に殘して渡英した。それは三十四年の春だつた。それから戰爭の始まる迄滯在したのだから、孤閨に夫人の淋しい思をすることは滿三ケ年に及んだわけである。

『料理屋からお取りなすつた方が、手際がよくて、おいしいにきまつてるのですけれど、屹度、私が生家を離れてたよりない、手持不沙汰な思をしてるだらうとの思遣りから、少しでも仕事をさせて、その氣持を紛らせてやらうと思つて、云ひ付けて下すつたのに相違ないのでございます。晝前、お電話が掛つてくると、そら又、お役所から若奥樣へですよと女中達が云ひ合つてた程、お云ひ付けと云へば必ず私へでしたの。』

將軍は戰地に來ても此の何よりの大好物の味は忘れかね、せめてもの事に兵が沙河沿岸の冬田から掘つて來た寒鰌を煮付けては、自分から珍味だと云つて舌鼓を打つてゐるのである。

食事には、どちらかと云へば贅澤で美食家の父が、こんな有樣かと思ふと、秀雄はその姿が、氣の毒でもあり、尊くもあり、留守をまもる自分の新妻にしてくれた細かい氣遣ひの有難さも手傳つて、さきに箸を引つこました事は潔く撤回して、云つた。

『いや、戰地でなら、何でもうまいです。僕もその鰌を頂きますよ。』

（その三）

『時に寺内はどうしてゐますね。』

秀雄は、夫人の繋りから、自然にどうしても斯う尋ねないではをられなかつた。

この寺内と云ふのは、今の北支最高指揮官寺内壽一大將のことで、

當時はまだやつと中尉になりたての頃であつた。秀雄夫人サワには實弟に當るのである。さればこの夫人、この中尉の父と云ふのは寺内正毅元帥（當時は陸軍大臣）であることは、更めて説明するにも及ぶまい。

『あれも元氣だ。どこか此の前方の勤務について、敵と睨み合つてゐる筈だ。』

『一時戰死したと云ふ噂が傳はつて、叔父さん（正毅陸相）もひどく心配してをられたやうでした。』

『さうだつてなあ。なあに、負傷もしちやゐないんだよ。』

『時々は、お父樣のところへもやつて來ますか。』

『現金な奴でなあ、酒が飲みたくなると、伯父さん、ウヰスキイはありませんかねえと云つて顏を出しては、角壜の二、三本も提げて行きよる。』

『明日にでも來ないもんかな。來たら向ふは中尉、こちらは大尉相當官で、條が一本多いんですからね。一つ、上官の權威で號令をかけて、あいつに威張つてやるんだが。』

寺内中尉は、たゞに秀雄に取つて義弟と云ふばかりではない。暫く兒玉家に預けられて、その子供達と起居を共にし、家族並に、兄弟並に暮してゐた事がある。

丁度、正毅將軍が師團長になつて東北へ赴任するので東京をはなれた。その時が、壽一中尉は大切な士官學校の受驗準備期にさし掛つてゐたので、日頃から親同志が兄弟も只ならず親しかつた因緣から、兒玉家へ預けられてゐたのである。

その夜、この親子は、蓐の中に入つてからも、家のこと、戰場のこと、四方山の話が盡きなかつたが、しかしこんなに、ゆつくりと打ち解けて語り合ふ機會は、それきりでもう二度とは來なかつた。

奉天戰を前に控へて、總參謀長たる父將軍の多忙と辛勞は、戰況に全く無知識な秀雄の胸にも、あり〱と映つて來る。

從來の戰績では、日本は、戰へば必ず勝つてゐるのだ。だから奉天戰だつて、やつぱりさうだらうと、秀雄などは素人考へで大して心配もせずに、その見物がてら大連からわざ〱煙臺まで出向いて來たのだ。

しかし父將軍の顏色を見てゐると、どうもさうでは無いらしい。

あの腕組み、あの沈思、そして時としては洩らすあの深い溜息！

『今の仕事が一片づきしたらな。今度は又一緒に雁鍋でも食はうぜ。』

と、顏を合せる度に氣樂さうに云つてはくれる。だが、今度は、今度は……で、それは實現されたためしが無いのだ。

蓐は毎晩のやうに、從卒が並べて敷いて呉れるが、秀雄は、父將軍がいつ頃歸つて眠るのだか、見た事がなかつた。青春の健かさから、自分は、毛布ぐるみ攫つてゆかれても分らない程、すぐ寢こんで了ふからであつた。

そして自分が、朝、眼を醒ます頃には、父はもう出かけてゐて、室にはゐなかつた。

（その四）

秀雄は元來、家にゐる時は、宵つ張りの朝寢坊の方であつた。

併し戰地へ來ると一週間も立たない中に、この癖は、老人と同じく早寢早起きに變つて了つた。

と云ふのは、父將軍には構つて貰へない。讀む書物はない。——とすると、夜、何時までも眼を醒ましてゐる材料がないのであつた。

時には、室の掃除役の小輩を相手に、滿洲語でも習つて見ようかと思つた。幸ひと父も暇な時には稽古したらしい書物があるので、手眞似で教へろと云ふ意を通ずると、

『不分明、不分明。』

としきりに手を左右に振る。

從卒にきいて見たら此の小輩は文字を全然知らないのである。但しそこが兒玉將軍には却つて氣に入るのだ。なまなか文字など知つてゐると、機密書などものぞいて見ようとする不心得を起さないにも限らない。だから兒玉將軍は細心にも、元々、臺灣總督府で使つてゐた明きめくらの此の小輩を、わざ／＼滿洲まで呼び寄せたのである。

語學練習ができるなら、隨分、暇つぶしにはいゝのであるが、相手が文字を知らないのでは話にならぬ。秀雄は、半分、やけ糞のやうな氣持ちで、日が暮れて、夕飯を濟ますと、すぐ毛布を引つ被つて橫になる癖がついた。

その代りに二、三時頃にはもう眼があく。それから朝になるまで、瞼をぱち／＼と瞬き通してゐることもあるし、又うまく二番寢入りの出來ることもある。

そこから偶然にも秀雄は、明け方になると何時でも、父將軍が甚だ

人生勝利の鍵は此處にある

人物を要望する聲は、いつの世も同じであらうが、今日の日本ほど切實にその必要を痛感したことは少ないであらう。

今や、國家總動員下に、男も女も子供も國をあげて此の難局を突破せんとしてゐる際、人物要望の聲は、到るところに叫ばれてゐる。英雄出でよ！　偉人出でよ！　しかし、我々の待望するものは、一人の英雄ではない、一人のムッソリーニ、ヒットラーではない。英雄の心を心とする萬人の英雄であり、ヒットラーの心を心とする千萬人のヒットラー、ムッソリーニの出現である。

凡そ、偉人傳英雄傳を讀むものゝ心には、その準備が必要だ。彼等の偉業に潛むその心をとつて我がものとする心掛けが大切だ。

彼等に學ぶべきものは何か？　ルンペンのドン底生活から起上つたヒットラーの不撓不屈の大精神、一鍛冶屋の伜から身を起したムッソリーニの大偉業、兩巨人の半生は、とつて以て我等の學ぶべき珠玉であり、人生勝利の鍵は此處にある。

ヒットラー傳　澤田謙著　四六判函入　一圓五十錢　送料十四錢

ムッソリーニ傳　澤田謙著　四六判函入　一圓五十錢　送料十四錢

東京・小石川（振替東京三九三〇）大日本雄辯會講談社

合點のゆかない、奇怪と云へば奇怪な行動をするのを、窺ひ見る機會を得たのであつた。

默つてゐると兒玉將軍が起出るのは毎朝、隨分と早いのだ。

それは明り取りの障子が、まだ白みそめもしない頃だつた。

或る時は、こんなに早くから參謀室に出かけるのだらうかと訝つてみた事があつた。しかしそれにしては參謀肩章をつける風がないのが變だつた。

或る時は、便所に立つのかなとも思つた。だがそれにしては、わざ〳〵寢卷きにしてゐるネルのピジヤマを脱いでシヤツに着換へて、きちんと軍服も着、劍も吊るのが合點がゆかぬ。

『一體、今ごろ起きて、何處へ行つて、何をするんだらう。』

幾分はそれが心配でもあつたのだが、又、父の行動に對する輕い好奇心も手傳つたのだ。

それで兒玉將軍がそつと扉を排して出てゆく後から、秀雄も氣づかれぬやうにくツ付いて行つた。

眞冬の大陸の、朝明けの寒さの、何と云ふ酷烈なことであらう。

內地でも大寒明けの頃の早朝は、氷點下何度に下つて

一番寒い時だが、こゝは滿洲も、海から離れた眞中の地點である。

頭は帽子、耳は毛皮の耳輪、胴には下着を何枚も重ね、服の上には羊の毛皮の裏のついた厚外套をきてゐる。

だから直接外氣に當るのは、睫毛と鼻先だけなのだが、そこから寒氣は劇藥を噴霧氣でゝも浴せたやう

に、ツーンと沁み通つてくる。動脈内の血もその儘に凍つて、腸が板のやうにカチ／＼に固まりはしないかと思はれる程だつた。

秀雄はよくもかうした烈寒のなかに生き物が息をしてゆくことが出來るものだと思つた程だ。

しかし父將軍は、その寒氣の事などは念頭にないものゝ如く、心持ちかゞんで、凍てついた路の上にコトリ／＼と長靴の響を落しながら歩いてゆく。

煙臺は町と云つても、不規則に人家の寄り合つた謂はゞ部落の大きいものに過ぎないのだから、暫く歩くと、漠漠たる大平野だ。

白々と胎動してゐる黎明の氣に透かして見ると、村と村との境界として潰し殘したのかと思ふやうな小高い丘があつて、その上に一軒の見すぼらしい

農家が立ち、屋根の上には亭々として一基の寒樹が聳えてゐる。兒玉將軍はその木の下に、劍をついて立ちつくした。

その眼は空の一角を見つめてゐるらしい。

中天は碧い寶石を敷いたやうに寒々と高く冴え渡つて、星の光りさへ目立たない。空のそこゝにあつた漫々たる凍雲は、動くともなく動いて、一ケ所に寄り集つて了つた。

秀雄にはその邊が眞南のやうに思はれるのだが、それは知らぬ土地へ來たゝめの方角の錯覺で、雲の寄つた所が屹度東であるに違ひない。その證據には土嚢を重ねたやうな恰好の幾重もの雲と雲との透間から黎明の光が放射狀をなして微かに洩れてゐる。よく熟したトマトの腹をレントゲンで透射したら、かうも見えようかと思ふやうな、赤い、透き徹つた光だ。

その光は見る／＼うちに領域を擴大してゆくと、一旦集まつた雲の中には、消えて無くなるのもあり、押されたやうに逃げてゆくのもあり、依然として殘る雲は、緣から光に燒かれてゐたが、何時の間にか殷紅色に燃え立つてくる。

だが擴大すると共に光は紅味を失うて金色に變つたが、間もなく大日輪が、颯爽と地平線を蹴つて現はれ出でた。

この無際涯の大陸！　而も國運を賭しつゝある此の戰時！　この時この町に初めて仰ぐ日の出の、餘りにも神々しさに、秀雄は暫く魅せられたやうになつてゐたが、ふと氣がつくと、丘の上に立つてゐた父將軍は、兩手を合せてそれに心からの默禱を捧げてゐるのであつた。

あゝ、此の莊嚴極まりなき拜殿！　全軍の安危を双肩に擔ふ責任者の、此の敬虔無比の姿！　それを見ると雷に打たれたやうにして、秀雄は自分も思はず堅氷に鎭された路の上に、いつしか跪いてゐるのであつた。

＊　＊　＊　＊

『お父樣。』

不意に、かう、聲をかけられた時には、兒玉將軍も一寸吃驚したやうであつた。

『朝日を拜んで居らつしやるのですか。』

『おゝ。』

と答へたが、拙いところを見られたなと云ふ表情であつた。

『だが、こんな事、誰にも云ふな。』

『はい。』

將軍は半ば云ひわけでもするやうに、

『お前らは未だ若いから、信神氣と云ふものがない。いや、實はわしも今日まで、その、宗敎心と云ふものは些とも無かつたのぢやがな。倍に近い大敵を控へて、決戰に臨んで見ると、勝敗が氣に掛つて夜もおち／＼寢られぬ。日一日とロシヤは兵數が增すので、戰爭が長びけば長びく程、こちらの勝利は覺束なくなるのだ。と云つて、放つてはおけぬから、この間に於てわが輩の考へ得べき事、又わが國の現在の實力でなし得べきことは、みんな遺漏なくつくしつゝある。もう此れ以上のことは吾々の力にあまるのだ。』

『御尤もです。』

秀雄は深くうなづいた。

『人事をつくして天命を待つと云ふのはこゝだ。とは分つてゐても悟道に入らぬ凡夫の吾輩では、どうも心配で、心細くて、何かに縋り、何かに祈らずにはをられぬ。だが、今も云ふ無宗教の事とて、祈らうにも祈る對象が見つからないのだ。それでなあ、先づ眼につく限りのものでは、太陽以上のものは無ささうだから、毎朝こつそりと此處へ來ては、かうして日の出に國運を祈つてゐる始末さ。』

秀雄は又うなづいた。

『これも吾輩の發明ではない。負うた子に教へられると云ふことがあるが、この前の遼陽戰の時に兵は朝になると、銃を置いて、お天たう樣を拜んでゐた。その姿が沁みるやうに俺の眼に殘つてゐたのが、この絶體絶命の場合、ふッと思出せてなあ、よし、俺も一ちやう兵に倣つて、日の出を拜まうと云ふ氣になつたのだ。』

『僕は又、あんまり毎朝の事だから、不思議にして、今朝はお跡をつけて來たのです。』

『それはいゝが、さきも云つた通りみんなには默つてをつてくれよ。と云ふのは何も疚しい事をしてゐるのを、隱すわけでは無いのだが、全軍が一番の賴りにしてゐる總參謀長が、他力に縋つてゐるやうな事ではと思つて兵が心配しちやいかんからなあ。戰線は廣くて見廻ることは出來ず、戰況も報告も、司令部からの命令も、電話線一本が命の綱かと思ふと、實際はとても心細くて堪つたものではないのだがね、しかしこれは人には云はれんのだ。モルトケ將軍がなあ、あの通りドイツ皇帝をも一目おかした勝氣の人で、戰場へ乘出しては、自分で電信機に向つて、報告も受ければカチ〳〵と命令も發する人だつたのに、萬策つきると、電信機の前に跪いては神樣に祈つてをつたと云ふ話をメッケル將軍から聞いたことがあつたが、今の俺の氣持が丁度それなのだ。上の空で耳にしてゐた話も、自分がその同じ場に臨んでみると、つく〴〵と思ひ當ることがあるよ。』

夜は全く明けはなれて、朝の黄金慈光は、父子の影を氷原の上に長く曳いた。木の梢の巢からは、鵲が慌しく翼を揮つて、飛び立つ、そこ此處の陣營から食事の喇叭が勇ましく響き渡つた。

『なる程、奉天戰はそんなに危ない、そんな重大な一戰か。』

と思つて、秀雄は今更のやうに父の顏を見直した。（つゞく）

新しい樣式の傳記文學として、大變な評判です。又、これこそ、戰時下の日本人必讀の名小說、この一篇こそ誰にでも、ぜひ讀んで貰ひたいものだといふやうな、推稱の辭が山積してゐます。次號は、ますます面白くなります。たのしみにお待ち下さい。

▲ニキビ吹出物の方に急告

ニキビ吹出物でお困りの方には、何よりも『にきびとり美顏水』をお勸めします。ニキビ吹出物に一等の良藥として大評判の藥です

▲蚤蚊南京虫家ダニ等の毒虫でカユい時

さういふ時にこの藥を一寸つけても不思議な程よく効きます

▲この藥は美容藥としても非常に良く入浴後や洗面後等に盛んに賞用されてゐます（定價四十錢・六十錢・一圓廿錢）

愛兒を健康にした家庭訪問記

僅かの費用で……

消化不良と寢汗の手當に成功

最近諸物價は昂騰の一途を辿り、どちらの御家庭でも入費が嵩んで參りましたので、出來るだけ生活費を切りつめなければならなくなりました。そればかりでなく國家總動員の實を擧げるため貯蓄して、國家を富ましめる事も銃後の國民の義務でありますから、家計上の無駄な支出は凡て防止したいものであります。無駄と云へば病氣する事程大きい無駄はありませんが、とりわけ虛弱でいつも病氣の絶えないお子樣程お金のかゝつて心配の要るものはありますまい。

生れた時は六百匁

こゝに御紹介する東京市豐島區日の出町一丁目の田沼重知樣のお宅でも、初めてお生になりました俊子樣は、昭和十一年八月の御誕生ですが、出生當時は六百匁しかありませんでした。標準體重より遙かに少いのですからお丈夫な筈がありません。お母樣のお乳は相當にあり、呑むことはよくお呑みになつたさうですが、お乳そのまゝの色をした消化不良の便が下り續けるのでございました。醫師の診察では、矢張り胃腸、特に腸が弱いと云はれたさうですが、心配はそれだけではありませんでした。

『生後二ケ月位から寢汗をかき出しました。厚着をさせないで冷しくしてやつても枕がびつしより濡れるのです。寢汗と云へば結核にかゝると盜汗をかくと聞いて居りましたので若しやさうではないかと大變氣にかゝりました。』とお父樣の重知樣は語られましたが、

發育のよくない腺病質の赤ちやんが幾度も寢汗をかくのは、結核に犯された初期の場合と、ひどく衰弱した場合とあつて、そのどちらかといふことは醫師の精密な診斷による外はありませんが、何れにせよ警戒を要します。手當としては榮養を昂めることで、それには先づ胃腸を丈夫にして、お乳の榮養素を十分に吸收出來る樣に、消化を活潑にすることが第一であります。

安くて效果は豫想以上

田沼樣ではどんな手當をされたかと申しま

寫眞は田沼俊子様とお母様(お宅にて撮影)

すと、御主人のお勤め先で同僚の方が「錠劑わかもと」がよいといふことをお聞きになり早速お試めしになりました。

『一度に二粒づつやりましたが、豫想以上に効いて、程なく消化不良を起さなくなりました。それで尙も服用を續け、少し肥えて來たなと思はれる頃には自然に寢汗も止つてしまひました。それ以來「錠劑わかもと」をずつと缺かしたことはありませんが、腹こわしもしませんし、風邪も引かず、それで一瓶で五六十日分ありますから、全く安いものだと思ひましたね。』

と感心されるお父様の側からお母様も、

『後が近かつたものですから、お乳が出なくなり、中途からミルクにしました。母乳からミルクに換へると、とかく故障を起しがちなものださうでございますが、俊子にはそれが少しもありませんので、きつと「錠劑わかもと」がよかつたのだと思ひました。今は一人子になりましたので、いろんなものを澤山食べます。以前のまゝでは毎日腹こわしをすることでせうと、はら／＼させられますが「錠劑わかもと」は甘いお菓子より好きで、幾粒でも欲しがり、よく服みますので本當に手がいらなくなりました。もう標準體重より遙かに重いかと思はれます。』

とあんよを出してお見せになりましたが、肥え方もブク／＼ではなく肉のしまつた固肥えでございました。次のお子様は發育不良のため、生後間もなく亡くなられたさうでございますが、お母様が御姙娠中から「錠劑わかもと」を服んでゐらつしやいましたら、發育よく元氣にお育ちになつたことゝ惜しまれてなりません。

附記 本劑は東京市芝公園、わかもと本舗榮養と育兒の會(振替東京一七〇〇番)から廿五日分一圓六十錢、八十三日分五圓の廉價にて頒布されつゝあり、全國藥店にて取次ぐも、直接の註文に對しては、内地のみ送料本會負擔にて一瓶にても急送されます。

土俵の報恩

鈴木彦次郎

鰭崎英朋畫

戀すればこそ

『千年關、ぢア、行つてくるぜ。――春場所も程

ないこつたし、早う元氣になつてくれよ。』

兄弟弟子の磯嵐が、懇ろな言葉を殘して、花相撲へ出掛けていつてから、もう一刻あまり、――部屋の表二階に、夜着をかぶつて寢てゐた千年川音松、ふと首をもたげて、ぢいつと小耳をすました。

花相撲といひながら、今日は、親方雷權太夫が勸進元の深川八幡の興行。――だから、若い者たちも、みな出掛けたものと見え、廣い部屋うちは、ことりとも物音がせぬ。

(しめた!)

千年川は、むつくり起き直つた。(――病氣といつて、今日の相撲を休み、大恩ある親方へ義理を缺いたのも、この戀を確めたいばつかり……親方、許しておくんなせえ)

心のうちで、親方へ詫びをしながら、手早く亂れた髮をなでつけ、着物を着換へた千年川、足音も忍ばせて階子段を下りると、何事ぞ、部屋のきびしい掟も破つて、奥への渡り廊下を、こつそり踏んだ。

文政二年三月初旬の晝四ッ時(午前十時)廊下を突き當つて左に折れると、明るい春の陽光を障子いつぱいに受けた小座敷――その前に、千年川は、胸ときめかして、立ちすくんだ。

障子越しにも、ほのかに鼻をなぶる艶めかしい匂ひ……。

(おお、やつぱり、ゐたな)

ほつと、胸が開けた感じで、千年川は、思ひ切つて、小聲で呼んでみた。

『おふねさん……おふねさん……』

『えッ、ど、どなた?』

『わしです。千年川でさあ。』

云ひざま、さらり、障子を開けて、一歩踏み入れたおふねの居間。パッタリ、瞳の合つた途端に、

『あッ、千年關!――』

云つたまま、彼女は、なぜか、袂に顔を押し當てて、さめざめと泣いた。

――おふねは、今年十八。親方雷權太夫の一人娘だが、先年亡くなつた母親に似てか、朝霧にぽつかり蕾を開いた白百合のやうな美しさ。だから、元來、鄕士の家に生れ、相撲社會に珍しい堅仁といはれる雷親方は、部屋の弟子どもにも、無斷で奥へ立ち入ることを、かたく禁じてゐるほど、娘の身の上には氣を配つてゐた。

だが、戀は曲者。――おふねは、いつか、父の目をぬすんで、去年幕へ入つた部屋切つての有望力士千年川と、甘い語らひを樂しむ身となつた。

しかし、二人はあくまでも淸い戀、いづれ、千年川が三役にでもなつたら、正式に親方の許しを得て、――と、その日を夢に描いて、お互ひ、かたく身を謹んでゐた。

だのに、今度の巡業から歸つて以來、――おふねの素振りは

がらり變つた。こつそり逢ふ瀬を打ち合はさうとしても、顏も見せねば返事もない。てんで、彼を避けようとしてゐる……。

(なぜだらう?)

千年川には、更に見當がつかなかつた。それ故、一層、腹も立つ。佗しくもなる……。

今場所、前頭二枚目に躍進した五尺八寸五分二十九貫の新鋭も、げつそり、頰がこけるほど、思ひ惱んだのである。そのあげく、禁制も犯して來てみれば、女は、物も云はずに、泣きじやくるばかり……。

哀しき遁走

『おふねさん、何を泣くんだ。お前の近頃の素振りは、おれにアとんと合點がいかねえ、誰か好きな男でもできたのか。』

『そ、そんなことが――』

『いいや、何かあるに違えねえ。昨日も、ぜひ逢ひたいと思つて、若い者にこつそり手紙を屆けさせたのに、何の返事もないぢやないか。一體、お前はあの手紙を見てくれたのか。』

『ええ、確かに、小天龍さんから受取つたけれど……』

『それ見ねえ。それでゐて、未だに梨のつぶてだ。ついこの正月、巡業に出るまでは、そんなお前ぢやなかつた筈だが、――おふねさん、お前は、あれほどのかたい約束を、反古にするつもりかい。』

『ま、まさか――』

『ええツ、泣け、泣けツ。そつちア泣いて濟ますつもりだらうが、おれの身にもなつてみろ、チョツ、おふねさん、もうおれに飽きが來たのなら、はつきり、さう云つてくれ。おらあ、生ま殺しにされちアたまらねえ。』

『千年關! 何で、あたしが生ま殺しなんて――おふねの心は、生涯變りませぬ。』

『そんなら、なぜ返事をくれないのだ。どうして、逃げ隱れするんだ?』

『さあ、そ、それは――』

『それ、その樣子が、つまり、おれを嫌ひになつた證據ぢやないか。』

『いえ、決して、そんなことはないんだけど、――千年關、實は、これには、深い理由がありますの。』

『何ツ、理由がある? どんな理由だ。さあ、その理由といふのをきかう。』

『でも、その理由は――』

云ひ兼ねて、おふねは、がつくり崩折れて、泣きむせんだ。

千年川の五體は、わなわなとふるへてゐる。彼は、屹ツと女を睨め下した。

『チェツ、何が悲しいのだ。何が恨めしくて泣くんだ。さ、その理由をきかう。――ええツ、云へねえのか。』

『いえ、云ひます……』

『ぢア、早く云つてみろ。』

『千年關！ あ、あたしは――』

『うむ、どうしたんだ。』

『おふねは……もう、關取とは、一緒になれぬ身體――』

『えッ！』

『巡業から、一足早く歸つてきた大岬關の賴みとかで、父にむりやり說き落されて――おふねは、弱い女でした。』

『な、何だと？』

みなまで聞かずに叫んだ千年川、必死の思ひで取りすがるおふねを、邪慳に突きのけて、あまりの口惜しさに、ぐんと、一蹴り足蹴にした。

『千年關！ あたしア蹴られても本望……もつと蹴つておくんなさい。』

『何を、不貞腐れめがッ。』

いきり立つた千年川が、尚ほも、無念に燃える鐵拳を加へようとした刹那、後から、バタ〳〵ッ！ と迫る足音！

『千年！ 何をする。』

『誰だ。止め立てするなッ。』

と、千年川が振り上げた拳をそのままにして、ぐいと振り向けば、今日の花相撲も休んだのか、威丈高に立ちはだかつた大岬。

『誰でもねえ、おふねと夫婦約束した大岬丈右衛門だ。』

大岬は、現在小結、雷部屋の部屋頭だ。だが、かうなつては、兄弟子もくそもない。

『何ッ、何ッ！ もう一度云つてみろ。』

『聞きてえなら何度でも云つてやる。このおふねさんは、おれとかたい夫婦約束した仲――』

途端に、その言葉を聞きつけて、がばと、飛び起きたおふねは、我を忘れて大岬の前に立ちふさがり、

『あれッ、大岬關！ そんなことを――』

と、遮るのを、大岬は、構はず、大聲でわめき立てた。

『千年！ よく聞いておけ。おふねは、おれの女房同樣の女だから、この後、指一本でもさしたら、承知しねえぞ。』

『大岬！』

千年川は、はじめて夢から覺めたやうに沈痛な聲で叫んだ。

『何だ。』

『お前は、さつきから、おふねさんと夫婦約束したと、何度も云ふが、それアおふねさんも承知の上か、いやさ、親方も、それを御承知なのか？』

『ハッハハ……むろんのこつた。』

『いえ千年關！ それは……それは……』

たまりかねて、おふねは、一聲叫んだが、餘りのことに氣を失つて、その場にバッタリ昏倒してしまつた。

——その日から、おふねは、どつと床に就いた。もちろん、誰も眞の病源を知らぬ。彼女は、ひとり、胸に深い憂ひを秘めて、割れるやうな頭の痛みに身を悶えた。

そして、千年川は？——戀を失つた男は、荒野をわたる風よりも侘しい。彼は、勝ち越せば、宿願の三役にも昇らうといふ大事な春場所を前に、その夜限り、ふつと、部屋から姿をかき消した。懐しい江戸相撲、思ひ出深い雷部屋を脱走したのである。

『ばかな奴だ！　折角、目をかけてやつたのに、恩を知らぬにも程がある。』

雷は、口を極めて罵りながらも、老いの眼を、しきりに、しばたたいてゐた。

まして、それを洩れ聞いた時のおふねの胸は、どんなであつたらう？　——思ひ迫つて、彼女は、幾度か、自殺を企てた。

けれど、おふねは、やつぱり、戀よりも、父の心を氣遣ふ忍從の女だつた。

枕邊に附き添つては、氣遣はしげに白い眉をひそめる父の心——それを思ふ時、彼女は、一切の感情を犠牲にして、ただ父のために、生きてゐようと

決心した——。

女嫌ひの音松兄哥

相撲取には
どこがようて惚
れた
稽古歸りの
亂れ髪——

『へん、おつな唄を歌ひやがるなあ。』

『おい／＼、竹ツ。おだてちアいけねえぜ。お銀の奴、いい氣になつて惚氣るぢやねえか。』

『おや、金さん、惚氣ちアいけないのかえ。』

『あたりめえよ。どこがようて惚れた——なんて、おめえ、今度集つてきた相撲取のうちに、情夫でもあるんだらう。』

『何だつて、——金さんも察しが悪い人さねえ。ああ、じれつたい。』

女の瞳は、仇ッぽく、床の間のはうへ、光つた。

『な、なあるほど、こいつア、おれが野暮だつた。音兄哥！あれ、お銀が唄にまで歌つて、じれつたがつてますぜ。何とかしてやんなせえな。』

『ハッハハ……、ところが、生憎、おらあ、女子は大の苦手でな。』

音兄哥と呼ばれた、でつぷり肥つた、色白な若い男、吐き出すやうに、さう云つて、手にした盃を、ぐいとあふる。

『あれだもの、こつちア、尚更、思ひが増すばかりさ。ホッホホ……』

江戸を流れて、こゝ野州烏山の町はづれに、ちよいとした小料理屋を出してるお銀といふ年増女、やけに甲高く笑つて、男の顔を流し目に睨んだ。

『だがな、お銀！ 兄貴の女嫌えときたら、手管でもねえし、見得でもねえ。正眞正銘、虫が好かぬといふのだから、呆れ返るばかりさ。何しろ、江戸相撲にゐた時から、名代なもんだつていふからなあ。』

『竹ツ、止せよ。また下らねえことを云ひやがる。』

『あツ、いけねえ。兄貴の前で、江戸相撲の話ア禁物だつけ。』

と、呟いた竹造、首をすくめて、苦笑ひした。

女嫌ひの音松兄哥。――これぞ、誰あらう、千年川音松の變り果てた姿だ。

戀を失つた千年川、つくづく相撲社會にゐるのがいやになつたので、かねてから贔屓にしてくれる野州烏山の紋吉親分の溫い懷中に、はるばる飛び込んだのだ。

千年川は『いづれ、お話する時もござんせうが、今は、どうか、何にもきかずに――』と、云つたきり。紋吉親分も、だまつて家においたまゝ、もう足掛け四年目の初秋。――此頃では、烏山一家の厄介者、お相撲上りの音松といへば、野州一圓に、相當睨みの利く顔になつた。

しかも、音松、相撲の世界はいやになつたが、相撲そのものは、相變らず大好きで、親分の家の裏庭に、土俵をつくつて、毎朝、若い者相手に稽古を勵むばかりか、時には、自分が大關になつて、近郷近在を打つて廻つてゐた。

それが昂じて、折からの鎭守の祭禮をあて込み、上州野州の名だたる草相撲が六組も集り、その境内で、花々しく三日間夜相撲を打つことになつた初日が、恰度今夜。

朝ツから萬端の世話を燒いて、どうにか開場の段取りをつけた音松、どうせ宵の中は素人衆の取組なので、今日一日追ひ廻した若い者たちをねぎらひかたがた、ちよいと息拔きに、お銀の二階で一杯飲んでゐたところだ――。

『ホツホホ……、竹さん、そんなにへこんでないで、まあ一杯おほしなさいよ。だが、音さんも妙だねえ。折角、江戸相撲の幕内まで昇りながら、何だつて、こんな烏山くんだりに――』

『フン、利いた風なことを云ふなよ、お銀！ 戀は思案の外かいな――ツて、女ほど、恐しいものはねえよ。』

『あれまあ、音さん！ その呼吸！ その呼吸！』

『チエツ、ばかも、てえげえにしろ。』

『アツハヽ……、お銀にかゝつちア、音兄哥も代なしだぜ。』

などと、一座が笑ひ興じてゐた矢先き、表階子を、バタ／＼ツと上つてくる足音！

『おい、誰だい？』

ぢろり、音松が、鋭い視線を向けた途端に、上り口へ、ひよいと面を突き出した源といふ若い者。

『兄貴！ 大變だ／＼。相撲場荒しがやつてきましたぜ。』

『何ツ、相撲場荒しだと？ ――何人だ。』

『いえ、一人でござんすが、いやもう、身體もでかいし、業も早く、

えらい強え奴でさあ。上州方の大關をはじめ、指折りの連中を、苦もなく五人抜きやがつて、褒美の酒をくらひながら、もつと強え奴アゐねえのか——などと、大口を叩いてゐる始末、だが、生憎と、こつちア親分が、甥御の急病とかで、ついさつき、隣村までいつた留守……どうでも、音兄哥に來て貰はにア、をさまりがつきませんや。』

『さうか、親分は隣村へおいでなすつたのか。さうとも知らず、呑氣に酒など飮んでゐて悪かつたなあ。——ああ、いいとも、早速、行かう。なあに、どんな強え奴だつて、どうせ、田舍廻りの相撲取、おれが出れア威張らしておかねえ。』

大きくうなづいた音松、ぐつと一杯飮みほすと、元氣一杯、相撲小屋さして驅け付けた。

意外な相手

『わ、わ、わあーッ。』

あたりの森にこだまして、高鳴る鬨の聲！　何せ、勸進元が、紋吉親分、世話役が、いま賣出しの音松兄哥といふので、境內一杯に立て廻した掛小屋も、少しの隙もないほどの大入り上景氣。

折から、土俵の上では、またも、五人抜き。——そいつを、ちらッと、横目で見ながら、急いで、世話人詰所へやつてきた音松。

『おい、相撲場荒しが現はれたと？』

『やあ、音松兄哥。よくきてくれた。何しろ、おれたちにア手に負へねえ代物でな。』

『そんなに強えのか。一體、そいつアどこにゐるんだい。』

『それがな、いきなり、最初に五人抜きやがると、西の棧敷に大あぐらかいて、つい今し方まで、小面憎く笑ひながら、土俵を眺めてゐたつけが、急に、どつかへ姿を消しちやつたぜ。何でも、あれア、パリの本職らしいぞ。』

『その本職が、何を目あてに、草相撲の五人抜きへ飛び出るんだ。いやな野郎もゐたもんだ。まさか、そいつ、もう歸つちまつたんぢやなからうな。』

『いや、大丈夫。お相撲上りの音松ッて奴アゐねえのか、そいつと一番とつてみてえ——なんて、云つてやがつたからね。』

『なにッ、おれと、とつてみてえ？——そいつア面白え。よしッ、一番、五人抜きへ出て、奴をおびき出してやらう。』

云ひざま、裸體になつた音松、締込み姿も凛々しく、のつし〳〵と東溜へ這入つてゆく。

四隅に高張り提灯が、赤々と點された土俵の上では、今しも、栃木の關脇太平山が、三人を抜いたところ。

『よし〳〵、今度アおれだ。』

聲もろとも、土俵に上つた音松、足掛け四年、本場所の土俵を退いてゐても、日頃鍛へてゐた肉は締つて隆々とそびえ、相變らず、二十五六貫はたつぷりある樣子、名乘りは、もと通り、千年川だ。

『チョッ、これア大敵だ。』

舌打ちした太平山、やにはに、激しく突掛けるのを、悠々受け流しながら、ひよいと左を引張り込むなり、腰を入れて、ぐいと得意の小手投を打てば、もろくも、相手は正面溜へけし飛んだ。

つゞく三人も、突出し、蹴返し、泉川――と苦もなく退治て、愈々五人目。

『――これにて、東方千年川、四番勝ちにござります。』

行司が、高々と觸れ廻つた瞬間、

『おお、五人目はおれだ。』

叫んで、土俵に飛び上つたのは、井桁の手拭ひで、面を深ぶかと包んだ飛入りの力士、

『やあい、虎熊ア、手拭ひをとれッ。』

『千年川ア、今度の相手は强えぞ。油斷なくぶん投げてくれーい。』

『頼むぞ、千年川ア。おーい、虎熊ア、手拭ひかぶつて、相撲とる奴アあるかーい。』

四方の見物は、聲をそろへて、千年川に應援するとともに、虎熊の手拭ひ姿を、しきりに攻撃する。

だが、虎熊は、依然、默々として、手拭ひをかぶつたまゝ、ぢりり身構へた。――これぞ、さつき五人拔いた相撲場荒しと噂される男。なるほど、身長こそ、五尺五六寸だが、便々たる太鼓腹、それに、がつしりしまつた肉付きを見ても、どうやら、大相撲でも、立派な關取格の身體だ。やがて――

『ヨウッ。』

行司の軍配一閃するや、諸聲でぶつかつた兩力士、暫くは、激しく突張り合つてゐたが、次第に突き勝つてきた千年川、素早く得意の左を差すと、ぢり〳〵ぢり〳〵寄り進んだ。途端に、左から輕く掬投を見せて廻り込んだ虎熊、やにはに、太鼓腹であふりつつ、寄り返さんとする刹那、とつさに體を開いて『エイッ。』とばかり、鋭く打つた千年川十八番の小手投に、さしもの虎熊、もんどり打つて、土俵の砂にめり込めば、

『わあーッ！』

『何でえ、虎熊！　それでも、相撲場荒しか。ざまアねえや。』

と、近郷近在の衆、躍り上つての大歡聲。――折から、倒れた途端に、舞ひ落ちた手拭ひ拾つてかぶり直さうとした虎熊の顔を、ちらと覗き込んだ千年川、ぎよつと瞳をみはると、思はず、聲も懷しく、

『おお、お前は、確かに磯嵐、ど、どうして、こんなところへ――』

『やッ、見付けられたか。千年關！　これにア、理由がある。おらあお前を訪ねて來たんだ。いづれ、あとでな――』

云ふなり、以前の兄弟弟子磯嵐は、明るい微笑を浮べながら、仕度部屋へ引き揚げた。

『五人拔、千年川アア。』

行司の高らかな勝名乘り。再び、どつと湧き起る滿場の大喝采。――だが、千年川は、依然、いぶかしげに、しきりと、小首を捻つてゐる……。

傷はしや老師匠

『千年關、お前は、やつぱり强えなあ。四年七場所、本場所を拔けア、どんな强えお前でも、ちつとはもろくなつてるかと思ひの外、さつきの小手投なんざア、前より一段と冴えてるぢやねえか。』

初日の晩も無事に濟み、久しぶりに肩をそろへて掛小屋を出た吾松

に磯嵐。親分の家の裏二階に、他人も交へず、差向ひに、どつかと胡坐をかいて、まづ一杯飲み交はすと、またも、磯嵐は、ぢいつと音松の顏を見入りながら、その變らぬ強味に舌をまくのだつた。

『おい〳〵、大概にしねえか。汗が出るぜ。さつきから、お前、何遍それを云ふんだい。』

『いや、嬉しいから何度も云ふのさ。何しろ、これで、おれたちの望みも、半ばは達したからな。』

『えツ、望み？――』

『うむ、千年關！　實ア、おれは、お前の強味を確めた上で、折入つて、頼みてえことがあつてな。わざわざ、烏山までやつてきたんだ。』

『な、何だい、その、折入つての頼みと云ふのは？――』

だしぬけに切り出されて、音松、ぢろり、相手の顏を見守つた。

『千年關！　お前は、あの大岬が、おふねさんの婿になつたことア知つてるだらうな。』

『ああ、風のたよりで、小耳に聞いた。だが、磯嵐！　そんな話は、よして貰ひてえな。』

胸の古疵がうづくのを覺えて、音松は、苦々しげに首を振つた。

『おお、それア分つてる。おれだけア、あの頃から、ちやんと感付いてゐた。だが、話の順序だ。聞いてくれツ。あれは四年昔の春場所前だつたな。そして、その年の梅雨時に、親方が中氣で倒れたことも知つてるか。』

『それも、人傳に聞いて、とんだことだとびつくりした。あれほど、お世話になつてゐながら、お見舞ひにも伺へねえおれの不始末が情けなくなつたよ。』

『ぢア、その後の部屋の樣子も、お前は知つてるのかい？』

『いいや、それア、ちつとも知らねえが、どうせ、大岬が親方代りになつて、昔に變らず榮えてゐるだらうよ。親方にア氣に入りの大岬、夫婦とも、さぞ親方を大事にして――』

『ところが、それア大違ひだ！　あの頃からの弟子なんざア、今は一人もゐなからう。大岬の奴が、親方から株を讓られて、二枚鑑札になると間もなく、みんな、てんでんばらばらさ。小綠、龍ケ峰、櫻川なんてえ古いところは、そろつて廢めるし、若い奴らは、めいめい、氣の合つた親方の世話になつてらあ、現に、かういふおれなども、いまは伊勢ノ海親方ンとこの客分さ。』

『えツ、そ、それアどうした理由でだ。』

『どうしたもかうしたもねえ。大岬の奴、すつかり親方氣取りで、勝手氣儘に威張り散らしやがるから、誰だつていやにならあな。』

『むう――』

『それもいい、威張るだけなら、まだも我慢ができる。ところが、あの野郎、中氣の親方を邪魔にしやがつて、まるで食客みてえな扱ひをしてるんだ。身體が臭えとかいつて、あの稽古場裏の薄暗え部屋に寢かしてる。とても、見てゐられたもんぢやねえ。』

『な、何ッ、すると、あの女房まで一緒になつてか。』

『いいや、おふねさんは、そんな女ぢやねえ。だが、親方の身體が利かなくなつた現在ぢアどうすることもできめえ。もともと、大岬のペテンにひつかかつた親方に、むりやり口說き落されて、一緒になつた

だけに、夫婦仲が面白くいく筈はねえ。おまけに、とかく、病み勝ちでゐなさるもんだから、大岬の奴め、昔のことも忘れやがつて、旅先きはもちろん、江戸に歸つてきても、近所に安ッぽい女を圍ひ、四六時入りびたつてゐる始末、親方はな、廻らぬ舌で、おふねさんに——おれが悪かつた。おれがつまらねえ義理にひつかかつたばかりに、お前にも千年川にも不憫なことをしたつて、愚痴をこぼしてゐなさるさうだ。大岬がたくらんだペテンといふのは、ほら、お前も知つてる先代のかみさんを、奴が抱き込んで、あの人の口から、おふねさんの婿は先代と同じ越後生れの大岬にきめてくれ。——と頼み込ませたものらしい。それで、先代思ひの親方は、義理にからまれて、到頭、大岬の奴に、うむ！と、承知をしたッて話だ。秋田に生れたばつかりに、お前は、妙なことになつちまつたんだが、いまぢア、親方も、つくづく後悔してゐなさるぜ。——千年關！このだんだんの話をきいて、何と思ふ。』

『お傷はしいこつた。情けねえこつた。』

音松は、暗涙を浮べて、沈痛に云つた。

『そこでだ、お前に頼みがある。』

磯嵐は、膝を乗り出して『いまのままでいつちア、相撲道に由緒ある雷部屋が、めちやめちやになる。それに、親方もおふねさんも、一層、みじめなことになられるだらう。』

『むう。——だが、その有樣を、第一、お前はじめ昔の弟子たちが、なぜ、だまつて見てるんだ。殊に、お前は、伊勢ノ海親方の厄介になつてるなら西方、本場所では、幸ひ奴と顔が合ふ。その時、何で、奴を土俵に叩きつけ、腰骨でも折つてやらねえのか。』

激憤に驅られた音松は、眞赤になつて問ひ詰めた。

『そ、それが出來るなら、お前に頼まねえ。だが、おれや雷山ぢア、奴を叩き潰して、雷部屋を盛り立てる器量がない。それに、口惜しいことだが、今夜の手並みでも分るだらう。おれにア、いま關脇でパリッイてる大岬に、どうもがいても勝てつこがねえ。』

『——』

『だから、千年關！おらあ、お前に頼むんだ。もと雷部屋の弟子どもの中で、部屋を守り立てる器量といひ、土俵の上の强味といひ、立派に大岬を凌ぐことが出來るのは、お前一人なんだ。それに、お前の力も、今夜ではつきり分つた。頼む、千年關！親方の爲だ。部屋の爲だ！もう一度、江戸相撲になつてくれ。おらあ、雷山はじめ一門の主立つた連中と相談した上で、お前を引張り出しに、ここまで訪ねてきたんだぞ。』

『うむ、よく分つた。おれは、親方の恩も忘れぬ。部屋のことも心配だ。しかし、一旦見切つた江戸相撲に歸ることだけア、少し考へさせてくれ。』

音松は、血を吐く思ひで、云ひ放つた。だが、磯嵐は、唇をふるはして、いら立つた。

『考へる？——おい、千年關！何を考へるんだ。お前は、腹の底まで、遊び人になつたのか。』

『何の、磯嵐！おれだつて男だ。さう頼まれちア後へ退かれねえが、ただ戀の遺恨なんて思はれると情けねえからなあ。』

と、思はず、吐息をついた途端に、いきなり、間の襖が、ガラリ開いた。

『だ、誰だ！』

『磯嵐關！　立ち聽きした罪は、許しておくんなせえ。』

と、詫びながら這入つてきたのは、留守な筈だつた紋吉親分、まづ磯嵐に挨拶してから、改めて、音松に向ひ、

『音松――ぢやなかつた千年關！　男と見込んで頼まれたからにア、何と思はれようと、世間の思惑を考へるもんぢアあるめえ。たとへ、世間ぢア、戀の遺恨と云はば云へ、お前が正しい氣持なら、それでいいぢやないか。』

さう云ひ放つた一言を、默念として聞き入つてゐた音松、この時、大きくうなづいて、

『親分、忝けねえッ、いまのお言葉で、あつしア目が覺めた。磯嵐！引き受けた。明日にも、江戸をさして、出掛けようぜ。』

と、きつぱり云ひ切つた彼の双眸は、悲壯な決意に、燃え上つてゐた。

更生の秋

久しぶりで見る江戸の秋。――千年川にとつては、すべて、懷しい限りである。

だが、現在の彼は、まづ以て、圓滿に會所へ歸參することが肝腎だ。だから、磯嵐ともひと先づ別れて、紋吉に紹介を受けた新場の卯之助親分の許に身を寄せた。

卯之助は、紋吉と兄弟分の間柄、――しかも、會所とは、先年、力士連の紛擾をまとめてやつた關係から、大した睨みの利く親分だ。

その親分が同道して、會所へ詫びを入れたから、親方連も、問題のあらう筈はない。雷の名義を繼ぐ大岬の文句も一蹴して、すぐさま千年川は伊勢ノ海親方預けとなり、來たる秋場所には、幕尻格として登場を許された。

幕内格なら、幸ひ勝ちつゞけさへすれア、樂日近くには、きつと關脇大岬とも、顏が合ふ。（新場の親分は、ぬかりなく、筆頭の玉垣と、この顏合せを約束した）――千年川は、躍り上つて、意外な幸運を喜ぶとともに、連日、必死になつて、伊勢ノ海部屋の稽古土俵の砂にまみれた。

そのうちにも、雷部屋の樣子が、ちらちらと、耳に入つてくる。

――話にもならぬ亂脈だ。

親方は、稽古場裏の薄汚い部屋に寢たつきり、しかも、その世話はこれまた、つもる苦勞で、寢たり起きたりの病身なおふねが、かかりつきりで見てゐる。

だのに、大岬は、巡業も中途で歸つてきてをりながら、更に、親方の面倒を見ようともせず、近所に圍つてゐる妾の許に、日夜入りびたつてるといふ噂。

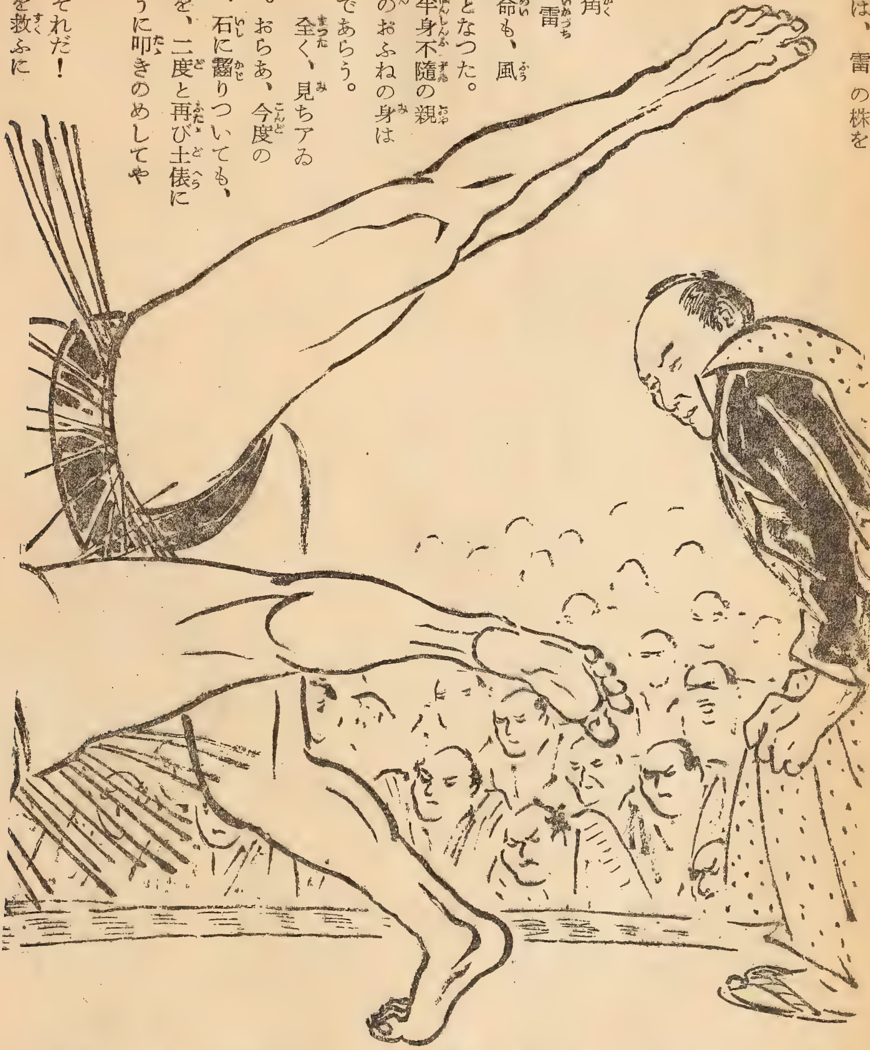
こんな有樣だから、親方が丈夫な頃は、いつも、關取衆が八九人、それ以下の弟子どもが四五十人もゐて、角界隨一といはれた部屋も、いまは全くさびれ果てて、僅か三段目以下の若い者が五六人ゐるだけである。

それに、かさむ借金に苦しんでか、大岬は、雷の株を賣りに出してゐるといふ話。――

いまや、角道の名家雷部屋の運命も、風前の灯となつた。まして、半身不隨の親方や病身のおふねの身はどうなるであらう。

『磯嵐！　全く、見ちアゐられねえ。おらあ、今度の場所にア、石に齧りついても、大岬の奴を、二度と再び土俵に立てぬやうに叩きのめしてやるぞ。』

『おお、それだ！　雷部屋を救ふに



は、大岬の奴を、江戸相撲から、おつぽり出すほかに道はねえ。千年關！　その意氣込みで、一番、賴むぞ。』

『うむ、おれも、はつきり覺悟がきまつたわい。』

雷部屋の亡狀をきくにつけ、千年川の鬪志は愈ゝ熾烈に燃えさかつた。

伊勢ノ海部屋だけでは、滿足がいかず、友綱、粂川、藤島――と、西方の各部屋をめぐつて、火を噴く朝稽古！

しかし、稽古が濟むと、同志の磯嵐、雷山を相手に大岬の取口について、細かな研究！

その涙ぐましい苦鬪のうちに、早くも、筑波颪が、枯葉をまく十一月初旬になつた。

愈〻、待ちに待つた秋場所の初日は、間近に迫つたのである。

噫！この義戦

かくて、足掛け四年ぶりで、懷しい回向院の土俵を踏んだ千年川は、さすが必勝の意氣込みもすさまじく、初日以來、對敵を連破して、みんごと、八日目まで勝ちッ放し。——さればこそ、會所でも、約束通り、九日目の結び相撲の前一番に、破格ながら、『千年川對大岬』の取組を觸れ出した。

だが、一方、大岬も、千年川の出現に、緊褌一番したせゐか、近來になく土俵も冴えて、これまた六勝一敗一分の素晴らしい好成績。——好角家の豫想では、大岬六分、千年川四分といふのが通り相場だつた。

——さて、翌くれば、愈〻九日目、折よく、朝來、吹き出した風は、低く垂れた雲を吹き拂ひ、きれいに晴れた上天氣。今日を晴れの千年川對大岬の無二の好取組にあふられて、押すな押すなと、木戸口さして寄せる群衆は、すでに黑山のやう！

もう正午近くには、場内ぎつしりと詰めかけて、眞に錐を立てる餘地もない程の大入滿員だ。そのうちに、追々番數も取り進み、滿都の人士が待ちに待つた結びの前一番。

やがて、ざわつく場内を、靜めるやうな呼出し勘太の美聲にうながされて、悠々東西の溜から土俵に姿を現した兩力士！

『わ、わ、わあーッ。』

『千年川ア、賴んだぞ！』

『大岬イ、負けるな、確りやれッ。』

我を忘れて、觀衆が、どつと浴せる歡呼喝采の聲には、さしもの廣い掛小屋も、ゆるぐばかり、そのため立行司式守伊之助

の冴え切つた名乘りも、てんできこえぬ。

――今しも、西土俵で、白象の如き偉軀を朱に染めて、この一番命に賭けても、きつと勝つぞといはんばかり、力足も勇しく四股を踏んでる五尺八寸五分二十八貫の新鋭千年川音松。

『千年川ア、勝つてくれよオ、一門に代つて、大岬をぶん投げろ。』

『おーい、千年川ア、おれがついてる。死んでも負けちアいけねえぞ。』

いつか、千年川の義氣を傳へ聞いた見物たちは、鯨波の聲を上げて彼に聲援を送る。

けれど、東土俵の大岬は、相變らず、傲然たるもの、五尺七寸三十五貫の太鼓腹を、悠々さすりながら、威丈高に睨めすゑてゐる。

千年川は、決死の眥物すごく、はや右手を下して入念の仕切り、――これに反して、大岬は、何か立合に策戰があるらしく、なか〳〵手を下ろさうともしない。

やがて、仕切り直しも五回目、――好機を見たか、千年川は、一聲高く、『ヤッ！』とをめいて立ち上つた。

だが、大岬は立たぬ。

(さては、待つたか？)――と、千年川、ふつと氣を拔いた途端に、何事ぞ！ 突如、立ち上つた大岬は、猛然、千年の胸板めがけ、突張つて出たではないか。――あまりにも、はつきりしたペテン立ちである。

『汚ねえぞ、大岬！ 何だ、その立ちは！』

『止せ〳〵ッ、江戸相撲の面汚しッ。』

だが、あくまで卑劣な大岬は、滿場の罵聲も何のその、利勢にまかせて、パン、パン！ パン――と、突張れば、何せ、すつかり氣を脫かれた千年川、腰の備へも危く、見る見るうちに、西土俵殘り少なに突きすくめられたが、熱か！ 氣魄か！ 不思議に、ぴたり殘した千年川は、もう一突きと突いてくる大岬の右手を手繰つて廻りながら、とつさに得意の左を、ずぶりと差した。

『さしッたり。』

幾分慌てた大岬は、さらば、かうよと、いきなり、敵の左腕を絞つて、そのまま、泉川に撓め出さうとしたが、もう腰のすわつた千年川、烈しく左から掬投をみせて、敵體を崩すが否や、グイ〳〵グイ〳〵寄り戻した。

『わあーッ、千年ッ、よく盛り返した。』

『その調子！ 頑張れ〳〵。』

歡聲くるめくそのうちに、死力を盡して踏張つた大岬、とつさに左で下手褌を引かうとあせつた一瞬、素早く、體勢の流れを見てとつた千年は、『八幡勝はここぞ。』とばかり、電光石火、腰を入れるが早いか滿身の力をこめて『さあッ！』と、十八番の小手投を打てば、何條たまるべき、大岬の巨軀は、はずみを食つて、行司溜へもんどり打つた。

きらり！ 風を切つて、西へ閃く獅子王の軍配！ ――ああ、勝利の明星は、今し、燦然として、好漢千年川の頭上に輝いた。

見よ！ 信念こもる小手投の威力は、つひに怨敵大岬を、みんごと土俵下にけし飛ばしたのである。――大岬は、まだ起き上らぬ。

『ど、どうしたんだ！』

と、控力士が、走り寄つて見れば、悪運盡きたか、大岬丈右衛門、左腕をポツキリ折つて、もろくも、ぐつたり昏倒してゐた。

滿場の觀客は、たゞ、歡呼！　亂舞！　絶叫！　喝采！——中にも、棧敷を飛び下りた新場の卯之助、いま、人込みをやはらにかき分けて、仕度部屋へと戻つてくる千年川の左手を、しつかと握つて感涙滂沱！

折から、これも群衆の間を、くぐりぬけて、やにはに、千年川にすがりついたのは、兄弟弟子の磯嵐。

『おお、千年關！　おかげで念願叶つたぞ。おらあ、一門に代つて、心から禮を云ふ。』

『有難う！　これで、どうやら、雷部屋も、再興できるなあ。親分さん、やつと、千年も男になりました。』

『ああ、烏山の紋吉にも、早く知らせてやりてえなあ。』

三人三様。——たゞ嬉しさ、喜ばしさに、ぢいつと見合つてる感激の情景！　觀衆は、再び、どつと鯨波の聲をあげて、義氣よく今日の勝利を博した全勝力士千年川音松を祝福したのである。

×　×　×

卑劣漢大岬も、目覺むれば、やつぱり、良心を持つ男だつた。

彼は、左腕を折つたがために、力士を廢業すると共に、雷の名跡を、無償で千年川に讓りたい旨を、會所に申し出でた。

むろん、雷一門の力士は、擧つて、千年川を推戴し、六代目雷權太夫を繼いで貰ひ、立派に雷部屋を再興することになつた。

しかも、更に、健氣なのは、おふねである。彼女は、あれほど、虐待されたにもかかはらず、癈人同樣となつた良人大岬を、引き取つて病老父に事へる如く、傷付ける良人にも、まめまめしく世話をするのであつた。

だが、千年川は、もちろん、この貞女に、尚も苦勞をさせなかつた。新場の親分の斡旋で、手に入れた本所元町の小ぎれいなしもたやに、親方とおふね夫婦を引き取り、一切の面倒を見た。

かくて、千年川は、翌春場所には、一躍、西方小結更に榮進し、更に、文政八年秋場所には、堂々東方大關を張つて、永く名力士の名を、相撲史にとどめたのである。　（をはり）

★讀めば苦勞もさらりと消える、富士はほんとに良い雑誌

日・獨・英
專賣特許

自力健康器の偉効!!

胃腸が丈夫に身體は肥る

決して病弱を嘆くな

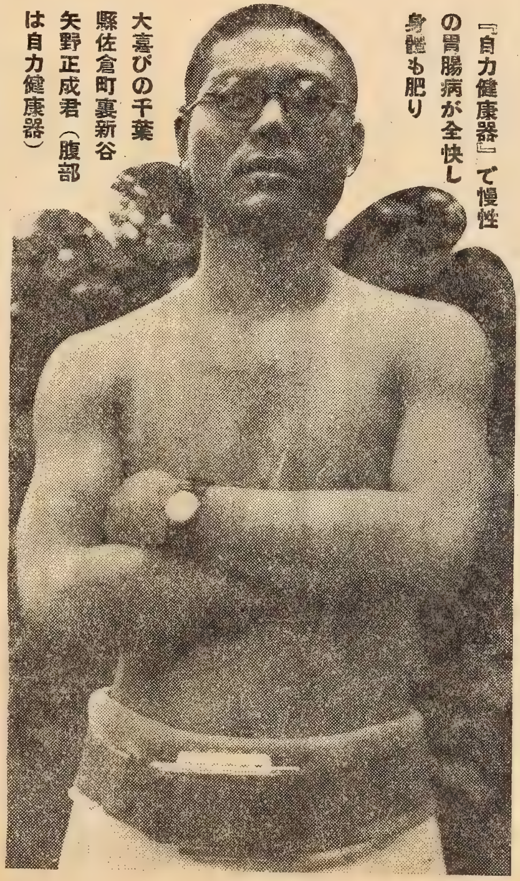
眞理を衝く健康法

白隱禪師の苦闘の體驗から生れた『内觀の法』も貝原益軒の『養氣の術』も、肚に力を養つて、萬病を征服し、心身を强健に導く、所謂不老長壽の秘訣である。

この眞理を掴んで、現代醫學の上に活し、一切の憂ひを除き去つたのが、日・獨・英の專賣特許『自力健康器』の發明である。

『自力健康器』を使用すると、微妙精巧な裝置によつて、必然的に腹壓力が强大となり腹部に沈滯する血液が正しい健康的に循環に復

『自力健康器』で慢性の胃腸病が全快し身體も肥り大喜びの千葉縣佐倉町裏新谷矢野正成君（腹部は自力健康器）



矢野正成君

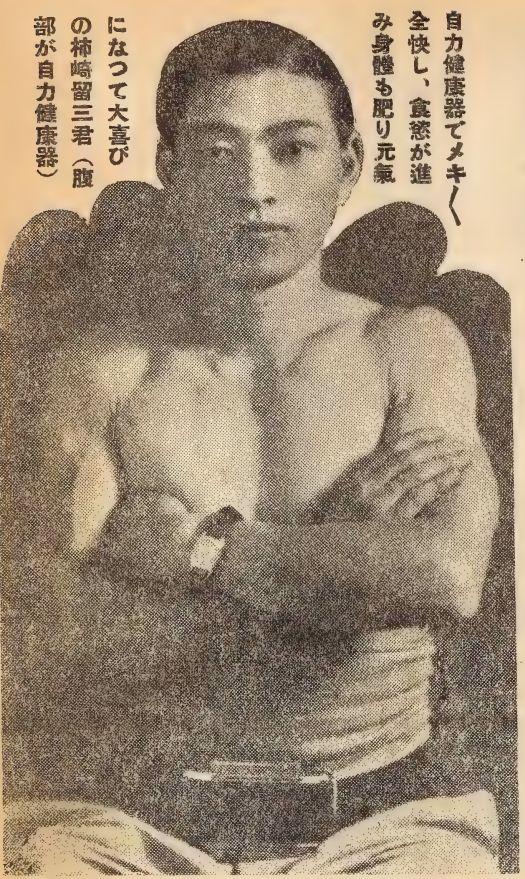
活して、絶えず新鮮な血液が心臓部から送られ、頭腦をはじめ四肢五體に精氣が溢れ、胃腸の働きは頓に活潑となる。即ち使用即日その効果が現れるとの稱讃の聲は、かうした理

使用法は至つて簡便女や子供にも何の雜作もない。左記に新たな愛用者の參考として實驗談を二三掲載する。

慢性胃アトニーが快復
食慾進み仕事も愉快

横須賀市汐入町十六　今井玩具店内　柿崎留三

私はこゝ數年來、胃アトニーで毎日不愉快な日を送つて參りました。何を食べても不味い。身體は衰弱する、ほんたうに苦しい思ひをしましたが、御會發賣の『自力健康器』を使用致して二三ケ月もすると、もうすつかり全快致しまして、只今は、身體も肥り、何を食べても美味しく毎日多忙な仕事ですが、少しのくたびれもなく、益々元氣で愉快に働けます。これも皆『自力健康器』の御蔭と存じ厚く御禮申上げます。尚、世の病弱者の御參考までに寫眞を御送り申しましたから御受取下さい。自分ながらビックリするほど堂々たる身體になりました。



柿崎留三君

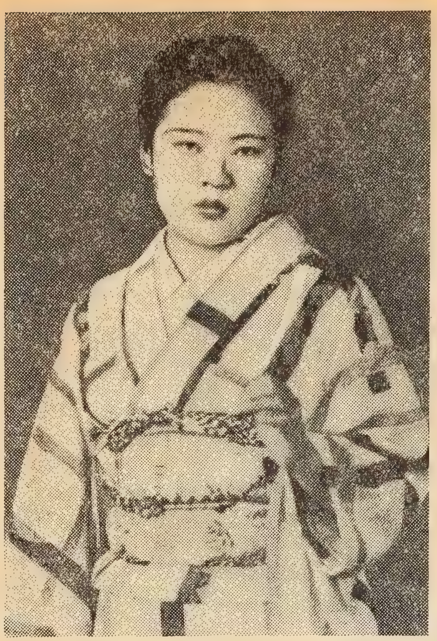
自力健康器のお蔭で
食慾進み身體が
丈夫に

宮崎縣西臼杵郡岩戸村土呂久折原　佐藤アヤ子

私は『自力健康器』を使用いたしましてから恰度二ケ月になります。長い間、慢性の胃腸病で、食事は進まずお腹に力がなく、身體は衰弱して、困つて居つたのでございます。それが、この頃は、もう

すつかり丈夫になりました。三度の御飯も美味しく食事が進み家内中の人々が皆驚く程で御座います。近所の人達も今まで病氣で弱かつたので、不思議に思つてゐる樣で御座います。

友達がこの間しきりにすゝめますので、寫眞を撮りましたが、自分ながら嬉しくてなりません。別便にて、御參考までに、一葉御送り申上げました。どうぞ御受取り下さいませ。寫眞——最近の元氣な佐藤アヤ子さん。



佐藤アヤ子樣

使用は簡單

『自力健康器』は藥も電氣も不用、女も子供（十二歳以上）にも使用が、至つて簡便、仕事しながらでも使用出來る。只下腹部（臍下丹田）にシメて、下腹部の運動を行ふまでゝある。

使用一日の自覺

日・獨・英 專賣特許 **自力健康器**

全國特約販賣店

（全國第一流の藥局）

- 東京 日本橋區本町 玉置商店
- 東京 神田區鍛冶町 大木合名
- 東京 日本橋區本町 松吉商店
- 東京 神田區旭町 藤本支店
- 東京 駿河臺下 伊瀨藥局
- 東京 講談社代理部
- 八王子 八幡町 平山藥局
- 川崎 砂子二丁目 栗原藥局
- 横濱 伊勢佐木町一 櫻井藥局
- 横須賀 汐入町 茶木藥局
- 平塚 新宿 寺田藥局
- 川口 銀座通廣小路 桃林堂藥局
- 川越 喜多町 間坂藥局
- 熊谷 齋藤茂八藥局
- 千葉 本町一 喜惣治藥舗
- 銚子 新生一 大阪屋藥局
- 水戸 泉町 加納藥店
- 宇都宮 相生町 宇塚至誠堂
- 栃木市 萬町三 高田本店
- 足利 通二丁目 田島屋藥店
- 前橋 中川町 田所藥局
- 高崎 本町二 清水藥局
- 桐生 本町五 小林藥店

- 福島市 大町 石井藥局
- 郡山 中町 根本藥局
- 平市 本町二 西村屋藥局
- 仙臺 東本願寺前 月香堂本店
- 石巻 横町 菊屋藥店
- 米澤 立町 仁科藥局
- 山形市 旅籠町 渡邊藥店
- 鶴岡 五日町 エビス屋
- 酒田 下内町 白幡藥局
- 秋田市 通町 佐野藥局
- 盛岡 紺屋町三 大島藥局
- 釜石 鈴子町 村松藥店
- 八戸 三日町 關野藥局
- 青森市 大町 石館藥局
- 弘前 土手町 菊池藥店
- 函館 末廣町 ハマノ藥店
- 小樽 稻穗町 三ツ野藥局
- 札幌 南一西五 秋山藥局
- 旭川 師團通一の七 中保藥局
- 室蘭 海岸通 ケイオウ藥局
- 帶廣 大通十一丁目 大丸藥局
- 釧路 北大通り 濱野大黑堂
- 大泊 榮町本通一 福富藥局

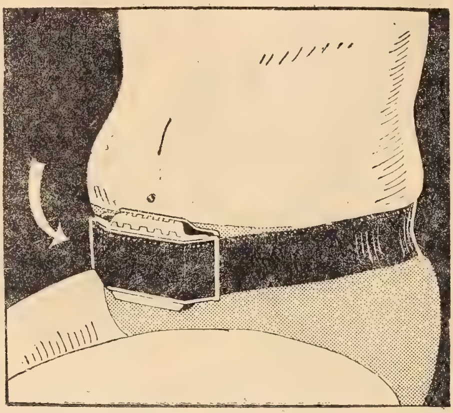
- 豐原 大通南一 福富藥房
- 甲府 相生町 マル金藥店
- 長野市 問御所町 土屋藥局
- 上田 原町 山林堂藥局
- 岡谷 廣小路 宮下湖北堂
- 飯田 知久町 河合藥局
- 松本 博勞町 岡野藥店
- 沼津 上本町 高橋藥局
- 靜岡市 金座町 木村藥店
- 濱松 田町 渥美藥種店
- 新潟市 古町五 佐藤藥局
- 長岡 表町三 藤井藥局
- 三條 一之町 土田藥局
- 高田 本町四 室橋藥局
- 富山市 東四十物町 中田藥舗
- 高岡 坂下町 井上誠昌堂
- 金澤 下近江町 中榮草榮堂
- 名古屋 廣小路 小林大藥房
- 名古屋 矢場町電停前 玉腰藥房
- 豐橋 札木町 小原藥店
- 岡崎 連尺町 大山藥局
- 瀬戸 末廣町 大學堂藥局
- 半田 成岩本町 桝勘藥局
- 一宮 上本町四 宮本藥局

『自力健康器』は、使用第一日に於て『成程効く』といふ自覺を與へる所に一大特色がある。快眠と食慾の増進、それに伴ふ體重の増加、日を逐うて改造されてゆく健康は、使用者のみの味得する歡びであると思ふ。だが、肺結核症の末期、癌、重症の胃潰瘍等に對しては使用を禁じて頂きたい。此等も豫後の回復には奏効。

一番安價な健康法

『自力健康器』は他の藥物療法と異り只一器で御家族全部の健康が築かれるので、これ程、安價な治療法や健康法はあるまいと信じる。

（内部發音装置）



（下）自力健康器を下腹丹田に装着の圖

日・獨・英 專賣特許 **自力健康器** （正價 特製 十二圓）

（送料内地二十錢・其他五十錢・滿洲方面は前金・代引は申込次第急送）

東京市神田區一ツ橋二四番地・帝國教育會館内

頒布元 **國民保健振興會**

振替東京七二一七番・電話九段（四一五一番）

岐阜市 元町一 篠田藥店
大垣 俵町 張勘藥店
高山 本町二 吉田藥房
大阪 心齋橋筋 高橋盛大堂
大阪 東區平野町 丹平分店
大阪 京町堀通 小林大藥房
堺市 東熊野町一 柳德藥局
岸和田 堺町 今村藥局
布施 足代 みどり藥局
豐中 岡町 赤壁藥局
京都市 柳馬場四條上ル 田中藥店
福知山 廣小路 黑庄藥局
神戸 元町通一 西村藥局
神戸 海岸 島上町 筏松回漕店
西宮 久壽川電停 トミヤ藥局
明石 樽屋町 三籠圓本店
姫路 平野町 飯塚藥局
和歌山 下半町 天田商會
海南 中央 ウエダ藥局
新宮 浮島公園前 福井伊勢松
津市 上濱町 玉置藥局
山田 本町 岩下藥店
四日市 袋町 川村藥局
松阪 湊町 清水藥店
桑名 宮通 千葉藥局
奈良市 光明院町 山田商會
福井市 大橋詰 駒屋藥局
敦賀 神樂 白崎藥局
岡山市 橋本町 加藤加寶堂
倉敷 本町 林藥店
津山 西今町 牧野藥店
廣島市 猿樂町 廣島賣藥會社
尾道 本通土堂町 小川藥局
三原 本町 靑木藥局
呉市 中通九 井上一誠堂

福山 上市 大木博藥局
山口市 西門前 柴田藥局
宇部 西區本町 伊藤同生堂
下關 西南部町 磯部商會
德山 佐渡町 ハラ藥店
防府 共進町 旭藥品會社
鳥取市 智頭街道 五藏圓本店
松江 白潟本町 松井藥局
米子 紺屋町 稻田藥店
德島市 西新町二 鈴江日進堂
高松 驛前 神原藥房
丸龜 葭町 神原藥局
多度津 神原藥房本店
松山 木屋町二 戸井藥局
今治 風早町 ハトウ藥局
宇和島 鶴島町 遠藤藥局
新居濱 中須賀 河淵藥店
高知市 山田町 トモヱ藥局
福岡市 東中洲 峰松藥局
門司 東本町三 淵東京藥館
戸畑 新町二 五郎丸藥局
若松 中川通二 小田修藥局
小倉 魚町三 池田大盛堂
八幡 西本町四 ホンダ藥局
直方 須崎町二 中村藥局
久留米 今町 大石藥店
飯塚 東町 スミヤ藥局
大牟田 築町 陣内三省堂
大分市 驛前・吉村藥店
別府 本町 二階堂藥店
中津 魚之辻 石黑藥店
佐賀 與賀町 島藥局
長崎市 榮町本通 鈴田三光堂
佐世保 相生町 東藥舖

熊本市 紺屋町一 梁井藥店
宮崎市 橘通五 ミズホ藥局
都城 中町二 田ノ上藥房
延岡 本小路 佐藤幹藥店
鹿兒島 東千石町 梁井藥店
基隆 義重町一 基隆藥局
臺北 本町一 資生堂藥舖
臺中 錦町二 丸三大藥房
嘉義 榮町四丁目 丸三藥房
臺南 末廣町二 愛國堂藥局
高雄 山下町一 安藤藥局
新竹 東門町三 新原泰生堂
屏東 本町 保安藥房
釜山 辨天町一 藤田藥舖
大邱 大和町 佐伯仁正堂
京城 本町一 山岸天佑堂
木浦 大和町 木下藥局
清津 北星町 中村藥局
元山 本町三 池田回天堂
群山 大和町 神林藥店
仁川 本町三丁目 北島藥店
鎭南浦 龍井里 岸川藥局
平壤 大和町 森田藥房
羅津 末廣町一 稻垣日本堂
全州 大正町二 上田藥局
大田 本町二 小林藥房
光州 本町 木下忠藥局
安東 市場通八 一木藥舖
大連 山縣通 アイフ藥局
鞍山 北二條 東郷洪盛堂
新京 日本橋通 井上誠昌堂
奉天 浪速通 井上誠昌堂
哈爾賓 正陽八道 糀井泰昌堂

ブラジル代理店 サンバロー市イルマンシンプリシヤーナ街 **羽瀬作良**

米國總代理店 オークランド第二十六街一二五五 **信濃商會**

現代小説

女人哀歌

中村武羅夫

富永謙太郎畫

一 女ひとりの部屋

偶然といふことは、單に小説や、物語の上ばかりにあることではない。事實は小説よりも奇なりといふ言葉がある通りに、人間の智慧や、想像では思ひも及ばないやうな不思議や、偶然が、この現實の世界には、いくらでも起り得るし、絶えず、どこかに起りつゝある。

隅田公園で、美登里が危ふく身を躍らせようとした時、偶然にもそこに通りかゝつて、やうやく抱き留めたのは、金之助だつた。イヤ、抱き留めたといふよりも、二人とも腰から下の半身が、ずぶ濡れになつて、這ひ上つたのであるが。――それでも金之助は、美登里の危ふいところを、必死になつて、助けることだけは、どうにか斯うにか、助け

たのである。
　とにかく、一應、自分の借りてゐる白髭神社の傍のアパートに連れて來てから、既に幾日かを過ぎた。――ちやうど、空いてゐた一部屋を借りて、美登里はそこに、起き臥してゐるのである。必要なものは金之助が、何かと整へてくれるし、出入りの度には一々ノックして訪ねて、いろ〱細かいことにまで氣を附けてくれるし、ちつとも不自由を感ずるやうなこともない。
　でも、美登里は、いつまでも斯うして安閑として、金之助の

厄介になつてゐるわけには、いかなかつた。金之助とても、經濟的に餘力のある身の上ではない。
　いくら當つたと言つても、小芝居の役者では、收入など高が知れたものである。自分一人の生活が、どうにか支へられる程度である。
　そこへ、美登里が、何から何まで厄介になつてしまつたのでは、立ち行くはずはなかつた。
（いつまで、こんなことをして、愚圖々々してはゐられない。）
と思ひながら、さて、それならどうしたらいいか？

美登里にも、どうしたらいいのか、分らなかつた。今更、故郷へおめ〳〵と、歸つて行くわけにはいかない。——こんな身體になつてしまつて、何の面目あつて愼之助に會はれるだらう！　青木先生にだつて、二度と再び會へないやうな氣がする。——會つて會へないことはないとしても、會ふのが恥かしいのである！

（何もかも、失はれてしまつたのだ。どうすることも出來ない。）

美登里は、まつたく途方に暮れてしまつた。

大事な〳〵珠を踏みにじられ、打ち碎かれたばかりではない。前途の希望も、光明も、失つてしまつた。

生命までも失はうとしたところを、それだけは金之助の手に救はれたけれども、これから先を、どうして生きて行つたらいいのだらうか？

生きてゆく眼當ても、その力も、勇氣もないやうな氣がした。——さうかといつて、一旦死なうとした身を、斯うして助けられて見れば、二度と死ぬ氣にもなれなかつた。死ぬことが恐ろしいのではない。自から死を求めることすら、何となく億劫なのである。

結局、東京に踏み留つて、誰からも隱れて、何か適當な仕事でも見附けて、働くよりほかなかつた。

そのことを、金之助に話して、相談して見ると、

『それが、いいでせう。』

と、金之助はしばらく考へてから、分別くささうに答へた。

『だが、何も焦ることはないですよ。ゆつくり落着いて、適當な仕事が見附かつた時に、働くことにすればいい。』

と言つて、慰めてくれた。

でも、美登里としては、働くことに決心した以上、一日だつて、愚圖々々してはゐられなかつた。

『そんな暢氣にしても、ゐられませんから……どうぞ早く、適當な仕事を、見附けて頂きたいと思ひますわ。どんなことでも、

前號までの梗概

美登里に裏切られたと誤解する愼之助は、凡ての女性を呪ひ盡し、柳田伯爵令孃美津江の純愛さへ拒んで、其邸から立去つて了ふ。所が此時、美津江に邪戀を寄せる清水青年は、卑怯にも彼女を誘き出して挑まうとするが、危く美津江はこれを逃れ、その儘家出して、淺草の或喫茶店に、女給となつて潛む。この爲當の外れた清水は、今度は故あつて自分の邸に保護して居る美登里を、到頭暴力で以て犯し去つた。するとこれを悲しんだ美登里は、哀れにも大川へ投身自殺しかけるが、一髮の間を、俳優井上金之助に救はれた。この金之助は、嘗て美登里が、愼之助を慕うて受苦の旅を續けてゐた際にも、偶然彼女を助けた奇縁の人間だつた。それは扨置き、再び美登里を救つた金之助は、これを知り合の或喫茶店に托して自活を計らせようとしたが、意外、その店こそ、あの美津江が女給となつて居る因緣の家だつた。

一生懸命に働きますから、よろしくお願ひいたします。』

美登里は、仕事を見附けるにしても、やつぱり金之助の盡力に、すがるよりほかなかつた。

二

『ちよつと、お邪魔しても、いいでせうか？』

金之助は、ドアを開けても、そして美登里が、まだ起きてゐて迎へてくれても、すぐには部屋に入らうとはせず、入口に佇ずんだまゝ聞いた。

夜更のことではあり、女一人の部屋に、斷りもせずに、つかつか入つて行くのは、何となく憚られるのであつた。

――美登里を知つて以來といふもの、それまでの女にたいする復讐心をすつかり清算し、身もこゝろも堅く持してゐる金之助だつた。殊に美登里にたいしては、全く兄が妹でも劬はるやうな氣持で、たつた二人切りでゐることがあつても、金之助の態度は、謹嚴そのものと言つても、よかつた。

『どうぞ。』

美登里は、だから金之助を、信用し切つてゐた。

『では、遲いから、ちよつとだけ失禮しませう。』

と言ひながら、金之助は、やうやく部屋に入つて來たが、

『あなたの氣に入るか、どうか知らないけれども、とにかく、仕事の口が、一つ見附かりましたから。』

金之助は、イスに掛けようともせず、立つたまゝ言つた。

『まあ、さう。』

美登里の眼も顏も、さすがにパッとかゞやいて、

『どんな仕事か知りませんけれども、どうも有難う。』

と、お辭儀をした。

金之助の優しい顏には、ほのかな苦笑が浮んだが、

『まだ、そんなお禮を言はれるには、少し早いですよ。』

と、言つた。

『だつて、仕事の口を見附けて下すつて、うれしいわ。』

『それが、あまり立派な仕事でもないものだから。』

『わたし、何だつていいんですわ。何でも働くつもりでゐるんですから……働く口が見附かつたといふことだけで、ありがたいんですの。』

イボ・ほくろが手軽に取れる！

確信を以ておすゝめしたい

ヒドロアミーン

ポロリと落ちて跡を殘さず…

品の悪いイボやホクロ、兎の目、タコなどを手軽にお取りになるには『ヒドロアミーン』が一番です。極小量をお塗りになれば、しみず痛まず、跡も殘さずきれいにとれ、而も劇藥ではありませんから安心して御用ひになれる不思議な効果には誰方も驚いてゐます。

藥價一瓶一圓（送料内地十錢其他四十二錢）お註文は東京小石川音羽、大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）へ

『そんなに美登里さんに喜ばれたり、お禮を言はれたりすると、僕は、かへつて恐縮してしまふな。』
『どうして？』
『喫茶店の女給なんですが。』
『さう。』
『働いて見ますか。』
『えゝ。』
と、美登里は頷いて見せたが、ニツコリして、

『喫茶店の女給だつて、何んだつて結構ですわ。』
と、言つた。
『それなら、いいですけれども……僕は、また、そんな仕事なら、ご免だなんて言はれたら、どうしようかと思つて、實はビク〱してゐたんです。』
笑顔で言つた金之助の顔には、安堵と、喜びの色が、かゞやいてゐた。
『わたし、今の場合ですもの。そんな贅澤なことを言ふものですか。どんな仕事だつて、働きたいと決心してゐるところですもの。仕事の口があつたといふことだけでうれしいわ。』
『尤も、喫茶店の女給だつて、いろ〱あるでせうけれども、僕が頼んだのは純

喫茶ですから、イヤなことなんか、決してないと請合ひます。』

『それに、自分の心がけにも、依ることでせうから。』

美登里はさう言つて、かなしさうに俯垂れると、脣を嚙んだ。——不覺にも一生癒ゆることのない傷手を、我身に蒙つたことが思ひ出されて、キリ〳〵と胸元が、抉られるやうに痛んで來た。

『ほんとうに、その通りですから、心配することはないですよ。』

金之助は、傷ましさうに眼をうるませたが、やさしく慰めた。

『女給が、十六七人もゐるんださうです。僕は、マダムをよく知つてゐるものですから、直接、マダムに頼んだのです。美登里さんが、いよ〳〵そこで働くことになつたら、猶ほ、よく頼みますから。』

『是非、おねがひしますわ。』

美登里は、決心の色を見せて、チラと金之助の顔を見上げたかと思ふと、改めて頭を下げた。

『ぢや、とにかく明日でも、いつしよに行くことにしませう。』

『えゝ。』

『では、もう遲いから、今夜はこれで失禮します。』

それだけ言ふと金之助は、たうとう一度も、イスに腰を降ろしもせずに、ていねいに會釋をして、しづかに部屋を出て行つた。

三

『あら、いらつしやい。』

翌日、早速、金之助は樂屋入りをする前に、美登里を連れて、喫茶店エンゼルに出かけて行つた。

店があいたところで、ちやうどマダムは、朝の身支度をすまして、食事を終つたばかりだつた。

金之助が、美登里を連れて來たのを見ると、喜んで迎へてくれた。そして、すぐに二階の自分の部屋に、案内した。狹い階段を上つて行くと、突き當りの六疊だつた。疊の上に緋の絨毯を敷き、窓にも派手な唐草模樣のカーテンをかけ、壁際にはシングル・ベッドがおいてあつた。――チヤチな洋風ではあるけれども、さすがに女の部屋らしく、色彩でも、部屋の空氣でも、華やかで、艶かしかつた。

『昨晩、おねがひしました人、いつしよに來たんですが。』

と言つて金之助は、おど／＼したやうに、自分の後に附き添つて、俯垂れてゐる美登里を、振りかへつた。

『あら、さう。』

マダムは、初めて氣が附いたやうに、よく動く、その黑い瞳を、チラと美登里の上に向けたが、その實、疾つくに鋭く觀察してゐたのである。

『まあ、昨夜お話のあつたのは、こちらのことだつたの。』

と言つて、小さなイスを二つ、そこに並べると、

『お掛けなさいな。』

二人に同じやうにすゝめて、如才がなかつた。

『ありがたう。』

金之助は、先づ自分からさきに、腰を降ろして、

『折角ですから、美登里さんも、お掛けになつたら、どうです。』

と、遠慮ぶかさうに、しよんぼり立つてゐる美登里を振りかへると、自分も言葉を添へた。

『はい。』

美登里は、かすかに返事をすると、マダムに向つて、

『失禮します。』

と、會釋をして、素直に金之助と並んで、腰を降ろした。

『いかゞでせうか？　おねがひ出來るでせうか。』

金之助は、氣がかりらしく言つて、マダムの顏色を見た。

『溫和しさうな方ね。』

『ちつとも擦れたところがない、とても溫和しい人です。』

『あら、あなたの保證なの！』

と言つて、マダムは調戲ふやうに、笑つたが、しかし金之助は、飽くまで生眞面目な顏で、

『ほんたうに、溫和しい人なんです。僕が、保證します。』

と、力をこめて言つた。

『いいわ。あなたが、そんなに躍起になつて言はなくたつて。――一眼見れば、分つてゐるから。』

『どうでせう？　――置いて見ていたゞけるでせうか。』

『えゝ。いいわ。』

マダムは、ニッコリして頷いた。こゝろの中では、どんなに喜んだことか知れなかつた。――何といふ幸運だらう！　と思つてゐた。いくら骨を折つて探しても、ろくな女給など一人も見附からない時代に、ミツエと言ひ、今度またこの女と言ひ、つゞけざまに二人まで、こんな美しくて、魅力的な女給が、向ふの方から飛び込んで來るなんて！

（この女も、きつと店に出れば、すぐにスターになるわ。）

さう思ひながらマダムは、眼を細めるやうにして、美登里の頭のてつぺんから、足の爪先までヂロ／＼見てゐた。

『何も分りませんけれども……宜しくおねがひいたします。』

美登里は、ホッと安心すると、マダムに向つて頭を下げた。

『これで僕も、やうやく安心しました。――女給なんか初めてのことですから、初めの中は、見習ひといふやうなことでもいいですから……あまり骨の折れない、イヤなことのないやうに、マダムからも十分、氣を附けて下さいませんか。』

卵巣病で

お困りの方及び子寶の欲しい方へ

試藥進呈

色々手當するも効なく永い間苦しみ續けたのが手術せずしあこがれの可愛い子供まで出來ました和漢藥草劑と實驗談及服用者の禮狀を同病の方へお知らせし試藥差上げます。

神戸市湊東福原新町角　森本秀子

金之助が、氣がかりらしく念を押して頼むと、マダムは、

『えゝ、分つてゐるわ。――心配しなくても、大丈夫だから……わたし、引受けたわよ。』

と、笑ひながら言つた。

『おねがひします。』

金之助が頭を下げれば、美登里もいつしよになつて、もう一度ていねいに、お辭儀をした。

『お名前を、まだ聞かなかつたけれども、何とおつしやるの？』

マダムに、改つて聞かれて、美登里はかすかに、

『美登里。』

と、答へた。

『ミドリ？』

『美しく登る里と、漢字を三字當てゝ書くんです。』

と、金之助が説明すれば、マダムはうなづいて、

『さう。ちやうど、いいわ。ぢや、こゝでは、片假名で書くことにして、やつぱりミドリと呼ぶことにしませうね。女給さんらしい名だわ。』

と、言つた。

戀の犧牲

一

『ミツエさん。――こちらね。ミドリさんつて言ふの。今日からうちに來て、お店を働いて貰

ふことになつたから、そのつもりで、仲よくしてね。』
　マダムに紹介されるまでもなく、二人は、疾つくに顔見知りの仲である。
（ちよつと。）
　と呼ばれて、美津江は何氣なく部屋に入つて來たが、美登里と顔を見合せて、二人ともびつくりしてしまつた。
（あつ。）
（まあ！）
　聲こそ洩らさなかつたけれども、心の中で叫んだ。
　だからマダムから紹介されても、咄嗟には二人とも、挨拶するどころではなかつた。
『…………』
『…………』
　無言のまゝ、眼ばかりかゞやかして、睨み合ふやうにしてゐた。
『どうしたの？』
　マダムも、二人の不思議な樣子に氣が附いて、
『何だかへんだわね。――以前から、知つてるの？』
　と、聞いた。
『いゝえ。』
　美津江が、あわてゝ打ち消すと、美登里に向つて、
『どうぞ、宜しく。』
　と、言つた。
『わたくしこそ、どうぞ宜しく、おねがひいたします。』
　美登里も、同じやうに言つて、頭を下げたが、その時、口惜しさと、腹立たしさが、ぐつと頭を擡げた。
　どういふわけで美津江が、こんな喫茶店なんかに、女給になつてゐるのか、分らなかつた。
　でも、美津江が、こゝにゐる以上、美登里は、自分がいつしよになつて、働くわけにはいかないと、咄嗟に心で決めた。
（あゝ、やつぱりわたしは、こゝから出て行かなければならないのだわ。）
　口惜しい、焦る氣持を、じつと努めて抑へつけるやうにして、何喰はぬ顔をしてゐなければならないのが、美登里としては、とても辛かつた。
『二人とも、何だかへんだわね。』
　マダムは、怪訝さうな表情をしてゐたが、それ切り、べつに深くも追究しようともしなかつた。
『では、ミツエさんは先輩だから、ミドリさんに分らないことは、いろ／＼敎へてあげてね。』
　と言ふと、バア・テンダーに呼ばれて、部屋から出て行つた。

二

　美登里は、折角、金之助が見附けてくれた仕事の口だつたけれども、逃げ出すよりほかはないと思ひ、逃げ出す決心だつた。――でも、さう決心はしても、逃げ出す機會なんか、ナカ／＼見附からず、仕事の忙がしさに追はれて、つい二日經ち、三日すぎてしまつた……

その間、金之助は毎日、ちよつとの暇を見ては、美登里に會ひに來たが、事情を打ち明けて、逃げ出す相談をするといふわけにも、いかなかつた。

店を閉めるのが遲く、それから風呂に入つたりすると、寢床に入るのは、どうしても一時すぎになる。どうかすると、二時になることもあつた。

狹くるしい部屋に、蒲團を並べて寢るのであつたが、皆な疲れ切つてゐるので、横になつたかと思ふと、すぐ眠つてしまふ。鼾を立てる者、寢言を喋べる者、身體が怠るいらしく、どたり／＼と、手足を投げ出す者、齒ぎしりを嚙む者などがあつて、寢てゐる間でも、かなり騷う／＼しい。

（今夜こそ。）

と、美登里は晝間の中から、固く決心してゐた。

一時頃、寢に就いたが、二時が打つても、三時を打つのを聞いても、美登里は眠らなかつた。

四時を打つて、枕もとの窓が、ほのかに白み初めてから、こつそりと寢床から拔け出した。

そつと足音を忍ばせて、階段を降りた。裏口の締りを開けて、細い露地に出ると、漸く、ほつとしたと思つたら、

『ミドリさん。』

かすかに呼びとめられて、ぎよつとして振り返ると、

『どこへ行くの？』

と、低い聲で言つて、つか／＼と近づいて來たのは、美津江ではないか。

『あつ。』

美登里は、さつと顏色を變へて、立ちすくんだ。

『いいのよ。そんなに、びつくりしなくても、大丈夫だから。』

美津江は、ニコ／＼した笑顏で、親しさうに言つた。

『わたしは、あなたの味方だから、心配しなくてもいいの。』

と言はれても、美登里は遽かに信ずることが出來ず、

『…………』

無言のまゝ、眼を見張るやうにして、息を呑んだ。

『どこへ行くの？』

と聞かれても、行く當てなんかあるはずがない。

『…………』

美津江の顏を見つめてゐた眼が、つい伏せられてしまふ。

『逃げ出したつて、どこへも行く當てなんか、ないのでせう？』

『えゝ。』

『ぢや、どうして逃げるの？』

『…………』

『こゝに、もうすこし辛抱してゐたら、どうなの？』

『…………』

『イヤなの？』

『えゝ。』

『なぜ？』

『わたし、行く當てがなくたつて、あなたといつしよのところで、働

いてはゐられませんの。』
美登里は、顔を擡げると、精いつぱいの勇氣を出して言つた。
『まあ。』
美津江は、かすかに微笑をふくむと、しづかに頷いたが、
『やつぱり、さうなのね。——あなたは、わたしのことを、とても怒つてゐらつしやるのね。』
と言つて、溜息を吐いた。
『……………』
『無理はないわ。——わたし、あなたから、どんなに怒られたつて、怨まれたつて、仕方がないと思つてゐるの。』
『いゝえ!』
美登里は激くし頭を掉つて、否定した。
『わたし、あなたのことを怒つてもゐませんし、怨んでもゐませんわ。——今となつては、そんな資格も、權利も、わたしにはないのですから。』
と言つたが、急に涙ぐむと、力なく俯垂れてしまつた。
美津江は、その樣子を、訝しさうに、じつと見てゐたが、
『どうして?』
と、聞いた。
『……………』
美登里は、その理由を聞かれたりすると、餘計かなしくなつた。——見る〳〵涙が、いつぱい瞼にあふれて來たと思つたら、兩手で顔を抑へてしまつた。
はげしい啜り泣きが、はじまつた。
いくら泣くまいとしても、後から〳〵と、嗚咽が迫つて來るのを、どうすることも出來なかつた。かすかに、細い肩が慄へ、背中がをのゝき、そして顔を掩うてゐる兩手の指の間から、涙が留め度もなくにじんだ。
『まあ。』
美津江は、何が何だかさつぱり分らず、呆然としてしまつた。
『どうしたの? 何で

悲しいの？
なぜ泣くの？』

と、はげしく心を打たれて、急き込んで聞いた。

三

エンゼルから上野公園まで、六七丁くらゐの道程があつたらうか。

二人は、人通りも杜絶えてゐる曉の鋪道を、しづかに話しながら歩いてゐる中に、いつの間にか、山下まで來てゐた。そして、どちらから誘ふともなしに、ダラ〳〵の鋪装道路を上つて、公園に入つて行つた。

まだ、日は昇つてゐなかつたけれども、晴れた空は、すつかりカラリと明け放れて、都會は今、徐々として、深夜の靜寂から、晝間の騷う〴〵しさに、眼覺めつゝあるところであつた。

公園にも、人影とても見えなかつた。木々の葉や、ベンチや、道路の小砂利や、アスファルトの上などに、露がいつぱい降りて、しつとりと濡れてゐる。

『まあ、さうだつたの！』

美津江は、泣きながら一部始終のことを、わづかに喋べる美登里の話を聞いて、同情するやら、呆れるやら、義憤を發するやらだつた。

『清水さんて、やつぱり、そんな人だつたのだわね。』

我が身の危ふさに、慄然としてをのゝかずにはゐられなかつた。――思へば自分の身代りに、美登里が、その身を犠牲にしたも、同じことではないか。

『ほんたうに、お氣の毒だつたわ。わたし、あなたに、すまないわ。何といつてお詫びをしたら、いいか知ら。』

美津江は、公園の芝生の間を縫うてゐる小徑の上に、いつの間にか、立ち留つてゐたが、さう言つて美登里の前に、しづかに頭を下げた。頭を下げた時には、思はずそつと手を延べて、美登里の手を取ると、力いつぱい握つてゐた。

冷たくて、細くて、かすかに慄へてゐる手が、しばらくの間、美津江の掌の中にあつたが、

『あら。』

と、やがて美登里は、急に氣が附いたやうに、美津江に取られてゐる手を、そつと引つ込めると、

『あなたのせゐでは、ないんですもの……わたしが、馬鹿だつたからですわ。誰がわるいのでもなく、わたしが、わるかつたのですわ。』

と言つて、また、さめ〴〵と泣き出してしまつた。

『あなたが、悪いといふわけぢやないのよ。』

と、美津江は心から同情して、慰めずにはゐられなかつた。

『いくら氣を附けたつて、亂暴する男の人に逢つたら、女なんかが敵ひつこないのが、當り前だわ。』

『…………』

『考へて見ると、あなたは、わたしの身代りになつて下すつたやうなものだわね。すまないと思ふわ。』

『そんなこと……』

『それに、あなたが、屋敷に宮内さんを訪ねていらした時、わたしが間に立つて、あなたのために、もつと何とかしておいて上げたら、そんなことにはならなかつたと思ふのよ。』

『…………』

『さう思ふと、わたし辛いわ。あなたにも、すまないわ。』

美津江は、いつの間にか涙ぐんで、聲まで慄へてゐた。

『深い事情や、あなたのことなど、よく知らなかつたからとは言へ、わたしが宮内さんを愛したことが、イケなかつたのだわ。ですから、わたしは、これから宮内さんのことは諦めて、あなたといつしよになつて、一生懸命に宮内さんを探して、お二人がいつしよになれるやうに、力を盡すことにするわ。さうするのが、あなたに對する、せめてもの罪滅ぼしだと思ふわ。』

『いゝえ！』

美登里は、急に顔を擡げて、きつとして美津江を見ると、

『そんなことをお考へになつては、イケませんわ！』

と、きつぱり否定した。

『あら！　どうして？』

『わたしには、もうそんなことをして頂く資格が、ないのですもの。』

『だつて……』

『わたしは、宮内さんのことは、ちやんと諦めてゐますの。もう二度と、お目にかゝらうとも思つてゐませんし、お目にかゝる資格もない身なんですもの。――あなたこそ、宮内さんのことをお諦めになる必要はないのですわ。』

『…………』

『わたしは、たゞ、これからどうして生きて行つたらいいか？　そのことばかり考へてゐるんですわ。今更、故郷には歸れないし、誰の厄介にもならず、誰をも頼らず、一人で生きて行きさへすれば、それでいいと思つてゐますの。』

『まあ。』

『嘘も僞りもなく、それが本當のわたしの決心ですわ。』

『…………』

『ですから、あなたは、今までの宮内さんにたいするお氣持を變へずに、どこ〳〵までも押し通して頂きたいと思ひますわ。そして、いつかは宮内さんを探して、お二人が、いつまでも幸福に行くやうに、わたしも祈つてゐますから。』

リウマチ　せんき　神經痛の治し方

底の方から痛みを取る漢方排毒素自宅治療法

痛むから痛み止め、シビレるからシビレ押への服藥をすれば、スグ治る樣に思つて居られる方が多い樣ですが、これは水の流れを堰き止める樣なもので、源の病原が治らない限り、幾らでも痛んで來るばかりか、却つて益〻病勢が強くなつて來て、遂には全身足腰立たぬ樣になる事が往々あります。

此の病氣の原因は血の檢査をしても分らない、體毒や老廢物又は色々の病毒が血の中に交り、どこか打つたり、冷たり、過勞したりして、弱つた所へ結滯して痛み出ずものですから、其の毒素を小便に取り去つて治す、漢方排毒藥がよく治る譯であります。

本院は古くからこの漢方排毒素療法を、この病氣でお困りの方にお傳へして、喜んで頂いて居りますが、世間にはまだ〳〵この病氣のお方が、この良い療法を知られなかつたり、又折角この療法を知り乍ら、他の一時押への藥と同じ樣に思つて信ぜられずに、苦しんで居らるゝ方も澤山ある事と思ひます。

五年も十年もの慢性になつた方にも、痛みの激しい急性の方にもよく効く療法です。當院では何もかも全部無料でお知らせして居るのですから、お困りの方は明日と云はず今すぐハガキで『漢方排毒素自宅療法送れ』と大阪府布施市四條通六四招福院藥房森隆造へ申込んで下さい。自宅で出來る樣、詳しくお知らせします。

『でも、あなたを見す〳〵不幸にしておいて……自分だけが、そんな幸福になるなんて……そんなことは、わたしには出來ませんわ。』

『いゝえ！』

と、美登里はキラ〳〵眼をかゞやかして、強く否定した。

『それが、宮内さんの幸福なんですもの……宮内さんの幸福は、わたしだつて……わたしだつて、うれしいんですわ。わたし、自分のことなんかは、どうでもいいの。——宮内さんの幸福を、ねがはなければなりませんの！』

霧の夜道

一

二噸半も積める、大きなトラックだつた。芝浦の倉庫まで積んで來た荷物を降ろして、五反田へ歸るところであつた。省線のガードをくぐつて、掘割に添うて二三丁ばかり行つたところに、勞働者相手の有名な繩暖簾がある。

その前まで來た時に、ハンドルを握つてゐた運轉手は、並んで腰掛けてゐる助手を、チラと振り返ると、

『どうだい宮内。——ちよつと、寄つて行かうか？』

相談するやうな口を利いてゐるくせに、トラックは、その居酒屋の前に、ぴたりと留つてゐるではないか。

『いや、僕は、眞直ぐに、歸らなければなりませんから。』

と言つたのは、すつかり勞働者の風になつて、助手臺に、神妙に納つてゐる愼之助である。

『相變らず君は、いゝくそ眞面目に構へてゐるんだな。』

『早く歸つて……夜學に行かなければならないんです。』

『今日のやうに餘計な仕事をして、骨を折つた日には、一晩くらゐ夜學なんかすつぽかして、一ぱい引つかけたつて、よからうと思ふのにな。』

『それに僕は、酒なんか飲めないのですから……』

『つき合ひごころのねえ男だな。——それぢや、仕方がねえから、おれ一人で、飲んで行くよ。』

『はあ。どうぞ。』

『その代り、トラックは君が運轉して、歸つてくれ。ガレージに入れて、掃除をしておいてくれゝば、いいんだから。』

言ふなり運轉手は、ぽんと路上に飛び降りてゐた。

『分つてゐます。』

愼之助は、助手の位置から、運轉手の席に移つて、ハンドルを握つてゐた。

『氣を附けてくれ。こんな晩に速力を出すと、危いからな。』

さすがに運轉手は、氣になると見えて、暖簾をくゞらうとしてゐたのが振り返つて、注意をした。

『大丈夫です。』

『ひどい霧だから、見透しがちつとも利かないんだよ。それに道が濡れて、スリップするから……スピードを出すと、危ないぞ。』

『氣を附けます。』

と言つた時には、トラックは調子のいいエンジンの音を立てゝ、し

づかにすべり出してゐた。

『その調子〳〵。』

ちよつと見送つてゐた運轉手は、上機嫌に後から呼びかけると、安心したやうに笑ひながら、そのまゝ繩暖簾をくゞつて、中に入つてしまつた。

愼之助が柳田家の屋敷を飛び出してから、偶然のことから身を寄せることになつたのは、五反田の驛近くで、手廣く運送業を營んでゐる店だつた。そこに入つて、いよ〳〵一勞働者となつて、新しい生活のスタートを始める決心で、先づ自動車の運轉を練習して來た。

三ケ月の後には、免許狀を取つたけれども、まだ、獨立してトラックの運轉などしたことは、一度もなかつた。助手臺に乘つて、荷物の積み降しを手傳つたり、トラックの掃除をするとか、ガレージを片附けるとか、そんなことをして、一生懸命に働きながら、夜學に通つてゐた。

免許狀は取つても、まだ〳〵一臺のトラックの運轉を任されるのは三月や、半年くらゐは、助手としての修業をした上でなくてはならなかつた。

それが、こんな場合に、たとへ僅かな距離とは言へ、自分一人に運轉を任されて見ると、愼之助は急に一人前の運轉手になつたやうな氣がして、自信もつき、うれしくもあつた。

十月の下旬のことで、夕方近くまで、しと〳〵と陰氣な小雨が降つてゐたのが、止んだと思つたら、急に溫度が下つて、冷え〳〵として來た。そして、忽ち品川の海の方から濃い霧が濛々と流れて來て、東京のすべてを、さながら煙幕でも張つたやうに、包んでしまつた。

一メートル先は、見透しが利かなかつた。行く手にポッカリと自動車が現はれたり、不意に橫つちよから、自轉車が飛び出して來たりする度に、愼之助はヒヤリとした。そして、あわてゝブレーキを踏んだり、ハンドルを切つたりした。

もちろん、危つかしいので、スピードなど出せるはずもなかつた。全身の注意を双の眼に集めて、前の方ばかりに、氣を附けてゐた。ちやうど、汽船が、霧の海でも航海する時のやうに、絕えずサイレンばかり鳴らして、やうやく十五キロばかりの速力しか、出してはゐなかつた。

それだのに――

愼之助は、考へて見ても、まるで夢のやうな氣がする。

あんな恐ろしい事故なんか、決して起きるはずはないのである。

だが、夢ではないのだ。

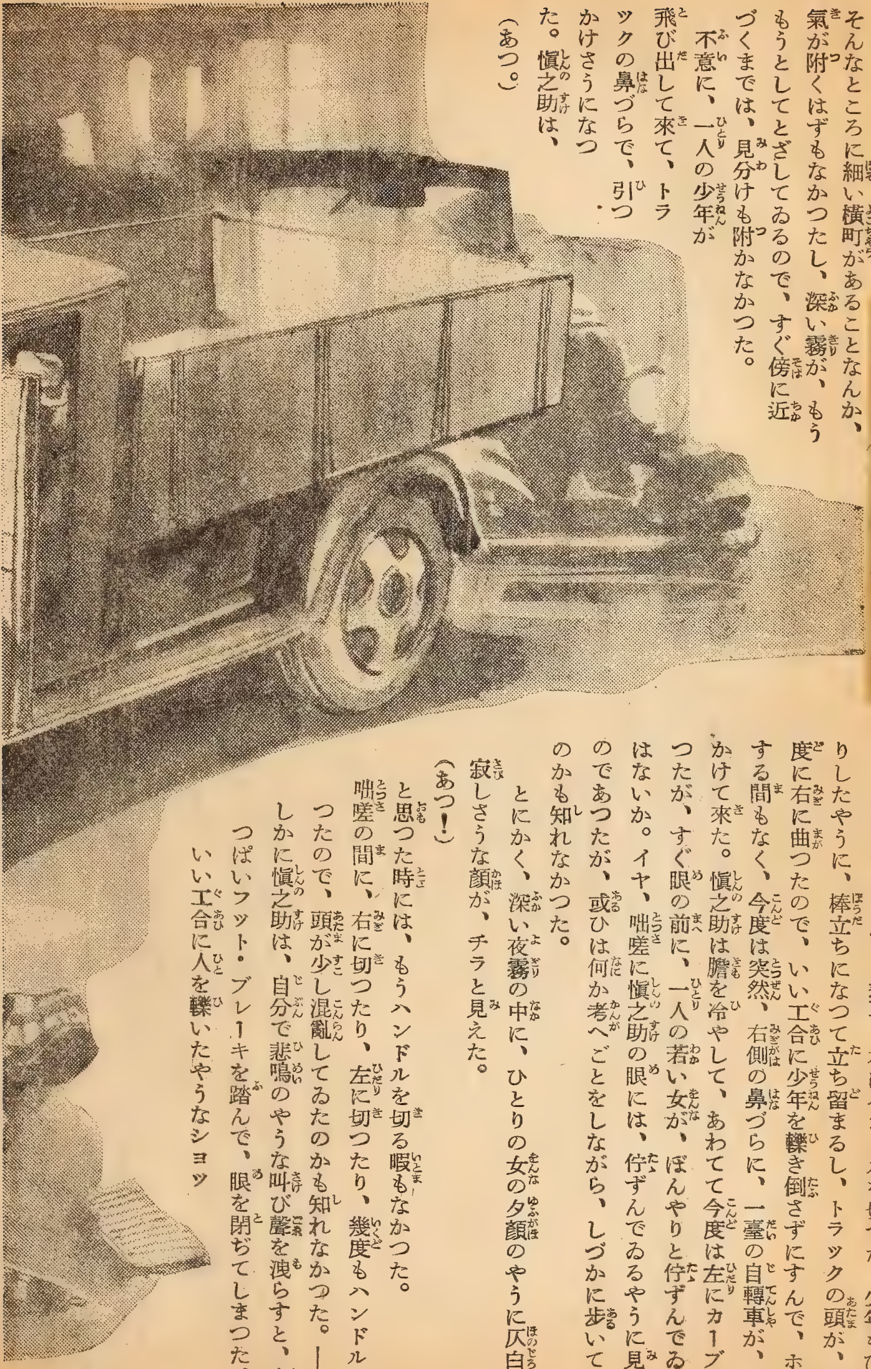
その恐ろしい事故が、現實として、起つたのだ。

油斷は大敵といふけれども、決して油斷したのではない。――そのことは、神かけて誓つてもいい。

結局、はずみだつたのだ。惡魔でも立ちふさがつた瞬間だつたのだらう。――それにしても、何といふ忌はしい、しかも、恐怖すべき瞬間だつたのだらう！

二

相當に廣い通の左側に寄つた方を、十五キロばかりの速力で、サイ



レンを鳴らしながら走つてゐた。もちろん、そんなところに細い横町があることなんか、氣が附くはずもなかつたし、深い霧が、もうもうとしてとざしてゐるので、すぐ傍に近づくまでは、見分けも附かなかつた。
　不意に、一人の少年が飛び出して來て、トラックの鼻づらで、引つかけさうになつた。愼之助は、
（あつ。）
と、口の中でさけぶと、素早く右にハンドルを切つた。少年もびつくりしたやうに、棒立ちになつて立ち留まるし、トラックの頭が、急角度に右に曲つたので、いい工合に少年を轢き倒さずにすんで、ホッとする間もなく、今度は突然、右側の鼻づらに、一臺の自轉車が、突つかけて來た。愼之助は膽を冷やして、あわてて今度は左にカーブを切つたが、すぐ眼の前に、一人の若い女が、ぼんやりと佇ずんでゐるではないか。イヤ、咄嗟に愼之助の眼には、佇ずんでゐるやうに見えたのであつたが、或ひは何か考へごとをしながら、しづかに歩いてゐたのかも知れなかつた。
　とにかく、深い夜霧の中に、ひとりの女の夕顔のやうに仄白い、寂しさうな顔が、チラと見えた。
（あつ！）
と思つた時には、もうハンドルを切る暇もなかつた。
咄嗟の間に、右に切つたり、左に切つたり、幾度もハンドルを切つたので、頭が少し混亂してゐたのかも知れなかつた。――たしかに愼之助は、自分で悲鳴のやうな叫び聲を洩らすと、力いつぱいフット・ブレーキを踏んで、眼を閉ぢてしまつた。
いい工合に人を轢いたやうなショッ

クも感ぜず、誰かを撥ね飛ばしたやうな、激動も受けなかつた。

（助かつた！）

と、思つたか、まだ思ふ暇もなかつたか――その瞬間だつた。

突然、トラックの後から、はげしい勢ひで、何かゞガチヤリと打つかつて來た。凄まじいひゞきが鼓膜をつんざくと同時に、愼之助が、まだしつかりとフット・ブレ

ーキを踏んでゐるトラックが、はげしい衝撃を受けると、惰性で、濡れたアスファルトの路面を、撥ね飛ばされでもしたやうに、二メートル近くも滑つてゐた。

愼之助は、自分のトラックのタイヤの下に、たしかに何かを轢いたやうな、忌はしい感じを全身に受けた。女の悲鳴が、耳を突き刺すやうにひゞいたのを、ハッキリ聞いたと思つた。

三

三重衝突といつたらいいか、四重衝突といつたらいいか。とにかく、複雑な事故だつた。

誰が考へても、愼之助一人の責任であり、愼之助一人の過失でないことだけは、明らかであつた。

それにもかゝはらず、愼之助の運轉してゐるトラックが、ひとりの女を轢き倒し、前の左側のタイヤが、その女の片つ方の脚を、轢き碎いてしまつたことだけは、間違ひのない事實である。愼之助は、女の悲鳴を、自分の耳にきゝ、脚を轢き碎いた時の衝撃を、全身の神經にハツキリ感じたのである。

自轉車に乘つてゐたのは、商家の小僧さんらしかつたが、事態が面倒と見たのだらう。霧の夜道に逸早く自轉車を飛ばして、雲を霞と逃げ失せてしまつた。——最初、横町から行きなり飛び出して來た少年は、彌次馬の一人に混つてゐたが、べつに何の責任もなければ、何の手頼りになるわけでもなかつた。

愼之助と、それから愼之助のトラックに追突して來たのは、やつぱり一臺のトラックだつたが、そのトラックの運轉手と、二人がかりで死んだやうになつて倒れてゐる女を、トラックの下から、助け出した。——若い女だつた。草の葉のやうな、眞蒼な顏色をして、じつと眼を閉ぢてゐる。脣の血の氣も褪せて呼吸をしてゐるのか、ゐないのか分らなかつた。

『あつ！』

頭の方を抱いてゐた愼之助が、不意にさけんだ。

『美登里さん。』

▲日本人であることを誇りとしませう
▲神社の前を通る時は必ず敬禮しませう

と言つたまゝ、愼之助はそこに、ぼんやり立ち留つてしまつた。

『知つてる人か？』

もう一人の運轉手は、怪訝さうに聞いた。

『知つてゐる人だ。』

と、愼之助は呻いた。

夜霧は、絶えず流れてゐる。ほのかな街燈の光りが、どこから落ちて來るのか、その邊に漂うてゐる。——愼之助は、その薄明りで、傷ましい美登里の顏を、じつと見つめてゐる。

（人もあらうに、僕の運轉してゐるトラックで、美登里さんを轢くなんて……何といふ慘酷なことだらう。）

（可哀さうな美登里！　氣の毒な美登里！）

（あゝ、それもこれも、皆な僕のせゐぢやないか。）

死んだやうに蒼ざめて、物言はぬ顏を、じつと見つめてゐる中に、愼之助の双眼は、次第に涙にうるんで來た。

美登里を轢いた直接の責任者が、自分であるばかりでなく、こんな目に逢はせた間接の責任者であることに、間違ひはなかつた。——さう思ふことに依つて、愼之助の良心は、はげしく痛んだ。

いつの間にか、自責の涙が、ハラ〳〵と愼之助の双頰を傳つてゐた。

『おい〳〵、何をぼんやりしてゐるんだ。愚圖〳〵してゐる中に、手

遲れになつたら、どうするんだ?』

くつたりなつて、氣を失つてゐる美登里の、下半身の方を抱へてゐる運轉手が、呶鳴つた。

『さうだ。――早く、病院へ連れて行かなければ!』

と、急に夢からでも覺めたやうに、愼之助はあわてた。

『だから、タクシーを留めて、待たせてあるぢやないか。』

なるほど、一臺の圓タクが留つて、待つてゐた。

誰が知らせたのか、附近の交番から、一人の警官が、驅けつけて來てゐた。――彌次馬は二三十人も、周圍を取卷いて、物珍らしさうに見てゐた。

『大丈夫でせうか?』

愼之助が、不安さうに、誰にともなくつぶやくと、

『何が?』

と、もう一人の運轉手が、聞き返した。

『怪我人の生命が……』

『そんなことが、今わかるものか。早く病院に連れて行つて、應急の手當てをしてもらつた上でなければ。』

『僕も、いつしよに病院に行く。』

と言つて愼之助が、美登里を乘せたタクシーに、自分もいつしよに乘り込まうとするのを、警官は、

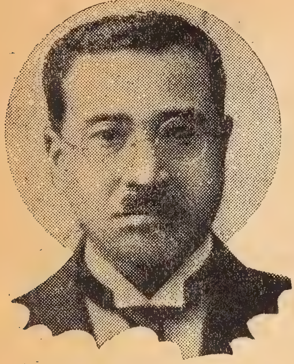
『お前は、現場に、殘つてゐなければならんぢやないか。』

と、引き留めた。

(つゞく)

徵兵檢査や口頭試問にも安心

どもる方々が大喜び!



世の中に不思議なものは數あるが、ドモリもその一つとされて來た、病氣の樣で病氣でない。不具の樣だがさうでもない。歌を唄ふ時や、言はなくともよい冗談口をたゝく場合は何でもスラ〳〵話せる。それでゐて一度改まると、口ばかりモグ〳〵させて聞いてゐる方が氣毒になつて仕舞ふ――そこで、かうした不幸な人々のために自宅で手輕に矯正の出來る方法を我國吃音矯正界の大恩人で、現東京吃音學院長内海養内氏が新研究をされた。それは『新自宅矯正法』と云つて、日英兩國の專賣特許を得たもので、十五歲以上は重いドモリでも續々と治り、口頭試問や初對面の挨拶等も、普通人同樣にスラスラと樂に話せる樣になる。詳細な學理的の說明書、全國の全快者記錄書上原博士の推奬文等を無代進呈されるから、東京神田駿河台二四(中央大學前)正音研究所に年齡を明記し申込むとよい。

(寫眞は吃音學院長内海養内氏)

子を持つ親の問題

どうしたら子供は良くなるか、賢く伸びるか？

繪本を中心としての教育法

東京府女子師範學校訓導
福島鶴吉

折角よいものがありましても、これを活用することの如何によつては、そのものゝ値うちを發揮することが出來ません。

すでに定評がありますやうに、講談社の繪本は、誠に教育的良心から編輯されたものでありまして、わが日本の幼少年にとつて結構な教育書であることは申すまでもありませんが、たゞこれが、

よき與へ方を 世の父兄が心得て居りさへすれば、更に鬼に金棒でありまして、その効果の甚大であることは自明の理であります。

繪本の使命は、結局するところ、幼少年の上品にして且つ教育的な遊び相手として、彼等の精神をよりよく伸長發展せしめる點にあると思ひますが、この使命を果す爲には、たゞ繪本をあてがつておくだけでなく、時々は彼等と共に之を見てその傍からいろ／＼と指導教育する必要があるのであります。今こゝにその指導教育法について二三の事を申し述べて見たいと思ひます。

（一）繪本を中心として言語訓練が出來る

繪を見せ乍ら正しい發音やアクセントを興味のうちに躾けてゆくのでありまして、つまり『ワンワン』を『イヌ』に訂正したり、『チヤウナラ』を『サヤウナラ』に矯正したりすることをはじめとして、地方の方言を標準語に近づかせる教育法であります。

（二）繪本を中心として觀察力を養ふ事

これは、その繪について、畫面全體へ目を配らせ、『これは何で、何をしてゐるところですか』といふやうな質問によつても物を深く觀察させる良習慣が養はれますが、それよりも尚、彼等の生活に無經驗なもの、例へば都會兒に田舍の情景を描いたものを見せるやうな場合に、彼等をして全く田舍に遊ばせ、田舍を觀察させたものと同じ結果が得られる

のでありまして、かうしたものゝ觀察によつて、彼等の知見が擴まると同時に極めてわづかな助言によつて、觀察力がだん／＼と發展していくのであります。

（三）繪本を中心として情操を陶冶する

卑俗な繪が、幼少年の心情を害するに非常な勢力を持つてゐるやうに、高尙な繪はその情操を陶冶するに大きな力があるのであります。これが指導法は、先づ繪に直面させて、指導者自身がその繪を稱揚するのです。

『まあ何といふ可愛らしいお子さんでせう』とか、『このお月樣のきれいなこと、ほらよくごらん。すゝきの葉の上に銀の露玉が光つてゐるでせう』といつたやうな調子に、出來るだけこれを稱揚するのです。

講談社の繪本の如く、良き繪本であれば、たゞ與へばなしで置いただけでも、教育的な良影響は多々あるわけでありますが、指導者が一寸だけ注意する事によつて、その效果は豫想外に大きなものになるのであります。

世の父兄方に特にお願ひしたい一事は子供と共に繪本を見てあげる事であります。

× ×

記者附言……お蔭樣で**講談社の繪本**は、いよ／＼大評判、信用はます／＼高まり、その人氣は物凄いものです。

お子樣方將來の爲に是非ともお與へ頂きたく、この機會に敢てお願ひ申し上げる次第です。

大評判!! 大賣行!!
講談社の繪本
新しく出た三册!!

支那事變海軍大畫報
男の子も女の子も大熱狂、壯烈な戰ひを目の前に見る樣な大名畫帖（五十錢）

二宮金次郎
心も奮ひたつ樣な名文と名畫、生けるが如き尊德翁の名繪本（五十錢）

漫画と頓智合戰
漫畫繪本は每月大評判、お子樣方が飛び上つて大喜び大騷ぎ!（五十錢）

この外、八十三册、全國有名書店に出て居りますから、一册でも多くお與へ下さい。

無言の戰士

軍馬に泣く

陸軍少將　坂西平八

（一）

既に勇士の美談佳話は種々語られてゐるやうであるから、私は無言の戰士たる軍馬に就いて語りたいと思ふ。

軍馬が出征したのは、昨年の八月上旬であつたが、徴發された三分の二までは大砲の挽き方一つ知らない、謂はば未教育の馬であつたからその訓練にも並々ならぬ苦心を要した。何しろ輸送する前に訓練しておかなくてはならないので、炎天下も物かは一週間の强行訓練を施して愈々出發と云ふことになつたが、貨車一輛に十七八頭積み込む。そして次ぎに船に乘せられるのであるが、その時馬は荷物の最下部に置かれるのであるから人間の船醉ひと同じやうに、一週間もすると、すつかり元氣がなくなり、食慾を失つてしまふ。

それを係りの勇士が宛然自分の肉親を世話するやうに、獻身的に看病をし、無理に水を飲ませたり、鹽を嘗めさしたりして何うにかして元氣づけようと努力するのである。殊に汽車で〇〇を通つて行つた連中は、豪雨の爲にダイヤが狂つてしまつたから、幾日も車中に閉ぢこめられたまゝでゐた。それが爲に馬の糞尿の處分も出來ず、車内は不潔極るものとなつたが、係りの勇士は不快の色一つ見せず、自分の寢る間も惜しんで病馬を劬り慰める。其處に我々は人馬一如の尊い境地を見、心から涙ぐましくなるのである。

かうした苦難を經て豫定の倍も費して〇〇に着いたわけであるが、〇〇から〇〇への道は有名な惡路で、馬の膝を沒する位の泥濘は普通で、場所に依つては腹まで埋まつてしまふ。その上船醉ひで疲勞し、剩へ食餌をとつてゐない身體を起重機に釣られて下ろされるのであるから、陸上げされても、二三日は大砲も挽けぬほどへと〳〵に參つ

てゐるのだ。

だから無理に前進させても一日に一杆か二杆、それも皮が剝けて赤肌が露出し、瘦せさらぼうて骨と皮になつてまでも撓まず前進するのであるから、眞に感謝を捧げたい氣持になつた。

（二）

當時の戰爭狀況を記すならば、津浦線方面は馬廠を落して行かなければ保定を占れぬと云ふので急行したのであつたが、堤防決潰の爲、濁水は氾濫してゐて我々の前進を阻む。そして唯一の輸送路と云へば津浦線と運河であるが、その運河は逆流のため能率は上らぬ。斯うした、狀態のため日本軍は思ふやうに前進出來ぬ上、丈餘の高粱が繁茂してゐて、敵陣地が容易に判らぬので、先づ大砲を打ツ放して、高粱の背後に潜伏してゐる敵兵を追ひ出すのであるが、それが砲兵の任務で、その榴彈砲を運搬するのは軍馬の役目である。

だが惡路のことゝて、進退の自由が利かず、馬に飲ませる水が缺乏し、その邊にある水を飲ませると、忽ち下痢をしてしまふ。それはその水の中に硫酸マグネシウムが含有されてゐるからで、馬は水を多量に攝らなければ勞働出來ぬ動物であるから、その辛さは察するに餘りがある。

坂西平八少將

食物にしても、汽車が一日に一列車通るか通らないやうな狀態で、敗殘兵に襲はれた時は一列車も來ないから、彈丸糧食も不足勝ちである。故に馬の飼料の麥などは忽ち缺乏してしまふから、止むを得ず手に入つた物を與へるのであるが、軍隊で訓練された馬は高粱でも何でも食ふが、徵發馬は平常の飼料が良いから、急に高粱を與へても到底食ふことが出來ない。それが爲すつかり體力を消耗しつくし、哀れにも大砲を挽いてゐる中に、ばツたり倒れてしまつた馬もあつた。

軍馬にも一死報國の觀念があるのであらうか、瘦せ衰へて今にも倒れさうになつてゐても、己が任務を全うせんがため、最後の力を振りしぼつて、前進せんとする。吐く息も亂れ徒に足搔くだけであるが、體力の衰へは如何ともなし難い。それに彼地の土質は粘土質であるから如何に焦つても一歩も前進し得ないのだ。

『可哀想な奴め！……』

乘つてゐる勇士は鞭をあてるどころか、思はず暗然として顏をそむけずにはゐられぬ。

だが、力つき果てた馬は斃て、その場に打ち倒れてしまふが、勿論死んだわけでないから、しきりに物欲しさうな樣子をする。其處で勇士が何か青い物でも採つて來て、

『さア、これを喰べて、元氣を出して吳れよ。』

と、鬣を撫でてやる。するとその情を感じてか眼に一杯淚をためて嬉し氣な表情をするのだ。

或る輜重隊の如きは〇〇に行くまでに八百頭位の馬が死に、私等の隊でも二百頭は斃れた。それで止むなく歩いて行つたが、道の兩側には敵兵の死骸と一緒に幾頭もの馬が倒れてゐた。我々の跫音を聞いてふッと正氣に返つたのであらう、力ない首をもたげて我々に何か呼びかけようとするのだ。すると勇士たちは急いで自分のポケットをさぐり、パンのかけら等を出して馳け寄り、

『さぞ餓じかつたらう、さアこれを喰べて吳れ……』

と、愛撫の手を差し延べる。飢ゑ切つてゐた馬は飛び付くやうにそれを喰べるが、その眼からホロ〳〵淚を流し、悲しさうに嘶くのだつた。そして中には、我々に會つたのが嬉しくて、何處まで付いて行く氣なのだらう、よろめく脚でふら〳〵と起き上り、五六歩ついて來たと思ふと、力盡きてばツたり倒れてしまふ馬もあつた。

この悲壯な場面には、流石の勇士たちも淚なしではゐられなかつた。

だが、世話をしてやりたい氣持は萬々だが攻擊を急いでゐるので、それも許されぬ。

勇士の一人が胸を衝く悲しみに、

『可哀想な奴よ、なア、成佛してくれよ。』

と、首を抱きしめて淚を流せば、他の一人は心からなる合掌を捧げて、

『お前にも苦勞をかけたなア、何うか安らかに眠つてくれよ……』

と、人間に物を云ふ如く、その安らかな最期を祈つてやるのだつた。

この離別の悲しみは乘馬隊、砲兵、輜重兵等が最も切實に感じるところのものであつて、戰友と別れる悲哀と少しも變りはないと思ふ。

斯うして止むなく捨てられた馬は、大抵二三日位で死んでしまふが、その死骸は何うなるかと云ふと、痛ましくも野良犬の餌食になつてしまふのである。彼地の犬は獰猛な性だと見えて、馬の肛門から鼻を突込んで肉を貪り喰ふ。だからその邊に徘徊してゐる犬は顏中血だらけにして、見るからに物凄い。

我々は發見次第追拂ふが、直ぐ後から群つて來るので、全く手のつけやうがないのだ。

それに支那の良民に皮を剝がれ、肉を切り取られるから、戰場のそこらには骨だけがゴロ〳〵轉がつてゐると云ふ、凄慘な情景を呈してゐる。

（三）

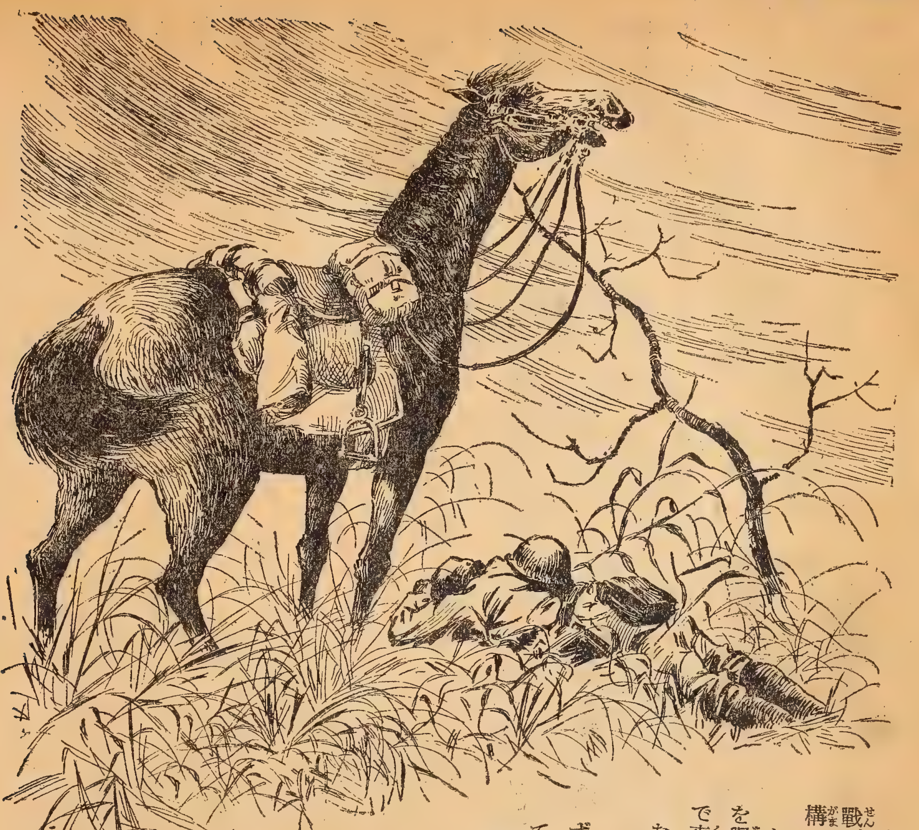
馬といふ動物は、藁さへ敷いてやれば、何處へでも寢る癖があるから、餘程注意しないと切株の上に藁を敷いたため、其處に寢た馬が橫腹や背中に茶碗大の穴を開けたりする危險が往々にしてある、これは馬の取扱ひを知らぬ者が、特務兵として召集されて來るため、自分の方が先に參つてしまつて、充分馬の世話をしてやらぬし、徵發馬の中に

は荒れ馬もゐてお互ひに嚙み合つたり、人を蹴つたりするので、馴れない特務兵は恐がつて、碌に手入れもしない。それがため傷をつけたり、病氣にしてしまつたりするのである。

私も隨分氣を付けてゐたつもりだつたが、杭が出てゐたことを知らず藁を敷いてやつた爲、馬がその場にゴロリと寝たからたまらない、背中にズブリ杭が突きさゝつてしまつた。今思つて見れば可哀想なことをしたものである。

これは今度の戰線で經驗したことであるが軍馬はたとへ敵彈が三發や四發體内に喰ひ込んでゐても平氣なのである。それほど辛抱強い。勿論傷所を調べてやれば直ぐ判り、手當の方法もあるのだが、忙しいままに手入もせずに放つておくと、瞬間的にばたりと倒れてしまふ。倒れてからはッと氣が付いて調べると腹部に二三發射ち込まれてゐたなどといふ例はざらである。

だが、大砲でやられる奴は實に慘い。首をそつくり跳ね飛ばされたり、脚を吹き飛ばされたり、何しろ馬は人間と違つて、驚破ッと云ふ時、簡單に隱れるわけに行かないから、遠慮なく砲彈の洗禮を受けるのだ。〇〇の〇〇の側に砲兵部隊の戰鬪司令所があつたが、敵の集中砲火を浴びて、其處にゐた部隊の馬が三十頭一度に斃されてしまつたこともあつたほどだ。



また滄州攻撃の時は、四日間の猛攻で敵陣を攻略したと云ふ激戰だつたが、この敵陣はベトンのトーチカが無數にある所謂三段構への堅陣であつた。

かうした時眞先に活動するのは輜重の馬で、彈藥の運搬に全力を擧げ特務兵が〇〇榴の彈丸ならば、一車に〇發乃至〇發を積んで來るのであるが、馬が弱つてゐればたつた〇發位しか運搬出來ないのである。

それに漆黒の闇を衝いて來る上、嶮岨な山坂も越えねばならず、運河の土手崩れの邊は、あッと云ふ間に腰の邊まで埋沒してしまふと云ふ慘憺たる惡路である。のみならず對岸からは敗殘兵が間斷なく射ちまくる。

『しまつた！』

と思つた時はもう遲い、脚を泥濘に呑まれた馬は進退谷つてしまふし、後がつかへてゐるから勿論後退は出來ぬ。そこで車を外して傍へ除けるのであるが、これが並大抵の苦勞ではない。そして身輕になつたものゝ、自分の力で飛び上れない馬は止むを得ない。その上を踏んで渡るといふことになるのだが、その實際を目撃した私は正視するに忍びなかつた。

そしてかうした時の輜重隊の勞苦と云ふものを沁沁感じた。暗黑の闇と惡路と闘ひながら輜重車に彈丸を積み、疲憊した馬を督勵しながら、撓まず砲兵陣地に前進をつゞける苦闘の有樣には思

はず頭が下つた。

また馬廠攻撃の時は胸の邊まで水がある處なので車が通らないので、仕方なく彈丸を吊す物を拵へそれを馬の鞍につけ、兩側に一發づつ彈丸をさげるやうにして運ばせたが、砲兵もその彈丸を受取る時は感激の涙を流した。かうして軍馬の勞苦と、勇士の感謝の念が打つて一丸とされた貴重な彈丸であるから、文字通り百發百中、偉大な効力を發揮した。かう云ふ場合に於ける軍馬の功績は實に偉大なものであると思ふ。

（四）

馬の神經は非常に鋭いものであるし、大變怜悧な動物であるから、若し主人が敵彈を受けて落馬したとすると、馬は瞬間、ぱッと歩みを止めてしまつて、ぢッと動かぬ。そして、主人の傍を離れずに、悲し氣に項垂れたまゝ、まるで溜息を吐くかのやうに鼻を鳴らして、誰か主人の危急を知らせる人が通りはせぬかと、頻りに探し求める。自分の身體が如何に危險に曝されようが、決して主人の傍を離れないのだ。この忠實さといぢらしさ、それは人間で云ふ人情で、謂はば馬情とでも云ふのだらうが、その濃やかさは決して心なき動物とは思はれない。

だから、馴ついてゐる自分の愛馬などは、そ

の表情を見たゞけで悲しいか嬉しいかゞ、はつきり判るものである。そして路傍に斃れてゐる同僚の姿を見ると、明らかに悲しみの表情をして動き、去り難い樣子を示すのだ。

敵彈の爲、斃れる軍馬は致し方がないが、病氣に罹るのは、係りの者の手落ちであり、一面馬に對する知識が缺けてゐるからで、その點今度馬政局で國民に馬匹の知識を徹底させるため、各縣の在郷軍人や將校に依頼して、馬事思想の普及を計るさうであるが、洵に時宜を得た計畫であると思ふ。

濟南攻略が終つて暫く滯在してゐた時大部分の馬が流感にやられ、中には肺炎を起して死んで行つたのも隨分ゐた。何しろ流感は傳染率が激しいから、一匹づつ隔離せねばならず、その騒ぎは容易ならぬも

兒童と雜誌

貴族院議員　丸山鶴吉

『世の一般の父兄が、兒童に家庭讀物を與へることの必要に氣付いてきたことは、大變結構なことであるがその選擇が大切である。よい讀物、即ち良書を與へてこそ効果があるので、有益ならざる讀物は、却つて害を與へるものであることを忘れてはならない。既に定評あり、教育家諸氏も推奬してをる幼年倶樂部の如きは、充分に安心して與へることの出來る兒童のよき家庭雜誌である。

×　　×

子供雜誌の淨化が叫ばれてゐる折柄、諸名士、教育家諸先生から『理想的の課外讀物』と推奬されてゐる本社發行の『幼年倶樂部』を、確信を以ておすゝめ申し上げます。

（寫眞は丸山鶴吉先生）

のであつた。

が、かうした時痛切に感じることは、獸醫の手不足である。それと眞に腕達者の獸醫は隊に一人位しかゐない實狀であるから、流感騒ぎなどが起ると手の下しやうがない。他に二三の獸醫がゐないでもないが、後から來た人々は、牛や犬や豚などの獸醫であるから、往々にして誤診があるだらうと思ふ。

私は愛馬二頭を連れて行つたが、最後に奉安まで來た時、徐州の敵が加速度的に殖えて逆襲して來ると云ふので、一箇〇隊增援させて還つて來たのであるが、今度の戰では、軍馬はかなりの打擊を受けた。そして終ひには馬は補充しないと云ふことになつたから、必然其處に珍風景が現出した。

……牛を連れてゐる者もあるし、駱駝、驢馬、騾馬等々を連れて堂々行進してゐるのだから宛然桃太郎の鬼ケ島征伐と云つた光景であつた。

これは主として山西方面へ出動した部隊でこれらの動物には大砲は挽かせない。主に糧食彈藥の運搬である。また上海中支方面では水牛を使役してゐるが、これ等の動物は馬の代用としてかなりの力を發揮する。現在滿洲國では滿洲馬で一つの輸送隊を組織してゐるが、支那馬は我々には使ひ易い。

支那馬は日本馬と全然異つてゐて、背も四尺前後で性質も溫和しく從順で、第一粗食に堪へるから非常に好都合なのだが、皆隱してしまふから、却々手に入らない。

其處で馬を買ひに出かけるのだが、そんな時でも馬をひいて來ると

ころを發見ると敗殘兵に襲はれる危險があるから、嚴重に武裝した上機關銃等を持つて行く。そして部落の村長に掛け合つて買ひ取るのだが、標準値段は大體三十圓前後である。

（五）

それから如何なる荒れ馬でも戰地へ行つて一緒に暮すと、其處に微妙な愛情が湧き、たまらなく可愛くなるものである。

何時の間にか主人の顔を憶えてしまつて、主人の傍へ來ると、自分から主人を乘せる位置に就く、私は太つてゐて乘り難いので、何時も少し低い處に馬を入れて乘る。すると馬の方ではそれを憶えてゐて、私が命じなくとも低い位置に就き、『さアお乘り下さい。』と云はぬばかりに背を向けるのであつた。

かう云ふ風に、馬と主人の間が斷ち難い愛情の絆で結ばれて來るから、愛馬が斃れたり等すると云ひ知れぬ悲しみを感じる。

私は、濟南で馬の慰靈祭を催した。これは他の部隊でも行つたことだが、その慰靈祭を催した際、私が特に感じたことは、銃後の人々は勿論戰歿勇士の靈を慰めることは必要であるが、戰線を疾驅する軍馬も、斯くの如く勞苦を共にしてゐるのだと云ふことを理解し、この健氣なる無言の戰士の爲にも是非慰靈祭を催して頂きたいと思ふのである。

（完）

金子士郎畫

果然！大評判となつた『支那事變少年軍談』!!

何たる壯烈！世界驚嘆の皇軍大奮戰を實戰さながらに、之程目に見る如く描き出した痛快な事變大記念書かつてなし!!
見よ早くも滿天下を熱狂させた新刊三册！苟くも日本人なら讀まずにゐられぬ目覺しき大內容

●全國書店にあり大急ぎお求め下さい！
各册 定價一圓（送料內地十四錢）分買御自由

南京城總攻擊
壯絶快絶！思つても胸が躍る彼の『日軍百萬杭州上陸』から感激の歷史的大場面『輝く南京入城式』まで、見よ世界戰史を壓する我が南京攻圍軍の進擊大奮戰!!

壯烈加納部隊長
勇猛悲壯！ 眞に鬼神も哭く日本武人の最期を飾る凄烈な吳淞の大血戰を見よ!! これこそ豪勇加納部隊長を始め幾多皇軍の燦たる大武勳を永遠に記念する感激篇

一番乘り武勇傳
偉なるかな!! 敵が堅壘を誇つた南苑城に或は居庸關、保定城、太原城、蘇州河、大場鎭、南京城等々に、見事！一番乘りの勝鬨をあげた勇士の壯烈大武勳物語!!

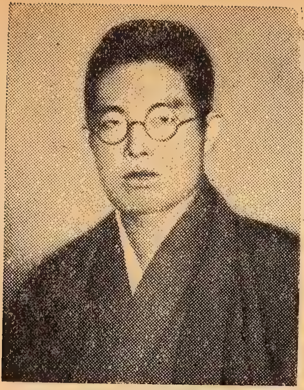
東京小石川（振替東京三九三〇）
大日本雄辯會講談社

ふる血を取れば血壓は下り 頭もハッキリみごと丈夫に

治病日誌から

手足や節々の痺れが治り 頭はハッキリ血壓も下る

大牟田市七浦町　松重敏一



體驗後の松重敏一樣

小生は數ケ月以前から頭がボンヤリして記憶、根氣の薄らぐ健忘症に罹り、その上手足や節々は痺れ、肩凝りと不眠症さへ加はり非常に困つて居りました折柄、親友K君よりフルチ錠の効果あるを聞き、早速買ひ求め服用しました處、漸次頭はハッキリ、肩凝り、手足や節々の惱みも取れ、安眠出來て、どんな激しい勞働にも堪へられる樣になりました。元來僕の職業は鳶職で相當高い所に昇つて仕事をするのですが、今ではめまひや手足のふるへる樣な事はありません。

尚一週間程前に當地の某醫師の診察を受けましたら、血壓は常態近く迄下つたとの事、私は驚き且嬉しくてたまりません。此の分なれば腦溢血にならずに濟んだかと内心喜んで居ります。

安眠出來て血壓は下り 頭重、肩凝が快方へ

神戸市神戸區下山手通り　稻田伊藏

前略、色々と御見舞の御手紙下されまして幾重にも御禮申上げます。私はズウット貴所發賣のフルチ錠をば當地の買付藥店より買求め服藥中でありますが、ダン／＼快方に向つて參りますので、お禮旁ゝ經過を申上げます：：私事昨年來頭が重く、且夜も安眠出來ず苦しんで參りました。それで此のまゝでは容體

が惡化するばかりと心配して居りました。（中略）お蔭樣でフルチ錠服用後は、頭重は薄らぎ、夜もグッスリ安眠出來、その上血壓は常態近く迄下つたとの事、之れも偏にフルチ錠のお蔭と一同感謝の念で一杯で御座います。

因にフルチ錠の藥價は十一日分三圓、二十二日分五圓、五十日分十圓で全國有名藥店及一流デパート或は東京市小石川區音羽町大日本雄辯會講談社代理部にあります。尙詳細は下記　古醫學研究所より無代進呈する「ふる血療法」書によられたし。

ふる血』はなぜ病原となるか

血壓が高く頭重、耳鳴、肩凝りや手足の痺れる方は斯うして治せ

前記松重樣、稻田樣いづれも、早く手當をしたからこそ、快方へ向ひ、丈夫な體になる事が出來たので、若しも手遲れになつたらどうなるか。それこそ色々な症狀から終には恐る可き腦溢血か、輕くても半身不隨の重症は免れません。では以上の病原とは何か。卽ち若氣の過ちによる感染毒か、親からの遺傳毒に、日頃嗜む酒、煙草の毒などが加はり古方醫學の『ふる血』となつて血液を濁し血行が妨げられて居るからであります。

處で、此の病根『ふる血』を排泄するのに從來は蛭や吸角による瀉血法とか、破血劑と稱する峻下劑等で治療して參りましたが、幾分の副作用あるを痛感した當研究所では現代醫藥學的立場による古方醫學の再檢討は是を穩に體外へ排泄して血行を整へますから、前記お惱みの症狀を漸次快癒に導くばかりでなく、血壓を自然に下げ、腦溢血や半身不隨の重症をも未然に防ぐ新療法の創見に成功いたしました。惱める方は是非一度御實驗あれ。

因に本療法の詳細はハガキで京橋區西八丁堀二ノ二〇。古醫學研究所へ申込めば無代進呈する『ふる血療法』書の一讀によられゝば充分御解りの事と存じます。

排毒と順血に　フルチ錠

主治效能

痔疾、胎毒、脊髓癆、中氣、血壓亢進症、半身不隨症、心悸亢進症、甲狀腺腫、腦神經衰弱、リウマチス、神經痛、ヒステリー症、頭痛、腺病、常習便秘、貧血。

藥價

十一日分	三圓
二十二日分	五圓
五十日分	十圓

送料內地十五錢其他四十二錢

無代進呈

ハガキで古醫學研究所宛御申込みになると古醫學から再檢討『病毒排除血液循環とふる血療法』並にこの療法で救はれた方々の全快禮狀集を無代進呈します

申込所

東京市京橋區西八丁堀二の二〇

古醫學研究所

振替東京六五三〇八番

電話京橋(56)二五八四番

新作講談 野路の萩餅

桃川若燕
布施長春畫

親の情で廓づとめ

江戸は淺草の阿部川町に、荒物の卸賣で美登屋といふ店、主人を茂助と申しまして、前年父親を見送り、家督を相續、喪もあけましたので、多年の宿願を果さうと、伊勢參宮をいたしましたが、當今と違つてその頃江戸から伊勢參りは相當の長旅でございます。目出度く兩宮へ參詣も相濟み、誰しも神詣りの行き道は、六根淸淨に身を愼しんで居りますが、その參詣も濟んだとなれば、

『先づこれでいゝ。』

と緊張も弛みませうし、旅情の徒然を慰め度いといふやうな心持も起つて來る。況してや美登屋の茂助、今年二十五の若い者だ、旅の恥は搔き棄てといふ氣分になつて、有名な古市の遊廓へくり込みました。龜屋といふ遊女屋へ上りましたが、商人でも江戸つ子だ。威勢よくタン

力を切りまして、

『べら棒めえ。こけ面倒に一々見立てなんぞゐられるけえ。臍の緒切つて草鞋てえものを、初めて穿いた道中だ。お馴染なんぞの有らう道理はねえ。誰だつて構はねえよ、萬事は小母さんお前に任せるから、よささうな敵娼を、見つくろつて出して呉んな。』

と申しましたが、この男遊女を酒の肴と間違へて居ります。但し小母さんと呼んでも親戚ぢやアない。赤の他人でございますが、これを妓樓のやり手婆と稱へます。やり手といふから何か呉れるのかと思ふと、貰ひ度がつてばかり居りますが、やり手婆に洗濯婆、それから取上げ婆を、三婆アと申しますさうで、もつともこれは昔のこと、洗濯婆なんてえものは疾うになくなり、取上げ婆さんは、お産婆さんと昇格しました、然し中には學校を出たばかりのうら若い、妙齢の美人なんぞも居ります、これを産婆と呼ぶのは可哀想だといふので、近頃は助産婦と名が變りました。まことに感じがよろしうございます。やり手婆もその眞似をして、助遊婦といふ事にしようと願ひ出でたところ、叱られて引下つたといひますがアテには成りません。その小母さんも任せられては困ると見えまして、

『それではお客様斯ういたしませう。どんなお子さんがお相手を致しますやら、お慰みを重ねて御運だめし、この中から、お選りなすつて下さいましな。』

　十五六枚の木札を持つて參りました。これには遊女の名が記してありまして、つまり鬮を引くやうなもの、茂助が笑ひながら、

『そいつも面白からう。ドレ〳〵、ちよいと見せな。ホヽウ、桔梗か、苅萱、女郎花……秋の七草みてえだな、撫子、白梅、さつき、敷島、響、チェリー、バット……』

　そんなのは有りますまいが、段々見て行くと中に若紫といふのが目につきまして、

『こいつア氣に入つたなア。色つぽくて好い名ぢやアねえか。名はその體を現はすなんてえことをいふ。定めし美い女に違ひねえ。小母さん。乃公アこの妓にきめるよ。』

『オヤまア、若紫さんの運のいゝこと、嘸喜ぶことでございませう。只今すぐにお連れしますよ。』

『有がてえ。早場にたのむよ。……ウフフ、どんな女が來るだらう。』

　美登屋の茂助が、酒をのみながら、樂しみに待つてるところへ、小母さんに連れられて、現はれた妓を一ト目見ました時には、思はずアッと聲を上げようとした位びつくりした。さうでございませう。若紫といふ仇つぽい名が、體を現はすどころの騷ぎではない、色の黑い所へ白粉を塗つたから、冬瓜が粉をふいたやうな鹽梅、目尻が下つて鼻が低く、お出額で頰邊がふくれて顏が三角に見える、その上に身丈が低くて肥り肉だから、大道臼へ南瓜を乘せたやうな、イヤもう選りに選つて醜い女でございます。

（イヤ大變な化物を引き當てたな）

　と茂助は目を白黑させましたが、今更、

『こりやアひど過ぎる。取かへてくれ。』

　とも云へません。そこは江戸つ子、あきらめも早いから觀念しちまひましたが、若紫の方は滿面に喜色を湛へ、

『お客さん。よう來て下さんした。』

　と下へも置きません。茂助は酒の醉も手傳ひまして、後に差向ひになつた時、

『花魁や、お前にも親はあるんだらうな。』

　と聞いて見たところ、

『アレ、莫迦にしねえものだよお客さん。乃公だつて木の股から生れたのでも、溝川から湧いたのでもねえ。歷然とした兩親があつて生れましただよ。而も私アその親たちの情でなア、この家へ來たでがす。』

『へエー、親の情で奉公に出た……こいつア珍らしい事を聞いたなア。花魁の前だが、一口に苦界といふ位のもの、大ていは親の爲め、孝行の爲めに身を沈めるといふのが紋切型だが、親の情で女郎になつたてえのは、一體マアどういふ譯だ。』

　好奇心を起して茂助が尋ねました。

悪女の深情

すると若紫が隠しもせず飾りもせず、正直に身の上話をいたしましたのは、この女は同じ伊勢の國松坂在、平生村の農夫作兵衛の娘でお種といひ、何しろ此通りの不容色なので世間では、

『作兵衛どんとこの娘はマア何たる醜い女だんべえ、まるで豚だな。豚娘だ。』

と悪口をいつては蔭で笑つて居りました。親の身としては如何にも不びんで堪らず、

『こんなに不容色では、妙齢になつても嫁に貰ひ手もなからう。一生を後家で終らせるのも可哀想だが、それよりも寧そ賣物の勤め奉公に出したら、十人よれば氣は十色、中にはどんな物好きな客があつて、乃公の女房にならないかと、身請けをしてくれないとも限らない。』

といふ處から、扨こそお種が十八の時に、ごく安い身の代で、此龜屋へ身を賣らせたと斯ういふ次第。

『御方便なもので初會のお客様は、札の若紫といふ名に迷はされて、どんな美しい女かと、私を名ざしにして下さる方もあるだよ。そこへ私が出るものだからね。中には腹を立てて小母さんへ、苦情をいふお客さんも少なくはねえださ。オイ、ひどいぢやアないか。年は十八で初見世で、他の妓とはくらべものにならない玉だといふからこれにしたんだ。こりやア何だなどと、ムキになつて怒るだけんど、小母さんも心得たものでの、イエ、このお子さんの初見世が十八の時、他のお子さんとは、較べものにならない不器量ですと、お斷り申したのぢやありませんかと、巧く言ひぬけるのでお客さんも、仕方なく泣き寝入りになるですよ。貴方も嘸かし、御迷惑でござんせうねえ。』

媚態を造つてニッコリ笑ひました。これが美人だと堪りませんが、豚娘のお種では一向に魅力がない。却つてゾーッとする位のもの、茂助は思はず首を縮めましたが、

『何の／＼、何で迷惑になんぞ思ふものか、世間の奴は目がねえんだ。豚娘などとは飛んでもねえこと、乃公は一ト目でお前が好きになつちまつた。これが本當の醜女惚れだ。』

洒落を云つたが勿論先方には通じません。

『アレまアそれは本當でござんすか。』

『本當だとも、何で嘘をいふものぢやアねえ。花魁の前だが、人は外見より心といふ。乃公アお前の、心掛が氣に入つたよ。自分で私は不容色だと、諦めてかゝつてる從順なその心掛なら、却つていい御亭主を持てるに違ひねえ。本當をいふと乃公なんざア、これから嫁を探さうといふ獨身者だから、出來ることなら乃公がお前を女房にしてえ位のものだ。』

これをお種は眞に受けたものと見え、

『お客さん、そんな事をいつて私を嬉しがらせ、嬲り者になさるんぢやアありますまいね。』

『チエッ、お前も疑り深え女ぢやアねえか、なぶりも焙りもしねえよ。嘘だと思つたら、年があけてから江戸へ尋ねて來て見な。乃公は淺草の阿部川町といふ處で、荒物の小せえ問屋をしてゐる。美登屋の茂助といふものだ、近所へ來て聞けばすぐに知れる。お前が本當に來てくれる氣なら、乃公ア何年でも待つてゐるぜ。念のために起請文を一札入れよう。』

物のはずみとは言ひながら、口から出任せに夫婦約束をしてしまつた。イヤ若紫のお種が、喜んだの喜ばないのではありません。天へも上る心地がいたし、モウ本當の女房になつたつもり、眞情を盡して茂助をもてなしました。

『女郎買ひ、ふられて歸る果報者。』

と申しますが、たとへどんな醜婦であらうとも、遊びに行つて冷遇された方がいゝか、歡待された方がいゝかといへば、そりやア持てた方がいゝに極つて居ります。茂助の方では元よりホンの氣紛れで冗談を言つたのだが、そのお蔭で一夜を面白く明かし、愉快だつた事が忘れられません。道中恙なく江戸へ歸りました後も、遊びぐせがついて毎夜吉原へ通ひ、或は洲崎だ品川だと、叱言をいふ者もない處から、方々を浮かれ歩いて居ります中、奥山の水茶屋へ出てゐたおむらといふ女と深く馴染み、とう〳〵此女を引取つて女房にいたしました。ところが此おむらが大へん者で、所謂お引摺りと申しますか、横のものを竪にもしないくせに口ばかり達者で、亭主の茂助を尻に敷き、朝から一升酒を呷らうといふ、眞面目な家庭には全然不合格の阿婆摺れです。惡い女房を持つと六十年の不作、などと申しますが、不作どころか、こんなのを持つた日には、大ていの身代は潰れてしまひます。けれども茂助は惚れた弱身で、

『おむらや〳〵。』

と一緒になつて、堅氣の商人が今日も晝間から酒三昧、夫婦で小鍋立をして居りますところへ、店から手代の周平といふ男が、妙な顔をしながら入つて參りました。

若紫が江戸へ出て

主人の茂助は顔を赤くして上機嫌、

『周平や、何か用か。』

『ヘエ、お客樣でございます。』

『何を言つてるんだ。商人の店へ客が來るのは當り前ぢやアないか。』

『それがその、旅裝をした、女の方でしてね。美登屋茂助樣はこちら樣でございますかと聞きますから、ヘエ、左樣でございます。何方からと申しましたら、ハイ私はお種と申し、伊勢から參つた者と仰しやつて下されば、旦那樣は御存知の筈でございます。お目にかゝらせて下さいましと、何だか仔細が有りさうな樣子でございます。旦那お心當りがございませうか。』

聞かれてハッとした美登屋の茂助、今までケロリと忘れてゐましたが、伊勢から來たと言はれて初めて思ひ出した。そこでもしやと自身に立つて來て、暖簾の

蔭から店の方を覗いて見ますと、絣の上つ張りに手甲脚絆、白足袋に草鞋ばきで、被つてゐた手拭をとり、裾の埃を拂つて居ります若い女、紛れもなく當夜敵娼にした、龜屋の若紫でありますから、茂助が膽をつぶすまいことか、

『アッ、扨はあの時の約束を本當にして、遙々江戸までたづねて來たのか。サア大變なことになつた。』

と醉も一時にさめちまつた。慌てて元の座へ戻つて、

『周平々々、お前は店へ出ちやアならねえぞ。裏口から廻つてどこかへ姿を隱しちまつてくれ。ア丶困つたなア、おむらや、飛んだ事が出來ちまつた。』

『何ですねえこの人は、いやだよ立つたり坐たりしてさ、落ちつきなさいよ見つともない。一體どうしたといふのです。』

『どうも斯うもねえや。ア丶弱つたなア、仕方がねえ、實は白狀するがこれ〳〵だ。』

と先年伊勢の古市で遊んだ時、出來心の戯れから、肚にもない夫婦約束をした一件を打明けました。おむらが忽ちツーンとして、

『へエー、そりやアお娯しみですねえ。初會惚れをしてそんな約束をするやうでは、餘程氣に入つたに違ひない。遙々尋ねて來られて嘸お前さんも嬉しいでせう。私なんざアそれ迄のツナギだつたんだね。莫迦にしてやアがらア、面白くもない、い丶から早く顏を見せて喜ばしておやりよ。』

『オイ、何を言つてるんだ。冗談ぢやアねえ。そんな女かどうか物は試めしだ。あの代物を見てから口をき丶なよ。今もいふ通りホンの氣紛れに口を辷らせたのを、先方に眞に受けられちやつたんだ。こんな閉口したことはねえ。ア丶どうしよう。』

と茂助はベソをかいて居ります。おむらも氣がかりだからそつと立つて來て、暖簾の間から覗きましたがプーッと吹出し、

『ちよいとお前さん、あの女かえ。』

『叱ーッ、大きな聲をして笑ふなよ。何しろ田舍でも豚娘と云はれた女だ。如何に乃公が醉狂だからとて、あんな化物を女房に出來るか出來ねえか、つもりにも知れさうなものだ。と言つたところで、正直に押かけて來られたのには驚いたな、おむらや、後生だ。笑つてゐねえで何とかしてくれ。賴むから助けてくれ。』

『呆れて物も言へないよ莫迦々々しい。然しお前さんがそれ程困るんなら、助けて上げないものでもないが、その代りこれに懲りてこの後浮氣をすると承知しないよ。』

『ア丶大丈夫だ。決してそんな事はしねえから、どうか巧くあの女を追返してくれ。』

『フン、こんな時ばかりだよ、お前さんの大丈夫がアテになるものか。一昨日の晩だつて、一體お前さんどこへ行つたの。』

『オイ〳〵何も今こ丶で、そんな詮議を

してゐる場合ぢやアねえ、此通りだ此通りだ。』

『プツ、拜んでるよこの人は、それぢやア私がどんな事をいつて胡魔化しても構はないでせうね、萬事を私に任せるだらうね。』

『ア、任せるよ〳〵。』

『そんならお前さんも裏口から、早く姿をお隠しなさいよ。後は私が引受けたから。』

『有がてえ、何分たのむ。』

慌てて茂助が逃げ出しました。その後でおむらが落つき拂つて食べかけの膳部を片づけ、靜かに店へ出て參りまして、

『入らつしやいまし。私は茂助の妹でございますが、承れば遙々と、伊勢からお越しになつたといふこと。どういふ御用でございましたらうか。』

シラを切つて尋ねました。若紫のお種は形を正しまして兩手をつき、

『これはこれは、お妹さんでゐらつしやいましたか、お初にお目にかゝります。私は種と申しまして、何をお隱申しませう、恥かしながら二年以前、伊勢は古市の龜屋へお泊りの茂助樣と御夫婦の約

束をいたしましたものでございます。』

とさすがに顔を赤めながら、挨拶をいたしましたが、一心に思ひ込んだ意氣組は、歴然と態度に顯れて居りますから、おむらもびつくりいたしました。

思ふお方が死んだとは

たゞ假そめの戯れとも知らず、男の言葉をあてにして、伊勢から江戸へ百何十里、東海道を遙々と、出て參りました女の一念、こりやア一筋縄で、防ぎ切れるものではないなと、早くも見て取りました茂助の女房が、突嗟の間に思案をきめまして、

『オヤオヤそれはまア御遠方を、折角わざわざおいで下すつたのに、何といふお氣の毒なことでございませう。兄の茂助はモウあなたに、お目にかゝれぬ身となりました。』

言はれてお種が顔色を變へ、

『それではどこぞ遠國へ、旅立ちでもなさりましたかえ。』

『遠國どころか十萬億土、歸らぬ旅の黃泉とやら、モウ此世には居らぬのでございますよ。』

『な、何と仰しやります。そ、それではあの茂助さんは……』

『はい、つい先月の十八日。コロリと申す急病で、亡くなりましたのでございます。』

眞つ赤な噓を平氣でつきながら、ワーツとばかりに泣いて見せましたのは、おむらも芝居の上手な女でございます。アツと仰天した若紫。

『チエ、情ない。今が今まで、そんな事とは露知らず、晴れて添ふ日を樂しみに、苦界の勤めのその中にも、指折り數へて年明けを、待ちに待つた甲斐もない。はる〳〵此處までお訪ね申したに、良人と定めた茂助さんは、モウ此世にはおいでなさらぬのでございますか、ア、私は何といふ、仕合せの惡い女であらう。』

と氣も張り弓の弦斷れて、よゝとその場に泣崩れた若紫、不覺の涙に取亂しましたは、道理千萬な次第であります。おむらも空涙をこぼしまして、

『お察し申ます〳〵、それ程までに亡き兄を、慕うて下されたお志、兄が壯健で居りましたら、どのやうに喜んだことでございませう。よく〳〵御緣が無かつたものと見えますねえ。』

しんみりと慰めにかゝりました。お種は涙を押拭ひまして、

『よう仰しやつて下さいました。有がたう存じます。この上はせめて御佛壇へ、お線香など上げさせて下さりませ。』

と賴んだ。そりやア困るともいへません。

『サア〳〵どうぞ、取散らして居りますが、それでは此方へお上り下さいまし。』洗足を與へて草鞋をとかせ、奥の一間へ案內したが、何しろ噓つぱちだから茂助の位牌なんぞはありません。兎に角佛壇へお燈明をあげ、しめつぽい聲を出しまして、

『兄さんや。伊勢の古市からお前をたづねて、お種さんといふ方が來て下さいましたよ。モウ少し待つてゐてあげればいいものを、諸行無常といひながら、ア、悲しい事になりましたねえ。』

と又も袂を顏へ押當てて見せた。お種はます〳〵胸が一杯になりまして、お線香を佛壇へ、上げる手先も打ふるへ、暫らくはその前に泣伏して居りましたが、

『いつ迄嘆いても際限のないこと、思へば私のやうな、不容色者の分際で、こんな御大家のお內儀さんにならうなどと、法外な望みを起しましたのが、無理だつたのでございませう。私が惡うございました。』

と打しをれて居るお種の胸中、推察するに餘りあるところでありますが、おむらはさうは感じません。生きてゐる茂助をコロリで死んだなどと、出たら目の噓を言つたのが自分ながら、可笑しくて可笑しくて堪らないところへ、嘆きに打沈んでゐるお種の顏が、見れば見る程一層珍妙でありますから、尙更たまらなくな

つて可笑しさがこみ上げて參りますのを齒を食ひしばつて我慢して居たが、これを胡魔化すには何かしやべらなくてはなりません。そこでどこ迄も悄然と取つくろひ、

『お種さん何を仰しやる、大家などとは飛んでもないこと、成程茂助の生前は、どうやら繰廻してはゐましたが、兄に亡くなられて主人の無い今日になりましては、とても此世帶を張つて行けるものではございません。取引先に澤山の債務もあり、内輪も今は火の車、この屋體骨を他手に渡すのも、遠からぬことでござんせう。お恥かしう存じます。』

泣言を並べて愚痴をいつた。これもお種に愛想を盡かさせる戰略の一つとは、知る由もない正直ものの若紫。

『オヤまアそれは〱、貴女もえらい御苦勞をなされた事でございませう。そのお取込みの中へ、永居をしてお邪魔になつても相濟みませぬが、私もやうやくこれ迄出て參りました心ゆかしに、どうか茂助樣のお墓參りをさせて頂き度う存じます。御案内を願はれますまいか。』

と申しました。ぐつと詰つておむらが、

(サア困つた)

と途方にくれましたが、どこ迄頓智の働く女か判らない。忽ちに思ひつきまして、

『ハア承知いたしました、どうぞそれでは兄の墓へ、參つてやつて下さいまし。』

と外出の支度をいたしました。

薄情のむくい

といふのが幸か不幸か、此おむらといふ女の實兄が、先頃歿しまして墓所も手近の田原町にある。そこへ案内をしようといふ考へ、これからお種を連れてその菩提寺へ參りますと、門前の花賣婆アさんが、

『オヤこれは〱、美登屋のお内儀さん、ようこそ御參詣で、……』

聲をかけられたにはギクリとしたが、それを打消すやうに大聲で、

『ハア、兄さんのお墓參りに來ましたのよ、いつもの通り、お花とお線香を願ひます。』

『ハイ〱、承知いたしました、いゝ鹽梅にお天氣つゞきで……』

婆さんしきりと世辭を云ひながら、駄線香へ火をつけて居ります。その中に石塔の前へお種を連れて行き、又も泣聲をうるませながら、

『お前さんが訪ねておいでの兄はこゝに眠つてゐるのですよ。』

と指さしをした。お種は思はず走りよつて、石塔へしがみつき、

『茂助さん、情ない姿になつておくれだねえ。こんな悲しい事にならうとも知らず、夫婦になる日の樂しさを、寢た間も忘れずに待つてゐた。私の心の中を察して下さいまし。』

身も世もあられず泣いて居ります。背後に立つて見てゐるおむらが、

『ウフフ、うちの兄さんも、大へんな色男になつたものだね、こんな化物に慕は

れては、草葉の蔭で嘸驚いてるだらう。』と思ふと、又もや可笑さしがこみ上つて來るのを、股を抓つたり髪の毛を指にからんで引張つて見たり、いろ〳〵苦心しては笑ひをこらへて居ります。その中にお種はやうやく涙を收めまして、

『マア私としたことが、あまりの悲しさに取亂し、あなたの前で見つともないところを御覽に入れました。どうぞ笑つて下さいますな。これから又お宅へ歸りますと、やる瀬ない思ひが増すばかり故、勝手ながら、これで失禮させて頂きます。就きましてこの金子は嫁入る時の手土産にもと、奉公中に心がけて置きました。僅かなものでございますが、良人と定めた茂助樣が、斯ういふ事になつて見ますれば、私に在つても用のない金子故、其儘あなた樣へお頼み申します。どうぞ御回向料の中へなりと、お使ひなすつて下さいまし。よろしうお願ひ申ます。』

内懷ろへ手を差入れ、胴巻の口をとくや、取り出しました一包、僅かなものどころか、五十兩としてあります。浮川竹の奉公の身で、これだけ丹誠するのは容易ならぬこと、お種が如何に一心になつてゐたかが判りませう。その大金を惜氣もなく、おむらの手へ渡しました上、手に提げてゐた小風呂敷から剃刀を一挺取出したから、アナヤと驚くひまもなく、緑の黒髪をぷつつりと切つて、手早く白紙へクル〳〵と押包み、

『これはお種が良人への心中立、どうぞ御佛壇へ、捧げて上げて下さいまし。』

涙ながらに差出しました。さすがのおむらも度膽を拔かれ、啞然として返す言葉もありません。お種は後から〳〵と、せき來る涙を押へもあへず、暇乞ひもそこ〳〵に、此墓場を立去りましたが、それつきり阿部川町の美登屋へも現れません。狐につままれたやうな心持で、歸宅したおむらがこの話をすると美登屋の茂助が飛上つて喜び、

『有がてえ〳〵。持つべきものは女房だ。お前の機智と辯口で、化物の押かけ女房を追拂つた上、思ひもかけず五十兩の儲けがころがり込んだなんぞは、近頃にない大出來だつたね。何、黒髪をどうするつて、くそでもくらへ。そんなものは髢屋にでも呉れてやんな。何しろ目出度えから今夜は夜あかしで、惡魔つ拂ひに飲んで騒がう。』

ひどい奴があるもので、おむらが今日の可笑しかつた事、それをこらへるのが苦しかつた事を、身振手眞似で話すやら、夫婦とも腹を抱へて笑ひこけ、嬉しがつて一晩飲みあかしたといふのですから、少しでも人情があつては出來ない藝當でございます。こんな量見の良くない奴に仕合せの續かう道理はございません。果せるかな、寛政の十一年師走の二十日、三筋町から出ました火事が折からの烈風に煽られ、見る〳〵中に四方へ延燒いたしまして、三十餘ケ町を灰にする大火となりました時に、眞風下になつた阿部川町の美登屋茂助方は申す迄もなく丸燒になりました上、茂助は二階からころげ落

ちて腰を打ち、途端に右足を打折つて跛になつちまつた。保險制度のなかつた昔、火事に燒けたとなると致命傷です。それでなくとも左り前になつてゐたところ、箸一本持たぬ燒出されとなつては目も當てられません。平生の行ひが惡いから、世間の信用も同情もなく、昨日に變る無一物、さうなると薄情なもので、おむらは良人を振棄てどこへか逐電、奉公人も散々ばら〳〵、美登屋は一夜に沒落してしまひました。

野路の萩餅

身から出た銹とは申しながら美登屋の茂助、薄情と不品行と、家業怠慢との祟りが一時に現はれ、世間からは對手にされず、土地にもゐられなくなつて跛を引き〳〵、江戸を立退いて流浪の旅に出ましたが、古人の歌にも、

『落ぶれて袖に涙のかゝる時、人の心の奧ぞ知らるゝ。』

とやら、斯うなつてはどこへ行つても鼻つまみでございます。杖に縋つて目的地もなく、今でいへばルンペン、乞食同樣、拾ひ食ひをしたり、他人の合力に縋つたり、廻り廻つて差かゝりましたのが、近江の國栗太郡老上村、有名な野路の玉川のあるところ、この邊一帶は昔から、萩の名所でございます。茂助が川つぷちに休んでゐると、通りかゝつたのが親切さうな老農夫で、

『オウ、大分苦しさうだが、どこか身體でも惡いのかね。』

聲をかけられたから顏を上げ、

『ハイ、有がたう存じます。御覧の通りの片輪者で、片足は跛を引いて居りますが、外にどこも惡いところはございません。』

『だが大分弱つてゐるらしいのう。』

『ハイ、面目次第もありませぬが、實は二三日前から水ばかりで命をつなぎ、一粒の米も口へ入れて居りません。』

『ヤレ〳〵それは可哀想に、腹のへつてゐるのは何より辛い。然しそれなら何で此處まで來ながら、萩の餅の接待を頂きに行きなさらねえのだ。』

『へエー、萩の餅の接待と申しますと……』

『アレ、お前は知らねえのか。ハヽア、土地に馴れねえ人だと見えるの……』

『ハイ私は、初めて御當地へ參りましたもので。』

『アヽさうだらう。さもなければ、あの御接待を知らねえ筈はねえと思つた。』

『一體それはどこでございます。』

『これを眞直ぐに行つて聞きなさい。村外れに妙壽庵といふ御庵室があつての、毎年八月十五日には、土地の者であれ旅人であれ、誰彼の差別なく、道行く人に萩の餅の、供養をして下さる事になつてゐる。今日はその當日だよ。』

『ホウ、それは又有がたいことで。』

『尤もこれには由緒がある。といふのはその昔、京都白川の里に鳥子太夫といふ長者が住んで、この方に葛城姫といふ、美しい娘さんがあつた。』『へエ〳〵。』

『ところが鳥子太夫の後妻、仲瀬といふのが心のねぢけた女で、自分の連れ子の菅根姫に、長者の家督をつがせ度いと企んだな。』

『ヘエー、惡い奴でございますな。』

『それには惣領の葛城姫を、追出してしまはなくてはならぬといふので、事毎に辛く當つて出て行けがしに苛めたが、葛城姫は風に柳と從順に仕へるから、邪慳な繼母もこれには困つた。その上自分の娘の菅根が母に似ぬ優しい性質で、陰になり陽になつては義姉の葛城をかばふのだよ。』

『フーム、感心な娘でございますな。』

『義姉の葛城も菅根の志を嬉しく思つて、仲のいゝ事は實の姉妹も及ばぬ位だつた。そこをつけ込んで仲瀬が今度はいよ／＼葛城の生命を奪ひ亡き者にしようと考へ、八月十五日お月見の晩、御馳走に餅をこしらへて半分は萩の葉に包み、半分は包まずに置いた、これが目標、この包まない方には何と怖ろしい毒藥が仕込んであつたのだ。』

『ギエッ、ひどい事をしましたなア。』

『その支度が出來たから仲瀬は菅根を呼んで、サアこのお餅を姉さんと二人でお上りなさい。然し呉々もお前さんは、萩の葉に包んでない方のを食べるんぢやアありませんよ。お前は包んだ方を食べ、葉のない方を姉さんに上げるのですよと言ひふくめた。』

『ウーム、可哀想に、どうなりました。』

『ところが菅根は怜悧な娘だから、早くも母親の恐ろしい企らみを察しちまつた。エ、何といふ情ないお母さんだらう。この上は自分の命を姉さんの身代りにして、お母さんへ最後の御意見をしようといふ、健氣な決心をして何と自分がその毒の入つた方を食べ、義姉には萩の葉で包んだ餅を進めた。サア堪るものではねえ。菅根は忽ち毒に中つて血を吐いて死んぢやつたが、葛城姫は何ともなかつた。母親の仲瀬は逆に可愛い我子を殺しちまつて狂人のやうになつたが、初めて自分が惡かつたと改心、

葛城姫にあやまつたけれども、長者が承知しないで仲瀨を放逐すべえとした。』

『いゝ氣味ですねえ、當り前だ。』

『ところが心の優しい葛城姫は、父に縋つて母の詫言をし、菅根の弟の千鶴丸に家督を繼がせ、自分は妹の菩提を弔ふ爲め、飾りを落して尼法師になりなすつた。それが妙壽庵の御庵主さまでな、自分の身代りになつてくれた菅根姫の命日に當る八月の十五日には、供養の爲めに萩の餅を、接待なさるのが毎年の例になつただよ。』

と老人が由來を物語りました。

合縁奇縁

茂助は有がたい庵室の所由よりも、そこへ行けば食物の、接待に有りつけるといふのが嬉しくて堪りません。厚く禮を述べて老人に別れ、教はつた通り來て見ると、成程村外れに妙壽庵といふ尼寺がありまして、葛城姫の妙壽尼とは、勿論時代も違つて居りますが、それから何代目かの庵主に當る、妙孝尼といふ年配の尼法師が、數名の若い尼さんを差圖しては、しきりと萩の餅の接待をして居ります。茂助も杖に縋つて群衆の中に交り、

『どうぞ私にも、一盆頂かして下さいまし。』

と頭を下げる。

『サア〳〵御遠慮なく。』

と盆の上へ、米と蕎麥と粟と三種の牡丹餅を、いづれも萩の葉に包み、澁茶を添へて差出します。茂助は何遍も押頂き、

『有がたう存じます。』

と受取りながら、ヒョイと顏を上げて相手を見ると驚きました。白衣に墨染の腰衣で、甲斐々々しく働いてゐる若い尼僧こそ、頭を丸めて姿こそ變れ、紛ふ方なき古市の、若紫でありますから、茂助は思はず我を忘れ、

『アッ、お前はお種ッ。』

愕きの聲を擧げると先方も、

『アレまア、あなたは淺草阿部川町の……』

『如何にも美登屋茂助の成れの果だ。』

『ヒエッ、それでは貴君はまだこの世に。』

『ウーム、それを言はれると面目ない。いつぞや伊勢の古市で、初めてお前に逢つたとき、ホンの一時の氣紛れから、心にもない夫婦の約束、無邪氣なお前をからかつた事も、すぐに忘れて江戸へ歸つた後、散々道樂をした揚句、貰つた女房は水茶屋の、女中上りの莫連女、おむらの色香に迷ひ込み、家業も怠つてゐたところへ、約束違はず年明けの、お前に遙遙尋ねて來られ、今更あれは冗談だつたと、斷りもならず卑怯にも、私を死んだ事にして一時のがれに騙したのだ。』

『えッ、それでは妹さんと思つたのは……』

『サア何を隱さうあれが私の女房おむらだつた。夫婦馴合ひでお前を欺き、折角丹誠した五十兩を、巻上げた上に髮まで切らせ、二人して手を叩いて、お前の迂濶を笑つたほど、罪造りの私だもの、その儘無事に榮えて居られよう筈はない。間もなく火事に遭つて燒出され、女房には逃げられる店は潰れる。とう〲こんな袖乞ひの身に落ぶれ、生きてゐるとは名ばかりの今の有樣。こりやア皆なお前の罰だ。圖らずめぐる近江路に、斯うして顏を合はしたのも、神や佛のお見せしめだらう、散々乃公に金を使はせて置きながら、落目になると振棄てゝ逃げて行つたおむらに引かへ、佛さまのやうなお前の眞心、それを無にした私は大ばか者だ。アヽ、惡い事は出來ぬものと、私は今初めて目がさめたよ。』

大地へ兩手をついて美登屋茂助が、さすが悔恨の涙にくれました。あまりの意外にお種は夢に夢見る心地、今まで死んだとばかり思つてゐた茂助が、變り果てた姿で現れたのですから、

（扨は重ね〲私を欺してゐたのか、さうとも知らず此方はどこ迄も良人へ眞實を盡し、亡き跡の後世を弔ふ氣で尼にまでなつてゐたとは、アヽ、どこ迄私は莫迦だつたのだらう）

と思ひますと、お種は赤くなり青くなり、胸は怒りに煮え返るばかりでございます。その心を察した茂助は五體を大地へ投うち、

『その腹立ちは道理だ。どんなに詫びても詫び切れまい。どうかお前の心の解けるまで打つなり蹴るなり存分にして、少

しでも恨みを晴らしておくれ。』

男泣きに泣いて謝罪致しましたのは、全く心の底から前非を後悔したものと思はれます。その體を見るとお種の孝順尼も、次第に心が鎮まつて參りまして、

『何を仰しやります。浮世の修羅も妄執も、きれいにあきらめて御佛へ、お仕へして居ります尼修行、戀も怨みも用のない世捨人でございます。何とも思うては居りませんから、どうぞ氣にかけて下さいますな。』

茂助の手を取つて扶け起し、あらためて萩の餅を進めましたが、心の中は千萬無量の思ひでございます。茂助はやうやく空腹を滿たして力もつき、再び杖に縋つてトボ／＼と立去らうといたしました時、最前からこの樣子を、庵室の中でぢつと見て居りましたのが當代の庵主妙孝尼で、

『孝順尼や、その旅人を呼戻しなさい。』

聲をかけられて茂助も足をとめて振返る。お種の孝順尼は何事かと不審顏に、庵主の面を見まもりますと、

『孝順尼、委細はこれで聞きました。そなたは今から還俗して、その茂助とやらいふお人と、當初の望み通り女夫になつて、目出度く末永う添ひ遂げなされ。』

『エッ、何と仰しやります。』

『サア良人の菩提を回向の爲め、出家をしたそなたながら、その良人が無事で此世にゐると分つたら、俗に還つて夫婦となり、妻たる勤めを盡すのが、女の道ではあるまいか。茂助殿とやらもこれ迄はお心得違ひが禍ひして、不仕合せに惱まれたやうなれど、懺悔に罪も滅すとやら、心から悔悟をなされた樣子ゆゑ、そなたも怒りや恨みを解き、茂助殿の介抱をして上げなさるがよい。』

優しく諭しました庵主の捌き、お種も斯う許されて見ますれば、元より自分が生涯の良人はこの男と定めて、誠を盡した對手のこと、嬉しくない筈はございません。今更滿面を火のやうにほてらせて、庵主の粹な計ひを感謝いたしましたが、茂助もこれでルンペンの境涯から更生する事の出來ましたのは改心の賜ものでございませう。妙孝尼は夫婦に世帶を持たせ、庵室の近所に茶見世を出し、こゝで例の萩の餅を商はせる事にしましたところ、おはぎの美味いのとこの一件とが評判になつて大層繁昌。夫婦仲むつまじく靜かに餘生を送りましたのも合縁奇縁と申すべく、これは野路の玉川土地の名物萩餅茶屋の由來といふ、一席のよみ切でございます。

（をはり）

ニキビ吹出物でお困りの方に……

何よりも『にきびとり美顏水』をお勸めいたします。ニキビ吹出物に非常によく效くので大評判の藥です。

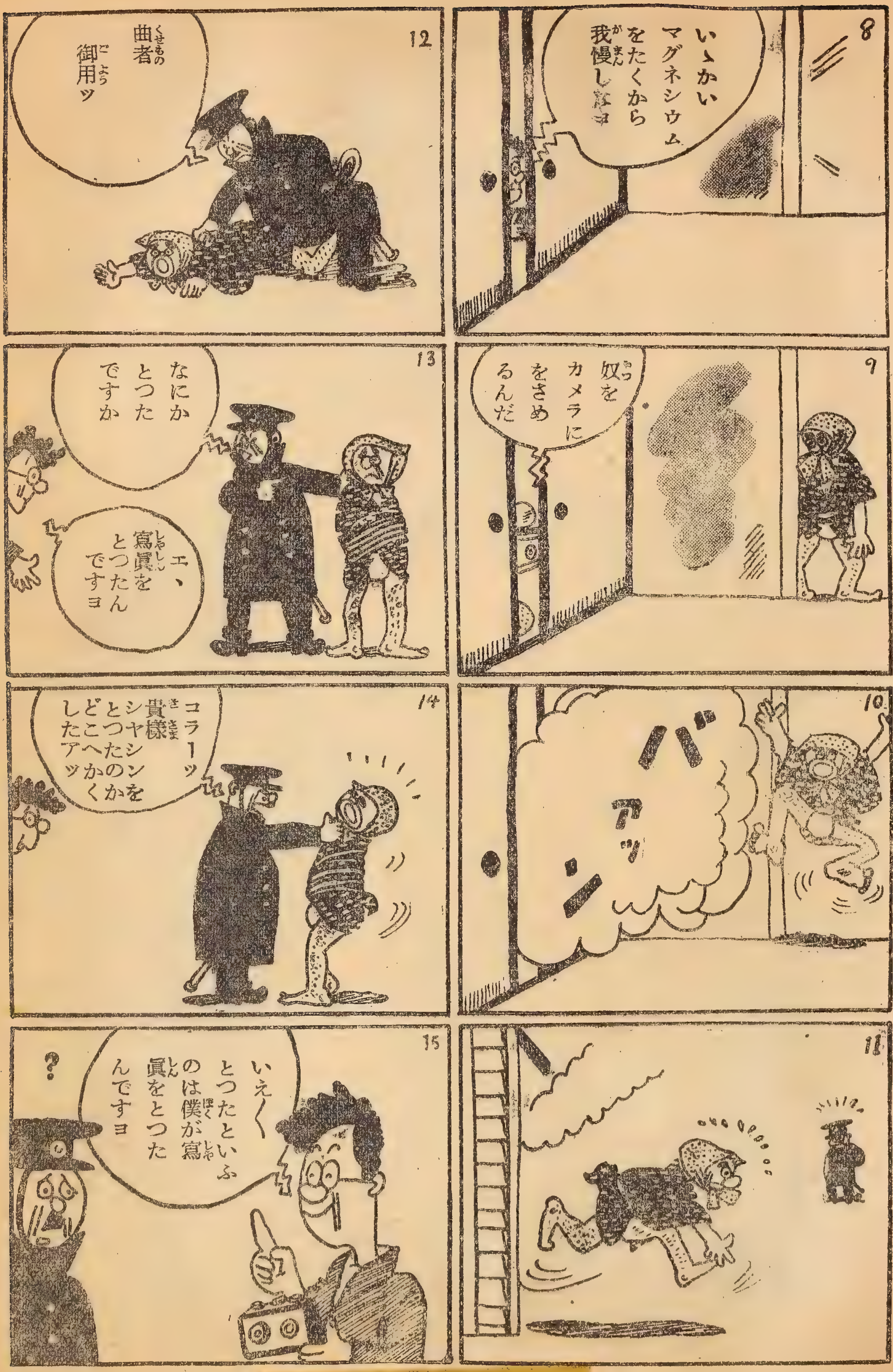
蚤蚊南京虫等の毒虫でカユい時

蚤・蚊・南京虫・家ダニ等の毒虫でカユい時にこの藥をつけますと、不思議なくらゐよく效きますので、小さいお子方のある御家庭などでは、とりわけ重寶がられてゐます。

美容藥としても

この藥は『藥用美顏水』とお言はれ、美容藥としても廣く愛用されてゐます　定價 四十錢・六十錢・一圓廿錢

（第十壱回）カメラと犯罪の巻
のんびりめい探偵
志村つね平作
犯罪とカメラは密接な關係があるなるほどネ
カメラによつて記録をとめておくこと。フーム
寫眞機出しておくれ
ハイ
あなたもうおやすみなさいおそいわヨ
あなたアいゝ加減におやすみなさいヨ
そしてその夜半ゴトゴトゴトミシミシイ
まあこはいワッ
シーッ静かにく押入へかくれろ


いゝかい
マグネシウム
をたくから
我慢しなヨ
奴を
カメラに
をさめ
るんだ
バ
アッ
ン
曲者
御用ッ
なにか
とつた
ですか
エ、
寫眞を
とつたん
ですヨ
コラーッ
貴様
シヤシンを
とつたのか
どこへかく
したアッ
いえ〱
とつたといふ
のは僕が寫
眞をとつた
んですヨ
?

岩に咲く花
長篇家庭小說
小島政二郎
土井栄画

遺言問答

『咲子――』

二階で秋之助と話し込んでゐて、いつ伯父達が歸つて來たのか知らずにゐた咲子は、梯子段の下からさう云つて呼ぶ伯父の聲に、ビックリした。

『……』

返事をしずにゐると、

『おい、咲子。咲子はゐないか。』

ミシッと梯子段を上る音をさせて、伯父が重ねて呼んだ。

『何か御用ですか。』

素直にハイとは答へられなかつた。

『用があるから呼んでゐるのだ。ちよいと降りて來なさい。』

『……』

仕方なしに、咲子は重い腰を上げて、いや〳〵梯子段を降りて行つた。

伯父夫婦は、主人顏をして茶の間で茶を入れて菓子を撮んでゐた。

『お前さつき市藏の遺言狀があると云つてゐたが、あるなら見せて貰はう。』

伯父はいやにしかつめらしい態度を裝つて底冷たい口調で云つた。

無いと知つて、さう云ふ無理難題を云ふ伯父を咲子は面憎く思はずにゐられなかつた。口惜しさに、唇を噛んで彼女は伯父の顏を眞面に睨み附けた。

『私が御覽に入れる前に、伯父さん御自身勝手に御覽になつて、あなた方に都合が惡いことが書いてあつたものだから、無斷で破いて捨てたかどうかなすつたくせに――』

咲子はどうしても突ッ掛かるやうな口調になるのを避けられなかつた。喋つてゐるうちに、口惜し涙がポロ〳〵こぼれて來た。

『おい〳〵、疑心暗鬼でさう出鱈目を云つちや困るよ。わしはさつきこゝへ着いたばかりで、どこに何が仕舞つてあるのかも知らない位のものだ。それが、さう手ッ取り早く市藏の遺言狀を探し出して破くなどと云ふ手際のいゝことが出來るものかどうか、積つて見ても分りさうなものぢやないか。第一、遺言狀なんてものは、その邊へはいゝふり出してあるものぢやあるまい。』

『伯父さん、あなたはこの名簿に見覺えがおありでせう？』

咲子は二階を降りて來る時一緒に持つて來た例の父の『交友名簿』を叩かんばかりして示した。

『いや、一向見覺えがない。』

『いゝえ、ないとは云はせません。ここに「下田正人」と書いたカードが挾んであつたのです。その上に「度重なる不德義故

義絶す、死亡通知も出すに及ばず」と赤インキで書いてありました。私がお墓詣りにうちを出掛ける時までちやんとあつたものが、歸つて來て見ると、ないんです。』

『お控へなさい。默つて聞いてゐれば、いゝ氣になりやアがつて――。何を證據に、そんな云ひ掛かりを附けるんだ。』

『いゝえ、云ひ掛かりではありません。』

『默らないか。わしの聞いてゐるのは、そんな名簿のカードのことではないのだ。市藏の遺言狀の有無を聞いてゐるのだ。』

『ですから、そのカードを遺言狀だと思へとしじうお父さまは仰しやつてでした。その大事な――』

咲子がそこまで云つた時、突然伯父が、

『ハハハ。』

と、天井に顏を向けて、下品な聲で笑つた。

『何を云ふかと思つたら――。ハハハ。幾つになつても、女子供と云つて仕樣のないものだ。咲子、偉さうな口を利いても、お前何も知らないんだな。』

『……』

應酬のしやうがないまゝに、咲子は默つてゐた。

『おい、咲子。遺言狀と云ふものはな、幾ら當人がこれを遺言と思へと云つても、そんなものは法律的に、何の效力もないんだ。そんな書きッぱなしの遺言狀なんか、誰も遵奉する義務を生じないのだ。遺言狀が法律的に效力を生じるには、辯護士の立ち合を求めて、執筆調印したものに限るのだ。交友名簿に書き附けられてゐたカードなど、遺言狀どころか、たゞのいたづら書に過ぎない。そんなものを、わしが恐れて破棄する謂はれがないぢやないか。』

『……』

伯父の態度は壓倒的だつた。法律のことなど、何も知らない彼女には、反駁したくつても、反駁のしやうがなかつた。

『それとも、法律的の手續の完備した遺言狀があるなら、見せ

私用に當てた公金の償ひに困じ、自殺を計つた舅の下田市藏を救ふ爲、悲壯にも三輪徹は過失死を裝ひ、それで得られる保險金で舅を救つた。だが程なくその舅の市藏も死に、後に殘つた徹の妻の咲子は、遺兒の太郎と幼い弟の秋之助を抱へ、悲しみの日を送る中、意外や七々日の命日の墓參で、死んだ筈の夫に出會つたではないか！　彼女は夢かと許り仰天する。

一方此時また、市藏の實兄で腹黑の下田正人は、出拔けに秋之助の後見人として、咲子等の住居に乘込んで來た。これを見た咲子は、豫て亡き父が、知人名簿の一個所に、自筆で正人との義絶を宣してゐる事を思ひ出し、それを證據に、奸惡な伯父を退けようとした。だが噫！　早くもその重大な證據物は、正人に依つて盜み取られてゐたのだ。咲子は思はず呆然となる。

（前號までの梗概）

て貰はう。』

『……』

脳溢血でふいにこの世を去つた父に、そんな遺言状を作製する暇のないことは説明するまでもあるまい。

『どうだね？　あるなら、出して見せて貰はうぢやないか。さう云ふ本當の意味の遺言状には、國家が法律を以つて權利を附與してゐる。だから、何人もこれに從はなければならない。勿論わしも法律には至つて從順な男だ。』

『……』

かう云ふのを、三百代言式と云ふのだらうか。咲子は無念の齒嚙みをする外なかつた。

『咲子、默つてゐるちや分らない。あるのか、ないのか。』

『……』

たとひ口が腐つても、この伯父の前に、ありませんとは云ひたくなかつた。

『これ程云つても返事をしないところを見ると、ないのだらう？　さうだらう？』

『……』

『わしはないものと認める。』

『……』

口惜しいが、その通りだつた。

『遺言状がなければ、改めてわしからお前に云ひ渡すことがあ

る。お前も知つてゐる通り、お前は三輪家に嫁いだものだから、下田家の人間ではない。さうだらう。そのことはお前にも分つてゐるだらうな。』

『……』

三輪咲子を名告る以上、さうに違ひなかつた。

『ところで、ここは下田家だ。い丶かね。下田家の當主は秋之

助だ。さうだらう。ところが、秋之助は未成年者だから、法律的に戸主ではあるが、成年に達するまで、戸主の權利を行使することが出來ないことになつてゐる。つまり後見と云ふものが必要になつて來る。いゝかね。ところで、後見人は最も等親の近いものがこれに當るものと法律によつて規定されてゐる。』

『……』

咲子は呆然として聞いてゐるだけだつた。

『今も云つた通り、お前は三輪家の人間になつてゐる爲めに、下田正人がゐる以上、下田秋之助の後見人になる資格がない譯だ。殊には女だしな。そこで、今日以後秋之助の後見人はわしだ。下田家の人間は、すべてわしの指揮指圖に従ふ義務がある。分つたかね？』

『……』

法律のことはよく分らないが、法律と云ふものは、伯父の云ふやうな理窟一點張りのもののやうにも思へるし、伯父が出鱈目を並べてゐるやうにも思へるし、咲子には判斷が附かなかつた。

こんな時こそ、良人を連れて來て、伯父と一議論して貰つて、秋之助を、父の下田家を安全に守つて貰ひたいと思はずにゐられなかつた。それも、良人が死んでゐるなら仕方がないが、死んでゐると思つたのは早計で、事實は生きてゐる――現に、さつき墓地で語らつて來たことを思ふと、良人を伯父の前に連れて來ることの出來ないことが、殘念とも無念とも、云ひやうがなかつた。

『そこで相談だが、今日以後何事につけわしの命令に服從することを誓ふならよし、それともさつき市藏の墓前でのやうに、事毎にわしに楯突くやうなら、下田秋之助の後見人として、わしは即刻このうちから出て行つて貰ひたいのだが――』

『……』

『どうだね？　わし達と協調して、秋之助の成長、下田家の繁榮を共に共に計る誠意があるかね？』

『……』

何を云ふのだらう。何が下田家の繁榮か分つたものではないと咲子はをかしさに堪へない氣がした。

なんにしても、伯父と話を交へたのが失敗だつたと咲子は後悔したが、間に合はなかつた。話を交へてゐるうちに、いつの間にか、不利な位置に落し入れられてしまつたのだ。

話をもとに戻さなければならない。さう思つても、ヒタ押しに押して來られた結果だけに、今更撥ね返すスキがないのに咲子は無駄にもがく外なかつた。

伯父はなんにも知らないから、そんな通り一ぺんのことを云つて偉がつてゐるのだ。さうは思ふのだが、徹が命を投げ出して下田家を守つた苦衷については、ああ、絶對に口外出來ないことではないか。

徹なかりせば、下田家は今頃は恥辱の底に顚落してゐた筈ではないか。その徹の妻の自分が、下田家について何の發言權がないなんて——。

馬鹿を云ふにも程がある。が、その點に關する限り、咲子も、徹も、公然と伯父と爭ふことが出來ない悲しさ。

と云つて、この不德義な伯父の指令に默々として從つて生きて行けようか。

下田家を出るのはいゝと易いことだが、咲子がゐなくなつた後、年端も行かない秋之助が、伯父にいゝやうにされるのは火を見るより明かだつた。それと知りつつ、秋之助の姉として、どうして下田家を出て行けよう。

『……』

女と生まれた悲しさ。咲子は溜息と共に、途方に暮れる外なかつた。（つゞく）

（作者より皆さまへ）

これから、羽田から飛行機で支那へ行くことになりました。御承知の如く、文士としてペンの從軍です。勿論、第一線、彈丸飛來の下まで行くつもりです。ペンを劍にかへて勇しく出征するつもりです。彈丸に打たれて死んでもよい覺悟は出來てゐます。

しかし、大體に於て生命には別條なく歸つて來られるさうですから、來月號はウンと頑張つて充分書きます。

——今月は、皆さまには、ほんとうに申譯ないことですが、これだけしか書けませんでした。それでも一生懸命書いたつもりです。ともかく、飛行機に乘る一時間前まで、一睡もせずに書いて漸くこれだけです。がまんして下さい。

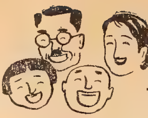
『岩に咲く花』は、銃後の家庭讀物として、これ以上のものはないと云はれるやうな良いものを書くつもりで眞劍にやります。來月はウンと頑張つて、御期待にそむかぬつもりです。

——出發の朝——

大日本雄辯會講談社ニュース

感激と面白づくめの『キング』秋の增刊

十月十八日頃發賣



滿天下の熱烈なる待望に應へて愈々十月十八日頃キングの增刊が發賣されます。今度の增刊は、今までにない大傑作揃ひです。顏觸れといひ內容といひ正に天下一品。更に錦上花を添へるものに、キング獨特の大特輯『支那事變感激實物語』『大感動美談』『皇軍慰問餘興大會』あり、銃後並に戰線への慰問

として又と無い最上の贈物です。今から大した評判ですから御買ひ洩れの無い様に最寄りの書店へ豫め御申込置き下さい。（大特價　六十錢）

キング文庫新發賣

『上手と下手の岐れ路』

キング文庫は發賣以來、出るもの出るもの、悉く面白い！　實に爲になる！　實に便利だ！　重寶だ！　と全國津々浦々到る處で非常な大歡迎大賞讚を戴いて居ますが、今回發行の『上手と下手の岐れ路』で丁度七十册目に當ります。

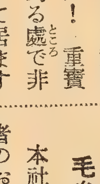
御承知の通りキング文庫は形こそ小さいが、これこそ眞にキングのエキスとも言ふべき寶玉です。從つて最近特に五百部、千部といふ大量注文に接して一同感激致して居ります。續々お求めの程御願ひ申上げます。（定價二十錢、送料三錢）

代理部の特別奉仕品

毛糸編物材料と名古屋帶

本社代理部では特に銃後の愛讀者のおつとめ品として、皇軍將士慰問用の防寒毛糸編物と實用名古屋帶の特別奉仕を致して居ります。時局柄到底他では眞似の出來無い奉仕品として各方面から絶大の御好評を戴き、續々大量の御用命を拜して感激致して居ります。詳細は婦人倶樂部十月號を御參照の上此際至急御下命の程御願ひ申上げます。

飯村庄次氏



本社准社員飯村庄次氏は、病氣の爲昭和十一年十一月休職となり、爾來入院加療中の處遂に去る八月二十六日永眠せられました。享年二十九。氏は栃木縣河內郡の人、大正十四年五月本社少年部に入り、昭和十年十二月准社員に昇進、大いに其の前途を屬望されて居りましたのに洵に痛惜に堪へない次第であります。

愛國の名著快著　續々出版！

本社出版部では今回更に愛國の熱血迸る次の名著を出版致しました。時は燈火親しむべき秋、戰線に銃後に是非御愛讀下さい。

『支那事變少年軍談』

◇南京城總攻擊

◇一番乘り武勇傳

◇壯烈加納部隊長

何れも一讀血湧き肉躍る大武勇傳です。（各巻一圓、送料內地十四錢）

『愛國唱歌』（第一輯）　愛國の熱情溢るゝ名歌曲を佐佐木信綱博士、小林愛雄氏等の諸先生が選輯されたもの。（定價一圓、送料內地十二錢）

『西鄕隆盛』　著者は文壇の長老武者小路實篤先生、之こそ非常時局下萬人必讀の大名著であります。（定價一圓八十錢、送料內地十四錢）

『宮本武藏』（空の巻）　吉川英治先生會心の傑作、御愛讀を願ひます。（定價一圓八十錢、送料內地十四錢）

將棋上達の急所　香落の攻擊法

◇◇上手三二飛・下手一四步早仕掛け戰法◇◇

八段　花田長太郎

香落戰法は他の駒落と比較して非常に微妙な變化に富んでゐるものですから、その積りで根氣よく研究して貰はねばなりません。さうすると自然他の將棋と異つた香落獨特の面白味が出てくるものです。

扨て前回は下手方の端じ攻め一四香に對して、上手方『三六步の場合』『一七步打の場合』『五二金の場合』並びにその變化を詳細研究しましたから、本號ではその先の變化を續いて考究することにします。諸君はまづ左の基本圖形をごらん下さい。

『攻擊手順』

三四步、七六步、四四步、二六步、三五步、二五步、三三角、一六步、三二飛、四八銀、四二銀、一五步、六二玉、六八玉、七二玉、七八玉、九四步、九六步、八二玉、五八金右、七二銀、一四步、同步、同香、一三步、同香ナル、同桂……(基本圖形)

『說明』

本號では、こゝで『一三飛ナルぞ！』と下手方一八飛と廻るのです。でこれを上手方がどう受けるか？　それをまた下手方どう攻めるか？　これが私達の研究の題目となる譯です。

例によつて理解を早めるため、分類してみますと、

一八飛に對して｛(1)二二飛廻りの方法　(2)二五桂跳ねの方法

から二ツに分類されるのです。

まづ第一に『一八飛、一二飛』の場合から考究してゆくことにします。

なほ、曩に一八飛の處一四步と受けた場合の變化は既に研究してますから、參考までにその手順を再錄してみますと、

棋相觀測臺

フグ禁止令

◇夏中暑さに苦しみ拔いた棋士達も、秋風がそよそよ吹いて來ると急に元氣になる。こゝ約八ケ月間病氣のため休戰してゐた副將軍花田八段も漸く出場可能となつた。病源を尋ねてみると呑み過ぎ喰ひ過ぎ。美食家の同氏はフグが大好物で、仲良しの金子八段なぞをかたらつて、殆ど連日のフグ屋通ひ。そして遂に兩氏とも胃腸を惡くして暫らく寢込んでしまつた。今年もそろそろフグの季節、將棋大成會でもまた寢込まれては名人戰以下の催し物に疵が付くので、近くフグ禁止令を出すさうだ。

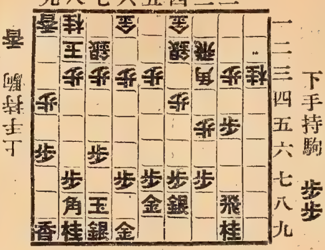
ハリキリ渡邊

◇近頃のハリキリ棋士は渡邊東一七段である。七段決勝戰で最後の塚田七段との三番に優勝して、愈〻名人決定戰に七段を代表して參加することになつた。かうなると渡邊東一名人の出現も

『一三歩、同香ナル、同桂、一四歩以下の變化』

一四歩、一二飛、二四歩、同歩、一八飛、二五桂、一六飛、一一香、三六歩、四三銀、三五歩、三二金、二六歩、一四飛、同飛、同香、二五歩同歩、一二飛、一九飛、三四歩、一一歩、三三歩ナル、一二歩、三二と、同銀、五五角、二九飛ナル、七四桂、九二玉、八二角……。

以上で下手方必勝となつたのです。



（基本圖形・一三桂迄の局面）

(1) 一二飛迴りの場合

『攻擊手順』

一八飛、一二飛、一四飛、四三銀、四六歩、三二金、一七桂、五四銀、四七銀、四三金、五六銀、六四歩、六八銀、七四歩……。

『說明』

そもそも下手方一八飛と迴つた主眼的意味は何か？　と言ひますと、『一三飛ナルぞ！』の威喝によつて敵の駒をこの一點に束縛することにあるのですそしてこのことは半面に自分の駒の活躍範圍を廣くする意味になるのです。

上手方一二飛がその現れで、一二飛と受けることはとりもなほさず敵の一八飛によつて牽制された形ですが、この場合穩かな防手と言ふことが出來ます。

次ぎに下手方は一四飛と浮くことを忘れてはならない。これは軈て一七桂と跳ね出す準備行動であつて、同時に敵の『歩切れ』の狀態を利用したものなのです。

四三銀、四六歩、三二金、は香落戰の常套的手段であつて、下手方としては次ぎの一七桂飛びの手段が重要視されるのです。この桂跳ねの遲速が延いては勝敗に關係してくることがあるので私達は注意を要します。

（第一圖は七四歩迄）

以下双方とも『腰懸け銀』の駒組で對抗します。

扨て、この駒組に於いて兩軍の攻擊の目標は何處か？　と言ひますと、

（一）、上手方は香車を持つてゐる關係上、七、八筋を狙つてゐる。

（二）、下手方は『捌き』の焦點として、四筋を狙つてゐる。

隨つて上手方は『四三金、五四銀』の連鎖により四筋を堅守し、下手方は六八銀によつて玉頭の守備を堅固にしてゐる譯です。かうした氣持で兩軍の駒の動きを眺めると、それぞれの意味がよく諒解されることでせう。

『攻擊手順』

四五步、同步、四四步、四二金、三

▲銃後の護り職場報國
▲耐へよ困苦鍛へよ健康

全然不可能でない。それに名人戰參加の資格として事實上『七段半』の段位を承認されて、月給も二百五十圓と昇格（八段三百圓、七段二百圓）したし名人戰參加第一の對局相手が問題の人坂田三吉氏『まづ坂田氏を血祭に擧げて』と元氣で大阪へ下つたから、近くその吉報が齎されるだらう。

萩原八段の元氣

◇涼秋と共に健康を囘復した棋士に萩原八段がある。萩原八段と言ふと神經衰弱を聯想する樣に何時も身體の不調に惱んでゐた同氏だが、この夏十三世名人關根翁と同伴北海道登別溫泉に遊んで以來すつかり元氣囘復して、歸京しての第一戰に『讀賣』紙上で關根翁を負かしてしまつた。關根翁は例の飄逸から『溫泉に伴れて行つたり負かされたりして何處にもあひません』と笑つてゐる。二戰二勝の萩原八段は次ぎが木村名人との對局だが、このトーチカ名人をと今から非常にハリキツてゐるから定めし見物であらう。

將棋大成會移轉

六歩、同歩、三四歩、二二角、二四歩、三二金、二五桂、二四歩、三三歩ナル、同角、同桂ナル、同金、四三歩ナル、同金、二一角、四二飛、一三飛ナル……下手方優勢。

『說明』

第一圖面をもつて双方の駒組はほゞ完成したものと見ていゝでせう。

挑戰の機微！　下手方は愈〻攻擊目標とする四筋から四五歩と『捌き』の火蓋を切つたのです。

四五歩、同歩、四四歩打……

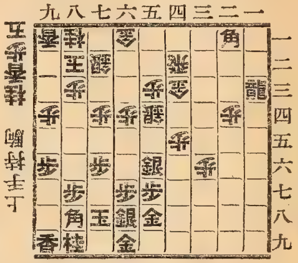
こゝで一四飛と浮いてゐた意味もズンズン明らかになつてくる。下手方は斷然四筋に位を占める。なほこゝで三三角ナル、同金……と角を交換して指す順もあるが、敵に角、香を握らせては危險だから止める方がよいでせう。

かく敵を四二金と退却させて置いてから、三六歩と突く。これは非常な好手であつて、この手を起點として下手方の『捌き』は完全にほぐれてゆく。

卽ち、三四歩、二二角、二四歩、これで飛、桂、の活動はつき、三二金と二筋を堅めて來た時に、二五桂跳ね。

こゝに二五桂跳ねの好手順が生れるとは誰れが想像したらう。かうなれば下手方は局面を支配して、棋勢は益〻

（第二圖は一三飛ナル迄）



有利に傾いて來る。好手は好手を呼ぶ。この棋道の金言は眞實で、二四歩、三三歩ナル、同角、同桂ナル、同金……

三三同角の處同金の順も考へられるが、同金なら同桂ナル、同角、の時に二三金打、の痛打順がある。

續いて下手方の四三歩ナルは何といふ輕手でせう。手順に自分の角筋を通して、敵同銀なら三三角ナル。

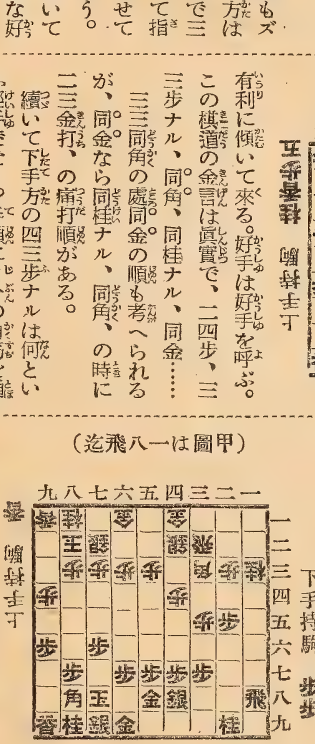
そこで同金と上手方取り込めば、好手は續々と踵を接して現れてくる。二一角打、四二飛、一三飛ナル……の形となつては、如何に上手方實力ありと雖、もはや手の下し様がないでせう。

(2) 二五桂跳ねの場合

『攻擊手順』

三四歩、七六歩、四四歩、二六歩、三五歩、二五歩、三三角、一六歩、三二飛、四八銀、四二銀、一五歩、六二玉、六八玉、七二玉、七八玉、九四歩、九六歩、八二玉、五八金右、七二銀、一四歩、同歩、同香、一三歩、同香ナル、同桂、一八飛……。

（甲圖は一八飛迄）



『說明』

前項では下手方の一八飛に對して上手方一二飛と對抗して結果が面白くありませんでしたから、今度は二五桂と作戰を變更してみることにしました。

これは香落戰らしい積極的戰法であ

◇將棋大成會ではこの程赤坂表町の舊宅から麴町區一番町十四ノ四號（商工大臣官舍前）の大邸宅に移轉した。こん度の新事務所は部屋數と言ひ庭と言ひ眞に申し分がないもので、何でも關根翁の知人が特志的に將棋界のために殆んど無償で提供して吳れたものださうだ。棋士諸君よ！　これで立派な容器は出來た、次ぎは中身だが、容物に劣らぬ立派なものにして貰ひ度い希望は天下の將棋ファンのひとしく抱くところだ。

新名人の抱負

◇流石に新時代の名人木村義雄氏は名人就任以來着々將棋界の組織を改め、棋士の地位を向上させてゐるが、近くまた棋界功勞者の表彰を何等かの形式で行ふさうだ。この十年間今日の將棋界の隆盛を見るまでには隨分陣痛に苦しんだものだ。こゝらで功勞者に感謝の意を表することは遲ければとて決して早くはないだらう。

つて、強く敵飛を成らせて指さうとする、所謂『捌かせて捌く』香落戰獨特の指法なのであります。では、次ぎにその戰法を吟味してみませう。

『攻擊手順』

二五桂。一三飛ナル、三六歩、同歩、四五歩、二三龍、八八角ナル、同銀、三六飛、二五龍、三八飛ナル、三九歩、一八龍……。

『說明』

そもそも二五桂と飛び出したのは何を目的としてゐるのだらうか？

これは前にも述べたとほり『皮を斬らせて肉を斬る』强氣の戰法であつて、敵飛を成らせる。併し、その代償として自分も飛、角、を捌くぞ！ と言ふのであります。

隨つて敵が一三飛ナルと豫定のごとく成り込んで來た時、三六歩、同歩、四五歩……と今回は逆に上手方から捌きを求めて出たのであります。

こゝで下手方は三六歩、同歩、と取る手を忘れてはなりません。これは穩かな好い手なのですから。

上手方が四五歩と挑戰して出た以上、『捌き』となることは免れません。

そこで下手方としては現在求め得る最上の位置、二三龍と對戰して、八八角ナル、同銀、三六飛、の時二五得、と桂得を許ります。

なほ、上手方として三六飛の處二八歩打の順が考へられますが、二八歩、二五龍、二九歩ナル、同龍……の順序になりますと、桂の交換とはなりますが、その後の飛車の捌きに困惑して仕舞ふのです。

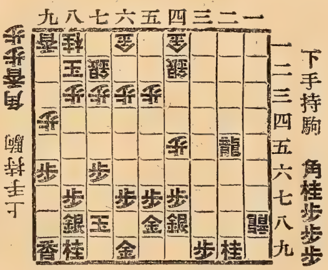
香落の序盤の眼目は『岐れ』の局面にあるのです。駒損は招かなくても、その後の『捌き』に困難する樣では、決して上乘の『岐れ』とは言へないでせう。

『駒の損得よりは寧ろ捌きを』これこそ『岐れ』の局面の信條です。この意味に於いて、上手方が三六飛と、次ぎに三八飛ナルを狙つて强く出たことは本筋と言ふことが出來るのです。

三六飛、二五龍、三八飛ナル、三九歩、一八龍……駒損はあつても、序盤の『岐れ』はまづ五分と言ふところでせう。

隨つて問題は以下の『寄せ』如何にある譯ですが、

（乙圖は一八龍迄）



『攻擊手順』

二三角、五二金左、四五角ナル、二七歩、同龍、同龍、同馬……（下手方優勢）

『說明』

下手方はこゝで二三角打と敵の放れ駒の四一金を攻擊するのです。

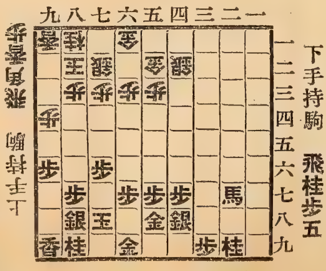
と五二金左と躱すのが普通ですが、また五二角と反擊する隱手もあるのです。併し、五二角打なら二四龍、そして次ぎに四四桂打、を狙ふ。

更に二三角打、二一香打、の順も考へられるが、二一香打なら一四龍、同龍、同角ナル……かうなれば、二九香ナルなら四一馬、結局上手方の香車は餘り役に立たないことになる。

そこで五二金左の方法を採れば、下手方は四五角ナル。

續いて二七歩、同龍、同龍、同馬……

（丙圖は二七同馬迄）



この局面となれば下手方優勢と斷定してもよいでせう。

以上で下手方一八飛戰法に對する上手方『一二飛廻り』並びに『二五桂跳ね』戰法の大體の形式、及びこれが攻擊碎破法が判つた譯。

それでは次ぎに更に新しい變化を研究してみることにしませう。

感冒は手當が遲れると！

一晩で治せるものが一週間もかゝつたり、肺炎になつたりします。『これはかぜだナ』と氣づいたらスグ田口博士の『トラシン』をお服み下さい。

ユーモア小説

天高肥馬の戀

弘木丘太

川原久仁於畫

臨時秘書

『はッ、はッ、はッ、そいつは、寃罪ぢやよ、

知らん、知らん。……何、吉奴？……それも知らん。……はッ、はッ、はッ、まア、兎も角、今夜會へば、萬

事わかるよ。……六時、築地の蝶々だね、わかつた、わかつた。……あ、モシ〳〵、ちよつと待つて呉れ。……えゝッと、あ、駄目、駄目。今夜は、丁度六時から、科學工業會社の連中を、ホテルへ招んどる。……ん、九時には濟むだらう。……それからでも、えゝつて？……ぢやア、九時過ぎ行く。……うん、增資の件は、承知したよ。……うん、うん、よろしい、よろしいわかつた。』

重役仲間から、かゝつて來たらしい、長い電話を、ガチャンと切ると、社長の高塚英吾氏は又、机の上の書類へ、片ッ端から、判コをペタリ〳〵と、押しつゞけた。

（昨日は、晝と夜で三つ、一昨日は、夜が二つ……今日は又二つか？……宴會も、斯う續いたんぢやア、面白くないだらうナ。……それにしても、流石は社長だ。體がよくつゞく。それだけでも、僕はまだ〳〵、社長になる資格はない……。）

社長の大きな机と、斜に向き合つて、小ぢんまりした机で、書類の整理をしてゐた松木啓助君は、會社の宴會と、高等學校の同窓會とが、二つ續いたゞけで、宿醉を三日醉にまで持ち越して、到頭會社を休んだのを思ひ出して、妙な感心の仕方をした。

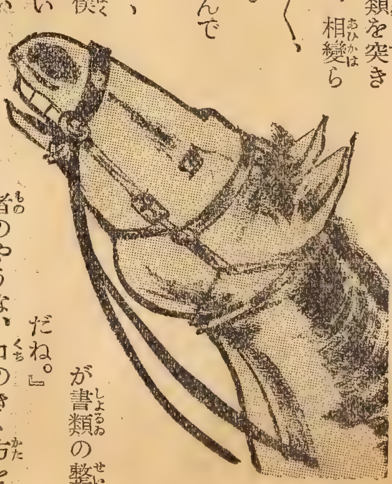
『君……これ、僕の方ぢやない。』

『はッ？』

社長に聲をかけられたので、松木君、吃驚して顏を上げると、社長が左手で、書類を突き出して、右手では、相變らず判コを、ペタリ〳〵、押しつゞけてゐる。

『はッ、すみませんでした。』

『はッ、はッ、はッ、これぢやア、丸で僕が書類の整理をしてゐる見たいだね。』



と、社長が、若い者のやうな、口のきゝ方をして、笑つた。

『はッ、どうも……。』

『はゝゝ、何しろ、臨時雇ひだからナ。まア、後二三日、僕が社長秘書をやらう。……どうだい、君、この椅子に坐らないかね、君が社長、僕が秘書つてことにしちやア、はッ、はッ、はッ……。』

と、大へんな御機嫌だ。

後任が來るまで……といふので、『雀』といふ渾名の、女の秘書が坐つてゐた、小ぢんまりした机の前へ、松木君がこゝ二三日、坐つてゐるのだが、馴れない仕事なので、社長のいふとほり、秘書が社長になり、社長が秘書になることが多い。

（雀でも烏でもいゝから、早く來て呉れないかなア……。）

と、冷汗を拭き〳〵、突き返された書類を、モゴ〳〵整理してゐると、ヂリ、、……と、机の上の電話が鳴つた。電話をきくことなら、秘書でも平社員でも、同じくらゐに、お手のものだ。松木君は、ほッとして、受話器を取り上げた。

『公衆電話からです……。』

と、交換臺にいはれて、松木君は、おや……と思つた。社長室へ、公衆電話からかけて來るなんか、滅多にないからだ。

『モシ〳〵……やア、高塚かね？』

公衆電話にしては、馬鹿に横柄だ、社長を、呼び棄てにしてゐる。

『はア……社長閣下に、御用でございますか？』

少し癪に障つたので、馬鹿丁寧にいふつもりだつたら、到頭社長閣下とやつてしまつたので、松木君は又、冷汗をタラ〳〵と、流した。

『用があるから、電話をかけとる。用の無いものが、電話はかけん……。』

そりやア、さうに違ひなからうが、いやに、理窟ッぽいぢゝいだ。

『御尊名は？』

いよ〳〵癪に障るので、松木君は、わざと變梃な言葉を使つた。

『藤堂と申す……。』

丸で、芝居の臺辭のやりとりだ。

『藤堂といふ人から、電話でございますが……。』

『あ、さう……こつちへ、呉れ給へ。』

と、社長が、判コを捺すのを止めて、自分の机の上の、受話器を取り上げたので、社長が斷れとでもいふかと、電話の上をしつかと押へてゐた松木君は、何んだかがつかりして、受話器をかけた。

『やア、やア……。』

社長が、擊劍の試合のやうな、大きな聲を出した。

『うん？……何？……はッ、はッ、はッ、儂がいひつけたんぢやないて。……わかつとるよ、閣下はお前ぢや、儂は社長殿ぢや、はッ、はッ、はッ。』

話の樣子では、松木君の『社長閣下』が、先方の氣に障つたらしい。……松木君は、ハンカチを出して、そつと首筋を拭いた。

『うん、よし、よし……いゝとも、いゝとも。……何も、御老體を煩はさなくても。……はッ、はッ、はッ、勘辨しろ、御互もう御老體ぢやよ。……ぢやア、今日は來ないね。……うん、よし〳〵、明日、一人でいゝよ、何も御老體……わかつた……うん、何に？』

と、きゝつ放しで、受話器をかけたところを見ると、五錢白銅一枚方、切れたらしい。

『偖て……これで、今日の午後は、手が空いたぞ、有難い！』

と、社長は立ち上がつて、窓の傍へ行つた。カラリと晴れ上がつた、秋の空が、ビルとビルの間に、光つて見える……。

『一つ……久し振りで、馬に乘つて見るかナ。……松木君、君、馬に乘れた筈ぢやね。』

クルリと振り向いて、高塚氏が、松木君の顔を見た。

『はア……。』

松木君の顏には、ちよつと困惑の色が現はれた。

『趣味はスポーツ萬般、乘馬を最も得意とす……入社の願書に確かさう書いてあつたね。』

（宴會も宴會だが、憶えもいゝナ、敵はん！）

松木君は、完全にシャッポである。

五度通ひて五度落つ

（口は禍の門……筆も禍の門か！）

乘馬靴へ足を突ッ込みながら、松木君は胸の中で、さう思つた。

入社試驗の願書へ、『乘馬を最も得意とす』と書いたばかりにどうにも社長の眼の前で、馬に乘らねばならぬ破目に、陷つてしまつたのだ。

『さうだ、君にも、家の馬に、一度乘せようと思つてゐたんだ。……丁度いゝ、さア、これから荻窪へ行つて、一緒に乘らう。』

社長室で、斯ういはれたので、松木君は、すつかりあわてゝしまつた。

『はッ……。でも、乘馬靴も、乘馬ズボンも、用意がございませんが……。』

『大丈夫だ、來客用が、ちやんと備へてある。』

これでは、逃げようにも、逃げられない。

（生憎、痔が出てゐまして……。）

松木君が、痔の經驗者なら、斯ういつて逃げるところだが、生來頗る健全なるケツの所有者である松木君には、この際、そこに氣がつかなかつたのは天なる哉、命なる哉だ。

が、松木君が、少々あわてゝるだけで、蒼くなるほど動轉しないのは、松木君に些かたりとも、馬に打ち跨つた、經驗があるからだ。

大學時代に、松木君は、乘馬部の演習に、五度通つた經驗がある。その代りに、五度通つて、五度落馬した……これが、爾來松木君を、乘馬から、遠去からせた原因でもあり、今又『筆も禍の門』と嘆ぜしめる原因でもあるのだ。

といふのは、高塚商事社長の高塚氏は、馬キチといはれるほど、有名な乘馬愛好家だ。荻窪の別莊へ、厩舍と馬場を建設して、閑があればそこへ出かけて、武藏野を馳け廻つてゐる、馬

も逸物を三頭、揃へてゐる——」

『うん、趣味は、必らず「乘馬」と書くことだよ。』

と、先輩に敎へられるまでもなく、五度乘つて、五度落ちたりと雖も、身苟くも手綱取つた身だ、松木君は、元よりそのつもりでゐた。唯『乘馬を最も得意とす』は、松木君、ちよつと調子にのつて、書き過ぎた形だ。

が、その效果が、入社試驗にあつたかどうか、それははツきりわからないが、反應は確かにあつた。然かも、社長のお相手を仕るといふ、頗る派手な反應だ。

『おい、成田……アキレス號と隼號とを、出しとけッ……。』

と、馬丁にいひつけてゐる、高塚氏のハリキツた聲が、バンガロー風の別莊の緣側で、乘馬靴に拍車をつけてゐる、松木君の耳に入つて來た。

(アキレス號に隼號か……どつちにしても、癇の强さうな名前だナ!)

松木君は、思はずブルブルッと、武者震ひをした。

ナメやがつたナ

(天高く馬肥ゆ……か、いゝ氣持だなア……。)

手綱を片手に、胸を張つて、隼號の背中でユラリユラリと搖られながら、松木君は、いゝ氣持になつてゐた。

が、乘馬ズボンに乘馬靴で、馬場へ現はれた時の松木君の氣持は、相當悲壯なものだつた。

(君、よろしく賴むよ。)

心では、さう念じながらも、松木君は隼號の鞍へ、デーンと荒つぽく、尻を下ろした。

『恐はく〳〵乘るとテンで頭から、馬が乘つた人間を、馬鹿にしよる。』

と、學生時代、乘馬演習に行つた時、最初から、聞かされてゐたからだ。

その、デーンが

効いたと見えて、隼號は馬場の中で、松木君のいふことを、なか〱よく聞いて呉れた。

『ほゝう……案外上手いぢやないか、それなら大丈夫だ、すぐ出よう。』

と、馬場の周圍を、松木君が隼號を速足で走らせるのを見て、アキレス號に乘つた高塚氏が、馬場の眞中から、聲をかけたかと思ふと、もうとつとと、表へ出て行つたので、松木君も、嫌應なしに、その後を隨いたのだ。

ぽかり、ぽかり、ぽかり――。

晴れ上がつた碧空の下、肥馬に跨つて、武藏野の秋を行く……。

(いゝなア……。)

松木君は、もう一度胸を張つて、大きく息を吸つた。

ぱツ、ぱツ、ぱツ……。高塚氏の拍車が、チリンと鳴つて、アキレス號が速歩で、馳け出した。

ぱツ、ぱツ、ぱツ……。松木君が、拍車を入れるまでもなく、隼號がその後を逐つた。

(うわツ、いけないツ!)

不意を喰らつて、松木君が兩手で、手綱を持つたまゝ、鞍の前へ獅嚙みついた。

(おや〱、こいつ、案外甘えナ。)

隼號が、松木君の正體を見破つた

のか、ぱッ、ぱッと歩度を早めた。先刻、馬場の中で乘つた時とは、丸で、ダンテの歩度と、反動だ。

『たはッ！ たはッ！ たはッ！

鞍の上で、ポンポンと、投り上げられる度に、出すまいとしても、こんな聲が出た。斯うなつたが最後、手綱を控へるも、騎座を締めるもない。何んとも收拾出來ないことを、五度通つて五度落ちた松木君には、わかり過ぎるほど、よくわかつてゐる……。

（社長、いゝ加減に、並足にして呉れんかなア！）

鞍に獅嚙みついたまゝ、そッと上眼を使つて見ると、アキレス號は、ぱッぱッと、威勢よく後足で、砂を蹴つて走つて行く……。

（もう澤山……。これ以上走つたら、ひつかけられる！）

松木君は、今ぞ『筆も禍』を、沁々と感じて、泣き出したいくらゐだ。

ぶるゝんッ！ 隼號が、大きく鼻を鳴らしたのと、ぱッと飛び出すのとが、一緒だつた。

ぱゝッ！ 隼號の背中が、ぐーッと、ふくれあがつたやうに思つた。ハリキツた隼號が、力一杯馳足で走り出したのだ。

『押へて、押へてッ！』

アキレス號を拔く瞬間、高塚氏が、大きな聲で呶鳴つたのが、松木君の耳に入つたが、押へられるくらゐなら、誰しも苦勞はせん。

膝は全然締つてゐないし、尻はあちらこちら、一囘毎に所を變へてやつと鞍の上へ落ちてゐる程度、鐙なんかは、もう疾つくの昔に、兩方とも外れてゐる……。

ぱか、ぱッ！ ぱか、ぱッ！ 隼號の狂奔は、いつ收るかわからない！

ぶーん――と、松木君の耳許で、風が鳴つた。ぱかぱッ、ぱかぱッ……蹄の音と一緒に、道路の砂利が、ざアッと川の水のやうに、後へ流れて見えたのを、微かに憶えてゐる……。

松木君は、何百粁も、何千粁も、隼號の背中に獅嚙みついて、とッ走つたやうな氣がする……。

（あッ、もういけないッ！）

五度の經驗から割り出して、松木君は隼號の頸へ、兩手をかけると、ずる〳〵の、鞍から乘り出して……いや實は、投り出されたから、兩手をかりただ……頸へブラ下がると、潔く兩手を離した。

コロ、コロ〳〵、コロ〳〵、コロ……自分でもをかしいほど、松木君は土の上を、轉げ廻つた。

（畜生ッ、第六囘目の落馬だアッ！）

松木君は、大の字になつて、土の上へ仰向けになると、目を開けて見た。

（はッ、はッ、はッ、いつかの時と同じだ、矢張立つてやがらア。）

松木君は、腹の底から、をかしさがこみ上げて來た。

自分の體間近に、隼號がキヨトンとして、自分の顏をのぞき込むやうに、長い顏をブラ下げて、立つてゐたからだ。

（天高く馬肥ゆ……か。）

毛並のいゝ隼號の前肢と、その上に擴つてゐる青空を見上げて、松木君はいゝ氣持になつた。

ペロリ！　何う思つたのか、隼號が、長い舌を出して、寢てゐる松木君の顏を、悠然と舐めた。

『わッ、畜生ッ！』

松木君は、飛び起きると、行きなり隼號の横ッ面を、拳固でガーンと、ドヤシつけた。

『ほッ、ほッ、ほッ……。』

不意に、若い女の、笑ひ聲だ。松木君がギョッとして振り返ると、少し離れたところに、若い美しい娘が、五つ六つの女の子と一緒に、しやがんでこちらを見てゐる。

『お姉ちやん……オウマ、パカパカッ。をぢちやん、どうしたの？』

女の子が、その娘に、まはらぬ舌で、しきりと聞いてゐる。

『はッ、はッ、はッ……。』

何んとも、恰好がつかないので、松木君は、大きな聲で笑つた。

『あのう……大丈夫でせうか？』

不意に、娘が聲をかけた。

『大丈夫だから、笑つたのです。』

松木君は、ぶすッとした顏付で、さういふと、痛さうな腰付をして、やッこらやと、鞍へ跨つたが、この返事は、どうやら今日社長室での電話の恨が、些か殘つてゐて、思はず、同じ口調で、返事をしたものらしい。

『まア……。』

と、その娘が、土で白くなつた、松木君の肩の邊へ眼をやつて、嫣然笑つた。

社長の別莊で、社長のハリキリ聲を、聞いた時！　同じやうに、松木君は、ブルブルッと、全身が震へた。が、今度のは、武者震ひぢやない、娘が餘り、綺麗だつたからだ。

たはッ！

『松木君……今日から、新しい人が、來る筈だからね。來たら、事務を引きついで、舊の係に歸つてよろしい。』

社長から、さういはれたので、松木君は、思はずほッとした。

といふのは、社長室にゐる限り、社長の眼につく、社長の眼につけば、時々馬に引ッ張り出される、引ッ張り出されゝば……その結果はわかり過ぎる位、はッきりしてゐる……。

しかし、昨日やッとのことで、隼號に乘せられて（決して松木君が乘つて歸つたのではない）厩舍へ歸ると、高塚氏が賞めて吳れた。

『ほゝう、隼號に引ッかけられて、馬と一緒に、無事に戻つて來るのは、相當な腕前だよ、あれ位、引ッかければ、隼號は大抵、乘り手を置きッ放しにして、一人で歸つて來よる。はッ、はッ、はッ！』

仕方なしに、松木君が默つて、隼號の頸筋を叩いたら、又ペロリと顏を舐められた。

（おい、おい、人を舐めるのも、いゝ加減にしろよ。）

と、松木君は、フンガイしたが、高塚氏がゐるので、今度は、横ッ面を、撲る譯にも行かない。

『はッ、はッ、はッ、君はよつぽど、そいつに惚れられとる。もう大分、婆アになつたが、こいつは兎も角、雌ぢやからナ。』

と、社長が、ニヤ〳〵笑つたので、松木君は、すつかりテレてしまつた。

が、雌馬に惚れられたところで、何んの足しにもならない。それよりも、松木君自身の胸に、昨日から少々チラ〳〵するのは、昨日ポーンと大地へ、尻から飛び下りた時に、笑つて立つてゐた、あの娘の姿だ。

（社長に頼んで、もう一遍隼號に乘せてもらつて、あそこへ落ちに行かうか？）

松木君は、そんなことを考へるほど、昨日の娘に、心を惹かれてゐるのだ。

だから、秘書の後任が、今日來て、自分が社長室から去るとなるとその機會も、數少くなるので、松木君は、ほッとしたと同時に、何んだかがつかりした樣な、妙な氣持だ。

コン、コン、コン、コン……と、ノックをして、給仕が名刺を持つて、入つて來た。

『あ、よろしい、すぐこゝへ通して……。』

と、高塚氏が、名刺を見て、ニコ〳〵笑つた。

『どうぞ……。』と、給仕の聲と一緒に、ハイヒールの音が、コッコッと聞えたので、松木君が思はず、書類から眼を離して、今入つて來た靴音の主を見た。

たはッ！　松木君は、昨日隼號の背中で、ポーンと投ふり上げられた時、出すまいとしても、どうにも止まらなかつた、あの聲と同じ聲を、もう少しで出すところだつた。

今の今まで、書類の上に、ぽーッと描いてゐた、昨日のあの娘の本物が、今日は輕快な洋服を着て、眼の前に、立つてゐたからだ。

が、こんな場所へは、初めて入つたらしいその娘は、少し上がり氣味と見えて、松木君の存在なんか無視して、社長の方へだけ、丁寧にお辭儀をした。

『あのう……雅子でございます、どうぞよろしく……。』

ソプラノか、アルトか、松木君には、兎も角いゝ聲だと思つた。

『やア、來て呉れましたか、どうも御苦勞さま……。ほゝう、早速洋服を、着て來ましたね、

うん、なか〳〵美しい。……どうだ、松木君、前任の「雀」女史よりも、遙かに綺麗だらう、はッ、はッ、はッ！』

と、高塚氏が、不意に松木君の方を向いて、大きく笑つたので、

『はッ、そ、さうであります……。』

と、泡を食つた松木君は、眞赤になつて立ち上がると、兵隊のやうな返事をしてしまつた。

『まア……。』

と、雅子といふ、その娘は、兩手で顔を押へたが、もう一人、外に人がゐたことに、初めて氣がついたらしく、すぐその手を顔から離して、松木君の方を向くと、輕くお辭儀をしたが、

『あらッ！』

と、口の中で、小さく呟くのを、松木君は、聞き逃がさなかつた。

（しめたッ、覺えてゐて呉れたかッ！）

と、松木君は、胸の内で、手を合はさんばかりに、感激した。

が、馬から振り落されて、顔をペロリと舐められ、怒つて馬の横ツ面を、むきになつて、張り飛ばした男……こんな男を、昨日の今日、忘れてゐるやうでは。

『あれは、顔は綺麗だがね、どうも少し、パアでね。』

と、頭をさした指の先で、クル〳〵と、渦を捲かれることになる。

松木君歎きの秋

（天高く……松木啓吉歎くの秋か？）

流石は秋だ、銀座で

も、空は碧く、清々しく晴れてゐる。

が、松木君の胸の中は、梅雨時のやうに、憂鬱だつた。臨時秘書から、元の文書係に戻つたので、馬の災難は、免れた筈だし、その馬に乗らなくても、雅子とは、毎日顔を合はせてゐる筈だ。天高く馬肥え、松木啓吉欣ぶの秋……になつてゐる筈だが、松木君は、今日も一人淋しく、晝休みの銀座を、齒の間に挾つたトンカツを妻楊子でせゝりながら、心も足も重く、ブラ〳〵歩いてゐる。

（サラリーマン、金と力はなかりけり……か。）

今の松木君には、金と力が欲しかつた。

（家が金持ちで、柔道三段の、ラグビーの選手か。……どう考へたつて、敵ひつこない。）

松木君は、又ほッと、溜息をついた。

金持ちで、柔道三段……こいつが、松木君にとつて、憎らしい戀敵なのだ。

姓は、片岡、名は辨三……松木君とは、机を二つほど間にして、同じ文書係だ。

が、机は二つくらゐしか、間がないが、財布の中身は、大分間がある。月の二十二、三日頃になると、松木君の財布には、五十錢銀貨が多くて四五枚、下手間誤つくと、二三枚といふことがあるが、姓は片岡、名は辨三の財布には月給日直前、即ち二十四日といふのに、十圓札の四五枚は、必らず入つてゐる……といつて、月給日から月給日まで、同じ十圓札をぢいッと、財布の中で、飼育してゐるのではない。使つては入れ、使つては入れ……つまり、辨ちやんは金持のお坊ちやんなのである。

力の方……これも、ちよつと、財布の中身ほどの、違ひはある。『スポーツ萬般』なんかと、入社志願の願書へは、麗々しく書いたものゝ馬の一件で、はッきりしてゐるとほり、松木君のスポーツ神經は、あまり發達してゐないし、腕力も、先づ並といふところだ。

それに比べると、姓は片岡の方は、柔道が三段で、大學時代はラグビーの選手、今でも東西對抗のラグビー競技では、前衛になつて、押して押して、押し捲くつてゐる。

その片岡君が、雅子さんに、立候補してしまつたのだ。

『おい、今度の、社長の秘書、いゝぢやないか。俺や、ちよつと來たぞ……。』

さういつて、松木君の背中を、ドーンと叩いたが、松木君は、翌日になつても、叩かれたところが、痛かつた。

が、背中の痛いのなんか、松木君にとつては、何んでもないことだ。それよりも辛いのは、心の傷手だ。

といふのは、雅子さんが、近頃どうも、片岡君に、好意を見せてゐるやうに、松木君にも、思へてならないからだ。

昨夜は、二人で帝劇へ行つたやうだし、一昨日は、晩飯をどこかで一緒に食つたやうだ。それに今日は、晝飯を二人で、どこかへ食べに行く相談をしてゐた。

（ペイ〳〵の月給取で、然かも目の前で、馬になめられたところまでお目にかけてゐるんだからナ。金持で、スポーツマンのお坊ちやんには、とても敵ひつこありませんよ、ふんだ！）

いつかは、その馬になめられた話を、ザックバランに持ち出して、打ちとける自信を持つてゐた松木君も、斯うなるといひそびれるばかりか、考へれば考へるほど、憂鬱になつて來る……。

（あツ、畜生ツ！　片岡の奴、何んて嬉しさうな顏を、してやがるんだらう！）

いつの間にか、四五間先を、雅子と並んで、ニヤ〳〵笑ひながら、歩いてゐる片岡の横顏を見ると、松木君は、妻楊子でホジクリ出したトンカツのスヂを、ペッと吐いて、横丁へ曲がつてしまつた。

天網クワイクワイ！

（おや……？）

と、松木君は、盃を屋臺の板の上へ置いて、頭を振つて見た。

『はゝゝ、旦那、大丈夫ですよ。うちの酒に限つて、絶對に頭へは、來やしませんから……。』

松木君が、頭を振つたのを、勘ちがひしたらしく、松木君が、何もいはないのに、おでん屋のオヤヂは、瓶詰のレッテルを見せて、辯解がましくいつた。

が、松木君が、頭を振つたのは、こゝの酒のためではない。今日の晝、片岡と一緒に、仲よく銀座を歩いてゐる、雅子の後姿を見て、松木君は、一日中憂鬱だつた。

（えゝい、酒でものんでやれ！）

自暴くそになつて、二三軒のんで廻つたら、他愛もなく、醉つぱらつてしまつた。

（さア、こゝが最後だ、彼女のために、一人淋しく盃を上げるか！）

何んとなく、物悲しくなつた松木君は、このおでん屋ののれんへ、首を突ッ込んで二三杯のんでゐたのだが、その松木君の耳へ、聞きおぼえのある、男の聲が入つて來たので、思はず頭を振つたのだ。

（あツ、畜生ツ！　野郎だナ！）

隣りの、すしの屋臺から、聲高に聞えて來るのは、戀敵の、片岡辯公の聲だ。

『ほツ、ほツ、ほツ、だから、カーさん、この頃、ちッともいらつしやらなかつたのね。』

相槌を打つてゐるのは、どこかの女給らしい。閉店になつてから、片岡が二三名、引き具して、すしを御馳走してゐる樣子だ。

『でも、カーさんが、こんなに首ッたけつて、珍らしいわね。』

『ほツ、ほツ、ほツ、駄目よ、カーさんは、倦きッぽいから、ものにすると、すぐ嫌やんなつちやふのよ。』

『馬鹿ッ、今度のは、別だ。』

『どうだか、浮氣者のいふことなんか、當てにもなりませんよオだ。』

『どんな人、綺麗な人？』

別の女の聲だが、すしを頰ばりながら、いつてるらしく、聞いてゐても、舌を嚙みさうで、ハラ〳〵する。

『はツ、はツ、はツ、綺麗か、綺麗でないか、見たかつたら、明日の正午、多摩川園の驛前へおいでよ。見せて上げるから……。』

聲だけきいてゐても、辯ちやんが、アゴを撫ぜてゐるのが、眼に見えるやうだ。

『澤山よ、そんなの。でも、相變らず、手早いのねえ、――もう、そこまで、手を廻してゐるの?』
『いつもの手ね、ハルミちやんも、その手で、きうり風呂へ、連れ込まれたんでせう。』
『はッ、はッ、はッ、ハルミなんかに比べたら、素人娘なんか、樂なもんだよ。』
『まア、カーさんつたら、隨分ね。でも、素人衆は後がこはいわよ。』
『はゝゝ、何アに、社長の秘書なんかいつたつて、高がオフイス・ガールぢやないか、金の二三百もありやア、片がつくよ、いつまでも、捲き上げられるのと比べりや、安いもんだよ。』
話を聞いてゐる内に、松木君には、總てがのみ込めた。
杯を持つ松木君の手が、ブル〱ッと震へて、酒が屋臺の板を、一面に濡らした。
『おやぢ、勘定だッ!』
そッと、金を拂つた松木君は、おでんやから出ると、ぐいッと、すしやの店を、睨みつけた。
『はッ、はッ、はッ!』
『ほッ、ほッ、ほッ!』
醉つた片岡のダミ聲と、甲高い女給の聲とが、屋臺の幕から、又洩れて來た。

血戰多摩川原

『疲れたでせう、どうです、その邊の、茶店へでも入つて、休んで行きませんか?』
河原の叢の陰へ、腰を下ろした片岡辨公は、傍に足を投げ出してゐる、雅子の横顔を、いやらしい眼付で、ニヤ〱と眺めながら、先刻から、何度も同じことを、繰り返してゐる。
『えゝ……でも、あたし、もう歸りますわ。』
何んにも知らぬ雅子が、立ち上がりかけた。こゝで歸らせてしまつては、折角網へ入りかけた獲物を、見す〱逃がすやうなものだ。
『ねえ、雅子さん……。』
堪らなくなつた片岡は、ぐッと雅子の傍へ、體を寄せて、太い腕で雅子のしなやかな肩を、抱きかゝへようとした。
『あらッ、いけませんわッ!』
雅子が、きつく拒んだのと、後の叢から、松木君が、ぬうッと出たのと、同時だつた。
『おいッ!』
低いが、鋭い松木君の聲だ。
『あッ!』
辨ちやんは、ギョッとして、立ち上がつた。
『あらッ、松木さん!』
ほッとした雅子は、思はず松木君に、寄り添つた。
『歸れッ!』
唯一言……松木君がはッたと、片岡を睨みつけた。今まで、叢の中に、もぐつてゐたらしく、頰ッぺたに、蜘蛛の巣のやうなものが、ブラ下がつてゐるのだが、それが却つて、凄味を増すほど、松木君の全

身から、烈々たる氣魄が、溢れ出てゐる……。

（まア、松木さん……。）

雅子は、松木君が、馬からずり落ちて、頰ッぺたを馬になめられたのを、憤慨して、立ち上がるや否や、馬の横ッ面を、ガンと撲ぐりつけてゐた、あの時の松木君を思ひ出した。

『歸れつて？　……ふゝゝ、俺は何も君に命令されるこたアないよ。』

松木君に壓迫されて、タジ〱となりながらも、片岡はフンと、ハナの先でわらつて、空嘯いた。

『歸れッ！　默つて歸れッ！』

松木君の聲が、秋空の下で、ピーンと鳴つた。

『歸らんッ！　歸る理由がないッ！』

片岡が、肩を聳して、大きな拳固で、太い腕を叩いた。

『歸れッ、歸る理由があるッ！』

『いへッ、いつて見ろッ！』

『俺がいふ必要はないッ、手前が昨夜、銀座でちやアんと、いつた筈だ。』

『何ッ？』

『雅子さんを、どこへ連れて行くつもりだッ！　雅子さんはナ、紙幣びらを見せれば、すぐにうんといふやうな女とは、女がちがふんだぞッ！』

『はゝゝ、何んだか、俺には少しもわからん。』

片岡は、内心あわてたが、空ッとぼけて、雅子の顏を見た。が、雅子は、美しい顏を、一層美しく緊張させて、松木君の顏を、ぢいッと見詰めてゐる……。

『馬鹿ッ、誤魔化さうたつて、誤魔化されないぞッ！　女給よりも、素人娘の方が、手馴づけ易いといつたのは、誰だッ！　社長の秘書なんかいつても、高がオフィス・ガールだ、二三百も金があれば、文句をいはさぬといつたのは、誰だッ！　みんな、貴樣ぢやないかッ。』

片岡の顏は、流石に、蒼くなつて行つた。が、彼には、腕力といふ自信がある……。

『うーん、貴樣ア、俺と雅子さんの仲を、妬みやがつて、そんなことをいつて、中傷しやがるんだナ。』

『はッ、はッ、はッ……何が、中傷なもんか。昨夜、貴樣が醉つたまぎれに、ペラ〱喋つたのを、聞いてゐたればこそ、こんなことになるだらうと、驛から後をつけてゐたのを、知らなかつた貴樣こそ、オタンチンのスットコドッコイの間拔け野郎だ。』

糞味噌にやつゝけられたのと、雅子がゐる手前、片岡たるもの、叩いてゐる腕を、ぢッとさせて置く譯には行かない。

『うーむ、貴樣ア……。』

片岡は、ぱッと上着を脫ぐと、松木君目がけて、飛びかゝらうとした。

（あッ、松木さん……。）

體格を見たゞけでも、幕内と十兩の勝負にも、ならない位だ。雅子は、松木君が、早く逃げて吳れゝばいゝと、心に祈つた。

が、松木君は、サッと身を引くと、上着の前をはね上げて、右手を腰の邊へ當てゝ、ぐッと身構へた。

『片岡、來る氣かッ！』

『あッ！』

片岡は、ギョッとして、そこへ棒立ちに、なつてしまつた。

松木君の右腰に、ピストルのケースが、下がつてゐる、そのケースへは、松木君の手が指し込まれてゐて、既に引金に指がかゝつてゐる恰好だ。

『はッ、はッ、はッ、これでも來るかッ！』

松木君が、ざくッと砂利の音をさせて、一歩進んだ。

『……………』

片岡が、眞蒼な顏をして、無言で、一歩退いた。

『歸れッ！』

又、一歩前進の、一歩退却だ。

『歸らぬかッ！』

片岡が、松木君の右手を見つめたまゝ、上着をとると、ズル〱ッと、五六歩退却した。

『歸れッ！ 歸らぬと、射つぞッ！』

クルリッ！ 廻れ右をすると、上着を抱へた片岡が、まりを轉がすやうに、體を圓くして、河原を一散に馳け出した。

『あッ、はッ、はッ、はッ……到頭、逃げ出しやがつた。はッ、はッはッ！』

逃げて行く片岡の後姿を、呆然と見守つてゐた雅子は、松木君の笑聲に、はッと我に返つて、振り向いて見ると、松木君が、キャラメルの紙を剝いて、食べかけてゐる。

『まア……。』

と、思はず、雅子が嫣然すると、松木君が、ピストルのケースの蓋を開けて、雅子の方へ近寄つていつた。

『どうです、一つ、召し上がりませんか？』

見ると、ケースの中に、キャラメルが、一杯入つてゐる。

『あらア……。』

と、雅子が呆れて、松木君の顏を見ると、

『はッ、はッ、はッ、二三日前、ケースだけ、近所の古道具屋に出てゐたのを、買つたのですよ、斯うして、キャラメルなんか、持つて歩くのに、便利だと思ひましてね。……さア、遠慮

なく、食べて下さい、はは ゝ。』

さういつて、松木君は、キャラメルを三つ四つ、摑み出すと、雅子の方へ差し出した。

『え ゝ、いたゞきますわ。』

嫣然笑つた雅子の眼と、松木君の眼とが、ピッタリ行き合つた。

『……………。』

『……………。』

雅子の手と、松木君の手とが、キャラメルを摑んだま ゝ、しつかりと、痛くなるほど、握り合はされた。

天高肥馬

ぽかり、ぽかり……。心地よい蹄の音を聞かせて、鹿毛が二頭、ハナを並べて、並足で行く……。

アキレス號に乘つてゐるのは、高塚商事の社長、高塚英吾氏……。

隼號に乘つてゐるのは、退役陸軍少將、藤堂直之閣下だ。

『はッ、はッ、はッ。若い者は、仲がい ゝのウ。』

閣下が、後をちよつと振り向いて、獨言のやうにいつた。

『はッ、はッ、はッ、オヤヂが、娘のことを、妬かなくても、い ゝぢやないか。』

社長も、後を振り向いてから、閣下の霜降りの口髯を見て、笑つていつた。

二人が、振り返つて見たのは、藤堂閣下の隱宅の表だ。

社長の愛馬の一頭、橘號に乘つた、松木君と、門の所に立つた雅子さんとが、馬の上と下とで、何かしきりと、まだ話してゐる……。

『ぢやが、この婿さがしは少し冒險ぢやつたが、大成功ぢやつたよ。』

手綱を、ちよつと引きしめて、閣下が髯を捻つた。

『はッ、はッ、はッ、何アに、僕も君から、娘に婿を探させるから、秘書にしろつて、强談された時には、ちよつと參つたよ。』

社長が、又閣下の顏を見て、返事をした。

『ぢやが、い ゝ婿ぢやよ。儂が、お前さんのところへ、電話をかけた時、「社長閣下」ぢやの、「御尊名は」ぢやの、いつたのが、あの男ぢやさうなが、面白い男ぢやね、はッ、はッ、はッ、はッ！』

『ところが、松木にいはせると、あんたは、「藤堂と申す」といふオヤ

チで、通つとるさうナ。はッ、はッ、はッ！』

『ぢやが、雅子が行つた時、なぜ儂の娘ぢやといふことに、氣がつかんぢやつたらう？』

『そりやア……まさか、「藤堂と申す」オヤヂに、あんな綺麗な娘さんが、つくれようとは、思はんからナ、はッ、はッ、はッ！』

『それも、さうぢや、ほッ、ほッ、ほッ！』

眼を細くした閣下は、女のやうな笑ひ聲を出して、悦に入つた。

ぱッ、ぱッ、ぱッ、蹄の音がして、橘號が、速足で走つて來た。

『はゝゝ、相當乘れるぢやないか！』

『何アに、大したことは、ないんだがね。氣で乘つとるよ、何しろ、振り落されて、馬の横ッ面を、ブン撲つた男だからね。』

話の樣子では、その後松木君は、馬にナメられた一件を、社長の前で、自白に及んだらしい。

『さうなんぢやよ、馬の横ッ面も横ッ面ぢやが、キャラメルのピストルで、柔道三段を追ひ散らした時は、美事だつたさうぢや。尤もその話の後、「あの時はとても勇しいと思つたわ」と、雅子の奴、オヤヂの前で、ノウ〳〵と、のろけよるには、儂もまゐつとるが、はッ、はッ、はッ！』

『はッ、はッ、はッ！』

知らぬが佛の松木君は、腰をフラ〳〵させ乍ら、追つつかうと、一生懸命だ。

（あッ、こゝだつたのか！）

見憶えのある筈だ、松木君にとつては、隼號にペロリとやられた、記念の場所だ。

『さよならア！』

松木君は、四ッ角を曲がる時、まだ門の前に立つて見送つてゐる雅子さんに、馬の上で、手を振つて見せた。

『さよならア！』

さういつて、雅子さんが、思ひ切つた樣子で、顔を眞赤にしながら松木君の方へ、嬉しさうに、投げキッスを送つた。

ぱッ、ぱッ、ぱッ！　天高く馬肥ゆ！

二人の前途を祝福するやうに、橘號の蹄の音が、晴れた秋空に冴えて聞えて來る！

（をはり）

★戀も武勇もしみ〴〵嬉し、富士を讀み合ふ新世帶

日本テレフンケン
キングレコードの洋樂
絶讚！

洋樂愛好家のみならず、お子樣にも誰方にも親しめる！
三枚組
美麗ホルダー入
四圓九十五錢
サンスーシの朝　テレフンケン管絃樂團　カール・ヴォイチイヤツハ指揮
熊のをぢさん
樂しき橇の遊び　テレフンケン大吹奏樂團　カール・ヴォイチイヤツハ指揮
玩具の兵隊の觀兵式　大サロン管絃樂團　ハンス・シユレーガー指揮
雀の行列　伯林ドイツ歌劇場管絃樂團　アルフレッド・シユミット指揮

代理部特選 優良品案内欄

これは便利！

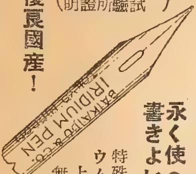
折疊式勉强机

輕便な折疊式ですから、場所をとらず持運びにも便利で、室内室外どこでも自分の好きな所でご使用出來ます。又一臺で机、椅子、本立、黑板、寫生板等七通りに使へ、特にお子様の勉强机として健康にもよい大好評の特選品でございます。

▲特價—大型四圓五十錢、中（十二、三歳位迄用）三圓五十錢、小（八九歳まで用）二圓二十錢

荷造費各八十錢、運賃着拂

（商工省工業試驗所證明）優良國産！



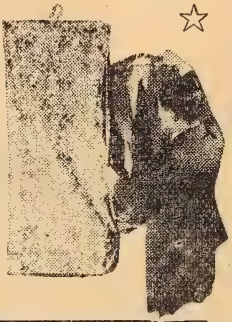
永く使へて書きよい…イリヂゥムペン

特殊耐酸性合金のペンの尖端に萬年筆用の最上質イリヂウムを熔接せしめ、これ一本で普通ペン先三〇〇本分以上もち、書きよいこと、絶對に錆びず持ちのよいこと無類です。事務用、筆記用としてゼヒお用ひ下さい。

▲ペン先二本、（美麗ケース入）七十錢。特製軸つきペン先一本六十錢。送料各内地十錢　其他四十二錢

☆

アイデアル洋服掛



洋服ダンス代用として極めて便利で經濟的な重寶品！

洋服ダンスの代用品として一番お手輕な最新案品で、洋服やオーバー等この中にしまへば蟲よけ埃よけとなり、皺にもならず、四着は充分入り、その上體裁もよいので、どちら様でもお喜び頂いてをります。

◎特價　三圓六十錢

送料内地二十二錢其他六十二錢

ほたる電燈（でんとう）

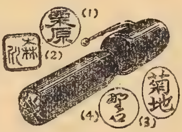
（最新型發電裝置つき懷中電燈！）

非常時下のお家庭では勿論、旅行や登山には特にご便利な電池不用の發電裝置付です。御使用法は、圖の左方にあるハンドルを續けて輕く押すだけで、極めて光力の强い電燈がつきます。（全長十三糎）

◎特價　五圓八十錢

送料　内地十五錢　其他四十二錢

◆印肉不用の新考案認印　滲透印



印面に獨特の工夫をし、專用の朱液を入れておけばいつも判面に滲透してゐますから印肉なしで一萬回以上鮮明に捺印できます。事務に、お家庭用にステキにご重寶です。（お註文の際は書體番號及び印面の形をお知らせ下さい）

▲特價一圓

送料　内地十錢　其他四十二錢

安樂書見器

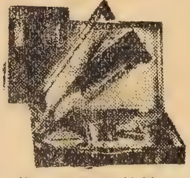
極上堅牢な新案品！

本器は新聞、雜誌、書籍等その大小を問はず取付自由で、ベッドや籐椅子にも應用自在、寢たまゝで樂に讀むことが出來、時には譜面臺や氷囊吊としても役立つ便利品です。

◎特價（一組）三圓五十錢

送料内地六十錢　其他九十錢

★最新式 謄寫版



（代理部特選の廉價奉仕品！）

宣傳物や挨拶狀等各種の印刷物にゼヒ御利用下さい。

▲特價—（はがき版）A號六圓五十錢。B號六圓、送料各内地六十九錢其他九十四錢。（半紙版）A號二十八圓。C號二十一圓、荷造費各一圓運賃着拂。

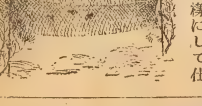
優良特選 双眼鏡（優美上等ケース付き）

いづれも國産の優秀廣角度レンズを使用した代理部特選の逸品です。

◎改正定價—A號七圓五十錢、B號九圓五十錢、C號十三圓、D號（倍率三・八倍日除つき六枚玉高級品）十六圓八十錢。送料各内地三十錢　其他六十二錢

▲上等クローム皮張オペラグラス一圓四十錢、送料内地十五錢其他四十九錢。

（捕鳥用）カスミ網



趣味の小鳥獵に、また害鳥捕獲用として野山または庭先の木立に圖の様にして仕掛けておくだけで、一度に數十羽の小鳥が生捕れます。

▲特價（六分目二段網高さ七尺）長さ三間三圓。四間三圓九十錢。五間四圓八十錢。六間五圓七十錢。七間六圓五十錢。十間九圓五十錢。（送料各一組内地十五錢　其他四十二錢）

時代小説 善魔鬘

吉川英治
齋藤五百枝畫

一 命報恩

杉木立の日陰は濃かつた。
もう午さがりである。
行儀よくみんな坐つて、長閑な眼で、時折の人の跫音がする度に、きよとんと、振向いたり、見廻したりしてゐた春日明神の鹿の群は、突然、ぞろ〳〵起つて、駈け出した。
『うるさいね、駄目、駄目。けふは糠煎餅も何も上げないよ。急ぎの御用だからね。』
愛くるしい町娘――貯月庵の女弟子だつた。
袂や前へ、からみつく鹿の群を、袂で追ひながら、拜殿の裏まで馳けて來て、
『この邊でいゝのかしら。――拜殿の裏

の壁へ――とあの怪我人のをぢさんは云つたが。』
と、手に持つてゐた一枚の半紙を、そこへ貼りつけようとしてゐた。
それには、何やら細々書いてあつた。又、紅梅のやうに、點

點と、生々しい血がついてゐた。

『かあいさうに、これが遺書だといつてゐたけど、あの小父さん、もう死んでしまつた頃かしら……』

壁に貼り終へてから、小娘はふと呟いて、何處かへ、馳け去つた。

菰を被つて、拜殿の床下に、鹿のやうに晝寢してゐた者がある。

雷であつた。

少女の跫音に、首を擡げて、そうつと廻廊の壁を見上げると、すぐその血と墨の半紙が眼についた。

『……やつ、もしや約束の。』

雷は、菰を刎ねて、廻廊の欄を越えた。

——何事かあつたらば、お互ひに、こゝの壁へ消息を貼つて、聯絡を取らうとは、きのふ仙波鹿十郎と別れた時の約束であつたからである。

雷は、一讀して、仰天した。

正しく、鹿十郎の傳言である。

——自分は今や、耳の右京の刄にかゝつて、堀川片町の貯月庵

前號までの梗概

尾州家の庇ふ兇賊耳の右京を、親の仇と狙ふ佐賀菖蒲之助は、危難に遭ふ度、謎の老武士雷に救はれてゐた。所がこの雷を尾州家では、先に幼將軍謀殺の嫌疑で蟄居中の、紀州の怪傑七郎麿と睨み、手段を以て突然その邸へ捕方を向けたが、意外、眞の七郎麿は別にあつた。そこで驚いた尾州家では、改めて術策を練り、上役人を殺めた廉で、七郎麿切腹の沙汰を公儀から得てしまふ。

一方其頃兇賊右京は、菖蒲之助の戀人たる俠妓紅吉を奪出し、遠く故鄕尾州可兒村に逐電した。これを追つて行く菖蒲之助と雷。玆に又、菖蒲之助に舊恩ある深川與力の仙波鹿十郎は、兇賊右京こそ、嘗て可兒村の劍客月輪典膳を暗殺した犯人なる事を、その典膳の未亡人から聞き知つたので、急ぎ仔細を雷へ報せようとした所、早くも右京の爲に斬仆され、未亡人も何處かへ奪ひ去られて了ふ。そこで鹿十郎は斷末魔の苦を忍び、事の始終を紙に記して、これを雷の眼に觸れさせようとする。

　の庭先で、將に息も絶えんとしてゐるが……

と、あるではないか。

そして、後には猶、

　確證はつかめり。されど今や命終らんとす。遺恨、無念やる方なければ、少女の筆を借りて口書を遺す

と、あつて、辿々しい小娘の筆で、凡そ半紙全面に、鹿十郎の口書が──それこそ耳の右京の生立ちから、月輪典膳との關係、その他の事が、十何ヶ條になつて、認めてあるのだつた。

そして最後に、

　わが命すでに終る

　おさらば……唯、唯、

と、筆が切れてある。

『……唯、唯。……何をこの次に鹿十郎は云はうしたのか。こゝで絶息したものとみえる。』

　雷は、憮然として、涙をうかめた──

　曾つては、彼も敵なりしを、火中から救はれた一夜の恩に感じ、遂に、この名古屋の城下まで來て、その時の一命を、今この尊い眞心として、雷に捧げたのであつた。

『──さうだ、かうしては居られぬ。彼の臨終へも馳けつけたいが。』

　雷は、われに回つて、床下の菰を拾つた。白晝でも、夜でも、彼の面は、黑頭巾につゝまれてゐるので、この菰は、その怪しみを防ぐ爲にも、必要だつた。

　鹿十郎の遺言──いや彼への贈り物、その文言の中には、これから雷のなすべき火急な事を、總て、指示してあつた。

　それに從つて、彼は先づ、可兒村の方角へ、馳けて行つた。

名古屋の城下から西へ一筋、可兒村を貫いてゐる街道の兩側

には、盆を伏せたやうな肩の丸い丘が幾つもある。——その一つへ、雷は身を潜めて何物かを待ちかまへてゐた。

わつと泣いて——

濃尾の平野に、とつぷりと陽は落ちた。畑の人影も、まばらに消え、何處かに、山鴉の群が喧ましい。

庄屋の茂右衛門の家の——白壁はまだ宵闇にうつすら遠く見える。チラ、チラと、ひろい闇には、離れ〲に村の燈が見えはじめる——

駕。駕。駕。——雷は、鹿十郎の死の言傳にあつたそれの來るのを待つてゐた。

『オヽ。あれだ——』

彼は、丘の草むらから身を起して、いきなり下の田舍道へ駈け下りて行つた。

『——あつ。だ、だれだつ。』

出合ひ頭に、急に足を竦めたので、駕は搖れ、駕屋は脚を蹌めかせた。

その駕側について、急ぎ足に來かけた深編笠の男は、愕つと、身を退くなり、

『雷だなツ。』

拔く手も見せないといふ迅さだつた。ぱつと、身を、腕を、刀身を、伸びる限り、揮り伸ばして來たのである。

『耳ツ。——天命の終りが參つたぞ。』

雷は、身を交すなり、かう叫んで、ぱツと一刀の白光を腰から放つた。

『駕屋つ、駕屋つ、この追剝浪人を、叩きのめせ。腕を貸したら十兩づつやる。』

こんな場合になつても、耳の狡智は働くのだつた。——だが、その駕屋は、白刃を見たとたんに、田の畦へ素つ飛んでゐた。

『うぬつ、うぬつ。』

耳は吠えた。凄まじい血相である。

晝間、貯月庵で、すでに仙波鹿十郎を葬つてゐる彼である。——何等かの危機が、身邊に迫りつゝあることは、敏感な彼として、覺らない筈はない。

——で、わざと、典膳の後家を、駕の中に押し込んで貯月庵を出てからも、何處かで一息ついて、夜になるのを待つて歸つて來たものだつた。

『井戸掘のせがれ勘太郎。汝も耳の右京といはるゝほどの大惡黨ではないか。運の盡と覺つた上は、潔よく、縄目にかゝるか自決せよ。——雷が最後に與へる慈悲のことば、これが胸に受け取れねば、千載の後まで、外道に墮ちてゆくであらうぞ。』

刄と刄の切つ先から、睨みあひながら、雷が云つた。

『だまれ、片腹いてえことを。』

耳は、青白くせゝら笑つた。

『外道にも墮ちろ、奈落にも墮ちろ、汝を叩つ殺さずに、おれは死なぬ。』

『おうつ、救はれぬ夜叉。』

『夜叉――おゝ夜叉の刄を。』

決死の形相であつた。さしもの雷も、炎を噴くやうな彼の魔刄に、不覺や、ジリ〳〵斬り立てられるかに見えた。

――と、不意に、駕のタレを切破つて、いきなり耳の右京の足元を、一突き――淺くはあつたが、突いて來た短刀があつた。駕の中に押し込まれてゐた典膳の後家なのである。最期にはわれとわが喉を――と秘し抱いてゐた刄で、

(良人典膳の仇！)

と、ばかり一突き耳の足元を突いたのだつた。

『あつ、婆あつ。』

右京は、怒號して、駕を蹴つた。――典膳の後家は駕ぐるみ横に仆れた。然し、その間髪に、

『おのれ。』

雷の一振した太刀は、右京の左の肱の邊りを薙ぎ上げた。

『くそつ、淺傷だつ。』

右京は、自分の叱咤で自分を勵ました。然し、足の傷は、夥しい血を噴いて、彼の足もとを、ともすれば辷りがちにさせた。

『卑怯つ。もはや、逃げのびる先はないぞつ――』

と、雷が叫んだ時は、彼はもう、十間も先を、野獸のやうに走つてゐたのである。

そして、そこから七、八町先の――庄屋の茂右衛門の土塀門まで逃げ走つて來た。

すると、その門の内から、

『おうつ、野郎、來やがつたか。』

拔刀にして提げてゐた脇差で、いきなり眞つ向へ斬りつけて來た者がある。それは、旅姿の柏屋松だつた。

『あつ。』

と、不意を打たれて、横へ外すと、

『魔物！　思ひ知つたか。』

と、待ち構へてゐた太刀の一浴びせ――見事、耳の右京の肩に割りこんだ。

『佐賀菖蒲之助ぞ。覺えたか。』

と、更に揮り下ろす二た太刀！　三太刀！　そして又叫んだ。

『紅吉、恨みをこめ、突け、突け、突け――』

菖蒲之助が、仆れかゝる耳の五體を、後抱きにしてさう云ふと、物陰にゐた紅吉は、走り出して來て、その脾腹を、短刀で――恨みの涙をそれにこめて――突いて突いて――そして思はず感極まつたやうに、わつと、欣し泣きに泣いてしまつた。

『…………』

茫然、菖蒲之助は、手を離した。

だらんと、朽木仆れに、魔の五體は、地上に横たはつた。

それを見ると――柏屋松も、ほろ〳〵と、止め途もない涙に頰をぬらした。菖蒲之助も、落涙した。欣しいのか、落膽したといふのか、何ともいへない――一瞬の氣もちだつた。

　雷は、もう手を拱いて、その人々の、その一瞬を――聖なる大願の達成を仰ぐやうに、凝と、見まもつた儘、外の闇に、佇んでゐたのである。

洪水の迷子

　やがて、柏屋松が氣づいて、

『お、雷樣ではございませぬか――』

と、云つた。

　紅吉も、菖蒲之助も、その人の姿を見ると、わけもなく、ただ自ら、地へひざまづいて、頭を下げた。

『お力をもちまして、漸く、極惡をこゝに打ち、いさゝか佐賀甚の亡き養父母に手向け――又、ひいては、世の中の害をも取り除くことが出來ました。これもそれも皆、あなた樣のお力に依るところ――』

　と、一同が云ひかけると、

『いや。誰の力、彼の力、さうしたものではない。當然な惡の自滅だ。そして、正義の者への、天の明示だ。』

『でも、何かにつけ、お救ひをうけた事も數知れず……。何と申してよいやら、今は唯、誰も皆、心がみだれて。』

『無理もない。このわしですら……』

　と、雷はほろりとしかけたが、

『して、こゝへは、何うして御座られたか。』

『中仙道を急いで、木曾路へかゝりますと、途々、あなた樣の、あちこちの貼紙やお言傳を見て――さてはと急いで參りました所、この庄屋茂右衞門の奧に、紅吉が匿はれてゐると聞き、不意を襲ひました所――紅吉は籾藏に縛られてをりましたなれど、耳の行方が分らぬので、一同これで、悲運を嘆き、地だんだを踏んでゐた所でござりました。』

『あゝ、何もかも、一刻に來たのだ。――これこそ、天の配劑といふのであらう。』

『して、仙波鹿十郎は。』

『惜い事に……相果てた。』

　と、雷が、仔細を話してゐるところへ、籠を破つて遁れて來た典膳の後家もこゝへ來て――凝と、一同の話――そしてわけても紅吉の顏を見つめてゐた。

　そして、話の途切れを見出すと、姥は、怯々と、前へ出て來て、

『もし、お女中。つかぬことを不意に問ひまするが、そなた樣の手に握つてゐるその短刀の目貫――それは琵琶の目貫のやうぢやが――いづれでお求めなされましたの。』

　紅吉は、妙なことを訊く老婆と思つたが、

『はい、これは、親代々の遺物といはれて、小さい時から肌身に持つてゐる品でございますが。』

『えつ、親の遺物？　……。ではもしや、その琵琶の目貫の裏には、銀で月の輪を象嵌してありはしませぬか。そして小さく、典といふ一字が彫つてある筈でござりますが。』

『まあ、よく御承知でございますね。仰つしやる通り、小さく、典の字も彫つてございますが。』

『オ、……オ、……ぢやあ貴方は、幼少の時、誰方様かに拾はれた、迷ひ子ではなかつたか。高野の下――紀乃川の大洪水の折に。』

『おや？　……それ迄の私の身上を、どうしてお前様は。』

『し、しらいでか、わしは……わしは……』と、姥はいきなり馳け寄つて、紅吉の體へ、痛いほどしがみついた。

『そなたの母ぢや。生みの……生みの母ぢや。』

『げッ……？　わたしを生んで下すつた？　……』

『さうぢや、わしは月輪典膳の妻。――遺物の琵琶の目貫こそ――良人の典膳がそなたの幼い時、産土神のお守り袋へ付けておいた品なのぢや。』

『あつ……お母さん。』

二つの體は、ひとつ物のやうに縒れ合つて――慥と抱き合つた儘――すゝり泣きの聲と共に、大地へぺたりと坐つてしまつた。

奇蹟的な母と子の巡り合ひに、人々は又、唖のやうな感激を唇に結んで、唯、泣き濡るゝ二つの姿と、嗚咽に見まもつてゐるばかりだつた。

計らざりき、紅吉が、今その琵琶の目貫の短刀で突き刺した怨敵への一突きは――血をわけた生みの父、月輪典膳への仇をも、知らずに打つてゐたわけだつた。

怖るべきは、宿業の應報といふか、眼にみえぬ輪廻の業といはうか――菖蒲之助は、この世の餘りにも正しい審判に、思はず肌寒い心地にすら打たれてゐた。

空井戸の秘事

歡喜は、一時に見舞つた。――夜は愈ゝ暗く更けて行つたが、こゝに立ち並ぶ人々のふむ大地には、光りが盈ちあふれた。

――だが、一轉して、江戸の空を想へば、まだ、かく歡びには浸つてゐられない。

そこには、薄命なる紀州家の松平七郎麿が、刻々、迫る死の宣言を幽室のうちに待つてゐる。

親族青山伯耆守の屋敷の内に！

耳の右京の首を持つて、一刻もはやく、救ひに急がねばならぬ。

幾多の證據は、すでに上つた。

月輪典膳の後家――。

右京の父親の井戸掘勘十――

又、二十餘年前の生證據は、この可兒村の百姓の中には無數にゐる。

唯、再度上訴して、たつた一つ、謎として殘されてゐる問題は、疑問符の人間、島田紋藏の腹の中に秘められてゐる二十年前のからくりである。

何うして、師匠の典膳を殺し、一たん獄中で斷罪にされた筈の――井戸掘の勘太郎事――後の耳の右京が、今日まで生きてゐたか。又、尾州大納言家に對し、紋藏に對し、常に耳があの傲慢不遜の態度をもつて、しかもそれを、紋藏でも、大納言家でも、何う成敗することもできなかつたか――といふ不可解きはまる疑問である。

（これさへ解ければ！）

と、人々は、今もひしと思ふのだつた。

暗澹たる江戸の空をながめて、猶まだ、七郎麿の生命に、一縷の不安を覺えずにゐられなかつた。

典膳の後家――紅吉の生みの母は、仙波鹿十郎

に告げただけの、あらゆる右京の罪惡と、自分たちの怨みを、纏綿とそこでも一同に話し盡したが、それでもなほ、島田紋藏の腹中につゝまれた大秘密だけは、どうしても、解けないのであつた。

――すると、こゝの騒ぎに、先刻から奥で頷いてゐた庄屋の茂右衛門が、短か羽織を着て、恟々と、一同の前へ進んで云つた。

『ちと、私よりも、お耳に入れたい儀がござりますで、奥で、ちよつと、御休息下さりませぬか。』

で――その茂右衛門が、一室を閉め切つて、一同の前に、怖るべき二十年前の名古屋奉行所の暗黒と、江戸の柳營にあつた、將軍家のお世繼騒動にからむ秘密の一端を洩らしたのであつた。

×　　　×　　　×

まだ島田紋藏が、名古屋奉行所の岡戸三太夫の一下役に過ぎなかつた時代に――江戸城の裏面には、紀州家と尾州家とが、將軍家のお世繼を、いづれから出すか――といふ問題を挾んで、凄まじい、暗鬪が起つたのである。

あらゆる裏面の毒手や奸策がこの時には、何つ方からも行はれたものだといふ。

智者、島田紋藏が、一躍、江戸詰のお留守居役といふ破格な出世をしたのも、この機會を、好妙に捉へた結果だつた。

島田は、ちやうどその頃、可兒村の井戸掘たちが、江戸城の普請へ送られるのを幸に、その中へ、一人の腹心を交ぜて、送りこんだ。

その腹心とは、勘十のせがれ勘太郎――師匠の典膳を殺して打首に

キングを讀んでゐるとこんな
徳があります。

◎家庭の平和と和樂が得られます。
◎世の中が樂しくなつて、仕事がどん／＼出來ます。
◎時勢に通じ世の中の事がよく解ります。
◎幸福な結婚が得られます。
◎お金がだん／＼たまります。
◎商賣はだん／＼繁昌します。
◎だん／＼人物が出來て來ます。
◎人からは好かれ、尊敬されるやうになります。
◎立身、出世いたします。
◎趣味が豐になり、居ながら樂しみが出來ます。

ホントに面白くて爲になるキング、世の中にこんな安い投資はありません。何をおいてもまづキングを御覽下さい。

キング十一月號　特價　六十錢

なるところを、乞食の死骸とすり換へて、そつと救つてやつた『この世から死せる生きた人間』だつたのである。

では――勘太郎の耳の右京は、江戸城へまぎれこんで、何を働いたか。どういふ秘策を、島田紋藏から受けてゐたのか。

そこに、重大なこの大秘事の鍵がある。

――思ひ起せば、當時、幼少の將軍家が、吹上御普請の折に、そのお傅人だつた松平七郎麿が、ふと油斷してゐた隙間に、幼君が空井戸へ墜ちて、死に損なつたといふ大事件がある。

松平七郎麿が、以來、二十餘年間の陽の目も見ぬ終身蟄居の咎めは――幾度も云ふとほりこの事に原因してゐる。

ところが。

何ぞ計らん――今、庄屋の茂右衛門が、一同を一室にあつめて、聲低く、そつと囁く言葉に依れば、その幼い將軍家を空井戸へ突き墜したほんとの下手人こそ、井戸掘の勘太郎――即ち耳の右京だといふのであつた。

偖こそ！ と一同は頷いた。

強惡な右京は、それをたねに、終生、尾州家をゆすり、島田紋藏の弱點をつかみ、あの傲慢な振舞をしてゐたのであつたらう。又、あらゆる場合に、尾州家を利用して、惡事を働いてゐたものにちがひない。

ではなぜ――金にも物にも困らぬ彼が、多くの無頼の徒を手下に蓄へ、全國に亙つて、惡業を働きつゞけてゐたか――それはいふ迄もなく、紋藏に對し、又、尾州家に對し、一種の示威であり、保身術であ

◇切れば見惡いキズ痕が殘る‥‥

お顔にできた
ニキビ・腫物

大切なお顔を荒すニキビや吹出物、或は大人にも小兒にも所きらはずできるおできやその他中耳炎、蓄膿症等膿をもつ病氣なら何でも切らず、痛まず、廉價な内服治療藥『フカンケル』で治せるのであります。

即ち『フカンケル』は膿を持つ病の病原體である葡萄狀球菌と連鎖狀球菌を死滅させる強力な作用のある純錫及びイオン錫と特殊酵母とが合理的に配劑してありますから、服めば血液中に吸收され、身體如何なる個處にできた病菌にも奏効し、炎症を去り、膿もとれて面白い程簡單に治療できます。しかも決して副作用がありませんから小兒にも安心して御服用いたゞけます。

蓄膿を持つ病―おでき、腫物、面疔、ねぶと、蓄膿症、中耳炎は勿論、特に今までいろ／＼療法を試されて効果のなかつた頑固なニキビ吹出物でお惱みの方は早速お試し下さい。

無痛・無キズで治せる新効果の内服治療法!!

◎下記代理部へお申込次第『膿をもつ病一切の新治療書』無代進呈！

（代理部から）◆フカンケルは十五日分一圓五十錢、一ケ月分三圓 送料各內地十錢其他四十二錢。全國有名藥店にありますが品切れの節は 東京市小石川區音羽町・大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）へお注文下さい！

つたのである。——さういふ暴力をも持つてゐなければ、忽ち、智者紋藏の爲に、刺客を向けられて殺されてしまふことが分つてゐたからであつたらう。——そしてその無賴の徒のために、彼もいつか、强賊耳の右京の惡名を、天下に恣にし——いつかそれを以て、彼自身も誇りとするやうな恐しい心理になつてしまつたものと考へて間違ひはあるまい。

霽る、雷

——凝と、生唾をのんで、一同は聞いてゐたが、軈て、雷が、

『茂右衞門とやら、よう聞かせてくれた。——したが、それ程な大秘事、まして、江戸城内のことを、どうしてそちが、存じてをるか、又今日まで默つて、口を緘んでゐたか、その邊ちと、不審に思ふが。』

と、問ふと、茂右衞門は、頭を疊へすりつけて、

『御もつともな御不審。仔細は、かうでございます。』

と、話の最後に、かう一言つけ足して、初めて、人々の疑ひを、氷解させた。

『島田紋藏樣が、破格な御出世で、名古屋から江戸表へお引移りの節——そのずつと以前から、てまへの姉は、御奉公に上つてをりましたが——何

うした荷物のまちがひやら、引越しの混雜にまぎれ込んだとみえ、姉の荷物の中に、油紙包みの書類が一封じございました。』

『ウム……。そして?』

『宿元へ歸つてから、氣づいた姉は、何氣なく、冬の朝の落葉焚きにそれを他の屑物と一緒に、火の中へ投げ捨てましたが——勿體ない、反古なれば、襖の下貼りにもなるにと、てまへが拾つておきました。そして或時、それを下貼に使はうと出してみると、怖しい秘密ばかりが書いてございます。もうお亡くなりなされましたが、奉行の岡戸樣

との打合せの覺えや、耳の右京から度々來てゐる手紙や、双方に交された約條書のやうなものや――それ等を次々に一切を見て參りますると、島田紋藏樣の出世のわけが、すつかり分つたのでございます。』

『では、その反古は、今でも當家にあらうな。』

『はい、怖しさに、火へ燻べもならず、捨ても出來ず、その儘、土藏の奥に押込んでございます。――かう私が、何もかも申すわけも、實は、村の家が、どれ程、勘十、勘太郎父子の爲に、苦んで來たか知れませぬ。又、惡事をして、贅澤や立身をする事を、中には、羨む者さへないではございませぬ。その惡風を斷つ爲に、庄屋の役目、何もかも、明るみに公明に曝け出したがよいと存じたからでございまする。』

茂右衛門は、家人を呼んで、遽に、土藏の中を掻き探させ、二十年の塵と闇の中に埋もれてゐたその書類の一束を持ち出させた。

黴くさい濕氣と虫がついてゐて、書類は殆ど、ぼろ〳〵になりかけてゐる。然し、恰も今日の光明を待つかのやうに、一、二枚中は、眞つ白だつた。

『茂右衛門とやら、たとへ如何やうに相成らうとも、そちに迷惑は決してかけぬ。――この古反古を、それがしに讓つてくれまいか。』

雷の言葉に、元より、彼にとつては、何もならない品――いやむしろ不氣味な物だつた位なので――

『お役に立ちますれば。』

と、一も二もなく、雷の手にゆだねた。

雷は、それをすぐ、菖蒲之助の手へ授けた。そして、嚴かに、かう云つた。

『そちは、これを携へ、又、紅吉とこの母を生證人として伴れて、即刻、江戸表へ立て。――そして、お月番老中、若年寄の方々へ願ひ出で、事の次第つぶさに訴狀といたして、辰の口評定所の御審議を仰

ぐがよいぞ。』

『はつ……』

菖蒲之助は、兩手をついて、さう命に伏したが、

『そして、松平七郎麿樣の御助命のことは、何と、お願ひの手續きをいたしまするか。――』

『それには及ばぬ。七郎麿の生命は、無事健在でをる。この後とも、七郎麿の身には、浮世の何事も降りかゝる事はあるまい。』

『えつ……それは、何ういふ意味のお言葉にござりますか。』

『七郎麿は、これにをる。儂が即ち松平七郎麿ぢや。』

『げつ……貴方樣が。』

『菖蒲之助よ。――いや我が子よ。――今こそそちの父の面、よう見やれ。』

雷は、いつもしてゐる覆面を、燈火に向つて、初めて解いた。

端麗――そして謹嚴の風を備へた、黑髮の偉丈夫である。年ばえこそ、もう四十四、五にもならうが、逞しくそして若いのだつた。

『えつ、私を子と仰つしやるのは。』

『五月五日――毎年あの蟄居屋敷の雷の御祠で、そちが誕生詣りとて來るのを――よそながら木連格子のうちより見るのを樂しみ――そちの生成を樂しみにしては來たが、育ての親、佐賀甚夫婦も、非業の死を遂げ、でも猶、名乘るべき時ではないと、今日まで洩らさずに居つたが。』

『では、この菖蒲之助は、松平家の嫡子と生れてゐるのでござりますか。』

『いかにも。そちが生れて、間もなく、この七郎麿に思はざる終身蟄居の嚴命――幼い子を闇から闇へしたくないために、その折の小間使、お梶に托して、お梶が嫁いだ佐賀甚へ、そのまゝ子として置いたものぢや。』

『あゝ、では、私の一命を、お守り下さる爲に。』

『幼い時から、女衣裳を着せ、女の兒として育てたのも、世を晦ます爲の策だつた。』

語れば語るほど、この夜は奇しき運命を各〻が知る一夜だつた。

だが、それにしても、まだ、胸に解けぬものがある。それは、今江戸表の青山家に死の宣告を待ちつゝある白髮の松平七郎麿――それは一體、誰と云つていゝのであらう。幾度か、幕府の目付が調べに行くたびに、

(余が松平七郎麿)と、名乘つてゐた蟄居屋敷のあの老太守は？

それを、人々が訊ねると、

『わしの身代りぢや。家臣のうちの一人がいつも會うてゐたのぢや。――だが、この雷にも、家臣の中に、幾人もの影武者がをつて、そち達と共に、種々な働きをいたした故、すべてが、自分のいたした事ではない。』

と、雷は微笑んだ。

そして又、

『儂はこれから高野へ登る。すべてを捨て――法を畏れ、お上へのお詫びの爲にも。』

と、その席を立つと、後、多くを云はず、飄然と先へ立ち去つてし

まつた。

後に、取殘されてあつたのは、たゞ一枚の黒い覆面の布だつた。菖蒲之助は、いつ迄もそれを手に取つて見つめてゐたが、夢みるうつゝ身の覺めぬやうに、涙も何も出なかつた。

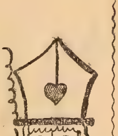
父の愛――母よりも大きな愛に對して、ほんとの涙がはら〳〵とこぼれて來たのは、それから後、彼が、白金の鷲居屋敷の闇を拂つて、紀州七郎麿の嫡子となつたことを雷神社の祠に向つて、額いて報告した時であつた。

紅吉はもうその時、彼の又なきよき妻であつた。

（完）

毎號熱狂的の大歡迎御愛讀をいたゞきました吉川先生の大力作『善魔鬘』は、愈々本號を以て大團圓を告げました。長い間大苦心の傑作執筆を賜りました吉川先生並に、挿繪に一方ならぬ御骨折を戴き、『善魔鬘』に一段の光彩を添へられた齋藤畫伯に衷心よりの感謝を捧げます。併せて讀者各位の絶大なる御愛讀に對しても厚く御禮を申述べます。

吉川先生は本篇御執筆と同時に文藝從軍として漢口攻略の第一線に勇躍參加せられてをりますが、歸還後は更に新年號より、大傑作を再び御執筆下さることになつてをります。何卒御期待下さい。讀者各位と共に先生の御武運とめでたき御歸還を心から御祈申上げます。



文藝寸信

ペン小僧

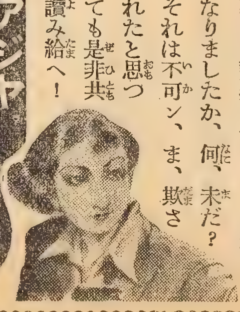
彼の上海事變に於いては、爆彈三勇士を謳ひ、海の荒鷲を謳ひ一世を風靡した長田幹彦氏は『愛國の熱情にかけては誰にも引けを取らぬ』とばかり、俄然今度『講談倶樂部十一月號』に愛國熱血小説『砲金の指環』の大力篇を發表して會心の微笑みを漏らしてゐる。

之は題からして愛國的だと仰言る、何故？と聞くと『奉金の指環だもの』は成程ネ。

砲金の指環　長田幹彦作

事變の特種小説といふものがあれば、同じく講談倶樂部十一月號に發表の「亞細亞大旋風の前夜」は正にそれであらう、と專らの評判。皆さん、お讀みになりましたか、何、未だ？それは不可ン、ま、欺されたと思つても是非共讀み給へ！

アジヤ大旋風の前夜　我妻大陸作

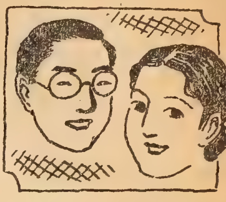


國際都市上海を覆ふ一面の妖雲暗黒、？？？凄いですよ、實に――正に嵐の前です！

右二篇、目下大評判です。

今月も『講談倶樂部』を愛讀しませう　定價七十錢

秋の美容



色白の美しい肌になる
硫黄應用の新美顔術
附　成功実話特選発表

斯うすれば色白の迚も艶々した若肌に

人の肌は十人十色で皆それ〴〵違ひますが、美容の方では脂性、荒性、特異性（吹出物のしやすい肌）の三ツを病的の肌、さうでないものを正常の肌と云つて居ります。病的の肌に美顔術が必要なのは勿論ですが、更に人並以上色が黒いとか、ニキビ、ソバカス、シミ、白粉ヤケ、小皺等でお肌の醜い方々に有効な美容法は朝と入浴の際コロイド硫黄で洗顔する事でこの方法を暫らく續けて居れば見違へられる程色白の美しい肌になります。

然しこれ程美白力の強いコロイド硫黄も保存が非常に難かしい爲、從來化粧品としてあまり應用されて居なかつたのであります。レオン洗顔クリームはこの貴重なコロイド硫黄と特殊な皮膚榮養料とに依つて完成されたもので、消菌美白作用は勿論、皮脂腺や汗腺の調節作用を營む結果、コロイド硫黄をそのまま使ふより更に有効で、どんなにお肌の醜い方々でも次に發表の體驗者の如く、艶々した色白の美肌になれ、續けて愛用すればいつ迄も若々しい美肌を保つ事が出來ます。

シミとソバカス顔が今は斯うして綺麗に

茨城縣久慈町　荒川はま子

私は御商會發賣のレオン洗顔クリームを愛用して居る者で御座いますが、御蔭様で迚も醜かつたシミとソバカスが次第に薄れ、今では色白の迚も綺麗な肌になつて參りました。此の間も嫁いだ姉が參りましてお前は見違へる程綺麗になつたが何か特別の化粧品でも使つて居るのと問はれた程で御座います。

吹出物の惱みを忘れ色白の垢抜した肌に

三重縣上野町　田邊しげ子

私は子供の時から細かい吹出物が次々と絶えず出來て、女學校を卒業する頃からはそれが一層酷くなり、日夜惱まされて居りました。その爲どうかして治したいと思ひ、色々の藥や化粧品を使ひましたが効果がないので

悲觀して居りました。處が雜誌でレオン洗顏クリームの良い事を知りましたので、飛び立つ思ひで早速使つて見ました。すると永年あれ程惱んで居た吹出物が次第に薄らぎ、色も大變白くなつて、今はあと形もなくなりました。これも皆御商會の御蔭と心から喜び、厚く御禮申上げます。それにレオン洗顏クリームを使つて居りますと肌が綺麗になるので他の化粧品まで節約出來ますから私は永く愛用させて頂くつもりで御座います。

酷いニキビが綺麗になり色も白くなつて肌が艶々と

新潟縣下船渡村　村山トク

私は生れつき色黒でその上悪性のニキビに惱まされ、二目と見られぬ顏で、人中へ出るのも嫌になり、何とかして治したいと色々な方法を試みましたが何れも失敗に終り、悶々の日を送つて居りました所、東京から歸つて來た弟がやはりニキビに惱まされ貴商會のレオン洗顏クリームで治したと云ひましたので、私も早速使用して見ました。すると今迄何を使つても効果の見えなかつたニキビが次第に薄らぎ一瓶使ひ終る頃にはすつかり綺麗な顏になつて參りました。これに自信を得た私は其後も引續き愛用して居りますと、見違へられる程色も白くなり、ほんのり櫻色で何とも云へぬ美しい肌になつたので、生れ變つたやうな喜ひに只々感謝致して居ります。

【講評】前掲三氏が斯く成功されたのはレオン洗顏クリーム中に色黒やニキビ、ソバカス、シミ、白粉ヤケ等に効果の著るしい活性コロイド硫黄を始めその他數種の皮膚の榮養料が含有されて居る爲、色黒の原因である皮下の色素を淸白減少せしめ、新陳代謝の機能を旺盛にし且つ皮膚面の消菌美白作用を營む結果であります。それは丁度硫黄泉に永く浸つて居る方々の皮膚がほんのり櫻色で、迚も垢拔けしてすべ／＼した美しい肌になるのと同じ理由であります。

此の微妙なる原理に基き多年苦心研究の結果現代化學の粹を集めて創製された高級美白料レオンは、專賣特許のコロイド硫黄を始め、これに配劑されて居る藥物が使用その都度化合して特殊の瓦斯を發生し、直接或は間接に皮膚に作用する爲、自然色黒、ニキビ、吹出物、シミ、ソバカス、白粉ヤケなどの醜い皮膚が色白く美しくなるのです。

因にレオン洗顏クリームは、東京市神田小川町停留所際小川町ビル內、株式會社レオン商會(振替東京八八一番)から發賣されて居りますが、なるべく製造したての効果の強い製品を差上げたいと云ふ趣意から直接御註文の外は三越大丸、松坂屋、松屋、白木屋、伊勢丹、高島屋、阪急百貨店その他各デパートの全國本支店、東京市小石川區音羽町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九番)及び少數の特約店のみ販賣して居ります。定價は普通瓶一圓四十錢(送料內地十錢、其他四十二錢)徳用大瓶三圓四十錢(送料內地十四錢、其他四十九錢)です。尚、代金引換での御註文は發賣元へ御申込になれば內地に限り扱ひますが、局での品受に手數がかゝりますし(送料が普通瓶二十錢、徳用瓶二十六錢)割高になりますから御承知の上御利用下さい。

時代小説 梟首三百一級

長田秀雄
山口將吉郎畫

一 犬射馬場

髪は亂れ、顏は青ざめ、矢創、太刀創の痕もむごたらしい生首が、齒をぎゆつと喰縛つて、ずらりと三段に結ひわたした分厚な板の棚に並んでゐる。眼をつぶつたもの、無念さうに瞠いたもの……。

この棚の側には、人目につくやうに、大きな制札が立ててある。その制札の表には、逆賊、菊池肥後守武時入道、子息、二郎武重、同、三郎頼隆など凡そ一門の名だたる武者、五十六名の名を記し、以上、謀反の罪により梟首如件と、墨、黑々と書いてある。

戰にあけ、戰に暮れる元弘三年三月十三日の夜の引明けに、この犬射の馬場には、物すごい亂鬪が行はれた。武家に奪はれた天下の權を取戻さんと、隱岐の行在所を

私かにぬけ出で玉ひし後醍醐天皇から、賜はつた綸旨に感激した菊池武時入道は、同天の志を遂げるには、まづ、今をときめく九州の探題北條修理亮英時を討取らねばならぬと誠忠無比の一族郎黨、三百五十騎、不意に起つて、この犬射の馬場から探題の館へ討入り、さすがの英時も一時は觀念して腹を切らうと覺悟するまでに手痛く戰つたが、同志と頼んだ少貳貞經、大友貞宗の裏切りから、衆寡敵せず遂に恨を呑んで一族悉く討死したのである。

カラリと晴れわたつた春の晝、そよ風に送られて碧血に染められた黒い土には、小紋のやうに櫻の花が散りしいてゐる。梟首の棚はこの大將分の五十六級を、初めとして五ケ處に三百級、雜兵の末に到るまでさらされてゐるのである。棚の前には、砂糖についた蟻のやうに、菊池一門に心をよせるものは云ふまでもない、近郷近在の百姓から物見だかい博多の商人など、物騒な世の中の有様にも恐れず、人垣をつくつて、よもやまの取沙汰に餘念もない。

『おいたはしい話ぢやの。武重、頼隆の兩御子息までこの通りでは菊池の御一門は、これで絶えたであろ。』と、裕福らしい博多の商人が白髪頭をふり立てると、勿體らしい四十男が、

『いや、いや、武時入道殿は、名高い子福者での、この二人の

御子息の下にまだ、幼ない方が澤山ある筈ぢや。』と、打ち消す。
　默つてそれをきいてゐた山伏が、突然、口をさしはさんだ。
『わしの聽いたところでは、探題殿は、これをよい機に、十二代もつゞいた肥後の菊池を根だやす爲、近國の侍たちに、菊池の館を取圍ませ、やがてこの博多から、大軍をさしむけて、一擧に女子供の末までも皆殺しにする手筈だと云ふ話ぢや。』
『それはまことか。』と問うたのは以前の商人、無言の群集は、ジロジロと山伏の顏を見守つて、次の言葉をきゝ洩すまいと構へた。
『確かな筋から出た話、まさか嘘でもあるまいて。』
『傲る平家は久しからずだ。』と、この時、誰か知らず群集の內で北條家を狙ふやうに叫んだものがあつた。
『絕えたか絕えぬか虬の玉が知つて居らう。菊池の御家には、不思議な名寶がつたはつて居るさうぢや。』と、山伏は問はず語りのやうに云ひ出した。彼はつゞけて、
『わづか一寸にも足らぬ希世の名玉でな、その澄んだ光は、水晶よりはるかに美くしいときいて居る。これは、菊池家初代の英主則隆公が肥後に下向ありし時、阿蘇山中にあつて人民に害をなす一丈あまりの虬を退治遊ばして、その顎にかくされてゐた玉をお取りなされたと云ふ事ぢや。總體、虬は顎の骨の間に必ず名玉を持つて居ると唐土でも云ひつたへられて居るて。』
『虬とは何のやうな化物で御座ります。』
『虬は、蛇に似て、四本の足があると云ふ話ぢや。ところが、その名玉は、世にも不思議に力があつてな、菊池一家の絕えはてるときには、必ず光が鈍ると云ひつたへられて居るのぢや。』
　名も知らぬ山伏のこの謎のやうな言葉は、群集の心を非道く動かしたのであつた。
『その名玉は、武時公が持つてお出でなされたので御座るか。』と、裕福らしい商人は、また訊ねた。
『大方さうで御座らう。しかし武時入道殿討死の後はどうなつた事やら……』と、彼は力ない聲で答へた。
『光が鈍つたか、鈍らぬか、死人に口なし、此棚に並べられた面々も答へる事は出來ぬ。はは……』と、群集の內から、誰か知らずまた、かう叫んだのであつた。

二　隈部の里

　北條方の軍勢が今にも押寄せて來ると云ふので、肥後の國、隈部の里の菊池武時の館は、急に物騷がしくなつた。博多出陣にもれた家の子郞黨は云ふに及ばず、召使の老若男女が土を運び、逆茂木を結ふなど、防戰の準備に眞黑になつて、立働らいてゐる。
　後に山を負つた居城の奥ふかく書院めいた廣間には、黑漆の

經机に、香を炷いて、武時入道の北の方、梓の前をはじめとし、二郎武重の妻、榮姫、三郎賴隆の新妻、垂玉姫など打寄つて、館の留守を承はる一門の宿老、菊池十郎武門、重富與一武持などの重臣たちと、武時入道討死後の菊池の家の興廢について重大な評定を開いてゐた。

『主君、武時公御出陣のとき、御伴申上げた一門の、家の子、郎黨悉く討死したと云ふ噂が誠なれば、やむを得ませぬ。留守に殘りし者共、召しつれ、一時、深葉の山中に踪跡をくらまして、おもむろに再興をはかるとでもせねば……』と武門が重い口を開いた。

『……それにつけても憎つくき奴は、少貳貞經、大友貞宗の兩人で御座る……何とかして彼奴等に思知らせてやらねば……』と重富與一は、まだ五十に手の届いたばかりの男だけに齒嚙をして口惜しがつた。

梓の前は、もう三十七八、端麗な面に氷のやうな微笑をうかべて、

『犬畜生より劣つた人々と思へば、格別腹も立たぬ。かやうな人々と知らず大事を語合ひ玉ひしが故殿の御不幸——然し、いまそのやうな事を論らうては居られぬ、此處で城を枕に討死するか、深葉へ退いて、再擧をはかるか。』と彼女が、かう云終つたとき、廊下を走るけたたましい音がしたと思ふと、間の襖がさつと開いて、召使の小女郎が、

『只今、若殿さまの御歸りで御座ります。』と呼吸をはずませた。

『何、若殿……』と、武門が振返る。襖の外には、髮も亂れ、顳顬の矢傷を白布でつゝんだ二郎武重の甲冑姿が現はれた。二十三歳の若ざかり、筋骨たくましい偉丈夫も、連日の疲勞にやつれ果てゝゐた。

『おゝ、武重、生きてゐやつたか。』とさすがの梓の前も思はずかう叫んだ。榮姫も夢かとばかり腰を浮かして言葉もない。

『御免。』と母の前にどつかと坐つた武重は、そこに兩手を突いて、

『母上……無念で御座ります。』と、たゞ一言。

『父上は……』

『ふるさとに、今宵かぎりの命とも、知らでや人のわれを待つらん……これが御辭世で御座ります。』と鎧の引合から、袖印にしたゝめた武時入道の歌を取出した。

默つてそれを受取つた梓の前は、やゝしばし打ちながめて、胸をしぼるやうに、

淋藥
無代進呈

淋菌撲滅にゴノメチリン

本藥は皇漢醫藥と現代科學藥の粹を集めて完成された綜劑で、殺菌、消炎、痢尿、鎭痛作用著るしく、急性、慢性の區別なく奏効し、よく惡性淋疾治療の目的を達す。百聞は實驗に如かずハガキで申込次第試藥無代進呈す。

東京市澁谷區北谷町一の一 電話澁谷二二五七番
發賣元 千代元化學研究所 振替東京一五二四〇六番

『ふるさとに、今宵かぎりの命とも、知らでや人のわれを待つらん……』とくり返して吟じた。涙が白い頬にほろほろと流れおちた。

一門の十郎武門は、

『武重殿、戰の物語をまづ承はらう。』と座をすゝめた。涙をふりはらつて武重はボツリボツリと語出した。

『博多へつきましたは十一日、その夜は息の濱へ宿營いたしましたが、翌日早朝父上が探題館へ御出仕遊ばすと、誰が洩らしたか、薄々此方の心を知つて居る氣配、これはいかぬと匆々に御歸陣ありて、軍評定に移りましたが、父上の御意見で、探題館は無人の樣子ゆゑ、此機をはづさず、今宵夜驅に襲ひかゝれば、英時の首を得んこと疑ひなしとかねて申合せました少貳、大友の陣所に使者を以つてその趣申傳へさせましたところ、……』と此處まで物語つた武重は、拳をぶるぶるとふるはせて、しばし言葉がとだえた。

『裏切られたのであらう。』と梓の前。

『……はい、武重このやうな口惜しい事は生れておぼえませぬ……』

武時入道は使者が切られたと云ふ報らせを得て眦を裂つて怒つた。よし、その儀ならば賴まぬ。彼等も共に討取れと夕方から最後の酒宴を催した。探題方では、まさか孤立無援の菊池武時が、その夜の内に攻めかけようとは夢にも思はなかつた。その油斷を見すまし菊池の軍勢三百五十餘騎は、息の濱の宿營をといて、船上山の御所から玉はつた錦の御旗を曉の海風になびかせ靜々と打つて出た。

そして松原口から火を放ちながら辻堂へ、辻堂から探題の館の方へと疾驅して進んだ。猛火は天を焦がし、吶の聲は、鐵蹄の響にまじつて、物凄い修羅場を出現した。

武重の物語が此處まできたとき、榮姬はわが夫の無事な姿をみた嬉しさから弟の新妻垂玉姬の心を思ひやり、

『わが夫、賴隆殿は如何遊ばしましたか。』と問ひかけた。

『おゝ、賴隆は手痛い働らきを致して居つた。さうぢや垂玉姬に彼から言傳かつたものがあつた。』と武重は、かう云つて、一つの小箱を取出した。それは菊池一門の者が誰も知る名寶虬の玉を納めた黑漆に金蒔繪で鱗を描いた箱であつた。

『それは……』と梓の前が云ひかけると、武重は、

『はい、父上が肌におつけ遊ばした虬の玉の箱で御座ります。父上はいざ出陣と云ふとき、形見として、あの虬の玉を賴隆に賜はつたので御座ります。』

『武重、そなたは何を頂いたのぢや。』

『はつ、某は恭なくも帝より玉はりました錦の御旗と綸旨を頂戴いたしました。』

垂玉姬は赤らむ顏に憂の色を見せて、虬の玉の箱を受取つたのであつた。

三　父子の別れ

武重の物語は綿々としてつきなかつた。

よもやと思つた菊池の軍勢が、錦の御旗を眞先に押立て、櫛田の濱から、探題館の方へ攻めよせて來たのを見た北條英時は、今更ながら周章狼狽、とりあへず、手元の兵を差向けて、防ぎ矢を射させたが、思切つた武時の一族郎黨、必死の矛先には、到底齒が立たず見るみる內に、英時の腹心の郎黨たち數多うたれて、ぢりぢりと館の方へ押しつめられたのを見て、もはや、これ迄と觀念した。彼は館に火をかけて、腹を切らうとしたのであつた。丁度この時、探題の大事とばかり、少貳、大友の援軍が、潮のやうに驅けつけた。

新鋭の大軍には、さすが鬼とりひしぐと唄はれた菊池勢も衆寡敵せず、殘念ながら一人二人と賴み切つた郎黨たちが討死して殘り少なになつてしまつた。

『大事旣に去る。』と、袖ケ浦へ引上げた武時入道は、潔よく最後の決心をとつた、彼は嫡男、武重を呼びよせて、

『いよ〳〵覺悟をせねばならぬ時が參つたぞ、この有樣では、もはや、勝利は覺束ない。たゞ、此上は一歩も退かず切つて切つて切りまくり、肥後武者の腕骨を、憎つくき裏切者に思知らせて、切死するまでぢや。』と云ひきかせた。

『はい、もとより覺悟の前で御座ります。』と武重は眼を輝かして答へた。これをきくと、武時入道はニツコと世にも賴もしげに笑つた。が、やがて、聲をおとして、

『ところが此處に一つ考へねばならぬ事がある。われわれ菊池の一族は、畏多い事ながら船上山に御座します帝からふかく賴まれ奉つて居るのに、此處で一族、悉く討死しては叡慮のほども畏多い、更に思へば、楠木殿はじめ、勤王の將卒の志を挫く事にもならう。武重、父をのこして一人行くのは定めし心苦しいであらうが、お前は一旦、此處を落ちのびて故鄕で再擧をはかつてはくれぬか。』と云ひきかせた。

『……この武重に、父上を見殺しにせよと仰せられまするか。』と、思ひもならぬ父の言葉に、若い武重は、氣色ばんで答へた。

『いま、一旦の勇に逸つて、お前まで討死してしまつては、此九州に義を知る侍は獨りも殘らぬ。父の心が解らぬか、愚者奴。』と大の眼に朱をそゝいで、武時入道はハツタとばかり吾子を白眼みつめた。

砂上に額をうづめた武重は、泣くに泣かれず、腸を寸斷される念であつた。その內にも英時の館の方から猛火が焰々と、まだ明けやらぬ空を焦がし、勝ちほこつた大友、少貳の軍勢のかちどきの聲が、次第次第に迫つてきた。

『……父上、仰せでは御座りますが、此武重は、何としても御側をはなれて、おめおめ故鄕へ歸る心は致しませぬ。弟、賴隆は天晴器量、物の役にも立つべき男と存じますゆゑ、彼奴に仰せ

つけ下さりませ。』

『武重、いかに若年とは云へ、お前には帝の天下再興の思召の貴さが分らぬか。區々たる父子の情に溺れて大局を過まるのは男子の恥辱ぢや。此場合、再興をはかつて、あくまで帝の御志に添ひ奉るのが、臣子の務めではないか、この道理が解らぬ奴はわが子とは云はせぬ、勘當致す。』

言葉は強いが、さすが武時入道の聲は變つてゐた。押默つて、俯向いてゐた武重は、……

「はい、やむを得ませぬ。まことに後髮曳かるゝ思で御座りますが、それでは仰にしたがひます。」と、砂に喰付いて男泣に泣いた。

わが子の返事をきいて、武時入道は、大きな掌を、武重の鎧の肩にかけた。今生の別れ、あたたかい父の血が、鎧の威毛を通して、武重の肌に傳はるやうに感ぜられた。

『よく解つてくれた。これで父も心置なく討死が出來る、時が移るぞ、早くゆけ。』

錦旗と帝の綸旨をふかく懷中にをさめて、暗澹とした心持で、武重は五十餘騎の郎黨と袖ケ浦をはなれた。時しも、曉の空に横雲の彩美くしく、朝日が燦としてのぼつてきた。

濛々たる黑烟りの間から、血を曳くやうな味方の喚聲がきこえてくる。

彼等一行の足は、とかく鈍りがちであつた。

四　垂玉姫

『その時、頼隆は、

じつと俯向いて居つたが、やがて、顔をあげて兄上と思迫つたやうに呼びかけた。』と短檠の淡はい光の下で、衣服をきかへた武重は、垂玉姫に云ひきかせてゐる。

　晝間の評定では、明朝、早速、一族、全部この住みなれた館に火をかけ、深葉の奥へ落ちのびようと相談が一決した。傷の手當を終り、一休みした武重は、やがて、垂玉姫の部屋へやつてきた。そして、頼隆の容子をつたへたのである。

　垂玉姫は、阿蘇の大宮司の末の娘に生れて今年十七、花も恥らふ美くしい乙女であつた。

　頼隆が出陣の時には祝言がすんで、一緒にくらしたのはわづか十六日、袴の腰に顔をあてゝ、よゝと泣入る姫を彼はやさしくなだめて、互に髪を切りかはし、やがて歸ると云ひながら、出て行つたのであつた。

　今も姫の白い肌にしつかり押しつけるやうにしまつてあるのは、頼隆の黒髪である。武重は言葉をつゞけた。

『某は、彼の心を勵ます爲に、頼隆、怯が出たかと笑ひながら、かう云ふと、彼は惱ましさうな眼にハラハラと涙を流して、兄上、未練な

とお笑ひ下さるな。此日頃、故郷に殘した姫の夢ばかり見まする、明朝の戰には、恐らく生きては歸れぬかと存じます。もしも兄上が一方の血路を切開いて故郷へお歸りなされたら、この箱を垂玉姫にお渡し下されとかう云うたのぢや。』

賴隆の討死をしつて涙も枯れるほど泣いた垂玉姫は、無言で虬の玉の箱の封をとき、蓋をとつた。

『や。』と姫は、思はず叫んだ。箱の內には、何も入つては居なかつた。

『虬の玉は入つては居りませぬ。兄上、御家の寶は、どうなつたので御座いませう。』

『何、入つて居らぬ。それは不思議ぢや。してみると、箱は形見に姫に殘して、虬の玉だけ身につけて討死したと見ゆる。』

『おいとしや、わが夫。』と、箱をわが頰にしかとつけて、心の內で、姫はかう叫んだ。もう夜も大分更けたか、西へ傾いた月の光が、軒端から、水のやうにさし入つてゐる。何處か遠いところで、笛の音が、綿々とたえつ、つゞきつきこえてゐる。

賴隆が討死したのは、紛れもない事だと、姫は、もうすつかり諦めては居たが、それにしても氣にかゝる笛の音である。幼い時から笛に勘能であつた賴隆は、姫と一緒になつてからも、よく夜になると、吹いて樂しんでゐた。一體今夜の笛の音は、誰が吹いてゐるのか——ふと、彼女は、全身に手傷を負うた賴隆が、やうやく敵中を切拔けて、よろめきながら、歸つてきたのではないかと、かう思つた。

『……大變で御座ります。』とわなわなと打顫うて、入口に蹲まつたのは、一人の侍女であつた。

『何ぢや。』と嚴しい武重の聲。

『梓の御方さまが持佛堂で御生害遊ばされました。』

『ナニ、母上が！』と、かう叫んだときは武重は、もう半分立上つてゐた。

持佛堂には、夫、武時入道の位牌をかざつて、香を燒き、白無垢の衣裳も神々しく、短刀で、見事、咽喉のくさりを切つたまゝ、伏拜むやうに前に倒れて、梓の方が死んでゐた。

前に据ゑた机には、鎧の袖印に認めた武時入道の辭世の歌に並べて、

『ふるさとも、今宵かぎりの命とも、知らでや人のひとり行くらん』

と、筆の跡も少しも亂れず、薄墨で梓のお方の辭世が置いてあつた。

『母上、お情ない。何故私をお殘し遊ばして……』と、遺骸にしがみついて、榮姫が狂氣のやうに泣いてゐる。

立つたまゝ、腕を組んで、唇を嚙み裂くばかりふかく嚙んだ武重は、やがて、言葉もなく、そこに腰をおとした。そして、戰く手を組合せて、壯烈な母の後生安かれと合掌した。

やがて、彼は『南無頓生菩提』と、かすかに看經をはつて、はふり落ちる涙を拭きもせず、

『母上、立派な御最期、死ぬに死なれぬ武重は御羨やましう存じます。』と、平伏した。

そこへ報せをうけた一門の老臣たちがドカドカと入つてきた。女たちの泣叫ぶ聲が、一時に起つた。

ふと武重は氣がついた。垂玉姫の姿が見えないのである。つい、今まで、榮姫の側により添うて泣いてゐたのにどうしたのかと思つて侍

女たちに探させたが、自分の部屋にも、廣間にも、何處にも姫は居なかつた。武重は召使に手分けをして、館の近くを見廻らせたが、誰も姫の行衛をつきとめる事が出來なかつた。

『夫に死なれ、母に死なれて、此世の望を失うた姫は、發心して佛門へ入つたのかも知れぬ。』と、かう考へた武重は、哀れに思ひながら、夜が明けると、一族を引つれ、深葉山中の要害へ引退いたのであつた。

五　阿呆の熊市

源を深葉山中に發して菊池平野を蜿蜒と流れる菊池川は、川幅はさして廣くないが、處々に深かい淵をつくつて一路、西へ向つてゐるのである。この水清き菊池川の上流の崖の上に一本の松の古木が、丁度、水中の月を掬はうとするやうに下枝を水面とすれすれにのばしてゐる。松の根本に腰をおろして、春の夜の更けてゆくのも、明日、明後日に迫る戰も知らず顏に、いういうと笛を吹いてゐる十六七の少年がある。貧しい百姓の息子と見えて、着てゐる着物も垢つき破れてゐる。むさくるしく額に覆ひかゝる髪を結ひもせず、たゞ、無心に、月を仰いで、笛を吹いてゐる。これは阿呆の熊市と村人に呼ばれてゐる牛飼ひの少年で、生來、親もなく兄弟もなく、何處からとも知れず、この隈部の里に、流れてきて、純朴な村人たちの情にすがり、晝間は牛の番をして、わづかに、露命をつないでゐるのである。

熊市の得意は、かうして笛を吹くことゝ、礫を投げる事である。何うして習ひおぼえたのか、阿呆に似合はぬ手練の早業で、大木の梢にとまる小鳥や、水中の魚も、彼が覗ひを定めて投げた石に命をおとさぬはなかつた。

笛は熊市の大の好物で、今宵も、かうして仕事をしまふと、晝間の疲れもいとはず、川添ひの崖の上に蹲まつて、一心に笛に吹きいつてゐる。時たま、通りかゝる村人たちが、

『おゝ、また、吹いてゐるな。熊市、大そう笛が上達したぞ。』と、聲をかけると、彼は、たゞ、ニヤッと笑ふだけであつた。

夜がふけるにつれて、菊池川の瀬の音が烈しくなつてきた。熊市の笛の音には、魂が入つたやうに、冴えてきた。

書物の選び方

世の中には隨分多くの書物もあるが、眞に爲になり、修養の糧となるものは非常に少い。そこで、その中から悔いない生活を送る爲のエキスを手ッ取り早く選びとるには、常に時代の先驅をなすと共に、健全にして興味あふるゝ活記事を滿載した雜誌『雄辯』を第一等に推すに躊躇しない。若し諸君が『雄辯』を續けて讀むならば――

○演說談話交涉應對が巧みになる
○希望に輝き、煩悶懊惱がなくなる
○古今東西の大人物に接觸出來る
○世の中を知り、成功の近道が解る
○居ながら世界を知り、時勢に遲れぬ
○趣味が高尚に、人生が樂しくなる
○人格を高め、人柄が立派になる
○常識が高まり、交際上手になれる

唯一冊の『雄辯』がこんなに大利益を與へるといふので、今月號も又々大評判になつてゐます！　是非御一讀下さい！（十月十二日發賣、定價七十錢）

『……鳥渡、物を訊ねます。』と二聲、三聲、きゝなれぬ女の聲に、熊市は、興を破られて、怒つたやうな顔付で、後をふり返つた。

そこには、思ひもかけず、氣高い女性が、しよんぼりと立つてゐた。彼は、笛を下ろして、胡散臭さうに、たゞ、じろじろと女性の姿を見上げ、見下ろした。女性は、透通るやうな聲で、

『あの博多へ參るには、どう參つたら、よろしう御座いませう。』と、たゝみかけて訊ねた。

しばらく呆やり聲も出せなかつた熊市は、

『博多へ。』と、さも、驚いたやうに問返した。

『はい。』

『……お前は、一體、誰だね。』

『私は、此處の隈部の館のもの……』

『ぢや、お姫さまだね。』

『はい、少し仔細があつて、急いで、博多へ參らねばならぬ。どうぞ、道筋を敎へて下さりませ。』

『そりや駄目だよ。お姫さま。博多と云や、おれの生れたところ、此處から三十里の上もある。お前の足ぢや、とても行けやしない。』

『いえ、いえ、どうしても、行かねばならぬ事が御座ります。道筋を敎へて下さりませ。』

『御領主さまのお姫さまなら、仕方がない、おれがつれて行つてあげよう。』

『おゝ、それは本當で御座いますか。有難う存じます。』と、その女性は、熊市の側にうれしげに寄つてきた。この女性が、垂玉姫である事は、讀者諸君には、云はずとも知れよう。阿呆の熊市は、一旦さう云つては見たものゝ、何となく無氣味でもあつた。しかし、かうした美くしい女性の御供をして、途を歩くのは、さすがに嬉しくなくもなかつた。

『さ、參りませう。』と、以前の悄れた容子とは打つて變つて、いそいそと、垂玉姫は、先に立つて後をふり返つた。

熊市は、笛を腰にさして、不承不承に歩きだした。

はや落ちかゝつた月に照らされて、寂しいとも何とも云ひやうのない荒涼たる夜道を、姫は、物に憑かれたやうに、傍眼をふらず、ただ、歩きに歩いた。

少し前に立つて、熊市は、小首をかたむけた。何度考へても判らぬのである。『一體、このやうな貴い女性が、たゞ、一人、博多へ何をしに行くのであらう……いつそ、聽いてみようか。』と、何度か物を言ひかけようとしたが、默々として、凝つたやうな眼付で、たゞ、前方を見つめたまゝ、足を運んでゐる姫の神々しい姿を見ると、訊ねる勇氣がどうしても出なかつた。

夜が明けた。

路端の辻堂を見付けた姫は、ニッコリして、

『疲れたでせう。少し休んで行きませう。』とかう立つた。彼女は辻堂へ入ると、懷中から少しばかりの金を出して、熊市に食物を買はせた。姫の足の指先からは、痛々しく血が流れてゐた。食事の間に、それを見つけた熊市は、頓興な聲で、

『やあ、大變だ、お前の足から血が出てゐる。お前みたいな奇麗な女

でも、やつぱり、おれと同じ、赤い血が出るんだな。おれは始めて知つた。どうだ、痛いだらう。おれが背負して行かうか。』

『ほゝ、誰の血でも、みな赤い色ですよ。歩きつけないから、豆でも出來たんでせう。少しすれば、直ります。』

彼は、跛歩を曳きながら、烈しい痛みも物ともせず、たゞ、博多へと一心に念じつゝ歩いて行く姫の姿に、尊敬の心を禁じえなかつた。それに張合ふやうに、腹が空いても、身體が疲れても、少しも不平がましい事は云はず、ひたすら守護するやうに、殊勝に振舞つたのであつた。

途々、行合ふ旅商人や、托鉢の法師たちの話で、菊池一門の首が、むごたらしく、犬射の馬場にさらされて逆賊あつかひをされてゐるときいて、垂玉姫の心は、搔きむしられるやうだつた。二人は段々博多の町へと近づいて行つた。馴れない旅の疲れと、心の悩みに、すつかりやせ果てた垂玉姫の蒼白い顔には、大きな眼だけが、熱をやんだ人のやうに濡ひもなく光つてゐた。

『博多へつれて行つて下すつたら、また熊市どのは、菊池の隈部へお歸りなさるか。』と姫が訊ねると、

『熊市どのなんて厭だよ。おれの事は誰でもみんな熊市、熊市と云ふんだから、これから熊市と云つておくれ。』と、こたへた。姫は笑つて、

『では熊市。どうなさる。』

『おれには分らない。いつまでもお前の家來で居たいと思ふだけだ。』

この純朴、神の如き心が、姫にはうれしかつた。五日目の夜、苦しい旅も終つて、二人は博多の町へ入つた。丁度、菊池の殘黨を攻め亡ぼす爲、探題英時が、近國の兵を狩りあつめ、いよいよ明朝出陣と云ふ時だつた。博多の町には、いたるところ、旗差物が、風になびきわたり、馳せちがふ軍馬の馬蹄の響も物さわがしく、暗澹たる氣配がみえてゐた。

六虬の玉

夜が明けはなれた。遠く近く法螺の貝の響がきこえる。姫と熊市は宿を出て、町角に立つた。

爽やかな春風に、戎衣の袖を吹きなびかせ歩武堂々と、探題方の軍勢は、肥後の國へと垂玉姫が、今まで歩いてきた道を出て行つたのであつた。

『熊市。犬射の馬場とやら云ふところにつれて行つて貰ひたい。』と、垂玉姫は、昨日までの憂苦にやつれた顔容に、犯しがたい色をうかべて、かう云つた。

熊市は、何故か胸さわぎがして堪らなかつたが、云はれるまゝに、馬場の方へと歩き出した。

犬射の馬場には、散りしいた櫻の花片も、もう消えてしまつて、黒い土は、今朝發つた軍勢の、草鞋の痕、馬蹄の痕に、散々にふみにじられてゐた。その無殘に地の上に、わづかに燃え出た青草には、陽炎がゆらゆらと立ちのぼつてゐた。しかも、五ケ處に造られた分厚な板の棚には、依然として三百級、菊池方の生首がさらされてゐる。制札には、二郎武重の名が、墨でぬり消されて、その側に同二郎三郎、覺勝入道の名が新らしく書加へられてゐた。さすがに物見だかい博多の

人々ももう見あきたのか、制札の前、棚のほとりには、人影もなかつた。

じいつと地から生えたやうに、梟首棚の前に立つた垂玉姫の眼は、ひたと三郎頼隆のうら若い生首に釘づけにされてゐた。

何時までたつても、身動き一つしない姫の姿を、熊市は、不思議さうに、まじまじと見てゐた。突然、姫は血を吐くやうな聲で、

『わが夫……頼隆さま……』

と叫んだ。

『……一つ、二つ、三つ……』

と、熊市は、有頂天になつて、首の數をかぞへ出した。

『さつきから見てきた首をすつかり合せて、丁度三百……だが、切られるときは、隨分痛かつただろ。』と、熊市は、わが首をちゞめた。

姫は、これには答へもせず、首棚の周圍をよく見廻した。

そして、

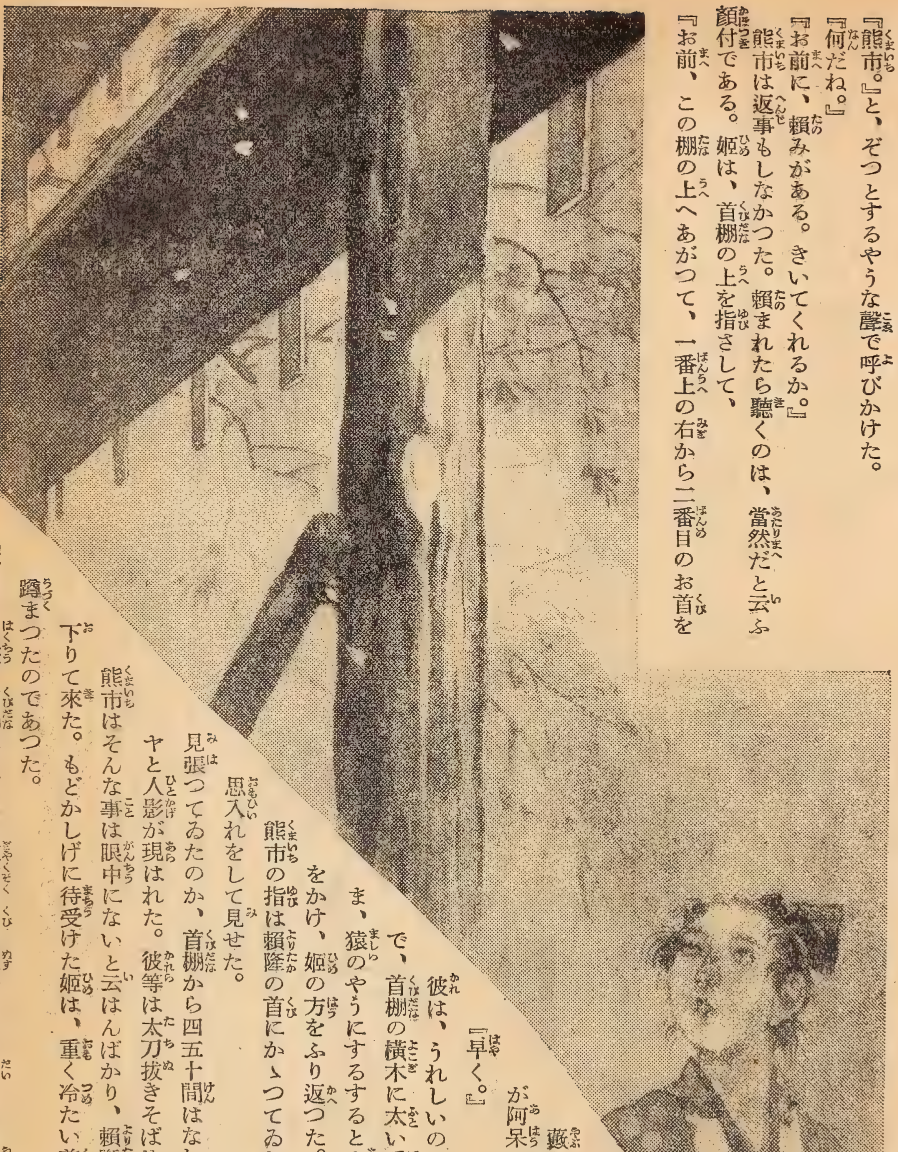
『熊市。』と、ぞつとするやうな聲で呼びかけた。

『何だね。』

『お前に、頼みがある。きいてくれるか。』

熊市は返事もしなかつた。頼まれたら聽くのは、當然だと云ふ顔付である。姫は、首棚の上を指さして、

『お前、この棚の上へあがつて、一番上の右から二番目のお首をおろしておくれ。いま丁度、誰も見てゐないから……』



藪から棒の突飛な頼みにさすが阿呆の熊市も眼を瞠つた。

『早く。』

彼は、うれしいのか、悲しいのか、妙な笑顔で、首棚の横木に太い手をかけた。そしてそのまま、猿のやうにするすると上つて、二段目の棚に片足をかけ、姫の方をふり返つた。

熊市の指は頼隆の首にかゝつてゐた。そして、これかと云ふ思入れをして見せた。

見張つてゐたのか、首棚から四五十間はなれた探題の館の門にドヤドヤと人影が現はれた。彼等は太刀抜きそばめて此方へ走しつて來た。

熊市はそんな事は眼中にないと云はんばかり、頼隆の首を小脇にかゝへて、下りて來た。もどかしげに待受けた姫は、重く冷たい首を兩手に受けて、そこに蹲まつたのであつた。

『やあ、白晝、首棚にのぼつて逆賊の首を盜むとは、大それた奴、定めし菊池の殘黨であ

らう。逃しはせぬ。』と眞先に立つた侍が十四五間に迫つてきた。
姫は夫の首をしつかと抱きしめ、わが頬に押當てた、これを見た熊市は、姫の前に立ちふさがつて、しばらく侍たちを白眼んでゐたが、ひよいと身を屈めて足もとの礫を二つ三つ拾ひあげ、覘を定めてぴゆうと投げた。
わつと叫んで額口をおさへた先頭の侍は、やがて朱にそまつて、後へ引退つた。次の礫は、發止とつゞいた侍の腦天を打割つた。熊市は、さも小氣味がいいと云ふやうにニヤッと笑つて、第三の礫を投げた。
百發百中、まことに非凡な手練である。第三の礫は、太刀を眞向にかざした大男の右肩に當つて、クワラリと太刀を取おとした。
熊市は、また足もとの礫を拾つた。それをみると、侍たちは、たじたじと、後へ退つてたゞ、ヤアヤアと掛聲ばかり。
姫は夫の首を膝にのせて、じいつと見つめてゐる。頼隆の色の失せた唇が、少しばかり明いてゐる容子は、生前、彼が笑ひかけたときと生寫しであつた。ふと、この時、姫は、夫の白齒の間に、何か含んでゐる物があるのを見付けた。彼女の細い指先は、頼隆の口の中を探つた。
熊市は、面白くて耐らないやうに礫をひろつては投げ、拾つては投げ、既に七八人の侍を倒した。
『おゝ、此處にあつた。』と狂喜した姫の聲が甲高く響いたので、熊市は振返つてみた。
姫の顔は朗らかに笑つてゐた。そして、白い指先には、血にまみれた一つの玉をつまんでゐた。彼女は、うれしげに、
『熊市みや、これは虬の玉ぢや。』と、かう云ひながら、片袖で、血を押しぬぐつた。
大さ一寸にも滿たぬ寶玉である。虬の玉は和やかな、春の日ざしをうけて、生命あるもののやうに美しく輝いてゐた。ためつすかしつ餘念もなく眺めてゐた垂玉姫は、
『これ、見や、熊市、菊池家累代の寶、虬の玉は、やうやう吾手に戻つた。しかも、少しも曇つては居らぬぞよ。うれしや、御家は、萬々歳、やがて、朝敵、英時を亡ぼして、父の仇、夫の仇をむくゆる時も遠くはあるまい。』
熊市は、何の事やら、さつぱり分らず、たゞ、呆やり虬の玉と姫の顔とを見比べて突立つてゐた。
丁度、この時、羽音をたてゝ、探題の館の門から飛んできた一本の矢が、思ひもかけず、垂玉姫の胸先を、のぶかに射貫いた。
『あつ！』と、小さく叫んで、右手に高く虬の玉を差上げたまゝ、弓のやうに身體を反らせた姫は、そこに倒れてしまつた。
『何うした。お姫さま。』と、熊市は、鼻の頭にしたたか汗を掻いて、

小勝特選落語集
【附】私の生立ち漫談
懐しい江戸落語を現代に傳ふる小勝師が六十年の生涯を打込んで熱演された一粒選の評判落語三十六篇！

金語樓新作落語集
【附】僕のユーモア半代記
どこを開けても滑稽諧謔、現代人の趣味にピツタリ合つた爆笑王柳家金語樓師獨殊の新作落語滿載の快著！

定價各一圓二十錢
（送料十錢）
大日本雄辯會講談社

姫の側にかけよつた。

もう垂玉姫の顔の色は、變つてしまつてゐた。やゝあつて、眼を見開いた姫は、熊市の手をしつかり握つて、

『熊市、私は、もう駄目だ。すまないけれど一生の御願、もう一つだけ聽いておくれ。この玉を持つて、急いで菊池へ歸つて、深葉山の奥ふかく、わが兄上、武重公とお訪ね申し、しかとお手渡ししておくれ。頼んだよ。』と言葉も苦しげにかう云つてしまふと、また眼をそのまゝぐつたりとなつてしまつた。

『よしきた。』と、かう云つて虬の玉をわが手にしつかり握つた熊市は、

『でも、おれが行つてしまつたら、お前はどうする。女獨りでは、何にも出來やしない。』と、かう云つた。

姫の顔には、仄かな微笑が現はれた。そして、細い聲で、

『私の事は心配要らない。頼隆さまと一緒にこの首棚に死首をさらすのだから……』と、つぶやくやうに答へたのであつた。

館の門から、今度は、四五十人の侍が現はれた。熊市は左手にしつかり虬の玉を握りしめて、また、足もとの礫を拾つた。そして、ひゆつと投げると、礫は、黒い線を描いて、どよめく侍の群に、發止とあたつた、彼はつゞいて二つ三つと、礫を拾つては投げ、拾つては投げ數十の侍を傷けたまゝ、何處ともなく消えてしまつた。

無殘にも荒れた犬射の馬場の首棚の前には、夫頼隆の首をしつかり抱いて、花のくづれたやうに垂玉姫の亡骸がよこたはつてゐた。

五十六名の武士の名をつらねた制札には、新らしく女性の首が書加へられて、梟首三百一級、ながく犬射の馬場につきぬ恨を止めたのであつた。

（をはり）

青年諸君はゼヒ一讀あれ

男子性缺陷は男子の資格を失ひ、世の落伍者となる。この苦患を根本的に解決する唯一原理が米國醫科大學教授**ホリツク**博士によつて創見せられ、その應用療器『**ホリツク療法器**』の完成は眞に世界的發見として賞讃湧くが如く海外輸出も益〻盛んである。

本器は、眞空引力の効果を應用して、理學的**エンツンデユング**作用を起さしめ、以て性機能障害の復活を計る偉大な効果あり。

然も使用安全簡易、個人の秘密自宅治療に適す。既に醫學博士五十餘大家の推奨せらるゝ點に看るも、その効果の優秀なることが判る。何人も急ぎ使用し速かに苦患を脱せられよ。

圖入 **說明書無代進呈**

今直ぐハガキで申込まれよ『性の新知識圖入說明書』匿名で密送す

醫學博士五十餘氏推奨

登錄商標 **◇ホリツク療法器**

金六圓・送料廿五錢植民地五五錢
代金引換十五錢增・別名で密送す

東京市芝區神谷町十八の二號
東京新療法研究所
電話芝三一三一番
電話芝三一三二番
振替東京七七三九番

（ニセ物有御注意を）

キング秋の增刊

小說・講談・落語
美談・演藝・漫畫

面白づくめ號

十月十八日頃發賣！

面白い！　面白くて〳〵堪らぬ傑作揃ひ

戰線でも內地でも大喜び大歡迎のキングの增刊！

許婚　菊池寛
女白浪百兩回向　長谷川伸
第四の勇士　竹田敏彦
智惠の吉兵衞　雪竹半四郎
愛する者の道　中村武羅夫

板前鐵火　野澤純
盟路　白井喬二
簑虫の歌　諏訪三郎
元祿忠臣藏　眞山青果
僕は商人　鹿島孝二

楢柴の茶入　田端竹雨
血染の指　甲賀三郎
氣紛れ長兵衞　野村胡堂
前線と銃後　細田民樹
津山の鬼吹雪　山本周五郎
夫婦岩由來　穗積驚
志士雲助旅　中内蝶二
國際探偵實話　大江專一
傑作落語　人氣花形

假面の眞實　畑耕一
財寶の審判　橋本四郎
傑作の斷食　清谷閑子
驢馬と特急　日吉早苗
火の玉劍法　小泉長三
桃中軒雲右衞門　峯右エ門
血染の青柳丸　田邊南龍
傑作笑話　人氣花形
傑作漫畫　人氣花形

この外續々傑作出來中、發賣の時には更に傑作が揃ひます。

尚、支那事變感激繪卷、大感動美談、皇軍慰問餘興大會等々々面白い〳〵讀物多數あり。

特價六十錢

キングの增刊は出るとスグ賣切れます。

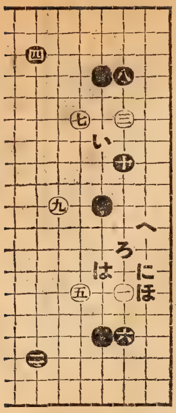
今から最寄の書店に豫約をお申込みになるのが一番安全です。

置碁必勝 著子の活用

七段 瀬越憲作

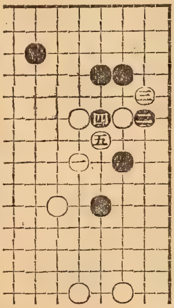
講者より讀者へ

六子以上置く碁に常に現れる第一圖白一乃至九、の構圖及び此の類型に於いて黒が勢子を活用し、如何に善處すべきであるか、といふ前號からの研究問題であります。



（第一圖）

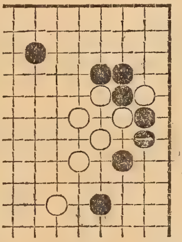
第一圖　前號第二十二圖では、先づ黒十とツメて、次に白い、ならば黒ろ白は、の儘手を抜いても死ぬ氣遣ひは無いけれど、更に黒に白ほ黒へ、と補つて治まれば最早絶對に安全であると言つて置いた。又黒十の時、第二圖白一、と來られたら同圖黒二、四が肝要の手筋であり、是さへ承知して居れば何の心配も無いとも言つて置きました。



（第二圖）

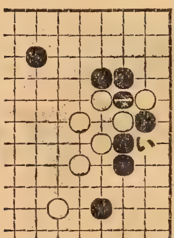
第二圖　白五の手から變化して考へてみる。前號では此の手を一路右に突當るのが、白の無理に終る事を示したのでした。

本圖白五に對しては、黒は三の一路左をキリ黒四を白がトツた時、第三圖一と引いて連絡が完全なる事は明白です。



（第三圖）

若しキルのに誤つて第二圖五の一路右、の方からキルと、白が同じく黒四をトツた時、第四圖黒一とキル事になるから、同圖白いとキラれる劫爭の不安を殘して拙い。



（第四圖）

第四圖は恰も第三圖黒一の手を、

本朝圍碁小史

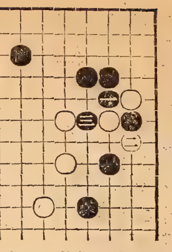
十九道人

本因坊三世道悦から四世道策へ掛けての時代の事を今月は御話して見たいと思ふ。先づ道悦、此の人は伊勢松坂の産れとも、また生國石見とも言はれ確かでない。本因坊二世算悦門下、二十歳にして師家を嗣いで三世となり、上手から準名人に進んだ時、前號でも言つて置いた安井二世算知名人と爭碁を打つて勝つた。それで名人同格といふ事になり、名人格といふ碁品は徳川三百年間にも此の人だけである。

九十二歳といふ碁界最高の壽を保ち五世道知名人の時まで長命した。享保九年、八十八歳の米賀に咏んだ歌として『仰ぐぞよ八十八年の春はなほ豐なる代の君の惠みを』といふのが、道策の生家たる石州の山崎家には今も傳はつて居る筈である。

同時代の打手としては、井上二世因碩、同三世因碩の外には、前號に擧げた安井算知及び澁川春海等がある。二

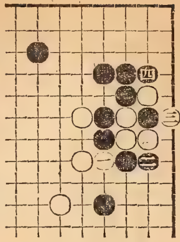
（第五圖）



わざ〳〵一路左に移して缺陷を好んで殘した、理に外なりません。なほ第二圖に於ける黒四の手で直ちに第五圖一、とキル事の危險を次に明らかにして、必ず第二圖二、四の手筋と手順に從ふべき點に重ねて注意を求めたい――

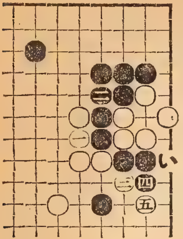
第五圖 黒三に次いで白が二の一路左をツギ、黒は三の一路下に遮つた所から、次圖であります。

（第六圖）



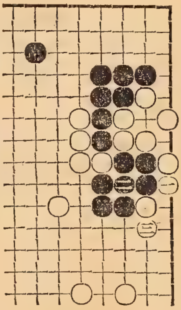
第六圖 黒二の手で三にサガる變化は第九圖です。本圖黒四に續いては次圖白一以下である。

（第七圖）



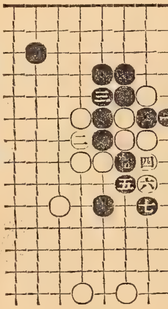
第七圖 白三、五と二段にオサへられ、黒は手も足も出ません。即ち五に續いて黒が五の一路左をキレば白い、とハネ、白三を黒がトツた時、第八圖白一、三迄となる。

（第八圖）



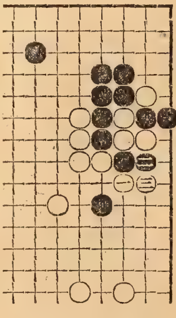
第九圖 是は第六圖に於ける黒二の手で斯く一、とサガる事が不可能でないのを示します。白四、六は部分的に無理の形であり、黒七迄となつて、白が旨く行きません。

（第九圖）



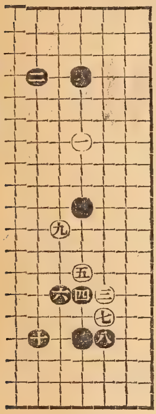
七に續いて然し白が五の二路下にノゾき、黒が五の一路下をツギ、さうして七の一路下に白が沿ひツケた後の應酬に果して黒は成算があるか否か、自信の持てる人は少ないのではないでせうか。兎に角少し面倒です。白の正著としては然し四の手で五、からアテ第十圖の如く捨てゝ打つ位のものなのである。

（第十圖）



第十一圖 今度は構圖を全然變へて見ます。白一乃至九、是も實戰に於いて數次接する所ですが、邊の勢子に眼を呉れず黒十と守るのが正確とされる事は、少しでも學習した人なら誰でも知つて居られる筈である。さて此處で白の本手は言へば、九の一路右にオシツケる形より無い。それを一方の一が高く在る場合、次圖の如く上からオシ

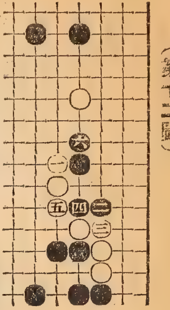
（第十一圖）



世因碩は碁格七段、代々因碩を名乘る井上家では、古因碩と世に呼ばれてゐる人である。山城の生まれといふ事だけで、記錄は何も殘つて居ない。

安井算知は一世算哲の門人であつた。算哲の相續人を定める時、其の長子春海が未だ十三歲といふ若少なので門下の偉材算知を拔いたのだといふ事である。算知は相續以來拔群の精技を以て遙かに諸家を凌駕し、遂に名人碁所を容るされるに至つた。安井家としては唯一人の名人であつた。

澁川春海に就いては語る事が多い。此の人は安井一世の長子であつたが前述の如く安井二世は算知が繼ぐ事となつたので、春海は別に一家を立て、御城碁をも勤めた。碁の外に、將棋をも能くしたと傳へられて居るが、殊に時の鴻儒山崎闇齋の門に入つて博く諸子百家の書に通じ、就中天文學に於いては當時天下第一であつた。彼の貞享曆は實に春海が定めたものであつて、淸和帝の貞觀元年、唐の宣明曆が採用されて以來八百餘年、數多い世々の曆博士の誰あつて改曆の事を能くする者が無かつた時、一朝渺たる碁士春海が



（第十二圖）

ツケれば一見勢子が動けず、簡單に取込まれさうですが、却々容易に然うは行かない事を調べて見ます。

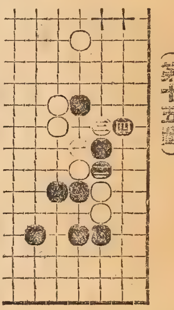
第十二圖　黑二は勢子を活用し、透かさず白の缺陷を衝いた急所である。白三の手で四、からオセば第十五圖となる。圖の如く三、と白がツゲば黑は四、六と殺い、次に五の一路下のキリと六の一路左のマガリとの兩睨みであります。次の兩圖參照——

（第十三圖）

第十三圖　前圖に續いて白一と更にオシツケれば黑二乃至六、となつて紛れる所が無い。卽ち次いで白が五の一路上に出で、黑は六の一路上に一つ泳いでからい、とハネる迄の事です。成程初めの勢子は取られたに違ひ無いけれど、それを犧牲にして白四子を屠れば、是は立派に勢子を活用した理。

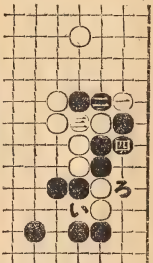
（第十四圖）

第十四圖　前圖白一の手で二、の方をツゲば黑は本圖一、三と打つのが嚴しい。黑九迄は必然ですから、續いて白が八の一路左、に補つた時、黑は八の一路上に突當つて隅さへ堅まる事になり問題はありません。



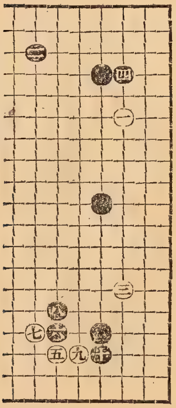
（第十五圖）

第十五圖　第十二圖白三の手の別法ですが、黑二と猶豫無くキルべき事は勿論である。黑四に續いて次圖——



（第十六圖）

第十六圖　白一と二段にオサへるのが手筋です。然し黑二と一旦キツて此の二子を捨て、四とツゲば白二子の方に復活の途無く、第十三圖に優るとも劣らぬ黑有利の結果であります。然も白は黑二子を取るのに、二の一路上にハネたのでは逃出される恐れがあるし、又ハネずに一の一路上に引くのも、黑に二の二路上に打たれ、白一子を遮斷される不安を殘すといふ不利のある事に注意したい。なほ黑四に次いで白が一の一路上に引いても或ひは二の一路上にハネても、黑はい、又ろ、の何れに補ふ方が良いかは大差の無い問題です。

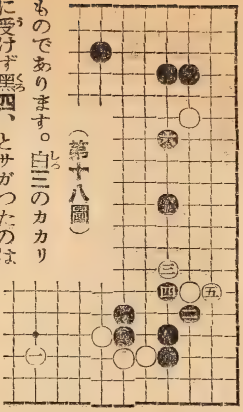


（第十七圖）

第十七圖　再び構圖を變へて白一乃至黑十の配置。是亦實戰によく出來る

此の國家の大事業を成就したのである。明治四十年、聖代の特旨を以て從四位を追贈せられたのは、獨り春海の名譽だけに留まらない。

春海は嘗て天文の理を圍碁に應用し局面三百六十一路、第一の要點は中央の一石卽ち天元に外ならずとの斷案を下した。名づけて大極と呼び、此の點を我れに容るせば百戰百勝天下に敵無しと誇稱したのである。然るに後に本因坊道策と對局の機を得て、多年の理論を實現し、春海先の第一著を天元に下して九目の後れを取つた事は、世に天元の一局として喧傳されるものである。而して其碁が、春海の天元の理が疑はれるよりも、却つて碁聖道策の名をして一層高からしめるに終つたのは恐らく春海の本意ではなかつたであらう。是に就いて明治の碁客高崎泰策翁は『天元は理に於いて四通八達の衝に當るを以て局中要害第一なるべしと雖も變化無限にして四隅の如く未だ窮理され居らざるを以て事實的には證明し難きも早晩碁術の發達と算數の理に依りて現實にするの時あるべきを信ず』云々と說いた事がある。

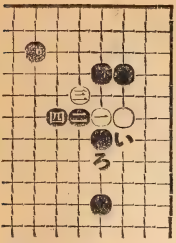


（第十八圖）

ものであります。白三のカカリに受けず黒四、とサガつたのは隅の守りであるに違ひ無いが、それ以上に實は白一を攻める意味の強い所が値打であり、右邊の勢子を活用して一三の白に迫る狙ひが有力である。

黒六と此のかゝの方にツケたのも矢張り邊の勢子を利して白三を攻める所以に適ふ事は既に讀者の常識に過ぎない事を信ずる。黒十に續いて次圖です。

第十八圖　白一とヒラいたのは常態と言ふべく、黒はこゝで二、四を打つて先手で（白三、五は止むを得ない）隅を補ひ、轉じて六と、急に白の肩に迫る——是が眼目なのであります、斯く肩を衝かれると如何に白が窮屈な姿となるかを、次圖及び第二十二圖に就き深く思つて頂きたい。

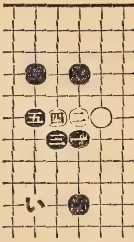


（第十九圖）

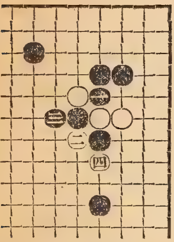
第十九圖　白一黒二と直接オサへるのです。

白三の手で二の一路下をキラれる事を意としない。

斯く直接オサへる點は、第二十圖の場合（前號ではい、に白が在る時、黒三と一旦ユルめて次に白四黒五、とオサへるべき事を説きました。此の差はつまり初めに黒が一間にトンであるのと大ゲイマにヒラいてあるのと、其處に基くものなのです）と對比し混同してはなりません



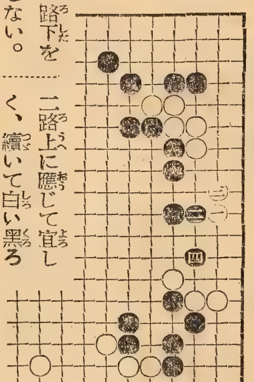
（第二十圖）



（第二十一圖）

白三黒四に次いで白が三の一路右をツゲば黒は四の二路上に應じて宜しく、續いて白い黒ろから第二十二圖となる位のものであらう。

黒四の手で第二十一圖一と慌てゝキツたりして、同圖白二、四と抱へられては、せつかくの第十八圖黒六、が無意味に歸します。

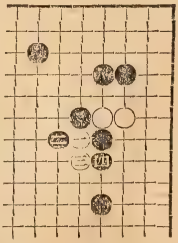


（第二十二圖）

第二十二圖　白一と走られた時、黒は平易に二、四と打つて充分の形。

四に次いで白が若し四の一路下をツゲば黒は勿論一の一路下をオサへ白を兩斷しての戰ひに不利が考へられません。又四に續いて白が四の一路右にトビツケれば黒は四の一路下、をキル可きこと言ふ迄もない。何れにせよ斯う白が低い卑屈の姿勢に就き、黒の方が中腹に強固な勢力を築く事となつては得失は自明と言はなければならない。

第十八圖の黒六には第十七圖黒四のサガりが必要缺くべからざる前提である事を最後に繰返して置きませう。



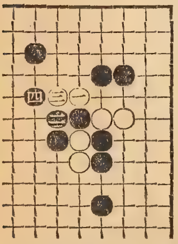
（第二十三圖）

第二十三圖　白一とキラれる事を恐れては成らぬと第十九圖で説いたのを補ひます。白一とキラれたら、黒は二と此の方からアテて白三を強ひ、さうして四とオス調子であり、手筋であり、また常用の形なのです。是は二の手で單に四、に扣くよりも白を三、とノビさせただけ重い形にする意味で働くのである。

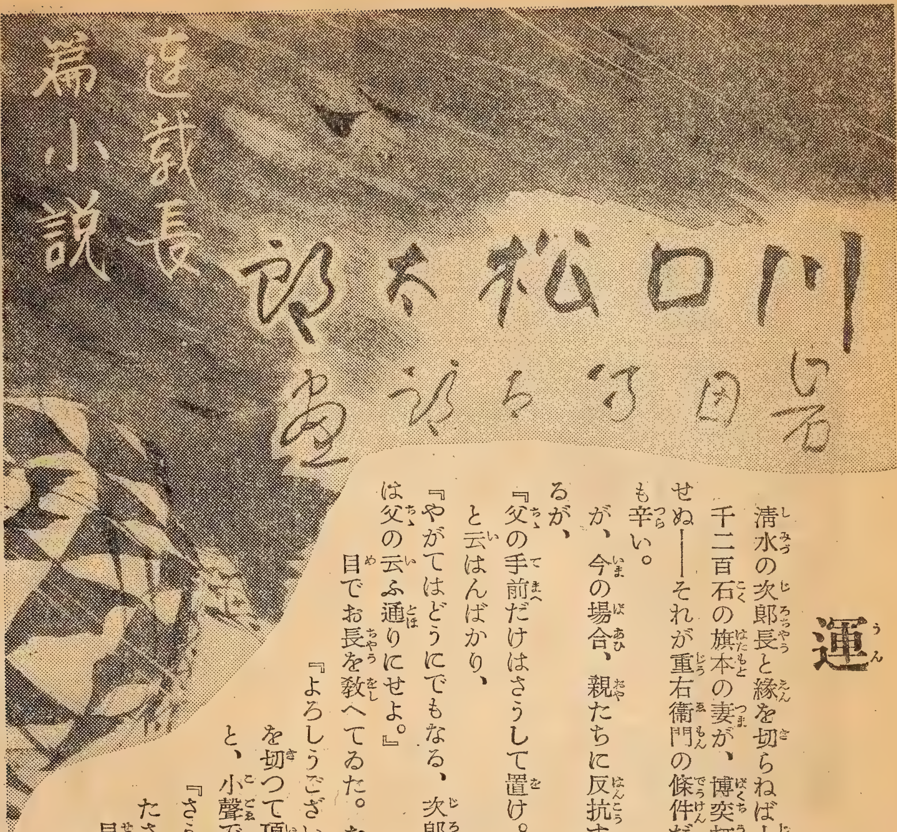
續いて次圖白一乃至黒四で、白に手段の施し樣がありません。

第二十四圖　黒四の次に然し白に三の二路上にトビツケられたら少し煩はしい事になりはしないか。其の時の黒の受け方を、次號迄の宿題とし讀者の研究を望みます。

黒に危險は絕對に無い場合である。



（第二十四圖）



運命

清水の次郎長と縁を切らねば十吉の妻になる事が出來なかつた。

千二百石の旗本の妻が、博奕打ちと交際があつてはならぬ、無縁にならねば妻にはせぬ――それが重右衛門の條件だつた。大恩のある次郎長親分と縁を切るは死ぬよりも辛い。

が、今の場合、親たちに反抗する事も出來なかつた。十吉は脇をむいて默つてゐるが、

『父の手前だけはさうして置け。』

と云はんばかり、

『やがてはどうにでもなる、次郎吉を預けてあるのだから、一生無縁にはならぬ、今は父の云ふ通りにせよ。』

目でお長を教へてゐた。お長は心で泣きながら、

『よろしうございます。恩を受けた次郎長親分ではございますが、縁を切つて頂きます。』

と、小聲で答へて約束した。

『さうきまつたら早いが好い、江戸へ歸つて婚禮の準備いたさう。』

早急な重右衛門は、直ぐにも大阪をたたうと云つた。

『お長の假親をきめて婚禮をせねばならぬ、奉行に願つて、お暇を頂け。』

婚禮の爲めには、お暇の貰へる掟で、三月や五月の餘裕は取れ

清水次郎長への恩報じに、相良の惡目明追手風傳八を首にし、女次郎長と呼ばれた程、氣腑の勝つたお長でも、戀には弱い女だつた。ふとした縁で契り、子まで儲けた江戸旗本の小坂部十吉を慕ひ、嬰兒をば清水身内の鬼の小政に預けて、遙々大阪に辿り上つた彼女。だが頑なゝ愛人の父親は、賤しい土着役者の娘である許りか、次郎長如き博徒と因縁のある彼女を、伜の嫁にする事は好まない。そこで斷然お長に向ひ、十吉の妻になりたくば、次郎長と絶縁しろと言渡した。大恩人を蔑されたお長、覺えずきッと面を起す。

一方恰度同じ頃、豫てお長に片想ひする鬼の小政は、託された嬰兒の養育も怠り勝ちに、喧嘩三昧の日が高じた爲、到頭次郎長の勘氣に觸れ、心細くも東海道を、彼女の姿を忍び〳〵、大阪指して辿つてゐた。

（前號までの梗概）

た。そして小坂部親子は、早々の内に大阪を立ち出でる事になつた。

口先だけの約束でもお長は氣になつた。次郎長親分と縁を切るのがいやだつた。

『堪忍して下さいまし。親分。父を欺す方便なんでございますから……。』

心では、次郎長に詫びてゐた。

何時の間にか、十吉までが親分の恩を忘れてゐるやうな氣がして、昔にくらべると物足らぬ個所の多い良人であつた。

が、さう云ふ不足はあきらめて、お長は大阪を立つた。

氣のつまる舅に仕へて東海道を下る旅路は樂しくも何ともなかつた。

泊りを重ねて、一行は三州の岡崎へ來た。

『お父さんはどうしてゐるだらう。』

岡崎へ來ると、お長は父を思つた。

武士の妻になるのだから、親子の縁は切らうと云つて別れてはゐるが、父一人、娘一人の身の上では、生涯別れてくらす氣はなかつた。

『お父さんと縁を切るばかりか、親分とまで縁を切つて、何の樂しみがあらう。』

お長はしみ〴〵思つた。

そしてその夜。重右衛門や十吉の寝るのを待つて、こつそり芝居小屋へ父をたづねて行つた。

吉右衛門は、唖然としてお長を迎へた。

昔に變る姿を見ると忽ち涙ぐんだ。

姿は立派になつても、お長の顔の淋しさはかくせなかつた。目に見えるほどのおとろへが、武士の妻の勞苦を物語つてゐるやうに見えた。

『好いところへ來てくれたんだ、お長！』

吉右衛門は、喜んで迎へて、

『清水から小政さんが、たづねて來てゐる。』

『えッ。』

お長はぎよつとした。

名を聞くのが辛いやうな、嬉しいやうな、心持だつた。

が、胸の底をつき上げるなつかしさは、矢も楯も堪らずに、

『小政さんが……ど、何處にゐます。』

『そいつが、ちつと困つた事になつてゐるんだ。』

吉右衞門は氣づかはしさうに云つた。

『困つた事と云ふと、……。』

『大初の茂助の乾兒で、與吉と云ふ男を知つてゐるか。』

『知つてゐるどころの騒ぎぢやアありません、安政六年の十二月、次郎長親分が岡崎へお出でなすつた時に、私は與吉につかまつて、ひどい折檻を受けました。忘れようつたつて、忘られる奴ではありません。』

『その與吉も、今ぢやア一人前になり、大濱の與吉と云つて、茂助同様に十手を預りお上の御用を聞いてゐる。』

『大初の乾兒はみんな二足ですね。』

『その與吉のところへ、清水の貸元とは仲違ひをしてゐる保下田の久六の弟分、達磨の仁三郎と云ふ奴が遊びに來てゐたんだ。』

『久六一家は親分の敵だ。』

『それは俺も知つてゐる、殊に達磨の仁三と云ふ奴は、駿州由井の宿で、小政さんに追ひかけられ、危く斬られようとした事があるから、小政をひどく恨んでゐる。俺を訪ねて岡崎へ來た小政さんが、仁三郎に見られて喧嘩になつてしまつた。』

『仁三郎一人ですか。』

『相手は十人ゐる。』

『十人。』

『それに與吉の乾兒もまじつて二十何人の多勢が、小政一人を取まいたから、ど

明るい性質の子を作れ

『頭を作るより性質を作れ、成績はそれからだ。』と學校の先生も力說してゐる。低能兒の烙印をおされて僅か三月で小學校を退學した子から、世界第一の發明家になつたエヂソンがいゝ例だ。そして、この少年をかくまで偉大にしたものは、實に彼の何事にも樂しんで熱中する明るい性質にあつた。

ある兒童心理學者も、

『樂しみは子供を明るい方へ導く。樂しみを與へないと、子供は愚痴つぽい暗い性質になる。』といつてゐる。だから最近の學校では、特に引込思案の子供などには雜誌を與へるのが一番の方法だとして極力すゝめてゐる。

ある教育家も、内容のいゝ雜誌に親しんでゐる子供は、不良になる心配は絶對になく、成績も性質も益々良くなるといつてゐる。

事變下の子供に雜誌の必要なるはいふ迄もなく、政府でも重大視して色々問題になつてゐることが報道され、無關心だつた父兄達も眞劍に愛兒の讀物を選擇するやうになつた。そのため雜誌『少年俱樂部』の如きは愈々その眞價を認められ賣行も激增を示してゐる。

れほど強い小政さんでも敵ふわけがない。とう〳〵仁三郎に生捕りされて、大濱の與吉の家に縛られてゐる。』

『そりやア大變だ。』

『仁三郎は小政を殺さない、保下田の久六が今、美濃の大垣にゐるんで、小政の體を駕へ乘せて美濃へ連れて行き久六に引渡して嬲り殺しにすると云つてゐる。』

『そんな事をさせて堪るものか。』

『堪るもんかと云つたところで、與吉に刄むかつて、小政を助ける力のある奴は一人もゐない、又清水の親分にそこまで義理を立てるやくざもゐないのだ。』

『私が助けるよお父さん！』

『だが、お前も今は昔と違ふ、立派な主人を持つた體では、やくざの義理で危い眞似をする事も出來まい。』

『小政さんは私たちの恩人です、あの人がゐなかつたら次郎吉は誰が育てるのか氣になる。小政さんの難儀を聞いて知らぬ顏は出來ません。』

『と云つて、お前が飛び出して行く事も出來めえ。』

『宿へ歸つて、小坂部に話して見ませう、あの人も次郎長親分には恩がある、話をすれば力を貸してくれると思ひます。』

『天

下のお旗本がやくざの喧嘩に力を貸してくれるだらうか。』

『くれなけりやア私一人でも小政さんは助けます。』

お長はきつぱり云つた。

小政の難儀を外所には見られなかつた。

通り合せたのが幸か、不幸か、

どれほど身分が違つても、清水一家の難儀では、命を棄てても飛び込んで行きたいお長であつた。

讀者諸君！

私は此處まで書きました。正月號以來、讀んで頂いた『女次郎長』を此處まで書いて、これから先を書く事が出來なくなりました。

それは、皆さんも御承知と思ひますが、我々文藝人二十二名が、内閣情報部及び陸軍新聞班、海軍々事普及部派遣のもとに、中支戰線へ從軍する事になつたからであります、國を擧げて戰ふ今度の大事變に、文藝家が國家的動員を受けたと云ふ事は、我々の光榮であり、與へられた使命を出來るだけ完全に果したいと思つて居ります。

そして我々はその準備の爲めに、約束のある連載小說が殆んど一つも書けません。『女次郎長』は、私の樂しんで書いた小說の一つであり、ラストには十分の自信があつて、讀者を堪能させて有終の美を爲す考へでゐたのですが、斯う云ふ事情の爲めに、それがどうしてもうまく行きません。然し『女次郎長』も十一月十二月で終り、來春からは稿を改めて變つたものを書くことになつてゐますから、最後を書かずに行くのが殘念で、行つてしまへばたぶん十二月號は書けないと思ふので……

思ひ切つて、これから先の筋を皆さんにお話する事にいたします。

こんな事は、連載小說に初めての事でありませうし、我々が國家的動員のもとに從軍すると云ふ事も、恐らくは千載一遇の快事と存じますから事情お察しの上お許しを願ひます。

せめて、最後までのお話をして、作家的公約を果さうと思ふ私の心持だけを、受けて頂きたいと存じます。

扨、お長は、それから十吉の泊つてゐる宿へ歸つて來る。

小政を助けなければ、やくざの仁義ではなく、人間の情誼に缺ける。助けたい一心で、良人の十吉に、

『是非とも力を貸してくれ。』

とたのんだが、もとより十吉の聞入れよう筈がない。

『お前は父に何と云はれてゐる、清水の次郎長とも交際をしてはならぬと云はれ、緣を切る約束がしてあるではないか、今更そんな事をしたら父は何と云つて怒る、折角まとまりかけた二人の婚禮も出來ず、生涯夫婦になる事も出來ぬぞ。』

と、取合つてもくれなかつた。

が、然し、お長はあきらめ切れなかつた。

重右衞門に叱られても、十吉と夫婦になれなくとも、小政の難儀を見棄てる事は出來なかつた。

翌る日の朝、重右衞門父子が岡崎をたつ時にお長は無斷で吉右衞門の小屋へ歸つた。

『小政を助けなければ岡崎がたてぬ、小坂部の妻になる事が出來なくとも好いから、大濱の與吉へ斬り込みをかけよう。』

と云ひ出す。

吉右衞門も一度は驚いたが、お長の決心に動され、一座の暴れ者をすぐつて、安政八年四月二日の夜、嵐に乘じて與吉の住居へ斬り込んだ。

お長を先頭にして父の吉右衞門、弟分の吉五郎、吉三郎、仙之助、寅三郎、榮次郎、橘三。腕の立つ者七人を選み、決死の覺悟で飛び込んだのだ。

ちやうど八幡の藤作と云ふ親分のところに花會博奕があつて與吉と仁三郎が留守。乾兒の六七人が小政を守つてゐるところだから、思つたよりも手輕く小政を助け出した。

お長の姿を見ると、小政がびつくりして、

『侍の女房がこんな眞似をしても好いのか。』

と、どなつたが、お長はもう十吉の妻になる氣はなかつた。

『命を助けられて、餘計な事を云ふもんぢやない、こんな所にうろついてゐると悪いから、兎も角も御油まで行かう、玉吉親分の家へ行けば大丈夫だから……。』

風雨の激しい街道をひた走りに、藤川、赤坂を通りぬけ、三州御油、玉屋の玉吉の家へ小政を送り込んだ。

玉吉の家へ行けば親船へ乘つたのも同樣で心配はなかつた。

『小政の馬鹿め、お長に助けられたのか。』

玉吉親分は笑ひながら云つた。

そしてお長は吉田の宿に待つてゐる小坂部父子に逢つて、

『私は到底、武士の女房になる事は出來ません。』

と、自分から斷りを云ひ、

『家柄を鼻にかけて人間の情愛を忘れるやうなお武家樣よりは、食ふものがなくとも情誼を忘れないやくざの方が、私に取つては性に合ふ、川だちは川で果ると申しますから、子供まで出來た仲ではあるが、今日を限りにお別れ申します。』

二人の前できつぱり云つた。

重右衞門も十吉も返答はなかつた。

未練がましい事を云ふ十吉にも、

『肩身のせまいやくざ女を女房にするよりは、立派なところから迎へて下さい、お互ひの倖せと思ふから……。』

と、あつさり思ひ切つて未練も殘さず、さつさと御油へ歸つてしまつた。

ばい毒

拔毛・耳鳴・吹出物・横ね・かん瘡・悪性梅毒に

日本人の梅毒なら

體質に合つた煎藥が最もよい

◇…二三回の注射でよいと思つたのが悪かつた。吹出物や拔毛がヒドイので病院へ行くと第二期梅毒だと云はれて吃驚した。始め注射で失敗したので今度は内服藥にしたが、錠劑も丸藥もスグ胃腸をこはして續けられない。斯うして散々困つた方々が、梅毒煎をのむと、或程胃腸にもよし、第一身體の調子がグツト良くなつた。僅の間に吹出物も拔毛も止つて來たので、血液を檢査して見たら、之は意外！ 毒がキレイにとれてゐた藥が體質に合へばこんなにも良くきくものかと驚かれ其後澤山の人々に敎へたが、誰も「大變良くきいた」と喜ぶ、實に珍しい藥だとか。

◇…或は强い藥で心臟を悪くし、注射がうてないので、遂に毒が全身に廻り、頭は重く、聲は嗄れ、耳鳴がしてフシ〳〵は痛み、首と顏のデキモノが酷くて、人目に合ふも恥しく、色々な手當をしても駄目なので悲觀して居た御氣の毒な方々が、梅毒煎をのんで日增に輕快したとか。とても助からないと思つた悪性の毒がこんなに早く取れて實に有難いなぞと各方面で大評判です。

此の樣に評判の良い梅毒煎は、每晩一回づつ服用する風變りな漢方藥です。梅毒、淋病、瘡毒、體毒、吹出物、よこね、かんそう、こしけを始め、梅毒が原因する動脈硬化高血壓、糖尿病、腎臟病、腦梅毒、神經衰弱、神經痛、リウマチス、頭重、耳鳴、肩こり、不眠、便秘等の原因療法として無類の良藥です。キヽメの早いのと副作用のないのと日本人の體質に最もよく合つてゐるのが特長です。

○前記梅毒煎は東京市淀橋區柏木三ノ三四四日本健康協會(振替東京四九八五九番)へ申込めば、左の實費でお分けします。二十貼入三圓五十錢、四十貼入六圓五十錢、八十貼入十二圓、送料は内地十錢、領土海外は四十五錢、代金引換は二十錢增、滿洲及海外は前金に限ります。容態を書いて申込めば身體に合つた藥を送ります(別に漢方の丸藥あり)

従軍第一信

川口松太郎

従軍作家のペン部隊は、今上海に勢揃ひをしてゐます。雑誌原稿〆切の關係で前線から通信が送れませぬ故、上海からの第一報を差上げます。

上海の町はまだ殺氣がみなぎつてゐます。日本警備區域と英國警備區域との間は、一筋の鐵條網でさへぎられてゐるばかり、海軍陸戰隊と、英國陸戰隊とが對ひ合つて警戒してゐる光景は物々しい。北四川路の裏街は無慘な廢墟の殘骸が荒涼として、雑草の陰に秋虫が啼いてゐます。上海を一歩出ると、至るところ、まだ戰爭です。戰ひが武漢三鎭に集中してゐると思ふのは間違ひです。ニユースの報道は華やかな大戰爭のみに集中されて、占領後の警戒地に幾多の敗殘兵や匪賊の戰がくりかへされてゐる事實は忘れられてゐます。我々は今、さう云ふ陰の仕事に苦闘してゐる皇軍の將兵を見舞ひつゝ、戰跡を見學してゐます。

菊池さんも久米さんも、吉川さん、小島さん、片岡さん、北村さん、みんな無事です、元氣です。

○彈丸の跡目に痛し秋陽落つ

○トーチカの崩れ殘りて秋の虫

○崩れたる民家に蚊張の別れかな

(以上航空便、九月十八日受)

玉吉の家では小政もすつかり元氣だつた。

『小坂部さんはどうしたんだい。』

心配して小政が聞くと、

『お侍の女房にはなれさうもないから、一生やくざで終る氣になつたよ。』

お長は初めて本當を云つた。

『そりやア本當の事か。』

小政は驚いて目をみはつて、

『本當なら夫婦になつて貰ひたい。』

と云ひ出した。

『お前のやうに、一年中人を斬つてゐるやうな男を亭主に持つたら、どんなに心配をするか知れぬ、お前さんだけは眞平だ。』

『お長やんが女房になつてくれゝば人は斬らねえ、決して脇差は拔かねえ、封印をされても構はねえ。』

『そんな約束がアテになるものか。』

『アテになつたら女房になつてくれるか。』

『…………。』

お長は笑つて答へなかつた。

が、心の内はきまつてゐた。次の世には生れ變つて夫婦になると、約束をした小政。次郎吉を我が子同樣に可愛がる小政。一生を任せて悔のない男だが、

『清水へ歸つて、親分に逢つて、その上で考へをきめませう。』

と、お長は笑つて答へたのだ。

そして小政とお長とは、玉吉親分に別れを告げなつかしの清水港へ。春たけなはの四月中旬、身も心ものび〳〵として、お長は初めて樂しかつた。

これが『女次郎長』の終末であります、一口に話してしまへばこれだけだが、小政を助けようとあせるお長の苦しみや、十吉に助けを求める岡崎の一夜。嵐に乘じて大濱の與吉へ斬り込むお長が、昔にかへるやくざ姿。三州吉田の城下では小坂部父子を前にして、やくざ仁義の啖呵を切る場面など、構想は十分にありながら、書く暇もない今の體は、殘念でもあり申しわけなくも感じます、然し、千載一遇の好機を得て、中支戰線に從軍する私は歸つたアトで、十分の償ひが出來ると信じ、些かは安んじてゐる點もあります。

愛讀して頂いた讀者へ、お詫をすると同時に、戰線からの土産ものをお約束して暫くのお別れを申上げます。

毎號好評に好評を續けた『女次郎長』は、惜しくもこゝに終局を見るに至りました。永らく御愛讀下ずつた諸兄姉に厚く御禮申し上げます。筆者川口先生は、この一篇に全力を傾注して居られましたが、前記お斷りの如く、止むなき從軍のために、十分の力を結末に注ぎ得ませんでしたが、その代り來る新年號より掲載の『幕末十劍士』に依つて十分にお詫びをすると申して居ります。『幕末十劍士』こそ先生の最も得意とする秘藏のテーマで、『文化文政から元治慶應に至る幕末六十年間の劍豪十傑を選び、國民精神の淵源である武士道精神を逞ましく描き度い。ペンを劍と思つて、此の一作を國民的大傑作に仕上げたい』と非常な意氣込であります。何卒御期待御吹聽を願ひます。

佐々木邦先生のユーモア三著いよ〳〵大好評！

人生初年兵
一・五〇 内・一四 他・一八

明朗な一青年が輝かしい將來を夢みつゝ社會に飛出して憧れの新聞記者となり、滑稽奇拔縱橫の快腕を揮ふ痛快淋漓のユーモア小說

大番頭小番頭
一・五〇 内・一四 他・一八

大學出の原野君が下駄屋の番頭となり新しがりやの若主人と美しい奥樣と頑固な老番頭の三つ巴の中に飛んだ滑稽を演ずる明朗讀物

地に爪跡を殘すもの
一・八〇 内・一四 他・一八

純情の二青年の戀愛競爭を中心に人間生活のあらゆる姿を輕妙な筆致に描き笑の中に人情の機微と世相の眞諦が味へる痛快無比の讀物

東京小石川大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

映畫界 演藝界 噂話

素晴しい人氣

米國フォックス社で賣り出しの美男スター、タイロン・パワーは、『世紀の樂園』で約三ケ月間ヴアイオリンのコーチを受け、天晴れこれを彈きこなしたが、最近は『スエズ運河』で九千弗もするアラビア馬をあてがはれ、十數日調練して、同映畫に颯爽たる姿を見せてゐる。

タイロン・パワー

『スエズ運河』は、撮影所内に二十エーカーの大沙漠地を運河風に開鑿し、數千名のエキストラを登場させて大ロケを行つたが、この費用は約八萬弗を要しながら、撮影したネガの映寫時間は僅かに五分間であるから、結局、一分間一萬六千弗のロケーションといはれてゐる。恐らく一分間一萬六千弗のロケ費は空前であり、絶後といつていゝ。しかし、製作部長兼副社長のダリル・ザナックは、

『一分間一萬六千弗の撮影費も、パワーの一微笑に敵はぬ。パワーが微笑みながら、馬で駈けるところだけお客さんが喜ぶんですからね。』

と、全くパワーの人氣は物凄いものがある。

◇カット寫眞は映畫『歌姫懺悔』（本誌所藏）の逢初夢子（右）と新田實◇

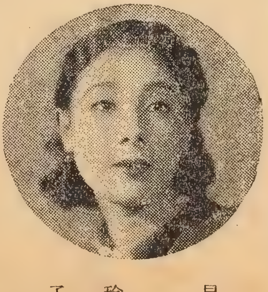
玉のやうな貴方の甥

男兒を產んで初めて人のママとなつた日活多摩川の星玲子は、欣喜雀躍として、直ちに滿洲映畫協會の製作部次長として活躍してゐる夫君マキノ滿男氏のもとに電報を打つたが、同時に田舍の兄にもその喜びを知らせた。

兄のところへは、姙娠した事を知らせてなかつたので、いろ〱電文に頭を惱ましたが、大いに氣取つたつもりで、

『〇〇日、玉のやうな愛らしい貴方の甥が、我が家を訪れました。』

と、打つと、直ちに田舍の兄か



星玲子

ら返電が來た。曰く、『甥はなし。ニセ者に注意せよ。』と

ヒユーズの野心作

ハワード・ヒユーズ

嘗て石油王として、四百萬弗映畫『地獄の天使』を道樂に製作したハワード・ヒユーズ氏は、飛行機道樂が高じて、つひに過般世界早廻り飛行のレコードを破り、今やリンドバーク大佐以上の空の英雄として全米にもてはやされてゐるのは、よく人の知るところだ。

ところが、最近またもや昔の道樂を思ひ立ち、太平洋の眞ッ只中で遭難して行方不明になつたアメリカが誇る世界的女流飛行家イアハート女史の一代記を映畫化す計畫を樹て三百萬弗を投じるといふ。

イアハート

イアハート女史役には、早くもヒユーズ氏の愛人カザリン・ヘプバーンが扮するのではないかと噂されてゐるが、どまれ、今や世界的大飛行家となつたヒユーズ氏が自ら愛機を飛ばして、女流鳥人の一代記を撮るといふのだから、全米の好個の話題となつてゐる。

チトロが惡い

新興東京の古川登美と新田實の二人は、共に鼻の形がギリシヤ型の特徴をしてゐるので、所内でも評判だが、今度の沼波監督の『親なればこそ』では、この二人が結婚するところで終りになる。

いよ〳〵その場面の撮影となるや、何しろ兩人とも美男美女として自信滿々だけに、衣裳に化粧に大凝りに凝つてセットに現れた。全く目ざむる程美しい好一對なので、沼波監督は、二人の前に立つて、あかず眺めてゐたが、『なる程なア、鼻の形が似てゐるところ、これが本當のハナ婿、ハナ嫁だ。』は、チトロが惡い。

古川登美

涙の劍劇

劍戟の本山不二洋子は、大阪歌舞伎座の八月興行に二十日賣切れといふ記錄的の成績を土産にして九月に本城たる淺草の松竹座で相變らず颯爽たる舞臺を見せたが、その大阪興行の時、赤十字病院に白衣の勇士を慰問の爲に、病院の空地に舞臺を設け、自腹を切つて衣裳小道具をトラック二臺に積込み、一座を引連れて、十八番の劍戟を見せた。その時、その芝居に感激して、拍手しようとした手を彈丸の爲に奪はれた勇士が、足を一齊に踏み鳴らしてゐたのを、舞臺から見た洋子、いつもはお客を泣かせてばかりゐたのに、今度は芝居をしながら自分の方で泣いて了ひ、ともすると流石の劍も鈍り勝ちになると、多分淺草でお馴染だつたらしい洋子ファンの兵隊さんが『洋ちゃんしッかり。』と、

不二洋子

淺草そのまゝの聲を掛けてくれたので、すつかり氣を取り直し勇氣百倍、眼覺しいところをお目にかけたが、その幕が下りると、その掛聲が嬉しかつたと、又泣き出して了つた。傍にゐた園村支配人、『やつぱり座長は女だなあ。』と感心してゐた。

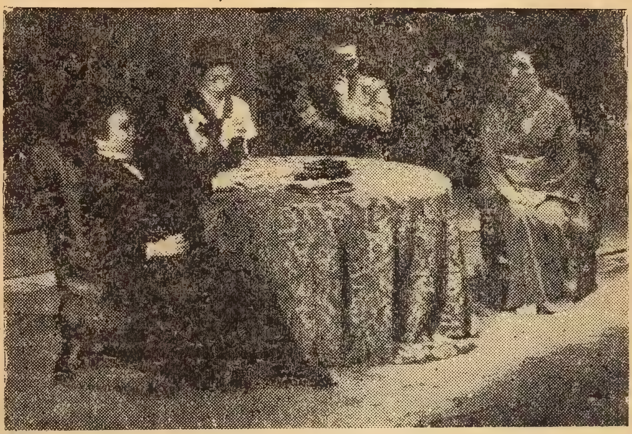
表と裏

久し振りの前進座九月興行は、

河原崎長十郎

山岸しづ江

明治末期文學の驍將國木田獨歩の原作たる『號外』が評判だつたが、主役たる加藤男爵には河原崎長十郎が扮し、加藤夫人には長十郎の愛妻山岸しづ江が扮してゐたのに、負けるものかとその娘君子には京町みち代がなつて、その許婚潔にはみち代のお婿さんたる市川莚司がなり、遺憾なく二組の夫婦が舞臺でも夫婦になつてゐたが、加藤夫人は家附の娘で養子たる男爵を毛虫以上に嫌ひ拔いてゐること から、この芝居の眼目たる男爵の煩悶となるので、あゝも冷い夫婦があるかと思へる程であつたが、この幕を濟ませた長十郎としづ江、お互に『お疲れになりやしませんか。』だの『お前も疲れたらう。』など と、舞臺での冷さを取戻すつもりかなんかで、いやもう熱いこと。



【號外】の一場面

寫眞向つて右より山岸しづ江・市川莚司・京町みち代・河原崎長十郎

クサイ勉強

徳川夢聲老は映畫俳優に漫談家、それにユーモア作家、ラヂオの物語受持といふわけで、全く一人三役も四役も引受け、實に忙がしい。

が、その多忙の中で、世界の情勢、殊に聖戰下の大陸支那の動靜などは、まことに事細かによく知り、よく記憶してゐる。

それも道理。夢聲老は、わが家の便所の壁に大きな大陸地圖を一枚貼つておき毎朝新聞を抱へ込んでは、用を足し乍ら、地圖と照し合しつゝ、その日〳〵の動靜を頭に入れてゐるからだ。

徳川夢聲

しかし、友達の多くは、そんな内幕は知らないから、

『君は何や彼や忙しいくせに、國際情勢に中々詳しいね。サテはその方面の秘書でも雇つてゐるのかい。』

『とんでもない！』

と夢聲老が否定すると、

『イヤ、どうも使つてゐるらしい。クサイぞ。』

などと疑ふ。言はれて夢聲老、獨り苦笑し、

『イヤ、なるほど。さういへば少しクサイ。』

舞臺姿の市川紅梅

口達者

市川紅梅と森赫子とは、大の仲よしだが、紅梅は身體が大きいクセにわりに氣が小さい、この間も防空演習の夜、御兩人、眞暗な鋪道を連れ立つて歩いてゐたが、赫子が勇ましくとつとと先きへ行くのに、紅梅は後からソロ〳〵とついて行く。

と、向ふからやつて來たのは、新派の『おッさん』大矢市次郎、二人を見比べて、

『おや〳〵强さうな紅梅ちやんが、赫子ちやんのあとをコソ〳〵蹤いてゐるのかい。妙だね。』

とひやかす、と紅梅、

『だつて私は、自體前へは出られないことになつてゐますもの。』

『ほう、何故かね。』

と釣られて訊けば、

『それ諺に曰く、コーバイ（後悔）は先に立たず。』

氣は小さくとも口だけは結構一人前なのだ。

舞臺姿の森赫子

十吾は銃後

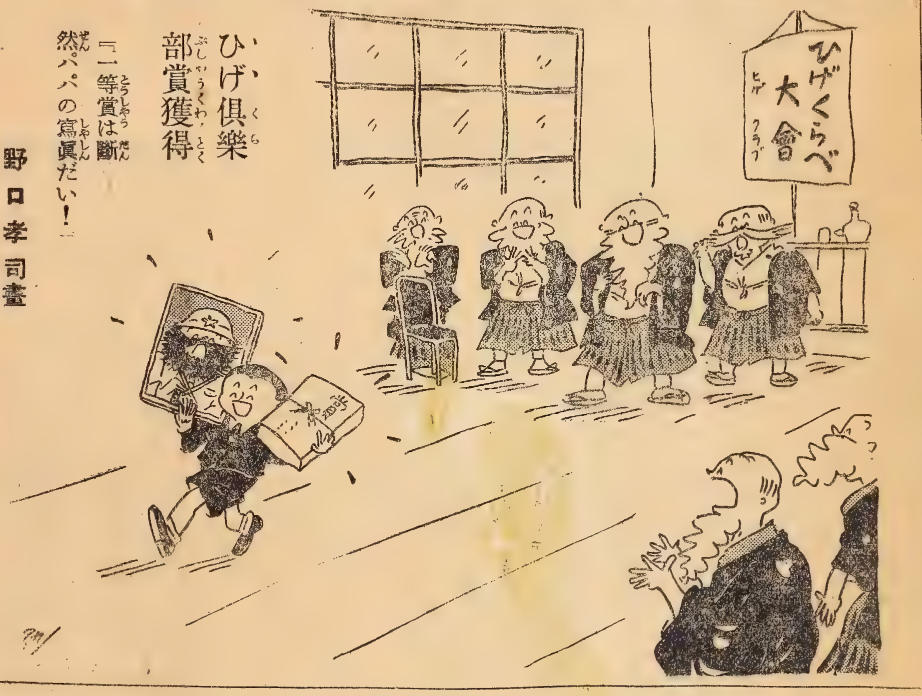
六月に上京して、連日の好成績にすつかり氣を好くした曾我廼家十吾又九月の東京劇場に出演したが、以前、十吾は『とうご』と呼んでゐたのを、頭山滿翁から『十吾は銃後也』と書を贈られたので、今度から十吾を『じうご』と呼ぶことになつた。その記念に十吾が執筆した『銃後の守護』三場を上演した處、これが大當りで、歌舞伎劇總退却の東京劇壇を一人でさらつて行つた。十吾も餘りの評判に自分ながら惘れて、『なるほど十吾は銃後ですな。』と涼しい顏は、嘸かし鼻の高いことであつたらう。

『銃後の守護』の一場面
宮野ぶんに扮した曾我廼家十吾

冨士漫畫會場

『ひげ倶樂部賞獲得』
『一等賞は斷然パパの寫眞だい！』

野口孝司畫



此處にも長期抗戰あり

家主『……では、御主人のお歸り迄、待たせて頂きませう。奥さん、すみませんが、お茶を一杯くれませんか？ちよいと辨當を食べますから。』

鈴木園衛畫

いいいやきとん屋さんの出征です

『お見送り有難うよ。』日頃御馳走になるワン君らこぞつて歡送です。

野口孝司畫

大風

大野鯛三畫

見事世界新記錄

革靴の代用品にズック靴をはいたお蔭で――

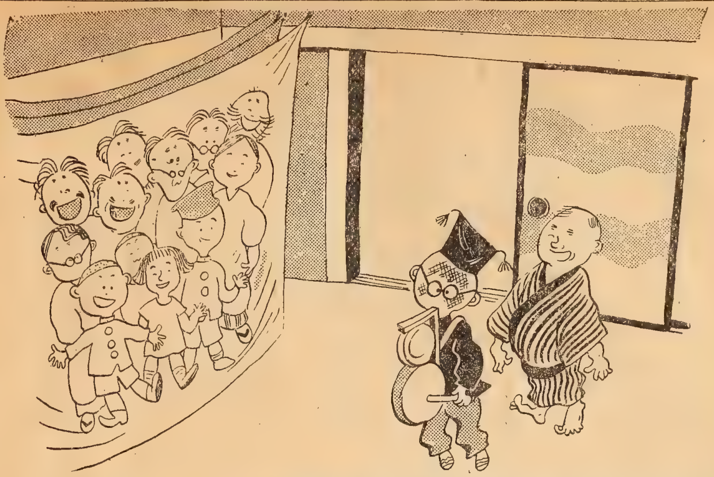
『アイテテテッ ピンを踏んぢやつた!』

岡朔郎畫

チンドン屋一年生

『大丈夫だよ此處で練習してゐればすぐなれるよ。』

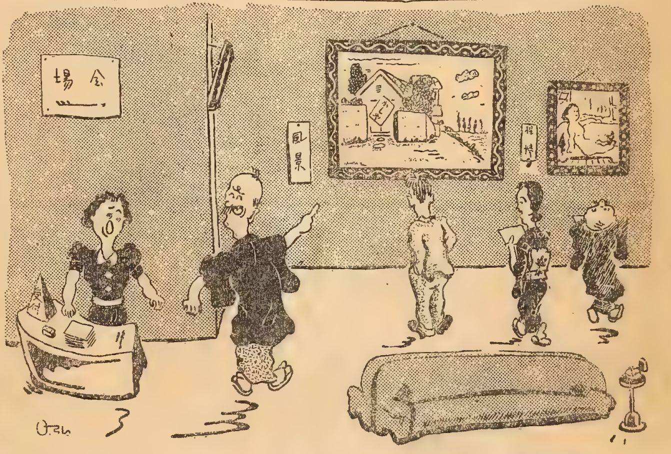
牧とらを畫



展覽會異聞

『君すまんが風景畫の作者に電話して、畫中の貸家の所在地、家主と住所と家賃を聞き合はして貰へんかな……』

大沼弘畫



綴方教室

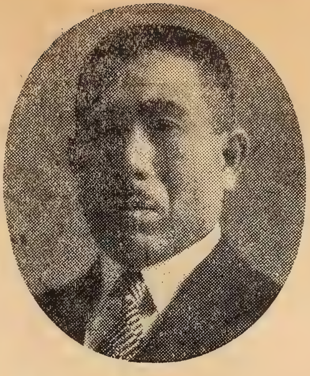
『おい、よせつたら、花子が見てるよ、花子は綴方が甲ばかりなんだぞ……』

牧とらを畫

軍用犬の練習

志村つね平

慢性で惱む方々が大喜び
淋病を治す變つた溫熱療法
◇尿は綺麗になり、節々の痛みが除れる◇


寫眞は柴崎先生

本療法の發明者、柴崎先生は二十年前より花柳病專門薬に就いて研究を重ねて居られますが、今度淋菌が熱に弱い性質を持つて居ることから、内服によつて熱を出し、淋病を治すゴノモトの變つた療法を完成されました。從來の電氣治療の様に外部から熱を與へ、尿道粘膜を刺戟するものとは全く違つて居ります。風變りな事には此の藥は無味無臭の黒い粉で、之を少量の酒にて服用するのです。而も三日に二回服用すればよく、服めば數時間の中に發汗作用が旺んになり、尿道内や膀胱方面に心持のよい熱が出て、深部の淋菌を弱らせ、その上利尿、滲透、殺菌作用を營みますので、悉から淋菌を排泄する事が出來るのであります。安心な事には少しも副作用がなく、熱は局部のみに起りますから、平氣で仕事は出來るし、胃腸は丈夫になると言ふ一石二鳥の効果があります。多くの患者に臨床實驗の結果好成績にて大好評を博して居ります

痛みが除れます

此の病氣は慢性になるとさして苦痛はないが、急性の中は特に痛みが激しい。時には血膿まで出る様になります。それが爲に往々不眠症を起し、疲勞も加はり、恰度神經衰弱に罹つた様になります。ゴノモトを服用すれば前述のやうな微妙な熱作用で、淋菌は撲滅されると同時に利尿作用が旺んになるので、自然に病菌はどん／＼排泄せられて、何時とはなく痛みは除れて仕舞ひます。

尿が綺麗になる

病菌が深く進入し、慢性になると仲々思ふ様に全快しない。一時はよくなつたと思つても過勞がもとで、或は時候の變り目とか又不攝生が原因で再發するのであります。これは尿道深部の病巣にある淋菌が再び活動を始めるからで、徹底的に治療しない限り、一時的

の姑息療法では治る譯はありません。ゴノモトは深部の淋菌を綺麗に殺菌して、尿と共に排泄させる力がありますから、眞實に藥効は顯著で、濁つて居る尿も次第に澄んで、綺麗な尿となり再發しないやうになります。

手足の節々が治り、自由に働ける

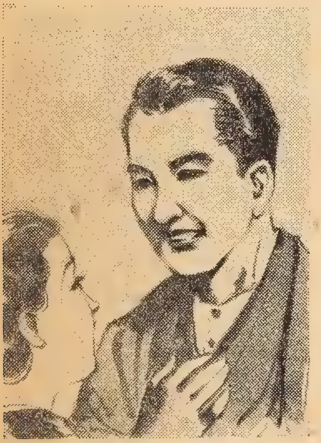
淋病も悪化しますと、毒は全身に廻つて關節を冒したり、筋肉を侵して、腫れ上り、痛みは激しく、遂には身體の自由さへ奪ふ様になります。それも因果な事には多くの場合平素最も多く使用する手足の關節を侵し、關節や神經痛の病狀となります。

から云ふ悪性の病狀には、それこそ一時的の押へ藥では絶對に治りません。何んと云つても病源の根本からよくする事が第一です。それには安全な家庭療法、ゴノモトの内服によつて淋菌を殺し、排毒せしめて行く事が必要であります。秘密に、しかも費用がかゝらず僅かの間によくなりますから、理想的な治淋藥として誰方にも大變喜ばれて居ります。

＝體驗者の喜び＝

惱み拔いた慢性の淋病を治した體驗記

宮崎縣東臼杵郡　松木一二郎



先日、貴店より御送り下さいました『ゴノモト』を服用しました處、あれほど惱み拔いた慢性の淋病が日増によくなり、こんな嬉しい事はありません。初めの中は服用すると膿がどつと出ますので、悪くなるのではないかと大變心配しました。併し先生のお教へを守つて攝生しながら服藥した甲斐があつて、毎日元氣で働くことが出來る様になりました。これは全くゴノモトのお蔭と存じ厚く御禮申し上げます。尚この手紙着次第慢性用大箱一個至急お送り下さい。

附記　ゴノモトは藥効が確かなので朝鮮は勿論、滿洲、中支、北支から續々註文が殺到して居ります。これは申すまでもなく、悪性であればあるほど藥効があるからで玆にゴノモトの特長がある譯であります。本社代理部に於ても、素晴しい賣行を示し、今評判の療法となつて居ります。

膿がとまらず小便の痛む方
淋糸がなか〳〵とれずお困りの方
淋毒性の神經痛、關節炎で手足の痛む人
股から腰が痛み、何時も不愉快な人
消渇で苦しんで居られる御婦人
慢性で五年、十年と惱んで居られる方

こう云ふ方々は是非とも最後の療法として一度試みて下さい。大箱をお服みになれば必ずその藥効がお判りになります。

因にゴノモトを御希望の方は東京市下谷區御徒町三丁目、栗崎製藥所（振替東京三一八五八番）か東京市小石川區音羽町三丁目、大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へお申込下さい。慢性用大箱（十五回分）十圓半箱六圓、急性用小箱（四回分）三圓、送料内地十錢海外四十二錢です。

時代小説

三代盗ッ人宿

子母澤寛

冨田千秋畫

美しき鷲

一

山はもう八ツ刻を過ぎてゐる。

ずッと麓の、開鑿工事の水の捌け口のすぐ眞向ふに出てゐる剃刀の刃のやうな冴えてゐた片割れ月が、薄紙で掩ふやうに光が鈍つて來て

ゐる。

大槻巳之藏が、山奉行に赴任してこの方、山にはたゞ平穩がつゞき、今もまた明日の仕事を迎へる安らかな眠りが、何の山小屋にも結ばれてゐるのである。

何處からともなく、ちよろ〳〵と落ちて行く水の流れの小さな囁きが、誰かの枕に通つてゐるであらうか。

その外にはたゞ靜寂そのものが、山を包んでゐるだけであつた。

人足頭繩手の新五郎の小屋の戸が、かたりと音を立てゝ開いたやうである。丁度、月とは反對の方とて、その邊りは眞ッ暗であり、ましてや、大きな欅の枝が山小屋にかぶさるやうに翼を張つてゐるので、その小屋から出て來るらしい人影もはつきりとはしなかつた。

少しして、人影は月の光にさらされた。眉にも劣る細そい月だが出て來た二人は男と女——新五郎と、きのふこの山へ昇つて來た娘のお市。すらりとした細面ながら、肩の邊りのふつくりとした艶つぽさは新五郎風情の娘にしては、餘りに美し過ぎたと云ひたい位である。

『いゝか。』

と、新五郎に自分の小屋につゞいた大槻巳之藏の小屋の方へちらりと眼をやり乍ら、

『お前が一生に一度の親孝行だ。いゝか、うまくやらなくちやアならねえぞ。』

『あいよ。わかつてますッてのにさア。』

お市は、口に手を當てゝ薄笑ひをしたやうである。

『何んといつても、六十二萬石が自由にも成らうといふ大松樣のお氣に入り。後々の事があるばかりではなく、あの人をお前の色でこッちのものにして置けば、山の工事で金のげッぷが出る程に儲かるのだ。え、それに第一、あの苦味走つたいゝ男ぶり、お前だつて、滿更ぢやアなさゝうぢやアねえか。』

『いやなおとッさんねえ。わかつてますッてのにさア。』

『頼むよ、全く。』

『あたしだつて、女だてらに身を張つて、命がけでやるのも、おとッさんへの孝行ですよ。』

尾州家横領を企む大松五郎左衛門の毒刄を逃れ、木曾深山の人外境に落ちた松平新太郎君は、そこで怪老人羽賀得心齋の奉仕を受けるが、世にも奇怪なはこの羽賀一家の者の行動で、二人の伜巳之藏と三太郎は、何れも渡世人に身を變じた上、妹の一人を瘖啞に仕立てゝ大松に近付かせ、何事か企む樣子だし、一方得心齋は又、新太郎の生母お曾といふ怪老婆を、人外境に監禁して秘密の策を廻らす樣子。謎は謎を生む事の經緯。折柄此時奸臣大松は、突然尾州領内に大開鑿工事を起したが、それを彼一個の私慾に基く事業と悟つた工事取締役大道寺五郎は、俄かに土方共と結束して、一日、檢視に來た大松を、危く斬付けようとする。と、そこへ現れて彼を救つたのが、外ならぬ渡世人姿の巳之藏。その功に依て彼は、改めて工事取締役に拔擢される。かくて數日、出拔けにこの工事場へ、人足元締纏手の新五郎の娘が、禁制を破つて訪れて來る。

（前號までの梗概）

『さうだともな。この山の仕事がうまく行けば少なく見積つて三千兩の儲がある。お前だつて、どんな、榮耀榮華も出來るのだよ。』

お市は、新五郎の少しくどいのをうるささうに、

『あいよ、あいよ。』

とうなづいて、四邊に氣を配りながら、大槻の小屋へ近づいて行つた。

山の妖女の精のやうに、派手な着物の裾を地へ曳くやうに、足音を忍んで行くお市の姿。

新五郎は、心の中で――うまくやれよ、うまくやつてくれよ――たゞ、自分の慾心一つに可愛いゝ娘をさへ犧牲にして恥ともせず、それをたくらんで、わざ〳〵山へ呼び寄せた程の男。心からそれを祈つた。

お市の氣持は、新五郎よりは少し複雜になつてゐた。はじめは、たゞほんの大槻を色仕掛けに美しい罠にかけるつもりで來たのだが、その大槻の風貌を見ると、流石にお市の若い胸は動

悸めいたのである。

お市は、大槻の小屋へ一歩一歩近づくにつれて、足がうはずるやうな氣持がした。かた〳〵と小さく身慄ひがして、どうしてい〻のか自分で自分がわからなくなるのである。

月が、向ふ山の杉の森へ半分入つた。

山は急に、暗くなつたやうな氣がした。

お市は、今、大槻の小屋の前へぴつたりと身を寄せて、一度、父の小屋の方を振返つた。新五郎が、息をころして、ぢッとこッちを見守つてゐるのが、微かながら見えてゐる。

『大槻樣。』

お市は虫の鳴くやうな小さな聲で、かう小屋の中へ呼んで見た。ほんのさ〻やかな小屋である。その大槻のすや〳〵とした寢息さへ、お市の耳には通つて來るやうに思つたが――。

元より、戸には錠前一つある筈もない。お市は、そッとそれを押し開らいた。恐らくは、冷めたい山の眞夜中の風が、すッと大槻の頰を撫でて行つたことであらう。

お市の姿は、その戸の内へ吸込まれて、再びその戸が微かな音を立て〻閉まつた。

二

遙かにこれを見た新五郎は、にやりとした。

『ふッふッ。大槻とて若い男、さうでなくても淋しいこの山小屋に親の慾目か知らないが、人並勝れた器量よしのお市が、こッちから忍込んで行つたのだ。忌やも應もないだらう。さうなればもうこの山はこッちのものだ。山の人足も帳面だけで本當の人間はゐなくても、一人步は貰へるし、あれやこれや、山の仕事は俺のふところの儘になるといふものさ。ふン、うめえ事になりやがつた。』

次第に相好の崩れかけた途端。

『あッ！』

女の悲鳴が、山の靜寂を引きちぎるやうに響き渡つた。

はッとした新五郎の眼には、大槻の小屋の外へ、もんどり打つて投り出されたお市の姿がはつきりそれとわかつたのである。

小屋の戸は、すッと閉まつて、それッきり、内の大槻はどうしてゐるのか、聲一つ聞こえなかつた。

しかし、お市も然るもの、投り出されたま〻、泣きッ面で、新五郎のところへ逃げ

海軍志願兵

少年航空兵水兵機關兵工作兵其他海軍へ志願し國家に盡すと共に立身せんとする靑少年に新編海軍志願兵受驗合格の鍵無代進呈す

橫須賀軍港 帝國文武學會 振替東京六九〇九二番

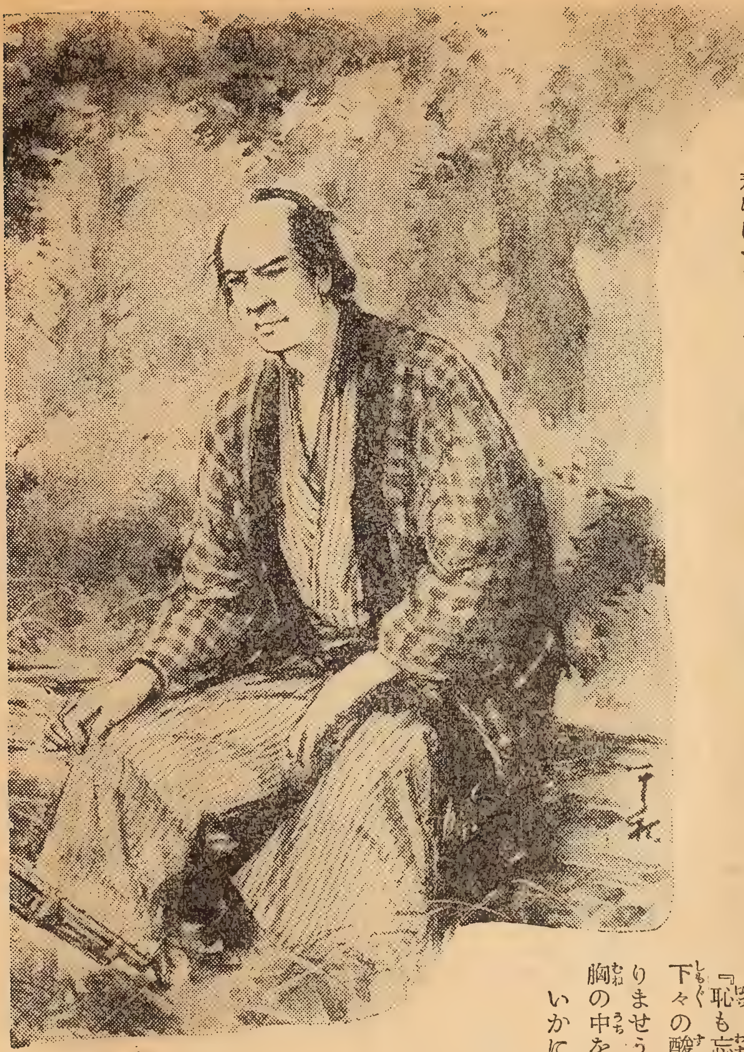
海軍機關少佐 山口忠豊著

海軍兵入團須知と訓練講義

四六判四〇〇頁 クロース製 定價金一圓九十錢 送料十錢

入團者は必ず本書を見よ！海兵の須知や入團後の訓練を圖入講義して、模範兵となる手引をした最も正しいものは、本書以外にはないのだ、本書こそ入團者の虎卷である。

橫須賀軍港 注文は 帝國文武學會 振替東京六九〇九二番



返るやうな女ではなかつた。

『邪見ねえ。』

怒りもせず、泣きもせず、にや〳〵笑つて、着物についた土ほこりを、ぱた〳〵と拂ひ落すと、またそツと戸へ寄つて、

『大槻樣、强いばかりがお侍ではござりませぬ。弱い女子の眞心をお汲みなされて下さりませ。』

ほと〳〵と戸を叩き乍ら、

『恥も忘れた女の一念。あなた樣とて、下々の酸いも甘いも御承知のお方でござりませう。え、女子、女子の思ひつめた胸の中を。』

いかに搔き口說いても、內からは、物音一つしなかつた。

何處かの山小屋の戸が開くやうな氣配を感じて、新五郎は、びつくりした。お市が大槻の小屋の前に、こんな姿でゐるのが、人足の誰かに見つかりでもしたら、話がうるさくなるばかりか、もう、大槻へ、どう働きかけることも出來なくなる。今晩一と晩で、何にもかも打こはして終つたのでは、後々困る事となるな——と、新五郎は早くも

それを考へたので、今度は、自分があわてゝ、物蔭から蔭の暗いところを傳はつて逼ふやうにして、お市の側へ行つた。

そして、

『來い、來い——早くこッちへ來るんだ。』

聲を盗んで、手招ねきをした。

お市は、それを知ると、父の意に反むいても、どうしても大槻のところへ再び入り込んで行きたいやうな様子であつたが、やがて仕方なささうに、父につれられて、自分の小屋へ戻つて來た。

何處かの小屋の戸は一度開いたが、またそのまゝ閉まつた音がした。

『どうしたよ。駄目だつたな。』

新五郎は、いくらか、がつかりしてゐる。

『どうしたも、かうしたもないのよお父さん。あたしがあそこへ入つて行く迄は、死んでゐたやうにしーんとしてゐたのが、あたしの手が眞ツ暗な中を疊さぐりをしてゐると、ぐッと、それを、あの人の手がつかんだのですよ。』

『うむ。』

『あたしが、はッとした時には、もう戸の外へ投り出されてゐたのですもの、ほんとに口惜しいッたらありやしない。』

『うむ。』

『その間、あの人は、ぷつりとも口を利かないんですよ。大抵なら、馬鹿とか何んとか聲をかけさうなもんですけど、たゞ、どーんと投げ飛ばして、ぴつしやりと戸を閉めて、そのまゝ、うんもすうもないだんまりなんですもの、取りつく島もありませんでしたよ。』

『うむ。』

新五郎は、腕組みをして、

『默つてゐるところが曲者だ。腹の黒い大松樣に信用されて一足飛びの山奉行三百石の武家になる程の人物。一筋縄ぢやア行かねえな。』

『さうですともさア、お父さん。だけど、あんな人、ほんとに賴もしい。あんな人に可愛がられたらうれしいだらうねえ。』

『これこれ、親の前で何んだ。』

『ほ、ほ、ほ。』

『だが、一度で引込んではゐられない。明日もやれ、明後日もやれ、百夜千夜、通ひつゞけたら、思ひの通らぬこともあるめえ。』

『それア然樣でせうさア。』

三

朝になつて、新五郎は、ゆうべの事などは知らぬ顏に、山水の流れてゐるところへ行つて顏を洗つてゐると、そこへ、まだ眠むり足らぬといふやうに、手拭を下げ、楊子を喰はへた大槻巳之藏が下りて來た。

『これはこれはお早うございます。』

新五郎は、顏一ぱいを笑ひにほころばして大槻を迎へた。心の中では――ゆうべの事を何んといふか――それがひどく氣がかりになつてゐる。

大槻は、

『おう。』

と少しのわだかまりもなく大聲でいつて、

『お天氣でいゝなア。』

『へえ、全く然樣でございます。』

『だが、お天氣といつても、もう、秋らしい空だ。第一、山の水が手がちぎれるやうに冷めたくなつたな。』

『へえ、ですけれども、顏を洗ふと、一度に、眠む氣がさめて終ひます。』

『さうだな。』

山の水の中に、枯れ葉が一つ二つ流れて來る。

大槻は、顏を洗ふと、そのまゝ、とツとと小屋へ戻つて行つた。新五郎は、ほツとした。

それから間もなく、その日の工事の打合せを終つて、人足たちが、山から山へわかれて行くのを見てゐた大槻は、

『親方。』

と、少し離れたところへ立つてゐた新五郎へ聲をかけた。

『へえ。』

『お互に、これでまア夕方まではこれといふ用もないからだ。どうだ、わしが、いざといふ時の御上の御役に立つ爲めに、今日は、少し、山へ入つて、腕ならしに短筒の稽古をする。一緒に行かぬか。』

『へえ。』

『間違つてもお前を打つやうな事はしないから行かう——でも、山小屋へ美しい娘さん一人を殘して行くが氣がかりかな。』

『へ？』

と新五郎は、面くらつて、

『ど、どう致しまして。』

『ぢやア行かう。』

『お供いたしますとも。』

新五郎には、どうも大槻の心の中がわからない。ゆうべ、あしてお市を投げ飛ばした位だから、何にか叱言でも云ふだらう、さうしたら、わたしは少しも知らなかつた、娘の心得違ひでと、詫をして誤魔化すつもりでゐたところが、叱言どころか、美しい娘さんなどと云つてゐる。いよ〳〵腹の底のわからぬ人だ。この人は、この上、どれ程出世をするか知れない、何んとかして、うまく引つかゝりをつけて置きたいものだ——さう思つて、やがて、大槻の小屋を出るのへ供をした。

山の右左に點々と工事場がある。そこにも此處にも人足達が働らいてゐる。その間を縫ふやうに、坂を上り、また谷へ下り、流れを飛越えて、小半里。抱きかゝへるやうな杉の巨木の森の中へ入つて行つた。

大槻は、こゝ迄來ると、

『草臥れたな。休まう。』

といつた。

『へえ。』

『丁度お誂ひだ。そこに一本、こツちに一本、立枯れて倒れた木がある。これへ腰をかけよう。』

『へえ。』

新五郎は、何にかしら、氣になつて、

『短筒の御稽古は。』

『うむ。』

大槻は、さういつてから、俄かに、から〳〵と笑ひ出して、

『實はな、親方。それはつけたりなのだよ。』

『え？』

『少々、お前さんに無心があつて、ここ迄一緒に來て貰つたのだ。』

『え？　む、む、無心？』

『さうだよ是非曲げて叶へて貰ひたい事なのだ。』

『な、な、何んでござりませう。』

新五郎は、一寸、木の上へ腰を下ろしかけたが、すぐにまた宙に浮かせて、さッと顔色が變つて終つた。
『命だ、お前さんの命――』
『え!? 命? え、こ、こ、この新五郎の命?』
新五郎の狼狽ぶりに、大槻は腹の中ではをかしくて堪らなかつた。
『はッはッはッ。いや、その命よりも大切なものを貰ひたいのだよ。恐らくは忌やといふだらう。命、お前さんの命をくれろと云ふよりも辛いかも知れぬ。』
『な、な、何んでござります。』
『お前の命より大切なものだ。え、親方、實はな、わしはお前さんの娘さんのお市さんな。』
『え?』
『あの美しさに惚れたのだよ。わしに呉れてほしいのだ。』
『え? な、な、何んでござりますと?』
『追つて、わしが望みの身分になつたなら、改めて、家の妻とするが、身に少々大望がある、その成就までは、妾といふか情婦といふか、とにかく、何んでもいゝのだ、わしの自由にしたいのだが。』
新五郎は、すつかり脂汗をかいてゐた。がた〳〵からだを慄はせてゐたのが、まるで二つ折になるやうにして、木の上へ腰を下ろした。
相手は得意の短銃を持つてゐる、これアきッとゆうべの事で、俺を殺すのだなと思つたのだ。それを案に相違な話。ゆうべは、あゝしてお市を投り出して置き乍ら――と、新五郎にはいよ〳〵わからなくなつて終つた。

『呉れるか?』
『へ、へえ、よ、よ、よろしうござりますとも、あ、あ、あ奴だつて、ど、ど、どんなに喜ぶか知れやしませんよ。』
『さアどうかな。忌やだと云つてもそこはお前さんの親の威光を枷に、何んとか口說いて貰ふ事だな。』
『よ、よ、よろしうござりますとも――忌やだなどと勿體ない。』
『その代り、まア魚心あれば水心とやら、はッはッ、この御開鑿の工事は、これでなか〳〵の大仕事さ。』
『さ、さやうでござります。』
『では、話がついたら早いがいゝ、今夜八ッ刻過ぎにでも、わしの小屋へよこしてくれるか。』
『へ、へえ、へえ。む、む、娘もどんなに喜びますか。』
『まア、いゝやうに。』
大槻は、ふところから、五十兩の金をつかみ出した。
『結納代り――萬事はまア後々、城下へ下つてからの事だ。』
『こ、こ、こんな事をしていたゞいては。』
『いや、まア物事の定まりは定まりだ。とつておいてくれ。』
『へ、へえ。』
『では、今夜待つてゐる――小屋のものには一切秘密。誰一人にも知れぬやうにな。』
『へえ、合點でござります。』
『この話は、もう、ここだけの事。一歩歩るいたら、一と言も云つては成らぬぞ。』

「へえ。」

大槻は、杉の梢を見かけて、いきなり短筒を一發放した。

大きな黑い鳥が一羽、矢のやうに落ちて來た。

老婆の手

一

木曾の山奥、御嶽の湖近いあの不思議な牡丹の花は、いつの間にか散り果てゝ、たゞ見る山又山には、もう秋の色が濃くなつてゐた。

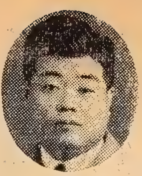
綠の芝生を敷きつめたやうに見えた南の丘は、その芝草が枯れて、薄焦色になつて終つた。

何處の山か、遙か彼方――雪であらう、いたゞきに白いものが見えてゐる。

松平新太郎は、この山の三軒の家の中、眞ン中の家に、最初の頃は、確かに、誰やら住む人ありと思つてゐたが、近頃では、そこは全く誰もゐない家であることがはつきりした。

しかし、何んとなく、山そのものが、秋が來たといふ外に、妙にかう人外境のやうな感じの濃くなつたのは、この僅かに三軒の內のその一軒に、それ迄住んでゐた誰かゞ、何處かへ行つて終つたからであると、心の中ではいつもさう思つた。

だが、新太郎は、この頃、羽賀得心齋を中心とする山の人達――山



悪性の淋病、消渇、に

「とても良く効く」と全國で評判の

純漢方解淋散療法

從來の淋藥療法とはまるつきり性質を異にして風變りな驚く程良く効く漢方藥があります。一服でもお服用になつた方は必ずその効果の偉大なのに非常に感謝され、なぜもつと早くこの藥に氣がつかなかつたか、**永い間無駄な費用も使はなくてもよかつたのにと**、心から喜ばれて居ります。これまで色々な療法で惱んだ方もこの藥を服用して尿を検査して下さい。膿も淋菌も見えないキレイな尿を御覽になれば誰方でも『**成程これは素敵な藥だ**』と其の迅速な効果に驚かれます。百の理論よりも一回の實驗が尊いのです。迷はずに早く的確に効く事實を御試し下さい。尚全國各地の多數全快者から感謝狀や東京市衛生試驗所の全快證明書などが毎日の様に澤山寄せられてゐます。**（御訪問の方にはこの事實を御覽に入れます）**

附記 激しい痛みと膿と小水の回數の多いのにホト／＼困つたひどい淋病が僅かの服藥でびつくりする位良くなつたと、全身に淋毒が廻つて腰が抜け、手や足の關節がひどく痛かつたのが頑固な消渇が一服毎に、ぐん／＼良くなつて僅かの中にさつぱりした、腰や手、足の苦痛がきれいに取れて有難い、然も少しの副作用が無いので本當に今時珍らしい藥だなどと喜びに溢れた多數の感謝狀を毎日澤山頂いて居ります。色んな療法で失敗し、どうしても治らず御困りの方はウソか本當か一刻も早く試して頂きたい。

右御紹介の家傳藥『純漢方賞藥解淋散』は七日分二圓五十錢、十四日分四圓五十錢、二十一日分六圓五拾錢、二十八日分八圓五十錢、特別重症用十五圓、送料内地十錢其他四十五錢

東京市世田ケ谷區太子堂三三六平林解淋散本家（振替東京一二一五七四番）電話世田ケ谷二二一ヵ番へ『富士』で見たと書いて振替かカワセで御申込次第密送。急用の方は送費切手三十錢封入の上御申込あれば『淋病根治讀本』と共に、良藥一週間分別名で急送致します（玉電太子堂電停前横入）

特に本藥の偉効を證明

する爲に三週間服用の方には、費用當家負擔で東京市衛生試驗所の檢尿をして差上げます。

の人達といつても白石十太夫と若鳥の二人。この三人の人達の動ごきに、深い警戒と共に、妙な好奇心をさへ持つに至つてゐた

まして、若鳥の若々しい美しい顔を見る時は、それが、例へ、どのやうな悪人の片割れであらうとも、尚ほ、自分の眞の味方であるやうに思はれるだらうと、自分でも、さう考へるやうになつてゐた。

今宵は、蕭々たる風が、山の端を寒む寒むと廻つてゐた。

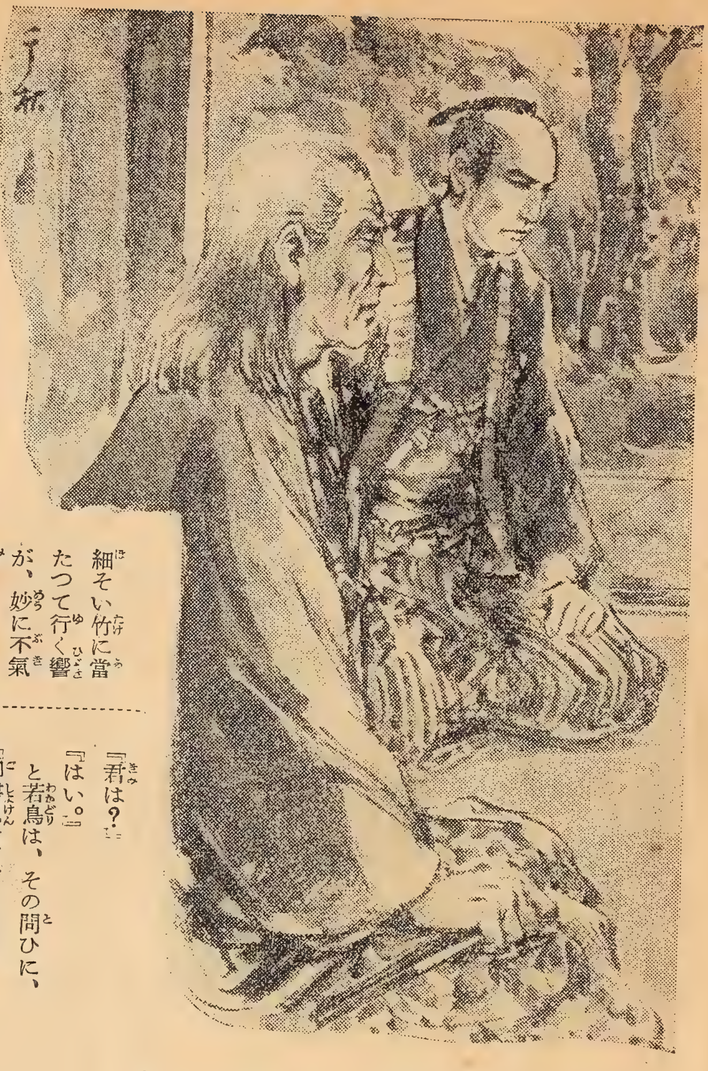
夕方から、得心齋は外へ出てゐた。

新太郎は、若鳥にかしづかれながら、奥の一室で、得心齋が差出した兵學の書を讀んでゐる。

「どのやうな悪人の中にあつても、書物だけは古の聖人賢者の教へである。これを繙くは即ちその聖賢人に接してゐるのだ。

新太郎は、かうして書をよんでゐる時こそ自分が、尾州六十二萬石の由緒ある血統の人間であるやうな氣持がしてゐた。

白石も、たつた今迄、何處か外に出てゐたが、戻るとすぐ、弓の矢を削つてゐる。すツすツと、小刀が、



細そい竹に當たつて行く響が、妙に不氣味であつた。

風は、刻と共に強くなり、寒むさは眞冬にも勝つて肌に迫る。

がた／＼ツと、裏手の扉が開いた。そして、こちらからの言葉も待たず、

「わしぢや。」

得心齋の皺枯れた聲であつた。眞晝さへ双眼に一物も見えぬ老體が、この夜に何處を歩るき、そしてまたかうして平氣で裏口から戻つて來るのだらう。

『先生でございますか。』

白石は、矢を削る手も緩めなかつた。しかし、若鳥は、すぐに座を立つて、得心齋の手をひき、土間から、白石の矢を削る座敷へつれて來た。

座敷といつても山の住居。そこには大きな爐があつて、さツきから矢の削り屑やら枯柴やらが、温かさうに燃えてゐる。

得心齋は、默つて、その爐へ手をかざした。

『君は？』

『はい。』

と若鳥は、その問ひに、

『御書見でございます。』

『さうか。それは結構な事ぢや。』

得心齋は、ぽつきりとさう云つてから、

『白石。』

『は。』

『今宵こそ申上るがいゝぞ。わしは、今宵こそ君を、御生母にお逢は

せ申す考へぢや。』

『え？』

『お曾にもよく申しつけた。彼とて命にかゝはること、滅多な事はせぬであらう。』

『でも。』

『ふッふッ。まア任せて置け――聞きさへすれば萬事はもうこッちのものぢや。』

さう低くいふ得心齋の眼は、次第に、細々と開いて、その睫毛と睫毛のほんの少しの間から、凄い瞳がきらりと光つたのである。

『萬一の時は――ふッふッ。』

得心齋は、刄を物に突透す眞似をしながら、また、兩眼をぴつたりと閉ぢ、にやりと、氣味の悪るい笑ひをもらした。

それから間もなく、得心齋は、新太郎君の前に、端然と、威儀を正して坐つてゐた。すぐうしろには白石と若鳥が控へてゐる。

『今宵こそは、いよ〳〵時節到來にござります。』

得心齋は重々しくいつた。

『何事の時節？』

『は。君樣、御生母お曾樣と御對面の日にござります。』

『何？　予の生母？』

新太郎は、

『わッはッはッはッ。これは異な事をきく、予の生母お曾と申すものは、前年すでに他界いたしたぞ。予が木曾福島の館へ參る時、父君猶光院殿より直々の仰せであつた。はッはッ何にをいふ。』

『御尤でござります。君樣お一人ではなく尾州藩元の御重役衆をはじめ家中一統、お曾樣御逝去を信ぜぬものは御座りませぬ。』

『それがどうしてぢや？』

『は。實は、お曾樣には世にも恐ろしい業病におかゝりなされ、見るも御悲しき御姿。それ故にこそ世を果敢なみ、自から水死と見せて、お姿をこの山奧へおかくしなされたので御座ります。』

『こ、こ、この山奧と？』

『然樣にござります。お曾樣、この山奧へお出ましの折、前々の御恩に感じ何處までもと御供いたせしは、この得心齋たゞ一人。しかも、口惜しきはいつともなくお曾樣業病を身に受け、斯くは、兩眼目しひと相成り申したのでござります。』

『母上、母上御存生と？――そ、それは眞か？』

『何んの嘘いつはりなござりませう。』

『逢はせえ、では、早う逢はせてくりやれ。母と子の對面、しかもこの山奧に誰に遠慮も要らぬ筈ぢや。逢はせえ、予は早う逢ひたいぞ。』

『しかし。』

得心齋は、ぐッと落付き拂つてゐた。

二

『悲しやお曾どのは、世にも恐ろしき癩の病。』

『何？　癩と？』

『は――それ故にこそ、君樣を、餘りにお曾どの、傍近うはお連れ申されぬのでござります。』

『何？　癩？』

『は。』

『癩とて實の母、何んの苦しい事があらう。母が癩なれば、予もまた癩であらう。癩のものが、癩に逢うて恐ろしい事はない筈ぢや。』

『いや、それは違ひまする。御生母が癩とて君様が、定まつて癩とは申されませぬ。』

『そんな事は何れでもいゝ。予は、母上に逢はう。』

新太郎の頭の中には、第三の家のあの不思議がすつかり解けて來たのである。

『母上はあの箱のやうな家の中にその日を送つてゐられるのぢや。』

もう矢も楯も堪らないやうである。半ば膝を立て、前にゐる得心齋を押除けても、行きたさうであつた。

『御尤。』

と得心齋はいよ〳〵悠々と、

『君様は御大切のお身。重々尾州家の恩顧ある得心齋は、その業病のものに例へ御生母なればとて輕々に御逢はせ申す事は成りませぬ。ただ、ここに君様が、得心齋に——いや、神佛に堅く誓をおたて下されば卽刻御出ましを取計ひませう。』

『神佛に誓へとか？』

『は。』

『何事？』

『御生母と直々のお話は成り兼ねまする。この得心齋がお二人の中にあつてお話をお取次いたすので御座ります。この儀御承引なれば。』

『よろしからう。』

新太郎は、無造作にそれを承知した。何事もあれ、今は只、死んだとばかり思つてゐた生みの母に逢へるといふ興奮に、得心齋のいふままであつた。

『それに——』

得心齋は、顏を突き出すやうにした。

『え？』

『先づ第一にお訊きなさらねばならぬ事がござります。』

『訊かねばならぬ事と？』

『は。それは猶光院様より窃かに拜領、そのまゝ何處にか隱匿いたしある黄金十萬兩並びに尾州家家督には必らず無くてはならぬ東照神君より家寶として下し置かれし御神鏡。この二た品を何れの地にかくしあるか。これをおたづねなさるのでござります。』

『十萬兩と神鏡と？　それはどうしたものぢやな。』

『猶光院様お曾どのを御溺愛の餘り、御男子出生の砌、卽ち君様御誕生の折、この二た品を下されしものにて、十萬兩はたゞ君様御

喘息・百日咳・たんせきに

成る程效いた！　治つた！　と實驗者が擧つてお喜び！

講談社の 喘息エキス

せき止一般に

定價 ・五〇　一・三〇　二・五〇　四・八〇　七・〇〇

（信用ある藥店にあります）

養育のために過ぎませぬが、御神鏡こそは、尾州家にとつて六十二萬石と吊代への品にて、萬に一つ、大公儀にこの御神鏡の紛失が相知れますれば、尾州家は即刻お取潰しに相成るも計り難きもの、しかも、御神鏡の裏には、東照神君御親筆を彫り込み、この鏡を守護するものは即ち尾州家の主たるべき旨をはつきりとなされあるものに御座ります。故にお曾どの、御病死といつはつてこの木曾の奥へ入られてこの方、尾州家では御神鏡の空箱を嚴封いたし、御主君をはじめ如何なる仁も、これを開らく事は相成らざる掟に相成りました。御神鏡が何者かの手に入つては、尾州家の一大事。それを、得心齋、度々お曾どのへ說きますれど、お聞き入れはなく――自分の生みし若君と對面の日にこそ申すべし――とかねての言葉。今宵はどうあつても、それを訊いていたゞかねばなりませぬ。』

『で、その十萬兩は誰のものとし、御神鏡とやらは如何にするのぢや。』

新太郞は、いくらか氣が落ついてか、皮肉さうにいつた。

風が、梢を渡つて行くのが聞こえて來た。

『は。』

と、しかし得心齋は平然として、

『元より十萬兩は、御君樣お手許へ奉るべく、御神鏡は、御城內へお戻し申すが、君樣といたしましても、御家に對する正しい御道かと存じまする。』

『では――母上のお身の上はどうなる?』

『は。』

得心齋はいよ〳〵落着き拂つて、

『何分にも、人前へは罷り出られませぬ業病故、一生、この山奧にて、風月を友にお過ごしなさるより外はあるまいかと存ぜられます。』

新太郞は、

『いや、それは成らぬ。』

きつぱりとさう云つた。

『如何に御業病であらうとも新太郞、斯くと知つた上は、この山奧にての御不自由をそのまゝに見過ごしは成らぬ。必らず福島へお伴ひ申し、館で朝夕を共に致すぞ。』

『しかし。』

『いゝ。もういゝ。直ぐに、母上の傍へ連れて行つてくれ。』

それから間もなくであつた。次第に烈しくなつて來た山の風に、顏を伏せるやうにして、得心齋を眞ッ先きに、白石と若鳥に前後をかこまれて新太郞が、あの箱の家へ行つたのは――。

この道すがら、新太郞は、今宵はじめて、

『得心齋は、眼が見えるやうだな。』

さう思つたのであつた。

しかし、新太郞も、もうこの山の不思議な生活に馴れて來てゐる。うつかり輕々しく口を利く事が、どんな危險を招くか知れない事を知つてゐるし、たゞ、ぢッと、沈默をつゞけて、この山の人達の企圖を見破つてやりたいやうな心持になつてゐた。

三

得心齋は、箱の家の扉の前に立つてゐた。そして、白石へ、
『油斷なく。』
と、低い聲で云つた。若鳥へも、同じやうにさゝやいて、腰に下げてゐた大きな鍵を引きぬくやうにして、扉の錠を、がちりと引開けた。
途端に、
『惡魔奴がまた來ましたな。』
太い低い皺枯れたお曾の聲が、家の中の暗闇から、氣味惡るく湧くやうに聞こえた。
『殺しにかや。』
二度目の聲に、得心齋は、
『はッはッはッ。何にを云はれるのぢや。』
さういつて、新太郎を振返り乍ら、
『業病に、あのやうに氣も狂はしうなつて居りまするでな。』
といつた。
新太郎は、もう、そんな言葉も耳へは入らない。闇の中に、生母と聞かされた女の姿を夢中になつて求めようとした。
が、この世では想像も出來ない空氣の濁り切つた胸に迫るやうな匂ひが、流れ出て來るだけで、人の影さへ見えないのである。
『灯――若鳥、何故、灯をつけぬのぢや。』
『はい。』
若鳥は、素直にさう云つた。
が、得心齋は、すぐに、
『口惜しいが、申すやうな業病、お曾どののお姿は、人の眼にふれさせ

僕はぢです。

◇僕は何にも、すき好んで、人間の肛門に頑張つておる譯ではない。但し人間は非常に不公平である。ヘソの如き役にも立たぬものを腹の中央に優遇して置き乍らヤレ尾籠だとかと我儘を大切に扱はぬから痔になるのだ

◇痔の手當ては症状に依つて違ひます。疣痔、裂痔、爛れ痔、周圍炎の樣な、肛門外部だけの症状には、小松痔退膏を貼布しただけでよいが、脱肛、痔瘻の樣に、內外兩面に亘るものは、小松痔退座藥を挿入する方法を併用しなければならない。尤も痔瘻とか痔出血、內痔核などの肛門內部だけの症状には小松痔退座藥だけでもよい。要するに、痔は早期に治す、と云ふ事がその治療に到る要諦である。放任して悔る勿れ。小松ぢの藥は全國到る處の藥店にある藥價は廿錢から總代理店は東京市日本橋本町 玉置商店

小松痔退膏

Q—C—12

度うはないので御座ります。』
『いや、苦しうはない。母上のお姿、醜いも恐ろしいも、予にとつては何事でもないぞ。』
『と、申しても。』
『いや、苦しうはないのだ。若鳥、灯を持て。』
『はい。』
その時、白石が、
『成りませぬ。』
と、強い聲でいつた。刀の柄へ手さへ添へて物凄い眼つきで、新太郎を睨みつけた。
『君樣、御自儘もいゝ加減になされませ。ここは、福島の館とは違ひ、云はゞ得心齋先生の御城廓も、同じこと。君樣とても御思召し通りにならぬところでござります。』
『何んといふか？』
『山又山の奥、かゝるところで通用いたすは、權力でもなく位でもなく、たゞ人間と人間が、その力、腕の力だけが物をいふところでござりますぞ。ぶしつけ乍ら、例へ六十二萬石の主君と云へども、この白石の

下位に立たなくてはならないかも知れないのでございます。君樣も——たゞ、得心齋先生の御指圖にお従ひなさるこそ然るべきかと存じます。』

新太郎は、むッとした。

日頃から強いその癇癖が、むら／＼と立ち上つて、こめかみの邊りに、青い筋が立つては來たが、考へて見ると、白石の云ふ通り、かゝる山奥では、全く人と人との力が物をいふのである。人間を獸にまで引下げて、互に、爭ひ勝つ自信がなくては、自分の主張は通されないのであらう。

新太郎は、ごくりと喉を鳴らして唾を呑んだ。

得心齋は、闇の中へ入つて行つた。

そして、

『さ、君樣、いらせられえ。』

新太郎は、默つてついて行つた。

そして、その新太郎が扉の中へ入ると、ぎい一つと、風に逆ふ音がして、その扉が外からぱつたり閉まつて終つた。

白石と若鳥は扉の外に立つてゐる。

新太郎は、すぐに叫んだ。

『母上、新太郎でござる。幼名千代丸。』

『おゝ。』

お曾の聲がした。

しかし、新太郎はもう次の言葉を叫ぶことは出來なかつた。

得心齋の、老年乍ら壯者のやうな頑丈なしかも力の強い大きな掌が、ぴつたりと新太郎の脣を押さへて終つたからである。

『成らぬ。自儘な口は成らぬと申したではないか。』

得心齋は、まるで、眼下の者を叱るやうな言葉つきであつた。

お曾は暫く默つてゐた。

そして、

『得心齋。』

とかう呼んで、

『その人が、ほんとうに新太郎君かどうかわたしは信じられぬ。』

『いや、間違ひなく新太郎君ぢや。』

『と云うても、わしは、この闇の中で、聲だけをたよりにそれを信ずる事は出來ないのぢや。わしに觸らせてくれ。』

『えツ、な、な、何にをいふ――そ、そなたは癩の病ひ、恐れ多くも尾州家御大切のお方に、その癩の手でさはられてどうなる。』

『お默りなされッ。わたしは癩ではない。いゝか、新太郎君、わたしは癩の病ひではないのぢやよ。こ、こ、この得心齋の奸計にかゝり毒藥で。』

『默れッ!!』

得心齋の割れ鐘のやうな聲がした。

『自儘な口は利くな。』

その一喝に、闇は再び鐵のやうな沈默がつゞいた。

この時、新太郎は、言葉穩やかに、

『なア得心齋。そなたも子がある。親子の情のわからぬ筈はない仁ぢや。わしは、生みの母上に逢へて、もう、このやうなうれしい事はなく、もう、この世の位も富もいらぬ。そなたのさッきいつた十萬兩とやら、母上に願うて、そなたへ進ぜていたゞかう。』

『え?』

『だから、予と母上とを、自由に話しをさせてくれぬか。』

『十萬兩だけではない、鏡もある、その神鏡が入用ぢや。』

得心齋の調子づいた聲に、

『それも賴んで見ようではないか。な、それなれば、予と母上との話を許してくれるか。』

新太郎は、闇の中に、その返事を待つた。

――つゞく――

未だ發表されたことのない尾張大納言家、お家騷動の實相! 次々に暴露されてゆく怪事件、怪事實。『三代盜ツ人宿』は、號を追うて面白くなると、どこでも大評判です!! 何卒御期待の上御吹聽下さい。

お家庭・旅行・スナップに!

性能極めて優秀 體裁はスマートな總金屬製――ぐつと握れば掌の中にも入る最小型、新流行のカメラ!!

マッチ箱より小さいカメラ

グッチー

(説明書お申込次第進呈)

◆固定焦點で、シャターは1/25及びバルブを備へてゐますから、誰方にも失敗なく明快な寫眞をお撮りいたゞける大型に劣らぬ性能をもつた評判品です。

× ×

【引伸し鮮明】

印畫面は20×20ミリ、十枚撮り。最高感光度をもつたグッチークロームフイルムにより美しい引伸し寫眞が自由に得られます。

▲定價僅かに…五円五十錢、専用ケース一円、フイルター二円 送料各内地十錢其他四十二錢・フイルム一本二十五錢送料六本まで右に同じ。

お註文は―東京市小石川區音羽・大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九へ)!

肺患診斷常識

肺患に、この療法あり
「早い程治るのも速い」

〜あなたは〜

●だんだん痩せては行かぬか
○輕いセキがつゞき痰が出ぬか
●三十七度一二分の熱が毎日午後から夕方へかけて出はせぬか
○盗汗や不眠が續きはせぬか
●何となく身體がだるく、胃腸も惡く食慾不進となる
○ドーキがたかぶり、息苦しく肩が凝り、胸は痛まぬか

〜これは肺病の初期の症狀です

●セキが增し痰が多く、時に血線がまじつたりせぬか
○貧血と衰弱が加はり顏色がわるくなりはせぬか
●毎日三十八度近い熱が出ぬか
○頭痛、不眠、喀血、下痢、便秘、胸痛などの苦惱なきや

〜これは肺病の第二期症狀です

▼▼人は肺病ときくと死刑の宣告を受けたかの樣に悲觀して、藥や器械のみで病氣を治さうとする。それをつけこみ無効の藥や器械を賣りつけたり色々な廣告で弱い病人を吊る商人が多い。

山師がどんなホラを吹いても藥屋がどんな甘い文句を掲げてもだまされてはいけない、結核菌を殺して肺病を一氣に治す藥や注射や器械はまだ世界のどこにも發見されてゐないのです……。

然し歎く勿れ
正しい療法により
肺病は治せる

▼▼肺病は唯一つ大自然にかへることによつて治る。若草もゆる土、澄み切つた水、清らかな空氣、惠みあまねき陽光、自然の草根木皮、そこには肺病者を救ふ大きな慈愛の手がさしのべられてゐます。

求むる療法

肺を病む人は今すぐ『富士で見た本下さい』と記し、ハガキを左記の寺へお出しなさい。

お釋迦樣の金言を基礎に正しい治し方を教へた『肺病治療の原理』と、寺傳秘法公開『光明のあなたへ』の二冊を**無料送呈**されます、早くこの教へにより肺病ロクマクを征服されよ。そして病める身に思うてもなつかしいあの健康であつた昔にかへり、家のため國のため元氣に活動致しませう。

河內國布施市
功德山德林寺
（電話布施三四五番・振替大阪一二三五番）

○何處も同じ

動物園の熊の檻の前で、
子供『お父さん、あの大きな熊はヲスなの、メスなの？』
父親『どれ、どの熊だい。』
子供『ほら、あの左の端にゐる大きな熊よ。鼻の横に引つ掻かれた傷のあるあれよ。』
父親淋しさうに、
『あゝあれか、あれはどうもヲスらしいね。』　（大阪市　林　正則）

笑話募集

一、必ず自作のもの。
一、用紙は官製はがき。
一、採用篇には薄謝を呈す。
一、宛名は『富士』笑話係。

○商賣のコツ

『御免下さい。』
『誰アれ。』
『奥さんはお在でゞございますか。呉服屋でございます。』
『要らないつたら、お歸りッ！　妾を誰だと思つてるの。』
『あゝ、是は奥さんでいらつしやいましたか。あまりお若くお見受け申しまして、ついお嬢さんかと存じましたので……』
『あら、さう、まあお入りなさいよ。どんな品物があるの？　見せて頂戴な。』　（廣島縣　竹内隆三）

○率直に言へば

自慢顏に妻君の寫眞を友人に見せて、
『どうだいよく撮れてゐるだらう。』
『ウン、成程ね。然しこれ丈けの美人にするには寫眞屋も隨分苦心したたらうな。』　（大阪市　中村寛次）

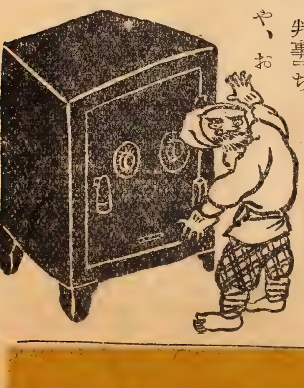
○見る時だけ

主人『電氣時計はいゝけど、電氣代が要るので不經濟だね。』
奥さん『えゝ、それはさうですけど、時間を見る時だけスヰッチをつければ本當にようございますわ。』　（東京市　西田香葉）

○日本兵

彼氏『貴女の心臟はほんとにトーチカの様に出來てるんですね。』
彼女『さういふあなたは丁度日本兵の様ですわね。』　（大分縣　古莊　巷）

○一圓の名譽



判事『ぢや、お

前はたつた一圓ばかりの金のために自分の一生を犧牲にしてしまつたんだな。

盜人『いゝえ、さう云ふ譯ではありませんが、生憎あの金庫の中には一圓きり入つてゐなかつたものですから……』（濱松市　岩倉洪平）

○用意周到

女中『郵便局へ行きましたら、切手をもう一枚貼るやうにと言ひました。』

奥樣『あゝさう。お前宛名のかくれないやうに貼つたらうね。』

女中『えゝ、それはもう大丈夫ですとも、二枚重ねて貼つておきましたから。』（東京市　鈴木鳴喜子）

○眞理

甲『何と云つても健康の爲めにはラヂオ體操が一番だ。永生きすること請合ひだね。』

乙『冗談云ふな。だつて、俺達の先祖の時代には無かつたぢやねえか。』

甲『さうさ。だからみんな死んぢやつたぢやないか。』（淸津　瀧野口正夫）

○念の爲め

主人『私の歸らない間に山田さんが見えるかも知れないが、さうしたら、午後二時に此方から御訪ねすると云つてくれ。』

給仕『ハイ、畏りました。若し山田さんがお出でにならなかつたら何と申上げて置きませう。』（東京市　木幡武）

○月末

治子『ねえ母さん、活動見に行つていゝでせう。』

母『だつて昨日行つたばかりぢやないの。』

治子『昨日行つたのは○○館ぢやないの。今日は△△館よ。』

母『だめよ、何と云つても今日は月末で忙しいんだからね。』

治子『ねえお願ひよ。その代り今月はもう絶對に行かないからね。』（東京市　高城美喜）

○怖るべき錯覺

或る人が使ひ古した自動車を賣り*拂はうと思つて門前に曝して次のやうな貼り紙をした。

『此の自動車を五百圓でお引取り下さる方は當家にお申出で下さい。』

すると、早速一人の男が訪ねて來た。

『あの貼紙は本當ですか。』

『勿論掛値なしです。』

すると其の男、大きく肯づき、

『よろしい。私が引き取りませう。其の代り五百圓は現金で頂きたいんです。』（福岡縣　野中唯市）

岩田英

松竹大船映畫脚本―柳井隆雄・八木澤武孝
寫眞は戰線にて作曲する研一（佐分利信）

母の心配

『研一、一寸見ておくれ。こんなものが、隆二の本の間にあつたのだよ。』

日曜日の朝であつた。

研一が自分の部屋で片づけものをしてゐると、そこへ母の房子が入つて來て、二三通の開封した手紙を差出して見せた。

『表書きだけは男名前だけれど、これは直代さんといふ女の人から隆二に來た手紙ぢやないの。』

『…………』

『これで見ると、隆二は、この女の人と大分親しくしてゐるやうだけれど、まさか面倒なことになつてゐるのではあるまいね。研一、お前さん、何にも知らないの。』

『…………』

研一は、その手紙を次ぎ〳〵に開いて讀んでゐたが、やがて意を決したやうに、言ひ出した。

『お母さん、實は、このことは、僕は知つてゐたのですよ。』

『まあ！』

文

永遠の感激

『まあ、もうそんな間になつてゐたのですか！』

母は意外な驚きに、その聲は顫へさへ帶びてゐた。

數年前、父を突然失つてからといふもの、一家を背負つて母の房子は、一段と感じ易い苦勞性になつてゐた。

その母を思へばこそ、その母の心を強く騷がせたくないと心配しつゝ、研一は、今の今まで、この話を、思ひ切つて言ひ出しかねてゐたのである。

しかし、研一は、隆二の愛人たるその直代に對しては、かなり純粹な好感を抱いてゐた。

一週間ほど前、彼は隆二に打明けられて、早速、直代がその兄と二人で營んでゐるK大學街にある蓄音機の古レコード屋を訪れた。

直代は、晝間はそのレコード屋で兄を助けて働き、夜はレヴュウの踊り子をしてゐるといふのであつたが、さうした職業を持つ娘とは思はれない、清楚な匂ひ高き潑剌たる少女なのだつた。

最初は、通りがかりの素見客を裝つて、それとなく直代を見て歸るつもりだつた研一も、一目見た直代の、好ましい印象に惹き付けら

『この間、隆二から打明けられて知つてゐたのです。しかし、お母さん！』

研一は一寸母の顏を窺ふやうにして、言ひ續けた。

『この直代といふ娘は、とてもいゝ娘なんですよ。僕は、實はこの娘の家へも行つて、直代とも、その兄さんて人とも會つたのですが、兄妹とも、本當に眞面目な人たちです！』

『…………』

『お母さんにも何れ話さなければと思つてゐたのですが、何となくまだ時期でないやうな氣がして默つてゐたのです。』

『…………』

『しかし、僕としては、お母さんさへ許して頂ければ、隆二が大學を卒へてから一緒にさせてやつても、大丈夫ではないかと思ふのです。』

（寫眞は笠智衆の傑作）

れて、つひに自分の名前を名乘り、その兄の俊作とも會つてみることにした。

兄の俊作もまた、見るからに實直さうな頼もしげな人物であつた。

研一は、この兄妹に心からの好感が抱かれたので、これなら隆二の戀愛を心よく結實させてやつてもいゝ相手ではないかと斷じたのだつた。

『……母には折を見て、僕からよく話をします。お妹さんのことは、どうぞ御心配なく、……弟とも今迄通りお附き合ひを願ひたいと思つてゐます。』

『…………』

『或は正式の話は、弟が大學を卒へてからといふことになりませうが、まあ、その點は一つお含み置き願ひまして。』

『有難う厶います。』

研一は、兄の俊作と、そんな突込んだ話まで交して、その日は暇を告げたのだつた。

從つて、この話を、何とかうまく母に納得させるやうにしたい、研一は以來そればかり考へてゐたのだ。

『お母さん!』

手紙を一通り讀み終ると、研一は、熱情のこもつた眼で母を見乍ら、言つた。

『このことについては、當分僕に委せておいては下さいませんか。お願ひです。』

『…………』

『僕だつて、たつた一人の可愛い弟の隆二のことですもの、決して無責任な眞似は致しませんよ。』

『…………』

『よく先方の家筋なども調べてみます。お母さんの納得のゆくやうな方法を必ず取りますよ。どうか、それまでは……』

『……さあね。』

昔氣質の母親は、何がなし不服げな氣配で首をかしげてゐた。

『……お父さんも被在らないのだし、妙なことを仕出來して、私が親類たちから笑ひものにされるのは堪らないからね。』

『大丈夫ですよ。』

研一は、母の言葉を強く打消すと、

『どうぞ、僕にお委せ下さい。きつと〱隆二の奴を幸福にしてやることが出來ると思ふのです。樂しみですよ。』

強い自信を眉宇にこめて、獨り言のやうに呟くのだつた。

愛の衝動

それから三四日の日は過ぎた。

ある夕方だつた。

研一が會社が退けて歸つて來ると、

『お歸りなさい! 今日は私ひとりがお留守番なのよ。』

美しい彈むやうな聲で、さう言ひ乍ら、玄關に現れたのは、從妹の一枝だつた。

一枝は、半年ほど前に名古屋から上京して來て、研一の家に同居し、洋裁やピアノなど稽古してゐる、年頃の娘だつた。

キビ〱した明るい性格の近代女性で、いつも研一は、無邪氣な憎まれ口を叩き合ふ相手であつた。

『お孃さん一人がお留守居で、よく鼠に引かれなかつたな。』

研一は早速、いつもの調子で一言浴びせかけた。

『鼠に引かれてしまつたら、清々してよかつたといふのでせう。どうもお生憎さま!』

『はつはつは。……けれど、お母さんは、どこへ行かれたのかしら。』
『知らないわ。二時間ほど前に默つてお出かけになつたのよ。』
『ふむーん』
研一は、何となく妙な不安にかられて洋服を脱ぎかけたが、一枝は、傍でそれを手傳ひ乍ら、
『ねえ、隆二さんて、本當に倖せ者ねえ。』
『どうして?』
『だつて研一さんみたいないゝ兄さんがゐるんだもの。お父さんが亡くなつても大學へはやつてくれる、そして、好きな娘とは結婚までさせてくれる……』
『……………』
『私、隆二さんがつく〴〵羨しいわ。』
と何時になくしんみりと言つた。
『それに比べると研一さんは大へんね。私、これでも少し許り同情してゐるのよ。』
『はつはつは、……一坊に同情されたつて仕方ないさ。』
研一は無造作にさう言つたが、しかし隆二の暢氣な境遇に比べれば、長男である自分の身の痛ましさはヒシ〳〵胸に應へて來るのだつた。
　父が存生の頃は、彼も至極自由な氣持で、好きな西洋音樂の研究に、ひたすら一身を打込んでゐたものだつた。
　音樂で身を立てよう！
　將來はきつと偉大な作曲家になつてみせるぞ！
　さういふ念願の下に、孜々として研究にいそしんでゐたのであつたが、父の歿後は、さうした趣味的な勉強を續ける餘裕は、もう無いのだつた。母と一人の弟を抱へて、彼は一家を支へるべく働かねばならなかつた。
　彼は潔く、音樂研究の野心を放棄して、實直な會社員勤めをして、今日に及んでゐたのである。……
『御挨拶ね。……では、同情するのは止して、研一さんにいゝもの見せませうか。』
『なに?』
『これよ!』
　一枝は、簞笥の上から白い封筒に入れた寫眞のやうなものを取上げて、研一に示した。

『さつき、松本のをばさんがお母さまにつて、持つていらしつたの。また、研一さんのお見合ひの寫眞だわ！』

『ふん！』

研一は冷淡に鼻を鳴らした。松本のをばさんといふのは、母の幼馴染の友達であつたが、この頃ちよく〳〵母の許を訊ねては、研一への縁談を、あれこれと持込んで來るのだつた。

母も縁談の話には、相當乘氣らしく、時折、幾枚かの寫眞を、研一の前に並べては、

『お前も、そろ〳〵身を固めておくれでないか。どう？』

などと言ふのだつたが、研一の應答は、いつも決り切つてゐた。

『僕は、もう少し一人でゐたいと思ひますよ。せめて隆二が大學を卒へる迄はこの儘一人でゐたいのです。』

――その松本夫人が、また新らしい見合の寫眞を持參して來たものらしい。

『私、わるいけど、さつき、そーつとこの寫眞拜見して了つたのよ。とても淑かな上品なお孃さんよ。早く御覽なさい！』

一枝は、幾分嫉妬めいた調子でさう言ふと寫眞を研一の目の前に突出したが、

『止せよ。』研一は、強く遮つて、

『それより腹が空いた。何か早く食はしてくれないか。』

『照れてゐるのね。』

『照れるものか。僕は見合結婚など嫌ひなんだ。僕は僕の細君は、自分自身で選ぶつもりだよ。ね、一坊もさうだらう？』

『さあ、どうかしら。』

一枝は一寸研一を焦らすやうに首を傾げたが、凝乎と熱の罩つた眼で自分を視詰めてゐる研一の視線を仰ぐと、途端に、

『あらッ！』

にはかに顔を眞赤に染めて、臺所へ逃げ出して行つた。

清純な女性の美しい恥らひ！ その一枝の動作を見ると研一は、大きな愛の衝動がわれにもなく胸一杯に湧き上るのを覺えた。

『一枝さん！』

改まつた口調で、さう叫ぶと彼も立上つて一枝のあとを追つて、そして、なよやかな兩肩を、逞しい兩手で押へると、

『一枝さん、僕は、僕は……』

『い、いけませんわ。』

一枝は懸命に身をもがいたが、しかし、強ひてそれを振切る氣配は見せなかつた。

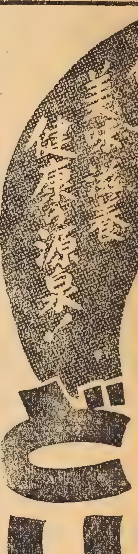
その時だつた。表玄關のガラリと開く音がして、

『オヤ、もう研一さん、お歸りだつたの。』

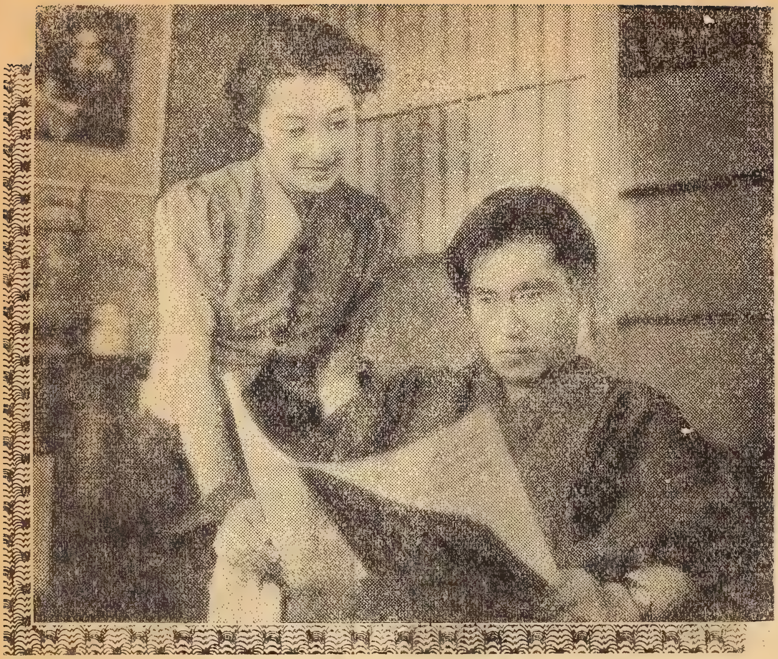
母の聲が響いて來た。

弟の家出

『……それは、お母さんがレヴュウ・ガールと聞いて、隆二との行きがかりを心配なさつた氣持は分りますが……どうも困りましたねえ。』


銃後の健康増進にゼヒ！
（主成分・葡萄糖・果糖・アミノ酸）
藥店・食料品店にあり

その日の夜であつた。奥の茶の間で、研一は母と一枝と鼎座して暗憺たる氣持で、腕を組んでゐた。



一枝(高峰三枝子)と研一は憎まれ口をきゝ乍らも親しかつた

研一が先刻、ふと不安げに思つた豫感は當つて、母はその日、單身で直代の家を訪ねて行つたのであつた。そして兄の俊作に會ひ、その口から妹は、新宿のさるレヴユウ劇場に出てゐると聞いて、昔氣質の母は、唯もう直代に對し嫌惡な氣持で一杯になつてしまつた。

『レヴユウ娘などを、隆二の嫁に迎へるなんて、飛んでもない！』

さう決心すると、母はその場で、直代と隆二との交際は、今日限り一切止めにして頂きたい、とキッパリ言切つて歸つて來てしまつたのだつた。

『……實直な俊作君は、きつと大憤慨してゐますよ。二人の仲は僕が必ず責任をもつて纏めますからと立派なことを言つて僕は歸つて來たのですからね。僕がいかにもその場限りのお爲ごかしを言放つた樣に思つて、どんなに怒つてゐるか分りません。』

研一も、さすがに一寸恨みがましく、母に愚痴を言つたが、最早かうなつては、致し方がなかつた。

研一としては、それよりも、このことが弟の隆二に早晩知れた時、あの一本氣な、向ふみずな隆二が、激昂のあまり、どんな態度をとるだらうか、その方が尙更に心配だつたのだ。

『隆二さん遲いわね。』

一枝は柱時計を見上げ乍ら、不安さうに呟いた。

『また直代さんの家へ廻つたのかしら。』

隆二は、この頃、直代のレヴユウ劇場が閉場るのを待つて、彼女を兄の家へ送り屆けてから、家に歸つて來るらしかつた。

今夜、彼が兄の俊作に會へば、俊作から委細のことを彼は聞かれて了ふに違ひない。

その時の彼の氣持、彼の煩悶、彼の激怒、――それを思ふと、もう研一は居ても立つても居られなかつた。

『ともかくも、僕はもう一遍、俊作君に會つて來ることにしますよ。』

研一が意を決して、やをら立上つた時だつた。

荒々しく玄關の格子戸が開いて、歸つて來たのは當の隆二であつた。

『おゝ、隆二か！』

研一は思はず叫んだが、隆二は返事もせずにスタ／＼二階へ上つてしまつた。そして押入れを開くと、手當り次第手まはりのものを摑んでトランクに詰め始めた。

『隆二、どうしたのだ！』

追ひ縋つて二階へ上つた研一は、彼の肩へ優しく手をかけて、問ひかけたが、隆二は無言だつた。

『お前、直代さんの家に寄つて來たのだらう！』

『寄つて來て惡かつたのですか。……兄さんのお爲ごかしを眞に受けてゐた僕はバカでしたよ。』

『おい、とにかく、落着いて話をしよう！』

『今更、何も聞きたくはありませんよ。もう兄さんみたいな僞善者のお說教なんか、眞平だ。』

『お前の怒る氣持はよく分る！けれど、これには色々譯もあるんだ。よく話さなけりや分らない！』

『諄いよ。とにかく、僕と直代とは別れればいゝんでせう。ねえ、かうすりやいゝんでせう。……かうさせたかつたんだらう！』

隆二は、さういふと、矢庭に机の上にあつた直代の寫眞を取上げると、力委せに引裂いて忌々しげに疊の上に投げつけた。

『お前、家を出て行かうといふのか！』

『當り前さ、子供や弟の幸福を考へてくれない様な冷たい家に、

一刻でも居られるものか!』

『馬鹿ッ!』

研一は隆二を毆つた。

『これだけ言つても分らなければ勝手にしろ。』

『あゝ勝手にしますよ。勝手にするとも!』

隆二は、トランクを片手に持つと後も見ず階下へ驅け下りて行くのだつた。

『隆二、まあお待ち!』

『短氣な眞似をするもんぢやないわ。』

母と一枝が追ひ縋つて叫んだが、隆二はもう訊かなかつた。開け放した儘の玄關から、彼はまつしぐらに戸外に飛出して行つた。

樂しく語る隆二(德大寺伸)と直代(三浦光子)

『隆二、隆二、お待ちつたら。』

母も跣の儘戸外に走り出たが、屋敷町の夜の闇の中に、彼の姿はもうどこかへ消え去つてゐた。

晴れの應召

『ぢや、お母さま、行つて參ります。』

『身體を氣をつけて…元氣でね。』

母の房子は、軍帽や奉公袋など研一に手渡し乍ら、氣強く言つた。

隆二が家出してから數日の後であつた。

研一は召集の赤紙を受けて、勇躍出征することになつた。いよいよ今日は門出の朝である。

『忘れものはないかえ?』

さういふ母の言葉に、研一は思ひ切つて言出した。

『えゝ、……もう何もありません。唯、お母さん。隆二の消息が分らない儘に出かけそのが、何よりの心殘りですよ。』

『…………。』

『ね、お母さん、あれも、もう決して無茶な眞似はすまいと思ひますから……若し歸つて來ましたら……』

　その研一の言葉を、皆まで言はせず、母は幾度も頷いて、言ふのだつた。

『分つてゐます。お前の氣持は、よく分つてゐますよ。隆二や直代さんのことは決して心配しないで、お國のために、立派にお勤めを果して來ておくれ。』

『えゝ、大いにやつて來ます。』

　研一は、母の言葉に、初めて晴れ〲した氣持になるのだつた。

『隆二さんのことは、私も引受けたわ。安心して行つていらつしやい。』

　一枝も傍から研一に言つた。

『頼むよ、あいつは元來、馬鹿な奴だからね……』

『まあ、馬鹿ぢやないわ。研一さんより勇氣があるだけよ。』

　二人は、相變らず口を開けば、憎まれ口の言ひ合ひであつた。

『これからは喧嘩相手がゐなくなつて、淸々するだらう。』

　研一がズバリと言へば、一枝も負けずに應戰した。

『えゝ、とても淸々するわ。……ついでに死んでいらつしやい。』

『當り前さ！』

『死んだら、研一さんの爲に、私しんみりとショパンの葬送曲でも彈いてあげるわ。』

『一ちやんのピアノぢや、どうも浮ばれさうもないなア。……そんな心配より早くお嫁さんにでもなれよ。』

『餘計なお世話よ。』

　併し、そんな憎まれ口を叩きあつてゐてもふたりの兩の瞳には、いつかあやしい淚の露が、あふれ出てゐるのだつた。

『ぢやア……』

　研一が立ちかけると、一枝は、

『ちよツと！』

　と呼び止めて、小さな風呂敷包を彼の手に渡すのだつた。研一が開いてみると、それは何時の間に慥へておいたのか、『武運長久』と美しいぬひとりした千人針だつた。

『有難う！』

『…………』

『私、ここでお別れするわ。……もう、お送りしないわよ。』

　さういふと一枝はクルリと研一に背中を向けて、走るやうに、二階の階段を馳け上つて行くのだつた。

（一枝はやつぱり自分を心から愛してゐてくれたのだ。自分は何といふ幸福な男だらう。）

　研一は、瞬間さう感じると、大きな喜びがいちどきに胸一杯に漲り渡るのを覺えるのだつた。

『よしツ！　この上はお國のために、力一杯精一杯働いて來てやるぞ。』

　彼は勇躍して、わが家の玄關を力強く踏み出して行つた。

『バンザーイ、松原研一君、バンザーイ！』

　町内の人々の歡呼と共に、やがて賑かな愛國行進曲の合唱が勇ましく湧き上つて來るのだつた。

溫いわが家

『早いものね。研一さんが出てから、もう三月も經つて了つたわ。』

　或る雨の夜であつた。

一枝は、茶の間で小包の表書きを認め乍ら母の房子を振返つて言つた。その小包は戰線にある研一への防寒具その他とゝのへたものだつた。

『戰地の冬は、さぞ寒いだらうね。』

『研一さんも大へんだわ。』

『まあ、研一ばかりぢやありませんよ、戰地に被在る方は……』

『ほゝゝゝ。さうね。さう言へば……』一枝は不圖思ひ出したやうに『ね、伯母さん。あの直代さんの兄さんの俊作さんも出征なさつてゐるらしいのよ。』

『まあ！』

『この間、若しや隆二さんが行つてゐないかしらと思つて、私、あのレコード屋のお店の前を通つてみたの。さうしたら、あのお店、もう無くなつて貸家札が張つてあるのよ。』

『…………』

『近所の人に聞いたら、一月許り前、兄さんが出征されたので、お店はやめてしまつたんですつて！』

『それで、あの直代さんは、今、どうしてゐるのかしら。』

『何でも、同じ劇場にゐるお友達と一緒に新宿の方のアパートに住んでゐるらしいわ。ね伯母さん！』

一枝は、一寸母の氣を引くやうに

『こんな時、隆二さんでも家にゐたら、直代さんは思ひ切つて、こちらへ引とつてあげてもよかつたのにね。』

『本當だね。』

母は溜息まじりに素直に頷いた。

家出する隆二と引とめる一枝及び母房子（葛城文子）

『隆二は、いつになつたら、歸つて來るのかしら。』

『本當にのんき坊主ね。研一さんの出征も知らないで……あッ、手をよごしちやつたわ。』

一枝が小包を膝から下して立ちかけた時だつた。

表の格子が、ガラリと開いて、人の訪れる氣配がした。

『どなた？』

『………』

訊ねても返事がない。一枝は不審さうに母と顔を見合せたが、立つて玄關に出てみると、そこに佇んでゐるのは、たつた今、噂し合つてゐた隆二ではなかつたか！

『まあ、隆二さん。……伯母さん、隆二さんよ、隆二さんが歸つて來たわよ。』

一枝は茶の間に向つて、大きな聲を彈ませた。

『まあ！』

母もあたふたと玄關へ走り出て來たが、さすがに直ぐには、言葉もかけ得ないのであつた。

『……まあ、とにかく、お上り。』

『………』

隆二は項垂れて、暫しモヂ／＼してゐたが、やがて一枝に促がされて、茶の間に上つた。

『何處へ行つてゐたの！』

一枝は鋭く問ひかけて、

『研一さんは召集されたのよ。』

『えッ！』

『もう、とうに戰地へ發つたのよ。發つまで研一さんは、あなたのことを心配してゐたわ。』

『………』

『あなたの事だけが心殘りだと言つてゐただわ……もう二度と生きては歸らない覺悟で發つて行つたのよ。でも勇ましく發つて行つたわ。……だのに、あんたはたかが女一人位のことで家を飛び出すなんて！』

一枝は、さう言つてゐるうちに、昂奮で聲が顫へて來た。しかし一枝は言ひ續けた。

『あたし研一さんの氣持がよく分るわ。研一さんはあんたを一人前にするために、好きな音樂の勉强さへ犧牲にして働き續けてゐたのよ。あんたにはそれが分らなかつたの。……あんた濟まないと思はないの。』

『す、すみません。』

隆二は、かすれた聲で喘ぐ樣に言ふのだつた。

『僕が惡かつたのです。勘辨して下さい。……今日は僕、朝から幾度も／＼出征軍人の歡送に出會ふのでした。そこで、若しや兄さんも征くのでないかと思つて、思ひ切つて、かうして歸つて來たのです。これからの僕は生れ變つた立派な隆二になつて、今までの罪の償ひを果します。立派な銃後の人間になつて働きますよ。』

『有難う、よく言つてくれました。』

一枝も感動して涙聲になつてゐた。母もホッと安堵した面持で、隆二の姿をしみ／＼眺めやつた。

雨の中を傘も持たず、歩き廻つてゐたらしい。隆二は頭からビショ濡れの姿だつた。

『まあ、お前、濡れた儘でゐると、風邪をひくわ。早く着換をなさいよ。』

『私、持つて來てあげますわ。』

一枝は急いで二階へ馳けて行く。

『お前、お腹が空いてゐるんぢやないかえ。』

母は柔しく問ひかけた。

『いゝえ。』

『でも、とても寒さうぢやないか。何か溫い物でも食べた方がいゝよ。』

イソ〳〵と臺所へ立つて行くのだ。歸つてみればわが家はいつもあたゝかいわが家である。

隆二は崩れる樣に疊の上にひれ伏すと、わツと男泣きに泣き出した。

夜の戰線

『頑張れ、最後の一人になつても、友軍の來るまで持ちこたへてくれ、賴みますぞ！』

隊長は聲を嗄らして叫んでゐた。

夜の戰線であつた。

研一等の部隊は、占領したある小部落を、ごく小人數で死守してゐるのであつた。豫定された後續部隊が中々現れない上に、敵は日となく夜となく逆襲を試みて來た。

研一等の一隊は、ひるまずこれを擊退し續けたが、今宵はもはや用意の彈藥等も殘り少なになつてゐたのだ。

『いよいよ、今夜が最後かもしれんぞ。』

『よし、元氣で行け！』

『お互に靖國神社で會ふのが樂しみだな。』

『はつはつは！　氣の早い奴だ。』

決死の戰鬪を直前にしても、皇軍勇士たちはさすがに闊達たるものであつた。

敵軍の擊ち鳴らす機銃の音は、ます〳〵間近になつて響き亙る。しかし研一等は、凝乎と銃を控へて、中々應戰しようとしなかつた。乏しい彈藥で敵に當るのだ。出來る丈、身近に敵兵を引寄せてから、百發百中の射擊を試みようといふのだつた。

去る日來る日

尾崎士郎著

定價二圓（送料内地十八錢）

四六判・函入り豪華本

裝幀並ニ挿繪　石井鶴三畫伯

講談社發行

小說「去る日來る日」は何故に斯くも問題となつたか

著者四十年の人生体驗は凝つて此の一卷にあり

小說と銘打ちながら一般の小說に非ず、哀別離苦宿命の業苦、戀愛と愛慾を深酷に描きながら讀む者をして高き逞しき感情を呼び起さしめ、深い思策と民族發展の黎明を指示し、惱み多き人生を如何に生くべきかを暗示してゐる。

老いも若きも、男子も女子も、人生一度は手にし靜かに落ち着いて讀んでおくべき書。しびれる樣な感激と興奮とが、あなたの胸に盛り上つて來るであらう。（全國書店で只今大評判です）

呼吸を殺して待機する味方の將兵たち。

ますます迫り來る敵機關銃の轟き。

月は明るく冴えて、小高い丘の陣地をしろじろと照してゐた。

言ひやうなき凄愴な空氣が四圍を包んでゐる。

研一は、凝乎と身動きもせず、わが、機關銃座の前に控へてゐたが、やがて、

『おゝ、出來るぞ！』

思はず感動した小聲で叫んだ。

そして、ポケットから慌てゝ紙切れを探し出すと、そこへ五線を引き、彼は夢中で樂譜を書き始めるのだつた。

死に直面して悠容迫らざる勇士等の健氣な姿。凄愴なる激戰の今や展開されんとするその直前。――研一の腦裡には、自らあふるゝ許りの音樂的靈感が湧き上つて來たのであつた。

（おゝ、おれにもこんな力強い音樂が書けるのか！　凄いぞ！）

研一は、物に憑かれたやうに、脇目もふらず樂譜を書き綴つてゆく。

その時だつた。

子供と漫畫

內務省當局の話によると、子供が一番喜んで見るのは漫畫ださうで、しかもその漫畫の與へる影響は豫想外に大きいとの事。この點を充分玩味し親心で作られてゐる**講談社の漫畫繪本**は全く安心して與へられると各方面からの聲が高い――この度又々『**漫畫と頓智合戰**』を發賣。目下飛ぶやうに賣れてゐる。誰方もお早くお與へ下さい。

『撃てッ！』

悲壯な隊長の言葉が、鋭く空氣をつんざいて叫ばれた。

敵の砲火は、はや、目の前に近接してゐる！　研一は樂譜の紙片をポケットに藏ひ込むと、彈かれたやうにわが機關銃座にしがみついた。

凄絕、壯絕なる激戰は、さうして愈々開始されたのだ。

『班長殿、もう彈丸が切れますぞ。特務兵はまだ參りませんか！』

さう叫んだのは研一の部下の一人だつた。

が、特務兵はまだ姿を見せないのだ。

研一は悲痛な聲で叫んだ。

『よし、彈丸がなくなつたら、肉彈で行け！　劍を拔いて敵陣に躍り込むのだぞ！』

『ハッ！』

『おれも行くぞ。皆な、續け！』

そして、研一が機銃座の前から、決死の形相で立ち上りかけた時だつた。

『お、遲くなつて申譯ありません。』

喘ぐやうに馳せつけて來たのは、一人の特務兵だつた。

『さア、彈藥函です！』

『有難い！』

研一は、それを受取ると、

『おーい、彈丸が屆いたぞ。もう一息だ。みんな頑張つてくれ！』

そして、その特務兵の顏をチラリと覗いた瞬間である。研一は覺えず、あッと聲をあげて驚いた。

それは、絕えて久しい直代の兄の俊作ではなかつたか！

『おゝ、君は岸俊作君！』

『松原さんでしたか！』

二人は思ひがけぬ奇遇に、しつかと手を握り合つた時だつた。敵の迫撃砲弾が唸りを立てゝ、すぐ間近に炸裂した。

『あッ！』

研一の部下の一人が、のけぞつて倒れた。

『おい、しつかりしろ。』

研一がその部下を助け起してゐる間に、俊作は、その部下に代つて、戦闘の位置についた。

そして激戦又激戦だ。

やがて、東天が仄かに白んで、次第に曉が訪れて來た――

さしもの敵兵も、わが頑強な撃退に辟易してか一まづ戦闘中止して、退却したらしい。

『あつ日章旗だ、日の丸の旗が見えるぞ！』

研一は銃座にしがみついてゐた（寫眞中央）

誰やらがさう叫ぶのを聞いて、ふと目を上げたが、俊作は見ると、東天の下、地平線の彼方には、遥かに小さく幾本かの日章旗が揺れ動くのが見えるではないか。

『おゝ、友軍だ。松原班長、友軍が來ましたぞ！』

俊作は歡喜の瞳で傍らの研一を振り向いたが、研一はそこに凝乎とうなだれた儘、動かなかつた。

俊作はハッとして

『どうした。松原さん！』

肩を叩くと、その身體はガクリと前へのめつてしまつた。機關銃に噛りついた儘、研一は何時か冷たく死んでゐるのだつた。

永遠の感激

『奇縁といへば奇縁ね。直代さんの兄さんが研一さんの最期を見とるなんて……』

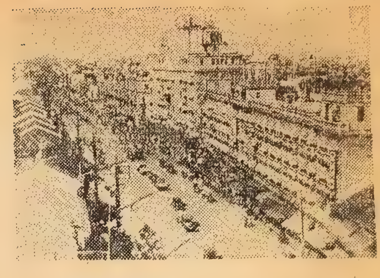
一枝は戦線の俊作から來た手紙を讀み終つて、しんみりと言つた。その手紙は俊作から研一の最期を審さに報告して來たものであつた。

『……………』

母も隆二も、默々とうなだれてゐた。

隆二の傍らには、直代も目を伏せて控へてゐた。今は直代も、母に許されて、以前のやうに樂しく、隆二と交際を續けてゐるのだつた。

いや許すといふより、母は隆二が歸宅すると早速、直代をそのレヴュウ劇場に訪れて、自分の輕率だつた行ひを詫び、以前のやうに隆二と仲むつまじく附き合つて下さいと懇願したのだつた。（以下四三三頁へつづく）


（漢口市街）

漢口脫出記

——漢口陷落を前にして、その日の思ひ出を語る——

前漢口居留民團參事會長 寶妻壽作

のんきな抗日以前

漢口の夏は非常に暑い。何しろ、猛烈な炎熱のために、軒端に巣食つてゐる雀が眞黑焦げになつて轉がり落ちる、すると、そいつをとんで來て食つた猫が、途端に舌を火傷してギヤアといふ悲鳴をあげたといふやうな冗談ばなしが眞しやかに傳へられてゐる程暑い。これは夜と晝との氣溫の差が殆どなく、日出から日沒までの間は毎日風があるに拘らず涼しかるべき筈の夜は却つて全く無風になつてしまふから餘計に暑さを感じるのです。七、八の兩月は、毎日室内で九十六、七度、戶外では百二、三十度といつた暑さが續きます。

しかし、この暑い〳〵といはれてゐる漢口に、私なぞはもう四十年間も暮して參りましたから、考へてみるとさう凌ぎにくいといふ程ではないのでせう。私が漢口へ參りましたのは、明治三十一年で、丁度四十年も前になります。この間には、度々いろ〳〵な騷動がありまして、何度となく引上げ騷ぎをもやりましたが、今度の事變による引上げのやうな切迫した空氣を味はつたのは初めてでした。

何しろ蔣介石が支那を統一して、抗日侮日の教育をやり始める前、即ち昭和の御代になる頃迄の支那の一般的空氣は、日本人を優秀國民として崇拜するといつた氣持が強かつたので、われ〳〵在支邦人も非常に暮しよかつたものです。その頃は、一般に日本は紳士國で、日本には乞食や苦力のやうなものはゐないだらうといふ風に思ひ込んでゐた位です。

その頃は、支那の兵隊達も、われ〳〵日本人には一々敬禮をするといつた調子で、歩くのにも肩身が廣かつたものです。從つて、隨分日本人も威張り散らして珍談を生みました。

ある年の秋のことでした。漢口の連中が揚

子江上に舟を浮べて、仲秋の名月を眺めて遊んだものです。その時、われ〱居留民も舟を浮べてゐましたが、同じ舟に乗り込んでゐた一支那人が、日本の事情を何事によらず聞きたがつて、

『貴國にもかういふ美しい名月ありや？』

と質問したものです。

ところがわれ〱の中に頓智のうまい男があつて、大いに威張り返して返事をしたのですが、

『いや、わが國の名月は三角なり。』

と筆談でやつたものです。その支那人は大いに驚き、且つ感嘆時を久しうしましたが、側で聞いてゐた私達は、思はずその奇想天外な珍問答にプッと噴き出さずにはゐられませんでした。

日本人の追出し策

總統孫文の信任を得た蒋介石は、モスコー留學から歸ると、赤[illegible]ン、ガロンなどを[illegible]立し、忽ちにして全支を統一した後に、民衆を煽つて激しい抗日侮日の教育を始めたものでした。

その結果が表面に現れて來たのが、昭和二年四月三日の所謂四三事件です。この日は丁度日本の神武天皇祭に當り、漢口でも櫻の花が滿開で、郊外の山野は爛漫たる花盛りといふよい眺めでしたから、居留邦人はいづれも辨當などを持つてゾロ〱お花見や遊山に出かけてゐたものです。

この日の午後の四時頃でした。日本租界で日本水兵と支那人車夫とが一寸した口論をしました。ところが忽ち支那一流のデマで、車夫が日本水兵の爲に殺されたといふ謠言がパッと擴り、一時間と經たぬうちに數萬の群集が手に手に天秤棒や棍棒のやうなものを持つて租界内に殺到して來ました。その勢の激しいことは、少數の警官などで制止し切れるものではありません。忽ち慘憺たるまでに租界内は荒され、その結果婦女子は一應引上げるといふ事にまでなりました。

寶妻壽作氏

しかし、この事件はやがて落着しましたが、流言が飛ぶと同時に僅々數時間經たぬに數萬の群集が殺到して來たところから考へてもこれは決して一時的の現象ではなく、豫々いざといつたらワッと押寄せようと、支那人達の間では用意して待構へてゐたものと思はれるのであります。

曾ての、兵隊がわれ〱日本人に敬禮をしてゐた時代と比べると、なんといふ大きな民心の變化でせうか。これも要するに抗日侮日の教育が次第に徹底して來た結果に他なりま

せん。

この民衆運動に呼[illegible]益々抗日教育に奔走し始めました。即ち、在留邦人を居堪らなくさせるには、先づ支那の下層階級を團結させて、邦人に反抗させるのが一番の近道と考へたのでせう、漢口でも洋務工會といふものを作つて、外國人に使はれてゐる支那人ボーイ、コック、阿媽などを皆會員にしてしまひました。さうして、先づ賃銀の値上だとか、公休日の制定、給金の最低額などをつくつて、これを守らせるといふ手段に出ました。その上に、何かといふとそれらの使用人達に罷業を起させ、日本人には糧食を賣るなとか、日本の商品を買ふなといふやうな宣傳をやつてわれ〳〵を困らせ、否應なく先方の條件を承諾させようといふ強硬手段に出て來るやうになりました。こいつをやられたのでは、われ〳〵在留邦人の生活が成立ちませんから、結局引上げて、日本租界を抛棄するより他に仕方がなくなるといふ譯です。しかも、蔣介石の狙つてゐるのは、その最後の租界奪還、日本人追放といふのが目的で、その爲にかうしてヂリ〳〵と押し寄せて來た譯です。

デマ亂れ飛ぶ漢口

昭和六年の滿洲事變、翌七年の上海事變の突發などもすべて抗日侮日といふ蔣介石の強硬外交政策に對して、やむにやまれず日本が蹶起して爭つた結果起つたものでありますが支那は一向にその作戰計畫を改めようとする氣配がなく、昨年七月七日、遂に盧溝橋に突發した事件から、今回の支那事變の火蓋が切つて放たれたのであります。

われ〳〵漢口在留邦人達は、既に今迄數回引上げを行つた經驗を持つて居りましたが、その都度非常な損害を被りますので、出來ることなら、隱忍自重して、わが日本租界を見捨てないでゐようといふ覺悟を抱いてをりました。

ところが、事變突發以來、いろ〳〵な謠言デマが亂れ飛び始め、租界の中の支那人達は俄に佛蘭西租界に移轉を始めるといふ始末。そのうち、例によつて、日本の商品は一切買はない、日本人には糧食はおろか、何も一切賣らぬといふ狀態がやつて來ました。

取引銀行へ電話をかけると、

『日本人と取引をすると八釜しいから、すまないが電話なぞをかけないでくれろ。』

といふ挨拶です。從つて、手形なども時期が來ても決濟してくれるところがないといふことになりました。物も買へなければ、金錢も自由に受取れぬとなつては、どうすることも出來ません。

その上に、やがて使用してゐたボーイやコック、阿媽などといふ連中が、次々に一人去り、二人去りして暇をとつて行つてしまひます。これは外部からの壓迫によるもので、日本人に使はれてゐる奴は、賣國奴として銃殺されるとかなんとかといつた流言が盛んに立つものですから、使用人の方でも居堪れなくなるのです。面白いのは、さうした指令を傳へて來るのが買空鑵子、所謂空鑵買ひです。毎日のやうに租界にやつて來る空鑵買ひが、臺所口で使用人にヒソ／＼やつて行く。さうすると、その翌日あたり、

『戰爭があるさうですから、國へ歸して頂きます。』

といふやうな事を云ひ出して暇をとります。

一番困つたのは、便器の問題です。支那の家庭では、馬槽といつて、木製の小さな便器を用意しておき、これに溜つたものを、毎朝下貨的といふ、つまり汲取人のやうなものが肥槽を擔いで取集めにやつて來てくれる仕組になつてゐるのです。

ところが、事變の勃發と同時に、日本租界から頼んであつた下貨的が一人もやつて來なくなつてしまつたことです。他のものならば兎も角も、小さな便器に、二日分も三日分も溜められたのでは、糞攻めですからたまりません。放つておく譯に行きませんから、なかには主人公や奥さん達が、自分から夜間を利用して便器をコソ／＼と抱へ出し、これを近所の川へ捨てに行くといつた珍風景を描き出すといつた始末でした。

交通整理臺の トーチカ卑怯 苦肉の奸手段

こんな風に、まるで穴の中の狸でも追出すやうな卑劣な手段でわれ／＼を追出さうとしますが、飽くまで隱忍自重、事變不擴大の方針で、われ／＼日本人は食ふ米がなくともぢつと辛抱して居りました。

その中、租界の中だけでなく、日本租界に續いてゐる附近の支那部落の者にも立退き命令が下つたらしく、ドシ／＼引越して行きます。さうして、その移轉した後の空家を利用して、支那軍隊がドン／＼機關銃などを運び込み、盛んにトーチカなどを築き始めました。

支那軍隊が日本租界を目の敵にしてゐることは昨日今日始まつたことではなく、トーチカなども、既に昭和十一年頃から盛んに租界の附近の道路には作られてゐたものです。

日本租界の隣は、元のドイツ租界で、今は第一特區といはれて居りますが、こゝなどは道路の交叉點の眞中に、妙なアンペラ圍ひで道路工事をしてゐるなと思つてゐると、やがてそのアンペラがとれてみるとまん丸い四疊

半位も廣さがあらうかと思はれるコンクリートの臺が、高さ四、五尺位に道の眞中にとび出してゐるのです。よく見ると、銃眼が日本租界の方へ向つてゐるトーチカです。

支那當局は、土匪や共産匪のために作つたのだと主張しますが、かういふ奴が昭和十一年頃から交叉點毎に出來てゐて、平素は交通巡査がこの上に登つて、ゴー・ストップの合圖をやつてゐました。かういふのが日本租界をグルリと取巻いてゐますが、事變突發以來、いつかこの中へもみな機關銃が運び込まれた樣子です。

その上に、近接してゐる英米タバコ會社の脇には、日本租界に向つてズラリと土嚢が築かれ、銃劍をつけた兵隊の姿が物々しく動き始め、猶も、日本租界の北側に四間道路がありますが、こゝの街路樹の枝は一齊に拂はれて、邪魔にならぬやう見透しをつけるといつた風で、夜なぞ、すぐ目と鼻の四間道路を距てて支那兵の銃劍がギラリ〳〵と光つてゐるのです。

かういふ切迫した空氣の中で、われ〳〵は泰然自若として、それに對する防備はまだ少しも施さなかつたのです。しかし、八月五日になつて、夜に入ると今はこれまでと、特別陸戰隊の方々に義勇軍も手傳つて、一夜のうちに租界の入口とか、要所々々に土嚢を築き、鐵條網つきの木柵をつくりました。まさに事態は一觸卽發の發火點に到着してゐたからであります。しかも、いよ〳〵最早最後と見極めをつけて、領事館から邦人の引上げ命令が出たのは、この防備をして僅かに二十四時間と經たぬ八月六日の夜の九時でありました。

これを見ても、如何にわれ〳〵が沈着に、最後まで事件不擴大の方針で、支那人の抗日意識を煽らぬやう努力してゐたかといふ事がお分りになつて頂けるだらうと思ひます。あの苦しい隱忍自重の一ケ月間を思ふと、本當に悲憤の熱血が今もほとばしる思ひです。

立退準備十九時間

八月六日午後九時、漢口の日本領事館から、突然として、

『居留民は全部速かに引上ぐべし。引上げ實施に關しては、民團の指示に從ふべし。』

といふ命令が發表されました。

當時、漢口の日本租界の棧橋には、信陽丸と鳳陽丸といふ二隻の汽船が横づけになつてをりましたから、民團では、

『八月七日午後四時迄に信陽、鳳陽に乘込むべし。』

といふ指令を發しました。漢口の租界から少し離れた上流にある泰安紡績には、日本人が相當居り、現在盛んにまだ操業してゐる最

中でしたから、この連中が機械を停めて駈けつけるのには、少々時間が足らぬだらうと思ひ、特に三十分間の延刻をしましたが、一同引上げ命令を聞くと同時に、取るものも取敢へず、全く各自茶碗と箸だけを持つて來るのが精一杯といふ程度で、居留民一千七百名の者は、時間一杯ギリ／＼に無事信陽鳳陽兩汽船に乘船したのであります。

かうして一口に申すと大變雜作が無いやうですが、私などは四十年間住み慣れた漢口です。いざ去るとなつてみると、まさに萬感交々胸に迫つて參ります。さういつた氣持に襲はれたのは、決してひとり私ばかりではありません。二十年、三十年といふ長い月日を漢口に暮した人も相當ありました。なかには、父母をこの地で亡くした人もありませう。またなかには、愛兒を喪つた人もありませう。生活に餘裕のある人ばかりではありませんから、赤手空拳、遙々支那へ渡つて、近頃漸く商賣にも芽が出かけたばかりのところを、全財産はもとより、大切な商品などそつくりその儘支那民衆の掠奪に委ねて、今この漢口を再び赤手空拳で立去らうとしてゐる人もあつたでせう。

又なかには、故郷を離れて十餘年、志成らずんば音信もすまじといふ意氣込みでやつて來たものを、今この事變のために故郷に還らなければならぬとなつては、どの面さげて故郷の人々に相見えんと心に悲痛の熱涙をしぼつてゐた人もあつたに違ひありません。千七百人の大勢です。それ／＼感慨無量なるものがあつたに違ひありません。

汽船に乘移ると間もなく、早くも誰かゞ、

『もう××さんの店は掠奪を被つてゐるさうだ。』

といふやうな悲痛なニュースが入つて來ます。又、食料品店を營んでゐた人などは、どうせ殘して來れば掠奪に遭ふのだからと、罐詰やら何やら、山のやうに持込んで、

『サア、みんなで食べて下さい。』

などと船中で大盤振舞ひをしてゐる人もありました。

思ひがけぬ悲劇

信陽丸の方へは、同仁病院に入院中の患者及び婦女子が乘込みました。女子の中には、約七、八十名の藝妓、それに十二、三名の二等藝妓及び五、六十人の朝鮮生れの遊女達も含まれてゐましたから、鳳陽丸の連中には、

『しまつた、それぢやあ病人になつて信陽丸に乘せて貰ふところだつた。』

といふやうな冗談も出て來るかと思ふと、一方甲板では思ひがけない悲劇が展開されて居りました。といふのは、犬と人との別れです。規則として、犬は一切船に乘せることはならぬことになつてゐましたから、今迄長年飼はれてゐた愛犬達は、主人の後を追つて棧

橋に集まり、キヤン〳〵と悲痛な叫びをあげて別れを惜みます。

やがて午後四時半、規定の時刻になると、兩船は出帆しました。

『アカや！　アカや！』

『ジョン！　ジョン！』

甲板から叫ぶ聲。それに答へて肺腑を衝くやうな犬の吠える聲。

そのうち、勇敢な奴は、船が揚子江中流へ中流へと棧橋を離れて行くと、忽ちザンブとばかり棧橋から身を躍らして濁流の中へとび込み、汽船のあとを懸命になつて泳いでついて來るのがあります。

やがて、その小さな犬の頭は、濁流渦巻く間に次第に置去りにされて、小さく小さくなつて行きます。

『ジョン！　ジョン！……』

あとは、堪へ切れなくなつて涙に咽ぶ聲が聞こえます。

そのうち、ある婦人の荷物の中から一匹の犬が發見されました。

『ねえ、お願ひです。かうして抱いてゐますから子供と思つて連れさせて下さい。』

『でもあなただけに例外をつくる譯に行きません。お氣の毒ですが、捨てて下さい。』

『チイ！　チイ！……』

頰ずりして泣いてゐる婦人の手から可哀さうな犬はもぎ取られました。規則ですから仕方がありません、犬は、アッといふ間に、揚子江の濁流へ、船の甲板からザンブとばかり投げ込まれました。

スッと波間に消えた姿が、忽ち浮き上ると啼き聲一つ立てず、こんなむごたらしい目に

婦人倶樂部十一月號附録
スグにも利用したい誰でも望む經濟で重寶二大附錄!!
和服類一切の再生法 實際講習
こんなに素晴しい物が出來るかと、誰でも驚嘆する名案五十種
利目のある 漢方藥民間藥三百五十種
僅かの費用で効果的確！ 斯界一流の權威が詳しく秘方公開！
これだけは是非お備へあれ！ 十月十六日發賣

合はされたのを恨む氣配もなく、猶も懸命に船の姿を追つて、こつちへ、こつちへと泳いでくるのでした。

犬たちのその悲壯な美しい姿を後に船はズン／＼なつかしい漢口、長年住みなれた漢口の街を遠ざかつて行くのでした。甲板の上の人々は、皆思ひ合したやうに、男も女も、涙で袂をうるほさぬ人は一人としてありませんでした。斷腸の思ひといふのはかうした時の氣持をいふのでせう。

あゝ、いつの日か再び漢口にまみえん？　私どもも皇軍の漢口攻略を一日千秋の思ひで待つてをります。

恨みは長し揚子江

引上命令が下る度に、その途中の船中で、子供が死んだり、姙婦のお目出度があつたりしますが、今度も、船中で若くて可愛いらしい雛妓が一人息を引取りました。豫て病氣をしてゐた娘でしたが、かういふ船中のこととて、場合が場合ですから一層悲痛な思ひが一同の胸を強く打ちました。

それは漢口を出發して間もなくのことでした。前後をわが海軍の軍艦に警備されながら靜かに／＼海かと見紛ふ大揚子江を、われわれの信陽鳳陽の兩汽船は下つて行きます。

月の無い、漆のやうな闇の夜でした。江陰の砲臺からは、不氣味なサーチライトが、こちらに向つてキラリ／＼と照らされます。

その中で、この可憐な雛妓の水葬は行はれたのでした。黑い流れの中へ、小さな日本の娘の死體は、靜かに音もなく沈んで行きました。

『南無阿彌陀佛々々。』

誰かゞ靜かに唱へるのが聞こえます。船は汽笛一つ鳴らさず、肅々と下つて行きます。

私の腦裏には、今もなほ、あの闇の中へ音もなく沈んで行つた、可哀さうな娘の死骸の姿が、かうして眼をつむると浮んで來るやうな氣が致します。

思ひ出深い揚子江よ！　私は近く再びあちらに渡つて、あの揚子江を再び溯るつもりです。再び雄々しく租界の日本人として立上るために！

（終）

ヒゲ剃り讀本

ヒゲ剃りのアトへは誰でもキッと何かつける。が……クリームはベトつくし普通の化粧水では何となくタヨリナイ。もつと他に良いものがなからうかと思ふ事がある。さういふ時に一度使つてみて頂きたいのが明色アストリンゼン。

▲殺菌と美容の二重効果

明色アストリンゼンは殺菌と美容の素晴しい二重効果をもつた科學的新強力化粧水。剃りアトに之を數滴つけておけば剃刀マケの憂ひは全然ない。それに素晴しく滲透力の強い美容成分の力でキメが細かにツヤを增す。もしそれ爽快な使ひ心地に至つてはいかなる化粧水もクリームも遠く及ぶ所ではない。剃りアトにアストリンゼンは今日ではもう世界的常識。

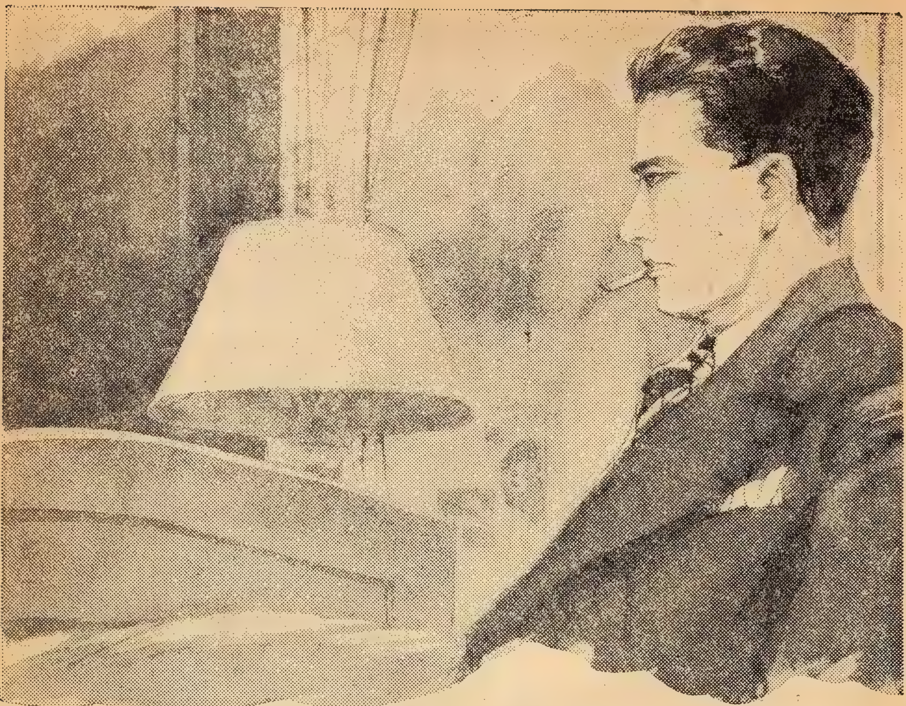
今一つ――ヒゲ剃りには誰でも石鹼を使ふが石鹼はその性質としてアルカリ分を含んでゐてそれが皮膚を荒らす。ところが明色アストリンゼンにはアルカリを中和する性能があるから明色アストリンゼンさへ使へばいくら石鹼を使つても大丈夫。一瓶五十錢。藥局・化粧品店にあり。

長篇連載小説

熱情の翼

竹田敏彦

岩田専太郎 画



訪れた青年

『旦那樣……』

その翌朝の十時頃だつた。朝食を濟ますと、書齋に籠つたきりの所長葉室平藏は、女中の入つてきたのも氣付かないで、大きなデスクに半身突出すやうにして、何か頻りに書類を調べてゐた。女中は困つたやうにしばらくの間、平藏の幅廣い背中を眺めてゐたが、思ひ切つて、

『旦那樣……』

二、三歩進み出た時だつた。平藏はやつとそれと氣付いたやうに、半身を起すと、靜かに振返つた。

『あの、御客樣でございますが……』

『お客樣？』

平藏は、まだ何か考へ續けてゐる風で、鸚鵡返しに呟いたが、女中が差出した名刺を取上げた瞬間、太い眉がピクリと動いた。その大型の名刺には『ミカエル・ブラザース機械製作會社、橫濱代理店、大場朔』と印刷されてあつた。

平藏の眼は、しばらく燃えるやうに、名刺の上に注がれてゐたが、

『どんな方かな……』

と、眉をひそめて訊ねた。

『さあ、二十七八くらゐでせうか。立派な方でございます。御

自分で自動車を運轉していらつしやいました。』

『ほう……』

平藏は、大きく頷くやうに顔を上げたが、太いロイドの老眼鏡の下に、急に、何とも譬へやうのない物懐しげな微笑が走つた。

『應接へお通しして置いてくれ。しばらくお待ち下さいつてな……。』

平藏は、命ずると、くるりと卓の方へ向直り、性急らしくマドロスパイプを握つて啣へたが、何か複雜な感情を處理し兼ねた風で、ぢつと暫く瞳を閉ぢてゐた。

それもその筈である。昨夜、輝やかしい世界記録を樹立して、歡喜に陶醉してゐたあの瞬間、その平藏の心を、忽ちにして、千仞の谷底に突落した電話の主は、今、こゝに訪れてきた大場朔なる青年であつた。しかも大場朔なる青年は、葉室老技師には全くの未見の人物であつたが、彼が一時アメリカで、兄弟以上に肝膽相照した莫逆の友大場幾造なる人物の長男だつた。

ところで、大場朔の出現が、何故平藏をして、かくも困惑せしめたのであらうか？

前號の梗概

葉室飛行機製作所主の葉室平藏は、半生を捧げて、A5型戰闘機の設計に沒頭した。それは、佛國のロアル式にも勝つて、世界最優秀の性能を有つ新戰闘機なのである。今日しもその試飛行は、平藏が我子と信頼する兩愛弟子、海野飛行士德田機關士の手に依つて、物の見事に成功した。世界的大偉業は遂に完成したのである――。その夕、愛孃ひろみ、及び兩愛弟子を前にして、この稀有の感激に陶醉する平藏の胸には、無量の感慨が湧上つて、不覺にも瞼は涙に濕つた。と、その瞬間、期せずして掛つて來た何處からかの電話、奇怪にも、それを聞き終つた平藏の表情は、咄嗟鉛の樣に曇つたのであつた。

大場幾造は、日露戰爭當時には、時局の裏面に活躍して、一世を驚倒せしめた或る浪人團體に屬してゐたが、幼い頃から兩親を失ひ、叔父の手で育てられて家を飛出した幾造は、その持前らしい放浪性と、戰勝日本の欝勃たる民族發展の意氣に燃えて、日露の役が終ると間もなく、海を超えて遠く渡米した。そして、米大陸を放浪してゐる中に、當時北カロニナ州キッティハウクの丘にあつて滑翔機の實驗に熱中してゐたライト兄弟の家へ皿洗ひとして住込み、その素晴らしい計畫を知るや、性來の熱血漢は、祖國愛と野心に燃えて、航空機の研究に心を潜めるやうになつた。

葉室平藏が大學を飛出して、ライト兄弟の許を訪れたのは、一九〇四年九月初めで、ライト氏が旋回飛行に成功した直後であつたが、その時、大場は既に淺黃の作業服に身を固めて、ライトの工場で甲斐々々しく働いてゐた。

『あッ、君はもうやつてゐるのか。』

平藏は、そこに働いてゐた職工が日本人だと判ると、びつくりして叫んだ。彼は日本人として最初の空人を志して、勢ひこんでやつてきた自尊心を傷つけられたやうに思つたのであつた。

『何だつて？……』

幾造は、ぐいと一歩踏み出して、精悍らしい眉を寄せ、ぢつと、平藏の顏を瞶めてゐたが、やがてにつこり微笑した。

『おい、握手しよう。』

油で汚れた手が、ぎゆつと平藏の手を握つて言つた。

『お國のためだ、二人でやらうよ……』

一人は大學出の工學士、一人は浪人上りの職工だつたが、同じ祖國愛に燃えた二人は、忽ち肝膽相照して、歸國の上は協力して、飛行機製作所を建設し、航空日本の礎石にならうと誓ひ合つたのであつた。

ところが、歸國間際の一九〇八年から、九年にかけて、英佛間八〇キロのドーヴァー海峽横斷飛行の能否が世界航空界の興味の中心となり、英國の大新聞デーリー・メールが、賞金一萬圓を提供して先陣爭ひを白熱化せしめた。ちやうどその頃は、兄のウヰルバア・ライトが自作の飛行機を携へて佛國を訪れ、盛にフランスの上空を飛んで佛國民を驚嘆せしめ、その刺戟によつて、佛國航空界ではボワザン・ファルマン、ブレリオ等を輩出せしめた當時で、この情勢を眺めた熱血漢の幾造は、

『おい、君は一足先に歸つてくれ、俺は一萬圓がとこ稼いで歸るよ。』

幾造は、ドーヴァー一番乘りをめざして、佛國へ渡つてしまつたのであつた。かくて葉室平藏だけが、單獨歸國して飛行練習所を開設し、幾造からの快報を待つたのであつたが、そのうち、一九〇九年七月二十四日早朝、佛のブレリオが自作苦心の單葉機を以て一氣に海上に飛出し、遂に海峽一番乘りの榮冠を摑んだといふビッグ・ニュースが世界を驚かせた。

しかし、奇妙なことに、それ以來、幾造の消息は、杳として不明であつた。ライト氏の許へ二三度も照會をしても、やはりその行方は判らなかつた。

そして、二十數年は空しく經過したのであつたが、平藏が××重工業の技師長の位置を捨てゝ獨立し、葉室飛行機製作所を設立した。今から五年前のことであつた。二十數年も生死不明だつた大場幾造が、ひよ

『キングレコード』の傑作浪花節、御愛聽下さい！
二曲とも勝太郎師、御門師の十八番もの、到る處大評判です。
◇忠治赤城落ち　玉川勝太郎　二枚一組 二・二〇
◇赤尾の林藏十八番斬り　御門博　二枚一組 二・二〇
（全國有名蓄音器店にあります）

つこり訪ねてきたのであつた。

『よく生きてゐてくれたなア……』

『君こそ……』

二人は犇と抱き合つた。

幾造の語るところによると、渡佛した幾造はドーヴアー一番乗りをめざして、虎視眈々準備を進めてゐるうちに、旅舎で病に伏し、その間に一番乗りの榮冠は、ブレリオに奪はれてしまつたのである。彼はすご〳〵と歸米したが、師のライト兄弟のところへも歸らず、上陸すると、その足で、飄乎として加州のサンタ・ローザを訪れ、葡萄園に雇はれた。そして今では立派な葡萄酒釀造工場を經營して、日本移民でも一かどの成功者として立てられてゐるといふのであつた。

『俺はドーヴアー海峽で、まんまと失敗してしまつたので、ライト先生にも、君にも合はす顏がなかつたのだよ。歸るなら相當の土産を持つて歸りたいと思つて、勞働者から出直したのだが、今ではどうやら三十萬位の金は握つたし、急に君の顏が見たくなつてやつてきたのだ。が、相變らず貴樣は熱心ぢやのう。わつははは……』

幾造は昔ながらの荒つぽい調子で、豪傑笑ひをしたが、

『そこで、俺にも此際、昔の約束を果たさせて貰ふかな。俺の希望は君が立派な、飛行機さへ造つてくれたれば、それで文句はないんだが、これで何かの足しにして貰ふんだな……』

幾造は鞄の中から、十萬圓の手形を取出したが、

いかにも彼らしく、紙屑でも投げ出すやうに、無造作にポンと、卓上へ抛り出した。この十萬圓は、折も折、飛行場の買收と、工場設備に、退職金の殆ど全部を遣ひ果して、困り抜いてゐた平藏にとつて、正しく救ひの神であつた。

『大場君……』

平藏は、感激に瞳を潤ませた。

『有難い、俺はきつとやるよ。俺だつて約束を果たさずに措かないよ。これで立派な高速旅客機を作る。完成すれば、製作販賣權は、君と共有といふことにしよう。』

そして、平藏は、その契約を公誓證書にして、無理やりに幾造のポケットに押込んだのであつた。

幾造は、間もなく歸米し、葉室平藏は、幾造との契約を果すために、いや幾造への友情のためにも、異常の勇猛心を湧立て〻、研究に沒頭してゐるうちに、今度の支那事變が突發した。そして老技師の愛國の熱情は、研究を擧げて戰闘機の發明に集注させ、遂に葉室式A５型戰闘機『武藏號』の完成とな

り、昨日晴れの試験飛行に、世界記録樹立の輝やかしい榮冠を獲得したのであつた。
その夜、突如として横濱からかゝつてきた電話が親友大場幾造の長男朔からで、しかも、意外の事實を傳へてきたのであつた。

成功のヂレンマ

葉室平藏は、デスクに頬杖をついたまゝ、昨夜の朔との電話の應酬を、今一度心に繰り返してみたのであつた。
『僕、大場幾造の伜で、朔と申すものですが……』
『あつ、あんたが……』
平藏は、瞬間はつとしたのであつた。幾造が歸國した際、朔といふ子供のあることは聞いてゐたのである。幾造は、子供は日本で教育させたいとの念願から、或知合の大學教授に托して、生れ故郷の九州にある某中學に通はせてあつたが、そのうちに朔が不良の群に入つて、手に負へないといふので加州へ送り返されてきたと、さすがに剛愎な幾造も父親らしく嘆じてゐたことがあつた。――
『ぢや、お父さんも一緒なんですね。』
平藏は、受話器の底から、今にも、お芽出度うといふ太い聲と共に、幾造の豪傑笑ひが響いてきさうな樂しい期待で胸をわく／＼させたが、相手の聲は、
『いや、父は五ケ月前、サンタ・ローザの自宅で亡くなりました。』
『えッ！』
平藏は、わが耳を疑ふやうに叫んだ。
『ほ、ほんたうですか……』
『腦溢血でぽつくりと逝つたものですから……』
『うむ……』
平藏は、失神したやうに呻くと、がつくりと電話器の前に頂垂れてしまつた。
『そんなわけでして、遺言も何もなかつたのですが、何しろ父はあの通り放慢な性でしたので、殘つたものは借金の山だつたんですが……』
朔の聲は、何か語るに堪へないといふ風に、暫く途絶えてゐたが、
『山ほど借金の中に、財産と言へば、たつた一つ、あなたの事業に投資した十萬圓の契約證書があつたきりです。憶えてゐらつしやいますか……』
『勿論、憶えてゐますとも！』
平藏は、はつとしたやうに顏を上げると、電話器に向つて大きく肯いた。
『では、契約を履行して頂けますね。』
『それは……勿論履行しますが……』

平藏は言つたが、その顏には、淡い困惑の色が走つた。しかし、驚いたのは相手の次の一言だつた。

『何しろ借金の山で、僕も手のつけやうがなかつたので、實は父が殘しましたあなたとの契約を、僕の勤め先のミカエル・ブラザース機械製作會社へ讓渡いたしました。』

『えツ……』

瞬間、平藏の顏色には、さつと血の氣が退いてしまつた。

ミカエル・ブラザースと言へば、アメリカでも、世界的の軍需品製作會社で、神戸にも横濱にも代理店があつた。思へば、粒々辛苦の四十年、白髮の今日まで半生を捧げてきた、この念願は、たゞ一意、日本航空界の躍進を希ふためのみではないか。その製作共同權を、むざ〳〵外國資本に押へられたと聞いては、天地も崩れたやうな絶望に、平藏はしばし茫然としてしまつたのである。

『勿論、父とあなたとの契約は、飛行機が完成された上の話ですが、ミカエル・ブラザースでも、世界航空技術界におけるあなたの位置と技術を充分理解して、權利を買取つてくれたことは勿論で、今日の華々しい御成功に對しても、本社へ打電しましたところ、社長から早速祝電がまゐつて居りますやうなわけで……』

その時の、妙に覆つ被せるやうに聞こえた朔の言葉が、今も苦々しく、平藏は思ひ出されるのであつた。

平藏は、デスクの上においた朔の名刺を眺めたまゝ、思はずほつと吐息をついた。が、——

『いや、しかし朔も幾造の伜だ。日本人だ。話せば判つてくれるぢやらう……』

平藏は、何か決意したやうに、勢よく立上つた。

『やあ、いらつしやい。』

平藏が、應接のドアを開けると、窓際に立つて飛行場を眺めてゐた青年が、ダンスでもするやうな足取りで、くるりと此方へ向き直つた。伊達者風な大柄のネクタイ、ダブルボタンのスマートな、いかにもヤンキー好みらしい服裝や物腰の、どこか不良らしい感じはあつたが、體格の堂々とした、眉の濃い好男子で、奥深く熱情を湛へた黒い瞳に、何か精悍な光を帶びてゐるところ、平藏は、瞬間、若い頃の幾造そつくりの懐しい面影を見たのであつた。

『あッ、葉室のをぢさんですか……』

朔は、物懐かしさうに、につこりと微笑を堪へて、走り寄つて手を差し延ばした。

『おう、君は……』

平藏は、突然をぢさんと呼びかけられて、ちよつとどぎまぎしたが、昨夜、電話で感じた太々しさと打つて變つて、別人のやうな親しみを、朔青年に覺えたのであつた。

『父は葉室のをぢさんのとこへ連れてつてやると、始終言ひ〳〵したものでしたが、をぢさんの華々しい御成功を聞いたら、どんなに悦んだことでせうか……』

『殘念ですよ……』

平藏は、暗然として眼をしばたゝいた。

『ライト先生の許にゐた時分から、長い間のお父さんとの友情を考へると、一と目、お父さんに見て貰ひたかつたと思ひましてのう。』

『さう仰言られると何とも濟みませんです……』

朔は急に恐縮したやうに頭を下げた。

『父が生きてさへゐてくれましたら、きつとをぢさんとの共同製作も巧く行つたことでせうが、ミカエル・ブラザースへ權利を讓つたといふのも、みんな僕の無力なためで、全く申譯ありません。』

『いや、わしの方こそ君に諒解を願はなければならないことがあるのぢや……』

平藏は、それが極めて重大なことでもあるやうに、ぢつと朔の顔を瞶めたが、

『朔君、まだ新聞なんかは發表になつてないが、今度完成した戰鬪機は、わしの獨斷で陸軍へ献納してしまつたのだ……』

『それは結構でせう。しかし營業としての製作はこれからでせう……』

朔は、緊張した平藏の顔を訝しげに眺めて訊ねた。

『いや、わしの試作機は戰鬪機ぢや。軍の機密に屬する性質のものなんだよ。わしは献納と同時に、設計も何も、すつかり忘れてしまつたつもりだよ……』

『えッ、そ、それは……』

スリーキヤッスルを悠々ふかしてゐた朔は、はつとしたやうに平藏の顔を眺めたが、

『しかし、契約は履行して頂けるのでせうな……』
聲を彈ませて迫つて來た。平藏は靜かに、
『君に諒解を願ひたいといふのは、そこのことなんだ。わしの最初の計畫は、高速旅客機の發明で、その成功の曉には、お父さんにも、うんと儲けて貰ひたいと思つてゐたのだが、その矢先に、支那事變の突發ぢや。わしは技術報國の一念から、一時旅客機の製作を中止して、研究を擧げて戰鬪機の完成に打込んでしまつた。勿論、それにはあの愛國主義者の、お父さんにも異存はなからうと、わしはさう考へたのぢやよ……』
平藏は、かう言つて、君だつて、父の子ではといふ意氣を、はつきり現はしてにつこりした。が、朔は眉を曇らせたまゝ、

富士秋の增刊大評判

目下全國書店にて發賣中の『富士秋の增刊』は、例に依つて到る處大評判大歡迎で、各地とも引張凧の大盛況です、皆樣の御愛讀眞に感謝に堪へず、茲に厚く御禮申上げます。

なほ各地とも殘部僅少です、未だ御覽にならぬ方は卽刻お求めにならぬと、御手に入らぬと存じますので併せて御知らせ申上げます。

富士編輯局

『では、飛行機の製作は出來ないとおつしやるのですか。』
『軍の機密に關する以上、もう發明者のわしにも何うにもならないよ。勿論ミカエル・ブラザースだつて、一指も觸るゝわけにはゆかないだらう。』
『をぢさん……』
朔は、さつと顏色を變へて、椅子を乘出した。
『それでは、僕の立場はどうなるのでせう。僕はミカエル・ブラザースに對して、空證文を賣つたことになりますよ。詐欺の被告に出されても、仕方がないぢやありませんか……』
『いや、君には迷惑はかけないつもりだよ。わしが丸裸體になればいいだらう。もう昨夜から覺悟は決めてゐるのだよ。』
平藏は、覺悟したやうに微笑した。
『…………』
『つまり途は二つしかないのだ。君の方でわしの最初の計畫通り、經濟旅客機の完成まで待つてくれるか、それが出來ないとすれば、それ、そこの製作所と、飛行場で十萬圓位の値打はあるぢやらう。話は簡單明瞭ぢやよ。はつはは……』
平藏は、突然、巨きな躰軀を搖すぶつて笑つた。
『しかし、そいつは弱りましたねえ。』
朔は、いつまでも繰返してゐたが、平藏は笑つて、
『しかし君もお父さんの子だ。日本軍機の秘密まで、外國に賣りたくはなからうがね……』
『それはさうですが、しかし契約ですからね。』

『さうか……』
『全く困りましたねえ……』
朝は苦笑しながら、何か考へるやうに、ぼんやり飛行場の方を眺めてゐたが、突然、
『をぢさん、僕、昨日の夕刊を見て感激したことがあるですよ……』
と、急ににつこりした。
『作業服のお嬢さんの寫眞が掲つて居りましたですね。をばさんもさうだつたと出てゐましたが、若いお嬢さんがあゝして油まみれになつて、お父さんのために働いて居られるのだと知つて、僕も全く敬服しました。』
『ひろみのことかね……』
『さう、ひろみさんとおつしやいましたね、横濱代理店の主任なんかも——アメリカ人ですがひどく感心して居られましたよ。』
『君のことは、まだあれに話してなかつたのだが、ぢや紹介しようかな……。』
平藏は、眼を細めてにつこりすると、直ぐに性急らしくベルを押した。

空輪の朝

その翌朝も、拭つたやうな秋晴れだつた。
葉室飛行場では、この朝も早朝からエン

チンの
快よい爆音が
爽やな風を截つて
響いてゐた。陸軍へ献納した
葉室式A5型戰鬪機が、所澤へ空輸
されようとしてゐるのであつた。

『それや、向ふでは有名な女性パイロットも、多數出てゐますし、職工として働く女も、澤山ありますがね、しかも、彼女達は徹底的な自己主義者なんですよ。一口に言へば虚榮のためには、命もいらないといふ凄い奴なんですよ。はつはは……』

製作工場を出て大股に歩いて行く平藏の後から、

ひろみと肩を並べた大場朔は、颯爽としたひろみの作業服の姿を、うつとりした眼で眺めながら言つた。

『僕があなたに感心させられたのは、あなたの尊い犧牲的精神なんですよ。あなたの前には社交界だとか、名聲などといふものは少しもなく、たゞお父さんのために、さうして眞黒になつて働いて居られる、……華やかな結婚の夢でも見ようといふ若い美しいあなたが……』

『あら、……』

ひろみが眞赧になつた時、

『大場君、何うぢや。』

平藏が、大聲で振返つた。製作所の建物をぐるりと廻つたところで、格納庫の前には、今も巨躰を引出された、世界の精鋭機葉室式Ａ５型戰闘機『武藏號』が、淡紅の胸を陽光に輝やかせて、颯爽たる雄姿を横たへてゐた。

『あツ、これは素晴らしい。』

朔は大げさに感嘆の叫びを擧げたが、

『武藏號といふのは、お母さんのお名前から命名されたのだ さうですね。』

と、ひろみの顏を見た。

『お母さまも、一職工として働いたんですもの、私の作業服などは、お母さまの眞似をしてゐるだけでございますわ……』

『成程、をぢさんは幸福な方ですね。』

と、朔は、につこりした。

『わしか、はつはは……』

平藏は、振向かずに愛機を眺めたまゝ、笑聲を立てた。

武藏號は、今地上運轉の最中だつた。發動機を全開して、プロペラは物凄い唸りを立てゝ廻轉してゐた。

『どうだ、素晴らしいぢやないか。』

平藏が、聲をかけると、並んで立つてゐた海野飛行士と、徳田機關士が、初めて氣付いたやうに振返つて目禮した。

『先生、この通りです。昨日以上に素晴らしい管絃樂ですよ。』

徳田機關士は愉しげに言つたが、何かはつとしたやうに海野と顏を見合せた。ひろみと並んで近づいてきた朔の姿に漸く氣がついたのであつた。

『紹介しよう……』

平藏は、笑ひながら朔を振返つた。

『この方は、始終君達に話してゐる大場幾造君の御息息朔君だ……朔君、こちらはテストパイロットの海野君、こちらは機關士の徳田君ぢや。』

『いや、新聞で拜見しましたよ。素晴らしい御成功でしたな、よろしく……』

朔は、如才なく進み出ると、並んでゐる海野と徳田の手を、左右に握つてにつこりした。

『をぢさんは全く幸福ですよ。』

朔は、先刻の言葉を繰り返して、平藏の顏を見た。

『こんな立派な操縱士と機關士と――そして獻身的な助手を持つて居られるのですからね。』

『いや、その點は滿點だよ。今度の成功もこの三人が協力してくれたお蔭だよ。』

老技師は頼もしさうに、三人の油染みた作業服姿を眺めた。その眼には全幅的な感謝と信頼が燃えてゐた。

『いや、この飛行機なら寢てゐても巧く行きますよ。このエンヂンの快調はどうです。僕は先生の愛國魂が、歡喜の歌を唄つて居られるのだと思つて聞いてゐるのですよ。』

德田機關士は、言ひながら、ちらりと海野の顏を見た。

やがてスタートの時がきた。

『ぢや、行つて參ります。』

海野と德田が手を擧げて、あはやスタートを切らうとした時だ。

『あつ、待つた……』

平藏が急に大聲を發して、馳け寄らうとしたが、その瞬間、逸早く飛出してゐたひろみが、梯子に足をかけるとひらりと座席に飛上つた。

『ひろみ、何だ……』

平藏は、びつくりしたやうに、ひろみの顏を見上げた。

『お父樣、私も同乘して參りますわ、ね、いゝでせう。』

ひろみは、甘えるやうににんまりして、呆れ顏で立つてゐる朔には、ちらと一瞥を投げたきりだつた。

『同乘はいゝが、びつくりするぢやないか。はつはは。』

平藏は、窘めるやうに言つて笑つたが、ポケットから封筒を出すと、高く差上げた。

一日十錢・珍らしい自宅療法で
淋病苦を救はれた私の經驗

東京品川大井町　酒井　茂

私は三年前の春淋病に感染し、其時は醫療や内服藥で一旦快方したのですが其年の秋、痛みと共に又々膿が出始め再發と知つて驚いた私は凡ゆる努力を盡し良いと聞く療法は端から實行致しました、而し病狀は既に慢性となりコヂレて仕舞つたせゐか、どの療法も思はしい効果なく、淋絲は根絶せず、時候の變り目毎にブリ返して膿が出て來る始末に全く困り拔いて居りました。丁度其頃婦人雜誌の家庭欄で『コヂレた淋疾にはゴルト療法が良い、ゴルト藥は特殊皇漢藥を基礎とした珍らしい粉藥で服用の始めは一時分泌物の增加を見るが、かうして淋菌を深部から追ひ出し、芯から治療して行くがため永年苦しんだ慢性の人々も次々と病苦を救はれ、今迄に無い變つた藥効を賞讃されてゐる』との記事を發見し、地獄で佛の思ひが致しました。

私は早速買求めて服藥を始めますと、驚いた事には翌日から反響が現れたので其のキキメに力づき怠らず服藥を續けました所ウミ痛みは忽ち止まり、さしもの淋絲もスッカリ消失致しました。雀躍して喜んだ私は念の爲小便を持參して醫師の診察を受けました所、淋菌全く無く且つ尿道にも異狀を認めずと診斷され、實に涙が出る程の嬉しさでした。其後酒やビールを飲んでも再發せず、お蔭で三年間の苦惱を救はれた私はゴルトの藥効に唯々感謝あるのみです。

右に發表のゴルト藥は淋病、消渇、コシケに珍らしい藥効を有する評判です。御希望の方には講談社代理部（振替東京六二九番）でお取次しますが、銀座松屋、淺草松屋の藥品部でも特約販賣致して居ります。藥價は廿二日分二圓・卅四日分三圓、家庭函六十日分五圓で送料は內地二十錢海外四十錢です。お急ぎの場合は製藥元東京淀橋區戶塚町通り二丁目東京和漢藥研究所（振替東京六九二二二番）へ直接御註文あれば密封小包にて卽日送藥されます。卸代理店は玉置・大木。

『ひろみ、航空本部長閣下は、今日所澤へ行つて居られる筈ぢや。これをお上げしてくれ、これはな、陸軍へ献納した以上、今日限り葉室は、戰鬪機設計の機密を一切、お忘れ申したと書いてあるのぢや。はつははは……』

平藏は、胸を空くやうな笑聲を立てた。

その時――

『をぢさん、僕も同乘させて頂けませんか……』

朔が、嘆願するやうに平藏の顏を覗いた。

『座席は、三つしかありませんよ。』

操縱桿を握つて躰軀を乘出してゐた海野が、上から覗き込んでにやりとした。

『しかし、何とか……』

朔は、殆どしがみつくやうに、梯子に片足をかけてゐた。

『大場君、あぶないッ！』

平藏は、叫ぶと、別人のやうに邪慳に、朔の腕を摑んで憤然と引戻した。

『君、軍の方では、第三者の同乘は、絕對に許されてゐないのだよ。』

平藏は、さすがに嚴然たる態度で言放つと、さつと合圖の右手を擧げた。同時に武藏號の淡紅色の機體は、轟々と爆音高く地上を蹴り、忽ち美事な滑走で、雜木林の上へふはりと浮び上つたが、そのまゝ銀翼を陽光に輝やかせながら、場の上空を悠々三周すると、一直線に河原の上に出て、見る〳〵所澤の方角へ機影を沒してしまつた。

『どうだ……』

平藏は、茫然と、寶を攫はれたやうに、飛行機の行方を仰いでゐた朔の肩をポンと叩いた。

『いや……』

朔は、夢から醒めたやうに、はつと息をついたが、にやりと苦笑したゞけであつた。

碧眼の女秘書

數日後――

平藏とひろみは、朔から、帝國ホテルの晩餐に招待された。

朔は紐育のミカエル・ブラザース本社から横濱代理店へ轉勤してきたばかりで、まだホテル住ひをして横濱に通つてゐたのであつた。が、その日は葉室機献納後の製作契約處理に對する會社側の意向が齎らされる筈で、その用務も兼ねて横濱代理店の主任ナリン少佐（此人も歐洲大戰に參加して勇名を馳せた米國陸軍の豫備砲兵少佐であつた）も、この席に同席することになつてゐた。

平藏とひろみは、早目に多摩川の製作所を出たが、ホテルの玄關に着いた時には、もう街の灯がほのかな光を放つてゐた。二人がボーイに案内されて階段を上つて行くと、

『やあ、いらつしやい。』

ロビイの卓を取卷いて、何か笑ひ興じてゐた外人達の間から、思ひがけなく朔が立上つて迎へた。

『さあ、どうぞ……』

朔は外人達の眼が、美しいひろみに集つてゐるのを見ると、得意さうに早口に、外人達に笑ひかけたまゝ、いそ〳〵と二人を二階西側の自分の室へ案内した。

『便利主義で、ホテル住ひをやつてゐるのですが、どうも殺風景でしてね。どこか早くいゝ家を見つけて、着物に寛ぎたいですよ。親爺は向ふでも、自宅では和服で通してゐましたよ。』

それとなく或る希望を仄めかしながら、ひろみの和服姿を惚々と、しかも無遠慮に眺めた。

『お父さんは、紐育のブロードウエーを、浴衣がけで涼みに出てやつたと威張つてゐたからね。はつはは……』

平藏は、紙巻に火をつけながら笑つた。

『和服は、やはりいゝですね。しかし、僕はひろみさんは、洋裝でいらつしやるかと思つてゐたのですが……』

『でも、ホテルへ洋裝でくる勇氣はありませんわ。私も紐育のブロードウエーなら、やはり和服の方ですわ、ほつほほ……』

無邪氣に美しく笑つた。

『どうしてあなたなら洋裝でも、和服でも、立派に似合ひますよ。一つそこらの碧眼連中を、びつくりさせてやるのですな。はつはは。』

『とんでもないことですわ……』

『いや、此間の同乘飛行の時の、あなたの勇氣には、僕はびつくりしましたからね。』

朔は、忘れかねるやうに言つたが、その時傍から、

『大場君……ナリン氏は遲いぢやないか。』

平藏は、何よりその問題が氣になるらしく突然、話題を移してしまつた。

『それについて、さつき横濱から電話がありましてね。ナリン氏は、何か、急な用事ができたとかで、秘書のミス夏川が代りにやつてくるさうですよ。』

『ミス夏川？……それで、先方の御意向は、何か聞かなかつたかね。』

『それがですね……』

朔は、急に、大仰らしく、額に手をやつてみせたが、

『どうも、外國人には、愛國心といつたやうなことが、ぴんと來ないらしいんですね。それよりも社會的な道徳の方を重く見る傾がありまして、日本人は不信だとか、何だとかと、大分憤慨してゐたやうですが……しかし何しろナリン氏一個の考へでも、決められない問題ですから、紐育の本社の方へ、指揮を仰いでやつたやうな樣子でしたよ。』

氣を持たせる口吻だつた。平藏は、

『なるほどね……しかしナリン氏の考へは……』

『さあ、それも、ミス夏川が見えますと、大體の意向は、判ると思ふのですが、先づ僕の見たところでは……』

朔は、そこでスリーキヤッスルを抜いて、ゆつくり火をつけた。

『抑々飛行機が完成すればといふやうな、言はゞまだ海のものとも、山のものとも知れない契約に、會社が十萬といふ大金を投出して、權利を買つたといふことは、要するにです。世界的飛行機製作技術の權威者葉室平藏といふ存在を買つたことに外ならないと思ふのです。その

葉室技師がですね……』

朔は、にやりと、氣を持たせて、

『完成した飛行機を、ぽいと軍部に献納したとなりますと、會社としては鳶に油揚を浚はれたと同じことになります……それで、只今も申上げましたやうに、愛國心といつてもぴんとこない外國には、一應葉室技師の人格を疑つてかゝるのも、自然の成行かと思はれるのです……』

『成程ね……』

平藏は、紙卷の煙を吐いて、仕方なく肯いた。

『しかし、その點を、僕はナリン氏に說いて、十分をぢさんのために辯じておきましたが、ナリン氏も、大分了解してくれた樣子でした……』

『うむ〱。』

平藏は、感謝するやうに、もう一度大きく肯いた。

『で、その點さへ了解がつけば、他は案外すら〱と運ぶのではないかと、僕は思つてゐるのです……外國人は、喧しいことを言ふかはりに、一面、諦めといふことも早いのです。献納機に對していつまでかれこれ言つてみたところで、無駄だと判ればさつさと抗議を、撤回するだらうと思ふのです。彼等は、感情よりも、利害關係で動いてゐるのですから、無駄なことに拘はつてゐるより、より以上有利な代償を、求めようとするのが彼等の遣り口ですから……』

『ぢや、飛行場や、製作所を寄越せとでもいふことになるか。』

『いや、會社は、最初の目的通り、をぢさんの技術を要求するでせう……十萬圓といふ金は大金ですが、會社にすれば、今何うといふ必要のある程の金額ぢやありませんからね。つまり葉室技師の技術に對して、より以上有利な契約を要求してくることになるのぢやないかと思ひますがね……』

『…………』

平藏は、その、相手が望む、『自分の技術に對する、より以上の要求』——この朔の言葉に對して、更に大きな不安を覺えずにゐられなかつた。

一體、何んな要求を、俺の技術に持出すつもりなのだ？——平藏が心中で呟いた時だつた。

コツ、コツと、靜かなノックの音が聞こえた。

『どうぞ……』

朔が立上ると同時にドアが開いて、ぱつと花が咲き出たやうに、派手な洋裝の女の姿が現はれた。

『あら……』

艶めかしく俯向き加減に、女は美しく微笑したが、室內の燈火に首飾の眞珠が、ほのかに深い光を煌かせた。鼻梁のよく通つた彫刻のやうな美しい端麗な顏であつたが、ウエーヴした髮の黑々としてゐるのに似ず、そのあでやかな活き〱した瞳は、何處か碧味を帶びて輝いてゐた。

疑ひもなく混血兒だつた。

『ナリン主任の秘書ミス夏川です……』

朔はにつこりして、平藏父娘に紹介した。

（つゞく）

俄然大評判の名小說、これから益々面白くなります。

（四〇七頁よりつゞく）

このいきさつは、直代からの手紙によつて戰線の俊作へも、既に知らされてゐた。俊作も固より大喜びだつた。さればこそ、研一の最期を報告するこの手紙の末尾には、直代のことをくれ〴〵も宜敷く頼むといふ傳言も併せ記されてあつたのだつた。

そして、その手紙には、尚ほ研一の陣中メモと遺作の樂譜とが同封されてあつた。

一枝は、そのメモをパラ〳〵と繰つてゐた。が、やがてある一節を聲を立てゝ讀み始めた。

『……母上より手紙來る。吉報々々。有難う、お母さん、隆二喜べ！ 俊作君、君はどこにゐる。これで、君の誤解も晴れたらう、あゝ、一緒に語りたい！ 隆二達兩人の上に幸あれ！』

それは研一が、隆二達を以前通り交際させることにしたといふ母の手紙を受取つた時、認めたメモであらう。

『研一さんの大喜びが目に見えるやうだわね。』

一枝はそして、更に讀みつゞけた。

『一ちやんから慰問袋が届く。大好物の甘納豆だ――みんなで分けて喰べる。五六粒づつ……隊長にひやかされる……ほゝゝゝ、いいとこあるわね。』

一枝は低い聲で、淋しく笑つたが、次の頁を開くと何故かその先は讀まなかつた。

凝乎とメモを視詰めてゐる一枝の瞳には、いつか美しい涙の露が光つてゐた。

その頁には、

（一ちやん！
僕は風に向つて大聲に叫んだ。
僕は君を、心から愛する
君の倖せを……とこしへに祈る！）

さう記されてあつたのだ。

『お姉さま、どうかなさつたの？』

默つてゐる一枝に直代が心配げに問ひかけた、が、

『いゝの！』

一枝は低く頷いて、メモをソッと閉ぢると、代りに遺作の樂譜を取上げて、涙にうるんだ瞳をおほつた。

『これ、私、彈いてみようかしら。』

『あゝ、ゼヒ彈いておくれ。』

母の言葉に、一枝はピアノの前へ走つて行つた。

やがて、雄渾莊重なメロデイが、一枝の美しい指先から、生き〳〵と湧き上つて來た。

それは何物にもたとへ難き、雄々しく美しく大らかなる樂曲であつた。

忠勇なる皇軍の一勇士松原研一の至誠な魂は、そのまま一つの韻律と化して甦つて來たかの如くであつた。

一枝は、感動して、繰返し〳〵幾度も彈きつゞけた。

母の房子も、隆二も直代も、今は彫像のやうに身じろぎもせず聽き入つてゐた。

永遠に忘れ難い大きな感動に、一座はいつまでも〳〵ひたり切つてゐた……。（終）

秘境、滿蒙をあばく!!

猛獸匪賊の巣窟だつた滿蒙を、四十年の長きに亙つて探險したアーナート博士が、死線突破の體驗談を集めた『滿蒙探檢四十年』は居ながらにして滿蒙の今昔を知ることが出來る快著として大好評、是非御覽下さい。（定價一圓五十錢送料內地十四錢、講談社發行）

落語

きやいなう

桂文都

水島爾保布畫

一席伺ひます。今では吾々も落語家などというて居りますが、昔は『はなしか』と云はれて居たんださうで、ひどいのになりますと、『鹿』だといふ、まるで角でも生えてゐるやうでございます。それが段々と向上いたしまして、今日では技藝士とか話術家などいふ名が附いて、立派に税金も納めて居ります。よく悪口に『口に税金が掛らないと思つて生意氣なことを言ふな。』なんと云ひますが、豈計らんや、吾々の舌へは課税されて居るやうなわけで、一等から五等迄あつて、五等は一ケ年八圓と二十錢、犬と同じといふ事になつて居ります。往來でブルドッグか何かに會ふと向ふの方が威張るだらうと、氣がひける有樣。最近税金が上りまして、これでやつと威張れると思つて喜んでゐましたら、犬の税金も、やつぱり一緒に上つたんださうで、これぢやアやつぱり同じことでございます。從つて餘り好い男は居りませんやうで、我々同樣妙な顔をしてゐるのが大部分。聞いてみましたら、『こいつは珍妙な顔をしてゐるから落語家にでもしようぢやないか。』といふやうな譯で落語家になつたのが多いさうです。そこへ行くと、所謂俳優、役者の方は好い男が揃つてをります。映畫俳優などには美男子が多いやうですな。本人も亦自信がありまして『俺は男ッ振りが好いから役者になつてやらう。』てなことで俳優を志願するんださうですが、落語家の方はじしんも雷もありませんやうで、ただ顔がありさへすればいゝといふんですから比べものにならないのは當然で御座います。

一寸、人氣のある俳優が、街でも歩かうものなら女の子連中はどこでも大變な騒ぎ。

○『ちよいと、美代子さん、御覧遊ばせよ。阪東さんがお出ましになつてよ。』

△『ちよいと、初子さん、御覧遊ばせ、音羽

屋さんがお出でになつたわ。』
□『ちよいと、智惠子樣、御覽遊ばせよ。阪東さんが……』
×『アラマア音羽屋さん、まア好い男ね。何んて崇高なスタイルなんでせう。』
なんて憧憬の眼を以て見て居りますが、私が表へ出ても何とも言ひやしません。
○『ちよいと、今度は何かはみ出して來たわ。なアにあれは。』
△『落語家の文都だわよ。』
○『アレ、まア本當に生意氣だわね。落語家の癖に歩いてるわ。』
大變な相違でございます。又お芝居へ行くにしても美しく着飾つてお出かけになる女の方などは前の晩から髮を結ひます。日本髮に結つて居る方なぞは、
女『こつちの鬢は吉右衛門さんに御覽に入れるのだから、こつちの鬢は菊五郎さんに御覽に入れるのだから、こつちの鬢は羽左衛門さんにお見せ申すのだから、大事にして打ッ壞さないやうに。』

などと、まるで藥局の棚に地震が搖つてゐるやうにびんを壞さないやうに／＼と云つていらつしやる。殿方だつてさうです。
○『今日は新橋の演舞場へ行くからね、昨日三越から出來て來た、あの仕立卸しの……』なんてなことを仰しやいますが、寄席へお出でになる時は、
○『今日は寄席へ落語を聴きに行くんだ。着物……平常着かい。勿體ないな、寢卷にしよう。』
だらしのない事になるもので、寢卷を着てお出でになると云ふやうな事になります。あの褒言葉、あれも俳優の方がいゝです。落語家などは滅多に褒められる事なんぞはないですけれども、偶ゝお正月か何かで醉つたお客樣がお出でになつて、吾々が高座へ出て行くと、
△『イヤー親玉ア!!』
大變喜んで、こつちが親玉になつた積りで得意でゐると、
×『ヘウ六玉ア。』
なんと云つて直ぐ打壞されてしまふやうな事になりますが、お芝居の方ですと、成田屋ア、播磨屋ア、成駒屋ア、高島屋ア、松坂屋ア。松坂屋は呉服屋ですが、新派の方ですと苗字で、伊井イ、河合イ、喜多村ア、花柳イ、褒めるに呼付で褒めるのは、氣の毒だといふので、苗字を言つて、名前を云つて、下に殿を附けて褒めた人がありますが、あれは餘りどうもコントラストがよろしくありません。伊井蓉峰殿、喜多村綠郎殿、花柳章太郎殿、ま

るで區役所の呼出し見たやうで。さん附にしたらどうだと云ふので、やつた人がありますがあれも餘りよくない樣で、伊井さん、河合さん、花柳さん、御飯です……田舍の料理屋見たやうでどうも宜しくありません。この役者の方は好い男だとは云ふ樣なもの〻、實はあれはイカサマが少くないやうで……イカサマと云ふと甚だ失敬ですが、色が黒くたつて白粉で塗りつぶす。目が下つてたつて目吊りと云ふやつを掛ける。鼻が低ければ繼鼻、頰がこけてれば含み綿、背が低いなと思ふと繼足、高過ぎたと思ふと足を切つて……まさか足を切りはしませんが。ですから役者が表へ出て夕立か何かにザーッと打たれ〻ば、白粉や何かが剝げて汚い顏になります。けれども、そこへ行くと、落語家の方はさう云ふ憂はない。何等お買被りない生地のま〻を御覽に入れて居ります。で、役者も結構ですが、俳優にもピンからキリまでありますやうで、極く良い俳優になつて來ると立派なものですが、餘り良くない俳優と來ると、素行の上に就ても、餘り面白くない噂のある方もあります。自分の美貌を種にして、婦女子を誘惑する、金品を捲き上げる、乃至は自分の身體を、婦人に賣つたり何かする、實に怪しからぬ奴が昔はをりました。そこへ行くと落語家の方は實に正々堂々、何等俯仰天地に

恥ぢない。私もこの稼業になつて約二十年、當年取つて三十六歲でありますが、今迄たつた一遍だつて女の方に身體を賣つたことは御座いません。尤も買手もありませんけれども……。

□『どうしたい、え、君、もう頭取さんが幕開きを知らせに來て居るよ。しやうがねえな。どうしたい白粉もつけねえで。』

◎『だつて白粉がないんだもの。』

□『白粉が無いつて、お互に女形ぢやないか。ちやんと買つて置かなきや駄目だよ。』

◎『一昨年買つたきりだもの。』

□『だらしがないな。しやうがないから、そこにホラ、壁があるからね、壁を壞してその漆喰を溶いて……』

◎『壁を壞して漆喰を溶かしてつけるなんて、コンクリートの出來損ひ見たやうだな。いやだな、どうも。役者だつて俺達と來た日にやア、こんな事で終つちまふのかなア。』

やうやう顏の化粧が出來たので、衣裳屋の方へ行く。衣裳屋さん乃至は鬘屋さん、床山さん、皆い〻役者には大變叮嚀に取扱ひますけれども、惡いのになつて來ると、實に悲慘

なものです。
○『衣裳屋さん。』
衣『何だ。』
○『顔が出來ましたから、衣裳を一つ。』
衣『何を……衣裳か、何だい、腰元かい、腰元の衣裳なんぞ此方にはないよ。』
○『ありませんか。何處にあるんです。』
衣『向うにあらア、襤褸と一緒に。』
○『襤褸と一緒……いやな衣裳だな。あゝ衣裳々々、衣裳があつた……床山さん、ねえ床山さん、ねえ床山さん、鬘を一つ……』
床『何だ、腰元か。一人々々ぢやア面倒だ。全部そこへ列んぢまへ。皆鬘を冠せてやらア。』
○『おや〳〵、おいみんな列べとよ……へい皆揃ひました。どうぞ一つ。』
床『頭を持つて來い……金ちやん、ちよいと鬘を出してくれ。順々と片ッ端からおッ冠せてしまふから。』
○『おッ冠せると來やがつた。危ねえな。首は折れねえかな。』
床『愚圖々々言ふねえ。ホラ、あいよ、ホラあいよ。ホラ……』

○『床山さん、これは少し鬘が大きいやうなんですが……』
床『贅澤をいふない。下ッ端の役者の癖に、役者らしいことを言ふない。鬘なんてえものは、誰にも合ふやうに同じやうな型に出來てるんだ。』
○『へえ、同じやうな型なんですけれども、頭の方が皆違ふんでせう。』
床『違ふのは違ふ方が惡いんだ。いやに小さな頭を持つて來るから惡いんだ。贅澤をいふな。』
○『へい、有難う御座んす。』
床『しやうがねえな、どうも。おや何だい、これで濟んだんだらう。まだ一人ぼんやり立つてゐるぢやアねえか。何だい、あれは……おい〳〵何だい、お前は……』
△『へエ、私はあの役者でござんす。』
床『役者か、變な役者だな、あんまり見たことがねえな。誰の弟子だい。』
△『エ、高島屋さんの、左團次親方の弟子です。』
床『高島屋さんのお弟子で、何てんだい。』
△『二團次。』

床『二團次……聞いたことがねえな。初日はどうして來なかつたんだい。』
二『初日は何で御座います。顔をすつかり粧へて、衣裳を着て帶を締めようと思ふと、帶がないんで御座います。へエ、帶を捜して居る中に、たうとう幕が開いてしまひまして間に合ひませんで……』
床『二日目はなぜ來なかつたんだい。』
二『二日目は何で御座います、もう顔を粧へて、今度は帶を先に探して衣裳を着ると、袖の所が綻びて居りましたから、それを縫つて居る間に幕が開いて、間に合ひません。今日は三日目、やうやくのことで間に合つたのですから、どうぞ一つ鬘を……』
床『駄目だよ。』
二『へエ』
床『駄目だよ。』
二『そんなこと仰しやらずに、どうぞ。』
床『何を言つてやがる。お前役者の飯を食つてりやア、芝居の法ぐらゐ知つてるだらう。初日二日と休んで、三日目に顔を持つて來たつて、間に合ふ道理がないぢやアないか。鬘は無いよ。駄目だよ。』

一三『そんなこと仰しやらずに、どうぞ一つお願ひ申します。』

床『駄目だと云つたら分らねえ奴だな。駄目だよ。』

一三『どんな鬘でも宜しいんですけれども一つどうぞ。』

床『どんな鬘でもいゝのか。坊主の鬘はどうだ。』

一三『坊主の鬘を、冠るといふ譯にはいきません。そんなことを仰しやらずに。』

床『いけねえよ。』

一三『いよ〳〵駄目なんですか。』

床『駄目だよ。駄目と云つたら駄目だ。』

一三『鬘を冠つて出られないと云ふことになつたら、もう生甲斐がありませんから、こゝで猫イラズかキヤラメルでも服んで、死んでしまひます。』

床『キヤラメルを飲んで死ねるかい。何を言つてやがる……おやお前泣いてるな。涙なんてえものは、眞劍にならなけりやア出ねえもんだ。どうして死なきやアならねえんだ。』

一三『死なねばならぬその譯を、まづ一通りお聽き下され……』

床『よせやい。こゝで臺詞なんか言つてる奴があるかい。どう云ふ譯なんだい。』

一三『實は何でございます、私は東京生れの者では御座いませんので、へえ。東京から四日ばかり船に乘らなければ行けない所なんで、どうかして役者になりたいと親父や阿母にさう云つたんですけれども、家は堅いものですから、そんな道樂稼業はいけないと云うて、許しません。仕方がないから、私は家を飛出して、船の中に四日四晩、飲まず食はずで東京へ參りました。手蔓を求めて、やつと役者になりまして、一番最初は早稲田劇場へ出るやうになりました。私も喜びまして、故鄕の親父や阿母の所へ知らせてやり、早稲田劇場へ出るやうになつたから、どうか見に來てくれといふと、親父と阿母が大變喜んで、早速やつて參つて、一日見物して呉れました。芝居が閉ねますと、親父が迎へに來たから宿屋へ行きますと、一體お前は今日何の役になつて出たと云ふ。實は菅原天神記の牛になつて出ましたと云ふと、親父は大變歎きまして――アヽさうか。牛か。些つとも氣がつかなかつた。役者になつたと云ふから、何かお前

が出たら褒めてやらうと思つて、十分氣をつけて見て居たが、出なかつた。どうしたのかと思つたら、牛の脚ぢやア分る譯がない。牛の中に入つてをつたんでは殘念だ。實に殘念だ……と親父は心を殘して歸つて了ひました。それから一年經ちまして、何で御座います、一生懸命勉強して、今度は本郷座に出る樣になつた、安心してくれ、今度は見に來なくてもいゝからと、さう云つてやつたんですが、親父と阿母は倅が可愛いとみえて、また出て來ました。芝居を見て歸りがけに、今度は泊らないで直ぐ歸るといふから停車場のプラットホームに送つて行くと、親父が、お前は今日は何の役に出たといふ。そこで、實は忠臣藏の五段目の猪になつて出ましたと云つたら、親父が大變怒りまして、何を云つてやがる。役者になつたといふから、人間の役でもやるだらうと思つたら、牛だの猪だの、獸ばかりやつてやがる、それでも役者かと云ふから、いえ、阿父ちやん、私はこれから出世して人間の役をやるやうになりますから、どうぞ我慢して下さいと云つて、いよ〳〵もう汽車に乘込むまで送つて行くと、阿母が泣きながら私の袖を押へていふには……もう自分は年をとつて寢て居ても暮らされる。今まで贅澤もして來た。何も思ひ殘す事はないけれども、たゞ此世に一つ心殘りの事がある。どうかお前が人間の役をやつて、舞臺の上に立つて步ける樣な役をする處を見て死にたい。それが心殘りだ……と潸然と泣いて居りますから、私もさう云つたんで――宜しう御座います。阿母さん。私は勉強して屹度舞臺の上に立つて步けるやうになりますよ……つて。それから勉強して、丁度今年で三年目やつと腰元の役がつきました、へえ。これで鬘が無くて舞臺へ出られないと云ふことになりましたら、死んで了ひます。今日は親父も阿母も棧敷で見て居りますから……』

床『さうか。さういふ譯があつたのか。些とも氣がつかなかつた。阿父さんや阿母さんが來て居るのか。』

二『へエ、棧敷で見て居ます。』

床『ぢやア何か出してやるから、待つてゐろ……金ちやん、彼處にあるのを持つて來な、……一寸向うを向いて、どうだ……』

二『ハ、、こりやいけない。床山さん、眞ッ暗になつて了ひました。』

床『ア、いけねえ。鬘が大き過ぎて、首まで嵌つたんだよ。新聞紙か何か無いかな。ア、あつた〳〵。こりや新聞ばかりぢやアない、いろ〳〵なものが入つてゐるが、いゝだらうこれでどうだ。』

二『アッ痛ッ、たッ。』

床『痛いくらゐ我慢しな。それで一寸待つてくれ。お前何か、腰元になるたつて、たゞ大勢繫がつて出る腰元か。』

二『さうぢやアないんです。』

（以下四五五頁へつゞく）

映畫小說（東京發聲作品）

十字砲火

野澤純

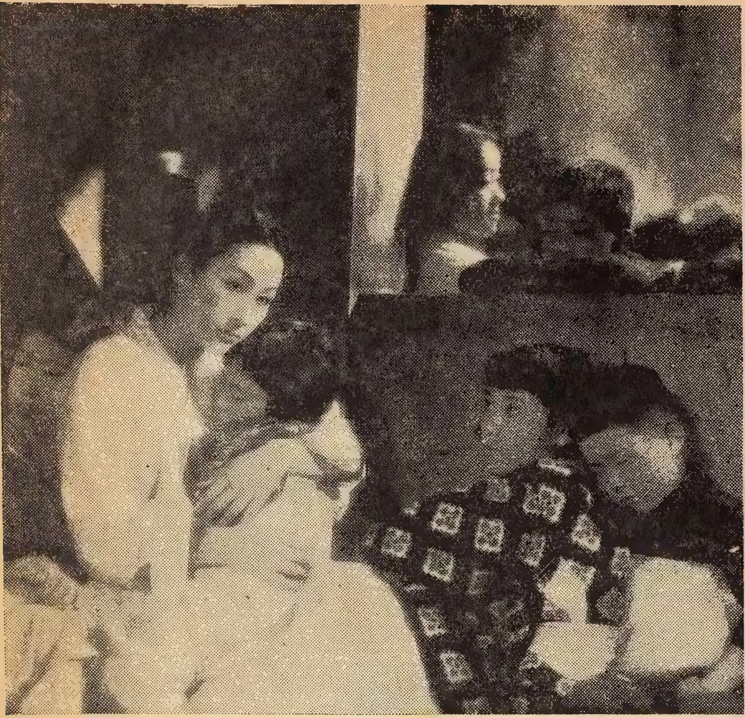
露營の月

……月が出てゐた。

叉銃の上に、虫がとまつて啼いてゐた。

兵は、思ひ〳〵の場所に屯した儘、與へられた時間を存分愉しまうとするやうに、此處でも彼處でも、盛んに談笑し合つてゐた。

——昨日の戰線が、今日は味方の露營地である程の、前進ぶりなのである。



さうして、みんな元氣だ。

トラックで、五十キロあまりの、險路やゴロタ路を、文字通り晝夜兼行で前進し續けて來た兵とも思はれない元氣さである。

而も、後部から新たに前線へ廻されたばかりの、尖鋭部隊らしいはりきり方が、どの兵の顏にも——言葉の上にも表はれてゐた。

×

『伊勢で名高き青砥山ア……』

どこかで、不意に浪花節を唸り出した兵がある。

圍まれた圓陣の中を覗いてみると、肥つ漢で剽輕者の藤村二等兵の顏だ。

故國へ歸ると、河岸の兄哥さんでゝもありさうな、ゐせいのよさである。

『えヘン！』

と途中で咳拂ひをしておいて、藤村二等兵は又はじめからやりなほす。哄と笑ひがあがる。

『謹聽々々！』

誰かの制し聲がした。

『伊勢で名高き青砥山ア……人あざ名して荒神山で、二十と八を一期として江……』

（寫眞右は大川部隊長（大日方傳）を先頭に突撃の寸前、左は良民の避難、子供を抱くは逢初夢子の朝鮮女秋蓮）

虎造張りの唸り聲へ、忽ち、

『ヤア、お！』

と合の手が入る。

『義俠のために仆れたるウ……年は若いが大立者……吉良の仁吉が苦心談……』

『よう、あ！』

『不辯……ながらアも、つとめませう——』

『うめえ〳〵！　今ンとこ、もう一囘やれ！』

『いゝから、先をやれ〳〵！』

『あとは知らねえや。』

『なんだ。出し惜しみをするな！』

『きまり悪がる柄かい。』

『柄の方で、きまり悪がるぞ！』

ガヤ〳〵と、また無邪氣で、頗る賑やかなこと。

露營にも、こんな愉しい刻があらうかと思はれる程——のんびりとしたひと刻だ。

泪の一等兵

さうした談笑の群を離れて、只一人、最前から石に腰をおろした儘、深く俯向いてゐる兵があつた。

『三木一等兵——』

誰かゞ氣がついて聲をかけた。

『おい、どうしたんだ三木？』

戰友が二三人、立つてその方へ近づいて行つた。

『どうしたい？　腹でも痛むのか？　いやに感傷的な恰好をしてるぢアないか。——戰地へ來て感傷的になるなんて、あんまりいゝ洒落ぢアないぞ。しつかりしろ！』

元氣づけるやうに云つて肩を叩いた。

が——相手は、顔をあげない。

返事もしないのである。

その手に、不圖、讀みさしの便箋が握られてあるのへ、いち早く目をとめると、

（おや……？）

といつた風に、一人が仔細らしく覗き込んでゐたが、やがて、

『こいつ！』

と云ひざま、いきなり肩を叩いて激しく搖振つた。

『女の手紙なんか讀んで、感傷的になる奴あるか！』

『馬鹿、云つちや困る！』

ぶすり！　と返して、三木は始めて屹と顔をあげた。

……泣いた目だつた。

『…………』

戰友達は、ちよつとの間、面喰つたやうにおし默つた。

……靴音がして、部隊長が通りかゝつた。

輕く足がとまつて、

『どうした？』

『は——』

一人が周章てたやうに直立した。

『三木一等兵が……』

云ひかけて、不圖、傍の戰友の方を見た。

（おい、何とか云へよ）

と、あとを促してゐるやうな目表情だつた。

『自分は、よく知らないであります。』

無意識のうちに庇つてゐた。が、何と思つたか、すぐ、

『手紙を讀んで泣いてゐたんであります。』

と報告口調でつけ加へた。

流石に『女の……』とは云はなかつた。

……部隊長の目が、默つて三木に向けられた。

と——三木は遽かに起立をし直した。

『違ふんであります！』

憤然としたやうな聲音だつた。

『自分は……自分は、泣かんのであります。もとい——帝國の軍人は、女の手紙などを讀んで泣かんのであります！』

『……泣いてをるではないか。』

緩りと、低く云つた部隊長の顔に、不圖、湛へたやうな微笑が刻まれてゐた。

『この泪は、違ふんであります！』

『では……どうした泪か？』

同じ微笑に對して、

『は——』

と應へたきり、三木一等兵は暫く口ごもつてゐたが、

『郷里の妹から手紙が來たんであります。手紙の中にこれが……』

これが、と云ひながら、三木一等兵はポケットから封筒をとり出すと、それを逆さにして振つた。

『これが入つてをつたんであります。』

カサリ……と音をたてゝ掌へ落ちたもの、……それは、黄色く圓やかに稔つた一本の稲穂であつた。

『……』

『自分は、これを見てゐたんであります。』

『………』

『これを見つめてゐるうちに……自然と泪が出て來たんであります！』

『………』

部隊長は、默々として、その稲の穂を見つめた。

事情は因より深く知るよしもなかつたが、たゞ、何か粛然としたものが、胸へ響いて來たのである。

稔れる稲穂

……三木一等兵は、郷里へ歸れば一介の百姓であつた。

『百姓』と云ふ言葉の感じは當らない。彼は、鋤鍬をもつて農業にたづさはる——村での模範青年であつた。

彼が毎年、農會へ出陳する肥料の見本は、その質と、經濟的見地に於て、いつも最上のものと認められ、その都度、何等かの褒賞を與へられてゐた。

たゞに肥料ばかりでなく、稲作についても亦、一境地をもつてゐて、多年の實際的蘊蓄によつて彼が提出する稲穂は毎回の品評會に於ても、多く優良とされ、その爲縣から賞状を與へられる事も再三ではなかつたのである。

さうして、早くから兩親を亡つた彼は、殘された妹ひとりを手助けとして、關東の沃野に、土を生命としつゝ終日野良へ出ては孜々營々と働いてゐるのであつた。

——赤紙を受けて、彼が名譽の應召に立つたのは、苗の植附が始まる頃で、兄が二十六

ワキガに蘭香

事實が何よりも確かです。患部へ塗布すれば忽ち汗腺の分泌を調節し、惡臭を止め、目に見えてお悩みから救はれます。無色透明の水藥ですから決してお召物を汚す心配もなく安心してお用ひ頂けます。一日早ければ一日のお得、信用ある『蘭香』でゼヒお悩みを解消して下さい！

▲藥價 一瓶 二圓（送料内地十錢其他四十二錢）

★お註文は東京小石川・大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）

妹は十九であつた。

旗の波に送られて、郷里を出る時、

『留守の事は心配しないで下さい。私が屹度、兄さんの分まで働いてみせます！』

植附半ばで發つて行く兄の心をひそかに汲んで、健氣にもさう云つてくれた妹である。

心をあとに殘さじ――と覺悟をきめて發ちはしたが、

（女ひとりの纖弱い腕で――）

と思ふと、露營の夢に、しば／＼結ばれるのは、遠い故國の土の匂ひであつた。

……その故郷から、久々に送られて來た妹の手紙を見れば、

『安心してよ――』

と銃後の便りも、健氣な文字に綴られて、手紙と一緒に封じこめられて來たのが、己が田に稔りを結んだ稻穗であつたのだ。

×

『――悲しくて泣いたんではないんであります。自分は、この、よく稔つた稻穗を見て、しみ／＼と、う……嬉しくて……な、泣けて來たんであります！』

事情をきいて、思はず、

『うむ……』

逃げおくれた農夫がゐた、中には五つ六つの子供を連れた女も……寫眞は逢初夢子の秋蓮と中野英治の砂田中尉

と深く肯いた部隊長であつた。

『さうか……』

じつと暫く、その儘默つてゐたが、よつぽど經つてから又、

『さうか……！』

と今度は己れに向つて肯くやうに云つた。

心は、明らかに、或る感動に打ち顫へてゐるのであつた。

『三木一等兵――』

『は――』

『すぐ、返事を書いてやるがいゝ！』

『は！』

『元氣でゐるとな！』

『は！』

『――お前は、よい妹を持つた。それでこそ、銃後を護る立派な女性だ！　心をこめた返事を書いてやれ！』

『……………』

『何物にもまさる、よき慰問品を手にして兄は喜んでゐる、と書いてやれ！』

『……………』

『それから――お前のやうなよき兄を、その儘よき兵に持ち得た一部隊長として、この俺

も亦深く感謝してをる、と、添へて書いてやつてくれ！』

『…………』

言葉のない三木一等兵であつた。

答へ得ずしておし默つた目からは、別な涙があふれ出て來るのである。

大君の、詔をかしこみて征戰の野に立つ、この部隊長を仰ぎてこそ、我も亦一死を以て報いんとする、心の激動なのであつた。

眠る塹壕

露營地をあとに、殘敵を追つて更に前進二十五粁。

目指す敵陣の本據は、やゝ間近くなつて來てゐた。

『これからだ！』

誰の心も次第に引緊つてゐた。

最早、誰も冗口をきく者もなかつた。

前方五粁ばかり離れた敵陣からは、誘ひをかけるやうな、標識のない彈丸が、遙かな頭上を、時折、鞭の遠鳴りのやうな音をたてゝ、空しく過ぎていつた。

我が方からは、未だに一發も射ち出しては

ゐない。

五粁の地點に、塹壕陣を敷いた儘、じつと待期してゐるのだ。

――さうして、夜に入つた。

今宵もまた、いゝ月夜だ。

敗殘兵の掃蕩杯には惜しい程いゝ月夜だ。

たまに、思ひ出したやうに射つて來る、敵の小銃彈の音のほかは、啼き細つた虫の聲だけで……默つてゐると、睡くなる程の靜けさだ。

『あれ、日本で見る月と同じ月かなア……』

低聲で、不意に頓狂な事を呟き出した兵を――誰かと見れば『伊勢で名高き』である。あの、兄哥さん氣質の藤村二等兵だ。

誰も嗤はなかつた。

みんな、心の何處かで、同じ氣持がしてゐるのだ。口に出して云ふと、云はないだけの事だつた。

煙草が吸ひたくなつた。

が――吸つてはいけないのだ。

しかし、默つてゐると睡くなる。

『おい――』

『伊勢の青砥山』は不圖、隣りの壕底に腰を据ゑた儘默々としてゐる、三木一等兵の耳許へ話しかけた。

『お前の話、聞いたぜ――』

『…………』

『近頃にねえ、いゝ氣持で聞いた。俺ア、胸を打たれたね。』

『…………』

蓋し、藤村二等兵は、感激居士であるらしい。相手が默つてゐても、平氣で續けてゐる。

『俺にもし、文章てえものが巧く書けれア、あんなの、早速浪花節にするンだがなア……』

『…………』

『……戰線と、銃後を結ぶ、兄と妹の軍國美談。おそまつながらア……つとめまするウと來るやつだ。』

『馬鹿……！』近くに、低い叱聲が起つた。

『此處は前線だぞ！　あんまり呑氣に構へるな！』低いたしなめ聲だつた。

『それに、戰線へ來て（胸を打たれた）なんて、緣起でもない事、云ふの止せ！』

少し、慍つたやうな口調でもある。

青砥山居士は、忽ち惡戲ツ兒が叱られた時のやうに首をすくめて、それつきり默つて了つた。

殲滅を期して

遂に一發も我が方からは發射せず、斥候の報告によつて、部隊はその夜のうちに、更に敵前二粁の距離をせばめてゐた。

彼我の間には、久しぶりに見る高粱畑が廣く長く續いてゐた。

傾斜の平面は棉畑で、ところ〴〵に、民家の屋根が、夜空の下に黑い凹凸を見せてゐた。

此處へ來て愕いた事は、それ等の民家にまだいくたりかの『人間』が殘つてゐたことだつた。

檢べてみると、悉く純粹の支那農夫である。而も、中には五つ六つの子供もゐれば女もまじつてゐた。どう云ふ譯で逃げないのか？

あまりに神足な、我が部隊の前進に遭つて、逃げ後れて了つたのか？

或は、折角熟れかけて、收穫の近い高粱の畑を惜しむ。百姓らしい愛着から來たものか？

まさかと思つた、その後者が、立去り得ない主な理由と知れて、暫し啞然とした我が軍であつた。

わづかに、その心情を解り得るのは、三木一等兵の如き、同じ立場の兵だけであつた。

それにしても、憐れむべき民ではある。

前方わづか二粁の地點には、數多の銃座を備へた敵がゐるのだ。

無論、放つて置くわけにはいかない。

部隊長の說得と命令とによつて、彼等は直ちに、軍の後方へ移されて、保護を加へられる事になつた。

『なるべく、高粱は避けるから、安心せよ。』

それが――來るべき激戰を前にしての、彼等恟々たる農奴に向つて與へられた、部隊長の溫い言葉であつたのだ。

×

敵は、拂曉から熾んに射ち出して來た。

部隊も、いつかそれほど前線に迫つて來てゐたのである。

彈丸は、目には見えぬが、高粱の戰ぎで、いち／＼方向がわかつた。

『伏せ！』

の號令は、とうに下つてゐた。

ひゆるるるうん！

と、高粱の、葉と莖と枝を縫つて戰がせながら、目には見えない音だけが、一直線の彈道をつくつて、幾度も頭の上をかすめていつた。

×

……うつかり這ふと、糞があつた。

糞のやうな敵を前に、殲滅を期した機銃の火蓋がはじめて一齊にきられたのである。

ビビビビビッ！

ダダダダダ！

十字砲火を浴びて、みる／＼崩されてゆく敵の一角。

味方の野砲陣から放たれた、殷々たる砲聲。

敵陣の眞ッ只中へ見事に極つた着彈距離――

そこから、忽ち如露形に湧き上る、凄まじい土壤の炸裂。

途端に、七八メートルも宙にふッ飛ぶ敵の擬裝樹。

激戰は一時間あまりも間斷なく續いた。

この激動

疲れたやうに、敵の銃聲がやゝ鈍りかけた時である。

味方の陣の背後にあたつて、突如異樣な叫び聲が起つた。

叫びは、一人の支那農婦の口から發せられてゐた。而も、まだ彈道の絕えない棉花畑の方へ向つて、火のやうに、何か喚き續けながら、つき進んでゆくのだ。

『馬鹿！ 危いッ！』

氣がついて、兵が一齊に叱制の聲を放つた、

血行とふる血

病毒や酒・煙草の毒で濁つた血液を綺麗にして血行を調へるふる血療法

清淨であるべき血液が濁り、古醫學で云ふ『ふる血』となり血行を妨げると、頭重、耳鳴、肩凝り、便秘、吹出物等に惱まされますが、斯う云ふ方々が**フルチ**錠を服用すれば、毒のある濁つた血液、つまり『ふる血』が氣持よくとれ、血行は良くなつて、前述のやうな病苦は忘れ、迚も大夫になる事が出來ます。

藥價は三圓・五圓・十圓で全國の有名藥店にあります。

血行障害にフルチ錠

が、女は耳もかさず、聞えても解し得よう筈もなく、只何者かに憑かれたやうな異常さで、前面を見つめた儘、氣狂ひのやうになつて喚き叫んでゆく。

その間も、彈丸は絶えず宙を縫つて、唸り飛んでゐる。が、惧れもせず――否、惧れ怯むより、もつと怖るべき事實に直面しつゝ、驀馳に進まんとする農婦の姿である。

子にはぐれたのだ！

はぐれた子供が、いつか前線へ迷ひ出て了つたのだ！

見れば、まだ五つか六つ――その無心な後姿。

彈丸に怖える事も知らず、子は人氣のない我が家の方へと向つて、おぼつかない足どりでよち／＼と歩いてゆく。

家に近づく事は、敵の集中射撃の的に向つてゆくのも同じことだ。

（危いッ！）

母親は必死であつた。

全身も凝血する思ひで、倚も追ひ縋らんとした時、その前を遮つて、一人の兵が、いきなり脱兎の如く駈け拔けざまに子のあとを追つた。

危地に曝された我が子を救はんとする母よりも早く――默視得ずして、同じ危地に身を挺す皇國の一兵。

ああ、これはまた、あらゆる感情と、國境とを踏み越えた魂と魂の十字砲火だ！

ダダダダ！

と不意にまた射ち出す敵の機銃。

前のめりになつた儘、つッ走る兵の姿。

一度、何かに蹴躓いて激しく轉んだ。

ダダダダ！

と又もや機銃の響き。

人々は息をつめた。

兵はすぐ起き上つて、又走る。

吻とした瞬間の繼續。

刻一刻近づいてゆく姿。

ひた走りに、二三十米も走り續けて、兵はつひに颯とばかりに、子を抱きかゝへた。

期せずして、

『萬歳！』

が口に出た。

子を横抱きにした儘、兵は再び地を蹴つて引返して來る。

祈る瞬時の間の長さ――。

やがて、見事に安全な地點まで戻つて來た兵はと見れば、藤村二等兵である。

……全神經を使つたあとの、遉に疲れきつた顔であつた。

その顔を前に、喚いて叫んで狂喜しながら、思はず土下座をして伏し拜む、子の母親。

泪を流して幾度も叩頭する、その母親の手へ、抱へて來た子を完全に引渡すと、瞬間吻とした安堵の色が歪げたやうな破顔となつて浮んだと見えたが、やがて二三歩あるき出してから、藤村二等兵は、ぱつたり仆れた。

『おい！　どうした！』

兵が遽かに駈け寄つていつた。

一瞥みて、愕！　とした。

胸に滲む鮮血の色……。

……いつの間にか射たれてゐたのだ。

射たれても倚、氣丈に踏みこらへて、子を抱へた儘、必死に此處まで戻つて來たのだ。

疲れきつた顔、と思つた時はもう……。

『おい藤村！　しつかりしろ！』

耳へ口をあてゝ、はげしく二三度呼びかけた。

『………』
もう、應へはなかつた。
破顔つた時が、
天皇陛下萬歲――
であつたのか……。
じつと見つめた儘、一人の兵が、
『畜生……!』
と思はず齒をくひしばつた。

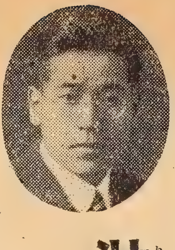
×

……(伊勢で名高き)を唄つた、かの、藤村二等兵は、かくて遂に、義俠の爲に仆れ、

名譽の戰死をとげて了つたのである。
戰友の話を聽いて、
『胸を打たれたぜ。』
と云ひ、俺に出來れば浪花節にしたいと云つた藤村二等兵は、偶然にして亦、あの時の言葉の如く、胸を射たれて了つたのだ。
が、その顏には、今でも尙、
〽伊勢で名高き青砥山……
と張りあげて唄つた時の、おほらかな表情が、彫まれたやうに浮びあがつてゐた……。

海ゆかば

激戰、實に二時間餘――。
軍の後方から襲ひ來つた我が空軍の、猛烈な低空掃射と投爆とに力を協せて、三千の敵を遂に擊退。
藤村二等兵の弔ひ合戰を完全に果して、敗走する敵を追ひつゝ更に前進十五粁。
北部山嶽に據つて、新たに陣を構へた我が前線部隊であつた。
平野は盡きて、路はいよ〳〵嶮しいのであ



淋病で苦しむな 藥尿で治療する新發見

◇……こんど、**セスコール**の『**小便療法**』と云ふ、世にも珍らしい小便を藥尿に變化して殺菌撲滅する新療法が發見されて驚異の中心となつてゐる。**セスコール**は今迄全く經驗のない程の強烈な然も深達殺菌性の藥力が小便に混化して浸透し、淋菌を**ドシ〳〵**排出して自然的に洗滌して吳れるため**ヒト**、小便每に**スツキリ**樂になり體內の淋毒を掃蕩し痛みを解消しますから、痛みに惱む急性の人は勿論、五年十年の**コヂ**れた惡性淋病も婦人淋疾(消渴)で普通の婦人病の手當では何等の效なく永年お惱みの方でも、この珍しい藥效には全く夢の樣だと狂喜した禮狀や感謝狀が每日續々と來てゐます。この絕對に副作用のない、然も珍らしい強烈な浸透殺菌と最も優秀な利尿排毒作用のある『**小便療法**』で深部病巢の一菌まで掃蕩し芯から治癒に導くため、この藥丈けは必ず一度試して戴き度い。

『小便療法』のセスコールは近代人唯一の治淋藥として最近素晴らしい大好評です。內地は勿論、遠く南洋、アメリカ方面にも進出して續々注文が來て、その驚異の藥効には等しく讃嘆されて居ります。他藥で根治出來ず慢性に移行してあきらめて居らるゝ方でも、最後の御手當として一度はお試し下さい。御希望の方は講談社代理部(振替東京六六二九番)へ御申込下さい。藥價は四圓。七圓、重症德用十二圓の三種です。送料は內地二十錢海外殖民地四十五錢加算願ひます。尙急送又は秘密匿名を要する方は、本舖、天地堂藥院(振替東京二三五五番)へ直接御申込を願ひます。ハガキで申込めば代金引換十錢增しでもお送り致します。

附記

この優秀な治淋藥を試し度い方はハガキでスグ「富士」で見た試藥送れと申込次第、立派に淋病を征服出來る小便療法の說明書や養生法と手當法を書いた「全快の秘訣」の美本を添へて良藥を急送して差上ます。因に申込先は

東京市瀧野川區
西ケ原町五五〇 **天地堂藥院**
電話王子二五六一番

る。

故國を離れて幾山河——あゝ想へば、いかにながい月日と遠い路とを踏み越え來つたことか。

『幾山河』と云ふ文字をその儘、形の上に踏み示して、幾多の敵を撃ち破つて來た部隊である。

月の露營で、浪曲を吟じた夜のことも、今は遠い昔の夢のやうに想はれる。

此處まで來ると、最早、慰問袋も屆かない最前線なのだ。

兵は、誰一人、生還を期してはゐない。

……さうして、今宵もまた名月であつた。

『あれ、日本で見る月と同じかなア……』

と呟いた、藤村二等兵の言葉を、そゞろに想ひ出させるやうな月だつた。

山嶽の夜氣は冷えて、此處はすでに虫も啼かない。

×

鬼策神謀、陣門を抜く、
笑ふ他の胡敵、旗を捲いて奔る
何如精練人兼レ器、
日本刀兮、日本魂——

突如、朗々として、部隊長の口から、一篇の詩吟が吟ひ出された。

折から、月は中天に懸つて、遮るべき雲もない。

……兵は皆、寂として耳を傾けてゐた。

その胸を去來する想ひや、いかに……。

——部隊長の詩吟が終ると、暫くして何處かで、低く自我偈を唱へる聲が聞えて來た。

不自惜身命
一心欲見佛
得入無上道……

節まはしの可笑しさはあつても、誰ひとり笑ふ者はなかつた。

……やがて展かれるべき、最後の火蓋を前にして、それ〴〵の想ひの底を、詩に、自我偈に托してゐるのであつた。

×

二時間ばかり前に、選ばれて斥候に立つた三木一等兵、及び他の一名が、やがて豫定時間内に、月を浴びて歸つて來た。

『御苦勞——』

部隊長（大日方傳）の言々血を吐く思ひの言葉を、一同は肅然として聞くのだつた

部隊長の勢ひの一語を前に、屹立した儘、『報告！』と云つた三木一等兵の聲音には、何かしら異常な響きが、含まれてゐた。
『北方山嶽、二粁の地點に駐屯せる敵正規兵約五百は本、日没より徐々に前進を開始。又、本隊の前面、約一千二百粁の地點に待機中の敗殘兵、及び東北方約二粁の地點に據る、共產兵を混へた正規兵、一千餘を發見せり——』
『うむ——』
『敵は、敗殘兵の報告により、我が部隊の兵員尠きをみて、直ちに包圍の陣形をとり、東、北、西三方より、一擧に反擊せんとするもの丶如き情況であります！——報告終り！』

十字砲火を冒して三木は味方の急を友軍に傳へることが出來た（向つて左は三井秀男の三木）

『よし——』
異常な報告を耳に、部隊長は只簡單に肯いておいて、
『押川准尉！』
と呼んだ。
『全員、直ちに集合！』

『は！——直ちに集合ッ！』
『集合！』
『集合！』
稻穂を戰ぐ風の如く、命令は忽ち、部隊の全員へ傳はつていつた。
山嶽の傾斜面へ、兵はそれ〴〵の位置の高低を示した儘、敏速に整列した。
『……』
その列を、一しきり、ずつと見渡しながら、部隊長は暫し深い感慨と共に默乎としてゐたが、その口から、やがて力強い第一聲が放たれた。
『お前達は、これ迄實によく盡してくれた。部隊長として、自分は感謝に堪へない。
愈々、これから最後の出陣をする！
我が部隊、上陸以來の一大決戰に移らんとするのである。覺悟は無論、出來てゐるであらう。
兼て申渡してあるやうに、お前達は所謂、英雄でもなければ、又、偉人でもない。自分同樣、一個の平凡なる日本人である！
が——この、平凡な日本人こそ、一朝、事に當つて有爲な大責任を果し得るのだ！

天皇陛下の御爲――大日本帝國のため、身を挺して盡すのは、この時である！　終り！』

寂として聽き入つてゐる兵を前に、一語一語、力をこめて云ひきると、部隊長は直ちに、

『下士官以上、集合！』

と宣した。

『砂田中尉は、第一、第二分隊をもつて、敵の右翼に當る！

押川准尉は、第三、第四分隊をもつて、敵の左翼を衝く！

――自分は、第五、第六分隊をもつて、中央に當る。終り！』

毅然たる聲音であつた。

げに、日本刀兮、日本魂！

×

前面の、對嶽地點からは、敵の射ち出す砲聲がもう既に聞えはじめてゐる。

『殲滅せしめずんば、生きて再び還らじ！』

と悲壯な決意は、やがて そのまゝ聲となつて、

『海ゆかば……』

期せずして、壯重な歌聲が、將兵の口を衝いて迸り出た。

みづく屍、山ゆかば
草むす屍……

聲は合さつて、山嶺の大氣を顫はせるのである。

大君の
邊にこそ死なめ
かへりみはせじ――。

……ともに、聲を合せて唱つてゐる、三木一等兵の手には、一本の稻穗がしつかりと握られてゐた。

『妹よ――』

越えて、浪路遥かな幾山河を――手紙は未だ、ゆき屆かずとも、心は頓に、故國の土へ奔つて呼びかけつゝ、

（稻を護れよ！　この兄は、捷たずば斷じて還らぬぞ！）

と、固い、深い決意の言葉を送つてゐるのであつた。

最後の傳令

殷々として、山嶺を搖がすばかりな砲聲。

百の鐵鋲を、一時に打ち出したやうな機銃の音。

彼我の間に展かれた、水色の虚空を、閃光の如く炸裂して飛び交ふ十字砲火。

……月はもう、よつぽど傾いてゐた。

山嶽の襞を這ひつゝ機を狙つて徐々に反撃せんとしてゐる敵を三方に迎へて、激戰すで

『兒玉將軍』

陸軍大將
明倫會總裁　田中國重

兒玉將軍は、明治の武將として傑出してゐたといふよりも、世界的名將として傳へらるべき偉人だと思つてゐる。然るにもかゝはらず、その人物、功績が、あまり世間に知られてゐないのは、よい傳記が出てゐなかつた故で、かねがね私は遺憾に思つてゐた折柄、『富士』掲載の木村君の傳記小說『兒玉將軍』を讀んで非常に嬉しく思つた。

『兒玉將軍』は大變良く書いてある。しかも正確な史實に據り、未だ世に知られぬ兒玉大將の一面を書いてゐる處などは、日露戰爭の前から、大將の部下として親しく接し、戰

に一時間。

『部隊長殿!』

闇の中に、押川准尉の聲がした。

『彈藥が殘り尠くなりました!』

『うむ。——打方待て!』

『は!』

『一發も無駄に費つては不可ん! 敵を、引寄せておいて、一齊に射つ! 暫く待機!』

部隊長の聲が、闇に裂帛の響きをつたへて間もなく、同じ聲が、

『高橋伍長!』

と云つた。

『傳令!——大川部隊は、北部山嶽戰に於て、敵二千の包圍陣に對し、目下應戰中。彈藥缺乏に瀕せり。終り!』

悲壯な一語を放つと部隊長は、殘り尠くなつた部下を集めた。

『我々は、愈々最後の突擊に移る! 敵、二千に對し、味方は僅に百名足らず——再び手を携へて、生還は期すべくもない! 今こそ我々は、眞に上天皇陛下に對し奉り、最後の御奉公を致す時期に到達したんである! 東洋平和の礎とならんとするのである! 覺悟はい〻か!』

『は!』

『數名は直ちにこれより、前面の敵機關銃座に迫り、手榴彈を以て擊破する!』

『自分をやつて下さい!』

『自分もやらして下さい!』

音の、響きに應ずるが如く、勇ましい混聲が忽ち此處彼處に沸き起つた。

『指名をする。砂田!』

『はい!』

『松本!』

『はい!』

『藤田!』

『はい!』

『やつてくれ! 殘餘の者は、掩護射擊!』

——握り合つた手と手が、離れた時は既に兵等は果敢な行動に移りかけてゐた。

×

兵員と共に、次第に缺乏の度を速めて來た彈藥である。

戰死兵のそれを以て、應急に補充分配するに至つた頃は、部隊長も既に、左腕へ一彈を受けてゐた。

『部隊長殿!』

はつと氣がついて駈け寄る兵へ、

『大丈夫だ!』と答へておいて、

『三木一等兵!』

と部隊長は呼びかけた。

手中は參謀として、いろ〳〵指圖を受けた經驗を持つ私にとつては、特に感激ぶかく讀んだ。中でも二〇三高地攻略のあたりなどは涙なしには讀めぬ。更に又、遺書を用意して總參謀長として戰場に臨み、影武者たるの位置に甘んじてゐた大將の心境、そして露軍を擊破して祖國を泰山の安きに置いた大功績に至つては、全國民が銘記して永く忘るべからざるものである。

その意味に於て木村君の執筆の『兒玉將軍』は、日本人全部に讀んで貰ひたい。しかも、頗る平易に感激ぶかく述べてゐるあたり、その勞は感謝に値するところである。

私は、かくの如き小說こそ、かうした時局下の一般國民にぜひ讀んで貰ひたい。特に銃後の青少年諸君には、必讀の好讀物として推薦するのである。

『最後の傳令！』

『部隊長殿！』

『三木！　お前に、部隊本部へ傳令を命ずる！』

『部隊長殿！　自分は、あくまで此處に踏みとゞまつて、部隊長殿と生死を共にしたい考へであります！』

『いかん！　お前にはもつと重大な任務がある！――傳令！　大川部隊は、北部山嶽戰に於て、敵約二千に包圍され全滅せんとす』

『……………』

『行つて來い！』

嚴たる命令の前に、彼は思はず、

『復誦！』と唱へた。

『大川部隊は、北部山嶽戰に於て、敵約二千に包圍され……全……全滅……せんとす！　終り……』

激動に顫へた聲へ、

『うむ！』と重く肯いた。

『立派に使命を果してくれ！　弔合戰を頼むぞ！　この暇に、馬ですぐ行け。――では、左樣なら！』

始めて聞く、悲壯な『左樣なら』であつた。

應へるべきを知らない彼であつた。

三木一等兵は只固く唇を噛んだ。

『氣をつけてゆけよ。』

『は……』

『部隊本部の、中村部隊長殿に、大川が宜しく申したと傳へてくれ――』

『部隊長殿！』

短い一刻を、思はずじつと見つめた。

『では……行つて參ります！』

――闇に炸裂する十字砲火の中を、軍馬と共に、矢のやうに下つてゆく兵の後姿を、部隊長の眸は、じつといつまでも見まもつてゐた。

×

……いつか、黄ばんだ明星が、山の端に瞬きはじめてゐた。

やがて、夜が明ける。

拂曉を期して、最後の突撃に移らんとしてゐる時であつた。――その山の端の、遙か彼方に、明星ほどの機影がぽつんと見えたのである。

敵か？　味方か？

凝乎として見まもる視野に、機影は次第に近まつて、爆音と共に氣がつけば――

一機……二機……また三機。

おゝ！――見よ！　明けやらぬ空の彼方を、翼を連ねて堂々と迫つて來る機影を仰げば、仄かに映る日の丸の赤だ！

死線を突破して遂に部隊本部まで行き着いたか――それは三木一等兵の傳令に應へて、直ちに出動した日本空軍の、神速隼の如き姿であつたのだ！

期せずして沸きあがる『萬歲』の聲！

恰もその聲に應へるかに肯て、急降下と共に、猛然荒鷲の如く、敵陣目がけて浴せかける機銃の掃射！

狼狽、雪崩をうつて潰走する二千の敵。

その敵の退路を扼して、一擧殲滅を期しつつ、果敢な低空掃射を續ける機銃の音は、明けやらぬ山嶺に、百雷の響きをつたへて尚、暫しは鳴りも止まなかつたのである。

……完……

十二月號も素晴らしい
讀切傑作ぞろひ號です

（四三九頁よりつづく）

床『へエ。』
二『臺詞がいへるんで御座います。』
床『臺詞がいへる、臺詞がいへれば、大したもんだ。どう云ふ臺詞だ。』
二『私と三人きりしか舞臺へ出ないんで。』
床『ア、三人きりで、お前臺詞をいふのか。それは大したもんだね。さうかね。どんな臺詞だい。』
二『へエ、言つても、お分りにならないですよ。』
床『エ、言つても分らないなんて、嘗めたことを云ふない。俺だつて芝居で飯を食つてゐるんぢやアねえか。腰元の臺詞が分らないといふ事があるかい。』
二『いや、分りません。』
床『言つて見なよ。』
二『さうですか、それでは言ひますけれども、きやいなう……』
床『きやいなう……成程分らねえな。金ちやん知つて居るかい。きやいなうといふのを。』
金『知らねえ。』
床『どう云ふ所できやいなうといふんだ。』
二『何で御座います、つまり私等腰元三人がお庭に出て居りまして、そこで表の木戸の所へ乞食が來るんで御座います。一番先の腰元が、むさくるしい、かういひます。』
床『フム〳〵。』
二『二番目の腰元がトットと外へ行……までいひます。すると、三番目の私が、きやいなう。』
床『成程きやいなうか。連續的でなくちやア分らないや、きやいなうか、まアしつかりやつて來ねえ。』
二『有難う存じます。ぢやア行つて來ますから。』
床『阿父さんや阿母さんが見てゐるんだ。なるたけ臺詞を間違えねえやうにしな。尤もきやいなうだけだけれども、しつかりやんな、……きやいなうか、ハヽヽ、あれでも役者だからなア。きやい……何をツ、今あの人の鬘の周圍に詰めた新聞の中に卷莨の吸殼がはいつてゐて、火の點いたまゝだつて、そりやいけないよ。しやうがねえな、今の腰元をなにしてくれ。おーい、一寸々々……もし〳〵今そこで腰元に會ひは致しませんでしたか。』
×『腰元……會ひました。何だか知らんけれども大きな鬘を冠つてゐましたよ。』
床『その腰元をちよいと呼んで下さいな……へエ、もう舞臺へ出てしまひましたか。ちよいと舞臺を見て下さい。三人の腰元に何か異常はありませんでしたか。』
×『ちよつと何です、鬘の鬢の下から黄色い煙が……。』
床『そりや大變だ。さア此方から消火器消火器。』
樂屋中大騷ぎを始めました。こちらは腰元の三人、庭へ出て居ると、そのうちに乞食がやつて來た。
一番最初の腰元が、
甲『むさくるしい……。』
二番目のが、
乙『トットと外へ行……。』
といつたんですが、もうこの時鬘の中の火の方がだん〳〵大きくなつた。
二『アッ熱々……ウーム。』
乙『しやうがねえな。どうしたんだい……。』
一番目の腰元が『むさくるしい。』二番目のが『トットと外へ行……。』と云つてゐるうちに、もう火が廻つて來たから、たうとう耐へきれなくて、
二『あついなう。』

（をはり）

宮本武藏 空の巻
吉川英治

天下熱狂の名著 第四篇いよ〳〵發賣

新將軍秀忠が江戸に坐つてから、上方の文化は新開地の江戸へ〳〵と移動し、所有職の人間が續々江戸に入つてゆく、その中に武藏の戀人お通も、佐々木小次郎も武藏を戀ひつゝ自墮落の身になつてゆく妖麗の美女朱實も、武藏を仇敵と狙ふお杉婆もそれ〴〵の目的を持ち武藏を中心に、さま〴〵の事件を引き起しながら、江戸へ江戸へ……氣弱さからずる〳〵と惡に墮ちてゆく武藏の幼な友達本位田又八に又もや無法にもさらはれて苦しむお通、何を目論むか、得態の知れぬ怪盜奈良井の大藏も出現、後年武藏の後繼者となる宮本伊織も、山中の一軒屋で、一癖ある怪童として武藏に發見され弟子となる。千變萬化の面白さ、就中最も描寫の妙を極め讀者をして息をひそめしむるのは、篇中に於ける數々の眞劍勝負の大場面である。風雲の志を抱いて江戸入をした驕慢の劍士岩柳佐々木小次郎が、軍師小幡勘兵衛一門相手の、目を覆ふばかり悽慘な何回かの眞劍勝負、木曾山中に恐ろしい程氣丈な母と百姓をし乍ら棒の修行を續ける、夢想權之助と武藏の大試合、信州路にて野武士の大群と何回かの大爭鬪をする武藏の玄妙なる太刀先。

この二名著
戰時下の
全國民に捧ぐ

あゝ此の面白さはどうであらう！

しかもこの面白さはたゞの面白さではない。劍の道の爲には如何なる苦難も恐れぬ不撓の精神、火の如き熱情をもつて進みゆく武藏の姿、この驚くべき精神力こそ、大いなる困難を征服して進まねばならぬ非常時渦中にある我等國民が、大いに學ばねばならぬ所、あへて同胞に一讀をお奬めする所以である。

⦿箱入美本 一圓八十錢
送料内地十四錢・臺灣滿洲・朝鮮・支那・南洋・樺太十八錢

劍道の爲に血みどろな苦鬪を續ける宮本武藏。明治維新の大立者、我等の西郷隆盛、武藏の熱情と隆盛の大きさ、ここに幾多の訓へが含まれてゐる。

大日本雄辯會講談社
（振替東京二九三〇）

武者小路實篤
西郷隆盛

讀者は此の書に生きてゐる大南洲を見る！

特に人物傳に於いて文壇の異彩と定評のある武者小路氏が今こそ大西郷の精神を、再認識すべき時なりと、苦心汗にまみれ遂に完成せる大傳記、是ぞ非常時日本に贈る大金字塔！

明治維新と言ふものは元より一人の力で出來たものでない。時勢の力であり何百何千何萬の人の力の集合によつて出來上つたものである。しかしその時西郷隆盛が一人居なかつたら我等の維新に對する感じは餘程ちがつてゐたらう。西郷さん、この言葉は實に多くの親しみと尊敬とをもつてゐる。萬人に好かれ、萬人に尊敬される大南洲、この作に現はれる彼の行爲、彼の言葉は、いよ〳〵彼の巨大さを讀者に感ぜしめる。今の世の中にこそ彼の如き大人物が、ぜひ必要なのだ。この書を讀んだ人は、誰もがあの大きな、ぎよろりとした眼が、祖國を何時までも見守つてゐる事を感ずるであらう。更に自分までも大きくなり、胸のからりと晴れてくるのを感ずるであらう。（全國書店にあり）

定價一圓八十錢

大島伯鶴

石井滴水畫

戰さの留守番

天正十二年六月二日、尾州小牧山の合戰、この合戰は羽柴筑前守秀吉に對して、徳川家康が神戸信孝並に北畠信雄の賴みをうけて義に依つて戰ひを起したので、秀吉方は十二萬五千の大軍、之に對して徳川勢僅かに八千の軍勢、人數は少なくても勇氣は百倍でございます。

こゝに三州西尾の城主で、形原の松平紀伊頭といふ大名――徳川には七松平といつて松平の稱號を賜つた家が七つございます。その中の一つ、形原の松平といはれた松平紀伊頭。此度の戰ひに家康公に從つて小牧山へ出陣をするに就て、その前日立振舞の酒宴。スルと間の襖を開いて立出でましたのは御子息の又七郎、當年十六才、

出世講談

一萬石の槍

又『お父上、明日は小牧山へ御出陣ださうでございますが。』

紀『さうぢや。』

又『どうかこの又七郎を御供仰せ付け下さるやうに願ひます。』

紀『成らぬ、其方は留守居をいたせ。』

又『それでも私は是非父上の御供をいたして、初陣の功名をいたしたう存じます。』

まだ子供だ〳〵と思つてゐたら、もう初陣の功名を望むか、殊勝な奴だと思召したが、そこは親子の情、焼野の雉子夜の鶴、親として子を思はぬ者はございませぬ。戰場へ連れて行つて、討死などさせるも不愍と思ひまするから、

紀『イヤ成らぬ、志は殊勝であるが、此度の相手は羽柴筑前守秀吉といふ剛敵、小さな合戰とは違ふ、小人數を以て羽柴の大軍に當る容易ならざる戰ひ、まだ若年の其方、戰場へは早い、殊に初陣、場所馴れぬ者のまゐるべき戰ひでない、此度は見合せるやういたせ。』

又『それはお父上の御言葉とも覺えませぬ、まだ若年であるから早いとは何事でございます、甲州の淺井藤藏と申す者は、十三才にして碓氷峠に一番槍をいたしたと聞いて居ります、又織田の家來坂井久藏は十二才で建部源八と申す者を討取つたといふことでございます、然るに手前は本年十六才、まだ早いとは何事でございます。』

紀『理窟を申すな、人は人、其方は其方、父が成らぬと申したら成らぬ。』

又『それでは手前は十六才でも戰場へ出て働きが出來ないと仰しやいますか、前田利家犬千代の昔、十五才の初陣に、敵の首を數多討取り、一々首札を附けて置いたといふことを承りました、又佐々木盛綱の悴小三郎は八才にして初陣をいたし、佐々木高綱の悴小四郎は七才にして初陣をいたし、敵を欺く爲めに切腹をいたしたではございませぬか。』

紀『よく其方は左樣なことを存じてをるな。』

又『ハイ、この間近江源氏先陣館といふ芝居を見ました。』

紀『芝居の話しなどをいたすな。』

又『又城下の薪屋の子供と豆腐屋の子供は、共に五才にして組打をしたといふことでございます。』

紀『何所の合戰へ出た。』

又『表で喧嘩をして居りました。』

紀『子供の喧嘩などはどうでも宜い、成らぬと申せば成らぬ。』

又『只成らぬでは承服いたし兼ねます、戰場のお供が出來ないと、朋輩の手前肩身が狹うございます、どうかお供を願ひます。』紀伊頭顏色を變へて、

紀『默れッ、父が考へがあつて成らぬといふに、親の申すことを背くか不孝者め、成らぬと申せば成らぬのだ、家にゐて、留守居をしながら書物でも讀んで居れ。』

又『本は皆んな讀んでしまひました、雜誌も今月號の富士などは、廣告まで讀んでしまひました。』そんなことはいはなかつたでせうが――どうしても供を許しませぬから、又七郎不平たら〳〵自分の部屋へ歸つて行く。

スルと間もなく緣側の所へ出て來たのは、いつも戰場へ槍持としてお供をする僕の作藏、

作『旦那樣に伺ひます。』

紀『何ぢや作藏。』

作『いつも私は戰爭のある度に、槍を持つてお供をいたしましたのに、どうして今度の戰ひには手前に槍持を仰せ附けられないのでございます。』

紀『イヤ仔細あつて今度の戰は其方には留守居をさせ、槍持は八藏に申附けた。』

作『へエー、その仔細といふのは、どういふことでございます。』

紀『其方は年を老つて居るから留守居をさせるのぢや、少し屋敷にゐて樂をしたらよからう。』

作『これはどうも旦那樣の御言葉とも存じませぬ、戰爭があるから、供をしろといふのがあたりまへ、又私共も戰爭のあるのを待つて居ります、いざ戰場といふ時、破れたりとも鎧を投げかけ、銹びたりと雖も槍一本を手にして、下郎は下郎並の功名を現はしたいと、日頃から神や佛に願を掛けて居ります、然るに戰場の供は成らぬ、留守をして樂をしろとは何事でございます、御主人が戰爭へ出て、家來が家にゐて樂をしてゐられますか。』

紀『作藏、其方の申すところは尤もであるが、何しろ年を老つてをるから……』

作『旦那樣年を老つてゐると仰しやいま

すが、年を老つては戰場へ出られないのでございますか、齋藤別當實盛は、白髮を染めて、戰場へ出たといふことではございませぬか、又武內宿禰は百才餘りの年で白髮頭を振立つて、三韓征伐に參つたといふ例もございます、三浦大介は百六才で……』

紀『コレ／＼さう爺さんばかり列べるな。』

作『爺を列べる譯ではございませぬが、年を老つたから役に立たないとは怪しからぬことでございます、白髮だからいけないと仰しやるなら、これから床屋へ行つて、白髮染めをやつてまゐります。』そんなことはいはないでせうが――涙を流して頼みましたが、紀伊頭殿お肯容れがない。

紀『成らぬ、其方は留守居をいたせと申すに分らぬか。』

作『へエ、それではどうでもお供は叶ひませぬか。』紀『成らぬ。』

作『オヤ／＼泣く子と地頭には勝たれない、こつちが家來で向ふが主人、主人ほど我儘なものはない。』

紀『ナニッ……』

作『イエこつちのことでございます。』

ガッカリして作藏、ブツ／＼いひながら引返して行く。

冨士十二月號の大呼物
◎義士讀物大特輯
▲中山安兵衞 高田馬場實記 長谷川伸
▲內藏助の最期 勇怯切腹鑑 森田草平
▲槍一筋 前原伊助 一龍齋貞山

小牧山の合戰

その翌日になつて松平紀伊頭殿、家康公の御供をして濱松の城を出發、小牧山へと進軍をいたします。こちらは羽柴筑前守秀吉は、十二萬五千の大軍を率ゐて上方を發足に及び、美濃の大垣を根據とし、先陣には池田勝入齋信輝、一萬の兵を率ゐて犬山に向ひましたが、十二萬五千の大軍に對して、徳川家康は八千の兵、十分の一にも足りない兵を以て當らうといふのですから、中々の苦戰でございま

す。けれども徳川の旗下には井伊、本多、酒井、榊原の四天王を初め屈指の勇將豪傑が揃つて居りますから、いくら小人數でも少しも恐るゝところはございませぬ。本陣中央には金五本骨の馬章輝き渡り、丸に三葵の紋所打つたる旗數旒を飜し、泰山府君と書いたる大幟、八幡大武神の大幟半を押立て、正々堂々と小牧山に陣を折敷きました。然るに徳川勢僅かに八千の小人數と知つたる池田勝入齋信輝、我が兵は一萬あり、然らば秀吉が手を下すまでもない、我が手に依つて小牧山を乘取ること何の物かは、大垣の本營よりの沙汰はなけれども、見事拔駈をして、家康の首を討取り、第一番の功名にせんと、犬山城を出發に及んだる池田の同勢、眞先なる方にヒラリ〳〵と閃めき渡つて見えたる旗の手は、白地に黑く鎧蝶の紋付いたる旗二旒天空に飜り、同じく金を以て鎧蝶三方見込、猩々緋三段馬簾の馬章を押立て、馬章の下に立つたる池田勝入齋信輝、その日の扮裝見てあれば、金小札なしたる海老殼胴の大鎧を草摺長に一着なし同じ毛糸五枚綴突盛の兜に鎧蝶の前立打つたるを被り、青なる駒には金覆輪の鞍置いて、ゆらりがつきと打跨がり、金切割の采配取つて『者共押せよ』と下知すれば、ドーン、ドヽンドン〳〵ドンドーンと押太鼓を打ち鳴したることにて、鎧の袖を組合せ、兜の星を輝かし、えい〳〵えい〳〵と曳々聲を立つたることにて、揉みに揉んで小牧村へと到着なし、見る〳〵内に小牧村の村落に火を放つたから、焰炎々と天に沖し、これに氣を得たる池田の同勢、小牧山へと攻登つたり。けれども家康は、如何なることありとも、本陣より沙汰なき内は、拔駈功名、又は出陣する勿れ、若し軍令を破る者あらば、嚴罰に處する旨を、諸軍勢へ傳へましたから、徳川勢少しも騷がず、泰然として鳴を鎭めて居ります。

處が先陣に居りました井伊萬千代直政二十五才の初陣――二十五才で初陣といふのは少し遲い方ですが、是れも家康公御寵愛深き萬千代、これまでの戰爭にどうしても御供をお許しがない、此度は萬千代よりの强ての願より、供を許されましたが、家康としては討死などさせたくないといふ考へが一ぱいでございます。けれども當人は二十五才の青年、意氣潑剌たるものがございます。この池田勝入齋の拔駈を見ると默つてゐられない、『己れ傍若無人の池田の振舞、最早これまでなり、お叱りがあらばあれ、何條坐視傍觀が出來ようぞ、ソレ打てッ打てーッ。』といふ號令、之に應じて二百餘挺の鐵砲筒口揃へてドヽヽヽと擊出したから、パッと立つ白煙。『押せや者共、突けや戰へ。』と萬千代必死となつて下知をすれば、井伊の赤備、八百の軍勢、列を正して進んだ有様は、宛然山つなみの寄せ來るかと怪しむばかり。いかに池田の同勢大軍なればとて、井伊の同勢に敵する能はず、ドヽヽ、ドッと崩れ渡つて見えたる時『ソレ敵は逃げるぞ、追駈けて討

つて取れ。』と無二無三に追駈けて行く。所がこの戰爭といふものは、追討ちをするのでも度のあるもので、追止の場といつて、もうこゝらで追討ちを見合すといふ場所がなければならないものです。けれども初陣ではあり、年の若い井伊萬千代、勢ひに乘つてこの追止の場を越えて追過ぎました。これを見た池田勝入齋、『井伊直政、追止の場を知らぬものと見える、いで彼を討取るは此の時なり、四方よりおッ取卷いて討取れ。』と采配を取つて下知をすれば、今まで逃げてゐた池田勢、潮の返す如き勢ひを以て引返し來り、ドッと喚いて突ッかゝる。今まで散散追駈けて來て、疲れたところへ引返されたから堪りませぬ、井伊の同勢散々になつて崩れ立つ。萬千代齒をガリ〳〵と嚙んで『ヤア言ひ甲斐なき者共の振舞かな、逃げるな止まれ。』と下知をなしつゝ馬を止め、

萬『ヤア〳〵遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて眼にも見候らへ、我れこそは徳川四天王の一人井伊萬千代直政二十五才の初陣なり、我れと思はん者あらばいで來つて勝負な決せよ。』と呼はり〳〵大薙刀を取直し、左手右手の嫌ひなく、或は右轉、或は左轉、八雙木の葉捲り猿臂の打掛け雲返し、飛鳥のさんまに小亂入、當るところの嫌ひなく、或は胴切り車斬り、眞向梨子割、唐竹割、奴豆腐に短冊形、賽の目かくやに千六本、羊羹肩に切山椒と、變な切り方があるもので、縱横無盡にバッタバタ〳〵敵軍を薙立て斬り倒して居りまするが、何分にも崩れ立つたる軍勢は盛返しやうもなく、井伊萬千代もこゝに討死なすかと相見えました。

　この時この有樣を、遙かに見て居りました本多平八郎忠勝、榊原小平太康政『ソレ井伊を討たすな、助けろ。』とあつて、風の如くにそのところへ駈け來りますると、平八郎は槍の名人、蜻蛉切りと名づけたる名代の槍をひねつて、群がる敵の中へ眞ッ平地に突いて入り、當るを幸ひ突いてははね上げ、突いてははね上げる有樣は宛然毘沙門天の荒出したるかと思ふやう、勢ひに乘つて既に池田の本陣へ突いて入らんとする樣子。之を見た池田勝入齋、敵はじとや思ひけん、兵を纏め退鉦を打鳴して、犬山を差して引揚げる。併し引揚げる時には、後殿といふものがなければなりませぬ。その後殿の役を承つたのが、池田のお婿さんで森武藏守長可といふ人がある。その武藏守が右の腕と恃んだ上方名代の剛將野呂助左衞門藤原清兼、之に五百の兵を與へて、徳川勢を喰止めさせることに相成りました。

　この野呂助左衞門は、上方名代の豪傑ばかりでなく、この人の持つたる太刀が次郎太刀、中身が五尺二寸五分、賤ケ嶽の戰ひで眞柄十郎左衞門の振つたのが太郎太刀、これは中身が五尺五寸五分あつたといふ、大變なものを昔の人は振つたものでございます。今遊就館にガラスの箱に收められてある服部半藏の持つた槍が

穂の長さが六尺一寸、人呼んで槍半藏といふ、昔の人は皆力があつたから、大きなものを持つて戰場へ出たものでございます。野呂助左衞門は五尺二寸五分の次郎太刀を振つて、寄せ來る徳川勢を斬拂つて、池田の後を追はせないやう、後殿の役を勤めて居ります。

おだてた出陣

こちらはお話し變つて、松平紀伊頭の一子又七郎、初陣の出陣も許されず、留守番をいひつけられて、屋敷へ殘ることになりましたが、不平で〳〵堪らない、自分の部屋で本を取出して、

又『大學朱熹章句、子程子の曰く、大學は孔氏の遺書にして初學徳に入るの門なり――』

と頻りに勉强をして居りますが、思ひ出すのは戰場のこと。

又『お隣りの彌太郎殿は、お父さまのお供をして出陣をした、それなのに家ではお父さまはお許しがなく留守番だ、情けない、戰さへ行きたいな――子曰く、而して――』

サーッ、サーッと庭を掃いてゐる箒の音、

作『あゝ本を讀んでゐるのは家の馬鹿旦那だな、何の爲めに本などを讀んでゐるのだ、呆れ返つて物がいへねえ馬鹿旦那だ。』

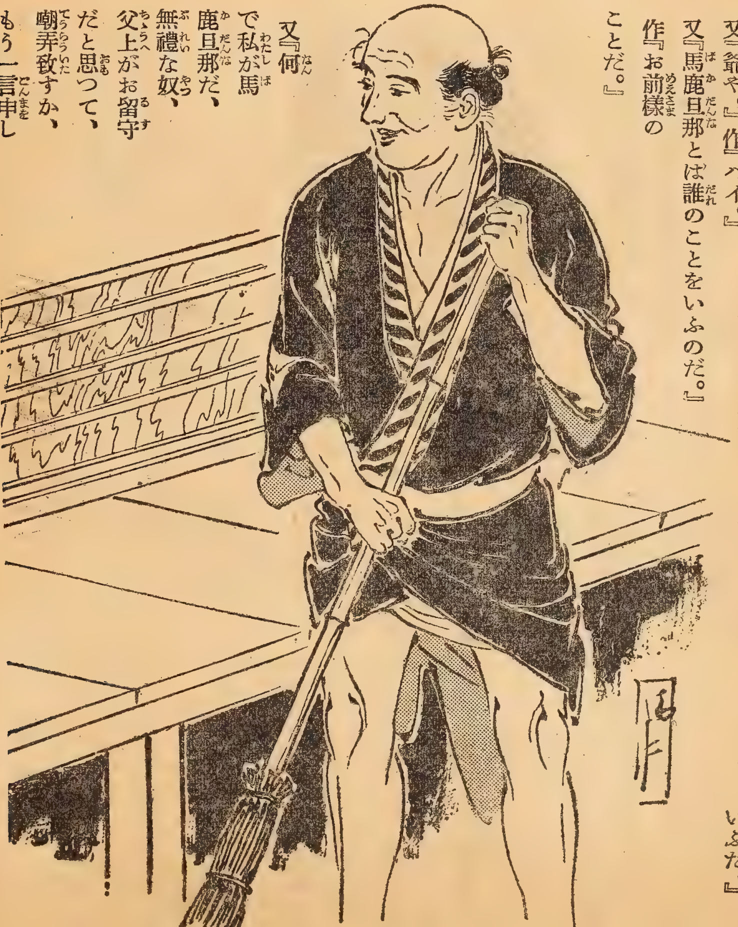
この聲が聞えたから又七郎、サラリと障子を開いて見ると槍持の作藏、

又『爺や。』作『ハイ。』

又『馬鹿旦那とは誰のことをいふのだ。』

作『お前樣のことだ。』

又『何で私が馬鹿旦那だ、無禮な奴、父上がお留守だと思つて、嘲弄致すか、もう一言申して見ろ、許さぬぞ。』



作『ヤア怒らつしたな、何もそんなに眞赤になつて怒ることはなかんべえ、馬鹿旦那といはれる行ひを、お前樣がしてござるからさういふだ。』

又『何が馬鹿旦那だ、それをいへ。』

作『ではお聞かせしませう、お前様は何の為めに本を勉強してござる、忠孝兩道は全からぬもの、忠ならんと欲せば孝の道を缺き、孝ならんと欲せば忠義の二字を失なふ、武士として私の道を捨て〻大なる忠を完うし、君の御馬前で命を鴻毛の輕きに比するのが武士の本分――といふことは私はよくは知らねえが書物にも書いてあるし、お前様もお父様から教へられてゐる筈だ、お前様知らねえことはなかんべえ。』

又『ウム知つてゐる。』

作『知つてござつたら、何が為めに風通しの宜い座敷で、子曰くと、火の玉ばかり食つてゐるだ、今度の戦ひをどう思ひなさる、徳川家康公が、北畠信雄、神戸信孝を助ける為めに、義兵を擧げて、豊臣の十二萬五千の大軍を相手に戦かふといふ、徳川家に取つては安危興廢に係はる大切の戦争でねえかね――お父さまは我子が可愛いから、敵に組敷かれて、首でも取られては可哀想だと思つて、留守番をいひつけなすつたか知んねえが、一人でも味方の多いのを恃みになさる徳川勢、もう十六にもなつて、安閑として三度の飯を食つて、本などを讀んでゐる場合でねえと思ふがどうだね、

私も今までいつも槍を持つて戦場のお供をしたのに、今度に限つて留守番、腹が立つてなんねえ、何でも戦場のお供をさせてくれろと願つたけれども、旦那様のお許しがないから、據ころなく留守番をしてゐるが、私はお前様と違つて家來の身だ、主人がいけないといへば、それに從ふより外仕方がねえが、お前様は息子だ、忠義の為めには親に不孝をしても仕方がありますめえ、どうだね、私のいふことは間違つてゐるかね。』

又『ウーム、それでは作藏、親に背いても、忠義の為めなら差支ないかな。』

作『誰が何といふものでございませう、どうだねお前樣、これから小牧山へ戰爭に行くかね。』

又『爺や、私を連れて行つてくれるか。』

作『あゝお出でになる了簡があるなら、お供をしますべえ。』

又『おゝ行かう。』

作『お出で遊ばされるか、それでこそ松平紀伊頭樣の若樣、お前樣は利口な方だ。』

又『上げたり下げたりするな――ではお母さまにお斷りをして……』

作『冗談いつてはいけねえ、お母樣に話しをしたら、叱られた上に止められるに違ひねえ、それより二人で内緒で出掛けますべえ――さう話しがきまつたら、私の部屋へお出でなせえまし、支度をしますから――あゝこれで漸く煽動が利いて戰場へ行くことが出來る。』

又『ナニ……』

作『イエナニ此方のことでございます。』

作藏思ひが通つたので、ニコ／＼笑ひながら又七郎を自分の部屋へ連れて來て、

作『ソレ若旦那樣、これを御覽なさいまし。』

と取出したのはボロ／＼になつてゐる古鎧

又『爺や、古い鎧だね。』

作『ハイ旦那樣が賣つて小遣にしろといつて下すつたのを、何かの役に立つだらうと思つて取つて置いたのでがす、今日これが役に立つとは思はなかつた、サアこれをお前樣着なさるが宜い。』

作藏が手傳つて古鎧を着せたが、いくら十六で身體が大きいといつても、大人の着る鎧、又七郎には大きうございます。見てゐた作藏ホロリと涙を流した。

又『爺や、何で泣くのだえ。』

作『ナンの、お前樣も形原の松平紀伊頭の若殿樣、もう十六だ、本來なら初陣の首途、緋縅の鎧に黃金造りの太刀を佩いて、大勢の家來を連れて、勇ましく出陣をすることの出來る御身分だのに、旦那樣のお許しのないばつかりに、拔駈けの出陣、こんな古い鎧を召して、爺と只二人で戰場へ行くなんて、情けねえことだと思ふと、つい涙が出て……』

又『爺や何をいふのだい、假令拔駈にしろ、鎧は古いのを着てゐても、戰場へ行つて、敵の大將でも討取れば、名を揚げることが出來る、何にも情けないことはない、私は嬉しいよ爺や、戰さの首途に涙は不吉だよ。』

作『ヤア若旦那樣、濟まねえ、先刻はお前樣を惡くいつた私にも似合はねえ、目出度い出陣の首途に、涙は不吉、惡うございました、敵の大將の首を取るとはよくいひなすつた、それでは行きますべえ。』

槍持の作藏は又七郎の手を引いて、人目を忍んで西尾の城を脫出でました。

笠寺の貰ひ飯

目的の地は尾州小牧山。何でも夜の明けるまでに戰場へ乘り着けるつもり、大急ぎに急いだが、中々道が捗取りませぬ。その夜巳の刻、當今の午後十時といふ頃になると、又七郎ガッカリして、

又『作藏、腹が空つた、食事をしたい。』

作『そんなことを仰しやつては困ります、こんな所に食べ物などはございませぬ、夜の明けるまでお待ちなさい。』

又『夜の明けるまでは我慢が出來ぬ。』

作『そんな無理なことを仰しやつてはいけませぬ。』

又『それでも腹がペコ／＼で、もう足が前へ

出ない、作藏、私を負つてくれ。』

作『そんな大きなものを負つては行かれませぬ。』

又『負ふことが出來なければ、食べ物を探して持つて來い。』

作『どうも困りましたな、では仕方がないから負ぶをなさい――オヤ〳〵大きな赤ちゃんだ。』

又七郎作藏に負はれましたが、この作藏六尺に近い大男。けれどももう十六にもなつてゐる又七郎、假令ぼろ〳〵でも鎧を着てゐるものを負つて行くのですから疲れます。又『えいさ、よいさ。』とやつて來る內に又七郎、背中で好い心持ちになつて、グーッ、グーッ……

作『オヤ〳〵寢てしまつた、宜い氣なものだ、けれども、命を的に働く戰場に行くといふのに、鼾をかくやうなら、この坊ちゃんも今に立派な武士になれるだらう。』

重いのを我慢をして來ると、追々東の方が白んでまゐりました。來かゝつたのが尾州の鳴海の松原。

作『若樣、御目をお覺しなさいまし。』

又『ウ、ウ、ウーム、あゝ好い心持だつた。』

作『あなたは好い心持だつたか知れませぬが、負つてゐる私は重うございました。』

又『あゝお前の背中だつたか、どうも布團にしては寢難いと思つた。』

作『馬鹿になすつちやいけませぬ。』

又『あゝ腹が空つた。』

作『又はじまつた、若樣は私の背中で寢てゐたのですが、私はあなたのやうな重いものを負つて來たのですから、餘計お腹が空りました。』

見よ！全精魂を打込んだ愛と魂の四名著！

(新刊)

第三紀層の上に　賀川豐彥

靈肉一如！第三紀層の扉を切拓く者は果して誰か？清純の戀に結ばれた二人の若き男女が、どん底の呻きより起上りつゝ悲痛な人生苦鬪の半生！醜惡の世相に深く喰込んだ作者の燃ゆる人類愛は、全卷を貫く不斷の大理想であり、大賀川の念願とする社會改善の實行策、農村救濟の道である。是非一讀を！　定價一圓五十錢　送料十錢

小說　一粒の麥　定價一圓五十錢　送料內地十錢

小說　海豹の如く　定價一圓五十錢　送料內地十錢

小說　その流域　定價一圓五十錢　送料內地十四錢

東京小石川　大日本雄辯會講談社　發行

全國書店にあり――振替東京三九三〇番――

又『何所か食べ物を賣つてゐるところはないか。』
作『ないことはございませぬが、金がございませぬ、若様お持ちでせう。』
又『私は金などは持つてゐない。』
作『オヤ〳〵一文なしですか、では仕方がございませぬ、もう少し我慢をなさい。』
ひよろ〳〵しながらやつて來ると、一宇の寺の前へ出ました。
作『若様、これが笠寺でございます。』
又『何だ笠寺といふのは……』
作『この寺の觀音様は、笠を被つてゐるので笠寺といふので鳴海の笠寺といつては有名なものでございます、この寺で賴みませう、けれども若様、拔駈をして來て、途中で腹が空つたといふやうな顔をしてはいけませぬよ、家には金の茶釜が百もあつて、百萬石の大名の若様のやうな顔をしてゐなければいけませぬよ。』
又『よし〳〵。』
門を入つて庫裡の方へやつて來て、
作『賴―む』『ドーレ……』
五十ばかりになる權助、
權『何だね、誰がなくなつただね。亡者はお前さんか。』
作『冗談いつてはいけない、亡者が歩いて來るか、私は名前はいへないが、この海道の百萬石の大名の家來だが、若様が御出陣の途中御空腹に渡らせられるので、當寺で一椀の食事を所望いたしたく罷り越した、早々食事の支度をして貰ひたい。』
權『あゝ飯貰ひかね、賴むなどといふから、何だと思つた、待つてゐなさい、和尚様に話をするから——和尚様。』
和尚『何ぢやな。』
權『今變な男が來ましてな、何でもこの海道の百萬石の大名の家來だが、若様が御出陣の途中で、腹が空つたから飯を食はして吳れろといつて來ました、大名の若様が腹が空つたところを見ると、先代萩の鶴喜代だんべえ。』
和尚『何をいつてゐる、どんな人物だ。』
權『何だか知んねえが、若様といふのはまだ年は若いが、爺いじみた、ぼろ〳〵の鎧を着てゐるだ。』
和尚『ハヽア何しろ御出陣の途中、御空腹とあらばお氣の毒、上げて食事を差上げることにしよう、お前は御飯の支度をしなさい。』
權『おかずは何にしべえ、味噌汁でもこしらへようかね。』
和尚『おかずも味噌汁も要らぬ、香物だけでよい。』
權『さうかね、それなら譯はねえ。』
出て來た權助、
權『サア和尚様が會ふといふから上がらつしやい。』
案內をされた和尚の居間。
作『これは初めて御目にかゝります、名前は申されぬが、海道筋の或る大名の家來、これは主人の若様、御出陣の途中、御空腹を覺え當寺に於て食事を頂きたく、罷り越しましてございます。』
チッと二人の様子を見てゐた泰山和尚、
和尚『アヽヽヽ、お前さんは海道の百萬石の大名と仰しやるが、この海道筋には百萬石の大名はない、何といふ大名ぢやな、第一お前さんの名は何といはつしやるな。』
名前はと問はれて弱つた。僕の作藏とはいへませぬ。
作『それは名もございましたが……』

和尚『名のないものはない、アハヽヽ、名前がいへないか、言へなければ私の方から申上げよう、三州西尾の城主松平紀伊頭殿の御子息又七郎殿ではございませぬかな。』

作『エ、ッ……和尚様知つてゐなさるかね。』

和尚『アハヽヽヽ、知らないで何といたさう、實は私は元西尾の大宗寺に居つたもので、よく若様をお見上げ申したことがある。』

作『ヤア種を知つてゐられちや仕方がない、實は紀伊頭様の若様の又七郎様、私は下郎の作藏といふ者でございます――若様、化の皮が現れてしまつた。』

又『あゝさうか、それでは腹が空いても、食べ物は駄目か。』

和尚『若様お氣遣ひなさるな、只今食事の支度をさせてございます。』

又『あゝさうか、それで安心をした。』

和尚『それから御出陣といふが、小牧山へお出でかな、ハヽア抜け駈ぢやな。』

作『和尚様、何でも知つてゐなさる、實は御主人に戦場のお供を願つたのですが、お許しがないので、私と若様と二人で抜駈に出て參りました。』

和尚『親御として子の可愛いさに、御出陣をお許しがなかつたのであらう、親子の情として御尤も、それをお前さんが若様を煽動て連出したといふ譯か。』

作『ヤアどうも和尚様に會つちやア叶はねえ、實はさうでございます。』

和尚『若様、お年はお幾才ぢや。』

又『十六才ぢや。』

和尚『あゝ結構々々、假令親御のお許しがなくとも、抜駈にもせよ自分で出陣なさらうといふ御決心がえらい、戦場へ出たらば、卑怯なことをなさるな、必らず立派な大將分の首を取つて、功名手柄をなさるやうにお祈り申す。』

又『あゝ有難う。』

所へ權助が膳を運んでまゐりました。又七郎も作藏もホッとして、膳の前へ坐つて見ると、胡瓜の香の物があるつきり、味噌汁もおかずもない。

作『和尚様、香物だけでございますか。』

和尚『香物だけでは御不足かね。』

作『私は宜いが、若様に何かおかずが……』

和尚『それは贅澤といふもの、これから戦場へ出なさるのぢや、戦場へ出て敵と戦ふ時は野や山に寝ることもある、その時におかずが欲しい、味噌汁が欲しいといつてもありませぬぞ、籠城ともなれば、馬の死肉、草の根を食して飢を凌いだといふ例もある、贅澤なことをいつてはいかぬ、御飯だけでも食べられればいゝとしなさい。』

作『成程御尤もでございます、若様、我慢をなさい。』箸を取つて香物を一口やると生同様、

作『權助さん、この胡瓜はまだ生漬だ、もつとよく漬つたのはないかね。』

權『贅澤なことをいはねえものだ、ゝ、ゝ、きり〴〵ゝ、すを見なさい、胡瓜を生で喰つてるだ。』

作『オヤ〱きり〴〵すと一緒にしてゐる。』

香物だけでも腹がぺこ〱ですから、箸を取ると、サア二人とも食ふわ〱、權助驚いてゐる内に、飯櫃を空にしてフウ〱いつてゐる。

和尚『サア腹が出來たら少しも早く御出陣をなさい。』

又『和尚、有難う、私が功名を現はして、立身出世をしたら、この禮は必らずするぞ。』

和尚『有難き仰せ、そのお心持をお忘れにな

らぬやう……』
又『あゝ御馳走であつた、御免。』
腹が出來ると急に元氣になつて又七郎、
又『サア〳〵作藏、何をぐづ〳〵してをる、負つて行つてやらうか。』
作『あべこべだ。』二人は和尚に禮を述べ、勇み勇んで小牧山を差して急ぎ行くことになりました。後にこの笠寺へ對して、松平紀伊頭から年百石の手當をしたといふことでございます。

初陣の大手柄

丁度小牧山の一里ほど手前、八幡林の傍らの小松山へ主從が來た時は、いま戰爭に勝つて本多榊原の軍が引揚げて行くところ。
又『爺や、戰さがあつたのだな。』
作『さうでがす、若樣御覽なさいまし、一番先きへ行く、左離れ立葵の紋の旗の手は、本多平八郎樣の御人數、その眞ン中に、丸に橘續いて井桁の紋の旗は、井伊萬

千代樣の御人數、その後の源氏車の紋は榊原小平太樣の御人數でございます、今戰さがあつたばかりと見えて、勇ましい勝鬨揚げてお引揚げになる樣子、どうでございます。』

又『勇ましいな、私もこゝへ出て來たからは、名のある大將の首を取りたいな。』

作『それは坊ちやん駄目でございます、初めて出て來て、名の知れた大將なんて、そんな贅澤なことをいつちやアいけませぬ、何でも初めはどんな奴でも構はないから槍をおつけなさい、その內に度胸が付いて來たら、大きな奴をおやりなさい。』

二人は話しをしながら、八幡林の裏手の方へ來ると小さい丘がある。そこにある大きな石に腰を掛けて、兜は被らず、亂髮に綾をたたんで鉢卷なし、身に着けたる鎧は銀小札卯の花縅し——卯の花縅しといふと白い糸の鎧、新中納言知盛が着て出て來る鎧です——破れ芭蕉の指物を脊に差し、鋸の如くなつた太刀を杖に突いて、一息入れてゐるのは野呂助左衞門清兼でございます。後殿役を勤め、馬が斃れた爲めに、今徒歩でこゝまで引揚げて參りましたが、數ケ所の傷に疲

れを覺え、いま川の水を呑んで憩らつてゐるところ。之を見た又七郎、

又『爺や、立派な大將がゐるぞ。』

作『若樣、無暗に向つたつて駄目ですよ、ウッカリ強い奴にぶつかつたらこつちの命が危なうございます、私がよく見屆けて參りますから、これなら大丈夫と見たら、おかゝりなさいと私が聲を掛けますから、さうしたら二人でやつつけませう。』

ソーッとやつて來た作藏、その横顏を覗き込んでブル／＼ブルッと震へ上がつた。

作『大變々々、駄目でございます。』

又『何だい爺や。』

作『あんな者にかゝつたら、あべこべに此方が首になつてしまひます、あれは上方名代の豪傑で、野呂助左衞門清兼といつて、名前は野呂だが、戰つて敵の首を斬ることの早いの何のといつて大變なもので、あんな奴に槍を附けたら大變でございます。』

又『さうか、あれが豫て噂に聞いた野呂助左衞門といふ豪傑か、良き敵こそござんなれ……』

作『冗、冗談いつてはいけませぬ、そんな馬鹿なことをいつて坊ちやん、駄目ですよ。』

又『駄目でも何でも、戰場へ來て、敵が強い大將だからといつて、その儘逃げることがあるか。』

作『坊ちやん／＼いけませぬよ。』

と作藏が止めるのも構はず又七郎、槍をしごいて助左衞門の前へヅカ／＼と進み寄つたその大膽不敵さ。

又『ヤア／＼そこに居らるゝは、野呂助左衞門と見たは僻目か、某しは三州西尾の城主松平紀伊頭の一子松平又七郎十六才の初陣、見參々々。』と呼ばはりながらに突ッかゝつた。突かれたかと思ひきや、パッと體を躱した助左衞門、槍の螻首しつかと押へ、

助『ヤア無禮者めが、見れば貴樣は大人のやうな子供のやうな奴だ。』

さうでせう。鎧はお爺さんの着るやうなのですが、鐵面の間から見える顏、桃のやうな頰を現はしてゐる、思はずニッコリ笑つた野呂助左衞門、

助『コレ小童。この助左衞門の命を取らんなどとは奇怪なり、我等はまだ少し入用の命、貴樣などにやる譯にはならぬ、サア早や疾此の場を立去れ。』

槍をしつかと摑まれて身動きもならぬ又七郎の樣子。之を遠くで見てゐた作藏老人。

作『ヤア坊ちやん、危ないから槍を放して逃げてお出でなさいよ、やりッ放しといはれてもいゝから、逃げてお出でなさいといふに……』と作藏氣を揉んで聲を掛けてゐるが、それでも又七郎槍を持つたまゝ放さず、眼を怒らせた助左衞門、

助『コレ見ればまだ年若の其方、定めし父母があるであらう、討取るは易けれど、首討つも不愍、許して遣はすから、早や行けッ。』といひながら摑んでゐた槍をポーンと突き放され、又七郎ヨロ／＼ヨロとよろめいて、バッタリ尻餅を突いたが、早くも起上がり、

又『ヤアよくも突き倒したな助左衞門、いざ尋常の勝負をしろ。』と寄つてかゝる、助左衞門驚いた。

助『ヤアうるさい小童め、もう許さんぞ。』といふと、槍を摑んでグイと引けば、ヨロ／＼バッタリ前のめりに倒れるところを、ドッカリ上へ馬乘にのしかゝつた助左衞門、

助『危ない奴だ、それほど要らぬ命なら、不

愍ながら首を取るぞ、ウーム。』と力を入れると又七郎、下敷になつて動くことも出來ない。作藏之れを見て、

作『これは大變だ、だから止せといふのに聞かないものだから、こんなことになつてしまつた、けれども打棄つといたら、坊ちやんの命が危ない。』

いきなり飛込んで參りました作藏、助左衛門の後ろから羽掻〆めにして、

作『ヤア助さんや、坊ちやんを助けておくんなさい、賴む助さん。』

と友達にでも會つたつもりになつてゐる。

助『えゝい邪魔するな無禮者め。』

と猿臂を延して作藏の襟髪摑んでグイと前へ引寄せようとした時に、ズイと助左衛門の腰が浮いた、途端に今まで押へられてゐた又七郎の右の手が明くと、ちよつかいの早い少年、鎧通しに手がかゝると見えたが、スラリ引拔くより早く、助左衛門の下腹のあたりをズブーリ突いた。アッといつて驚ろくところを、グイ〳〵グイと二三度力を籠めて抉つたから、いくら天下の豪傑野呂助左衛門でも敵ひませぬ、こんなところで下ッ腹を突かれようとは思はなかつた。

『ウーム。』と虚空を摑んで、その儘ドウと倒れる、飛起きた又七郎、落ちてゐる槍を拾つて脇腹のあたりをグイを一突き。

作『ヤアお手柄〳〵、坊ちやん、早く首を斬つておしまひなさい。』

又七郎太刀を引拔くと、首を只一打ちサッと――打落せれば宜いのですが、初陣の又七郎、中々サッと綺麗に首は切れない、それでも漸くに首を打落しました。

作『サア坊ちやん、早く名乘を上げなさい。』

又『よしッ。』

助左衛門の首を槍の先に突き貫ぬき、名乘りを上げようとしたが、疲れてゐて聲も何も出ない。

又『ヤア〳〵、よ、よ、よくお聞きあれ、ウーム、松平又七郎、十六、十六才の初陣、ウーム……。』

作『坊ちやん〳〵、そんなことではいけませぬ、爺が代りに名乘つて上げませう――ヤアヤア遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ、三州西尾の城主松平紀伊頭の一子又七郎、上方に其の人ありと知られたる豪傑野呂助左衛門を討取つたり、序に槍持作藏も手傳つたり――』と呼はつた。餘計なことをいふ男です。

その内に軍目付が之を聞いて、馬を煽つて乘込んでまゐり、家康公御前へ案内をする。家康公殊の外のお喜び、紀伊頭を呼出して、

家『其方の悴は十六才の初陣に、野呂助左衛門を討取つた、強いものである。』

紀伊頭が驚いた。

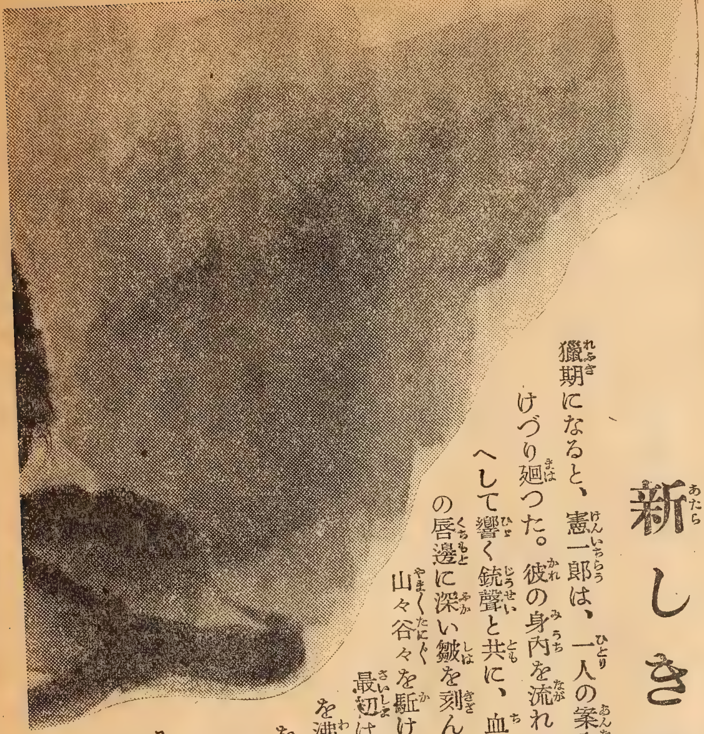
紀『悴、參つたのか。』

又『ハイ、お父さん今日は……』

紀『今日はもないものだ――作藏。』

作『ヘエ、旦那樣、まだ年の往かない坊ちやんでも、年を老つた作藏でも、ちよつとしてもこんなものでございます。』作藏大威張り。

紀『困つた奴等だ。』と小言をいつたものゝ、人も恐るゝ鬼といはれた野呂助左衛門を討取つたのですから、紀伊頭心中の喜こびは一通りではございませぬ。こゝで家康公より緋縅の鎧一着を下し置かれ、この功に依つて又七郎に對し一萬石を賜はりました。十六才の初陣、拔駈の功名一萬石の槍と題する一席の講談、此の邊を以て終りといたします。(終)



曠野の火

加藤武雄
須藤重　画

新しき獲物

獵期になると、憲一郎は、一人の案内役と、二匹の獵犬とを伴れて、朝から晩まで山々谷々を駈けづり廻つた。彼の身内を流れる荒々しい血は、殺戮によつてのみ樂しく昂奮する。谺をかへして響く銃聲と共に、血に染んだ雉子や山鳥が空から舞ひ落ちる時彼の瞳は輝き、彼の唇邊に深い皺を刻んで白い齒の間から會心の微笑が漏れるのである。

山々谷々を駈けづり廻るうち、彼は、よく隆介老人の小舍に立寄つた。最初は偶然、その小舍の近くに出たので、折柄晝食頃の、辨當の茶を沸かさせる可く立寄つたのだが、二度目から、わざ〳〵廻り道をして、その小舍をおとづれた。

『居るかい？　爺さん。』

氣輕な調子で呼びかけながら、障子一枚滿足には建てられてゐないやうなそのあばらやの前に立つのだ。

『はい、はい。居りますで――。』

隆介老人は爐端から這ひずり出で、慇懃に迎へ入れて、

『御精が出ますな。ほう！ 今日は上首尾で御座えますな。』
『なあに。こんな事ぢや一向手柄にはならないよ。』
『雉子が三羽、兎が二羽でごぜえますか？ 若旦那の腕前はいつもながら大したものでごぜえますな。全く百發百中といふわけで――。』
『は、は！ それほどでも無いさ。』
『いや、全く玄人はだしで御座えますよ。』
『馬鹿にお世辭がいゝね。それよりも早いところお茶を一ぱい貰ひ度いんだが――。』
『は、はい、唯今さしあげます。』
隆介老人は、鐵瓶の下に柴を投げ込んだ。
『ところで今日は、あの娘は何うした？ お清とか云つたね、あの娘は――。』
憲一郎は、鋭い眼眸で家の中――と云つても一間しかない部屋を覗き込むやうにした。獲物を覘ふ時のあの鋭い眼眸で。
『又、そこいらを歩き廻つてゐるでがすべ。ありや、もうまるきり猿同樣で御座えましてな。』
『猿か？ は、は！ なかなか可愛い猿だよ。』

愛人貞夫と、その從妹嫩子の仲を誤解した町子は、反撥的に吉水憲一郎と結婚したが、軈てその憲一郎の爲、懷胎までして捨てられたサトの出現で、彼女は夫の人物に嫌惡を感じねばならなかつた。するとその中憲一郎は、妻と貞夫との間を白眼視し、急に東北の故郷へ歸住した。而も歸住後の彼は、荒んだ生活に耽つて、次第に町子を顧みなくなる。彼女の心は淋しかつた。さうしてその淋しさを、僅かにサトの父親隆介との語らひに紛らした。嘗て憲一郎の父の爲、財産も妻も奪はれた隆介は、今は一切を諦觀の覆布に包んで生き、拾ひ育てたお清といふ白痴の娘を相手に、わびた暮しに滿足して居るのだつた。折柄風のたよりに、貞夫の結婚の噂を聞いた町子は、亂れる心を抑へつつ、隆介老人を懷しむ日を重ねてゆく。（前回の梗概）

憲一郎は眼を、下にひらけた谷底の方に放つた。——そこには、一筋の溪流が、紅葉した灌木や、白々と亂れ立つた岩石の間を縫うて流れてゐたが、その溪流の畔にうづくまつてゐるお清の姿が、明るい秋の陽の中に、刻み出されたやうに、くつきりと浮んでゐた。

『は、はん。あんなところにゐるのか？』

憲一郎は、茶の支度の出來るのをも待たずに、

『邪魔をした。また、寄るぜ。』

と云ひながら、やをら、縁先から立ちあがつた。

『唯今、お茶をさしあげますよ。』

隆介老人が慌てゝ留めるのを耳にもかけないで、憲一郎は、九十九折の岨路を、二頭の犬を先に立てゝ身輕に降りて行つた。今日は、案内の少年を伴れてはゐなかつた。

お清は、溪流の畔にうづくまつてゐた。そして、じつと、その溪流が岩の間にゐぐれ込んで、そこに深い淀になつてゐる青い水の面を眺めてゐた。水の面を眺めてゐたのでは無い。水に映る自分の顔を眺めてゐたのだ。

が、憲一郎が歩み寄つた時は、つと立ちあがり、稍ゝ耻[illegible]んだ顔附を此方に向けてゐた。

『お清。何をしてゐたのだ？』

憲一郎は笑ひかけた。

『…………。』

『水鏡をしてゐたのか？』

訊きながらよく見ると、片手にきら〳〵と光るものを持つてゐた。

『鏡を持つてゐるぢやあ無いか？』

『割れちやつた！』

お清は、かなしげにつぶやいた。お清の手なる鏡は、岩の上へ落しでもしたのだらう？　縱横にひゞが入つてゐた。

『ほう！　割れたのか？』

『お邸の奧さんに貰つたんだけど、おッことして割つちやつ

た！』

お清は、未練らしくその割れた鏡をみつめた。眼には涙を帯びてゐた。

『鏡が欲しけりや、いくらでも買つてやるぜ。』

さう云はれると、お清は、ぱッと眼を輝かして、憲一郎の顔をみつめた。

『今度、買つて來てやらう。』

しばらく考へるやうにしてから、

『うゝん。』

と、お清はかぶりを振つて、

『要らねえ。』

『要らねえ。どうしてだね？』

『…………。』

『鏡も買つてやる。白粉も買つてやる。——ね、着物だつて好きなほど買つてやるよ。お前はかあいゝ娘だからな。』

憲一郎は、岩の角に腰をおろし、紙巻に火をつけながら云つた。

（上、完成品下、原稿）

肖像畫御揮毫　責任揮毫、永久保存

◆執筆者は肖像畫では日本一の稱ある大日本肖像美術院の古川枝旺先生を始め同院の方々で何れも斯界一流の大家ばかりです◆永久に色の變らぬ入念な仕上で原稿寫眞と寸分違はぬ見事な出來榮えです◆どんな小さい寫眞でもハツキリと描出し服装の變更も御自由です。　揮毫料（額縁共）一組十圓—荷造送料内地七十五錢其他一圓

◉申込所 東京小石川 大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）

お清は、上目使ひでしれり〳〵と相手の顔を眺めた。

『どうだ？　こんな山の中で淋しい事は無いかい？』

『…………。』

『おれの家へ來て見る氣は無いかい？』

『奥様の許へなら行き度え。』

『行き度きや伴れて行つてやるぞ。』

『本當？』

『本當とも！』

お清の色は激しく動いた。がすぐに思ひ直した風で、

『でも、お父うが獨りになる。』

『お父うは獨りになつたつて平氣だろ。』

『うゝん。』

とお清はかぶりを振つて、

『獨りになつちや、お父う、かあいさうだ。』

『ぢや、お父うも一緒に伴れて行つてやる。』

『そんならいゝけど。』

溪流の中の、ごろた石の上に二羽の鶺鴒がとまり、輕くその尾羽を動かしてゐるのを、お清は凝然と眺めてゐる。垢染みの底から輝く玉のやうな肌の光である。その襟脚から肩にかけての、既に一個の女性としての柔かなふくらみを見せはじめた線を、その貪婪の眼で嘗めま

はすやうにしながら、憲一郎は、新しい獲物を前にした時の、あの不思議な昂奮を感じた。彈丸は要らない、直ぐに手捕りに出來さうな此の可愛い小兎！

『ね、家へ來る氣があれば、爺さんに話していつでも伴れて行つてやるぜ。』

脣の端の笑皺を深めて、憲一郎はにやりと笑つた。

お清は、湧きあがるよろこびを抑へつけながら、警戒的な眼の色で、憲一郎の顔を打戍つた。

『お前の好きなものは何でも買つてやるよ。大事にしてやる。そして、今に、もつともつと賑かなところへ――東京へ伴れて行つてやる。』

『本當？』

『本當とも！　お清は可愛い娘だからな。大事にしてやるぜ。』

『…………。』

お清は、水深をでも測るやうな眼眸をしばらくの間憲一郎の顔に据ゑてゐたが、

『可厭だア！』

突然、投げつけるやうに斯ういふと、くるりと踵をかへして、

小兎か羚羊かのやうな素早さ身軽さで、岩角から岩角に飛び移り、やがて灌木の繁みの中にその姿を隠してしまつた。

憲一郎は呆氣にとられた形で、ぼんやりとそこに突立つてゐたが、もう一度、白い歯をだしてにやりと笑ふと、『は、はん！』と軽い笑ひ聲を立てた。

二度目の邂逅

町子の母のお峯が、急性の肺炎で、一週間あまりの高熱に喘いだ末に、まるで、嘘のやうに、ころりと死んで了つたのは、十月はじめのある日の事であつた。

東京に歸り度い、東京に歸り度いと云ひ續けながら、竟にその空しい希望を抱いたまゝお峯は、その淋しい山の奥で生涯を閉ぢて了つた。神經痛がすこしでもよくなり、少しでも身動きが自由になつたらば、どんなにでもして東京に伴れてかへり、そこで、老後を養はせなければならぬと町子は決心してゐたのだが、その時を俟たずして母は死んで行つた。島の俊寛のやうに死んで行つた。

『阿母さん、濟みません。』

町子は、母の屍に取縋つて泣いた。——こんな事になつたのも、元來、母の意志から出た事だつた。母はそれを後悔してゐた。『私が悪かつたのだよ。』と母は死の際で、幾度もそれをくりかへした。『お前を吉水にやつたのが、私の料見違ひだつたのだよ。でも、まさか、こんな風にならうとは思はなかつたもんだ

からねえ。ねえ、町子、いつまであの人と一緒にゐたツてうだつはあがりツこ無いからねえ。離縁をとつて、お前は東京にお歸りよ。まだ若いんだもの。東京へ行けば、又、どんな運だつて開けないものでは無いからねえ。』と、半ば譫語のやうな調子で、母は臨終の息の下からくりかへしたのである。

そんな事は前から判つてゐた。判らなかつたのは母ばかりだつた！ とはいへ、今更どうして母の愚かさを責められようぞ。町子は、唯、母に濟まないと思つた。

『せめて、東京で死なせてやり度う御座いました。』

町子は、泣きながら然う云つた。が、憲一郎は、一向に冷淡だつた。義母の死床にも、唯、お義理で二三度顔を出しただけ、その最期の日さへ、朝から獵銃を擔いで出かけて居た。

町子は、せめて、その遺骨だけは、東京の土に埋めてやり度かつた。で、その骨壺を抱いて東京行の汽車に乘つたのは、四十九日の佛事を濟ましてからのある日、山里の冬既に深く、粉雪がチラ〳〵と降りつゞけてゐる十一月も半ばのある日であつた

勿論、それを素直に許してやるやうな憲一郎では無かつた。此の當然過ぎる願ひにもいろ〳〵と難癖をつけた末に、

『ぢや、まあ、然うするがいゝ。今、一寸、都合が惡いのだが、おれも一緒に行かう。』

澁々と憲一郎は承諾した。

『いゝえ。あなたはいらツしやらないでよろしう御座います。私、一人で、何とかしてまゐりますから――。』

『一人で行き度いのかい？ は、は！ おれが一緒に行つちや邪魔だとでもいふのかい？』

『何を仰有るので御座います？』

『いや、お母さんのお骨を埋めに行く、それだけならいゝが――』と、憲一郎は例の意地惡げな笑ひを見せて、

『何か外に用事があるのぢや無いのかい？ 久振で會ひ度い人が、東京で待つてゐるんぢやあ無いのか？』

『まあ！ 何をつまらない事を！』

町子は、流石に眉の昂るのを禁じ得なかつた。

『は、は！ 然うで無かつたら、まあ、そんなに憤らんでも宜からうがね。』

『あんまりです！ 私、それどこぢや御座いません。私、母が可哀さうで可哀さうで――せめてお骨だけも、あれほど懷かしがつてゐた東京の土に埋めてやり度いと思つてゐるので御座います。つまらない邪推などなさらないで下さいまし！』

『然うかね。それならいゝが、おれは又、お前はもう、こゝへは戻つて來ないつもりでゐるのぢや無いかと――いや、このまま逃げ出して了ふつもりぢや無いかと、一寸、そんな氣がしたもんだからね。』

『逃げるくらゐなら、疾くに逃げて居ります。』

『疾くにね。ふん！』

『母も此地で死にました。私も、こゝで死なせて頂くつもりで御座います。』

いえさ、もう死んでゐるので御座います、と町子は心の中で云ひ添へた。

『なるほどね、心底見えた、とでも云ひ度いところだな。』

憲一郎は、おひやらかすやうに笑つた。

こんな問答の末に、兎も角も、憲一郎は町子の東京行を許した。あの管理人の、木島老人が、農閑期で手が隙いてゐるので、それを町子に同行させた。勿論、監視役としての嚴重な使命を受けてさしそへられたものであつた。

町子は久振で東京の土を踏んだ。

別に、親戚の者も無かつた。いや、遠縁の者はいくらかあるにはあるが、久しく打絶えてゐて、賴りにはならなかつた。

しかし、赤坂の靈南坂上の菩提寺の住職は、信心の深いお峯と面識の間だつたので、萬事深切にとりはからつて吳れた。

木島老人の指圖で、吉水家由緣の某家を宿にして、三四日後には、埋葬も供養も滯り無く濟んだ。

町子は、再びあの山の村にかへる可きであつた。

が、町子は、墓地の片隅に悄然と立つたその白木の墓標を見捨てゝ歸るのが辛かつた。

『町子や。』と、その墓標のかげから、母のかなしげな眼が町子をみつめてゐた。

『歸つちやいけないよ。あんなところへ歸つたつてどうなるものでも無いよ。ね、歸るのはおよし!』

さういふ母の聲がきこえた。

『駄目だよ、あの人は。お前の力ぢや、あの人を良くする事など出來はしないよ。そんな愚かなのぞみは捨てゝお了ひ。ね、もうあの男の傍へなんか歸るのはおよし!』

――もう一日、もう一日と、木島老人の催促を逃げながら、町子はその滯在を續けた。そして、毎日、墓參を續けてゐた。

憲一郎からは電報で歸りをうながして來た。

いつまでさうしてもきりは無かつた。

明日は歸らうと決心しながら、最後のつもりで出かけたその日の事であつた。

寺の門をくゞらうとすると、その門前の石だたみの上で、うしろから速足にあるいて來た者があつた。

何氣無しにふりかへると、それは焦茶の外套に同じ色の中折をかぶつた一人の青年紳士だつた。

『あら!』町子の聲は筒拔けて走つた。

『まあ、あなたは――』

『や、町子さん！ 町子さんぢやありませんか?』

鼻下の口髭が、いくらか面變りをさせてゐるが、それは正しく貞夫だつた。

『まあ、植田さん！』

町子は我を忘れて、飛びつくやうに二三歩はしり寄つた。

『町子さんですね。あゝ、矢張さうですね。』

貞夫も、夢の中で夢を見るやうな、むしろ茫然とした表情で、町子の顏を見つめたのである。

（つゞく）

一句一章胸を抉り魂を打つ感激熱涙の
現地記錄に銃後同胞は絶讃感謝の嵐!!

戰火

木村毅著

四六判・カバー付
九ポ總ルビ三八〇頁
裝幀並に挿繪 木村莊八畫伯
定價 一圓六十錢 送料内地十錢
(全國書店にあり)

物凄い評判!

一、日本兵の復讐
三、三人の通信兵
三、呉淞敵前上陸
四、男
五、少年航空兵
六、女
七、部隊一の臆病者
八、蔣介石
九、南京城總攻擊
十、傭の母

躍進膨脹して止まぬ日本民族の意志が大陸支那への一片の肉塊として叩きつけられ、はね返つた血痕で記錄されたのが本書だ!!

著者は戰爭小說に於て文壇の第一人者、昨夏上海戰の始まるや直に從軍記者として雷馳電擊の巷に赴き、彼の悲壯なる呉淞敵前上陸を親しく旗艦出雲に乘つて之に參加した。南京の陷るや碧血あせざる敵首都に入つてゐる。その實見した大小の戰鬪幾十度今全身の情熱を傾けて書き上げたのが本書である。本書は陸海百萬皇軍の忠魂義膽の結晶であり、銃後一億同胞の熱誠の蒸溜である。國民必讀の快著、大名著である。

凱旋將士には絶好の思出の資料、病院では第一の慰藉、戰地では最上の慰問品、銃後には無限の教訓!!

東京小石川 大日本雄辯會講談社

三角寛
小林秀恒畫

禁斷症狀

サイゴさんの顔と云つたらお話しになりません。シベリヤを走るコサックの馬と間違へられて、菊江に飛乘された恰好と云つたら、實際見てゐる方がかなはなかつた。

『大抵にしろ。』

サイゴさんも怒りました。何しろ留置場の窓から、皆が面白半分にのぞいてゐるし、わい〳〵手を叩いたりするので、刑事としての體面もよくない譯でありました。ところが、怒つて判るくらゐなら、始末がよろしいが、これぱつかりは怒つたところでどうにもならない。

菊江は一層猛りたつて嚙りつく喰ひ

連載小説

國境の女

つく、ひつかきむしる。それが、九分かた裸の恰好だから、まづ地獄でございます。

　そこへ堀内さんといふ、只今は、石神井の梅毒病院の院長をしてゐる先生が見えました。この方は警察醫ですから、私たちもほつとして、

『どういふのでせう?』

　と聞きますと、

『これを禁斷症狀といふんですよ。しかもよほどの重症らしい。』

　と仰言る。

『そんなことを云はないで、何とかして下さいよ。まあ留置場を見て下さい。』

　ひん曲つた鐵棒を、堀内さんは頷きながら眺めてから、

『この禁斷症狀にかゝつたら、これ位なことはやさしい方だ。何しろ躰の中の阿片がぬける時だから、普通の人なら、神經をぬかれるも同じことで、必死になるんだから恐しい。これにかゝると、岩にでも鐵壁

中新井に住む皆川菊江といふロシヤ趣味の女を、共產黨一味では？と疑つた木村、西鄕澤兩刑事は、決然捕縛に乘込んだ所、どんでん返しの仕掛などで、散々な目に會はされる。だが屈せぬ働きで遂に怪女性菊江と、その情夫で阿片密輸の重大被疑者シベリヤ勇はあはれ逮捕された。菊江の家は、世にも恐しい阿片吸入の伏魔殿だつたのである。

所が、彼等を留置場に入れた翌日の夕方、突然二人は狂暴な錯亂狀態を示して暴れだした。阿片中毒患者に、阿片分が切れた際の現象である。驚いた兩刑事は、急ぎ彼等を房外に引出さうとした所、出拔けに菊江は、西鄕澤刑事に獅嚙みつき『雪のシベリヤで、白馬に乘つて、コサツクを追つかけた菊江を知らないか。』と猛りだす。

（前號までの梗概）

にでも平氣で飛ついてゆきますよ。あんまり側へは寄らない方がいゝですよ。』

いやに落ちついて、しづかに云はれます。

私は氣味がわるくなつたから、だん／＼あとに退りました。

サイゴさんは、いつの間にか、監視机に押しつけられて、蛇のやうにからみついた菊江の手を、どうして外さうかと、まつ赤になつて、泣きさうな顏をしてをりました。

『先生、たすけて下さいよ。』

哀れな目をして、サイゴさんは申します。

『日頃の心がけがわるくて、こんな目に會ふんぢやありませんか。』

堀内先生は、自分が醫者だと思つて、サイゴさんをからかひます。留置人は、刑事がひやかされたので、『態ア見ろ。』と云はぬばかりに、ぱち／＼拍手をしました。

堀内先生は、（これはいけなかつた）といふ風に、留置人をぢろりと見やつて、鞄をあけました。

鞄が開くと、あの往診鞄特有の、カンフルなのか、モヒなのか知りませんが、刺激の強い藥品の匂ひが芬と流れました。

と、今までサイゴさんに、蛸のやうにまかりついてゐた菊江が、

（おや？）

といふやうに振り向いて、草のやうに青光りのする目で、堀内先生を見てゐたが、それが醫者だと判ると、サイゴさんからぽろりと外れて、あつといふ間に堀内先生に飛びついた。

先生はさすがに心得たものだ、（駄目だよ）といふやうに、鞄といつしよにちよいと右によけました。それで、視覺の亂れてゐる菊江は、先生と同じ色の洋服を着てゐた私に、ぐいと飛びかゝつて、首に兩手をすいとからませて、

『早く／＼、早くして下さい。パントポン、パントポン。』

と力の限り締めつけて來ます。藥のことをご存知の方は別ですが、このパントポンといふのは、パントポンスコポラミンといふ注射の藥で、これは、こんな病氣や、さしこみなどには、

嘘のやうによく利くので、モヒ中の患者は何よりほしがる大好物であります。

これを注射すると、ぼうッと桃の畑で眠氣が來たやうになつて、今までの苦しみが、一轉して陶醉の境地に變ります。

『早くしてえ、早くさあ――』

私の首を、無茶苦茶に打振ります。その力の强さと云つたら、首が千切れさうであります。體からは脂汗を出してゐるし、呼吸は、火のやうに熱いし、もうどうにも、こつちの方が滅入りさうになりました。

『先生、早くしてやつて下さい。お願ひします。』

私は、悲鳴をあげました。ところが堀内先生は、ゆつくりゆつくり注射針を、注射器にさして、それをアルコールで拭いて、それから、まだゆつくりと、藥の箱をあけました。

『パントポンがないぞ。』

チョーク入れみたいな小さな箱が空ッぽであります。

『ないんですか？』

私が叫びました。

『なければ、ナルコポンでいゝから早くして下さいよォー』

太い柔い腕で、私の顔を團子をこねるやうに打振る。

『よし、あつた〳〵。ナルコポンがあつたよ。』

堀内先生は、ヤスリでぎい〳〵と小さな硝子の管を切つてゐましたが、ぽちッと音をさせると、管の頭が飛びました。

『それはパントポン位に利きますか？』

私の方が聞きました。先生は、

『きくとも。なか〳〵いゝ氣持になるよ。ついでにそつちにもしてやるかな？』

齒痒いやら嬉しいやら、私は、だんだん菊江が可哀想になりました。

『早くしてやつて下さいよ。』

私が云ふと、

『よし〳〵、さうだな、そんなに獅嚙みついてゐては腕には刺せないなあ。』

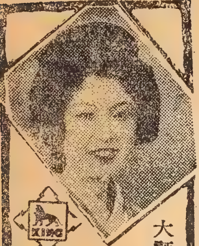
『どこでもいゝから、早くやつて下さい。』

『よし〳〵、ではここがよからう。』

堀内先生は、注射器の頭を押さへて、片手で菊江のお臀をつまみあげました。

『もう大丈夫だ。一二分辛棒してをると、ひとりでに手をはなすから大丈夫だよ。』

菊江は、すうッと、鼻から柔い呼吸を


大評判！ 日支提携を唄つた明朗流行歌
花の北京へ
新橋・みどり唄＝(片面)『招くパラダイス』 林伊佐緒
¥ 1.65
キングレコード

はじめました。と思つたら、ずゝ、ずゝッと手がゆるんで、やがてがつたりと、私の足もとに辷るやうに坐りました。

『覿面に利きました。どうだい。』

私はサイゴさんに云ひました。サイゴさんは膨れ面をして、頭の毛をむしつてゐましたが、私の首を指して、

『首が蚯蚓ばれになつてるぞ。』

『さうかい、ひりひりしてしやうがない。さういふきみだつてほれ。髯ツ面が

腫れてゐるから迚も見られたものではありません。

白状次第

『もう一人はどこだね？』

先生に云はれて、吾々は、シベリヤ勇を思ひ出し、

『さうだ、刑事部屋に縛つてあります。サイゴさんたのむ。』

先生とサイゴさんが出てゆくと、菊江はふら〳〵と立ちあがりました。そして、あたりを見てゐたが、（あれ？）と羞恥の色を泛べました。

『いやだよ、どうしたのさ？　こんな恰好で？』

私を、うらめしさうに睨めつける。

『さうかね、やつぱり無我夢中なんかねえ？』

『あたし騒いだの？』

『騒いだのは少しひどいぞ。まあ皆に聞いて見い。』

私は看守の方に顎をやりました。看守は、まだ殺氣立つた顔で、表情がほぐれて來ない。

菊江は、

『ほんとにいやだよ。どうしてこんな眞似をさせるの？　だいいち見つともないぢやありませんか。』

私に喰つてかゝる。

『させたんぢやないぞ。勝手にしておいて何を云ふんだ。』

『だつてさ、あたしは阿片の中毒にかゝつてるんですよ。それをさ、調べもしなければ、阿片も吸はせないで、入れた儘にしておくつて法がありますか。』

さう云ひながら、胸をかくしたり、膝をかくしたりしますが、着てゐる虎皮のオーヴアがぼろぼろに裂け千切れてゐるので、一方の乳が隠れると一方の脇の下がまろび出る。

『ねえ、早く出して下さいよ。あんた達の目論見はちやんと讀めてゐるんだから、白狀次第と云ふんでせう。』
　女らしい姿態に、自然の魅惑さへ漂はせ、しんみりと申します。
『ねえ、かうなつたからには、お互ひに手數の省きつこをしませうよ。私だつて、すつかり饒舌つてしまふからさあ。』
　問題はここでした。
『さ、早く出してよ。』
　ここまで來るのを待つてゐたのだから、
『お前さんがさう云ふのなら、出してもやらうが、ほんとに手數はかけまいね。』
『判つてゐますよ。かうなつたからには、秘したところでしやうがないでせう。さ。』
　立ちあがつて私の手を取りました。
　私は出口のドアを開けました。ドアの外にはすぐ刑事部屋があつて、その手前に二階へのぼる階段があります。
　私は刑事部屋には這入らずに、二階へ菊江を連れてのぼりました。刑事部屋に柴田勇がゐるからであります。
『さあ坐れ。』
　そこは防犯係の部屋で、係の者が退署したあとですから、わづか四疊半の部屋だが、がらんとしてゐました。
『少しは樂になつたかね？』
『少しはねえ――』
　菊江は、斜に膝を捻ぢつて、髮を耳のうしろに撫でました。
『隨分僕をひどい目に會はせたねえ？　この首筋を見てくれ。』
　私が首筋の蚯蚓腫れを見せると、菊江はくすりと笑ひます。
『だつて、それくらゐなら辛棒しなさいよ。』
『もつとひどいことをすることがあるのか？』
『耳の片つ方ぐらゐ嚙み切るかも知れませんよ。』
『そんなに苦しいのかね？』
『だつて、お產の苦しみだつて、靑竹を摑み割るといふんだもの。その十倍は苦しんだもの。』
『氣の毒だねえ。見てゐてもたまらなかつたよ。僕たちは、もう歸りかけてゐたんだよ。するとお前さんの、あの聲だもの、看守が目の色を變へて呼ぶぢやないか。どうしてあんなにかじりつくんだ。』
『苦しいから、何かに獅嚙みついてゐないと、迚もやり切れないのよ。同情しなさいよ。』
『それはする。しかし、阿片が切れると、いつでもあのとほりかい？』
『そりやさうよ。』
　さう云つて急に、口を引つつらせたと思ふと、
『變だわ、今のナルコポンか知ら？』
　云ふうちに、顏が蒼くなつて來ました。

『變よ。今のお醫者さんインチキだ。ナルコンポン〳〵つていやに勿體振つてゐたでせう。きつと蒸溜水で誤魔化したにちがひない。痛い〳〵。』

唇のあたりが、凄く動き出したのであります。私は、何だか氣味がわるくなつて來ました。

『だつて、蒸溜水なんか注射されるかい？』

『されますとも、うまいお醫者さんは、それこれを注射してあげるよと云つて、ナルコポンの空を見せたりして、蒸溜水をよく射すんだもの。』

『だつて、水が利くかね？』

『だまされるのよ。針が刺さると、もう樂になると思ふから利くのよ。さうだ〳〵。あ、あッ。』

虛空を摑んで、立ちました。

『おい、大丈夫か？』

私は、ドアに手をかけ逃げ仕度にかゝりました。

『駄目、逃げちや駄目。』

私を追つかけて來る。狹い部屋の中を、私は左に退り右によけ、(摑まれたが最後だ)と夢中でした。

『駄目だ〳〵逃げちや駄目だ。』

口が耳のあたりまで引つつて、目も生え際に向つて釣りあがり白い齒をむき出した形相に、私は危く叫ばうとさへしました。

『阿片阿片。早く阿片を吸はせて下さい。阿片でないと、もうどうにもならないわ。』

三尺位飛びあがりながら、私に摑まらうと迫つてまゐります。

(困つたなあ？)

と、菊江の腕の下を逃げた途端に、私の度胸がきまりました。

(阿片を吸はせてやらう。)

私は決然と菊江を前にのめらせて、背後から腋の下に兩手を入れて、がつちり羽交締めに抱きました。

『阿片は吸はせてやる。だが、吸うたらその先が困りやしないか？』

ぎゆうツと胸を反らせて云ひますと、

『それはどんなにでも我慢するから、吸はせて下さいよ。お願ひするから早く吸はせて。』

『ほんとに辛棒出來るか。ほんたうの注射をたのんでやるが、それではどうだ？』

『いやだあ、いやだあ。』

大きな聲を張りありげて、兩足でばた〳〵音をたてる。私が、よつぽどわるいことでもしてゐるやうで、外聞わるくてなりません。

『聲を出すな。聲を出すと吸はせんぞ。』

『ううん。』

と、齒を喰ひしばる哀れさに、私は、

『辛棒しろ〳〵。いゝか？』

と手をはなしました。手をはなすと、そこにあつた、丸い小さな腰掛けに、夢中で抱きついて、ぢいッと辛棒するのである。

かうなると、逃げることなど考へも泛ばないと見えまして、私が慌てゝドアを開けはなして行つたのに、來て見ると、やつぱりうんうん力んで居りました。

『そら、パイプだ。』

手に握らせると、

『あゝッ。』と頓狂な聲を出して、口にあてがつたときのいそがしさ。私は餓鬼道といふのは、こんな容子かも知れないと思ひました。

『はいつてない〳〵。』

パイプ（吸入器）を撫でながら、だまされたやうに申します。

『あれか、あの瓶が要るんだな？』

『判つてるぢやないの。ああ癪に障る。』

疊を叩いて私を追ひ立てる。

一ポンド入の押收品を持つて來ると、醉つ拂ひが酌をするやうな手つきで、蓋をこじあけて、パイプに入れて吸ひ出した。

その美味さうな顏と云つたらありません。

『あゝ、おいしい。あゝ、いゝ氣持。』

まるで私は狐に化かされたやうで、呆然と見てゐると、すつかり櫻色に血の氣を呼び戻した菊江が、

『あ、いけないわ。あんたこゝにゐると中毒になりますよ。駄目よ駄目よ。』

と、火の附いたやうに申します。私は催眠術にかけられたみたいに、

『えッ。』と立ちあがり、ドアの側まで駈け寄つた、が、電光の如く頭の中にひらめいたことは、

（こんなことを云つて逃げるつもりぢやあるまいか）

といふことでありました。と菊江が、

『大丈夫。ドアに鍵をかけて、外に立つてたらいゝでせう。』

と云つて、につと笑ひました。實に魅惑な顏でありました。

署長が好き

しかし、この防犯係の部屋は、前にも云つたやうに、何しろ明治初年の建築で、近頃のやうな嚴重な設備になつてゐなくて、窓がはなはだだらしないのであります。

古い洋風建築によくある、例の押上げ式の窓で、逃げようと思へば譯なく飛びおりることが出來る。その少し前にも、放火犯人の一人が、刑事の取調中に不意に飛おりて、大變な大問題をおこしたことがある。刑事が罰俸轉勤、司法主任が罰俸、署長さんまでお叱りを受けるといふ始末を招いたその窓であるから、私は、この女を一人のこして退室する譯にはゆきません。

それに、外はすでに暗くなつてゐるし重ねがさねの不安に襲れて來ました。

『早く出なさいよ。出ないと、あんたまでいゝ氣持になるわよ。わたしのは迚も分量がきついんだもの、全然始めての人は一ぺんにまゐつてしまふわよ。』

いやにおどかしにかけやがる。

『ほんとよ。心配なら、手錠でもはめたらどう?』
なるほど、
『それがいゝ。』
机の横に、ちやんと手錠と、股にかける錠とが揃つてゐました。
『いやだな、こんなことしなきやならない刑事さんは――
『これもみ國のためだ。いやでも辛棒――』
そんなことを云ひながら、歩けないやうに掛けました。
そして外に出てゐると、間もなく、
『もう濟んだからいゝわ。』と申します。這入つて見ると、阿片を大切に取りかたづけた菊江は、陶然となつて、警察に來てゐる者らしいところも見せず、嬉し氣な顏でした。

布哇大學總長 デーキン博士
阪天六病院長 高木ドクトル 發見創製
らい病新治療劑
ヒドノコール＝注射と內服錠劑
▲自宅療法可能 ▲副作用ナシ ▲文獻迭呈
▲本病が此迄不治であつた理由
今日迄本病に對しては世界を通じて大楓子油の外には絕對に薬が無かつた。而し大楓子油中には有效成分は極めて微量を含有するのみで大部分は有害なる無效成分の爲め治らなかつた。
▲本病が不治で無い理由
前記の理由で有效成分のみを分離抽出し無效有害成分を除去し新薬ヒドノコールの完成を見たから今後は絕對不治で無い。
▲當研究所の誇と其使命
米國政府は國費でデキーン博士之を製薬し國立カリヒ癩病院では多數の本病患者を全治退院せしめて居る。日本では當研究所之を鑑製し廣く薄命の同胞に提供し紹介回答す。
發賣元 大阪市北區京阪天神橋驛前天六病院附屬
高木化學研究所
ドクトル 高木中麿

『ねえ、もう大丈夫よ。だから、これをはづして頂戴よ。』
云ふので外さうとすると、すうッと、私に顏を近寄せた。
『こらッ、何をするッ?』
私は手荒くこれを突き飛し、錠は外してやりました。
そこへ署長が、この報告を受けて出て來ました。前にも云つたやうに、この大串署長は上海の工部局の警部をながらくしてゐたこともあるし、柔道八段の猛者でありましたが、自分の寸法どほりことがはこんで來たので、至極滿悅の體で、
『どうだ木村くん、少しはおとなしくなつたか?』
とドアをあけながら申します。私は、阿片を吸はせることは許可を受けてないので、びつくりして、いそいで机の下にかくしました。
菊江は、ここで、私に非常に好感を抱いたと後日になつて申しましたが、そんなことゝは露知らぬ署長は、
『ふうん、お前か? シベリヤで暴れたといふ女は?』
と、寛いだ私服姿で入口に塞がりました。まだ警視廳の者なら大抵知つてゐますが、大串さんと來たら、稀に見る大きな人で、この人が入口に立つと、入口がやつとゝ云つていゝくらゐでした。
それを、にこりと笑ひ顏で迎へた菊江は、私に向つて、
『署長さんですか?』と、敬意の表情を見せました。
『さうだよ。國境方面は勿論のこと、上海にはながらくゐられたんだ。嘘なんぞ云はれないよ。』
私が云つて聞かせると、署長は一層胸を張つて、
『お前、上海時代はどこにゐた?』

と、微笑をたゝへてあがつて來ました。

『上海ですか？』

菊江はうつ向いて疊に字を書く恰好をしてゐましたが、

『いろんなところにゐました。』

と云つて、署長の顏をちよつと見あげました。

『×××にゐたんだろ？』

署長は、菊江の千切れたオーヴアに目をつけて云ひました。と、菊江の表情が少し變つて、

『あれ？』と、署長を見る目に多分の意味が泛びました。

『いつ頃の×××をご存知ですか？』

『いつ頃だつていいぢやないか。俺はちやんと知つてるよ。誘導訊問ぢやないよ。』

『どうしよう。』

菊江は、はづかしさうに云ひましたが、その實態度は、それほどでもありません。

『木村君、この女はたいした女だよ。×××といふのは、×××租界で有名な毛唐の出入りする阿片窟だ。博奕はやるし、裸踊りはやるし、大變なところだ。そこにゐる女は各國の女がゐるんだ。ここに一度足を踏み込んだが最後、もう駄目だ。お前もシベリヤ事變であつちに渡つて、おきまりの流儀で流れて行つたんだろ？』

『いやになつちやふなあ。もう駄目だ。』

菊江は、亂暴な口をきゝながら、妙になつかし氣な顏をする。

『あの、下にゐるシベリヤ勇といふのが、お前さんの亭主だつてねえ。』

『さうです？』

『あれはいゝ男か？』

署長は、昔馴染と話してゐるやうな、少しもへだたりのない口のき方であります。

『そりやあんた、同棲になつてるんですもの、少しはいゝところがなくちや。』

『ふうん。何だか顏のながい男だが、好きになつた話でも聞かせろ。俺は署長でも、他所の署長のやうに、不粹ぢやないよ。はははあん。』

最後に、大きな口をあけて、はあんと云ふのが癖でした。それで新聞に大串を大口と書かれて、

『この口がそんなに大きいか。はあん。』

と、鏡に映して見たといふ逸話のある口であります。

『話すわあたし。何だか朗らかになつたから、みんな云つちまふわ。ぢやあ聞いて下さいね。』

菊江は、ずいと署長に寄りかゝつた。

『生地で來やがつた。駄目だよ、そんなの。こいつ少し氣味がわるいね、木村くん。』

署長は立ちあがつて逃げ出した。

『あら、聞いてくれませんの？』

ちよいと云ふやうに、署長の羽織の袖を摑みました。さすがに署長は、

『バカ。』と一喝して、

『その木村の旦那に話せばいゝんだ。木村くん、よく、見てやってくれ。』

　これが署長の殺し文句であります。果して、署長が出てゆくと、

『ちよいと、隨分書生ッぽみたいな署長さんねえ。あの人、×××を知つてるなんて。あたし、斷然氣に入つちやつた。』

『そんなに氣に入つたか？』

『好きになつたわ、誘惑しようか知ら？』

『お前は馬鹿だ。さつき俺にやつたやうにどうしてしなかつた？』

『だつて、あれは苦しまぎれだもの、今はいゝ氣持なのよ。』

『お前みたいな女に出會つたのははじめてだ。まるで警察に遊びに來てるやうぢやないか。』

『だつて阿片さへあれば、あたしどこにゐたつて天國よ。留置場位なんですか。寒い寒いシベリヤで、過激派の連中から、どんな目にあはされたか知らないでせう。』

『それもぼつ／＼聞くよ。どうだ、お腹も空いただらうし、何か食べないか？』

『さうね、何か美味しいものをおごりなさいよ。お金がなかつたらあたしがおごつてもいゝわ。』

『きみにおごつて貰ふ譯にはゆかないが、何にする？』

『さうね、おうどんに玉子があればいゝわ。』

　それを小使に云ひつけて、お腹が膨れると、菊江は、

『署長さんはもう來ない？　あたし、ある女のことを聞いてみたいのよ。それはあたしと、ウラヂボに渡つた女だけど、やつぱり上海の××にゐたのよ。きつと署長さん知つてるわ。』

『×××といふのは、そんなに面白いところか？』

『それは地獄と天國をちやんぽんにしたところよ。』

『そこの話からどうだね？』

『さうね、ぢやあ話すわ。なつかしい話よ――。』

　菊江はぼうッとした目をかゞやかし、まぼろしを追ふやうに遠くへ視線をやりました。

『どうした？』

　私が肩を叩くと、

『だけど上海の話はあとにしてよ。何だかゆきたくなるもの。彼所は世界の縮圖でせう。だから、迚も思ひ出が深いのよ。それだけに、何だか、急に話すのがいやになつたの。』

『心境の變化だな。署長になら話すつもりだろ？』

『止しなさいよ。』

　菊江は、私を睨みます。私は、さう云つては自慢になりますが、この『顎取り』といふ自白のさせ方は、警視廳所屬の約八百の刑事の中では、さう下手ではないと思つてゐます。

　今まで、自白をしないからと云つて、撲つたりしたことは一度もありません。聲をあらゝげて呶鳴つたこともありません。法律にも自供といふ言葉がありますやうに、被疑者自ら供述するのが自供であつて、自白は撲つたりおどかしたりすべきものではありません。

　ところが中には、氣早い連中がありまして、なか／＼どうして怖い目を見せます。こんなのは、刑事が公益的職能にあるといふ本分を忘

れてゐるので、はなはだ困つたことであります。

自白といふものは、座談の如く、何氣なく話させねば、その本態を摑むことは出來ません。少しでも無理があると必ず、公判でひつくり返つてしまひます。つまり明鏡の心境で、相手をわるい奴だなど思はないで、談笑のうちに自供せしめる。これが最上の調べ方であります。

ですから、私は、急に、菊江が上海のことを話すのはいやだと云ふのを、無理に話させようとはしませんでした。

果して効果が現れました。

チエ・スロの悲哀

『ねえ、どうせ正體を洗ふつもりでせうから、最初から話しませうよ。』

『それはいゝな。一つ、ウラヂボに出かけた邊からでもどうだね?』

『さうね、あれはそも〳〵の原因は歐洲大戰が原因よ。菊江を、誰がかうならせたかつて云ふ譯は。』

『歐洲大戰がねえ。あれはなか〳〵大變な戰爭だつたね?』

『何さ、漫才みたいね。』

『扇で一つ叩かれるところか?』

『この人は刑事なんかしておくの惜しいわ。』

『さうかね。それでその、いゝきみにも召集令が來たのかね?』

『馬鹿ねえ。日本が歐洲大戰に參加したでせう。』

『したねえ。僕も歩兵上等兵で青島の攻略に參加した。』

『あれ、ほんと?』

『ほんととも、一九一四年即ち大正三年八月十五日の最後通牒をきつかけに、膠州灣に攻め寄せた。それは世界大戰の餘波が、東洋にも波及したので、東洋の大將大日本が、東洋平和の使命と、日英協同大義のために、膠州灣を封鎖して、青島を攻め落した。』

『すごいわね?』

『すごいとも、宣戰布告は八月二十三日、吾第十八師團には、間髮を入れず動員令――』

『すごいわねえ。第十八師團、九州ねえ。』

『云つちやすまないが久留米だよ。師團長は神尾將軍、この閣下が、少くも、三年はかゝるだらうと世界にうたはれた、モルトケだのイルチスだのといふ、獨軍自慢の難攻不落の青島を、三月もかゝらず攻め落した。』

『さすがによく覺えてんのねえ。ぢやあ、あんたは久留米に召集されたの?』

『勿論九州男兒だ。しかも豫備のちやき〳〵ハリキリ古兵のも一つ上の、強い盛りの豫備さんで、おまけに伍長勤務の分隊長、青島の要塞に、一番乘の日の丸を、ぐッと押し立てた勇士だぜ。』

『すばらしいわねえ。勇しかつたでせうね。あたし戰爭の話、大好きよ。』

『よしてくれ。話はきみから聞くんだよ。それで歐洲大戰がどうしたんだ?』

『だから云つてるぢやないの、戰爭が好きで飛出したと。』

『どこからどう飛出したのか判らんねえ。』

『瀧野川の家にきまつてゐわ。』
『お父さんは何とか云つたねえ？』
『皆川恭成といつて、××女學校の教諭でした。』
『お母さんの名は？』
『加代と云つて、どつちも死にましたけど、兩親とも戰爭大の好きだつたわ。それでお父さんは、こいつが男の子なら、士官學校に入れてやつたのにと云ふでせう。女の子だつたことを迚もいやさうに云ふでせう。それでわたし、赤十字の看護婦を志願して戰地にゆきたいと思つて、そのことを相談したでせう。すると、目玉の飛出るほど叱られたわ。』
『それはさうだろ。だつてお前さんは一人娘だろ？』
『さうよ。だつて勇しい戰場で、彈丸の中をかいくゞり、かいくゞり、負傷の兵士を後送するなんて、思つただけでも、胸がすうッとするわ。』
『そんなことが出來るかね？　青島の攻略戰にはなかつたよ。』
『ところがわたし、いゝ娘心でさう思つたのよ。だから隨分叱られたわ。女は銃後を守るのが本分だ。この男まさりの馬鹿ものつて。』
『それは、僕だつて怒るねえ。それを無理に行つたのか？』
『どういたしまして。ゆきたい／＼と思つてゐるうちに、青島の戰爭は濟んでしまつたわ。あんまりあつけなく勝んだもの。』
『へえ、それでどうしてウラヂボに行つたんだ。』
『そこなのよ。問題は。』
『いやにもつたいをつけやがる。』
『だつてさうなのよ。日本は、目叩きの間に青島をものにしたでせう。それなのに西部戰線はどうでせう。いえ東部だつて同じだわ。』
『すごいね？』
『だつてさうぢやないの。いくら強いと云つても、敵は孤立の獨軍よ。それを、フランス、イギリス、ロシヤにイタリーといふやうに、世界の强國が、寄つてたかつてどうにもならないんぢやないの。』
『それはさうだつた。』
『さうでせう。どうして獨逸はあんなに強かつたんでせう。』
『さあ、こつちはさうまでも思はなかつたから、ほかの國が弱いんだろ。だけど獨逸製の金庫だけはしつかりしてるな。叔父のうちがこなひだ有名な金庫破りの押入り被害にかゝつたが、獨逸製の金庫だけはどうにも破れず、指紋をのこして俺の手にかゝつた。』
『ほんとに金庫のやうに強かつたわ。四方八方から砲火をそそがれても、國境から內には一歩も入れないんだもの。』
『結局、ほかの國が駄目なんだねえ。』
『實際駄目だわ。フランスふら／＼イギリスひよろ／＼、ロシヤは土當蹄だし。ほんとよ。お蔭で、戰爭のはじまつた時十九だつた私が、二十二になつても、三になつてもまだけりがつかないでせう。』
『五年ぐらゐかゝつたなあ。』
『あたしいやんなつちまつて、日本からも出かけたらいゝのにと思つてゐたのよ。すると、それ、シベリヤ出兵になつたでせう。』
『當時浦鹽派遣軍がまつ先に出かけたねえ。そしてユフタの戰ひなんていふ物凄いのがあつて、七十二聯隊の田中大隊の全滅なんていふ壯烈なことになつたねえ。』

『さう。あの時よ。あのシベリヤ出兵のそも〳〵の原因は、スラブ民族が、大戰をいゝ幸に、獨立を企てゝ、オーストリア政府に反抗したことからでせう。』

『さうだ〳〵。獨逸と仲よくしてゐるオーストリアの國民にされてゐてたまるもんか。吾々は吾々の同血の民族ばかりで一國を打立てねばならない。それをするためには、獨逸とオーストリアを亡さねばならないと云つて、スラブ民族出身のチエ・スロ軍十萬の大兵が、武器をもつたまゝ、東部戰線の露軍に、わざと捕虜になつた。』

『さうよ。そして東部戰線に來て見れば、露國は旣に內亂がおこつて、過激派のために政府軍がつぶされかけてゐたんだわねえ。』

『なか〳〵面白くなつた。そのとほりだ。ロシヤは、內亂でチエ・スロをたすけることもどうすることも出來ない。出來ることなら他國との戰爭はしたくない。そして國內の動亂をしづめたいと思つて、內憂外患で、折角やつて來たチエ・スロの大軍は見殺しにされかかつた。』

『そこでチエ・スロの大軍は、ロシア賴むに足らずと云つてロシア大陸を橫斷して、シベリヤから浦鹽に出て、浦鹽から海を廻つて、西部戰線に參加することになつたんでせう。』

『さうだよ。考へても見給へ。西部戰線はすぐ西の方だのに、地球を一ぺんめぐるやうなことをして、西の聯合軍に加はらうといふんだから、いやはや、ど偉い騷ぎになつたんだ。』

『どうして、あんな馬鹿なことをしたんでせう？』

『だつてきみ、東部戰線に來て見ればロシアは反政府軍の過激派が、ドイツにすでに味方をしてゐるし、これはしまつた引返へさうと、軍が廻れ右をした時は、どつこいその手は喰はさぬ、チエ・スロさんと、

大快報

キング秋の增刊

小說・講談・落語・美談・演藝・漫畫

面白づくめ號

十月十八日頃發賣

文筆報國の作家畫家、雜誌報國の本社が一丸となつて完成した大熱誠のこの增刊

面白い！　面白くて〳〵堪らぬ傑作揃ひ！

戰地でも內地でも大喜び大歡迎

詳細は本誌三四六頁にあり

ゼヒ御覽下さい

キングの增刊

大奉仕特價　六十錢

獨軍と過激派が、後に大手をひろげて通さんぢやないか。だから、そんなら『日本にたよつて見せる。』と、ヴオルガの大河を渡つて、サマラから一氣にシベリヤを横斷して、浦鹽に出て來ることになつたのさ。』

『くはしいわねえ。』

『扇をもつて來るかな。』

『あたしがあんたの頭を叩くの？』

『こつちが叩くんだ。』

『いやだわ。だけどほんとに可哀想だつたわ。あたしあの新聞記事を讀んだ時、過激派の奴が憎らしくて憎らしくて。』

『あの時の情勢では、實際可哀想でならなかつたねえ。元來が、弱きをたすけ、强きをくじくが日本の武士道だ。いや、あの時は、あれが正義の雄たるものであつたんだ。海路はるばる西部戰線に、燃ゆる心の一途から、想像も及ばぬ大迂回、それが、いよいよ四月上旬から東に向つて輸送を開始した。とは云へ十萬と云へば、どうして、なまやさしいことでない。』

『あたし泣いたわ。氣の毒で氣の毒で、だつて、あんまりの長い旅ですもの、西部戰線についたところでいゝいくさは出來ないだろと思つて。』

『それはよく泣いた。日本帝國でさへ泣いたぢやないか。泣いた證據に、これを救ふための出兵となつて、小倉第十二師團をはじめとして、第三師團、第七師團の大部隊に、大動員令が下つたぢやないか。』

『さう、あの時は嬉しかつたわ。』

『今度は嬉し泣きか。』

『さうよ。あたし、あの號外が出た時に、どうしても戰地にゆくと決心したのよ。』

『つひにか。』

『えゝ、斷然ゆく氣になつたのよ。どうせ親がゆるしツこはないから、逃げてゆく決心をしたのよ。』

『飛んでもないお轉婆だなあ。それでどうした？』

『さつそく青山の赤十字にかけつけて、從軍看護婦を志願したのよ。ところが、願書を出せつていふでせう。あたし、もう飛びあがるほど嬉しかつたわ。』

『たつた一人でか？』

『忘れてゐたわ、女學校時代のお友達に徳川須和子といふ人がゐたのよ。牛込にゐて、私とお茶やお花を一緒に習つてゐたの。この人に相談すると、この人がまた飛あがつて賛成したぢやありませんか。ところが大變なことがおきたの。』

『どんな？』

『私たちのことが、勇敢愛國の女性從軍志願だなんて新聞に出たでせう。親たちは知らないからびつくりしたわ。それで願書も出すことが出來ずにお流れになつたでせう。』

『そのまゝならよかつたのに――』

『今になればさう思ふわ。だけど、男のやうに血潮の高鳴る頃ですもの、何とか向ふに渡る方法はあるまいかと、いろ〳〵研究して見たわ。すると九月の中旬でした。須和子さんが、急用があるからすぐ來いと使ひをくれたので、いそいで行つて見ると、牛込喜久井町のお屋敷の隣接に、藤田進といふ人が待つてゐました。この人は、元、須和子さんの家の書生をしてゐた人ですが、その時は浦鹽の支店につとめてゐま

した。この人を須和子さんが紹介して、この人が浦鹽まで連れて行つてくれるといふがゆかないかと云ふぢやありませんか。』
『へえ、運がよかつたねえ。』
『よかつたかわるかつたか、それは判らないけど、とも角藤田の云ふには、明日、敦賀からウラヂボゆきの船が出る。この船は機密の船だが、男装をすれば乗せてやると云ふぢやありませんか。』
『へえ、それで男装をしたのかね？』
『すぐだつていふんでせう。それに私はお金だつて持つてないでせう。すると、金なら出してあげる。カーキ色の軍服地で出來た背廣を買つて來なさい、といふでせう。それからズボンは乗馬ズボン、黒の長靴もといふではありませんが。私がまご〳〵してゐると、ぢやあ一緒に

ぜんそく
百日ぜき・たん咳に
苦しいセキ止めに
激發作の豫防に鎭靜に
本藥の確かな効き目は、愛用者間に定評があります。
永年の慢性痼疾にお悩みの方、夏の發作に苦しまれる方は一度ゼヒお試しを願ひます。エキスの効き目に失望や後悔のない事、流石に二十年來の歴史と信用を持つ評判藥だとお喜びになります。
定價 五〇錢 一圓三十錢 二圓五十錢 四圓八十錢 七圓
信用ある藥店にあり
喘息エキス
本舗 東京小石川 大日本雄辯會講談社商事部

買ひにゆかう。いや私が買つて來てあげよう。それにしてもこゝでは都合がわるい。九段の飯田屋に行つて待つてなさいと云はれて、私たち二人は、飯田屋旅館で待つてゐました。』
『飯田屋は藤田の知り合ひかね？』
『え、上京した時、ちよい〳〵泊つてゐた定宿ですの。待つ間もなく藤田は、二人分の服装を揃へて歸りました。少し大きいかも判らない。男用だからと申します。着てみると、割に寸法も合つてゐるし、少し袖がながいやうでしたが、辛棒して着ますと、すぐ發つんだ。早くしないと間に合はない。せき立てられて、何が何だか、殆ど夢中で敦賀についたのは、次の日の夕方でした。』
『その藤田つていふ男は何者だね？』
『藤田？――あとで判つたけど、須和子さんに惚れてたのよ。だけど身分がちがふといふので親たちから相手にされないので、誘惑に戻つて來たんですの。勿論、事が露見しても、内地には戻らぬ決心で來たのですから度胸が据つてゐるぢやありませんか。』
『それできみは、そのお相手に選ばれた譯か。』
『まあ、さうね。』
『その船といふのは、どんな船だ？』
『×××よ。乗り込んで見たら、船長以下船員が三十人位しかゐなくて、あとは全部貨物で、私たちは船底の方の、四疊くらゐの部屋に入れられて、ぢいつとしてゐました。それでも、カーキ色の服の上には、トルコ帽で黒マント、赤革の手袋などはめて、化粧道具一つもないといふ状態でした。』

『船長たちは氣づかないのか？』
『知らない顏をしてゐましたよ。』
『ウラヂボにつくまで、船底にゐたのか？』
『どういたしまして。』
『どうかしたのか？』
『午前二時頃でしたよ。おい〳〵と藤田が、私の耳もとで呼ぶでせう。一寸甲板にゆかうといふぢやないですか。』
『船は日本海の眞只中だな。』
『夜空に星が降つてゐましたよ。淋しいもんねえ。後尾のデッキにのぼると、藤田は私を左に抱いて、あのスクリユーの音が聞えるかい？と、いやにしんみり云ふぢやないの。』
『いいね。』
『あんまりよくなかつたわ。見ろ、あの北にあたつて、ぴか〳〵光る星の色を――』
『藤田が云ふんだな？』
『さうなの。あの言葉だけは忘れないわ。何て云つたらいゝか、かう、こんところがきゆッと膨れた段鼻の男で――』
菊江は、自分の鼻のまん中をおさへて申します。
『そして顏の四角張つた、熊のやうな顏をぢいつと沈めて、右手で空をゆびさすぢやありませんか。』
『おゝ、星よ――』
『茶化すの止しなさいよ。』
『だつてきみ北へ北へと進みゆく船の上だろ。おゝ、オホロラ―』
『ほんとにさう云つたわ。見よ、あの極光――と。何だかセンチになつたわ。あの星の下には、世界各國の軍隊が集つてゐるんだよ。中でも、アメリカの軍人がいちばんハイカラだ。着いたらゆつくり見るがいゝ。世界の軍隊が、それから、各國の新聞記者が――そんなことを云ひながら、私をぐッと抱きしめるぢやないの？』
『きみにも惚れてゐるんだな？』
『浮氣なのよ。だから私、癪にさはつたわ。でも機嫌を損じたら、どんなことになるかも判らないからだまつてゐたわ。』
『さうか。それで？』
『まだ云はなかつたが、僕の云ふことには絶對に服從して貰ふよ。かうして普通の女に出來ないことをして來た女なんだ。それくらゐな覺悟はあるだろ？　といふぢやないの。私、何でもお肯きしますわ。だけど、須和子さんにわるいやうなことを云つちやいやよと云つたの。』
『云はなかつたかい？』
『どうして、そんななまやさしい男ぢやなかつたわ。』
さう云つて、菊江はいろ〳〵と陳述しましたが、これはお話しする譯にゆきません。
そこで、自白の內容も自然はし折つてお話しすることになりますが、とも角、船が浦鹽についてから先のことを申しあげませう。
私は、
『それで午後の二時頃港についたんだなあ？』
と追つかけて聞きました。
『丁度二時だつたと覺えてゐますよ。錨を投げて間もなく荷おろしにかゝりましたが、藤田は、どうしても私や須和子さんを下船させてくれません。まだ不可ない。日が暮れてからでないといけないと云つて、

船室に押し込んだまゝ出しません。

窓からは、遠くへ、各國の軍艦が、聯合軍の軍艦が、海を壓して居るのが見えました。

そのうち夜になつて、十時を少し過ぎたと思ふ頃、それまでどこかへ行つてゐた藤田がやつて來て、「さあ上陸だ。」と申します。そして繩梯子をおろしてくれました。見るとあたりには船長も水夫も、火夫もゐなくて、船の下にはボートが來てゐました。

ボートには、水夫でない、一人の露西亜人と、怪し氣な支那人とが乘つてるではありませんか。それでも、私たちは、さほどの不安は感じませんでしたよ。』

『藤田を信じてゐたんだな？』

『それよりも、港に日本の軍艦がゐたからですよ。』

『なるほど――』

私はうなづきました。

（つゞく）

本篇こそ實話文學の壓巻である！ 果せる哉各方面よりの讃辭が机上に山積の有樣で、正に端倪すべからざる事實の興味である。

加藤武雄先生曰く、

『三角氏の實話文學を見るに及んで、常に事實のもつ深刻さと複雜さと多彩と怪奇とに驚き、自分の小說家としての創造力の貧しさを恥ぢる。事實は小說よりも遙かに面白いとは、三角氏の實話文學を指すであらう……云々。』と。

さて次號はいよ／＼最高潮！ 菊江が滿ソ國境に出沒して、天晴女頭目としての活場面が、壯絶な大繪巻となつて展開される。刮目して御期待あれ！

問題の書 山窩血笑記……三角寛

奇怪なる山窩の生活、就中彼らの戀は凄艶そのものだ。この八つの實話は、讀者を奇怪なる仙境に連れてゆく、山窩研究の權威三角氏著

◎瞽女姫お美代 ◎山窩の戀
◎雲の上の裸女 ◎色師の筆
◎腕斬りお小夜 ◎木曾の山猿
◎綠蔭の漂浪者 ◎直實と妙蓮

一圓五十錢

送料内地十四錢・朝鮮・滿洲・臺灣・樺太・支那・南洋・十八錢

大日本雄辯會講談社

〇拜啓、貴社愈々御盛大の段謹賀の至りに存じ候。扨貴誌富士增刊拜見、傑作揃ひにて感心仕り候就中時局柄木村毅氏『大山元帥傳』は殊更多大の感銘を以て讀過仕候。是は平月號の『兒玉將軍傳』と共に今日の日本を玆迄に築き上げた先人の苦心を知らしむる點に於て國民必讀の好文字と存ぜられ候。願くは兩篇共合し一册の單行本御出版の程鶴首して御待ち申居候。匆々。（松江市　齋藤榮藏）

▲御褒めに與りまして恐縮です。今後共必ず御期待に添ひ得る名作を續々頂くつもりでをります。

〇北支の夕燒　（林口　河内秀郷）

一、昨日は天幕　今日野天
背嚢枕に　空仰げや
どこへ行くのか　嗚呼旅鴉
赤い夕日が　枯野に沈む

二、蒙古嵐が　ほえ出す度に
旅の鴉の　身の上想ふ
夕映雲が　眞赤に染まりや
明日の天氣は　又晴れよ

三、枯野が原に　鴉が歸る
北支の空は　夕燒小燒
村の子供が　日暮に唄ふ
故鄕のあの頃　想ひ出す。

〇南の窓の下から見渡す限り誘蛾燈が展がつて美しさを競つてゐる靜かな田園の夜が來ました。病に伏して單調な明け暮れの今日此の頃、私の心の侘しさをなぐさめてくれるものはラヂオと雜誌です。各雜誌色とり〳〵の特徵のある中に小說ならば富士とつく〴〵感じさせられます。新連載の『熱情の翼』を初め『曠野の火』『戀愛算術』『國境の女』など。讀書に生甲斐を感じてゐる私です。編輯局の皆樣一層の御奮鬪を。（京都府　近江駿）

▲富士が御慰めのお役に立つ事を喜んでをります。一日もお速く御全快の程を。

〇拜啓、御社日增に御隆盛の段何よりと御歡び申上げます。さて此の度は犯人探し懸賞に應募いたしました所、幸運にも一等に當選の御通知を頂き今日か明日かと待ちかねた『キング箱型蓄音器及びレコード』今日夕方たしかに受取りました。想像にも增した立派な御品に、最新發賣のレコードに針まで添へて下さいました御厚志たゞたゞ感謝の他御座いません。早速近所の方やお友達も呼んでレコードをかけました。餘り立派なので皆樣から羨まれて居ります。この立派な贈物は私達一家のマスコットとして大切に永久保存しておきます。この御厚志の萬分の一にもお報いいたします爲富士愛讀者の一人でも多くふえますやう勸誘に努力いたしてをります。御社皆々樣愛誌富士のため益々御健勝にておつくし下さいますやうお祈りいたしてをります。先づは御禮まで。（丸龜市　早馬ヒサ）

▲今回の御幸運を御緣に今後是非共知人の方々に富士御愛讀をおすすめ下さいませ。

〇前略、突然に郵便局から配達されました貴社からの賞品、間違ひなく僕の宛名だ。早速開いてみると素晴しい置時計だつた。一家は勿論近隣の友達がわい〳〵と騷ぎ出してお祝してくれた。今後は以前よりも念を入れて富士の愛讀者にならう。簡單ながら編輯の皆樣

に謝意を表します。（臺灣　陳德華）

▲御友達にも是非共富士の御愛讀をおすゝめ下さい。

○謹んで御禮申上げます。貴社日に増し御隆盛の御事御慶び申上げます。就きましては『富士』増刊號にて聯珠の懸賞募集をなさいました際、早速應募いたしましたところ幸ひ私に當選の榮を得させ下され、其の賞として美事なる碁盤を御贈り下さいまして誠に有り難う御座いました。去る二十六日夕刻通運より大きな箱御送りとゞけ下さいましたので胸ををどらせながら箱を開けて、餘りに美しい賞品に家中皆大よろこび。殊に子供達は御社の御情で樂しく五目ならべが出來るなど、それは〳〵大へんな喜びやうで御座いました。この美事な賞品を永く記念として大切にいたしまして御社の御厚志に報いたいと存じてゐます。誠にありがたう御座いました。厚くあつく御禮を申上げます。時節柄皆々樣には益々御健かに御勤め遊ばされ、貴社の益々御隆盛の程御祈り申上げます。（新潟縣　岩島操子）

▲御家族樣方に御滿足頂けまして編輯局一同も大滿悅。今後共永く御愛讀賜はりますやう御願ひ申上げます。

○秋涼の折柄編輯局御一同樣には愈々御健勝に渡らせられ大慶至極に存じます。扨小生事長い間富士を愛讀させて頂いて居ります農村の一青年で御座いますが、只今北支で活躍して居ります從兄の所へ富士を送りました處非常に喜びまして次の樣な禮狀が參りました。先生方にお傳へし併せて厚く御禮申上げます。――先日富士を澤山に濟みませんでした。何が嬉しいたつて戰場で內地の讀物が見られる位嬉しい事はない。月遲れ位になつた雜誌などまだ〳〵新しい方で、凡そ日本語で綴つたものなら片端から廣告まで讀んでしまふんですからね。一度讀んだら次から次へ戰友の手を經て、しまひには裏からも表からも破れて眞中だけ少し殘つたやうになつてもまだ讀むところのある中は大切に持つてゐます。如何に第一線のものが內地の讀物を熱望してゐるか、又富士を手にして子供のやうに喜び躍つてゐる小生の姿を御想像下さい（群馬縣　楠生）

▲富士が澤山戰線へ參りますので此のやうな御通信を每々頂きます又直接戰地からの御禮狀も參ります。何卒慰問品としてドシ〳〵御利用下さい。

○拜啓、御社益々御繁榮何よりの御事と存じ上げます。扨て、私達本日恤兵部より富士を頂きました節、私達部隊が口繪最後の頁に、『ある日の前線』として『それ慰問袋だ。バンザーイ』と說明入りで載つてゐますが、あの寫眞は眞如で撮つて頂いた寫眞です。誠に申し兼ねますが、もし御社に原板がありましたら一枚燒きつけて送つて頂けないでせうか。御伺ひ申します。私達昨年吳淞敵前上陸以來上海戰線に參加、十月大場鎭陷落、十二月十三日南京陷落、次で十二月十七日には南京入城式に參加、目下〇〇で惡水と砂埃に苦しんでゐます。一死奉公大にやります。先づはお願ひ旁々近況御報告まで。（藤田部隊・吉田稔雄）

▲御仰越の御寫眞早速御送り申上げました。前線の御苦心只々感謝の他ありません。御武運の長久をお祈り申します。

◉忠孝も義理も人情も『富士』で知り。

◉雜誌なら、一富士二富士、三も富士。

◉發賣日イの一番に富士を買ひ。

●投稿大歡迎！

●掲載の分には薄謝を呈す

9-1298

御禮とお願

—秋の增刊大賣行—

—冨士は時局下必讀の國民雜誌—

お蔭さまで『冨士秋の增刊』は、果然大歡迎、嵐のやうな大評判、例に依て飛ぶやうな大賣行で、もはや全國書店とも賣切れもしくは殘部僅少で、未だに追加注文殺到の大盛況です。これ偏に御愛讀皆々樣の絕大なる御支援の結果と厚く御禮申し上げます。

未曾有の國難非常時局下、戰線銃後の精神の糧として、慰安一家の和樂、元氣の源泉として、如何に『冨士』が歡迎せらるかを思ひ、なほ一層の御期待に副ひたく、折角大努力を傾到いたしてをります。

明朗にして愉快、痛快で肩のこらぬ面白いうちにも爲になる讀物、上品で明朗で、いつ何處で誰の前でも安心して讀める、名前からして日本一の『冨士』だ、流石に講談社御自慢の雜誌だ。

忠孝も義理も人情も冨士で知り
戰線も銃後も冨士で活氣づき

等々、今や時局下になくてはならぬ國民雜誌、面白くて爲になる萬人向の大衆雜誌、慰問に送るなら冨士に限ると、天下の絕讚を戴いてをります。時局愈々深刻にして愈々冨士の評判は高まるばかりです。此上とも御吹聽御愛讀賜り度く併せてお願申し上げます。

冨士編輯局

御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社へ御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番安全で、且送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあります。その使ひ方も局でよく教へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割增に願ひます。

○代金引替と集金郵便は一切扱ひません。

○御注文書には必ず書籍名なり雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハッキリお書き下さい。

○御住所と御名前とはぜひ、楷書で願ひます。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告掲載御希望の方は大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されば、詳細御報知御相談に應じます。

本號 特價七十錢
内地送料 四錢
外國送料 四十錢

豫約購讀料金（送料共）

普通號一册	金六拾四錢
三ヶ月分	金壹圓八拾九錢
六ヶ月分	金參圓六拾錢
一ヶ年分	金七圓八錢
外國一ヶ年分	金拾貳圓

◎尙臨時增刊發行の場合は此の定價表以外に更に代金を頂きます。
◎特大號で定價を上げた場合は國內及滿洲支部に限りその增した分はこの料金の外に頂きます。

昭和十三年十月三日印刷納本（冨士第十一卷）
昭和十三年十一月一日發行（第十四號）

毎月一回一日發行

編輯人 林　公平
發行人 木村喜市
印刷人 渡邊一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地

印刷所 中外印刷株式會社

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地
發行所 大日本雄辯會講談社
振替口座 東京三九三〇番（本社）
東京六六二九番（代理部）
電話牛込(34) 代表（五三〇〇(5)・六二〇〇(5)・六三〇〇(5)） 長距離六三〇〇五 宿直用六三〇〇五

元取次店—東京堂・東海堂・北隆館・大東館

禁複製
本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し、又は單行本に上梓し、或は脚色・上演・映畫撮影その他複製行爲を爲す事を禁ず。

身體か迚も丈夫になり
根氣が強くなると喜ばれます

池袋驛西口 三幸藥局主 片桐廣

無理さへしなければ日常の仕事も出來るが、夜分寢付が惡かつたり、安眠出來ない事があつたりして、頭がボンヤリし、活動力が減退して、いくら頑張らうとしても、身體が疲れて困るが何か良いものはないかと云つて訪れる御客樣が澤山あります。私は今迄の經驗から斯う云ふ方々へはいつも養命酒を召上るやうにお奬めして居りますが誰人も養命酒を飲むと、身體が丈夫になつて、根氣と體力が迚も強くなり、仕事が愉快になると喜ばれて居ります。

もと／＼養命酒は滋養强壯劑として根氣が弱くて疲れ易い人とか、神經衰弱のやうで眠れぬとか、胃腸が弱いとか、貧血冷え込みの人とか、肺や肋膜が弱いとか、產前產後の婦人等凡て病弱虛弱の方々へ御奬めして、迚も丈夫になつて肥ると喜ばれて居りますが、近頃では健康な方でも養命酒を飲んで居ると人並以上働いても疲れぬと盛んに愛飲するやうになりました。

養命酒の評判が益〻高くなり、良く賣れるのは、品質が良いのと、定價が德用瓶四圓、大瓶三圓、携帶用一圓五十錢になつて居て、滋養强壯劑としては大變割安である爲、斯うした根强い愛飲家が各方面にあり、更に立派な體驗談が澤山ある爲、私共も安心してお客樣にお奬め出來る爲だと思ひます。

HUZI
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansya, Tokyo, Nippon.

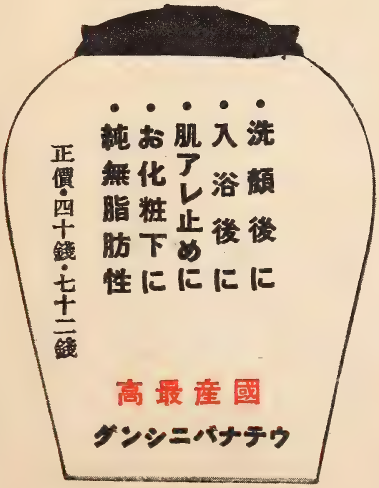
ウテナポマード

頭髪に強力な榮養を與へる

理想的な整髪効果

ウテナポマードは平凡な整髪料と異り滲透力の強い養毛素を配合してありますから毛根に充分な榮養を與へて若禿・脱毛・薄毛を解消しどんな剛毛も柔軟に整着してフケや痒みを一掃し漆黒の頭髪を培ひます。又容易に洗髪できて芳香高雅、光澤は自然でキザに光らず整髪効果滿點です……

正價・五十錢・七十錢



ウテナ化粧料本舗・株式會社 久保政吉商店

大正五年九月十五日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行） 昭和十三年十月三日印刷納本 昭和十三年十一月一日發行 富士 第十一巻 第十四號

定價金七拾錢（送料四錢）

MADE IN NIPPON (JAPAN)

Date Due 9-12 98

9-1298
SEP 26
OCT - 2
OCT - 7
OCT 10
OCT 16
OCT 21
OCT 30
NOV - 6
NOV - 9
NOV 16